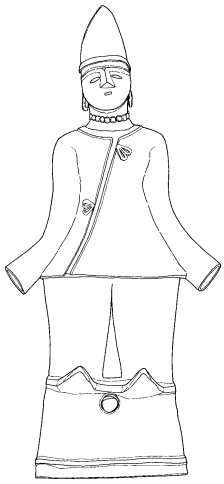
財団法人市原市文化財センター調査報告書第85集

上総国分寺台遺跡調査報告XI

市原市山倉古墳群



2004

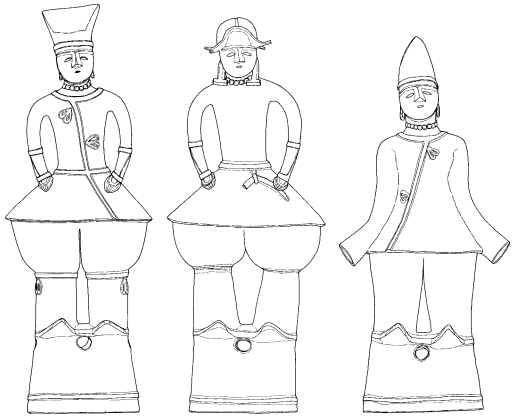
市　原　市　教　育　委　員　会

財団法人　市原市文化財センター

財団法人市原市文化財センター調査報告書第85集

上総国分寺台遺跡調査報告XI

市原市山倉古墳群



2004

市　原　市　教　育　委　員　会

財団法人　市原市文化財センター



山倉１号墳出土人物埴輪



人物埴輪半身像と器財埴輪



人物埴輪全身像



山倉古墳群遠景（南から）



1 号墳検出状況



1・2・3号墳全形



6号墳と周辺



1 号墳石室石材



1 号墳中段南側埴輪樹立状況



円筒埴輪の破断面（B11）



凸帯の色調（H61・B17）

序　文

市原市役所の所在する国分寺台地区は、古人が日々暮らした土地であり、ダイナミックな古代政治史の舞台でありました。今日の見慣れた市街地には、その残照たる遺跡が眠っておりました。

今から三十三年前、当地域の土地区画整理が進められることとなり、上総国分寺・国分尼寺をはじめとする諸遺跡を対象に発掘調査が行われました。

今回、報告いたします山倉古墳群は、そのような一連の事業において発掘調査された遺跡の一つです。関係者の努力が実り、ここに調査報告書が刊行される運びとなりましたことはまことに喜ばしい限りです。

山倉１号墳からは、数多くの人物埴輪・円筒埴輪が列をなして出土するなど、古墳時代における貴重な資料が多々発見されています。これらの埴輪につきましては、埴輪工人にも役割分担や個性があるなど、興味深いところもありました。

これらの資料が、古墳文化研究の一助となることを願うとともに、研究者のみならず広く社会教育にも活用され、なお一層の文化財保護思想の啓発に役立てられることを期待しております。

本書の刊行に至るまでには、多くの方々と関係機関からご指導、ご助力いただきました。とりわけ、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理事業組合、旧上総国分寺台遺跡調査団、財団法人市原市文化財センターをはじめとする関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成16年３月22日

市原市教育委員会

教育長　山中　齊

例　言

1　本書は千葉県市原市大坪（現西広６丁目）に所在した山倉古墳群（１号墳～６号墳）の発掘調査報告書である。

2　報告書作成に至る整理作業および刊行は、市原市教育委員会の委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。

3　発掘調査および整理作業は以下の通り実施した。

発掘調査：上総国分寺台遺跡調査団が実施した。

昭和49年７月～昭和50年３月　担当者　須田勉・西田道世・米田耕之助

整理作業：一部終了していた復元・図化作業の成果を元に、財団法人市原市文化財センターが実施した。

平成13年度　平成13年９月～10月　担当者　小出紳夫（故人）

平成14年度　平成14年４月～９月　担当者　櫻井敦史

平成14年10月～平成15年３月　担当者　櫻井敦史・小橋健司

平成15年度　平成15年４月～平成15年10月　担当者　小橋健司

4　本書の執筆は主に櫻井・小橋が当たり、編集は小橋が担当した。発掘調査の経過や現場所見、墳丘構造については、発掘調査担当者である西田・米田両氏の残した記述に負っているが、再検討により書き改めた部分もある。無署名箇所の文責はすべて編者にあることを明記しておく。

5　本書には、以前に作成されていた車崎正彦氏による埴輪の実測図や田中新史氏による土器・鉄器の実測図、鷹野光行氏による縄紋土器の図・観察文、その他、作成者不明の図を、一部、表現を改めて掲載させていただいている。また、巻頭図版１・２および図版49の埴輪集合写真は国立歴史民俗博物館が撮影したものである。

なお、１号土壙墓出土人骨について平田和明氏（聖マリアンナ医科大学）から鑑定結果の報告を、また、１号墳出土埴輪に関して、山崎武氏（鴻巣市教育委員会）と車崎正彦氏（早稲田大学）から様々な御指導と論考を賜った。厚くお礼申し上げます。

6　出土遺物・記録に付されたコードは「国分寺台の遺跡分布調査概要」（田中・宮本1974）による。１号墳が「203」、以下、２～６号墳が「204」・「205」・「221」・「222」・「206」である。

7　出土遺物・記録類は市原市埋蔵文化財調査センター（〒290-0011千葉県市原市能満1489）に保管されている。なお、現在、人物埴輪の大部分は国立歴史民俗博物館（〒285-8502千葉県佐倉市城内町117）で常設展示されている。

8　発掘調査および整理作業に参加した補助員は以下の通りである（五十音順）。

発掘調査

西広　石川美和・石川弘子・大塚静子・大塚せつ・近藤靖江・斉藤せき・関村まさ・永沢きく・半沢りよ・半沢さと・半沢政子・半沢てつ・半沢敏子・本沢芳子・本沢幾久・本沢ふみ・本沢とく・本沢知江・本沢すみ

惣社　勝地まつ・柴田かよ・常磐志づ・宮原よね・宮原八重・宮原よし・宮原　豊・宮原つよ・宮原きみ・宮原はる江・山本ルリ子

根田　大野はる・斉藤治枝・高橋房子・高橋利枝・高橋みよ・高橋文子・中村　本・中島千代・中島金次郎・荻野あい子・荻野千枝子

郡本　安藤きくゐ・岩上　充・小倉とく・岡本とき・岡本嘉子・岡本ちよ・岡本すぎ・岡本さだ子・立石ふみ子・増田昭子・宮尻和子・山越きみ

大坪　荒井もと江・板巻政子・白井近江・白井みち子・館野さえ子・鶴岡むつ・福岡寅雄・矢代和子

藤井　泉水やえ・泉水ゑつ

福増　栗林ミネ・島野きくゑ・花見久子・林さだ子・元吉　利

加茂　斉藤かつ・斉藤はつ

川瀬　岡田たき・黒須敏子・黒須しずえ・並木繁子・並木はつ・並木孝子

村上　伊藤二三枝・伊藤つる・小田川とよ・君塚りよ・君塚いく・黒須すみ・黒須のぼる・地引　里・地引あい子・地引昭子・地引はつ・並木みよ・長谷川きよ

平田　浜田敏江

整理作業

国吉由意子・多久和真津子・福田八生・松永寿子・松本松代（整理作業）

小倉るみ子・鈴木麻美・林久美子・半澤敏子（トレース）

発掘調査および整理作業に際して様々な方々、機関から御助言・御助力をいただいた。ご芳名を記して感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）

市毛　勲　犬木　努　勝田　徹　加藤一郎　齋藤欣延　清水　豊　杉山晋作　鈴木直人　鈴木芳朗
多宇邦雄　高田大輔　鷹野光行　田中　信　友松かなめ　中島洋一　西田道世　橋本勝雄　原田富子
日高　慎　平野寛之　福嶋初男　堀越正行　森本岩太郎　山路直充　吉田　正　四柳　隆　領塚正浩
早稲田実業学校生徒諸氏
かみつけの里博物館はにわ工房　川越市教育委員会　川越市立博物館　北区飛鳥山博物館
行田市郷土博物館　鴻巣市教育委員会　国立歴史民俗博物館　市立市川考古博物館

凡　例

1　遺物実測図の縮尺は、大型形象埴輪１/６、形象埴輪片と円筒埴輪１/４、土器類１/３、鉄製品１/２を基本とする。破片の拓影は１/３である。いずれも例外は図中に注記している。

2　遺物写真における縮尺は大体、人物埴輪全身像１/５、人物埴輪半身像１/７、朝顔形埴輪１/６、円筒埴輪１/４である。巻頭図版・集合写真・破片資料の縮尺は任意で一定しない。

3　平面図は磁北を基準に方位を示している。磁北は座標北に対して西へ６°30′である。

4　土器等の遺物、円筒埴輪、形象埴輪はそれぞれ別に通し番号をふっている。

5　遺物観察表などの数値は、推定復元の場合「？」を付け、欠損のある現存部位を表す場合「(○○)」のように括弧でくくって示した。

6　埴輪を除く遺物観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版　標準土色帖』によって記載した。

7　埴輪の遺物観察表における胎土と色調は、生出塚(おいねづか)遺跡の発掘調査報告書における表現を適用して記載した。胎土における「パ」・「酸」・「チ」・「角」は、それぞれ、パミス・酸化物・チャート・角閃石の粒を表し、「礫」はそれ以外の目立つ円礫などを指す。

　また、生出塚産埴輪の色調の分類は以下の通りである（鍵括弧内は提供を受けた色名サンプルの色調名である。括弧内は『新版　標準土色帖』による。）。

「①暗赤褐色」（10R４/４赤褐）・「②赤褐色」（10R４/６赤）・「③橙褐色」（2.5YR６/８橙）・「④淡褐色」（7.5YR６/６～７/６橙）・「⑤乳白色」（7.5YR８/４浅黄橙）・「⑥灰褐色」（2.5Y 灰褐色）・「⑦黒褐色」（10YR３/１黒褐）

8　第１図には国土地理院発行の１/25000土地条件図、第２図には１/500国分寺台土地区画整理事業現況図・１/2500市原市基本図を用いた。

本文目次

巻頭図版
序文
例言
凡例
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　遺跡周辺の環境 …… 1
　　1　地理的環境 …… 1
　　2　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 3
　　3　市内の埴輪出土遺跡 …… 6
第２章　検出された遺構と遺物 …… 8
　第１節　古墳群の概要 …… 8
　第２節　１号墳 …… 11
　　1　概要 …… 11
　　2　検出状況と周溝 …… 11
　　3　墳丘の形状 …… 16
　　4　埋葬施設 …… 21
　　5　埴輪列 …… 30
　　6　形象埴輪について …… （櫻井淳史） 37
　　7　その他の出土遺物 …… 142
　第３節　１号土壙墓 …… 147
　　1　遺構と遺物 …… （櫻井淳史） 147
　　2　山倉１号墳出土人骨について …… （平田和明） 148
　第４節　２号墳 …… 150
　第５節　３号墳 …… 154
　第６節　４号墳 …… 160
　第７節　１号土坑 …… 164
　第８節　５号墳 …… 165
　第９節　６号墳 …… 167
　第10節　１号住居跡・２号住居跡 …… 174
　第11節　遺構外出土の遺物 …… 177
　　1　縄紋土器 …… （鷹野光行） 177
　　2　石器 …… 177
　　3　その他の遺物 …… 177
第３章　考察 …… 185
　第１節　山倉１号墳出土の埴輪について …… 185
　第２節　墳丘築造企画と埴輪配列の推定復元 …… 209
　第３節　生出塚埴輪窯の生産と供給について …… （山崎　武） 231
　第４節　埴輪生産体制論雑感 …… （車崎正彦） 236

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図
第 2 図　山倉古墳群周辺地形図
第 3 図　山倉古墳群全体図
第 4 図　山倉 1 号墳墳丘測量図
第 5 図　山倉 1 号墳墳丘測量図（表土除去後）
第 6 図　1 号墳平面図（完掘状況）
第 7 図　1 号墳埋蔵施設平面図・土層断面図
第 8 図　石室平面復元図
第 9 図　1 号墳埋蔵施設裏込下遺物出土状況図
第 10 図　山倉 1 号墳埴輪出土位置図
第 11 図　山倉 1 号墳後円部中段テラス円筒埴輪列出土状況
第 12 図　山倉 1 号墳前方部北側中段テラス円筒埴輪列出土状況
第 13 図　山倉 1 号墳中段テラス形象埴輪出土状況
第 14 図　円筒埴輪（A 類）実測図
第 15 図　円筒埴輪（A 類）実測図
第 16 図　円筒埴輪（B 類）実測図
第 17 図　円筒埴輪（B 類）実測図
第 18 図　円筒埴輪（B 類）実測図
第 19 図　円筒埴輪（B'類）実測図
第 20 図　円筒埴輪（B'類）実測図
第 21 図　円筒埴輪（D 類）実測図
第 22 図　円筒埴輪（E 類）実測図
第 23 図　円筒埴輪（E 類）実測図
第 24 図　円筒埴輪（E 類）実測図
第 25 図　円筒埴輪（E 類）実測図
第 26 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 27 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 28 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 29 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 30 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 31 図　円筒埴輪（F 類）実測図
第 32 図　朝顔形埴輪（F 類）実測図
第 33 図　円筒埴輪（G・H 類）実測図
第 34 図　円筒埴輪（H 類）実測図
第 35 図　円筒埴輪（H 類）実測図
第 36 図　円筒埴輪（H 類）実測図
第 37 図　円筒埴輪（I 類）実測図
第 38 図　円筒埴輪（I 類）実測図
第 39 図　円筒埴輪・朝顔形埴輪（I 類）実測図
第 40 図　円筒埴輪（J 類）実測図
第 41 図　円筒埴輪（K・L 類）実測図
第 42 図　朝顔形埴輪（K 類）実測図
第 43 図　円筒埴輪片（A・B・D 類）実測図
第 44 図　円筒埴輪片（E 類）実測図
第 45 図　円筒埴輪片（E・F 類）実測図
第 46 図　円筒埴輪片（F 類）実測図
第 47 図　円筒埴輪片（F 類）実測図
第 48 図　円筒埴輪片（G・H 類）実測図
第 49 図　円筒埴輪片（H 類）実測図
第 50 図　円筒埴輪片（H・I・J 類）実測図
第 51 図　円筒埴輪片（K 類）実測図
第 52 図　円筒埴輪片（L 類）実測図
第 53 図　筒袖表現の人物埴輪全身像 1 実測図
第 54 図　筒袖表現の人物埴輪全身像 2 実測図
第 55 図　振分髪表現の人物埴輪全身像 3 実測図
第 56 図　冠帽表現の人物埴輪全身像 4 実測図
第 57 図　冠帽表現の人物埴輪全身像 5 実測図
第 58 図　冠帽表現の人物埴輪半身像 6 実測図
第 59 図　冠帽表現の人物埴輪半身像 7 実測図
第 60 図　島田髷表現の人物埴輪半身像 8 実測図
第 61 図　島田髷表現の人物埴輪半身像 9 実測図
第 62 図　島田髷表現の人物埴輪半身像10実測図
第 63 図　人物埴輪（壺を戴く人物11・振分髪表現の半身像12～14）実測図
第 64 図　人物埴輪（鍬を持つ人物15他）実測図
第 65 図　人物埴輪全身像片実測図
第 66 図　人物埴輪半身像片実測図
第 67 図　水鳥形埴輪片実測図
第 68 図　鶏形埴輪片・馬形埴輪片実測図
第 69 図　家形埴輪片（入母屋）実測図
第 70 図　家形埴輪片（入母屋・寄棟）実測図
第 71 図　大刀形埴輪実測図
第 72 図　矛形埴輪片・形象埴輪基台部実測図
第 73 図　靫形埴輪片実測図
第 74 図　鞆形埴輪片実測図
第 75 図　翳形埴輪実測図
第 76 図　翳形埴輪片実測図
第 77 図　出土埴輪ハケメ一覧（A・B・D）
第 78 図　出土埴輪ハケメ一覧（E・F）
第 79 図　出土埴輪ハケメ一覧（F）
第 80 図　出土埴輪ハケメ一覧（F）
第 81 図　出土埴輪ハケメ一覧（F・G）
第 82 図　出土埴輪ハケメ一覧（H・I・J・K）
第 83 図　出土埴輪ハケメ一覧（K・L、A 内面・H 内

面）
第 84 図　１号墳出土遺物実測図
第 85 図　１号墳出土遺物実測図
第 86 図　１号墳出土鉄製品実測図
第 87 図　１号墳出土金属製品実測図
第 88 図　１号土壙墓遺構・遺物実測図
第 89 図　２号墳測量図（表土除去前）・土層断面図
第 90 図　２号墳平面図（完掘状況）
第 91 図　２号墳測量図（完掘状況）
第 92 図　３号墳測量図（表土除去前）・土層断面図
第 93 図　３号墳平面図（完掘状況）
第 94 図　３号墳測量図（完掘状況）
第 95 図　４号墳測量図（表土除去前）・土層断面図
第 96 図　４号墳・１号土坑平面図
第 97 図　４号墳内１号土坑出土遺物
第 98 図　５号墳測量図（表土除去前）
第 99 図　５号墳平面図（完掘状況）
第100図　２・３・４・５号墳出土遺物実測図
第101図　６号墳測量図（表土除去前）・土層断面図
第102図　６号墳平面図（完掘状況）
第103図　６号墳測量図(表土除去後)･エレベーション図
第104図　６号墳出土遺物実測図
第105図　１号・２号住居跡平面図
第106図　１号住居跡出土土器・表採遺物実測図
第107図　遺構外出土縄紋土器拓影
第108図　遺構外出土石製品実測図
第109図　円筒埴輪におけるハケメの比率と製作器種の対応関係
第110図　エース工人体制のイメージ／山倉１号墳の工人のレパートリー／関連する遺跡の位置／生出塚遺跡20号窯出土の水鳥形埴輪
第111図　円筒埴輪最下段高の比較
第112図　山倉１号墳墳丘企画推定図
第113図　綿貫観音山古墳墳丘企画推定図
第114図　山倉１号墳形象埴輪配列復元図
第115図　綿貫観音山古墳埴輪配列図
第116図　墳丘企画の比較１
第117図　墳丘企画の比較２
第118図　人物埴輪の比較１
第119図　人物埴輪の比較２
第120図　人物埴輪の比較３
第121図　生出塚窯産埴輪出土古墳分布図
第122図　生出塚31・39・40号窯平面図

表目次

第 １ 表　市内の埴輪関連遺跡一覧
第 ２ 表　検出遺構一覧
第 ３ 表　主要形象埴輪法量一覧
第 ４ 表　円筒埴輪観察表
第 ５ 表　円筒埴輪破片資料観察表
第 ６ 表　形象埴輪観察表
第 ７ 表　土器観察表
第 ８ 表　石製品観察表
第 ９ 表　金属製品観察表
第 10 表　円筒埴輪属性一覧
第 11 表　山倉１号墳出土埴輪のハケメと一致する生出塚遺跡Ｐ地点他の資料
第 12 表　生出塚埴輪窯産埴輪出土古墳一覧

図版目次

巻頭 １　山倉１号墳出土人物埴輪
巻頭 ２　人物埴輪半身像と器財埴輪／人物埴輪全身像
巻頭 ３　山倉古墳群遠景（南から）／１号墳検出状況
巻頭 ４　１・２・３号墳全形／６号墳と周辺
巻頭 ５　１号墳石室石材／１号墳中段南側埴輪樹立状況／円筒埴輪の破断面（B11）／凸帯の色調（H61・B17）
図版 １　山倉古墳群の周辺（1947年）
図版 ２　山倉古墳群の周辺（1961年）
図版 ３　山倉古墳群全景（南から）／山倉古墳群全景（北東から）
図版 ４　養老川側から古墳群を望む／台地側からの眺望／西広を望む
図版 ５　１・２・３号墳（北から）／１号墳（南から）
図版 ６　１号墳前方部上からの眺望／１号墳調査風景／斜面部トレンチ

図版 7　1号墳円筒埴輪列（後円部東側）
図版 8　1号墳後円部（11b区）円筒埴輪列
図版 9　1号墳後円部（11b区）円筒埴輪
図版 10　1号墳後円部（11b区）円筒埴輪
図版 11　1号墳後円部（11b区）円筒埴輪
図版 12　1号墳後円部北東側円筒埴輪列
図版 13　1号墳後円部（12a区・12b区）円筒埴輪／円筒埴輪
図版 14　1号墳後円部北東円筒埴輪列
図版 15　1号墳後円部北側（12b区）円筒埴輪／1号墳括れ部北側（08区）円筒埴輪／石室開口部付近埴輪出土状況
図版 16　1号墳括れ部南側人物埴輪出土状況
図版 17　1号墳括れ部南側筒袖全身像1出土状況
図版 18　1号墳括れ部南側筒袖全身像1・振分髪全身像3・冠帽全身像4出土状況
図版 19　1号墳括れ部南側人物埴輪出土状況／冠帽全身像5埋設状況
図版 20　1号墳括れ部南側島田髷半身像10出土状況
図版 21　1号墳括れ部南側島田髷半身像9出土状況
図版 22　1号墳中段テラス形象埴輪基台部出土状況／1号墳括れ部南側冠帽半身像出土状況
図版 23　1号墳人物埴輪列筒袖2基台部埋設状況／振分髪半身像14出土状況／鍬人物21出土状況
図版 24　1号墳後円部（09b区）大刀形埴輪153出土状況／1号墳括れ部南側（07区）翳形埴輪190出土状況
図版 25　1号墳後円部石室検出状況／石室完掘状況／石室構築土除去後
図版 26　1号墳石室（南から）／石室石材出土状況／羨道部石組
図版 27　1号墳石室石材／石室南東コーナー石組状況
図版 28　1号墳石室下部遺物出土状況
図版 29　1号墳石室内遺物出土状況／石室床面下調査状況
図版 30　1号墳石室裏込土断面／石室内遺物出土状況
図版 31　1号墳後円部盛土（南から）・（西から）
図版 32　1号墳石室下部遺物出土状況／1号墳後円部墳丘盛土断面（SP J–J'中）
図版 33　1号墳後円部墳丘東西断面／石室横断トレンチ（SP J–J'）と直交する西側奥壁
図版 34　1号墳後円部土層断面（SP I–I'）／1号墳後円部中心盛土下層土器4出土状況（奥壁：SP D–D'）
図版 35　1号墳盛土内土器14出土状況（左壁：SP C–C'）／ローム層（整地土）を切り込む
図版 36　2号墳調査状況／2号墳周溝覆土断面（SP A–A'）
図版 37　2号墳周溝覆土断面（SP B–B'）／2号墳周溝覆土断面（SP C–C'）
図版 38　2号墳南東周溝断面（SP D–D'）／2号墳土器1・2出土状況／3号墳周溝覆土断面（SP A–A'中）
図版 39　3号墳周溝南北断面（東から）／3号墳周溝覆土（SP A–A'中）
図版 40　3号墳周溝覆土断面（SP B–B'）／3号墳周溝覆土断面（SP C–C'）／3号墳周溝覆土断面（手前：SP D–D'）
図版 41　4号墳トレンチ設定／4号墳周溝覆土断面（SP B–B'）／4号墳南西ベルト土器10出土状況
図版 42　5号墳トレンチ設定／5号墳東側遺物出土状況／5号墳周溝覆土断面（SP A–A'東側）
図版 43　6号墳調査前の状況／6号墳調査風景／6号墳（西から）
図版 44　6号墳南東コーナー／6号墳周溝覆土断面（SP A–A'西側）／6号墳周溝内遺物出土状況
図版 45　6号墳南側周溝断面（西から）／6号墳南東コーナー周溝内埋葬施設B検出状況
図版 46　6号墳東側周溝内埋葬施設C完掘状況／6号墳南側周溝内1号住居跡
図版 47　1号住居跡北隅遺物出土状況／1号住居跡南隅遺物出土状況／6号墳北側周溝内2号住居跡
図版 48　1号墳前方部上1号土壙墓常滑甕出土状況／1号土壙墓甕内人骨検出状況／銭貨が含まれている
図版 49　人物埴輪半身像および形象埴輪形象部／人物埴輪全身像
図版 50　筒袖表現の人物埴輪全身像
図版 51　筒袖表現の人物埴輪全身像
図版 52　筒袖表現の人物埴輪全身像
図版 53　筒袖表現の人物埴輪全身像
図版 54　振分髪表現の人物埴輪全身像
図版 55　振分髪表現の人物埴輪全身像
図版 56　冠帽表現の人物埴輪全身像
図版 57　冠帽表現の人物埴輪全身像
図版 58　冠帽表現の人物埴輪全身像
図版 59　冠帽表現の人物埴輪全身像
図版 60　冠帽表現の人物埴輪半身像
図版 61　島田髷表現の人物埴輪半身像
図版 62　人物埴輪半身像（島田髷・壺を戴く人物）

図版63　人物埴輪片
図版64　振分髪表現の人物埴輪半身像14／鍬を持つ人物埴輪半身像21／人物・形象埴輪基台部
図版65　人物埴輪片
図版66　水鳥形埴輪片／鶏形埴輪・馬形埴輪片
図版67　家形埴輪片
図版68　家形埴輪片
図版69　大刀形埴輪片／矛形埴輪片
図版70　靫形埴輪片
図版71　鞆形埴輪片／翳形埴輪片
図版72　翳形埴輪189・190・203／大刀形埴輪153
図版73　円筒埴輪（A類）
図版74　円筒埴輪（B類）
図版75　円筒埴輪（B・B'類）
図版76　円筒埴輪（D・E類）
図版77　円筒埴輪（E類）
図版78　円筒埴輪（E・F類）
図版79　円筒埴輪（F類）
図版80　円筒埴輪（F類）
図版81　円筒埴輪（G・H類）
図版82　円筒埴輪（H類）
図版83　円筒埴輪（I類）
図版84　円筒埴輪（J・K・L類）
図版85　朝顔形埴輪（F・I・K類）
図版86　円筒埴輪片
図版87　円筒埴輪片
図版88　円筒埴輪片
図版89　円筒埴輪片
図版90　円筒埴輪片
図版91　円筒埴輪片
図版92　円筒埴輪片
図版93　円筒埴輪片／指紋
図版94　円筒埴輪ごまかしナデ・修復痕
図版95　円筒埴輪凸帯・布圧痕・底面接合痕・底部調整・転写コード
図版96　出土埴輪ハケメ一覧（A・B・D・E・G・H・I・J・L類、A・H類内面）および各一致例（2倍）
図版97　出土埴輪ハケメ一覧（F・K類）および各一致例（2倍）
図版98　円筒埴輪（A類）細部
図版99　円筒埴輪（B類）細部
図版100　円筒埴輪（D・E類）細部
図版101　円筒埴輪・朝顔形埴輪（F類）細部
図版102　半身像（F類）細部・円筒埴輪（G・H類）細部
図版103　円筒埴輪（I類）細部
図版104　朝顔形埴輪（I類）円筒埴輪（J・L類）細部（H類）内面
図版105　円筒埴輪・朝顔形埴輪・水鳥形埴輪（K類）細部
図版106　1号墳～6号墳出土土器
図版107　石室出土鉄製品
図版108　石室出土金属製品
図版109　1号墳出土土器／琥珀製棗玉／1号土壙墓蔵骨器
図版110　1号墳出土須恵器片／1号墳出土土器
図版111　1号土坑出土土器／2・3・4・5号墳出土土器
図版112　6号墳出土土器／1号住居跡出土土器及び表採遺物
図版113　遺構外出土縄紋土器
図版114　1号住居跡出土砥石／遺構外出土石製品

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

市原市は東京湾東岸に面する立地の利便性のため、昭和30年代から40年代にかけて首都圏や工業地帯に対するベッドタウンや、大規模なゴルフ場などのレジャー施設の建設が進んでいた。こうした状況の中、新市庁舎建設を中心とした新しい街作りが、市原台地南側一帯の国分寺台と呼ばれる地域に計画されることとなった。そして、それに伴って、1970年に市原市国分寺台地区土地区画整理事業組合が設立され、土地造成が開始された。この区画整理事業地内の埋蔵文化財を調査・保護するために、翌年、市原市国分寺台埋蔵文化財調査会が組織された。そして、調査会の下に発掘調査を実施する調査団が結成され、翌1972年より国分寺台遺跡群の発掘調査が開始された。

山倉古墳群は国分寺台地区南東端の一角を占めるために、一連の事業において他遺跡とともに調査されることとなった遺跡である。調査主体は上総国分寺台遺跡調査団で、西広貝塚の調査を終えたメンバーが主な担当者となり、1974年８月から着手された。のちに1988年にまで及ぶ国分寺台地区の埋蔵文化財調査事業の初期にあたる調査である。

当初、確認されていた古墳は、造成のための伐木を終えた段階での踏査によって地面の高まりの認められた４基であったが、その後、調査のための伐木およびトレンチ調査が進むにつれて、４号墳・５号墳が認識され、結果として今回報告する１～６号墳が把捉された次第である。

発掘調査は、1973年12月に須田勉・田中新史・西田道世・小川静夫・中岡和浩の各氏によって行われた１号墳の墳丘測量から始まる。

尾根部の１～５号墳の発掘調査は、1974年８月に、市毛勲氏と多宇邦雄氏率いる早稲田実業高校生と、地元大坪・西広・福増の方々の協力によって開始された。そして、９月以降に、西広貝塚第１次調査の担当調査員であった西田道世氏と米田耕之助が続けて調査に入った。また、台地上、西広貝塚寄りの６号墳は須田勉氏が調査を実施した。

調査は1975年３月に終了し、翌1976年に調査成果の一部が『古代』誌上で発表された（米田1976）。

第２節　遺跡周辺の環境

１　地理的環境

関東平野は列島最大規模を誇る平野で、そのほとんどを沖積層と低い台地が占めている。

平野の北東部は那須野原に接し、北西部は秩父・足尾山地に、また、南西は丹沢山地～三浦半島に、南東部は東京湾を隔てて太平洋に突出する房総半島へと連なる。この房総半島は、現在、北部において利根川に、江戸川により西部を区切られ、その範囲がまた、行政区画上の千葉県として扱われている。

房総半島の北部地域は、なだらかな丘陵の見られる下総台地、南部地域は丘陵地形により占められ、半島のほぼ中央部には、房総半島を二分するかのように養老川の流れを見ることができる。

養老川は、太平洋岸近くの清澄山麓に源を発し、幾多の蛇行を見せながら東京湾岸の五井へと至る流れで、全長75㎞を測る。その河口付近の東岸に広がる洪積台地は、北側にある村田川に挟まれ、樹


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

第１図　遺跡位置図

枝状に入り込む支谷により複雑な地形が作り出されている（第１図）。この市原台地南西縁辺に、山倉古墳群は立地する。

国分寺台地区の標高は、海岸寄りで20ｍ弱、山倉古墳群あたりが40ｍほどで、ゆるく海に向かって傾斜している。ヒューマンスケールでは、開析谷を横断するときに強い傾斜を感じるものの、台地上面と埋積谷底はおおむね平坦である。突出した丘陵はまったくなく、沖積地を合わせて、全体に平らな地勢を示している。景観もいたって水平的である。

なお、国分寺台の自然地理的環境については、『南向原』・『祇園原貝塚』（市毛他1976・忍澤1999）に詳しく述べられているので、そちらも参照されたい。

２　歴史的環境と周辺の遺跡

市原台地南部は上総国分僧寺・尼寺跡の存在することにより古くから研究者に知られ、周囲には先史・歴史時代を問わず多くの遺跡を見ることができる。

山倉古墳群はその遺跡群の一角を占めるものであり、行政区画上の土地区分名称は、市原市大坪・山倉・西広にまたがっている（現在の西広６丁目）。古墳群は東西に延びる台地縁辺の舌状地形上にあり、第２図に見るごとく、主に台地に沿って群を形成している。

古墳群は中央部を南北に縦断する国道297号線により一部破壊を受けている。調査原因の宅地造成域はその西側にあたり、発掘はその範囲内にある古墳群を構成する７基について行ったものである。なお、山倉７号墳と呼称する遺構については、西広貝塚２次調査区内にあるため、今回の報告では触れず、西広貝塚の報告に委ねることとする。

ところで、市内遺跡分布地図（市原市教育委員会1988）では、山倉古墳群７基（遺跡番号758－①～⑦）と山倉八郎作古墳群９基（同617－①～⑨）に分けて示しているが、これは一部の指摘があるとおり誤解である（田中2000）。今回報告地区の大字は大坪であり、「山倉」は古墳群として大局的に見たときの名称を調査地に対して付与したにすぎない。分布地図では別名称にしているが、実質は連続するものであることを確認し、記しておきたい。ただし、遺跡が山倉古墳群・山倉１号墳という名称で広く周知されている経緯もあるので、今後も山倉古墳群の名称のままとする。

山倉古墳群の付近には、北方200ｍに谷を挟んで対峙するかたちで縄文後晩期の西広貝塚がある。西広貝塚は前広神社がその先端に所在する舌状地形の上方にあり、山倉古墳群とは逆Ｃ字のかたちをとって対峙する位置関係にある。また、現在、山倉ダムとして水没している谷地形を東に挟んで、山倉貝塚が立地している（滝口他1969）。

近隣での弥生時代・古墳時代の明確な集落跡は、西広貝塚上層遺構群で検出された弥生時代後期から古墳前期にかけての十数軒の竪穴住居跡と山倉貝塚の竪穴状遺構１基が確認されるのみで、国分寺台地区西部における当該期の密な集落遺跡に対して周辺的な様相を示す。このため、山倉古墳群を構成する古墳と同時期の集落遺跡は直近において判然としていない。

さて、国分寺台地区の古墳群は、市原古墳群の中枢域として、諏訪台・東間部多・持塚・東・山倉・神門・荒久・中台・加茂・長平台・辺田・根田・松山・西谷・堀込・向原台・南向原・南祇園原・稲荷台の19支群に整理されている（田中2000）。

山倉古墳群の周辺には、このうち、持塚古墳群（６基）・東古墳群（７基）がある。両群内で時期

的に近いのは、中期の持塚古墳群４・３・１号墳、東古墳群２・３号墳である。持塚古墳群は山倉古墳群の北西600ｍほどから西方へ展開する。このうち３号墳・１号墳では埴輪が出土している（第１表）（田中2000）。東古墳群は前広神社の一つ西にある突出地形上に分布する。

山倉古墳群の調査範囲は２ヶ所に分かれる。尾根上に連続する一群と台地北側にある６・７号墳である。前者は、はじめに古墳時代前期の円墳５号墳が尾根の先端に築造され、中期前半の円墳４号墳、後期前半の帆立貝形墳３号墳、後期後半の円墳２号墳、後期終末の前方後円墳１号墳と継起的につくられた場所である。

この群の位置する台地突端は、東西両側と中央が開析されて、Ｔ字の横棒が養老川と平行するようなかたちで沖積地を見下ろしている。調査区の最高地点は１号墳上で、標高47ｍである。最高地点と南側沖積地の標高差は30ｍ近くある。元来の地形が平坦ではないので、旧表土からの盛土の高さは一定とは言えないが、１号墳で約２ｍの盛土が遺存する。

一方、方墳の６号墳は、前の群とは北に約100ｍの距離をおいて、弥生終末期の竪穴住居跡に重複して構築されている。当初に現況地形で墳丘の確認されたところを調査範囲としたために、墳丘・周溝にかかる遺構しか記録されておらず、この古墳周辺の下層の集落の広がりは不明である。ただ、西広貝塚の２次および７次調査区内にも弥生後期から古墳前期の竪穴住居跡が十数棟ほど認められるため、当該期の集落が近辺に広がっていた可能性が考えられる。これらの集落が継続しており、５・６号墳等を造営するに至ったとしても不思議ではない。また、東古墳群の下層にも同時期の集落跡の一部が検出されており（田中2000）、密度は台地西辺部に比較して相対的に低いと見られるものの、西広貝塚上層遺構と山倉６号墳下層は連続していたことも考えられる。

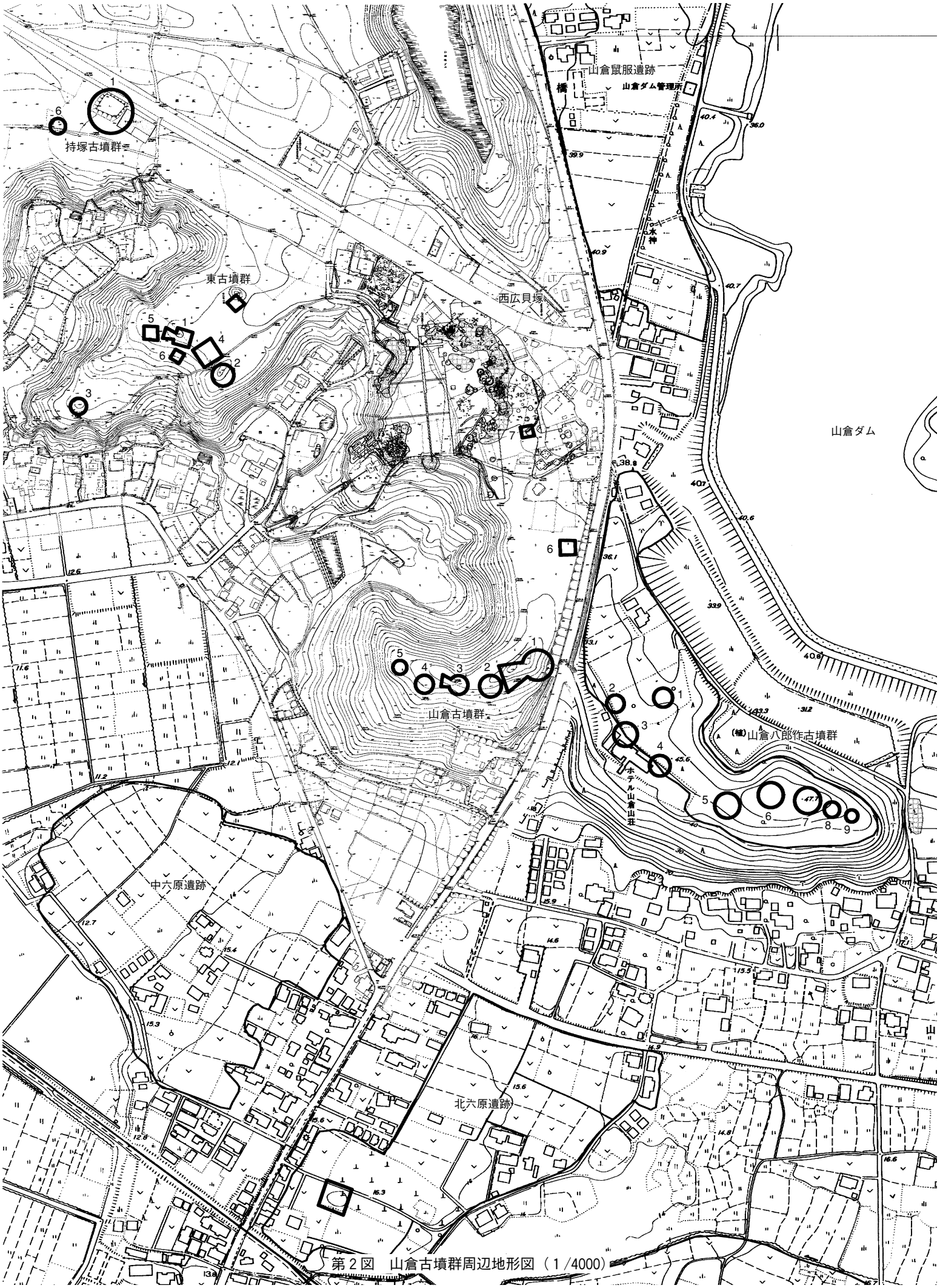
５・６号墳および４号墳が築かれた五領式期から和泉式期前半の遺跡は、周辺では明瞭に認められない。和泉式期については当地区に限らず台地上での分布が希薄なので、台地上でも沖積地寄りの位置か、あるいは沖積地の微高地に密度の中心があったものと思われる。養老川左岸の沖積地にある姉崎地区や、村田川左岸地域もこれに似た様相である。

後期前半の３号墳と後期後半２号墳については、土師器・勾玉の表採があり、古墳時代の遺跡と考えられることから、北方の台地平坦面上にある山倉鼠服遺跡（第２図上）が対応する集落遺跡である可能性が考えられる。しかし、内容が判明した既調査の集落跡ではないので、中期前半期に限らず、沖積地に占地することもあり得る。

山倉古墳群に対応する各時期の集落遺跡は、今後、台地を下りた河岸段丘・微高地上に広がりが想定される山倉中六原遺跡・山倉北六原遺跡などで確認される可能性もあるだろう。両地では土師器の散布が見られ、古墳時代・奈良・平安時代の遺跡の存在が考えられている（市原市教育委員会1988）。

なお、国分寺台地区における台地上の遺跡を見ると、海岸平野を見下ろす位置にある台遺跡、養老川も視野に入れる御林跡遺跡、そして、幅広の開析谷開口部沿いの加茂遺跡において、古墳時代中・後期の集落跡が検出されており、特に御林跡遺跡では高い密度で古墳中期の竪穴住居跡群が確認されている（浅利1989）。検討が進めば、集落－墓域の具体的な対応が明確になる事例も増えるだろう。

調査区内で最後に築造されたと考えられる後期終末の１号墳は、既存の古墳と主軸が合うので、継起的に築造された秩序が感じられる。ただ、この地域で同時期に、同様の前方後円墳が築かれていないので、その築造主体に関わる領域は、群内の他の古墳に比べて広く考えてよいのかもしれない。



第２図　山倉古墳群周辺地形図（１/4000）

3　市内の埴輪関連遺跡

１号墳出土埴輪検討の参考とするために、市内の埴輪出土遺跡を検索したところ、最近、事例が増えつつあることが分かった。遺物の直接的な類例は確認できなかったものの、位置づけの参考になると思われるので、これまで作成されたものに追補するかたちで一覧表を作成した（田中1981、市原市教育委員会1988、高橋1992、木川2001）（第１図・第１表）。

山倉１号墳への生出塚産埴輪供給という現象については、表中、10.山王山古墳・18.原１号墳出土例における低位置凸帯という北関東的な属性の存在が、ある時期から在地の埴輪生産が見られなくなる現象との関わりにおいて注目される（小出他1980、甘粕・車崎・加藤2002）。

他に、最近の事例として、13.山新遺跡・16.妙経寺遺跡という姉崎地区での発見が特筆に値する。

妙経寺例は2001年度第７次調査の際に円墳周溝の外側で検出されたもので、約３個体分の円筒埴輪を組み合わせ、埴輪棺として用いられていた。円筒埴輪は３条４段構成の二次調整が施されない型式で、うち１個体は口縁部が未調整のまま焼成されたように見受けられる。この遺跡はJR姉ヶ崎駅前の砂堆上にあり、既往の調査から、古墳群が現妙経寺境内を超えて砂堆のほぼ全域を占地すると見られ、帆立貝形古墳１基を含む円墳主体の15基以上が確認されている。

山新遺跡は12.姉崎二子塚古墳の北東に位置する。ここからは、浅い縦位ハケメ・ナデの後に、櫛状工具で波状文・格子文・弧状文を施す特徴的な円筒埴輪が出土した。その器面には大きく黒斑が入り、窖窯焼成ではないようである。両遺跡については年報等で詳細が明らかになる予定である。

山新遺跡第３次調査区では円墳数基の周溝が接するかたちで検出されており、これらは姉崎二子塚古墳と同一砂堆上に立地する。この同じ砂堆先端の海側に位置する15.上野合遺跡からも客体的な存在ながらも埴輪が出土し、やはり古墳周溝が検出されおり、大場磐雄・亀井正道両氏の記述にもあるとおり、二子塚古墳の周辺の微高地にはかなりの数の古墳が群として展開していたことが窺われる。さきの妙経寺古墳群との間には、埴輪の出土がある14.棗塚遺跡の名の元になった棗塚古墳などが存在したようであり、古墳時代中期における沿岸部の景観は、今日と大きく違って見えたことだろう。

さて、姉崎地区で最も名の知られているのは姉崎二子塚古墳だと思われるが、その埴輪について興味深い記述が存在する。それは概報中の一文で、下段円筒埴輪列の中（報文図中南括れ部×印か）に「上部が壺状に収縮しその縊れ部に一條の細い凸帯を附け、下部には波状の櫛目文を持った」朝顔形と思われる円筒埴輪が存在したというのである（大場・亀井1951）。これが横ハケを表現したのでなければ、山新出土例はそれと同時に存在した同タイプの普通円筒であり、そこから抜き取られた可能性も考えられよう。あるいは、二子塚例が同一系譜の後出型式である、という関係も想定し得る。

また、このことについては、以前から散発的に出土の見られた最上段に格子状ハケメあるいは櫛描文が施される埴輪とともに示唆するところが大きい。周辺では、8.椎津外郭古墳を改変した椎津城内と近傍の7.五霊台遺跡で、同様の櫛描文状の条線文を持つ埴輪があり、村田川下流左岸台地上の30.菊間手永台第２号墳では、最上段外面にハケメが格子状に施される資料が存在する。他に、木更津市清見台４号墳・富津市富士見台２号墳などにおいても類似例が存在することを考えると（中村他1968、平野・諸墨1987）、ハケメ工具・櫛状工具で装飾を施すことは、地域的な特徴と見なせよう。

山新遺跡で明確になった櫛描文を持つ円筒埴輪の存在と、それを踏まえた総合的な検討は、今後、本地域における製作技法の系譜を考える上で重要になると思われる。

第１表　市内の埴輪関連遺跡一覧

番号	遺跡名	読み	所在地	水系	立地・現状	出土状況	内容	備考	出典・参考文献
1	山倉１号墳	やまくら	西広６丁目５	養老川下流右岸	台地・宅地	前方後円墳	生出塚産円筒・形象埴輪	昭和49年調査	
2	吉野１号墳	よしの	西国吉字吉野	養老川中流左岸（戸田川）	河岸段丘面・山林	前方後円墳	円筒埴輪片と、実測図はないが形象の可能性の１片出土	※市原市指定史跡、昭和62年測量・周溝確認調査（南岩崎吉野遺跡）	清藤他1988
3	中高根古墳群	なかたかね	中高根入口ノ沢	養老川中流左岸	台地・宅地	前方後円墳？	明治末年頃、この周囲を開墾しようとしたら人形の埴輪がでたので驚いて中止し、もとの所へ埋めたと言う。	消滅	田中1979
4	春日神社古墳群（狐塚）	かすがじんじゃ（きつねづか）	松崎字宮ノ越	養老川中流右岸	河岸段丘・神社境内	円墳	円筒埴輪	表採資料	高橋1992
5	内出古墳	うちで	海保字北古谷	養老川下流左岸	河岸段丘・山林(神社)	前方後円墳	中期か（小出氏御教示）	後円部分に神社があり、壊されている	杉山1994
6	武士古墳群（人見塚古墳）	たけし（ひとみづか）	武士字上神戸	養老川中流右岸（新堀川）	台地・山林	前方後円墳	詳細不明	市原郡誌に記載有り	須田他1976
7	椎津五霊台遺跡	しいづごりょうだい	椎津字五霊台	椎津川左岸	台地・畑地	混入品	格子状の櫛描文（ハケメ？）を持つ円筒埴輪片	平成８年調査（椎津五霊台遺跡Ａ地点、Ｂ地点）	高橋1998
8	椎津外郭古墳	しいづとぐるわ	椎津字外郭	椎津川左岸	台地・山林	前方後円墳	古墳を改変したと見られる主郭寄りのＢ地点Ｄトレンチから櫛描文状の条線を持つ埴輪片出土	平成元年確認調査（椎津城跡確認調査）	笹生1990
9	姉崎宮山遺跡	あねさきみやま	姉崎字宮山	養老川下流左岸	台地・神社境内地	混入品	形象埴輪片（人物？）	昭和61年調査（神社部分）	大村1991
10	姉崎山王山古墳	さんのうやま	姉崎字宮山	椎津川右岸（養老川下流左岸）	台地・宅地	前方後円墳	円筒・人物・動物・器財埴輪	上総山王山古墳、昭和38年調査、消滅	小出他1980
11	姉崎釈迦山古墳	しゃかやま	姉崎字山王山	椎津川右岸（養老川下流左岸）	台地・山林	混入品	円筒埴輪片	平成５年測量調査、平成７年確認調査	小久貫1996
12	姉崎二子塚古墳	ふたごづか	姉崎字二タ子	養老川下流左岸（東京湾岸低地）	海岸砂丘・水田・宅地	前方後円墳	Ｂ種ヨコハケが混在「波状の櫛目文」を持つ朝顔形埴輪の記述あり	昭和22年調査（國學院大学）、昭和56年測量調査	大場・亀井1951
13	姉崎山新遺跡	さんしん	姉崎	養老川下流左岸（東京湾岸低地）	砂堆	円墳	櫛描の格子文・波状文・弧文を持つ「円筒埴輪」が出土	平成14・15年調査　整理中	近藤2003
14	姉崎棗塚遺跡	なつめづか	姉崎字棗塚・神明	東京湾岸低地(養老川下流左岸)	砂　堆・道路・宅地	混入品	１・２次調査区で円筒埴輪片少量出土。隣接する棗塚古墳（消滅）か	平成９年調査（棗塚遺跡１次・２次）　整理中	大場・亀井1951 蜂屋2000
15	姉崎上野合遺跡	うえのあい	姉崎字上野合	東京湾岸低地(養老川下流左岸)	砂堆・宅地	混入品	３・７号遺構（溝・円墳周溝）から円筒（Ｂ種ヨコハケ少混在）・朝顔形埴輪片出土	平成元年調査、一部分消滅	木對1990
16	姉崎妙経寺遺跡	みょうきょうじ	姉崎字養老町	東京湾岸低地(養老川下流左岸)	砂堆・墓地	埴輪棺	平成13年度第７次調査において円筒埴輪棺が出土	15基以上の古墳群が展開する	小出2001
17	鶴窪古墳	つるくぼ	姉崎字鶴窪	養老川下流左岸	台地	前方後円墳	円筒埴輪（下総型）	昭和56年調査、保存	甘粕他2002
18	姉崎原１号墳	はら	姉崎字原	養老川下流左岸	台地・宅地	前方後円墳	円筒・人物・大刀形・靱形埴輪（北関東）	昭和46年調査、昭和56年調査（原遺跡）、昭和61年調査（原遺跡）、消滅	石井・轟他1971 越川他1984
19	御産目 浅間神社古墳	ござめせんげんじんじゃ	五井字座目	東京湾岸低地(養老川下流右岸)	微高地・神社境内	帆立貝形墳	円筒（タテハケのみ）・朝顔・人物・馬・猪・鹿・鶏形埴輪	昭和60年調査（御座目浅間神社古墳） 墳丘部分は神社境内に残る	浅利・大村1987
20	君塚古墳群（君塚天神山古墳）	きみづかてんじんやま	君塚字五井境	東京湾岸低地(白旗川)	微高地・宅地	方墳	円筒埴輪（下総型）	表採資料	田中1981
21	根田１号墳（根田130号墳）	ねだ	根田２丁目３	養老川下流右岸	台地・宅地	帆立貝形墳	円筒埴輪（下総型）	昭和54年調査（根田1.2号墳・根田130号墳）	田中1981
22	根田御林跡遺跡	おはやしあと	惣社	養老川下流右岸	台地・宅地	混入品	人物埴輪片（下総型）混入	昭和63年調査	木對2004a
23	西谷10号墳	にしやつ	根田４丁目３	養老川下流右岸	台地・宅地	円墳	円筒埴輪	昭和54・55年調査（西谷128号墳）	田中1985
24	南向原４号墳	みなみむけえばら	国分寺台中央６丁目５	東京湾岸市原台地縁辺（白旗川）	台地・宅地	円墳	円筒・人物・馬形・壺形埴輪	昭和23年調査（郡本Ａ号墳－早稲田大学調査）、昭和48年調査（南向原古墳群）	田中他1976
25	持塚１号墳	もちづか	西広５丁目１他	養老川下流右岸	台地･宅地･道路	円墳	円筒・朝顔形埴輪	昭和38年調査（西広モチ塚古墳－早稲田大学調査）、昭和51年調査、調査後消滅	滝口・平野1965 田中1977
26	持塚３号墳（国分寺台350号墳）	もちづか	南国分寺台５丁目９他	養老川下流右岸	台地・公園（現状保存）	円墳	円筒・朝顔・家形・馬形・盾形埴輪	昭和56年調査（国分寺台350号墳・惣社供養塚）、※公園内に保存	田中1982・2000
27	市原条里制遺跡（実信地区）	いちはらじょうりせい（さねのぶ）	市原字一ノ坪他	東京湾岸低地	低地･水田･高速道路	混入品	タテハケのみの円筒埴輪片	菊間の台地下にある低地 平成元・２年調査	小久貫他1999
28	菊間遺跡	きくま	菊間字姫宮北野前	村田川下流左岸	台地・宅地	円墳	報告５号周溝より円筒埴輪片（タテハケのみ）出土	昭和48年調査（菊間遺跡）	斎木他1974
29	菊間天神山古墳（菊間手永遺跡）	きくまてんじんやま	菊間字手永	村田川下流左岸	台地・畑地	円墳	報告第５号周溝より円筒埴輪片（タテハケのみ）出土	昭和47年調査（周溝部分－菊間手永貝塚）、昭和58年調査（周溝部分－菊間手永貝塚）、平成６年測量調査（市原市菊間古墳群）	近藤他1987
30	菊間手永台第２号墳（菊間手永遺跡）	きくまてながだい	菊間字手永	村田川下流左岸	台地・畑地	円墳	報告第74号周溝より円筒（３条４段・格子状ハケメ）・形象片出土	昭和58年調査（菊間手永貝塚）、平成８年調査（菊間手永遺跡）、削平	近藤他1987
31	八幡御墓堂遺跡	やわたみはかどう	八幡	東京湾岸低地	砂堆・宅地	混入品	人物埴輪頭部片（下総型）	平成12年調査　整理中	櫻井2003
32	潤井戸小谷１号墳	うるいどこやつ	潤井戸字小谷	村田川中流左岸	台地・山林	前方後円墳	円筒・朝顔形埴輪（下総型）	昭和63年調査、調査後消滅	高橋1992
33	潤井戸遺跡群 下宿遺跡	うるいど しもじゅく	潤井戸字下宿	村田川中流左岸	段丘・宅地	混入品	円筒埴輪片	小谷１号墳の北方 平成15年調査　整理中	木對2004b
34	草刈33号墳	くさかり	草刈字川焼	村田川中流右岸	段丘上・竹林	前方後円墳	円筒・形象埴輪	平成６年測量調査、現状保存	相京1995

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　古墳群の概要

古墳群はその中央部をほぼ南北に走る国道297号線により分断されている。今回の区画整理事業区域内には前述したように７基が、また国道を挟んで反対側には、現在、山倉八郎作古墳群として周知されている９基の古墳が存在する。

発掘の対象となった区画整理事業区域内の山倉古墳群は、第２図に示すように東西に延びる舌状台地上に台地の方向に沿って東西に連なり、群を形成している。東側から１号・２号・３号・４号・５号墳とし、１号墳の北方約100ｍに単独で位置するものを６号墳とした。さらに北側にある７号墳は西広貝塚発掘に伴って調査され、古代の方形周溝状遺構であることが明らかになっているが、この詳細は西広貝塚の報告にゆずりたい。

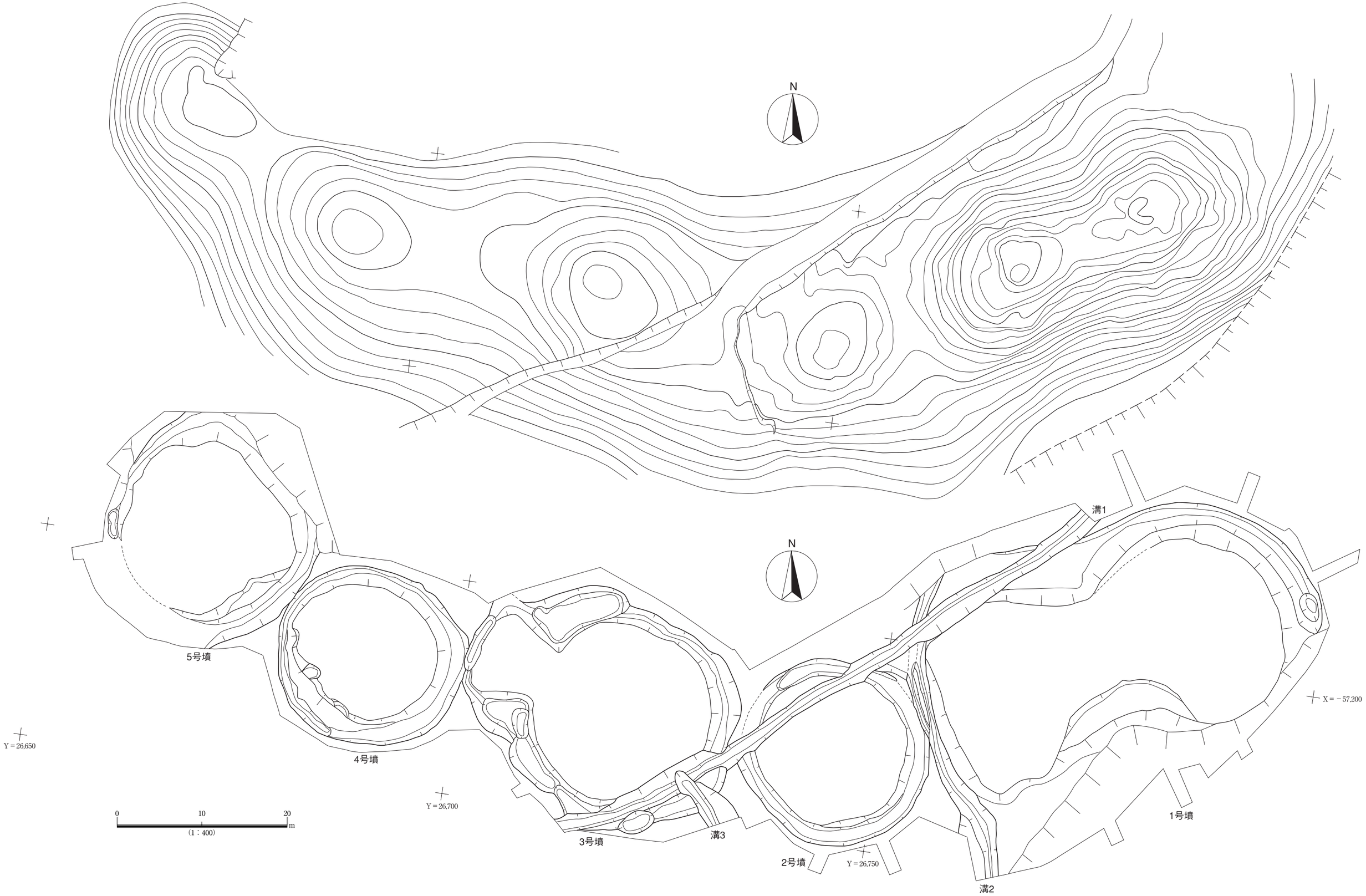
調査古墳の中では東端に位置する１号墳が最も規模が大きく、墳丘長は46.3ｍである。次いで３号墳が大きく、全長は33.6ｍを測る。１号・３号墳はともに前方後円形であるが、特に３号墳は帆立貝形古墳として把握される。２号・４号・５号墳はともに円墳で、大きさは周溝外径で23ｍ前後である。ただ、このうち５号墳は遺存不良のため、隅円方形に近い形である。また、単独で位置する６号墳は群中唯一の確実な方墳で、一辺20ｍほどの規模である。

古墳以外の遺構は表下段の通りである。

第２表　検出遺構一覧

遺構名(コード)	形状・規模	主軸方位	埋葬施設	時期	主な出土遺物	備考
山倉１号墳 (203)	前方後円墳形 全長：49.0m 墳丘長軸：46.3m 後円部直径：28.8m 後円部周溝幅：２～2.8m 前方部周溝幅：１～７m 残存盛土高：２m	N－68°－E	両袖単室構造の横穴式石室 開口部方位：S－13°－W	古墳後期末	円筒埴輪・形象埴輪 土師器・須恵器	コンター図と現場所見を優先し、周溝外形は墳丘相似とした。 遺存時の後円部高と前方部高はほぼ同じである。
山倉２号墳 (204)	円形 全長：22～22.5m 墳丘直径：18.5～19m 周溝幅：２～３m	—	遺存せず	古墳後期後半	土師器	
山倉３号墳 (205)	帆立貝形 全長：33.6m 直径：21.5～23m 突出部長：8.5m 後円部周溝幅：２～３m	E－31°－S	遺存せず	古墳後期前半	土師器	突出部両脇が一段深くなる。
山倉４号墳 (221)	円形 全長：20.8～22.3m 墳丘直径：18.7～19.6m 周溝幅：1.8～2.4m	—	遺存せず	古墳中期初頭	土師器	
山倉５号墳 (222)	円形～隅円方形 全長：25m 墳丘直径：1.5～３m 周溝幅：2.2m	N－36°－W	遺存せず	古墳前･中期？	土師器・須恵器(混入)	尾根先端に立地するため、盛土の流出が著しい。
山倉６号墳 (206)	方形 全長：東西軸19.6m 南北軸21.5m 周溝幅：３m前後 墳丘長：東西軸15.3m南北軸16.3m	N－10°－E	墳丘上1(A)･周溝内2(B･C) A：N－24°－E B：E－12°－S C：N－16°－E	古墳前期	土師器	墳形が若干南北に長い。

遺構名	形状・規模	主軸方位	位置	時期	出土遺物	備考
１号土坑	楕円形 長軸2.2m 短軸1.8m	—	４号墳内	縄紋	石皿･縄紋土器･土師器	
１号住居跡	方形 東西軸5.8m 南北軸6.1m	N－27°－W	６号墳下層	弥生終末期	弥生土器・砥石	
２号住居跡	方形 不明	—	６号墳下層	弥生終末期？	なし	南隅一角しか遺存しない。
１号土壙墓	長楕円形 長軸３m 短軸1.8m	N－32°－E	１号墳前方部上	中世	常滑甕（蔵骨器） 人骨・歯・銭貨１	被葬者は老年女性。
１号溝	断面逆台形 長さ72m 上端幅２～３m 下端幅0.4～１m	南西	１・２・３号墳上	中世以降		１号墳北西部を大きく撹乱する。 道路跡。西広貝塚へと延びる。
２号溝	長さ37.6m 上端幅1.2～３m 下端幅0.2～0.6m	南東	１号墳前方部前面	中世以降		１号溝とともに１号墳前方部を撹乱する。道路跡。
３号溝	長さ８m 上端幅２m 下端幅0.6m	南東	３号墳後円部	中世？		



第 3 図　山倉古墳群全体図

第２節　１号墳

１　概要

調査の経過　造成のための樹木伐採後、須田勉氏が発見し、埴輪を有する前方後円墳であることが分かった。調査は1973年12月、須田・田中新史・西田道世・小川静夫・中岡和浩の各氏によって測量を行い、翌1974年８月から1975年２月まで発掘を行った。

発掘調査は1974年８月一杯を市毛勲・多宇邦雄両氏が担当し、９月以降は米田耕之助と西田氏が交互に担当した。

発掘は２号墳のトレンチとの連結を考慮の上で、墳丘の推定中軸線の脇に幅1.5ｍのトレンチを設定し、それに直交する形で後円部・前方部にトレンチを入れることから始めた。その結果、周溝の確認と石室・埴輪の原位置の推定が可能となった。ここまでが市毛・多宇両氏による調査で、以後は、これらの全容を把握するために調査区を逐次拡張していった。

墳形は東北に後円部、西南に前方部を有する前方後円墳と確認された。内部主体は横穴式石室であったが、石材は庭石転用目的と思われる抜き取りで、一部の石材の他、大半が失われていた。

外表施設としては、円筒埴輪と形象埴輪が列をなすことが確認された。葺石は無かった。埴輪は、前者が北面、後者は南面しており、一見、役割分担がなされていたような景観を呈していた。

なお、トレンチ名は長軸に入れたトレンチを１トレンチ、それに直交する後円部横断トレンチを２、括れ部横断トレンチを３、前方部横断トレンチを４とした。また、前方部・後円部それぞれ長軸に対して45°をとるように、前方部南－５、前方部北－６、後円部南－11、後円部北－12の各トレンチを設定した。そして、各トレンチ間の区域を、それぞれ、05・06・07・08・09・10・11・12区とし、トレンチともどもアルファベット小文字の枝番号をふり、第10図の通り細分した。以後、遺物の取り上げは、おおむね、この区域設定に基づいて行い、のちに遺物に注記した。

位置　本墳の所在地は、以前の地番で言うと、市原市大坪字笠持1133番地で、東間部多古墳群報告書の遺跡番号203に相当する（田中・宮本1974）。

上述の通り広義の山倉古墳群は調査対象地域のみならず、国道297号線の対岸にも広がっている。この道路のルートが旧地形を利用したとすると、谷が本墳の東側に入り込んでいたと考えられるため、東岸の山倉八郎作古墳群とともに乗る突出部分と南北方向の谷が交差する地点に立地していると言える。ただ、山倉八郎作古墳群側の古墳分布も谷頭を巻くようになっているので、本墳と山倉八郎作古墳群の連続性を打ち消すほどの地形ではなかったと思われる。ここから北北東に100ｍで６号墳、西側に周溝を接して２号墳がある。調査地内では最東端かつ最高標高となっている。

２　検出状況と周溝

前方部南北両コーナーの崩壊が甚だしく、一見、双円状を呈しており、発掘前に前方部・後円部を確定することは困難であった。また、墳丘裾に周溝と思われる凹地は認められず、特に南東は急傾斜で低地に至っており、墳形の経年変化の大きさが窺われた。

墳丘上には埴輪片が散乱し、さらに前方部・後円部両墳頂には盗掘坑が掘り込まれ、人為的な作用によっても原形をかなり失っていると見受けられた。なお、この時点での墳形の数値は以下のように

捉えられた。全長48m、墳丘盛土の地表からの高さ３ｍ（標高46.9m）。

遺存状況　墳丘は後世の撹乱を少なからず受けている。

地形上・地理上の位置的関係から自然選択されたものと見られる、西広・大坪の低地から当国分寺台に登るための旧道三本が埋没しており、墳丘の原形は失われていた。国道297号線の存在からしても、当地がある意味での交通の要地であったことを窺わせる。この297号線は本古墳の直下を通っているため、道路開削の際の法づけで古墳そのものを壊している危惧があったが、後円部東側周溝は幸い完全に遺存していた。南側周溝は全く存在しなかったが、これも第２図から想起される国道の法による崩壊ではなく、経年変化による土の流下を考えるのが妥当と思われる。

埋没道は第３図に示すように後円部背後と墳丘南側を除いた古墳の２辺に走っている。北側に一段深く走る埋没道（溝１）は西広貝塚から続いている道路で（遺構番号「SN203」あるいは「SN201」に相当：市毛他1977)、現在は平道として機能を有している道路であるが、埋没道の堆積状況からみて、本来は堀割道路だったようである。

この道路が本墳前方部北側周溝から前方部北西隅を切って２号墳北側に走っているため、前方部隅の損傷は大きい。したがって、遺構として前方部北西隅の確実な位置は押さえられない。

古墳の西側にあり、谷に向かって走る埋没道（溝２）は前記埋没道よりも25cm浅く、交叉点付近ではやや急傾斜となっている。成立には時期差があるようだが道路として機能を果たしていた時期が並立していたことは確実である。これは堀割道路の支道であろう。ただ、この支道は前方部前縁中央付近から二股に分岐している。いずれも道路として使用されたことはその底面の堅さや状況から確実であるが、より西側の分岐道が堀割との交叉点付近の傾斜も緩やかで且つ浅い。また、これらの支道の延長のような浅い溝が、交叉点支道部とほぼ同じ高さで、堀割道路の対岸にみられる。同一の道であるとするならば東側分岐道交叉点での急傾斜とこの箇所での緩傾斜がいかにも不自然である。さらに、この部分は底面が軟質であり、役割に相違があったようである。また、支道は前方部南側コーナー付近でＳ字カーブを描いて低地方面におりる。もともとこの支道は２号墳と１号墳との間（谷）を通っているが、ここは１号墳の前溝であり、その溝の性格によって生じた低地を利用した自然道である。Ｓ字カーブ付近も、その溝の低地を利用した道路とみたい。

他に、第３図には表されていないが、墳丘南側に走っている埋没道が存在する。これは西側埋没道と交叉して東北方向に走り、297号線の法上端で消滅している。ただ、西側埋没道との交叉点付近は観察不十分で明確ではない。この南側埋没道は現表土下40～80cmに見られるが、道路上の堅固な面はその最下面に限られている。この道路は古墳の括れ部付近ではローム面上1.2mにある。後円部南側墳丘では墳丘と斜めに交叉し、断面をみると、墳丘を「し」字状に削平している。古墳にかなり損傷を与えているようである。

以上の３本の埋没道からは、いずれも時代・時期を明確に示す遺物が出土しておらず、築造時期と使用期間を判断し得ない。しかし、北側堀割道路は西広貝塚SN203遺構に続く道路と考えられることから、中世末～近世に掘削され現在まで使用されたものとみなして良い。西側埋没道・南側埋没道も同様の時期であろう。ただ、道路の堆積・埋没程度から考えて、廃道となったのは南側道路が早かったものと考えている。

これらの事実は国道297号線開削よりも南側埋没道路の成立が古いというばかりではなく、たと



Ⅰ：撹乱表土層
　Ⅰa 現代の表土
　Ⅰb 古墳築造直前の旧表土
Ⅱ：黒色土、Ⅰb下層
Ⅲ：地山ソフトローム層

1号墳覆土
1：黒色土、墳丘盛土
2：黒褐色土、墳丘盛土
3：茶褐色土、墳丘盛土
4：ローム粒主体土、墳丘盛土
5：ロームブロック主体土、墳丘盛土
6：4と1の混合層、墳丘盛土
7：1と3の混合層、墳丘盛土
8：黄白色砂質土主体層
9：白黄色砂質土主体層
10：暗紫色砂質土主体層
11：ロームブロックを突き固めた層
12：粘土主体層
13：暗褐色土を突き固めた層

A：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
B：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層
C：茶褐色土、周溝覆土、自然堆積層
D：ローム主体土、周溝覆土、周溝堀込み時の攪拌層
E：ローム主体土、周溝覆土、流入層
a：黒色土、流入土
b：茶褐色土、流入土
c：ローム粒主体土、流入土

第４図　山倉１号墳墳丘測量図

え、古墳の南面が崩壊していたとしても、それは中世以前ということを示している。

古墳に損壊を加えているのは、以上の埋没道のみではなく、盗掘坑によるものもある。前方部・後円部ともに盗掘坑があり、特に後円部の盗掘坑は石室石材の抜取りを主としたもので、石室の破壊は徹底的なものであった。また、２号溝Ｓ字カーブの東側にみられる等高線の乱れは杉の樹根を取り去った際にローム面まで削った発掘時のものである（第３・４図）。

周溝　現存の周溝は後円部東端、墳丘主軸線上よりも僅かに南側寄りの部分から反時計回りに北側溝・前方部前溝しかなく、後円部南側・前方部南側には確認できない。また、隅角部付近は痕跡程度しか現存しない（第５図）。

後円部東側は周辺の溝よりも一段深く、外側掘削面から計測して深さ0.95m、幅員3.3mである。この溝の主軸線上はやや狭く浅い（深さ0.6m、幅員2.6m）。後円部北東部は再び深くなり、深さ0.8m、幅員3.0mを測る。この深い部分は主軸線上より14m程続き、掘削上の一単位のような景観を呈しつつ、0.4m程狭まり、後円部北側溝に続く。後円部北側溝は緩い傾斜を示しながら括れ部まで達する。この間の長さは17m、深さ0.7m、幅3.1mを測る。これら後円部東～北側溝は幅員2.8m前後で巡り、断面Ｕ字形、外堤側の法の強さでまとまりを見せている。

前方部北側溝は前記した堀割道路によって斜めに切断されているが、幅員7.0m、深さ1.4mを確認することができる。本墳において最も深いが、溝の断面形は他の部分の溝と違い、やや平坦で逆台形に近い形を呈しており、視覚的にも後円部東～北側溝との差はきわめて明瞭である。また、急に広くなってはいるが、墳丘括れ部に呼応して外堤も幾分括れを見せているように看取される。遺存が悪く確定はできないが、一応、墳丘相似形周溝と言えよう。

前方部北西付近の周溝は堀割道路による破壊が著しく、明瞭ではない。しかし、この道路によって切られてはいるが、隅角部付近に三角形状の低い地脹れが見られ、更に前溝の延長のような、深さ0.15m、幅員1.1mの浅い溝が存在する。

前項で観察したように、この浅い溝は明瞭な道路機能を有しないようである。だが、コーナーの曲がり方が前方部の形状を無視したかたちであることから、築造当初の周溝と認定するのには躊躇を覚える。現場の所見は、異例であっても周溝と見なすということであるが、前方後円墳が築造企画に基づいて構築される存在であることを前提にすると、無理に当てはめる必要はないと思われる。堀割道路や西側道路によってこの部分の周溝が破壊され、元の周溝は変形・消滅したと考えたい。

前方部西側溝は道路によって損傷を受けているが、もともと２号墳周溝と一部重複していたものと見られ、この箇所の周溝は２号墳周溝の約半分の幅しかない。おそらく、２号墳外堤を取り払いつつも２号墳周溝の全的破壊を避ける意図があったものであろう。この溝は、深さ0.3mで２号墳周溝よりも浅く、幅員は１ｍである。

なお、前記したように、ここでは道路跡が分岐している。両方とも道路機能を有しているが、東側の道路が墳丘主軸線上で僅かに墳裾を切っているようである。その上、僅かではあるが底面が柔らかいのは西側の方で、堀割道路と合流する部分の傾斜もやや緩やかである。したがって、分岐の西側の道路が旧周溝と推定できる。

前方部西側溝南半は、前方部西側溝中央との比高差１ｍ、幅は約1.5mを測る。低地に向って下るうえ、埋没道による損壊を受け、明瞭ではない。しかし、前記したようにＳ字カーブを描いてお

り、前方部北側と呼応した形状を示す。このＳ字カーブも周溝そのものではなく変形を経た周溝の痕跡と考えたい。

前方部と後円部の南側溝はほとんど遺存していない。明確な掘形が元々存在しないのではなく、両者とも傾斜する地形のために原形を保てなかった結果と思われる。谷側の上端がまったく残っていないため確定できないが、北側と同規模の周溝であったと想定したい。南側括れ部にあたる部分にはやはり屈曲が認められるので対称形を意識したプランだったと考えるのが自然である。

これらを斟酌すれば、括れのある墳丘が作られたことで、土の流出がその形で促され、本来、周溝が設定されていた部分ともども、流下したというプロセスが復元できる。馬の背状の地形と1400年間という時間による影響は決して無視できないだろう。墳丘築造時にはもちろん伐木され、拓かれたであろうから、葺石の無い墳丘は意外に早く土の流失が始まったと思われる。墳丘南側の周溝が遺存しないことと表裏して、テラス部に人物埴輪列の良好な遺存があると見るのが妥当である。

さて、以上、各部位ごとに述べてきたが、特徴をまとめると、周溝北側の遺存状況から墳丘相似形を呈する周溝であったと推定できる。だが、前方部北西～南西溝・墳丘南側が著しく変形を受けており、全形は確定できない。前方部西側溝の南北周溝隅角部は緩い曲線状を呈しているが、本来の位置ではなく、埋没道によって変形を受けたものと考えられる。また、前方部西溝と２号墳周溝の切り合い方から、１号墳築造に際し２号墳の周溝に重なるかたちが意図的に採られたことが分かる。

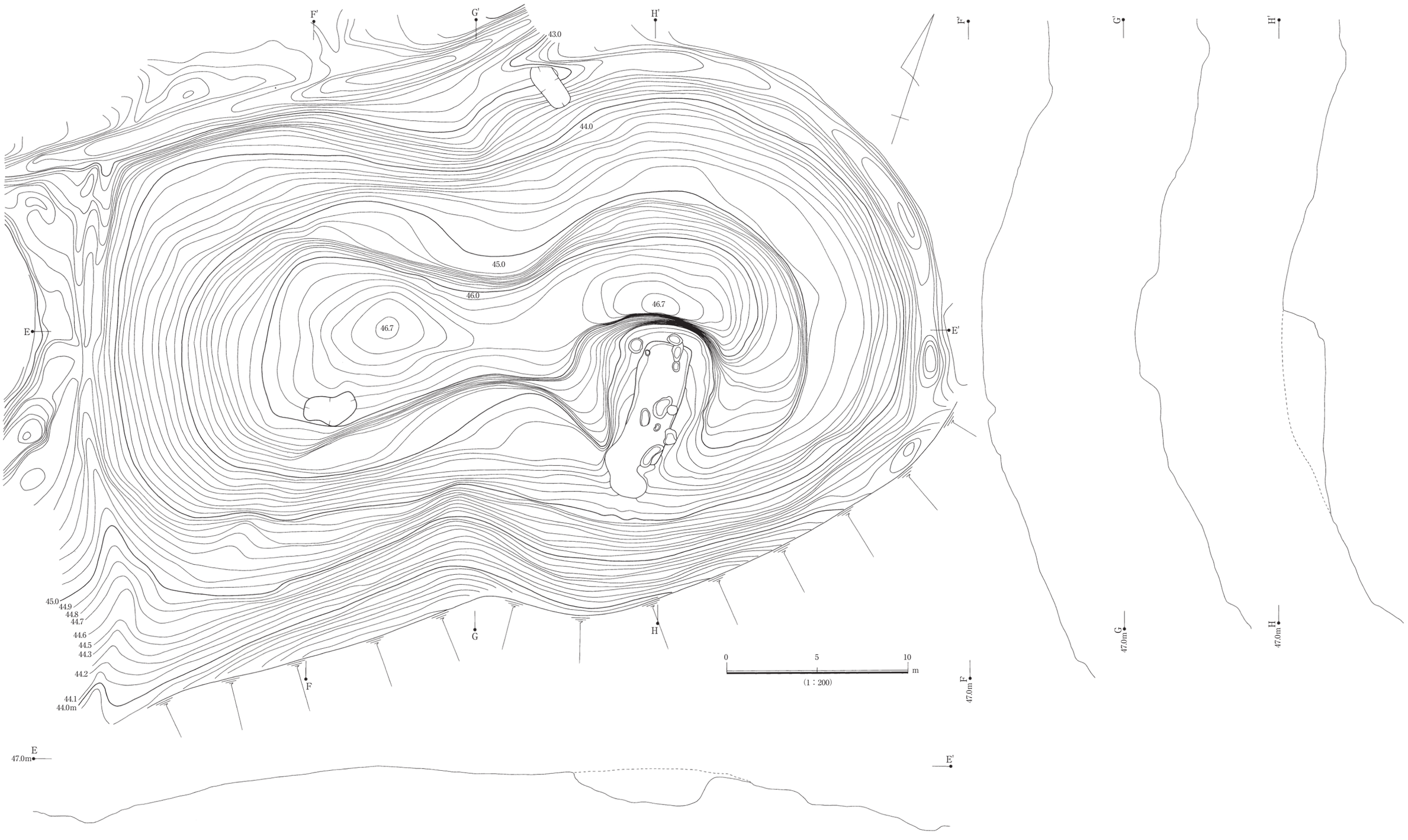
３　古墳の形状

封土は旧地表面である黒色土の上に盛られているが、この旧表土は決して水平ではない。標高は後円部主軸末端で44.8m、後円部北側末端45.1m、前方部北側末端45.0m、前方部主軸末端45.0m、前方部南側末端44.6m、後円部南側末端44.0mである。これらの数値は旧表土が北側一帯から後円部南側末端に向かって傾斜していたことを示す。そして、後世に国道297号線として利用される小谷があったことも示している。

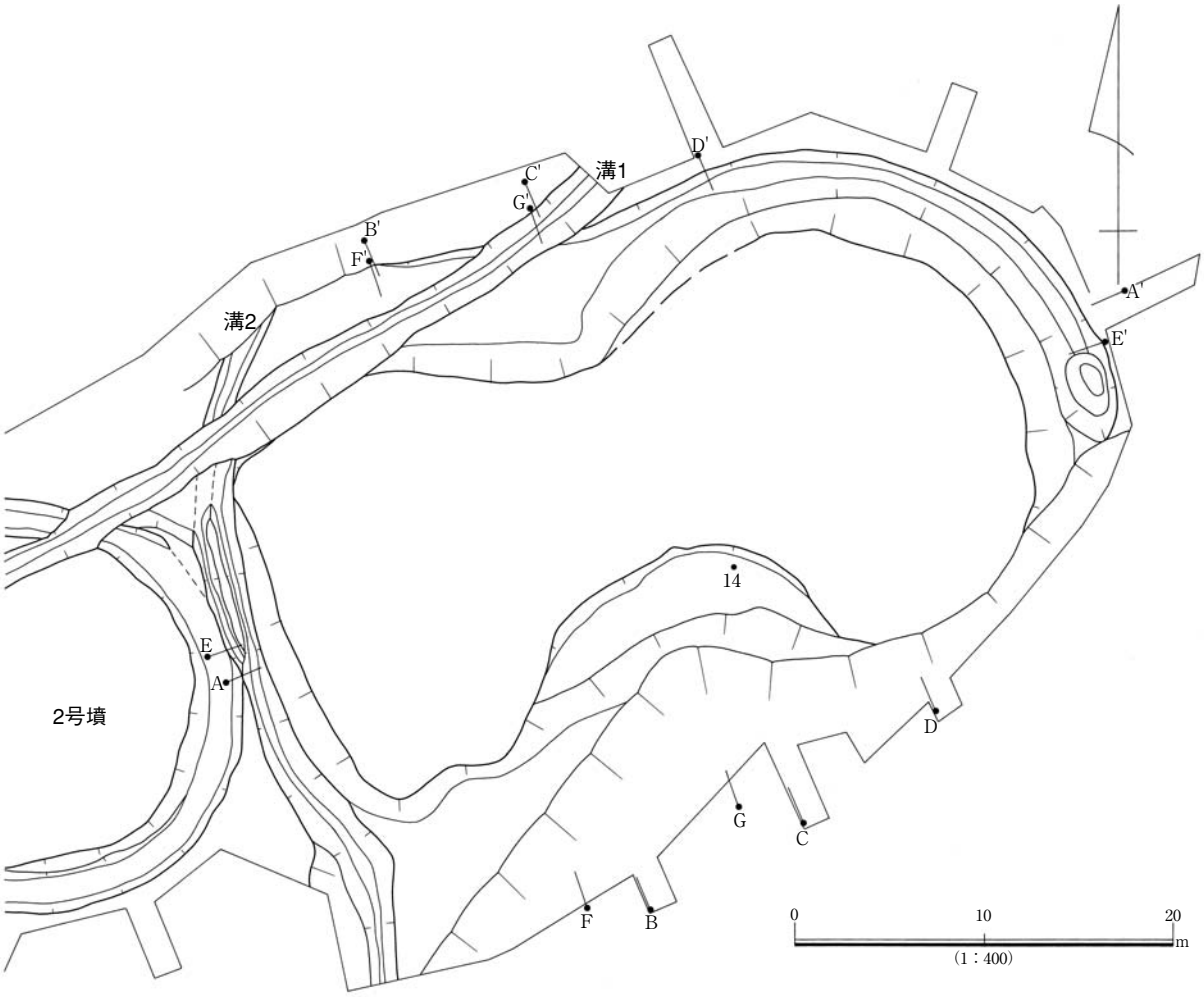
まず、第１トレンチ北側断面図から観察していく（第４図)。後円部周溝底墳裾（Ｂ１とする）から高さ0.6m・水平距離0.8mの周溝法面がある。その上に５m弱の旧表土を利用したテラスがある。旧表土面はやや荒れ気味であるが、この荒れは断面図の位置に限られテラス自体は平坦である。この段のＢ１から4.4mに埴輪列がある。Ｂ１から5.6～5.8mで封土の盛土が立ち上がる（Ｂ２とする)。

盛土は大きく分けて３段階になる。第１段階はＢ２から後円部中央に向かって傾斜する黒色土を主体とした土層である。これを内傾斜盛土と呼ぶ。この内傾斜盛土はＢ１から22.2mを起点とする所（Ｃ２とする）にも見られる。高さはそれぞれ1.3mである。Ｂ２から盛った方が先で、第２トレンチの土層と対応すると、右廻りに土を盛っていったことが明らかである。Ｃ２からの立ち上がり土層の法面は約45°の傾斜を有し、前方部寄りは整形したような不自然な盛土をしており、南側断面ではより明瞭であった。おそらく、一度盛土した後でなんらかの理由があって整形したものであろう。

第２段階は後円部内傾斜盛土によって生じた凹地を埋めるような形で積まれている。この第２段階の盛土は後述の石室構築とほぼ併行して行われているものである。また、この第２段階盛土の最上面が下段墳丘の平坦な最上面でもある。第３段階はその上に盛られ古墳の最終形状を整えているのだが、これは前方部と同時併行的に盛土されている。



第 5 図　山倉 1 号墳墳丘測量図（表土除去後）



第６図　１号墳平面図（完掘状況）

さて、前方部の盛土であるが、Ｃ２から4.9～6.2ｍに深さ0.1ｍの浅く細い溝がみられ、その中に茶褐色土が充填されている（6.2ｍの所をＣ１とする）。そのあとにＣ２から立ち上がる法を埋めるような傾斜で土を盛っている。その後は水平積を行っており、前方部先端付近の盛土は非常に締まりがよく堅緻である。Ｂ１より40.9ｍの所（Ｄ２とする）から44.9ｍ（Ｄ１とする）にかけて旧表土の黒色土面が非常に乱れ、そこに褐色土が充満していた。前方部両稜線は黒色土面も乱れてはいたがより平坦であった。古墳そのものが消滅してしまっており、確定するのは難しいが、両側埋没道は一部墳丘を切断しており、この褐色の充満土はその埋没道にかかわるものと考えたい。発掘終了後もこれを封土と誤認していたが、後円部の１段目の段と呼応した前方部の段と考え直してみたい。

墳丘の横断面は主軸線の土盛法とは若干異なる。後円部北側の土盛りは主軸線上と同じく段を経て、高さ1.3ｍの内傾斜盛土がある。しかし、南側の盛土は旧表土上約１ｍしかない。盛土高は僅かに0.3ｍの違いではあるが、旧表土の落差が1.1ｍもあることを考えれば、この１ｍの盛土は「地ならし」の意義しかない。石室床面下の土層は旧表土であり、石室右側壁付近は、この地ならしの上に内傾斜盛土がある。また、墓道の向かって左側も同じように地ならし土の上に内傾斜土盛りを行っている。つまり、内傾斜盛土以前に後円部周縁に応じる形で地ならし的な整地を行っているのである。

以上の事実は、内傾斜盛土が南側を開口部とする馬蹄形を呈していたことを意味している。石室は

この馬蹄形内の窪地に構築されるのである。

また、前方部の盛土も後円部と同じように、最初は地ならし的な土盛りが行われている。その最終段階は明白でないが、おそらく、厚さ30㎝程のローム土壌の層であったろう。このロームは後円部第一次封土の裾ないし第一次封土下にまで達していることから考えて、後円部の「地ならし的盛土」と同時に行われたようである。このロームの封土は後の段階で形象埴輪が樹立される土層である。なお、南括れ部に、このローム土壌の封土層を切り込んで完形の土師器甕が埋置してあるのを検出している（図版35）。この上段墳丘築造段階に際して儀礼的活動が行われた跡だと見られる。

前方部封土はその後、後円部の第一次封土完成後に水平積を行うが、墳丘南側から北側に向かって内傾斜気味に行われている。

封土の下位には黒色土、上位にはロームが多い。このため旧表土の黒色土と盛土のそれとの境が不明瞭で、境界線を引くことは困難な場合が多かった。第４図の北側旧表土黒色土の不自然な傾斜はそれも一因と思われる。本来はやはり自然な傾斜をなしていたと考えたい。また、ロームは前方部前縁付近に多く、後円部墳頂付近も多い。これらの点は築造工程を考える上で示唆的である。

盛土の高さは旧表土面から墳丘表土面を除いた面までを計測すると、後円部最高２ｍ、前方部最高1.9ｍである。当然だが、この上にさらに何層かの封土があったはずである。

続いて、遺物の出土状態・位置を補足しておこう。

下段墳丘上面（中段テラス）に埴輪が樹立していたことは前記したが、その段築の上の墳丘からも大量の埴輪片が出土している。器財埴輪が主であり、大半が南側墳丘斜面から出土している。一部、墳丘尾根をはさんで北側からも出土しており、これらは墳頂部に樹立されていた埴輪が散逸したものと思われる。

封土中では、後円部ほぼ中心に、内傾斜盛土の下部から黒色土を穿って須恵器の杯蓋が出土している。包含土壌はローム粒を混じた黒色土でサラサラした締まりのないものであった。他に、前記したとおり、南側墳丘括れ部地ならし土中からも土師器の甕が出土している。

さて、以上の所見から、本墳墳丘の規模を記しておきたい。数値は平面図（１/100）・断面図（１/20）・10㎝等高線図（１/100）を使用して算出した。なお、発掘の際に掘り過ぎたと思われる箇所は適宜他の図面と対応させ補足した。計測点は溝底墳裾である。

主軸方位	Ｎ－68°－Ｅ
墳丘長	46.3m
後円部直径	28.8m
前方部最大幅	33.0m（推定）
括れ部幅	21.6m
前方部長（Ｃ２～Ｄ１）	23.4m
全長（周溝外側上端間）	49.0m

このような形状の下段墳丘に、黒色土・ローム土を５～３ｍ幅のテラスとして残すかたちで上段墳丘が乗る。断面図を見る限りにおいては、このテラスを含めて二段しかない。

4　埋葬施設

調査概要　埋葬施設の検出と調査は1974年８月、市毛氏主体の発掘時、２トレンチに白色粘土が一部露出していたことに始まる。同年９月、米田と西田氏が市毛氏らの後を受け、範囲確認を開始した。

その結果、石室は後円部南側中央に位置していることが確実となった。天井石の後世抜取を考慮に入れ、石室輪郭に応じた形で石室西側に縦断トレンチを設定し、石室内充満土の除去を進めた。その途中で、石室石材が完全に抜取られている見通しが得られた。そこで、抜取り後の石室床面を精査すれば本石室の旧状を推し得ることは承知しながらも、断面観察を優先して、敢えて床面を掘り込み、地山層に達しようと目論んだ。だが、想定した石室主軸線がやや西側よりだったため、発掘の遂行はそのあまりのトレンチの幅狭さ（裏込め粘土は掘削せず、やや残し気味に掘削したためもあって更に狭くなった）に非常に困難となった。

このため、地山層（旧表土黒色土層）に達するという当初の目的を中途で、あるいは全く達せずして放棄せざるを得なくなったので、縦断面図を取るとすぐ、石室の横断トレンチと、東側への拡張を併行させ発掘し始めた。横断トレンチでは床面を考慮せず、一気にローム層にまで到達させた。そして、東側トレンチ拡張部は床面と粘土の壁に留意しつつ掘り下げていった。

その結果、石材抜取りの盗掘坑は横断トレンチ内の石室東壁付近を中心としていた事が明白となり、更に横断トレンチ内床面下から直刀片２片を検出した。

床面の精査が終って得られた原位置の石室材は、玄門付近の根石と考え得る小型の石材５個であった。検出状況を実測し終えた後、横断トレンチ内の直刀片２片、第１トレンチ内の須恵器杯蓋の出土に改めて注目し、この床面の下に何等かの遺物が埋置されているのではないかとの疑問を持った。そして、横断トレンチ西側で確認されていた「掘方」の全体形状の確認を行う目的を持って、裏込め粘土とロームの床を剥ぎとり、「掘方」の最下層に達した。結果、その黒色土を穿ったピットの中に直刀・鉄鏃・平瓶・杯・棗玉などを検出した。また、石室掘方もやはり、墓道の西側がわずかに掘られているのみで、他周は緩い傾斜の内傾斜盛土が馬蹄形状に巡っていたに過ぎないことを確認できた。

構築過程を示唆する土層の状態を確認し、床面下から副葬品の一部を検出できたのは成果と言えるが、当初、床面に無頓着であったことが、石室の厳密な復元の支障となったことは否めない。

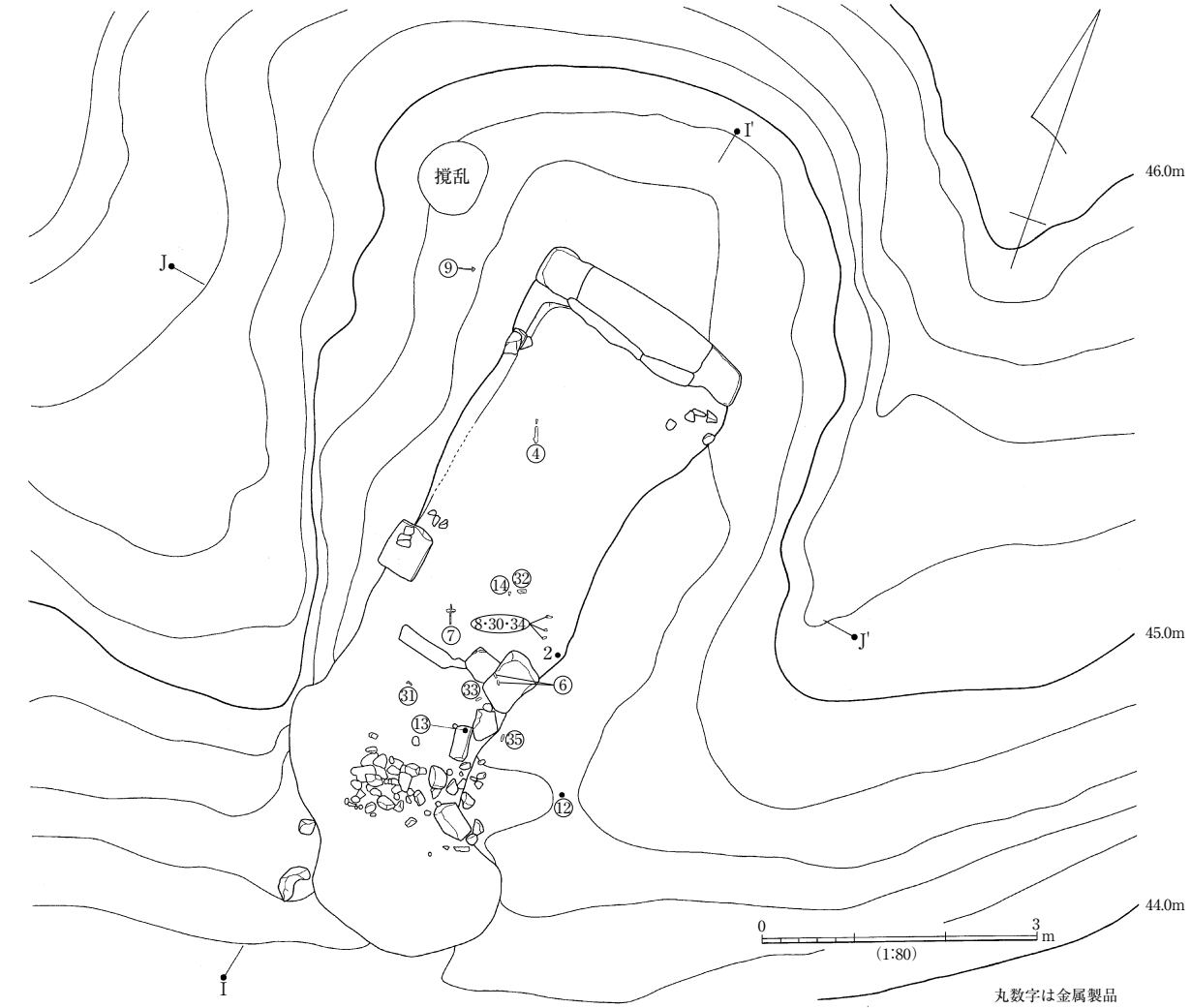
石室の位置と構造　埋葬施設は前記の横穴式石室以外に検出できなかった。おそらく、他には埋設あるいは構築されていなかったと思われる。上段墳丘裾に埋置された常総型甕にもその可能性は考えられるが、石室構築前に埋置された点を考慮すると、蓋然性はあまりない。なお、時期は大きく降るが、前方部墳丘を掘り込んで１号土壙墓（中世蔵骨器）が１基検出されている。

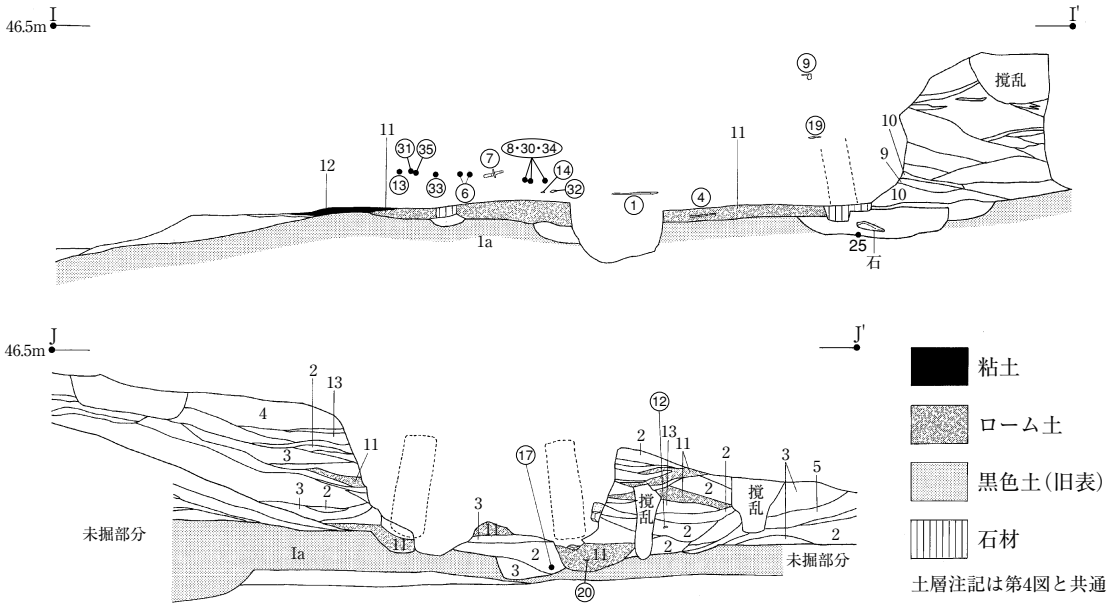
石室は後円部中央にあって、玄門を南西に開口させており、主軸はＳ－13°－Ｗである（第７図）。

立体的な位置を見ると、屍床にあたる床面が、旧表土（黒色土）を掘りくぼめ、ロームを搗き固めることで構築されており、その上に石室が構築されている。段階的には、第１次封土築成後である。

石室石材の残存状況は第７図・巻頭図版５・図版26・27に示すとおりで著しく悪い。遺存する石材は、穿孔性二枚貝の生痕を持つ凝灰質砂岩の割石で、硬質であった(註)。残存している石室材とその抜取痕の配置からは両袖単室構造の横穴式石室と推定できる。

石室の東壁側にあって主軸と直交するように並んでいる石材がある。この石材は床面より５～10cm程しか出ておらず、20～25cmが床中に埋没していた。袖石にあたる位置ではあるが、框石と同列の配





第７図　１号墳埋葬施設平面図・土層断面図

置をされ、その役割をも一部負担した根石である可能性も考えられる。羨道部寄りにも２個の石が袖部と同じ高さで据えられている。わずかだが内側に移動したような状態を示している。しかし、粘土の充填具合やローム層上の土壌にも動きがみられず、原位置なのかもしれない。

西壁にあたる位置の袖部より一個玄室寄りに45×56×20cmの加工された石が横手積に据えてある。床面から10cmほど上に出ており、側壁の根石と考えたい。この石材は広口に約15cmの裏込め粘土をかぶっている。あるいは、二番石はその分薄かったのではないだろうか。

墓道先端寄りに割石が密集していたが、これは石材抜取の際に生じた礫を抜取者が一括して廃棄したものであろう。その内、１個は截断面を有している。前記の残存石材のうち、羨道部寄りのものと同じ形態を呈しており、その一類であろう。

その他に石室石材は遺存しない。しかし、抜取痕と思われるものをいくつか検出している。

奥壁にあたる位置には床面より約10cm低い、２m55cm×50cmの長方形の平坦面がある。この面は、二段になっており、中央に更に６cm深い１m60cm×50cmの平坦面がある。また、この平坦面と床面との間には深さ30cm弱の細い溝が見られ、その充満土からみて抜取の際に掘削したものであることが明らかである。位置からみて、ここが奥壁であり、奥壁材もこの１m60cm×50cmの平坦面に近い数値をとっていたものと見られる。

東壁にあたる位置は抜取時の撹乱が激しく、横断トレンチ北側は三段の抜取痕になっている。割石が散乱しているが、ほとんどの割石に動きがみられる。ただ、裏込め寄りに原位置を保っていると思われる栗石が若干残存している。

横断トレンチ南側にも二方を穿った狭く深い溝がある。幅50cm位の根石があったものだと考えられる。調査時に縦断トレンチで破壊した西壁は詳細不明である。ただ、裏込め粘土沿いに奥壁寄りで幅40cm弱、玄門寄りで幅20cm強の破壊を免れた平坦面が確認できた。西壁に残存していた唯一の石材よりも約10cm内側に入っており、その石材よりも幾分薄めの壁材と考えられる。

框石の存する位置にあたる所に主軸と直交する細い溝があった。断面形や充満土の性格等より考えて、この溝も抜取の際に穿たれたものであろう。

これらを基にして石室の復元数値を示せば以下のようになる（第８図）。

主軸方位	S－13°－W
石室長（奥壁～框石）	3.7m弱
石室幅	1.2～1.35m
奥壁～墓道先端	6.0m

裏込め　裏込めは、栗石を使用しておらず、白黄色粘土とローム、黒色土によっている。

石室の掘方は西壁に深さ0.5m強、長さ4.5m弱にわたって見られるのみであり、他は築成時の内傾斜盛土によって生じた窪地が利用されている。そのため、石室の構築の際には、裏込め粘土がその窪地を埋めていくような形で石室材を補強していく工法を採用している。

これらを掲き固めた順に記すと以下のようになる。

まず、白黄色粘土を石室材に密着させつつ、石室側に厚く、離れるに従い除々に厚さを減じさせて

いく。この粘土の長さは奥壁石材控え部から2.0～2.2m、側壁石材控え部から1.0～1.6m程である。つぎに、黒色土をこの白黄色粘土の末端近くから外に厚く、石室石材に近くなるに従い薄く積む。ただ、この場合，黒色土は下層の白黄色粘土の中程までしか延びていない。そのため、白黄色粘土と黒色土のなす角の断面観は黒色土末端（石室から離れた方）が若干高くなった緩いＶ字形である。

２段目の白黄色粘土はその緩いＶ字形がほぼ水平になるように積み上げられる。これを交互に繰り返す。したがって、ロームの床面から1.1m程の石材に接する面すべてが白黄色粘土ということになる。これら粘土は天井石に近くなるにしたがい薄くなる傾向にあり、後にはロームに転換される。おそらく上部は強力な粘性を必要としなかったものであろう。

掘方　本墳の石室には厳密な意味での掘方はない。というのも、石室が構築されるのは封土築成中の一時期であり、その時点で石室となる地は、あらかじめ凹地として残されていたからである。このため、いわゆる掘方は、石室壁側に長さ4.5m弱、深さ0.5m強に存在するのみで、掘方と言うよりは、むしろ整地と言った方が正確かもしれない。この予め残された凹地は南側に開口部を持つ馬蹄形を呈しており、盛土はほとんど黒色土である。

床面と床面下　床面は平坦で、特別に屍床部として設定されたような面はない。この床面はロームを搗き固めることで造作されたように見受けられる。また、石材構築以前に敷設されているために石室の平面形とは一致していないようである。それは、石室の主軸線ともわずかに異なっている。

床面はその造作をする前に、奥壁側で深さ30㎝、墓道付近で自然傾斜のまま消滅している長さ4.7～5.0mの土坑を穿っている。この土坑は石室に即して記すならば、奥壁の後方1.3mの所から玄門付近にまで至っている。床面造作はこの土坑と墓道へと広がっている。

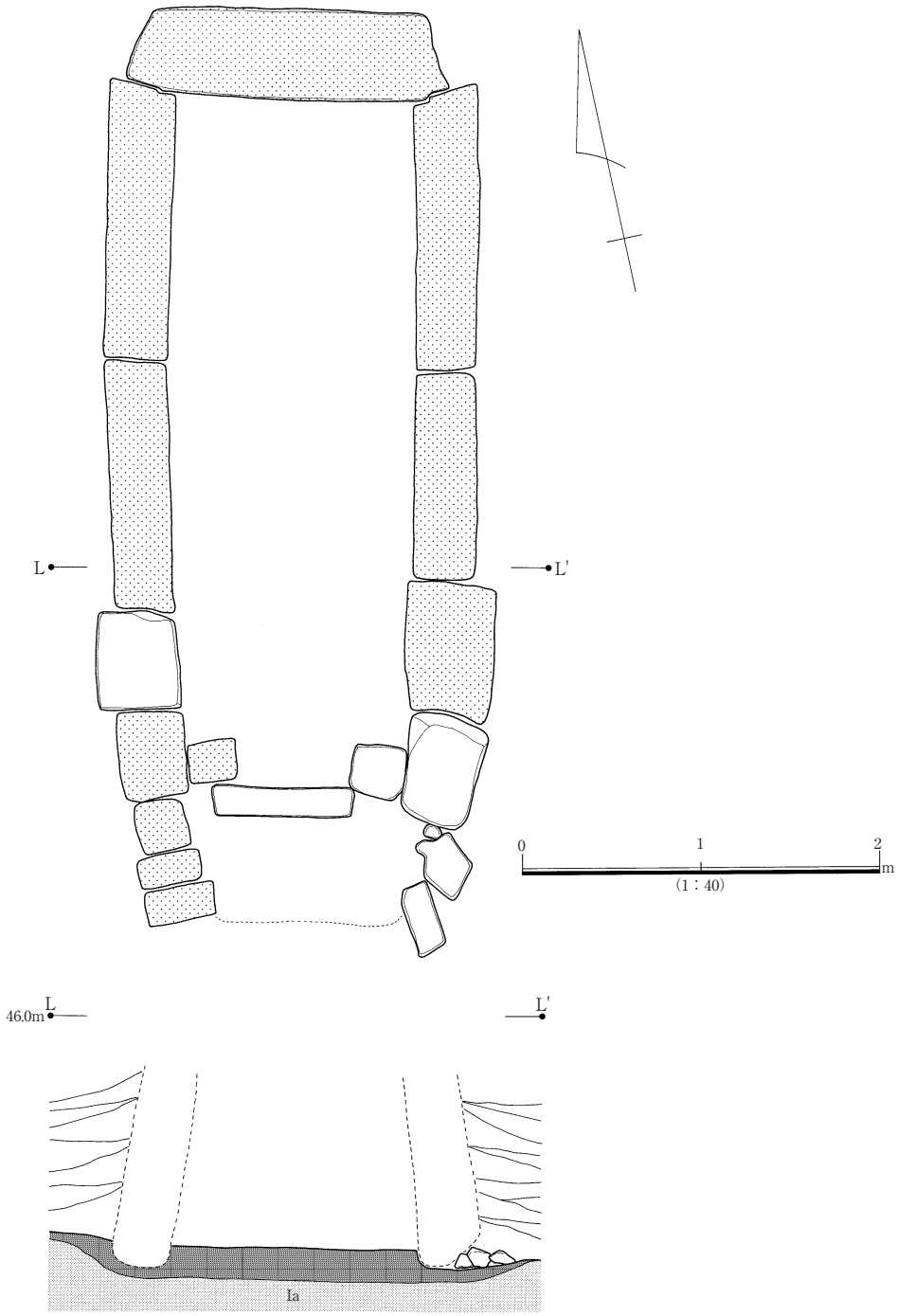
土坑中にはロームを主体とし部分的に暗褐色土・黒色土の混じる土壌が、版築状に非常に堅く搗き固められて充填されている。墓道側も基本的にはこの土坑中の造作と同じであるが、旧表土の地ならしされた面上に厚さ５㎝内外の薄いロームが貼りつけてあるに過ぎない。

これらの版築状の土を剥ぎ取ると、その下面には不規則な形をした穴が10～13基検出でき（第９図)、その内の９基に直刀・鉄鏃・須恵器杯・平瓶・土師器壺・琥珀製棗玉が出土した。土坑中のほとんどすべてのピットに遺物が検出されたと言って良いほどである。いずれも床面と同じローム土壌に上面を覆われた埋土は、ローム粒をわずかに含んでいるものであった。ただ石室内のピットの埋土は、その上面が非常に良く締り、凹み気味なのに対し、石室外床面下にあたるピットの埋土は柔らかく、その上面は上に向かって楯状になるものが多い。中にはその上面に空間を持つものもあった。有機物の容器に収められており、埋没中にそれらが腐朽した等、空間の生じる原因があったのだろう。

検出遺物のうち、鉄製品は総て半折品で完形のものはなく、石室内覆土中より出土したものと接合できるものはなかった。対して、須恵器・土師器は欠損のない完形品のみであった。須恵器４・７・10と土師器壺15は、石室外の位置において床面下レベルで検出されている。

これらの事実は、床面の造作をする以前に儀礼を行った可能性を示している。ただ、その場合、石室構築以前ということになるので、厳密には葬送に関するものとは言い切れないことになる。また、鉄製品と土器類のありように違いがあることは、その儀礼に一定の秩序があったことを窺わせる。しかし、これら耳環・鉄製品・琥珀製棗玉はまず副葬品として存在していたと考えるのが自然である。

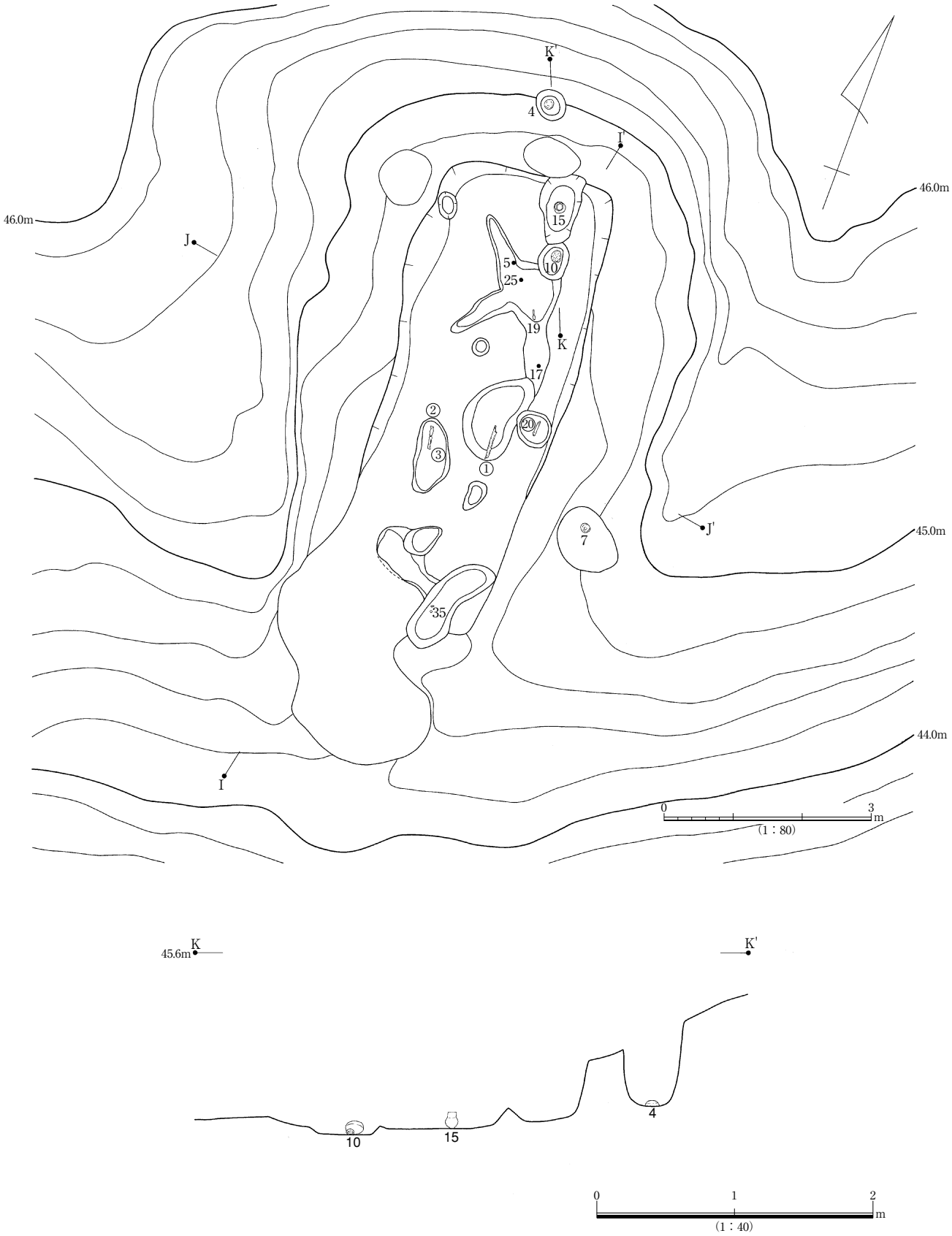
まず、この石室は石材が抜き取られるなど、大きく破壊されているが、その作業の際に、石室内部



第 8 図　石室平面復元図

が無事であったとは考えにくい。もし、その時点で天井石が崩落しておらず、石室開口部から内部を確認できたとしたなら（石材を視認したから抜き取りを計画したに違いないが)、抜き取り作業の手順として、石室内から崩すことはないだろう。当然、墳丘を上から掘り抜いて天井外面を露出させ、上部の石材から除去していくはずである。

そして、室内が露天掘りされた時点で側壁の石材を抜こうとすると、やはり、石室内部を作業面としていたと推測できる。このようなときに、重量物を扱っているわけであるから、作業自体によって踏み固められ、その時点の床面上で崩落土が硬化することも考えられるのではないだろうか。抜き取



第 9 図　1 号墳埋葬施設裏込下遺物出土状況図

り作業に伴って石室内部に堆積した土が床面と同じような土質であったなら、一見、本来の整地土層と連続するように見えてしまうこともあるだろう。

つまり、仮に石室内床面下に埋置された可能性があるとした金属製品と玉は、石材抜き取りに先立って埋められていたかもしれないが、その上に堆積していたローム層は元々のものではないことが推測できるのである。したがって、出土状況が示唆するのは、石室構築前の儀礼活動より、石材抜き取りに先立つ撹乱だと思われる。抜き取りに先立つというのは、墓として再利用する追葬を含んでのことである。そして、可能性としてより低くはあるが、石室の床面にも何らかの被覆物があり、その剝ぎ取り等によって埋葬状態が著しく乱された上に、天井石・側壁の抜き取りが重ねて行われた痕跡と見ることもできよう。つまり、盗掘者が床面を掘り荒らした上で、天井・側壁に手をつけたとも考えられるのである。いずれにしろ、石室内の出土遺物は元々の副葬品で、激しく撹乱されたものだととらえておきたい。

石室土坑外の範囲にも４ヵ所の穴があるが、そのうち須恵器（第84図７）が検出された穴は石室構築後に掘削された可能性もある。西側の大きな穴は確実に遺構と言えるものではなく、そうであるにしても内傾斜盛土後に穿たれたものである。北側の３基は内傾斜盛土以前の段階に掘られた穴であることが、断面の観察で推測できた。したがって墳丘築成直前のものと言える。

また、北側の穴に須恵器杯蓋（第84図４）が検出されている。これは位置が後円部のほぼ中心に当たり、墳丘築造に関係する儀礼の行われたことが示唆される。また、南側からは平瓶（第84図10）、南北の中間地点若干南寄りの穴からは土師器壺（第84図15）が出土している。両者は石室外にあり、ほぼ石室の中軸を通る位置に当たることから、やはり石室築造に先立つ儀礼的な埋置と思われる。

石室構築工程　上記の通り、第１次封土となる内傾斜盛土は全周するものではなく、将来に墓道として利用される部分を、開口部として残した馬蹄状窪地を形成する。石室はこの馬蹄状窪地に以下A～C の段階を踏んで構築されたと考えられる。

Ａ１：馬蹄状窪地は意識して形成されたと考えられる。この窪地が形成された時点。
Ａ２：石室予定地内に侵入した不要な盛土を削去する。いわゆる「掘方」掘削に相当するが、削去部は余分だった墓道の西側に限定される。
Ｂ１：土器類の埋置を伴う儀礼を行う。
Ｂ２：ロームを主体とした土壌で床を覆う。
Ｃ　：裏込めと石室構築とを併行し、石室を完成させる。

墳丘築造工程　旧地表面は北側から後円部南側の方向に傾斜しているが、元来の地形に特別な盛り上がりは見られず、墳丘は大半が盛土によって築成される。ただ、墳丘北側、殊に前方部の北側下段墳丘は地山整形を施されている。

墳丘に投入された盛土土量と周溝掘削土量とは視覚的に大きな差がある。この事実と、周辺に旧表土層と考え得る黒色土層がみられないことを考えあわせると、盛土には周辺土壌の利用も十分になされたと見ることも可能であろう。ただ、上記の通り、地形上、土の流出が台地平坦面などと比べ大きいことが考えられるので、墳丘外におけるこの黒色土層の不在は自然の作用によるとも考えられる。

また、同様に、構築土を集める作業の痕跡自体が消されている場合もあるだろう。

墳丘築造に際して整地された面積については面的な調査も行っていないため明らかではないものの、周辺土壌の利用を仮定すると、封土下の黒色土層は本来より嵩上げされて、築造完了時点で周辺よりも一段高い一種の段状を呈していたと推測される。

さて、これまでの推定をまとめると築造工程は以下のように考えることができる。

Ⅰａ　後円部の中心になる所を中心に径３ｍ深さ10㎝程の楕円形に黒色土面を削る。
Ⅰｂ　上記の浅い窪地に杯蓋を埋置する。
Ⅱａ　Ⅰａ・Ⅰｂとの先後は不明だが南側斜面に「地ならし」の土を置く。
Ⅱｂ　「地ならし」にローム（厚さ30㎝）を置く。
Ⅱｃ　ほぼ将来の左括れ部にあたる位置に土師器甕を埋め置く。
Ⅲａ　後円部全体の形を規定するため細掘りを行った形跡（Ｃ１）があるが確信はない。
Ⅲｂ　後円部に馬蹄状に封土（内傾斜盛土）を盛る。この馬蹄状の盛土を整形し、直径16.3ｍの円形とする。（第１次封土）この時点で約４ｍのテラスが周辺を廻る。
Ⅳ　石室の構築（土器類の埋置）。
Ⅴ　前方部の築造。序盤は後円部第１次封土に接して斜位に盛土を置く。終盤は水平に積む。前縁近くは版築状に搗き固める。
Ⅵ　墳形全体を覆う封土の盛り上げを行い、全体の整形を行う。
Ⅶ　埴輪を配列・敷設する。
Ⅷ　葬送儀礼を行い横穴式石室に副葬品とともに被葬者を埋葬し、閉塞する。

以上、概ね、後円部→前方部→全形という順に墳丘築造を行っていることが復元できる。

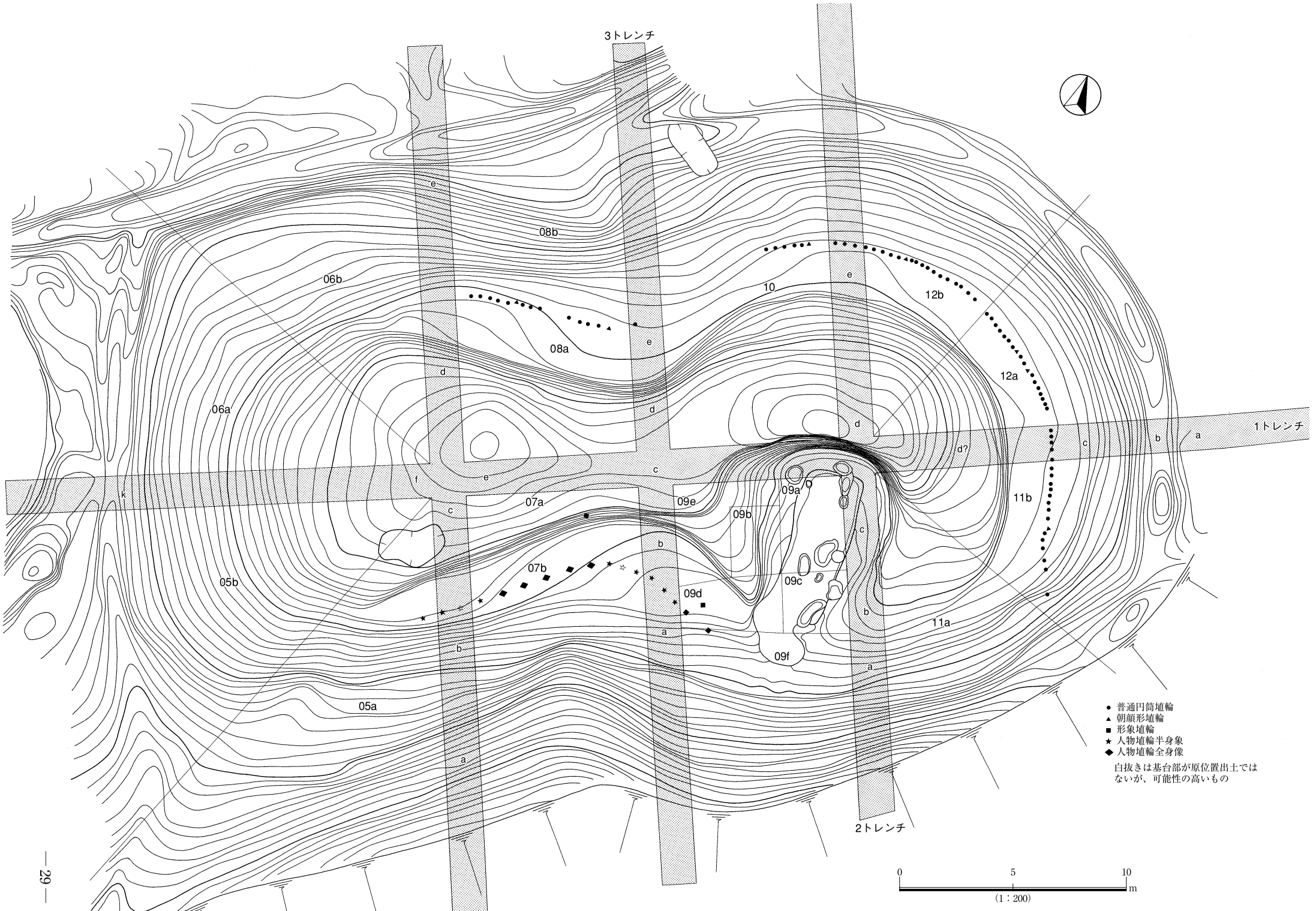
これらの工程は単独で成立しているのではなく、常に次の工程を念頭に入れ、意識化している可能性が濃厚である。これは後述する墳丘築造企画の存在する可能性を補強する様相を示していると言えよう。そして、各工程の区切りには何らかの儀礼活動が行われたと考えられる点も興味深い。

さて、このように検出状況から推察してきた古墳築造の復元像からは多くの疑問が喚起される。

墳丘構築過程の儀礼は、墳丘を設計した人間が行ったのか、実際に参加する人員が主体なのか。築造企画は誰の頭の中にあり、どういう種類の人間を動員して行われたのか。石室の設計図もあったのだろうか。石材を供給する人間と石室を作り上げる人間は別なのか。石材の大きさは現場で調整したのだろうか。石室の設計者と墳丘の設計者は別なのか。埴輪の供給元は必要な数をどうやって調整したのか。埴輪の配列を決めたのは誰か。築造企画の保持者は埴輪の種類を指定するのか。墳丘・石室・埴輪配列のレシピはそれぞれ関連がないのか。被葬者は各レシピを知っていたのか。被葬者と築造者はやはり別人だろうか。誰が古墳築造計画を立てたのか。

いずれも、一古墳の検討だけでは答えの出せない問題ばかりである。だが、うまく問いかけを発することができれば、今後いくつかの問題には答が得られるようになるかもしれない。

（註）　石室石材が所在不明のため、本項は西田氏の所見に基づいて記述した。記録には「硬質な凝灰質砂岩」としか記されていなかったが、編者が写真を根拠に書き変えた。また、石室出土遺物の解釈についても同様に書き改めた。



第10図　山倉１号墳埴輪出土位置図

5　埴輪列

１号墳には、群中唯一、外表施設として埴輪が配列される。普通円筒形埴輪（以下、円筒埴輪）と朝顔形円筒埴輪（以下、朝顔形）が後円部東側から前方部北側途中までの中段テラス外縁に置かれ、水鳥形埴輪・人物埴輪は石室前から前方部まで同じく中段テラスに配置されている（第10図）。なお、上段墳丘上で原位置を確定できたものはまったくなかった。

円筒埴輪列　円筒埴輪列は、前方部北側と後円部東～北側に存在する（第11・12図）。列中には、合計83個体の円筒埴輪が遺存し、その底部が原位置もしくはその近くで検出されている。円筒埴輪約10個体おきに朝顔形埴輪が並べられ、前者が76個体、後者が７個体以上という構成である。

円筒埴輪は口径22～23㎝、器高40～45㎝の小型品で、１～３個体分程の間隔を空けて配置されている。朝顔形に関しても同様である。平均で見ると1.6ｍの範囲に５本前後という割合で並んでいる。

また、列中の大部分が、列に対する直角方向を意識して、透孔を墳丘外方に向けて並べられている。円筒埴輪には取り上げ時に、この正面位置を器面に記録してある（第14図凡例参照）。

列の細部を見ると、まったく曲線である箇所は認めがたい。前方部はもちろん後円部も、大局的には曲線の部分であっても、局所的には直線の連結によっており、列が滑らかな弧を描くわけではない。この１単位は４～６本でほぼ一定しているように見受けられる。

また、配置の方法は、覆土が明瞭でなかったようで記録が残されていないが、個体ごとに穴を掘って埋め置いたと考えられる。上記にある４～６本毎の単位の存在から、溝を掘った可能性も思い浮かぶが、目見当でも５本程度を直線的に並べることは難しくないので、反対に、厳密な設定のなかったことが窺える。おそらく、中段テラス外縁という大まかなガイドを用いたのであろう。

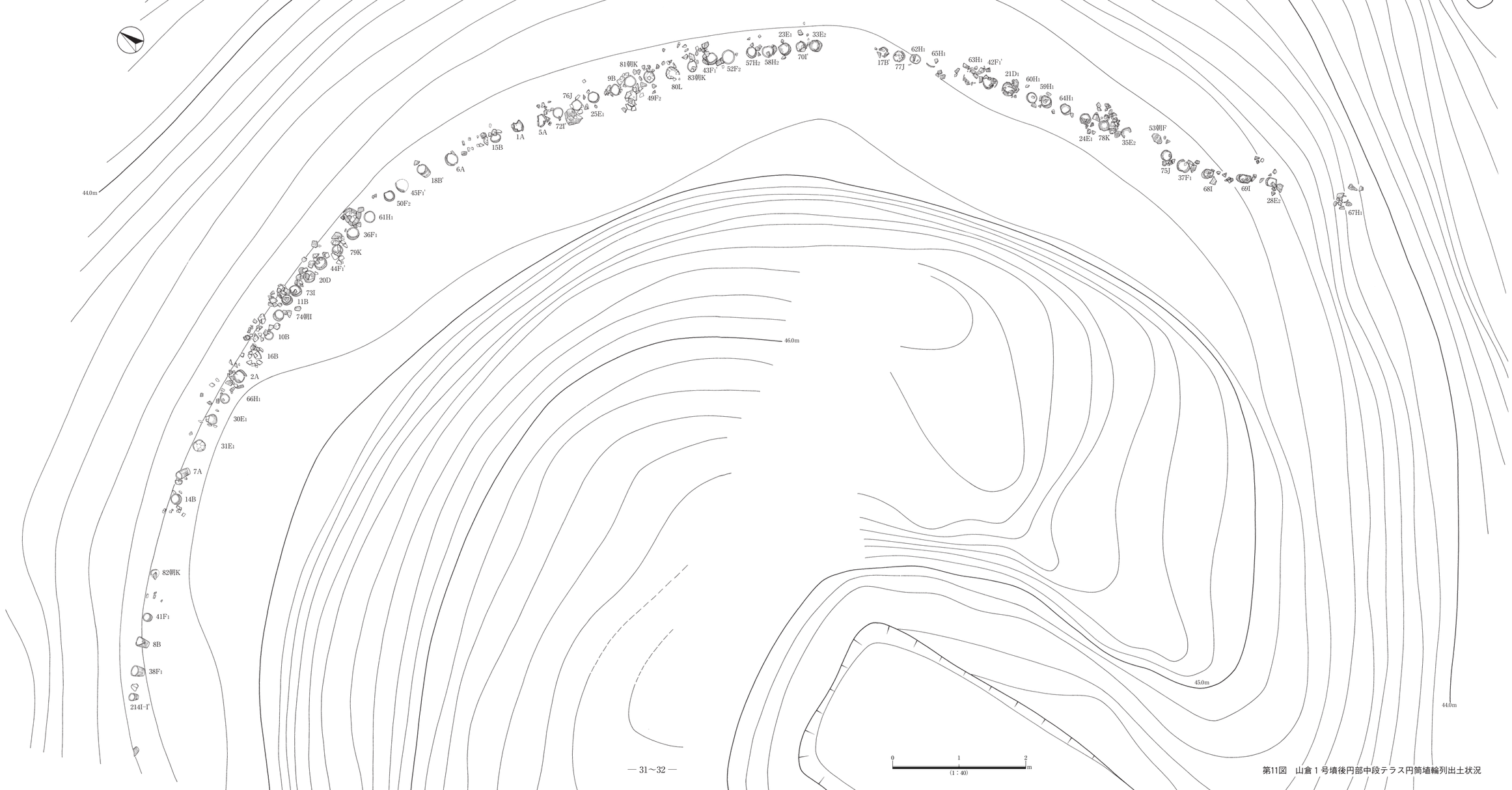
列の形については、後円部東側の列の端が直線的になっていることが注目される。もし、当時の円筒埴輪列が墳丘を囲繞するという性格を保持していたならば、形象埴輪列と共に一列になって輪を構成していたものと考えられる。事実、想定する墳丘築造企画のラインと一致するかたちで、埴輪列が敷設されており、そのほぼ同心円上の延長に先頭の水鳥形埴輪が配置されているのであるが、これらからすると、本来、この部分は後円部の円に沿って配置されていたものの、後の土の移動に伴って配置が乱れたという経過が考えられる。

ただし、円筒埴輪列自体の空間を閉じる意義が失われて、形象埴輪と一連になってしまっている側面を重視すれば、形骸化したため、石室開口部で途切れて輪が完結しないことや、石室の主軸にあわせて、後円部列の一部がはじめから直線的な配列をとる、ということがあったのかもしれない。

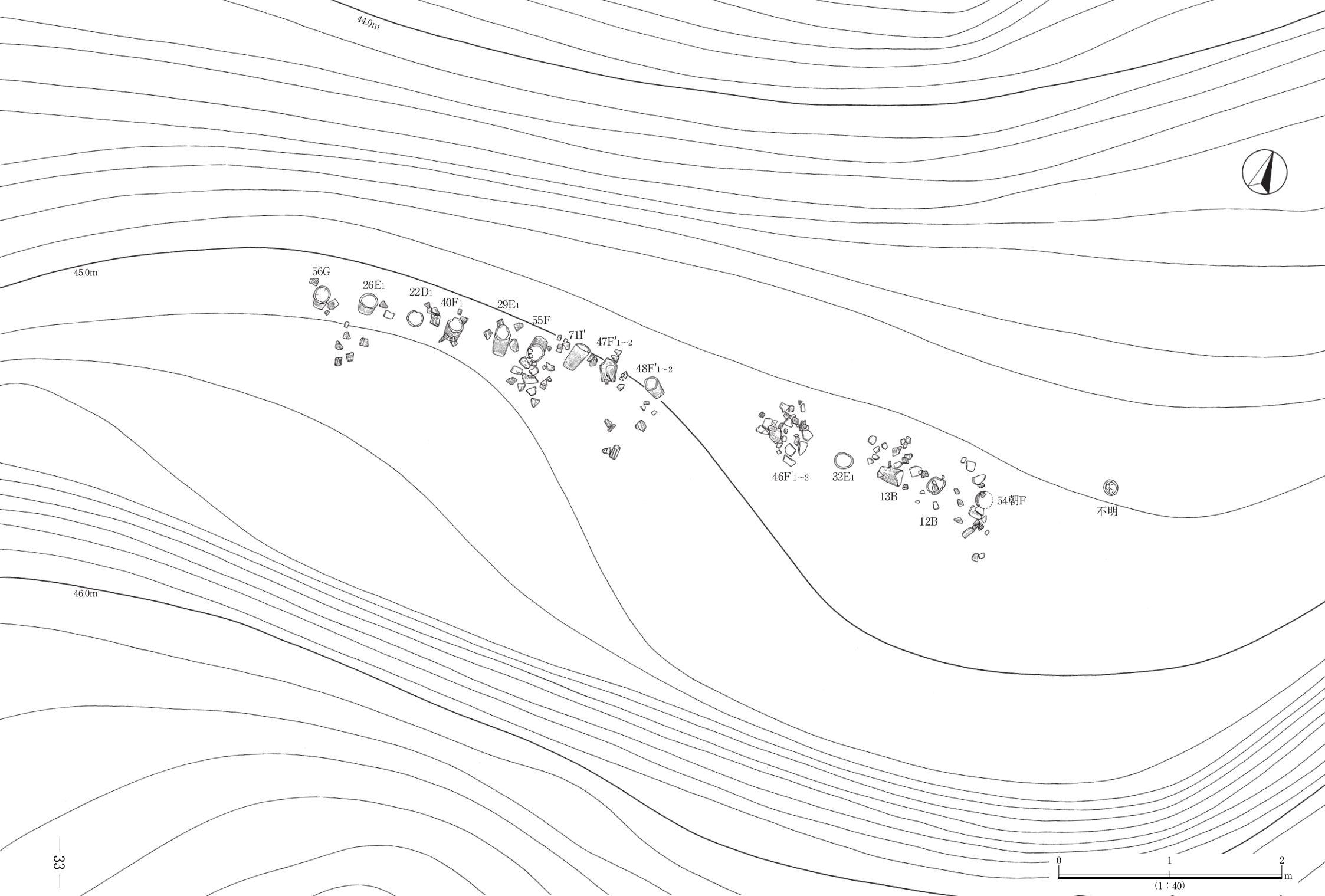
形象埴輪列　形象埴輪は墳丘南側、石室開口部の西から前方部に向かって、括れ部の曲線と、前方部の直線に沿うように一列で検出されている（第10・13図）。いずれも、下段墳丘上面の黒色土および貼られたローム土層を掘り込んで樹立されている（巻頭図版５中）。

墳丘の項で触れたとおり、沖積地側の括れ部に位置することによって、流下する土に早く埋没したために、配置を確実に把握できる良好な遺存状況に保たれたようである。

列の構成は、石室開口部を先頭に、東から、水鳥形埴輪２体・冠帽半身像２体・島田髷半身像４体・筒袖全身像２体・振分髪全身像１体・冠帽全身像２体・振分髪半身像１体・壺を戴く半身像１体・鍬を持つ半身像２体である。人物埴輪は全身像５体と半身像10体の15体、合計は水鳥２体を加えて17体である。本来は、埋没で保護されなかったものが他にもいくつか存在したと思われる。



第11図　山倉１号墳後円部中段テラス円筒埴輪列出土状況



第12図　山倉１号墳前方部北側中段テラス円筒埴輪列出土状況

東端の水鳥形埴輪（第67図73・74他、図版66）は、他に比べやや間隔を開けて並べられている。基台部が両方とも全周する遺存状態で出土している。ほかに底部破片が１片あるが、これが73・74の間に入る別の１体か、朝顔形埴輪片であるかは、確定できない。水鳥の向きは不明であるが、列自体が石室に連なるようなかたちをとるので、顔が石室方向を向くように配置されていた可能性がある。

続く人物埴輪列の先頭は、冠帽表現の人物半身像（第58図６・第59図７、図版60）である。２体は背の高さが異なるが、他の形式にも見られるとおり、意図的に表現を変えた可能性が考えられる。

冠帽半身６までの３体は直線上に並ぶように配置されている。基台部中心間で水鳥73－水鳥74間が128cm、水鳥74－冠帽半身６間が60cm強である。この部分と冠帽半身６－冠帽半身７の並びは墳丘側にやや折れており、種類別を意識して設置されたことが分かる。冠帽半身間は64cmほどである。冠帽半身６・７のラインは次の島田髷８とは一致せず、島田髷はまた別の線上に並ぶようである。

島田髷半身像は４体が想定できる（第60～62図８・９・10、図版61・62、第66図46・61）。島田髷８・９・10は基台部が原位置で出土しているが、東から３体目はその存在を示唆する左腕片・髷片しか得られていない。また、島田髷９は第３トレンチの土層観察ベルト内より、他の人物埴輪より遅れて出土したため平面図に記録されなかったので、写真から位置を判断した（図版20）。

これらが直線上にあるとすると、両端の８－10間が約190cmなので、おそらく、それぞれが冠帽半身像と同様に60cm強の間隔で配置されたと推定できる。形象部の向きは、島田髷９が南北トレンチと揃うように置かれていることから見て、全身像群と同様に墳丘外を向いていたと考えられる。

島田髷10から92cmで全身像の列になり、ここでまた屈曲する。ここからのラインは前方部の側縁とほぼ平行するようになり、基底部検出埴輪で最後尾の鍬を持つ半身像までまっすぐ通っている。

全身像の先頭は、筒袖表現の全身像１（第53図１、図版50・51）である。基台部は原位置で出土し、形象部が墳丘外を向いていることは明確である。この点は以下の５体に共通する。

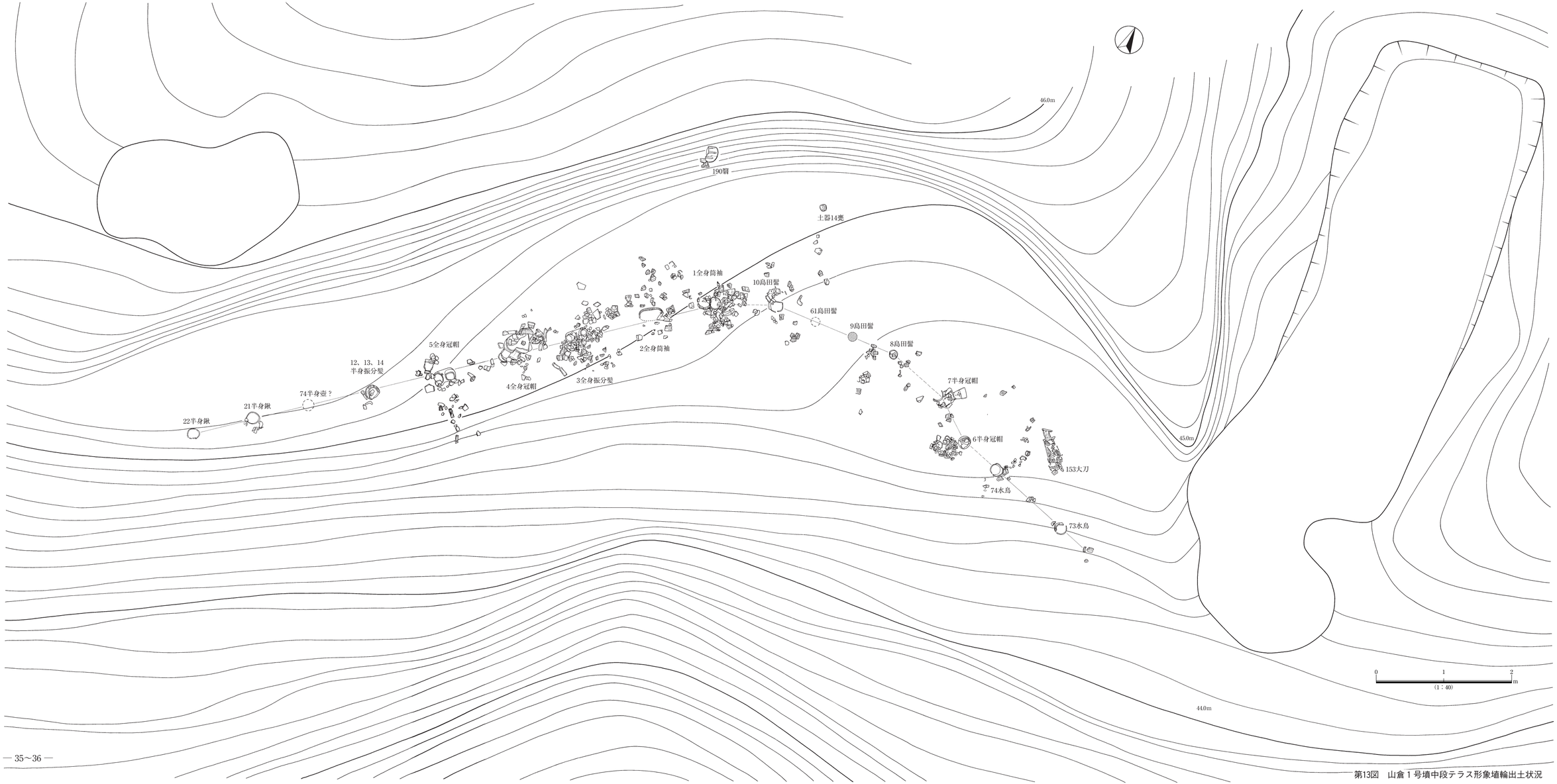
筒袖１の西隣には90cm前後離れて同一形式が続く。その筒袖全身像２（第54図２、図版52・53）は筒袖１と別人が表現されているようで、後述のとおり細部において異なる。遺存状態が悪く全体像は不確定だが、沓の上面に縦位隆帯で装飾して違いを示しているのは間違いない。

筒袖の次は１ｍ弱で振分髪表現の全身像３である（第55図３、図版54・55）。この振分髪３から、また１ｍ弱で冠帽全身像４（第56図４、図版56・57）、さらに１ｍ弱で冠帽全身像５（第57図５、図版58・59）である。そして、冠帽全身５から１ｍ強で振分髪半身像（第63図14、図版64）になる。

この全身像から振分髪半身像までは、ほぼ同一間隔で並んでおり、この区間の埴輪の意味に共通性を認めたがための処置の採られたことが窺われる。つまり、配置に携わった人間が持つ分類基準の反映、または、担う意味の揃うものをグループとして表現しようとする意図が感じ取れるのである。

振分髪半身像14は列の延長方向に透孔の向いている様子の写真があるので、他と同様、墳丘外を向いていたと推定される（図版19）。

振分髪半身像14の次は、壺を戴く人物74（第63図11、図版62）と想定するが、これは、胴部以下が原位置出土していないため、同資料の注記番号に基づく推測である。配置間隔は、続く鍬を持つ半身像21・22（第64図21・22、図版64）の間隔約90cmを割り振って求めた。こうすると、全身像５体＋振分髪半身像のグループの前後における間隔が均等になり、設置者がまとまりを意識していたとする想定に合致する。



第13図　山倉１号墳中段テラス形象埴輪出土状況

鍬を持つ人物半身像21は写真・図面で土層観察トレンチと直交する向きに透孔が確認できるので、やはり、墳丘外を向いている（図版23）。22も同様である。

列で位置の確定可能な部分はここまでである。しかし、形象埴輪の破片は、墳丘をはさんで両側に広く分布しており、また、後述するように推定個体数自体、決して少なくない。そして、中段テラスの円筒・人物どちらの埴輪列にも属さない様相で、基台部から遊離して破片となって出土している。

墳頂部形象埴輪配列　水鳥形埴輪のある位置の墳丘側に、大刀形埴輪の形象部（第71図153）が出土しているが、これは基台部の破片が一切なく、後円部墳丘上から形象部のみが落下したものと見られる。同じく、括れ部の先に翳形埴輪の形象部（第75図190）が上段墳丘斜面で出土しており（図版24）、上段墳丘上面外縁が器財埴輪によって囲繞されていたことが窺われる。

他に、破片の出土した位置によって元の配置の示唆されるものがある（以下、第10図参照）。

鶏形は「２トレンチｃ区」（石室覆土）・「７区」、家形（入母屋型）は「２トレｃ区」・「09区」（後円部南部）・「石室充満土」・「石室上面」の注記があり、共に後円部上段墳丘上にあったことが分かる。また、同じ家形でも寄棟型は、後円部の「09区石室充満土」・「11区」・「12区」のほかに、「５ａ区」・「５ｂ区」と前方部の注記があり、前方部・後円部両方にあったことが示唆される。

器財埴輪は、大刀形が「３トレ」・「４トレ」・「５トレ」、矛形が「７区」・「８区」、靫形が「１トレe」・「３トレe」・「10区」・「11区」・「12区」、翳形が「２ｃ区」、鞆形が「３トレe」・「10区上方」で、後円部を中心としながらも前方部にも見られる。

馬形は、「３トレｃ区」の１点を除いて、「10区」・「11区」・「12区」・「５トレ」・「５区a」・「７区」と、明確な上段墳丘上のものがなく、鶏形・器財類とは配置の異なっていた可能性がある。

以上をまとめると、下段墳丘上面の外縁部に円筒埴輪・人物埴輪・水鳥形埴輪の列があり、上段墳丘上には円筒埴輪、器財埴輪による列が配置される。さらに、上段墳丘上の埴輪列内部には、後円部に家形埴輪と鶏形埴輪、前方部に寄棟型家形埴輪がある。という配列状況が想定できる。

６　形象埴輪について

円筒埴輪については重複を避けるため考察と併せて後述することとし、ここでは形象埴輪についてのみ述べる（第53～76図）。また、個々の円筒埴輪と各破片資料の詳細については遺物観察表で記述に代える（第５・６表）。

人物埴輪

筒袖表現の人物埴輪全身像（２体：第53・54図１・２・第65図23～28、図版50～53・63）

主体部前方のテラスから、２体が出土している。特徴として、以下を挙げる。

①　脚表現がストレートで脚結を持たない。
②　円筒状の袖を持ち、腕は半円筒状で胴部に接続する。
③　上衣の合わせ目が右下方向に流れ、結び紐の位置も他の全身像と逆である。
④　全身像で唯一、耳表現として側頭部に穿孔する。
⑤　三角形の頭巾を被る。
⑥　人物部全体のハケメを故意に消している。
⑦　他種の全身像より人物高が若干小さい。

１は全高113.6cm、全幅（復元）51.6cm、奥行（復元）27.8cmを測る。形象部高は94.8cmである。基台部は輪積み成形で、縦方向にハケメを入れた後、上位と下位に１条ずつ凸帯を廻らす。凸帯貼り付けのため上下を指頭で横方向にナデた結果、ハケメが消えている。上位凸帯直下、前後左右に径４cm前後の透孔を４カ所穿孔する。透孔の内周をナデるが、若干外面まで延びる傾向がある。内面は輪積み痕を横方向にナデ消した後、右上りにハケメを入れるが、全面を網羅しない。外面正面の透孔付近を横方向にナデるが、意図は不明である。なお、基台部横断面形はトラック形である。

沓は三角形の粘土板を用いて基台部上側凸帯に繋げる。両面にハケメを入れるが、上面はナデのため遺存が少ない。側面を丁寧にナデ調整し、裏面も側面付近をナデるため、中央にのみ遺存する。

脚は別成形でなく輪積み成形で、基台部から直接積み上げたものと思われる。外面は縦方向にハケメを入れ、基台部との境を横方向にナデ調整する。その後縦方向にヘラナデを施し、ハケメを消している。内面は粗く横方向にナデて、輪積み痕を潰す。一部、ハケメが認められる。

胴部は輪積みにより脚部から一体成形する。脚部との境目に粘土紐を巻き、断面三角形に整形し、上衣の裾を表現している（28参照）。

腕部は輪積み成形で、胴部下方からＣ字状に粘土紐を積み上げる工法と思われる。内面は間隙部が狭いため工具が届かないようで、輪積み成形時の指頭痕のみが観察された。円筒状の袖部は別成形と思われ、袖口は平坦かつ鋭く、輪積み成形した円筒を糸かヘラで切り、ナデ調整している。また、袖口をシャープにするため、内面をヘラ削り調整している。袖部を腕部に接合した段階で、胴部全体の外面に縦方向のハケメを入れているが、このハケメは後に概ね布状工具でナデ消してしまう。

頭部は輪積み成形である。胴部と別成形の場合、接合部の内面調整はできないはずだが、そのような痕跡がないため、胴部から直接粘土紐を積み上げ成形した可能性が強い。頸部は円筒状に直立し、内面斜め上方向にヘラナデ調整する。頭部はやや膨らみを持たせ、斜め上方向に指頭でナデ調整する。内面の上位において右方向にハケメを入れ、頭頂部には粘土板を蓋のように貼り付け、中央を窪ませている。前面に粘土板を貼り付け顔面を作り、頭部との接合面を丁寧にナデ調整する。ヘラで目と口をくり抜き、眉と鼻を貼り付ける。鼻は角形に整形され、シャープである。頭巾は粘土板を貼り付けたもので、裏面の一部に左方向のハケメを残す。頸部上位側面に径約７㎜の孔を穿ち、耳を表現する。頸部に縦方向のヘラナデを施し、耳環などの付属品を貼り付けている。顎紐は次第に薄くはなるものの、頭頂まで廻った可能性が高い。

なお、正面が火口に向けられたため、基台部背面の焼成が悪く、一部欠落している。

２は全高113.5cm、全幅52.2cm、奥行24.5cm（いずれも復元）で、形象部高は92.8cmである。遺存度が良ければ、より１に近い数値になったものと推測される。なお、23から28は同一個体である。

成形技法は各部とも１と同じであるが、個性表現のためか、以下の二点が異なる。

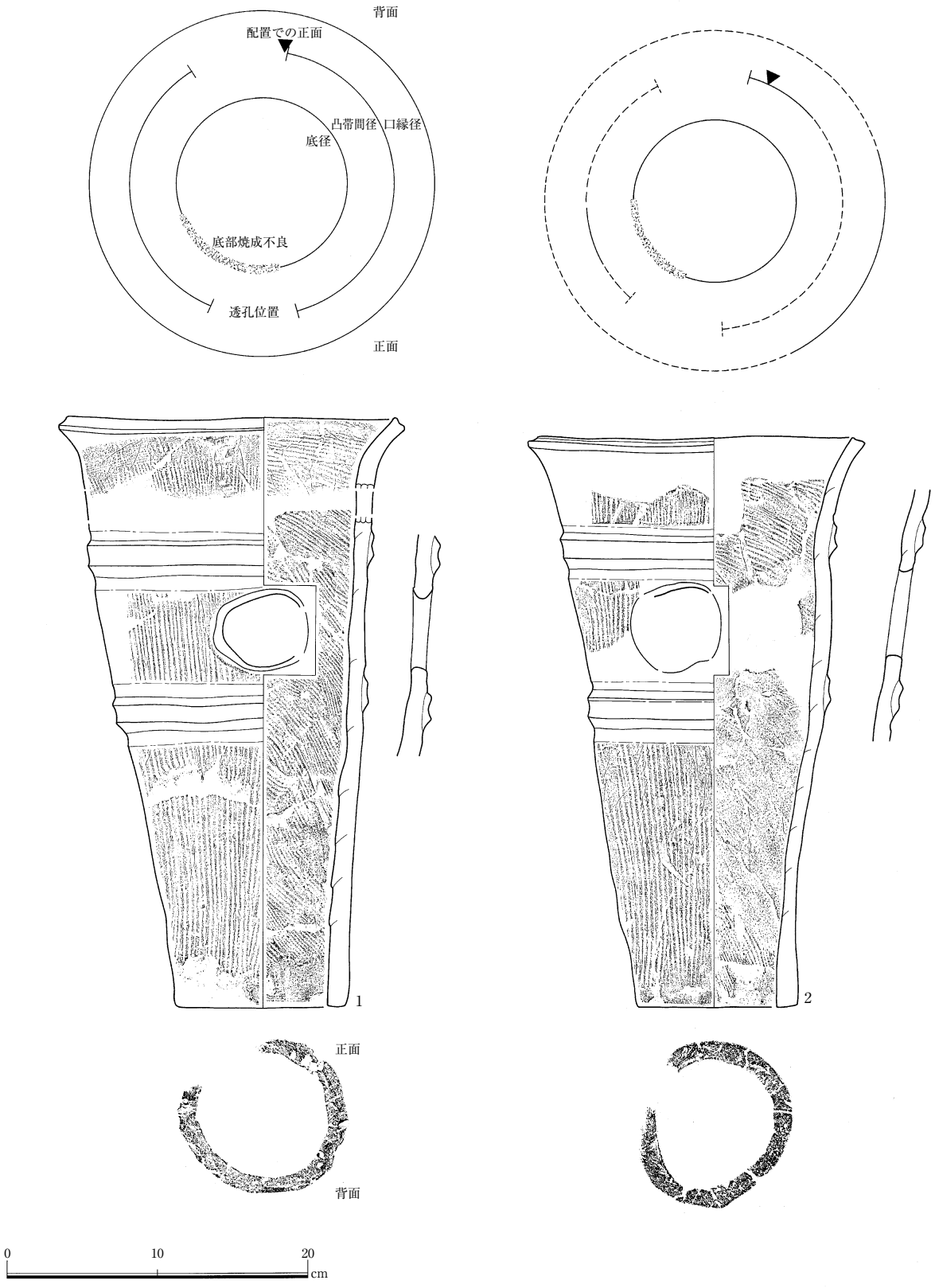
①　沓上面に凸帯を持つ（25・26参照）。

②　顔面に赤彩を施している。

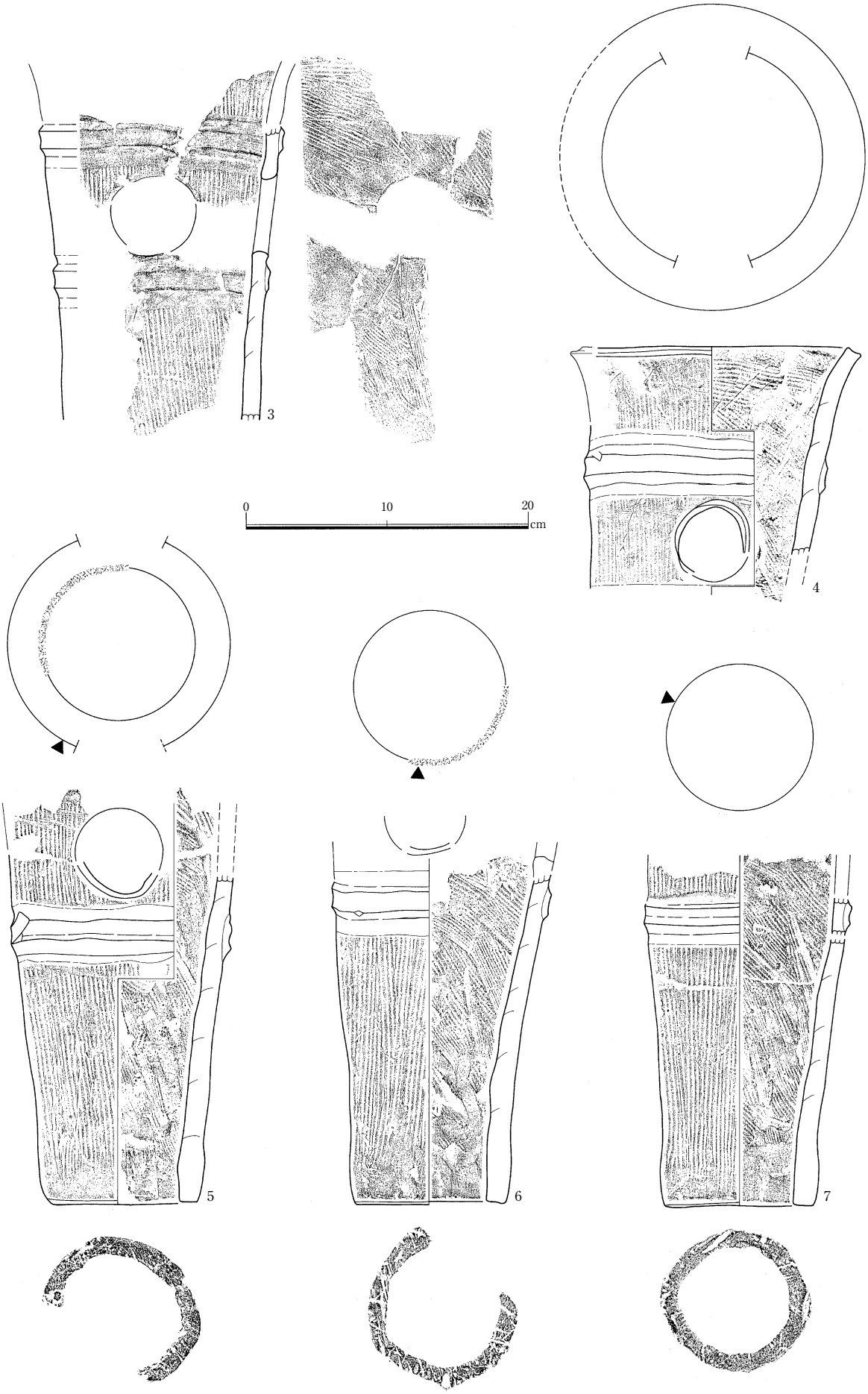
１に比べ、より凝った意匠を示すものと言えよう。また、頸部背面に縦方向のハケメが施されているので、後頭部のハケメを消さずに残していた可能性がある。

振分髪表現の人物埴輪全身像（１体：第55・65図３・29？・31～34・36・40？、図版54・55・65）

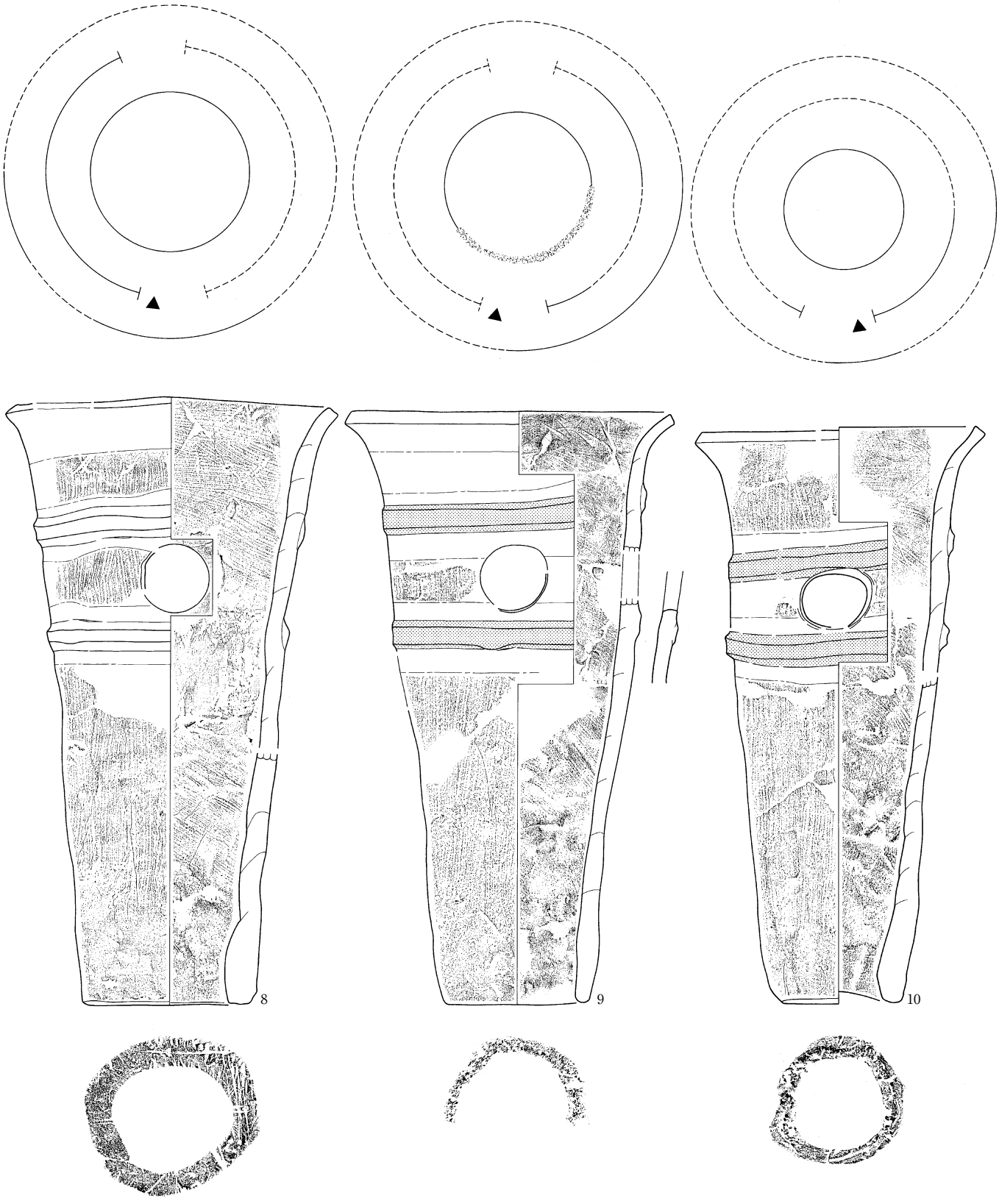
筒袖表現の全身像の隣から１体出土した。特徴として、以下を挙げる。



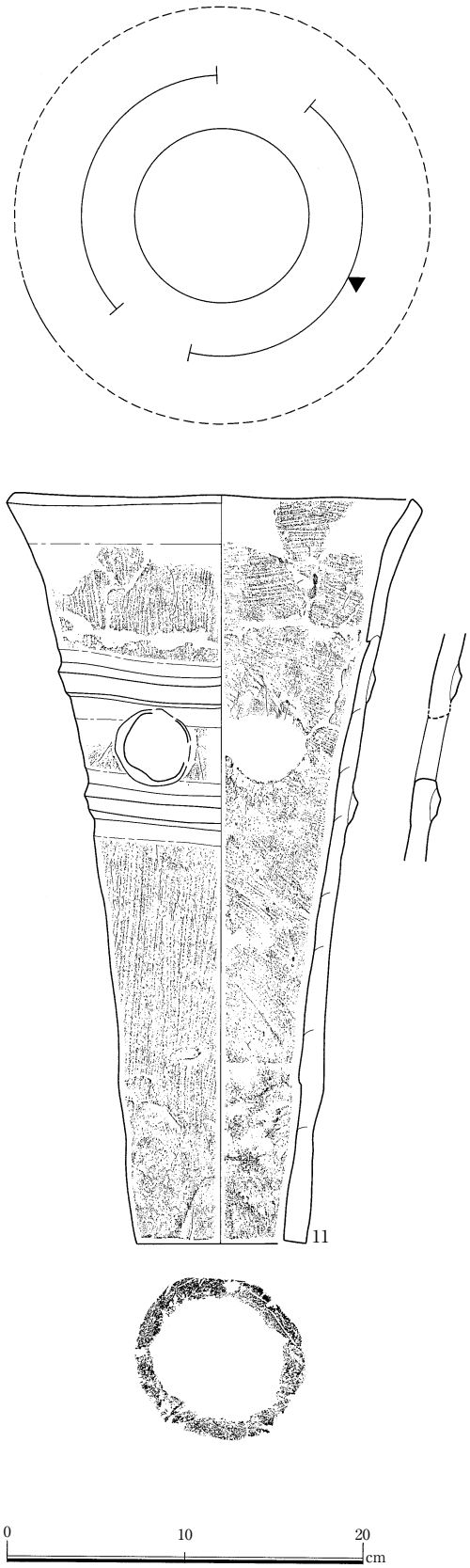
第14図　円筒埴輪（A 類）実測図



第15図　円筒埴輪（A 類）実測図



第16図　円筒埴輪（B 類）実測図



第17図　円筒埴輪（B 類）実測図

① 袴を表現するが脚結は付属しない。
② 小刀を持つ
③ 胴部以上のハケメを消す。
④ 上衣の合わせ目と襟の表現がない。
⑤ T 字状のミズラを付ける。
⑥ １体のみの組成である。

３は全高119.5cm、全幅47.4cm、奥行28.2cmを測る。基台部を除いた人物高は99.0cmである。腕部を除く成形技法は基本的に筒袖全身像と共通する。なお、16から18は同一個体と思われる。

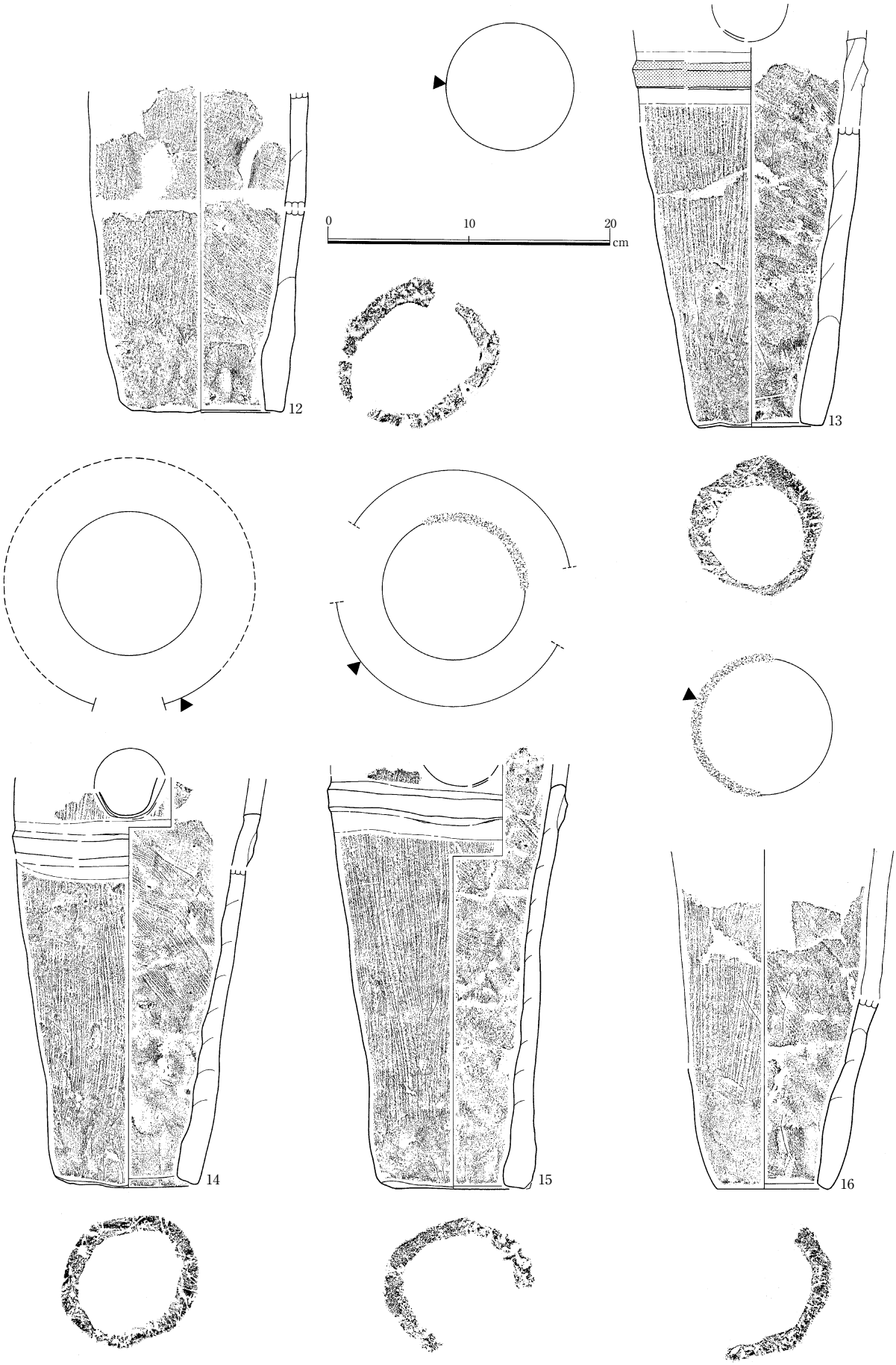
基台部の成形技法は筒袖全身像と共通する。ただし下位凸帯下ハケメが横方向ナデで消されている。

これは、底部の“締め”など、下位凸帯貼り付けのナデとは異なる調整と思われる。また、筒袖全身像より正面の横方向ナデが顕著であるが、意図は不明である。

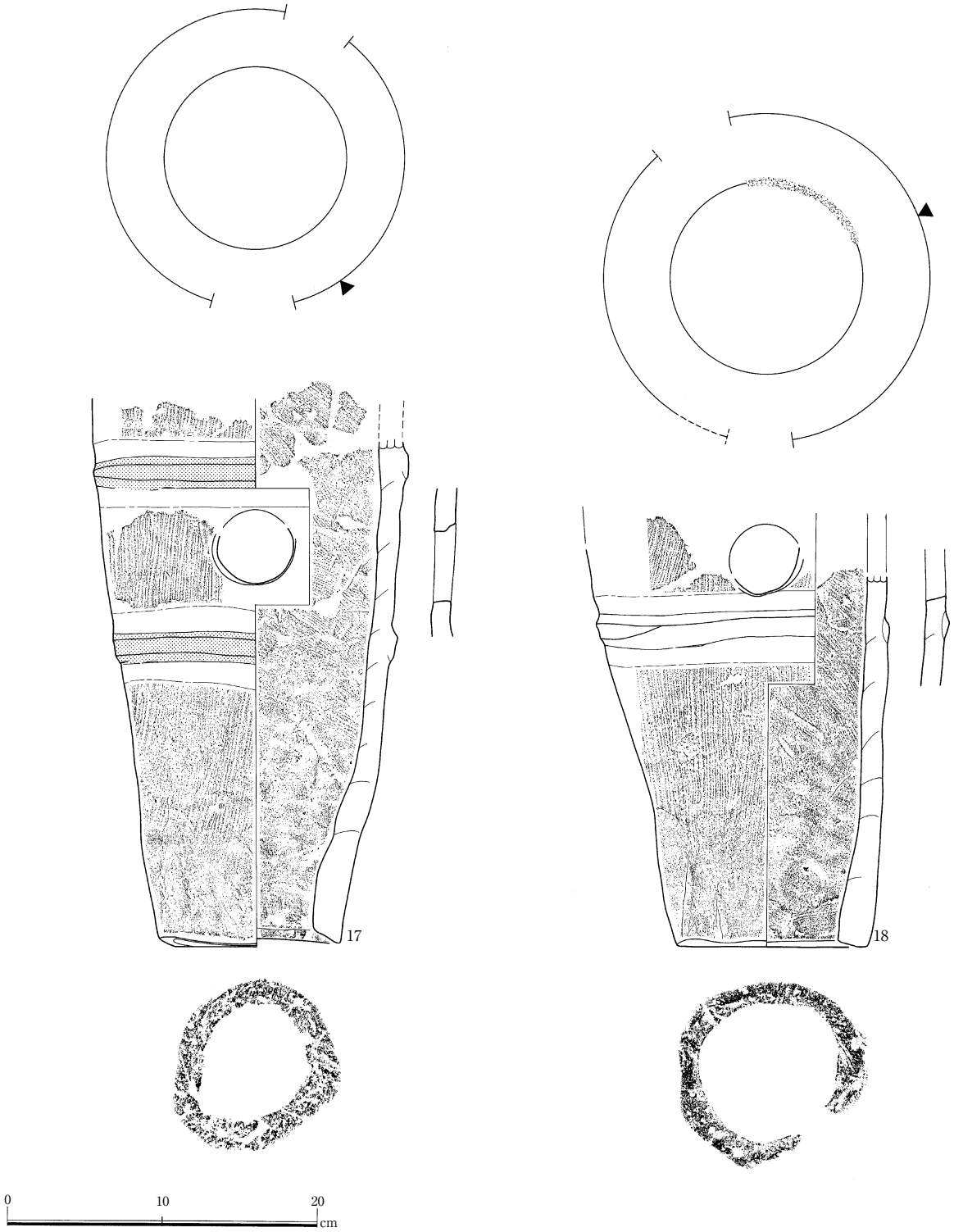
脚部も筒袖全身像と技法的には一致し、別成形せず、基台部から直接袴まで粘土紐を積み上げている。脚下部はやや V 字状に開き、内面は輪積み痕を横方向ナデで調整しているものの、ハケメは非常にぬるい。間隙が狭く工具が使いづらかったためであろう。外面は縦方向にハケメを入れ、袴との境に凸帯を貼り、上下をナデつけている。内股のハケメがぬるいのは、工具が片脚に干渉するからであろう。股の上端部は露出せず見えないが、左右を密着させている（40参照）。なお、袴の正面・裏面に数条の横方向ナデを入れるが、袴のハケメを“消す”行為が形骸化しているのか、何か文様を意識しているのか、意図は不明と言わざるを得ない。

腰部は輪積みにより脚部から一体成形する。脚部との境目に粘土紐を巻き、断面三角形に整形し、上衣の裾を表現している（36参照）。内面は右方向にハケメを入れる。外面は縦方向ハケ後、布状工具でナデ調整し、ハケメを消している。

胴部は腰から直接輪積み成形し、内面左右にハケメを入れる。外面は縦にハケメを入れた後、ヘラナデで消している。袴境に粘土紐を廻らし上下をナデ



第18図　円筒埴輪（B 類）実測図



第19図　円筒埴輪（B’類）実測図

つけ、帯を表現する。同時に腕も接合する。

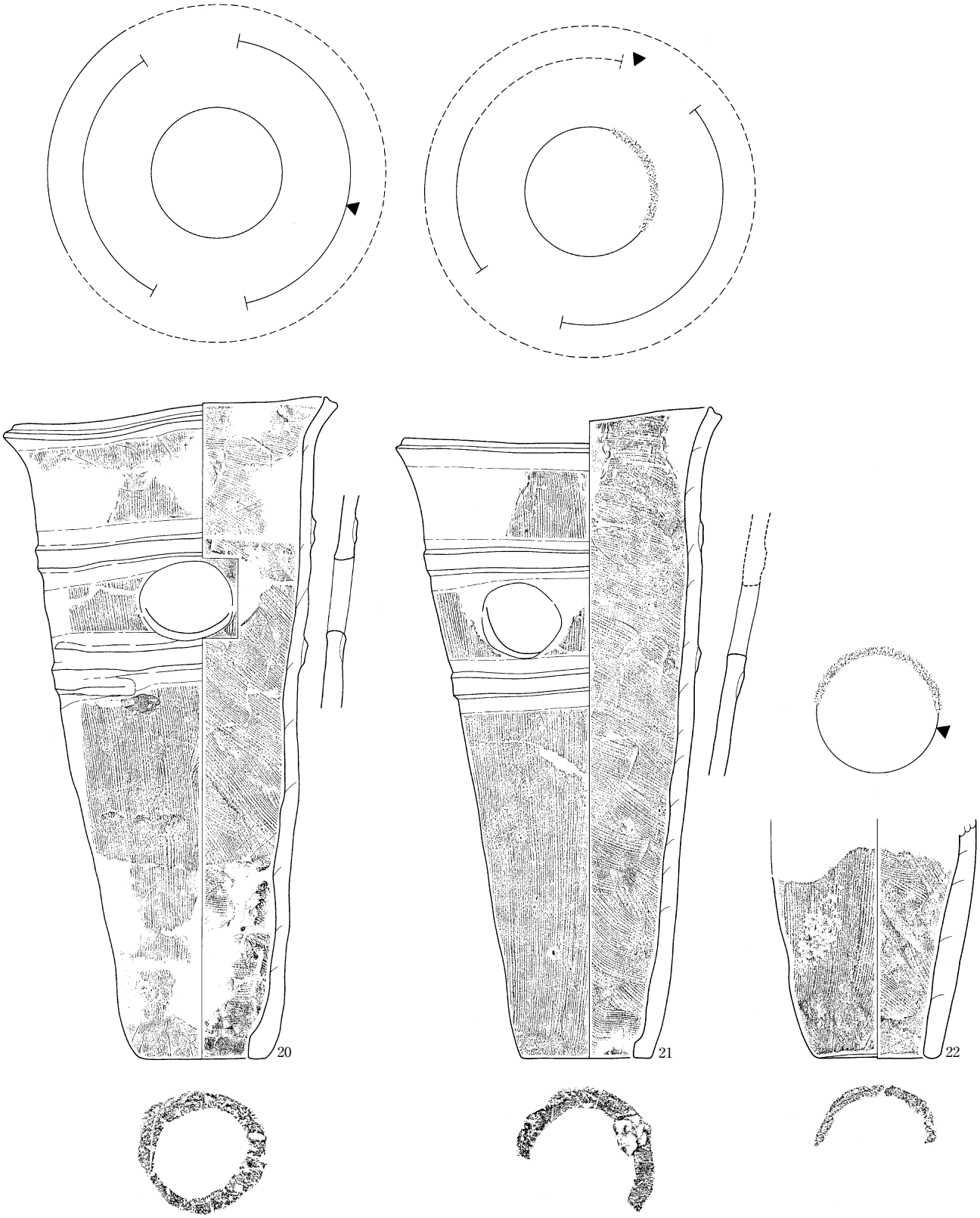
腕部は粘土棒からなり、一部ハケメを入れた後ヘラナデ調整を施す。腰部に粘土板の手を貼り付け、その上にやや突き込む状態で腕を立て、手にナデつけている。肩部にはソケット状に差し込み、接合する。手には薄いＵ字状の凸帯で籠手を作り、沈線３条で指を表現する。

頭部は輪積み成形で、胴部から直接粘土紐を積み上げたものと思われる。上位の内面に右方向のハケメを入れ、頭頂部に径４㎝の孔が残る程度に粘土紐を積み残す。その上に粘土板の髪を被せている。この髪は上面にハケメを入れた後、中央部に沈線で分け目を表現し、これに向かって両端からナデ調整を施す。振り分け部はヘラ状工具でＶ字状にカットし、側面は鋭い。同時に粘土板を貼り付け、顔面を作る。一部ハケメをナデ消した痕跡も観察できた。目・口・眉・鼻の形状は筒袖全身像と共通する。後頭部に縦方向のハケメを入れた後、これを一部ナデ消し、山形に沈線を入れる。ミズラは粘土棒をＴ字状に接合し、ヘラナデ調整したものを側頭部に貼り付けている。

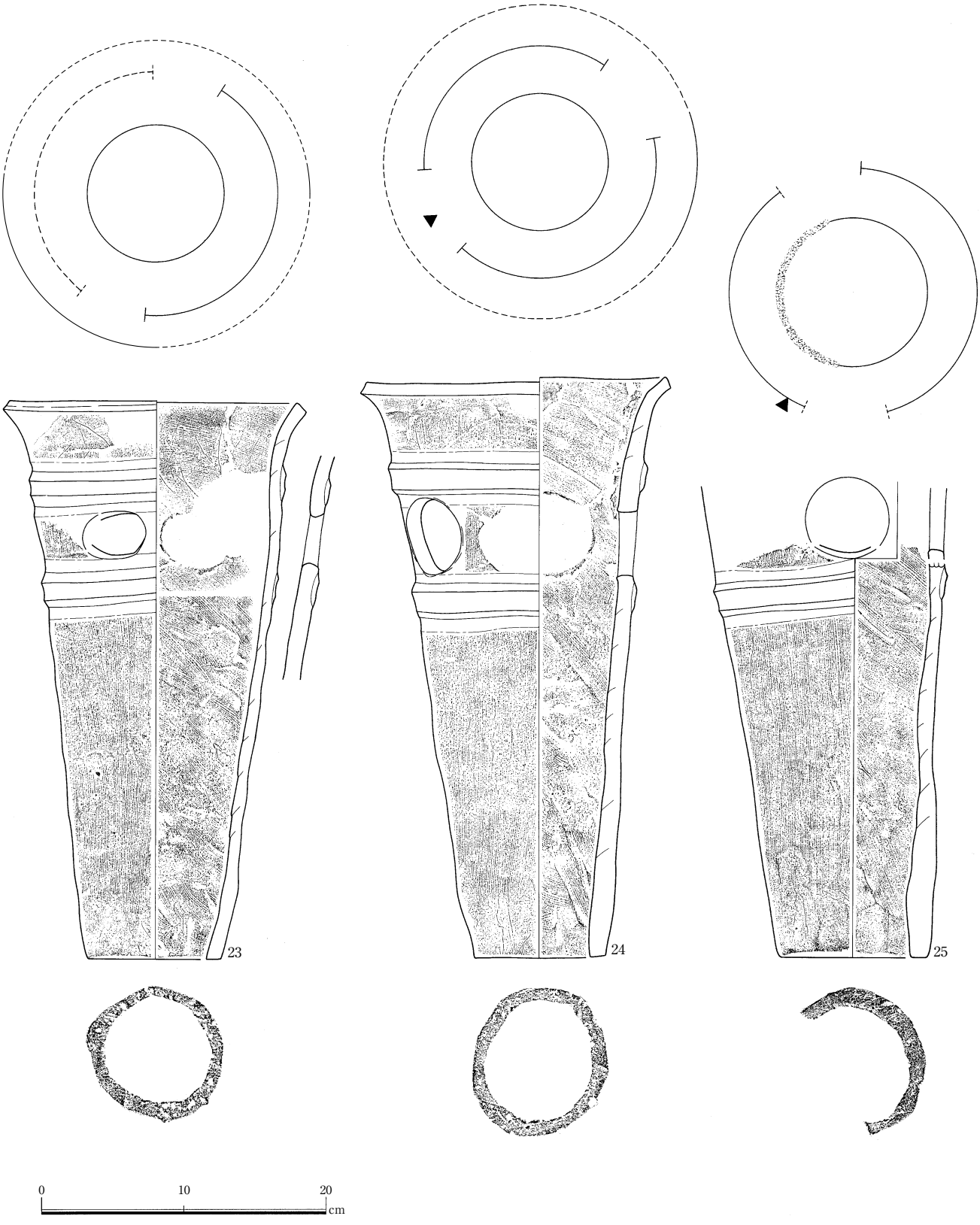
なお、正面が火口に向けられたため、基台部背面の焼成が悪く、一部欠落している。



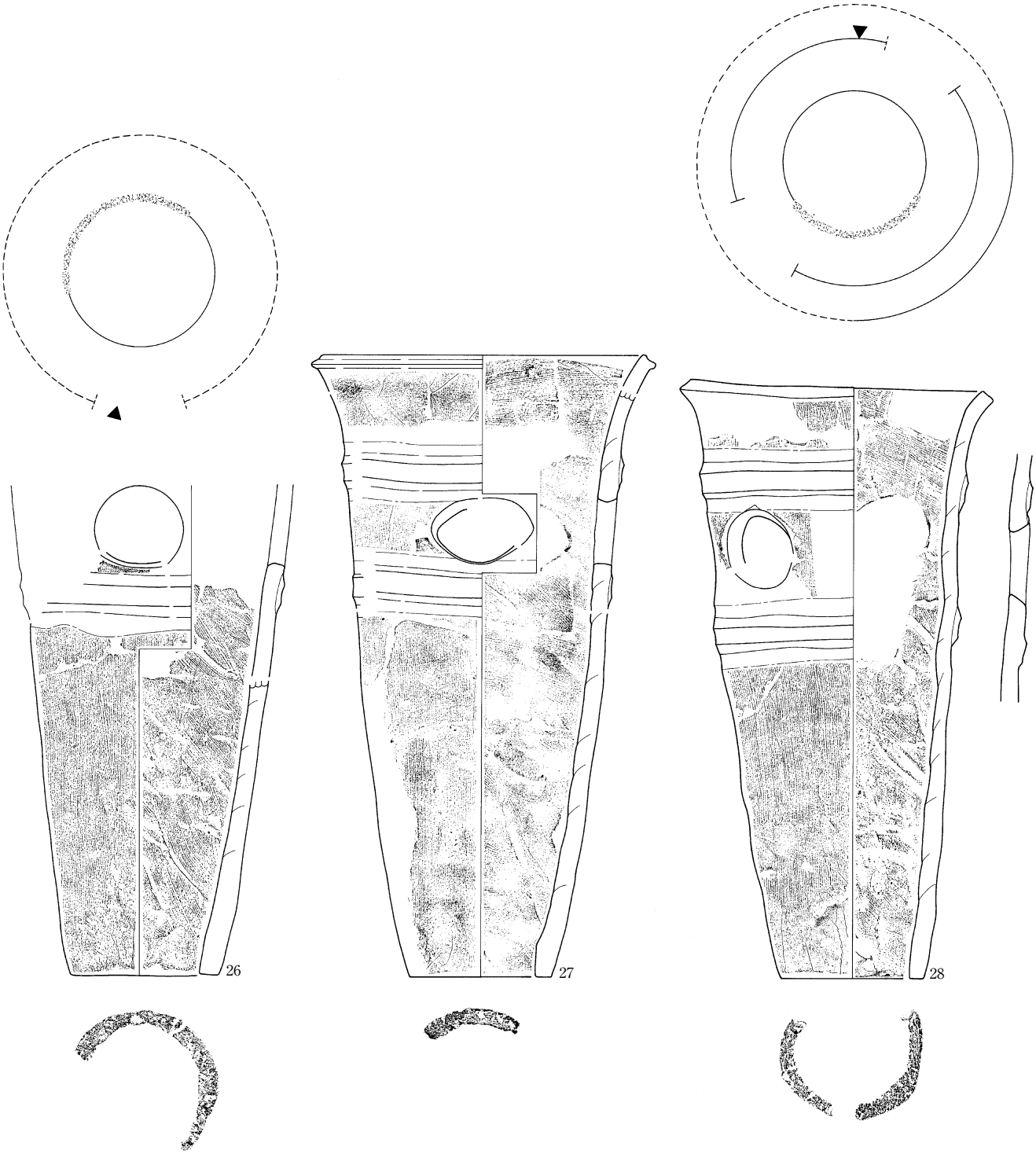
第20図　円筒埴輪（B’類）実測図



第21図　円筒埴輪（D 類）実測図



第22図　円筒埴輪（E 類）実測図



第23図　円筒埴輪（E 類）実測図

冠帽表現の人物埴輪全身像（2体：第56・57・65図4・5・30・35・37？・38・39・41～43、図版56～59・65）

振分髪表現の全身像の隣から2体出土した。特徴として、以下を挙げる。

① 人物部全体のハケメを消す傾向が強い。

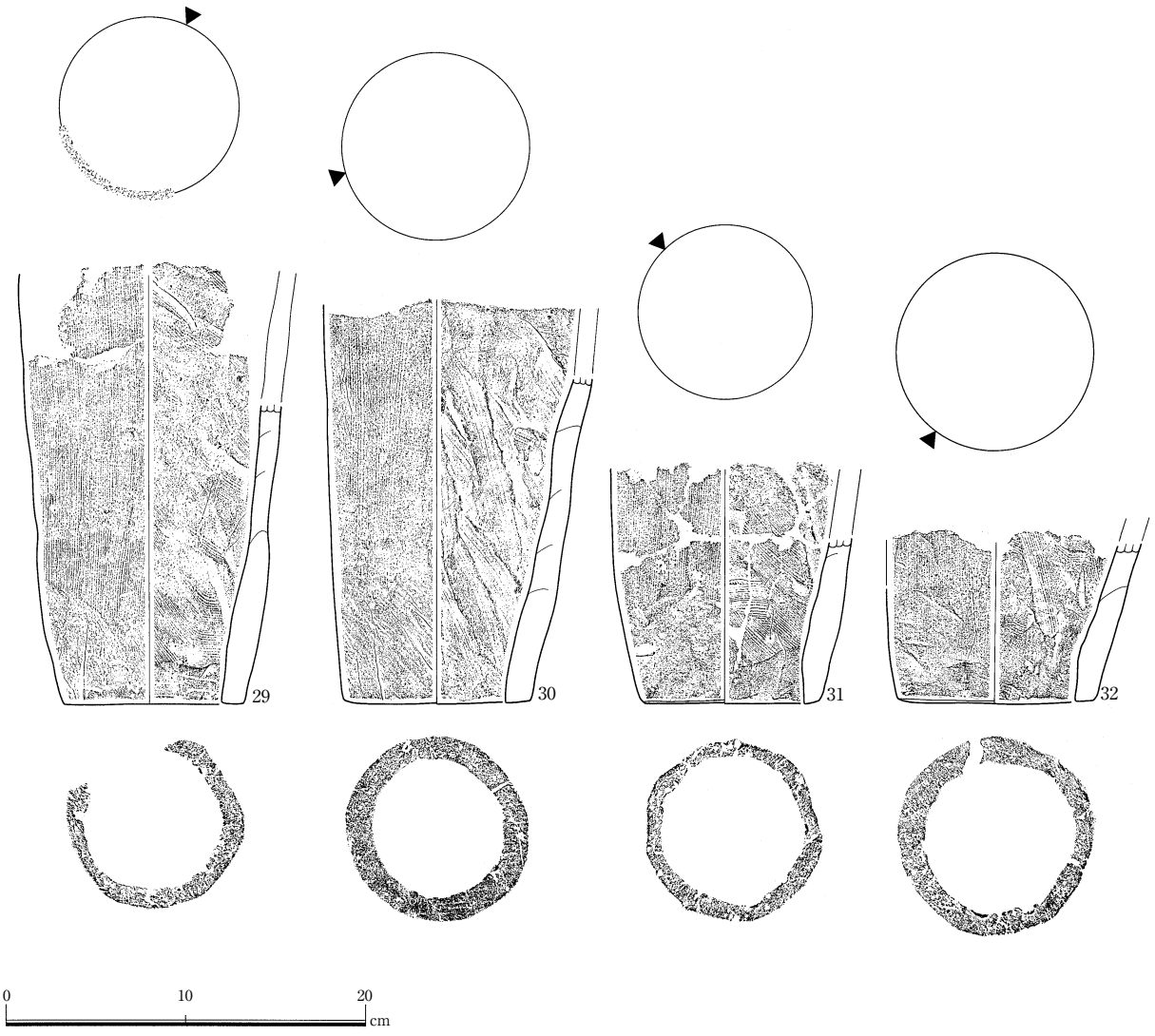
② 武器を携帯しない。

③ 筒袖全身像と同様の耳飾りを持つが、耳表現の穿孔は施さない。

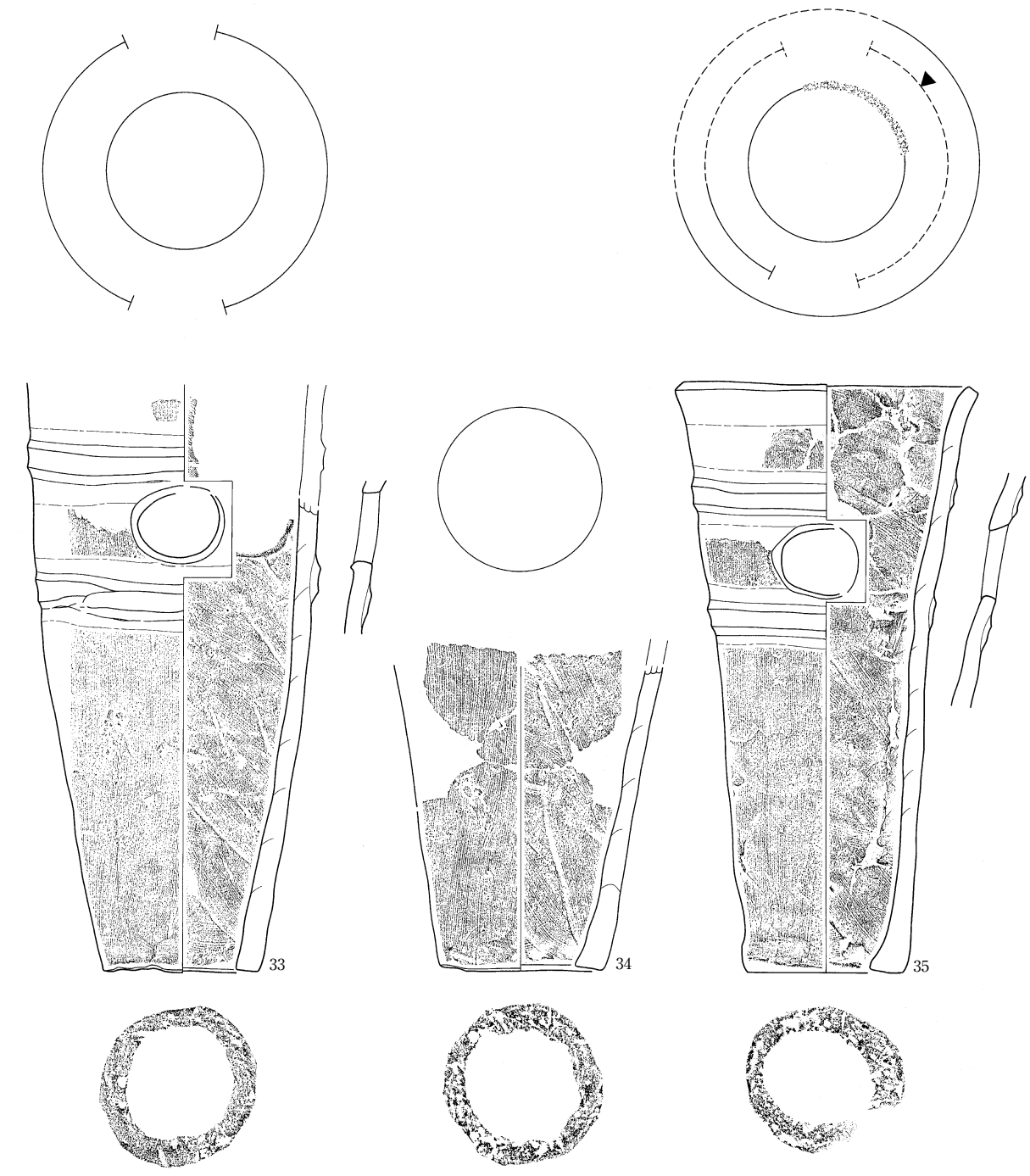
④ 頭部と同成形の頭巾を被る。

4は全高（復元）120.6cm、全幅（復元）40.2cm、奥行（復元）29.9cmを測る。基台部を除いた人物高は100.6cmである。頭部上位を除く成形技法は振分髪全身像と共通する。なお、35は同一個体の可能性が強い。

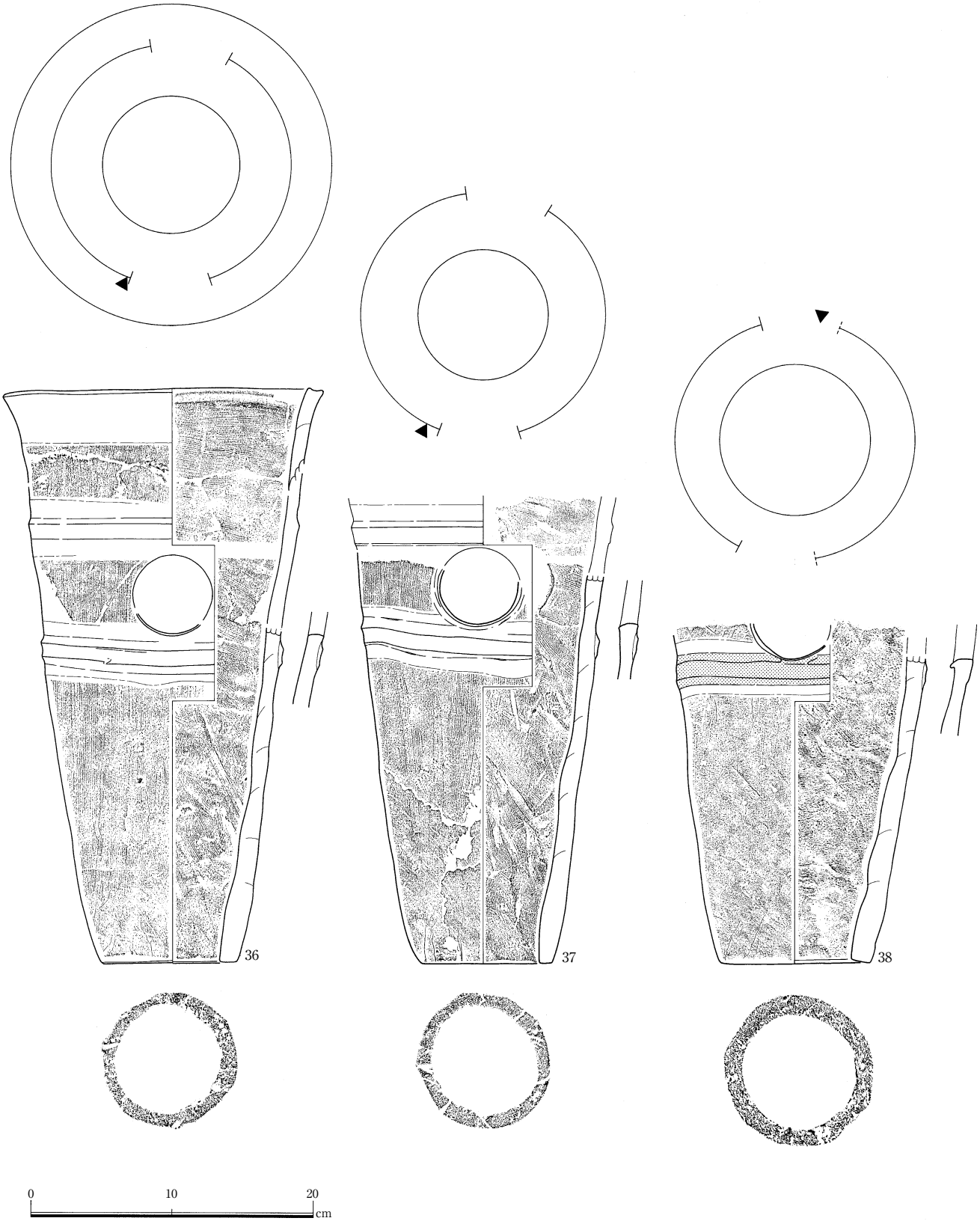
基台部の成形技法は、底部付近の横方向ナデを含め、振分髪全身像と共通する。ただし正面の横方向ナデは見られず、右側面から正面にかけ、縦方向のヘラナデをまばらに施す。他の全身像と同様に、背面の焼成が悪く、一部欠落している。



第24図　円筒埴輪（E類）実測図



第25図　円筒埴輪（E 類）実測図



第26図　円筒埴輪（F 類）実測図

脚部も振分髪表現の全身像と技法的には一致し、基台部から直接粘土紐を積み上げる。脚下部は完全に直立し、内面のハケメはぬるい傾向がある。外面は縦方向にハケメを入れたようだが、丹念に縦方向へラナデを施したため、ほとんど消されている。袴との境に凸帯を貼り、上下をナデつける。この個体は脚結を付けない。袴にも縦方向にハケメを入れた痕跡があるが、ヘラナデと布状工具によるナデでほとんど消されている。下半身にハケメを多く残す振分髪全身像と対照的と言えよう。

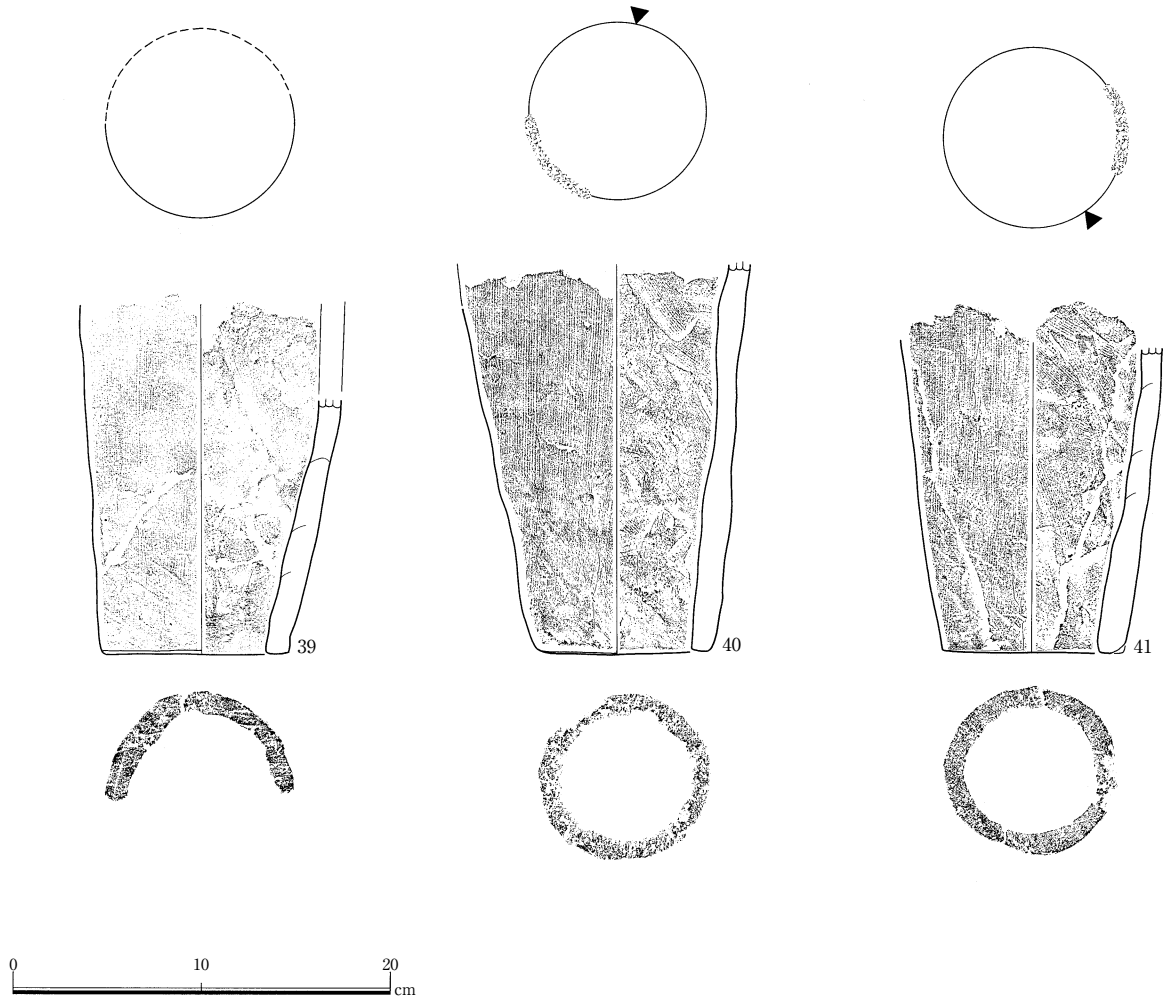
腰部の形状・技法は振分髪全身像と一致する。

胴部は遺存度が悪いが、成形は振分髪全身像と一致する。しかし粘土紐による襟表現があり、上衣合わせ目も表現されていた可能性が濃厚である。この合わせ目は、実測図では帯で止めてあるが、裾まで延びる可能性がある。

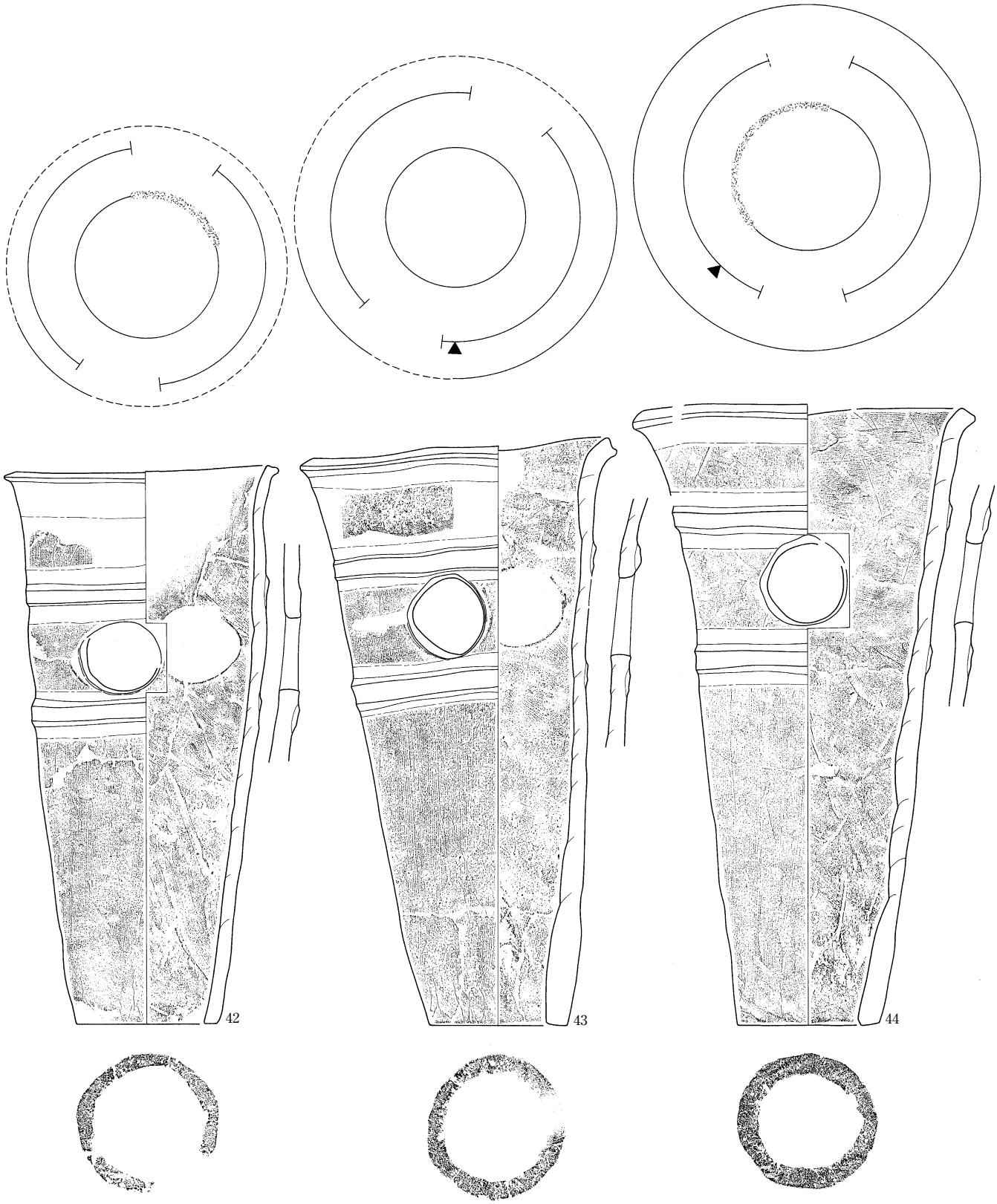
腕部の構造は振分髪全身像と完全に一致する。

頭部の構造も振分髪全身像と一致するが、頭頂部まで輪積みで一体成形した後、最上部を潰し、平たく接合する。粘土紐で帯紐を表現し、頭巾にする。筒袖全身像と同様の耳環を付けるが、耳表現の穿孔は行っていない。

5は全高（復元）124.1cm、全幅（復元）44.5cm、奥行（復元）31.2cmを測る。基台部を除いた人物高は100.6cmである。人物高が4と一致するので、並べて成形した可能性が強い。



第27図　円筒埴輪（F類）実測図



第28図　円筒埴輪（F 類）実測図

なお、38・39・41～43と同一個体である。

成形技法は各部とも4と同じであるが、以下の点において異なる。

① 底部付近（下位凸帯下）の横方向ナデ調整を行わず、ハケメが遺存する。

② 基台部の縦方向ヘラナデを施さない。

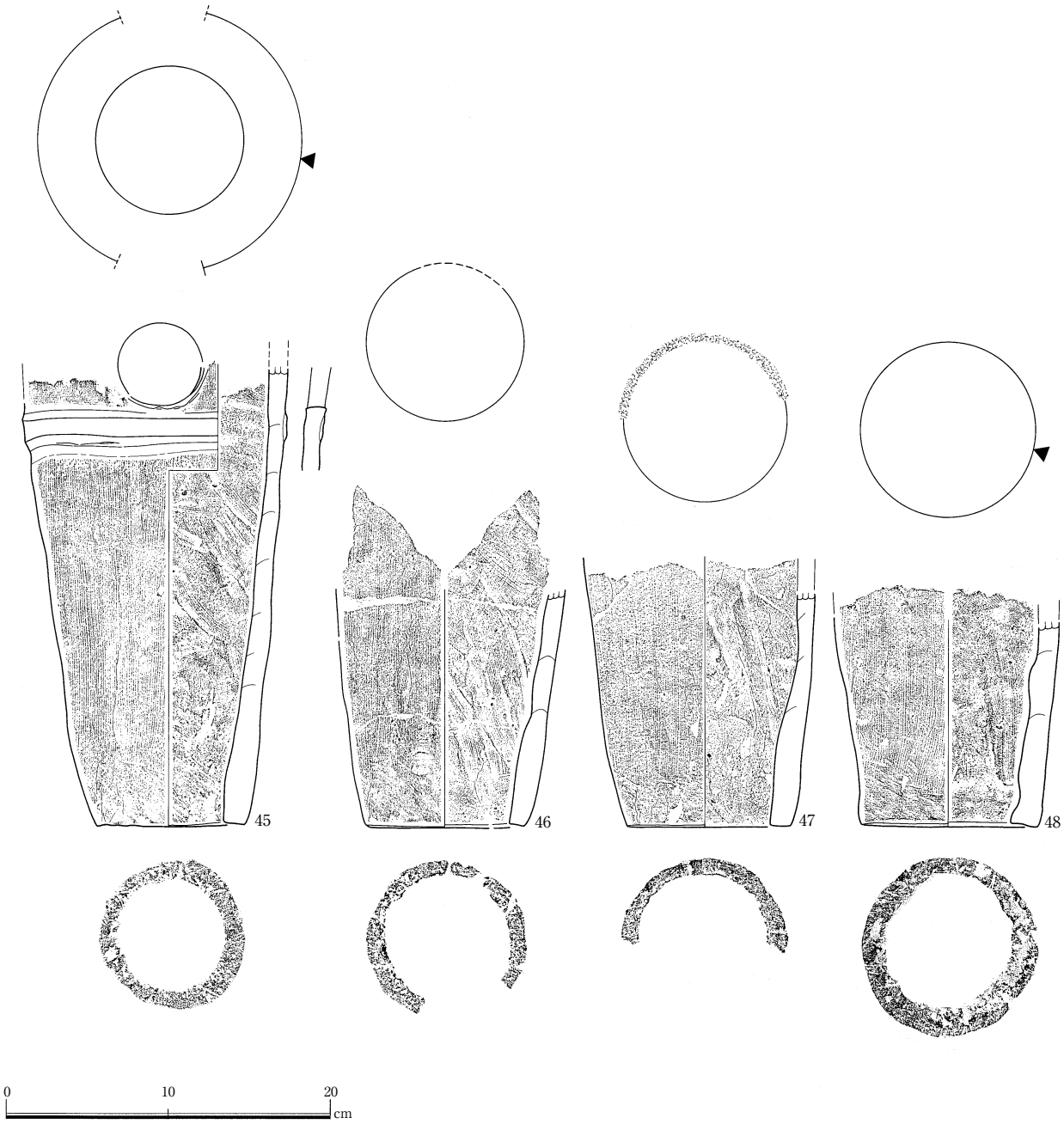
③ 脚部の縦方向ヘラナデ調整が不徹底で、部分的にハケメが残る。

④ 脚部両側面に脚結を付ける（5・42・43参照）。

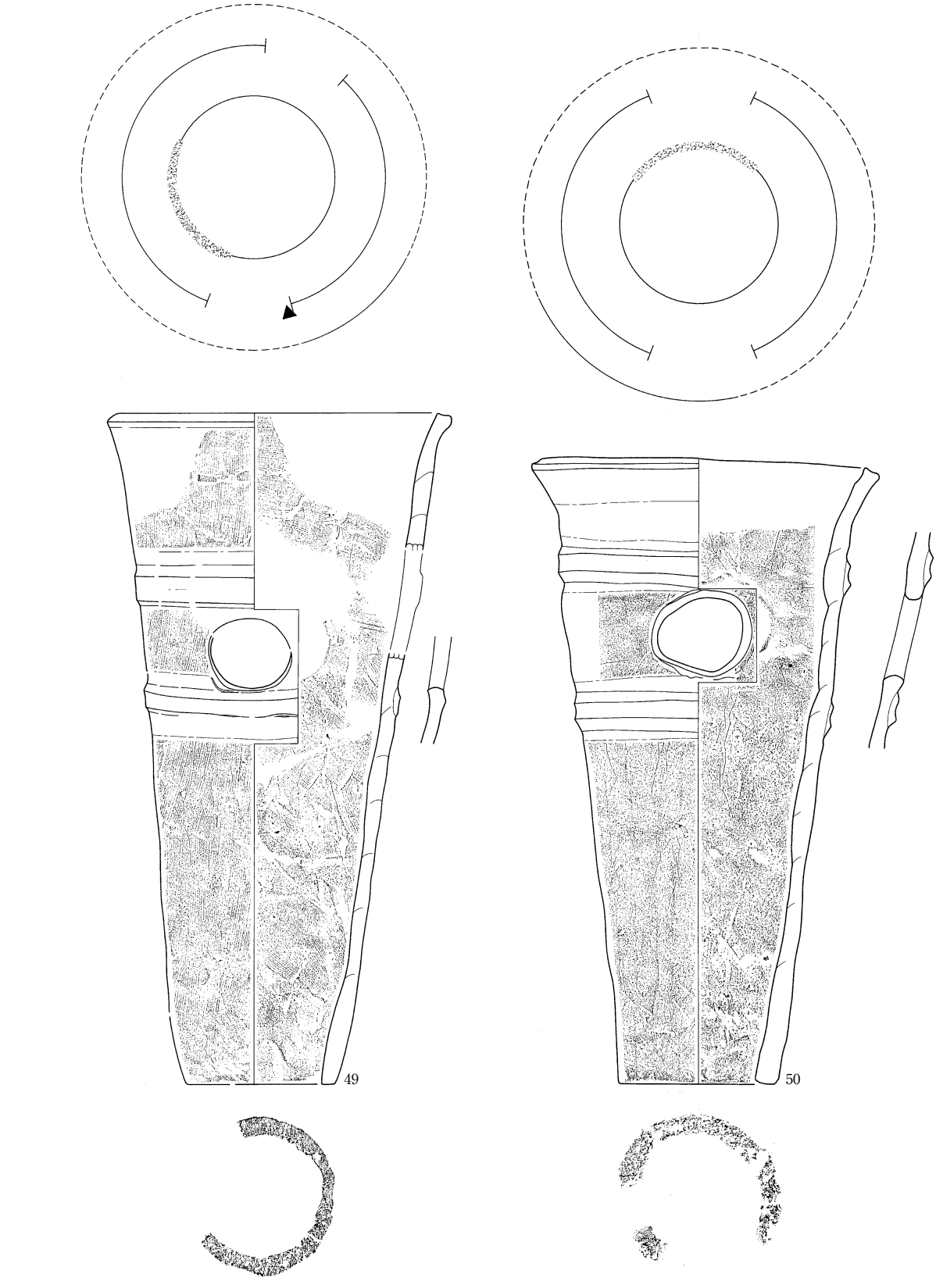
⑤ 胴部正面のハケメは一部残る（5・30参照）。

⑥ 腕部のヘラナデ調整が不徹底で、ハケメがかなり残る。

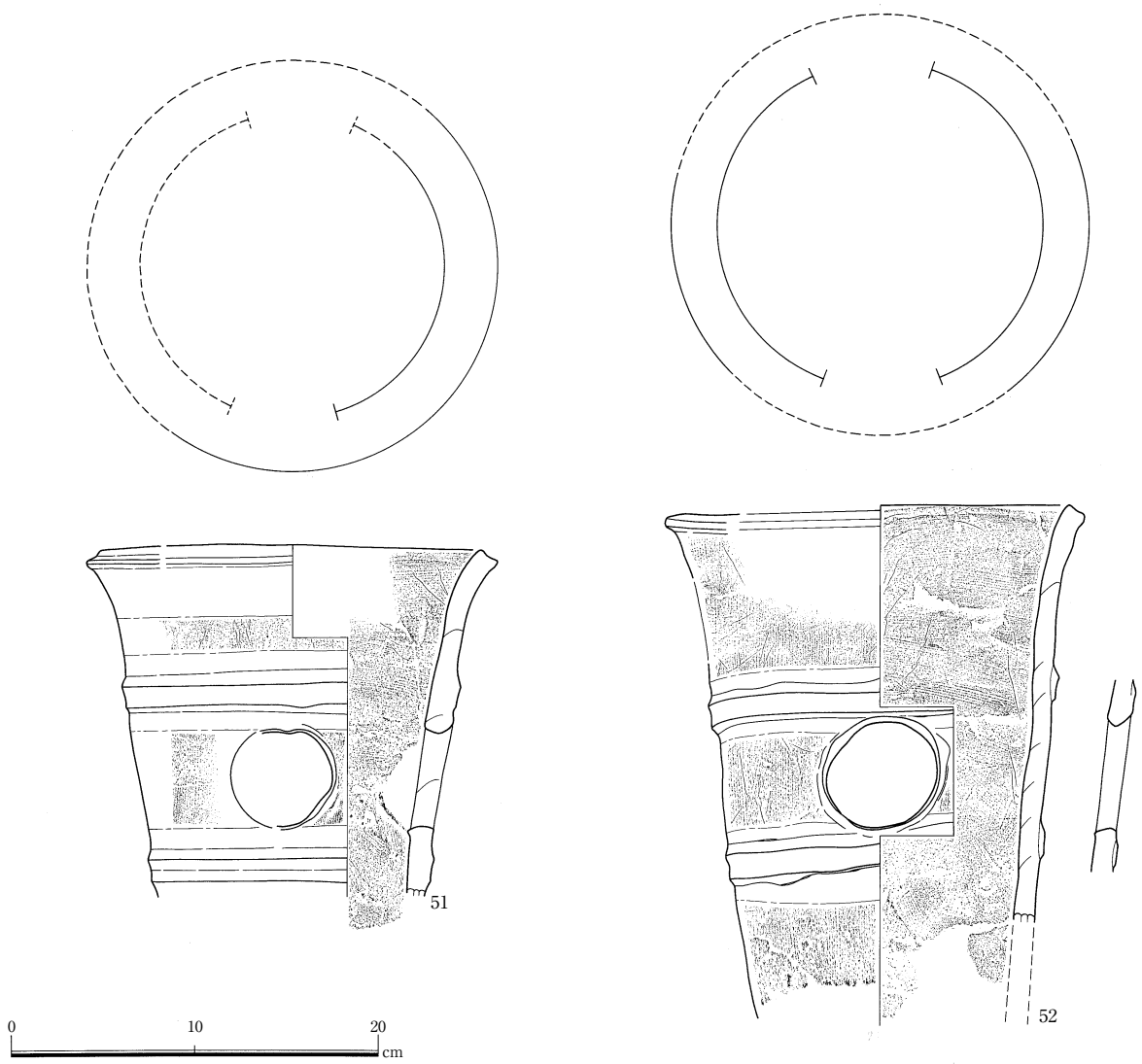
④は個性表現のための違いと思われるが、4にくらべ、筒袖全身像に見られるような違いを見出す



第29図　円筒埴輪（F類）実測図



第30図　円筒埴輪（F 類）実測図



第31図　円筒埴輪（F 類）実測図

ことはできない。また、この個体は 4 に比べハケメを残す傾向があるが、個性表現なのか、手抜きなのか、単なる偶然なのか、不明である。

なお、本個体も脚から腰を輪積みで一体成形するが、貼り付けによる上衣裾と股間付近の間隙部は、粘土板を横方向に噛ませる形で対処しているため、粘土板の上方に三角形の空間が生じている(37参照)。この処理は全身像共通のものと考えられる。

冠帽表現の人物埴輪半身像（ 2 体：第58・59・66図 6 ・ 7 ・44、図版60・65）

主体部前のテラスから、 2 体並んで出土している。特徴として、以下を挙げる。

① 右腕と左腕のポーズが対称でない。

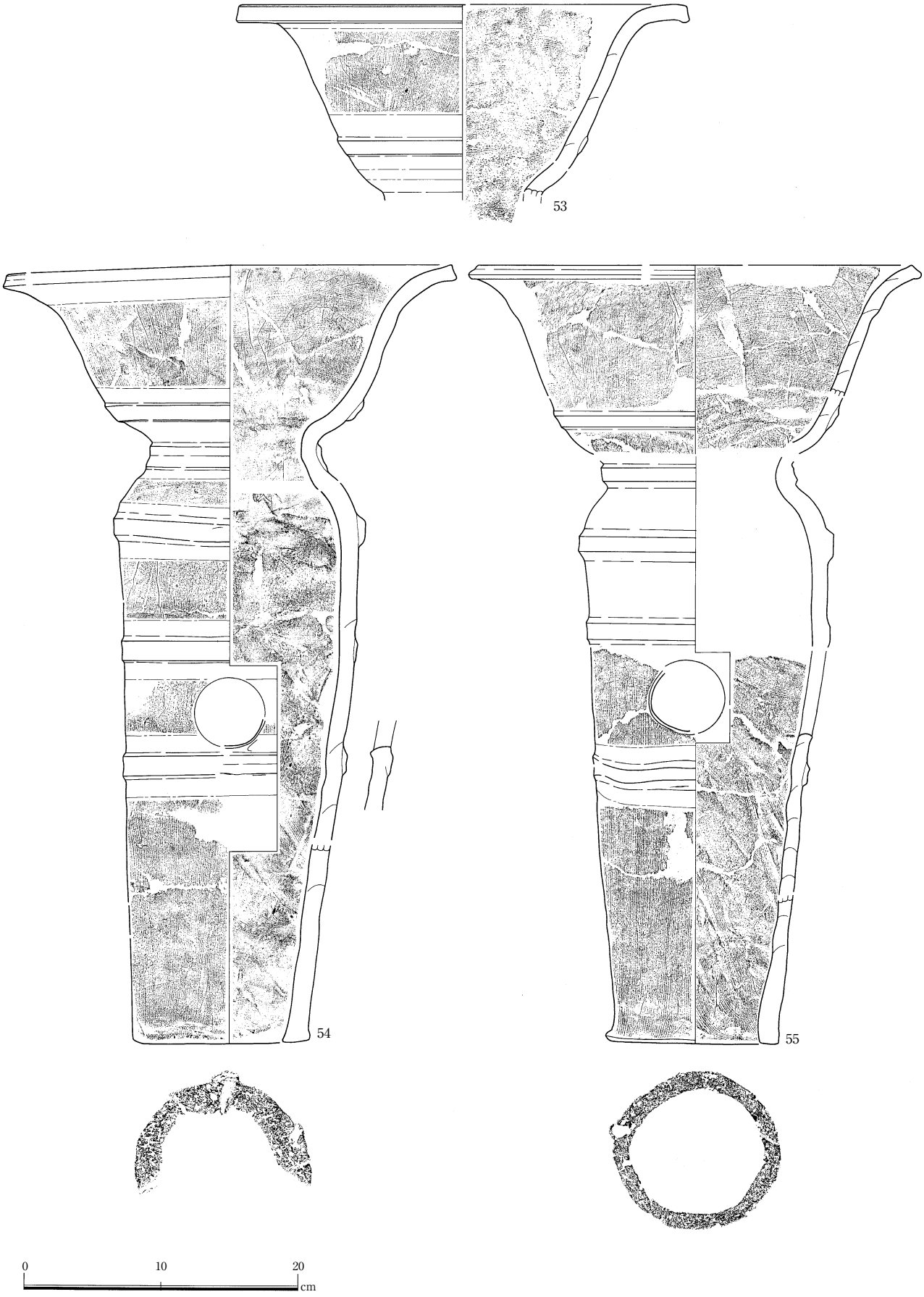
② 上衣の裾表現がない。

③ 腋の下に透孔を穿つ。

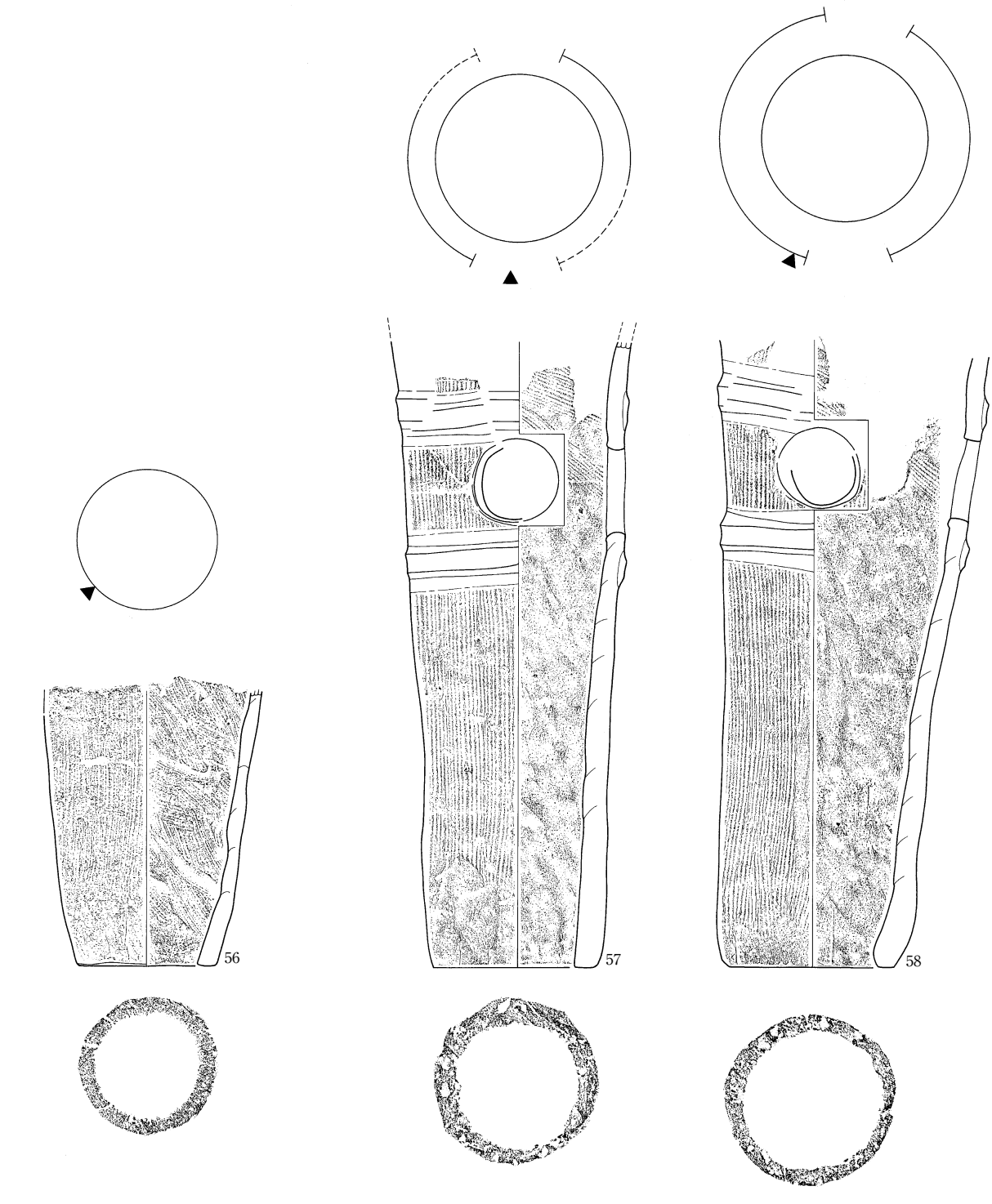
④ 持ち物の表現がない。

⑤ 上衣の合わせ目表現がない。

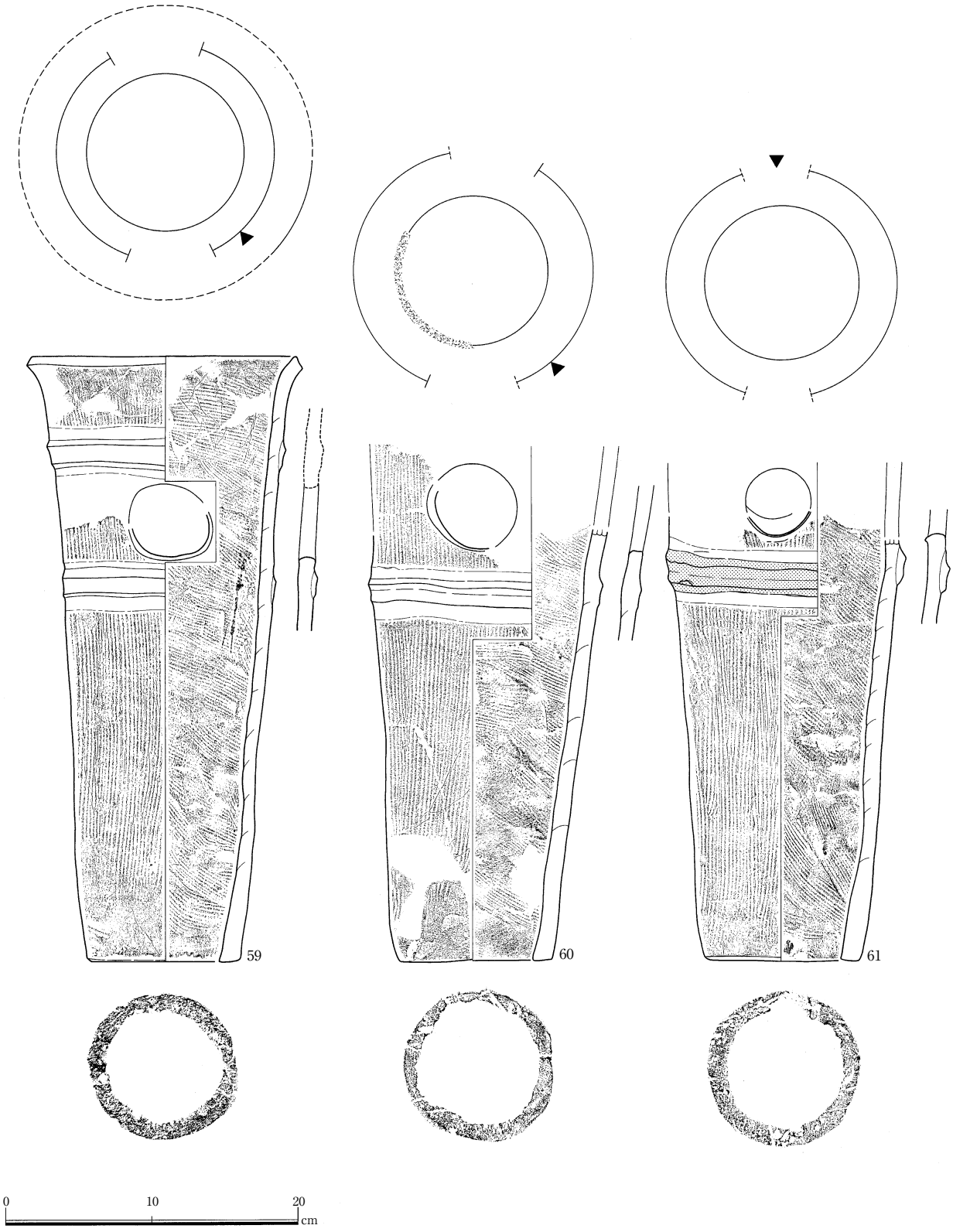
⑥ 首飾りが 1 個飛びで、他の人物像のように連続しない。



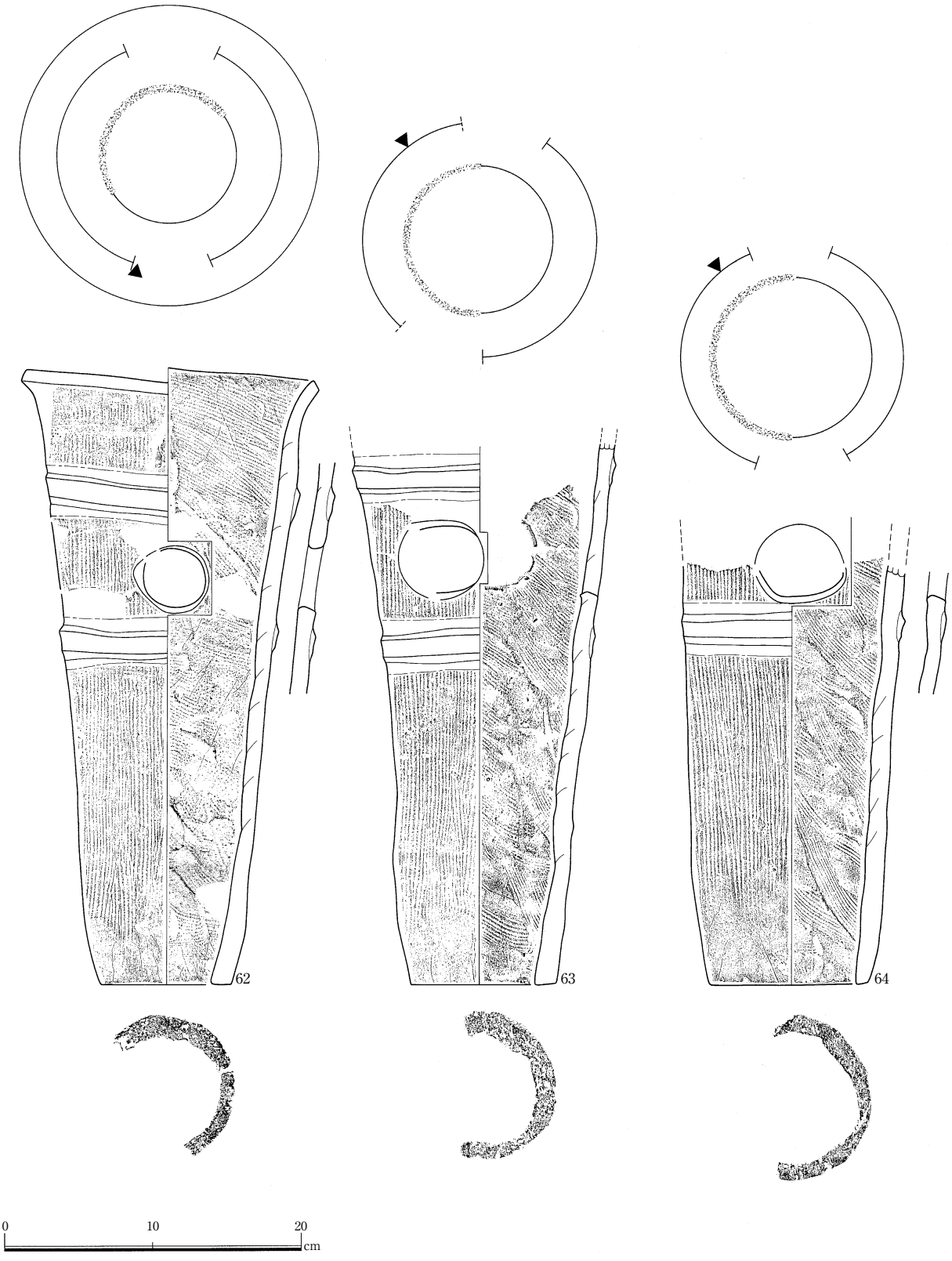
第32図　朝顔形埴輪（F 類）実測図



第33図　円筒埴輪（G・H類）実測図



第34図　円筒埴輪（H 類）実測図



第35図　円筒埴輪（H 類）実測図

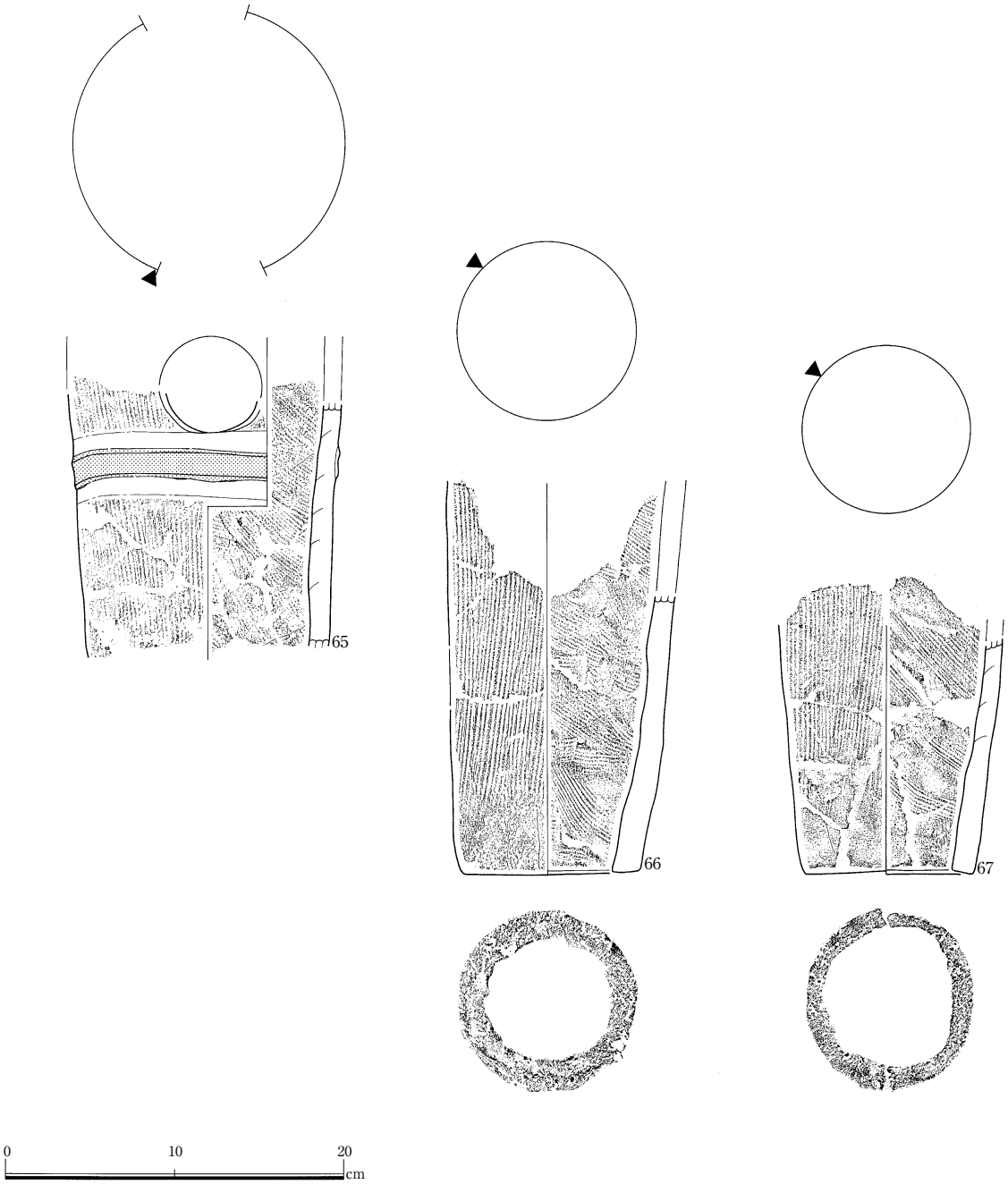
⑦　冠帽全身像と同様の頭巾を被る。

首飾り表現の違いにより、他の人物像に対し個性化を図ったものと思われる。

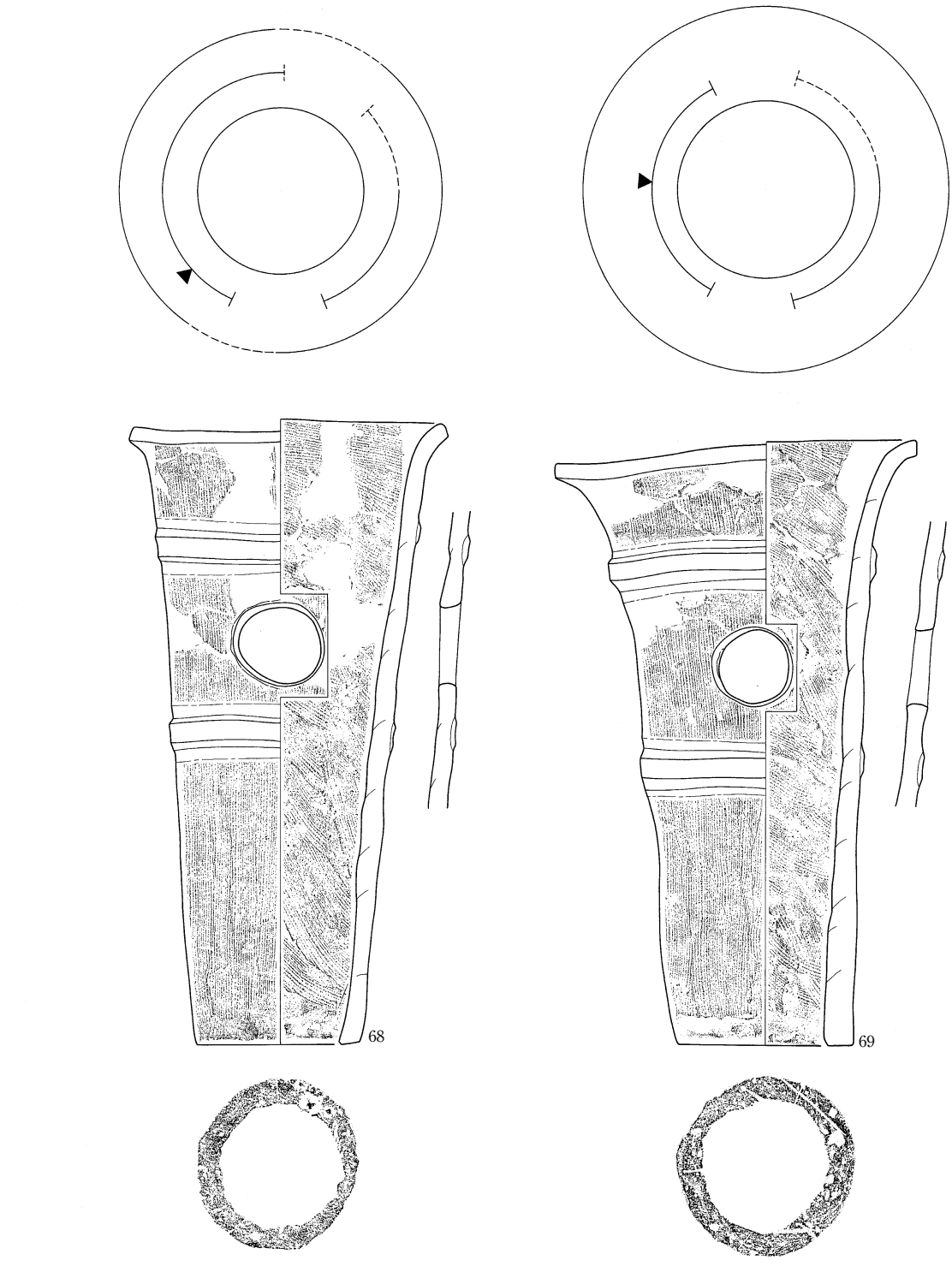
6は全高（復元）81.7cm、全幅23.7cm、奥行20.4cmを測る。基台部を除いた人物高は58.4cmである。

基台部から頭頂部まで輪積み成形している。

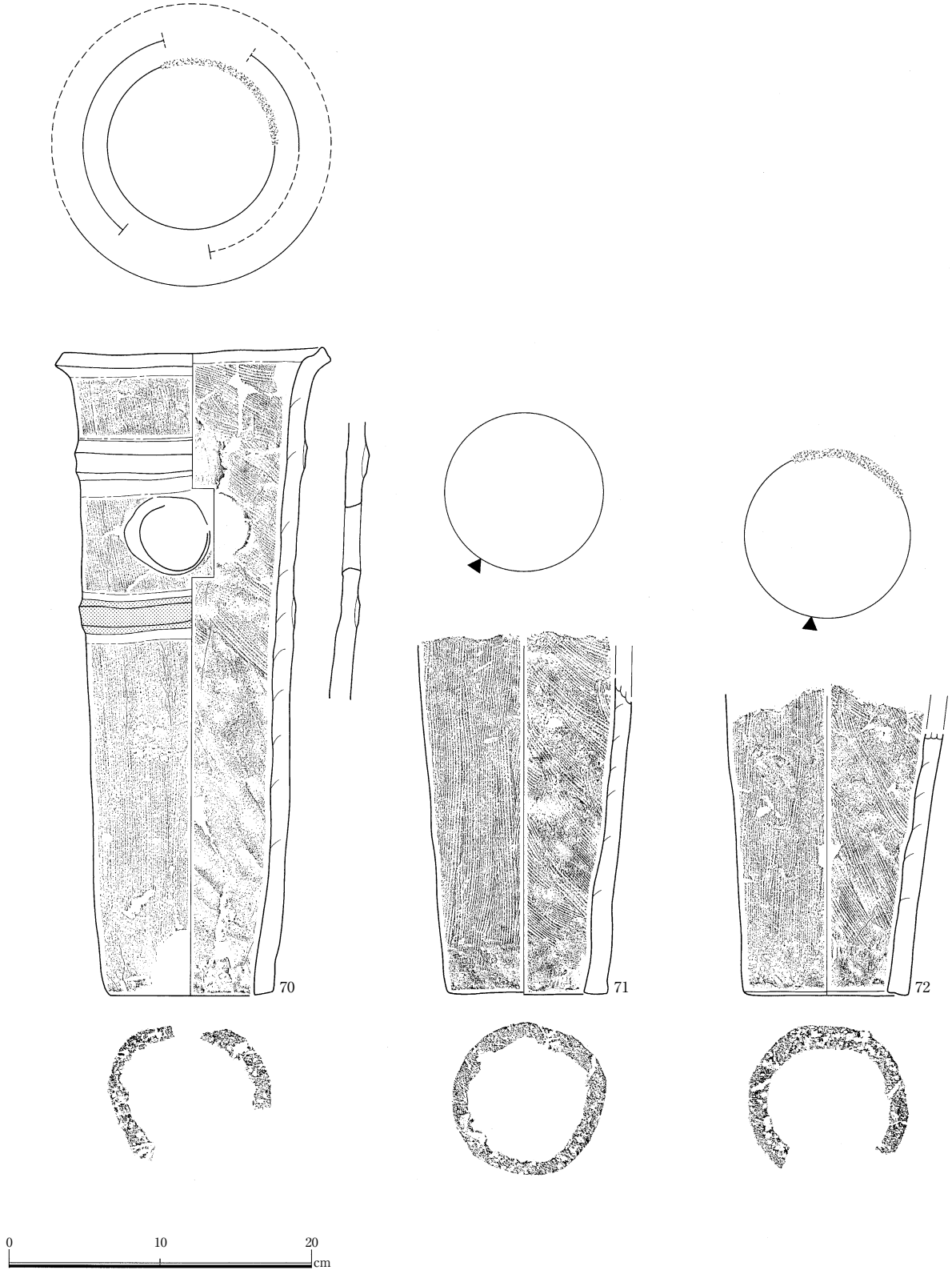
基台部は第一凸帯までで、腰部から胴部にかけて径を絞り込む。胴部形成後、内面調整として胴部・腰部・基台部の順で右傾斜のハケメを入れる。すべての透孔の穿孔は内面調整後に行われ、粘土のささくれが見られる。外面は頭頂まで成形した後、腕部を接合し、底部から腰部上位、腰部中位から胴部上位、頸部から頭部、の順に縦方向のハケメを入れる。基台部上位側面と腋の下に透孔を穿



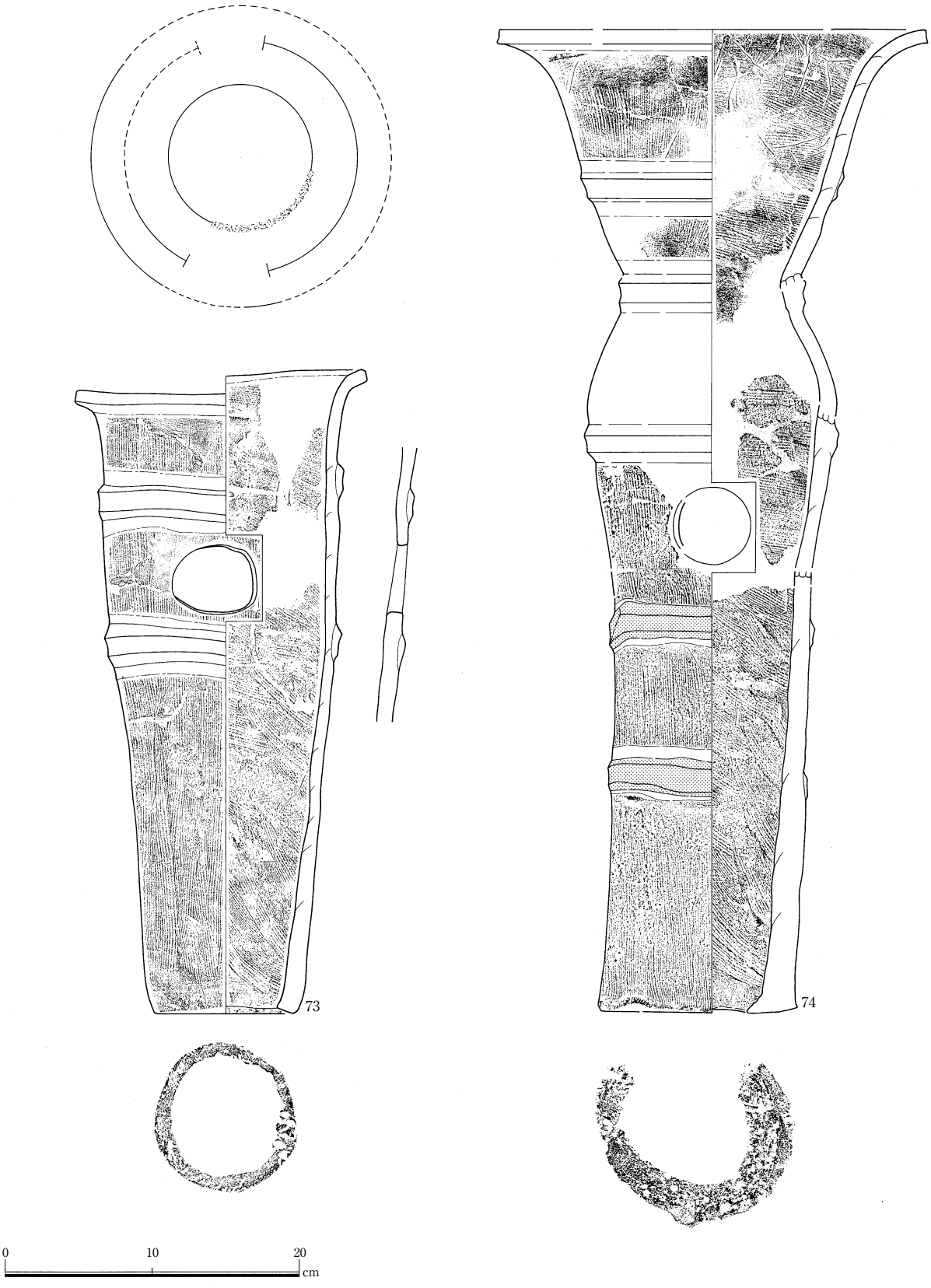
第36図　円筒埴輪（H類）実測図



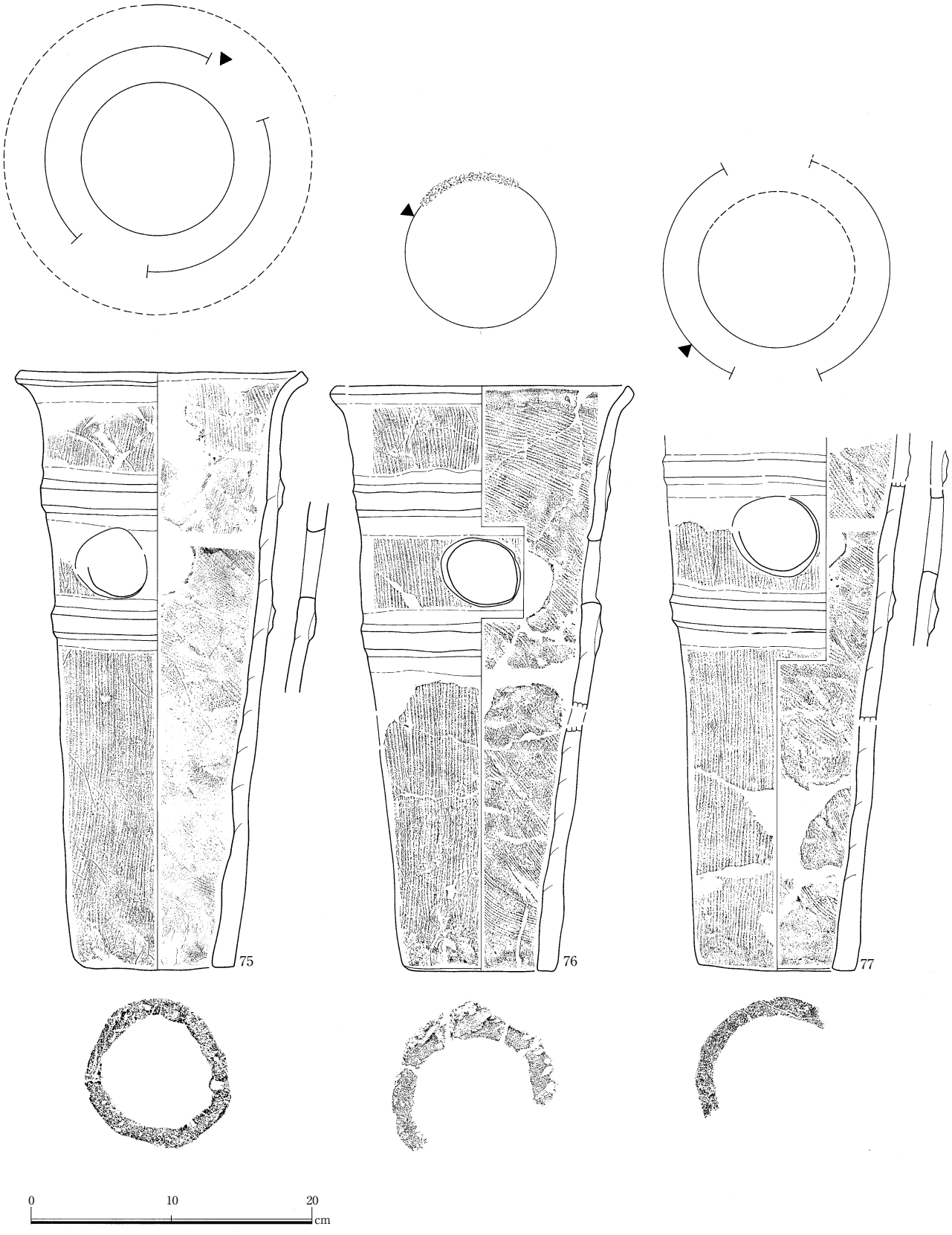
第37図　円筒埴輪（Ⅰ類）実測図



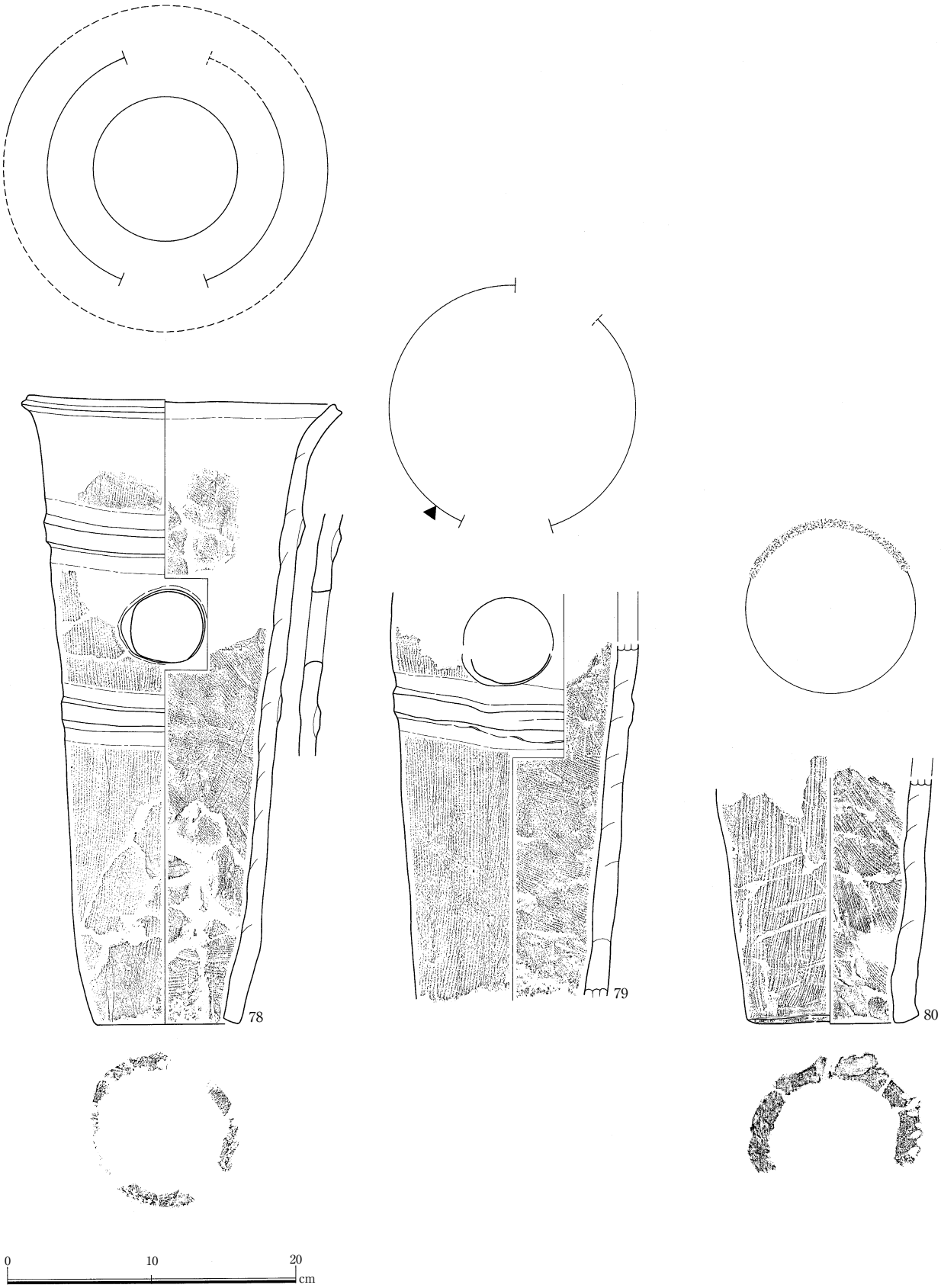
第38図　円筒埴輪（Ⅰ類）実測図



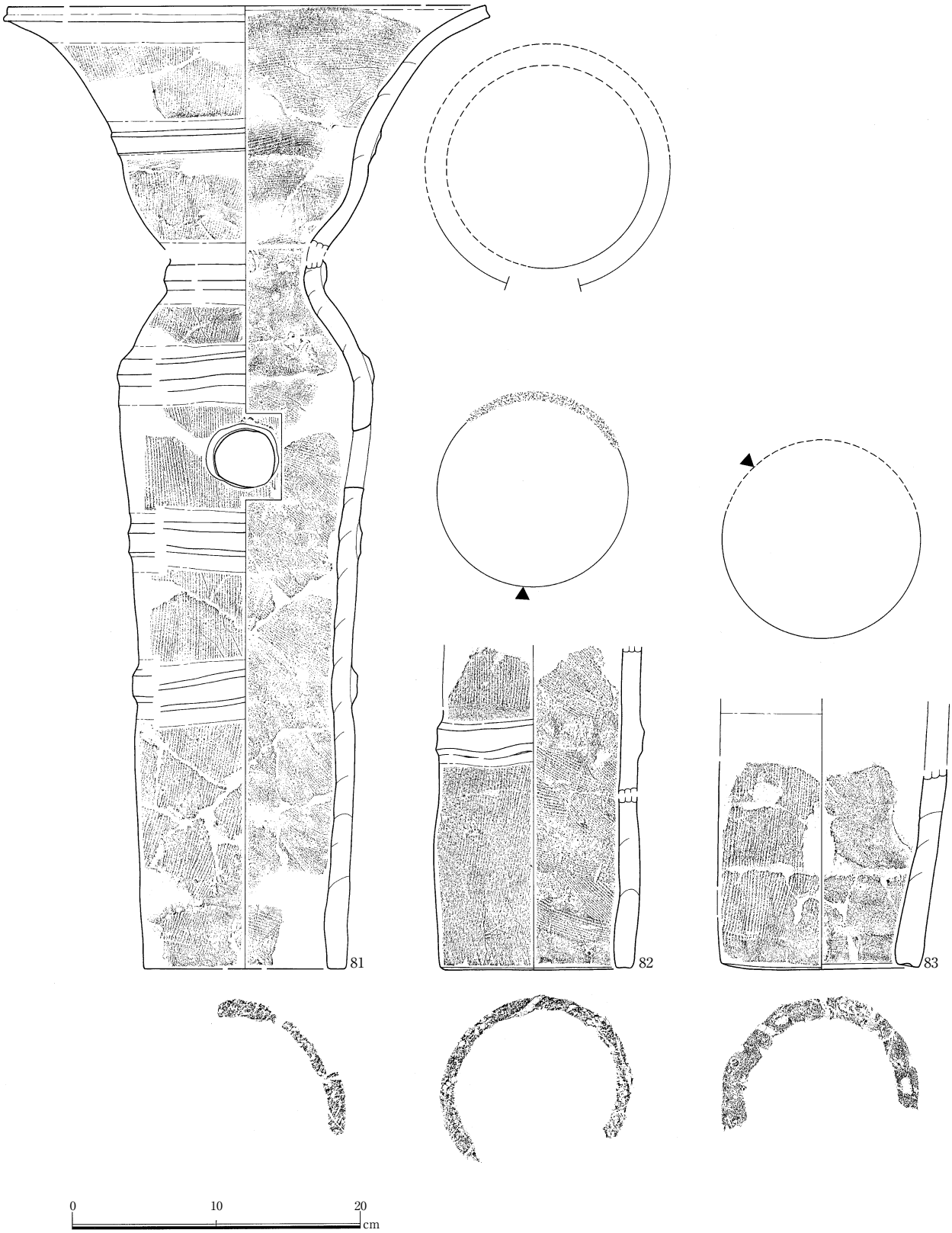
第39図　円筒埴輪・朝顔形埴輪（Ⅰ類）実測図



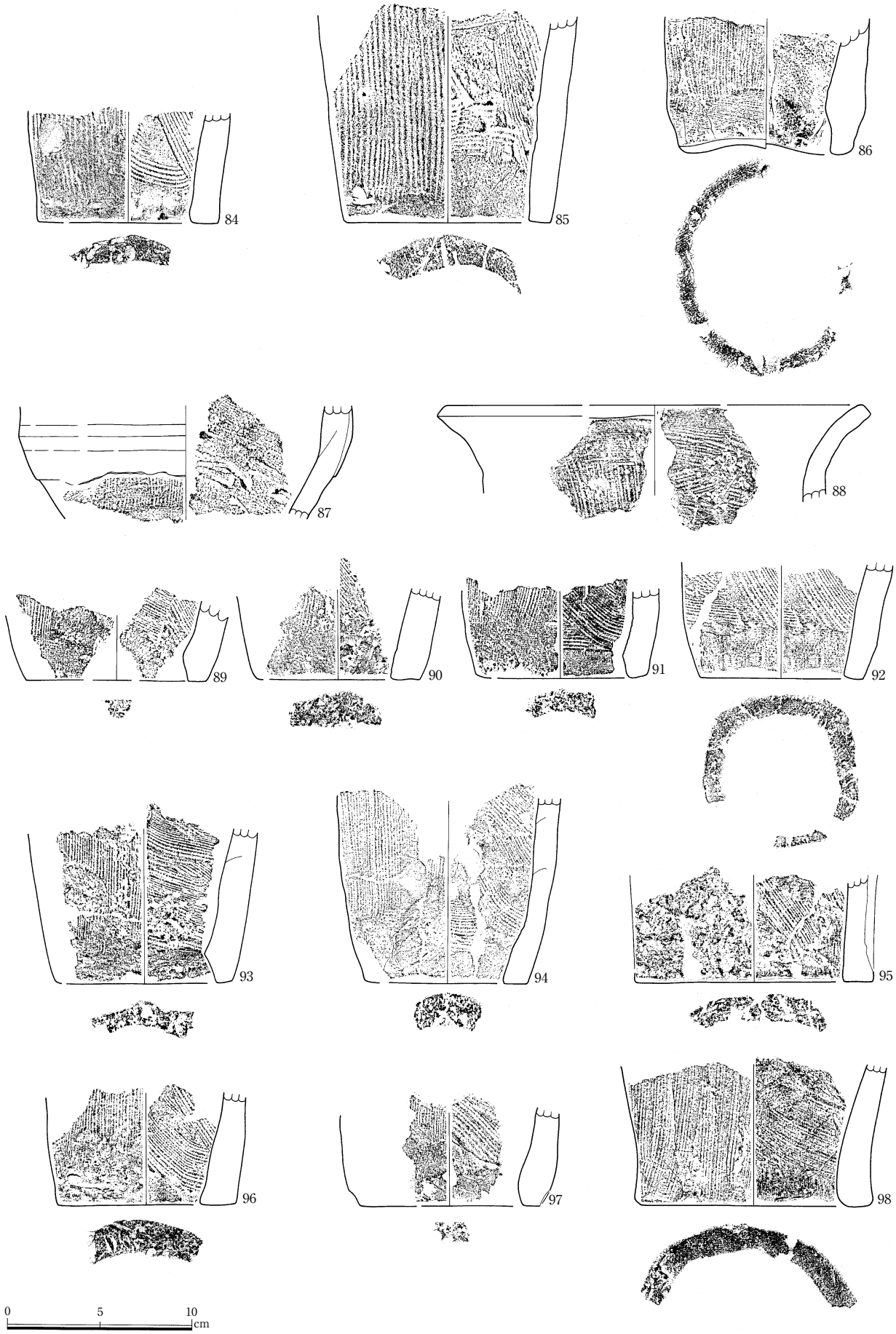
第40図　円筒埴輪（J 類）実測図



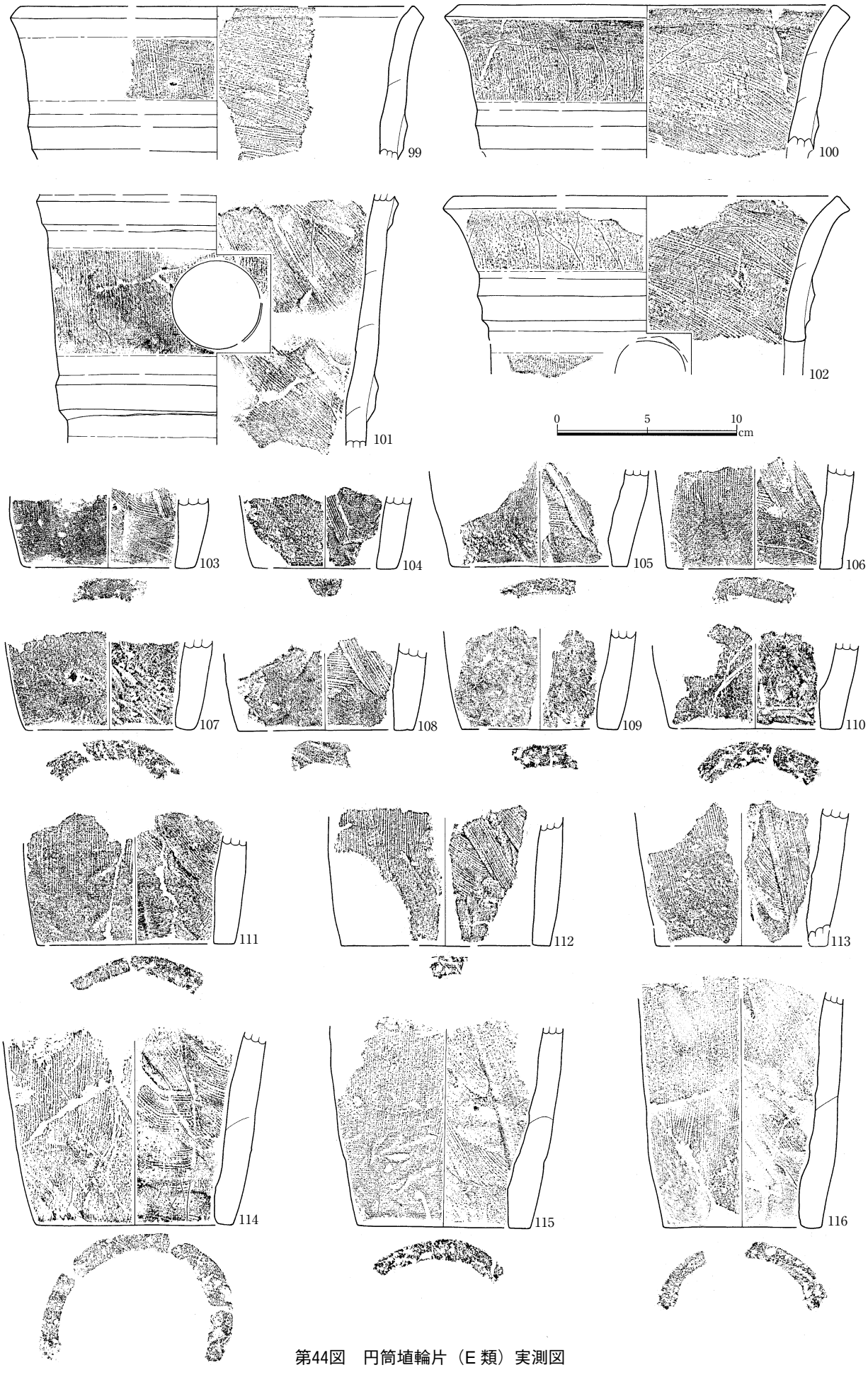
第41図　円筒埴輪（K・L類）実測図



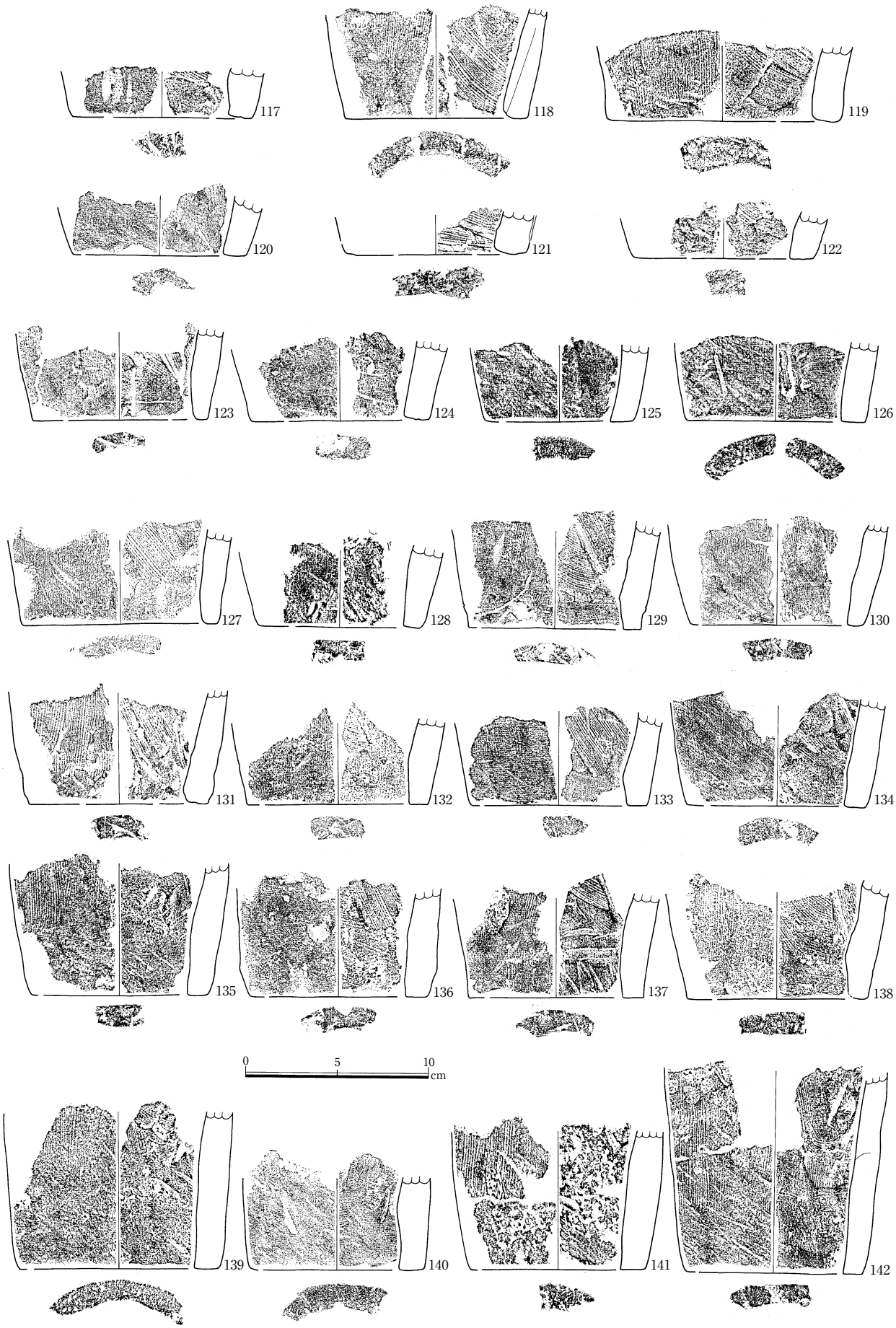
第42図　朝顔形埴輪（K 類）実測図



第43図　円筒埴輪片（A・B・D 類）実測図



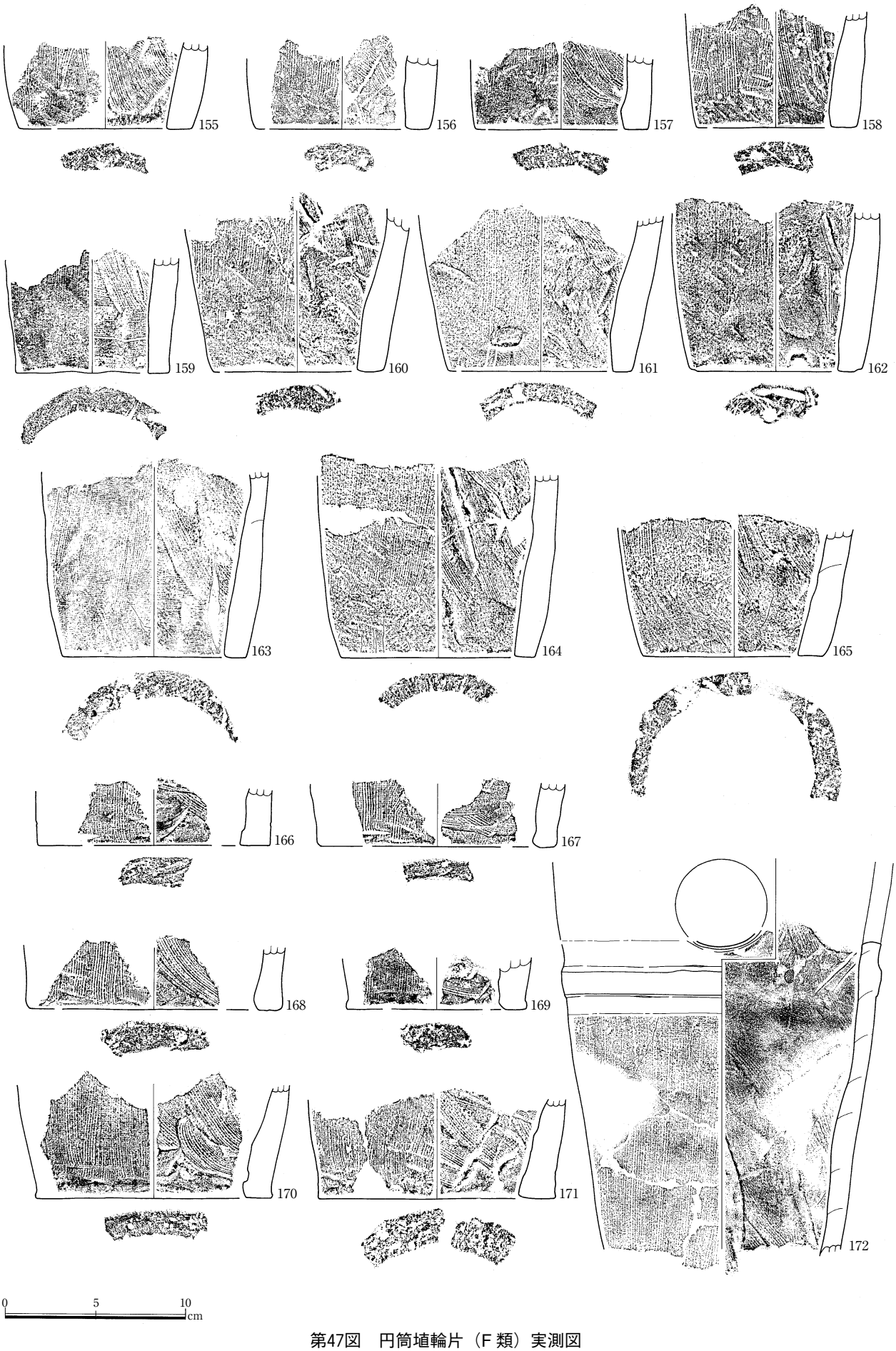
第44図　円筒埴輪片（E 類）実測図



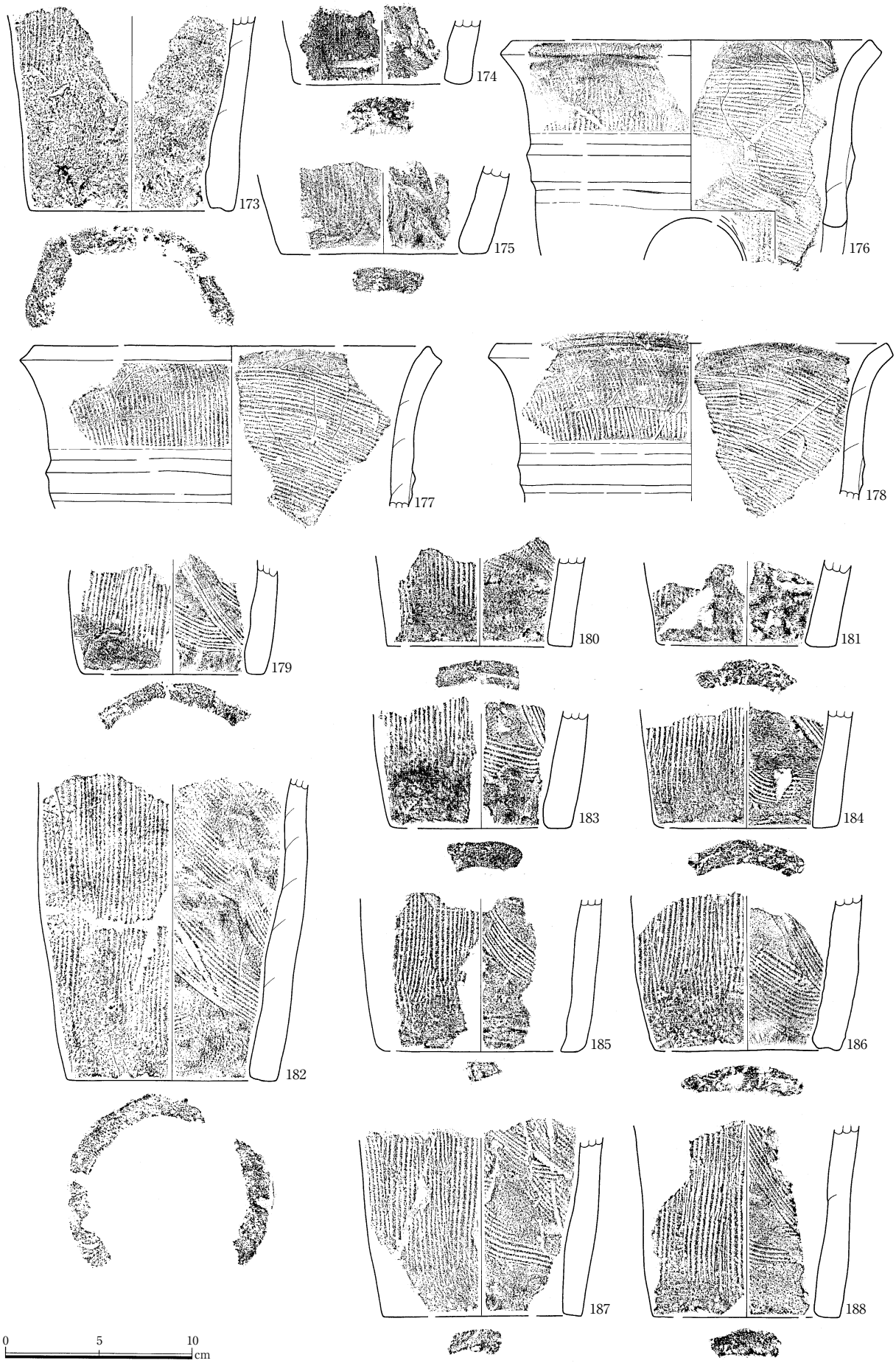
第45図　円筒埴輪片（E・F類）実測図



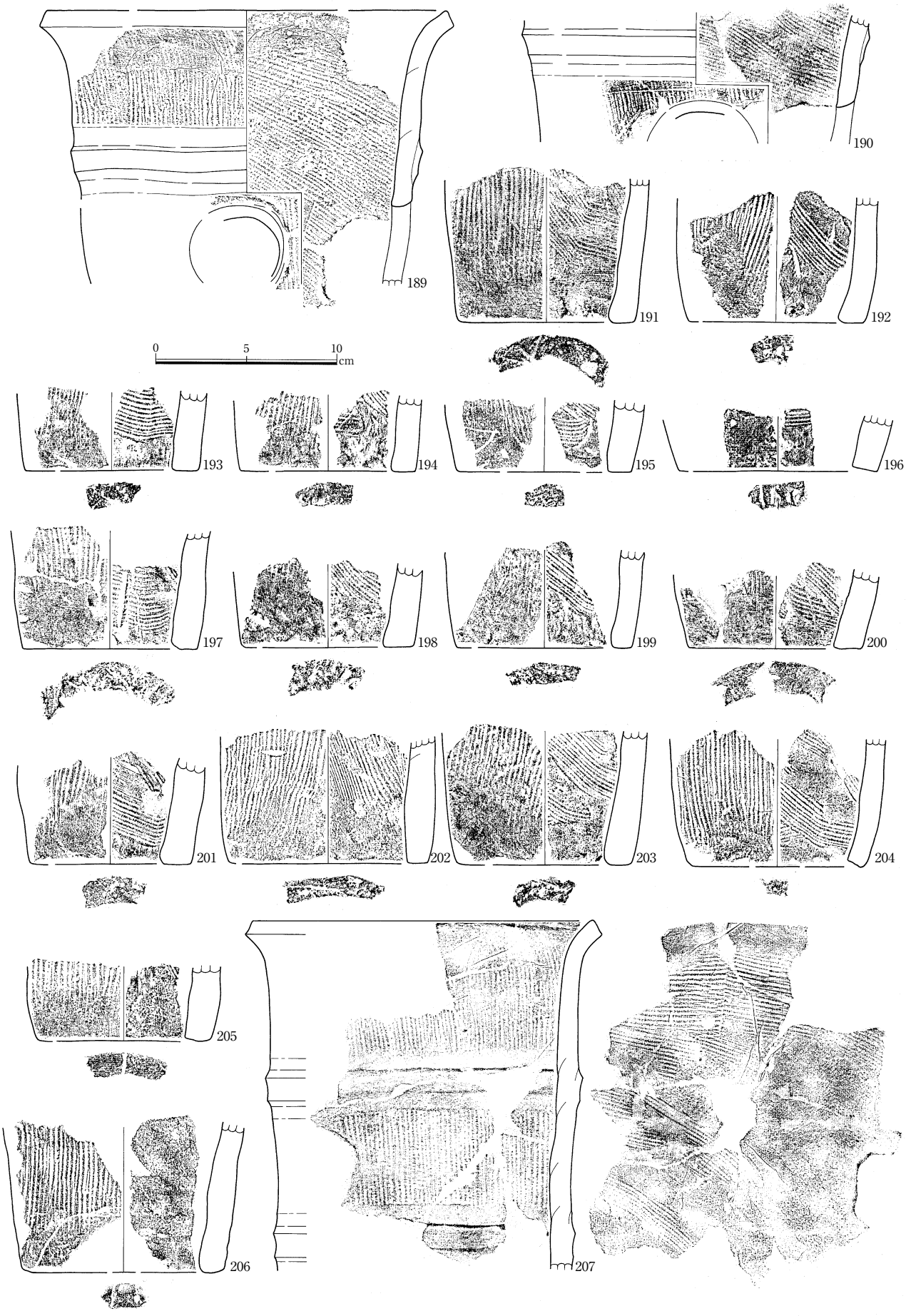
第46図　円筒埴輪片（F 類）実測図



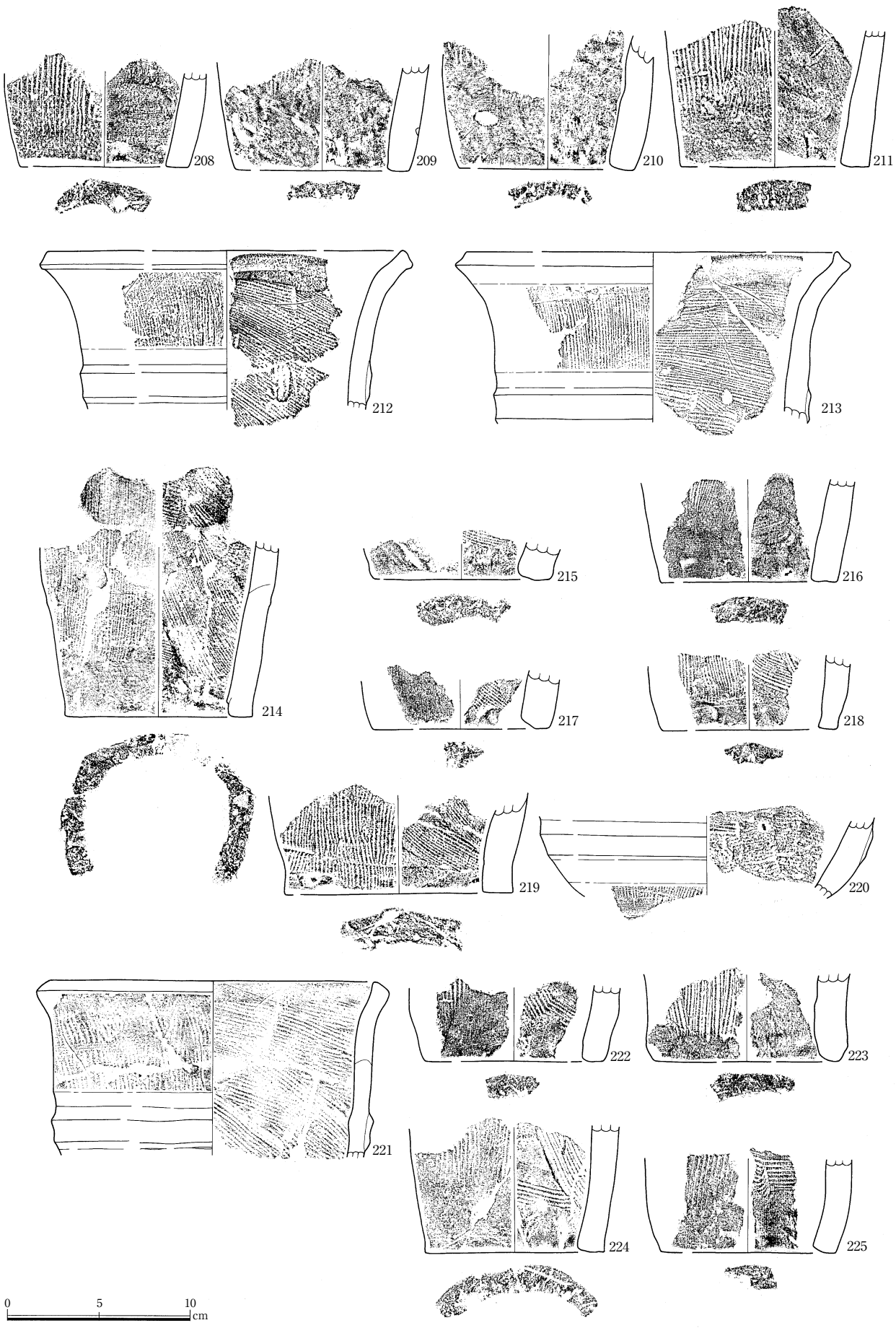
第47図　円筒埴輪片（F 類）実測図



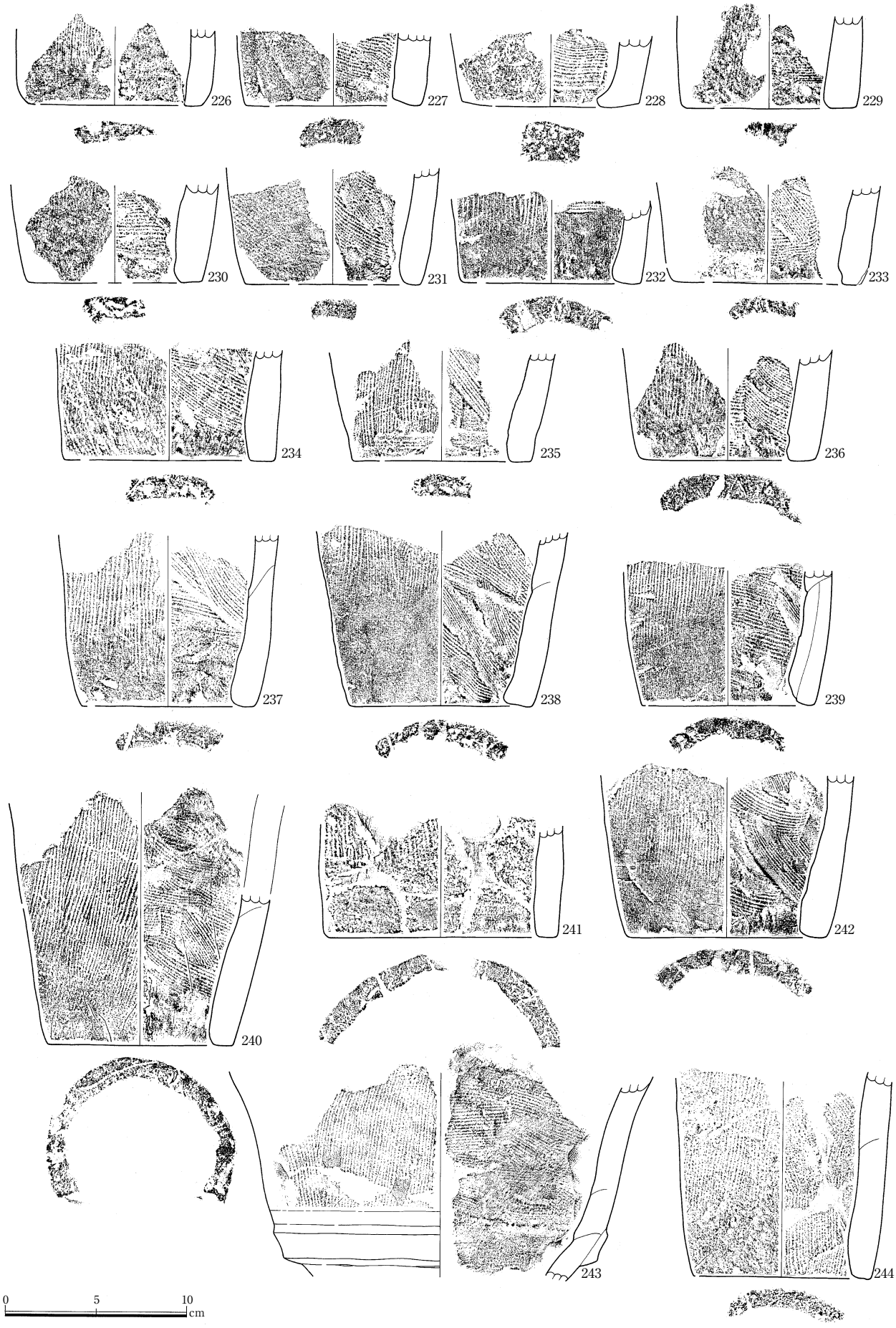
第48図　円筒埴輪片（G・H類）実測図



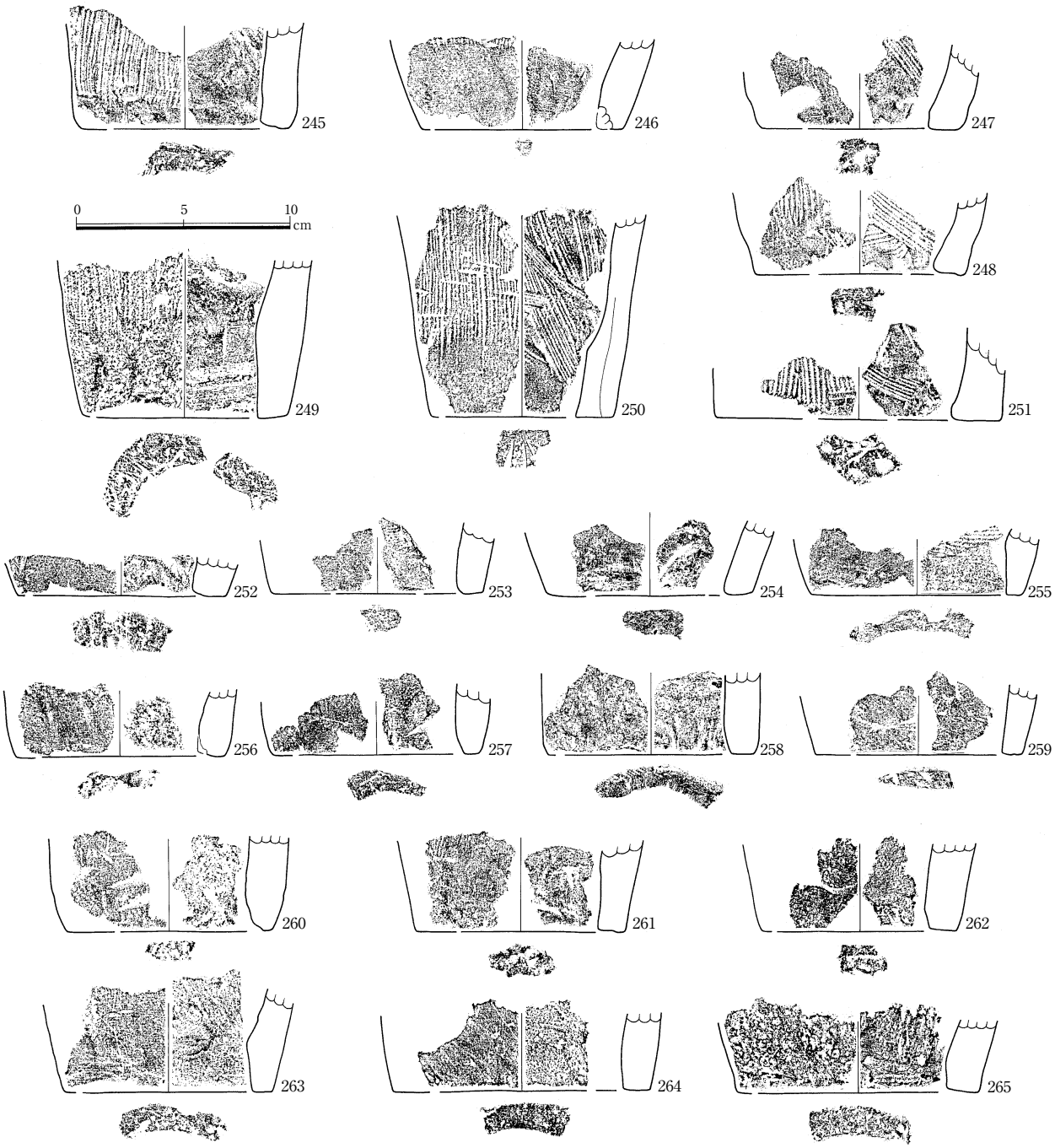
第49図　円筒埴輪片（H 類）実測図



第50図　円筒埴輪片（H・I・J類）実測図



第51図　円筒埴輪片（K 類）実測図

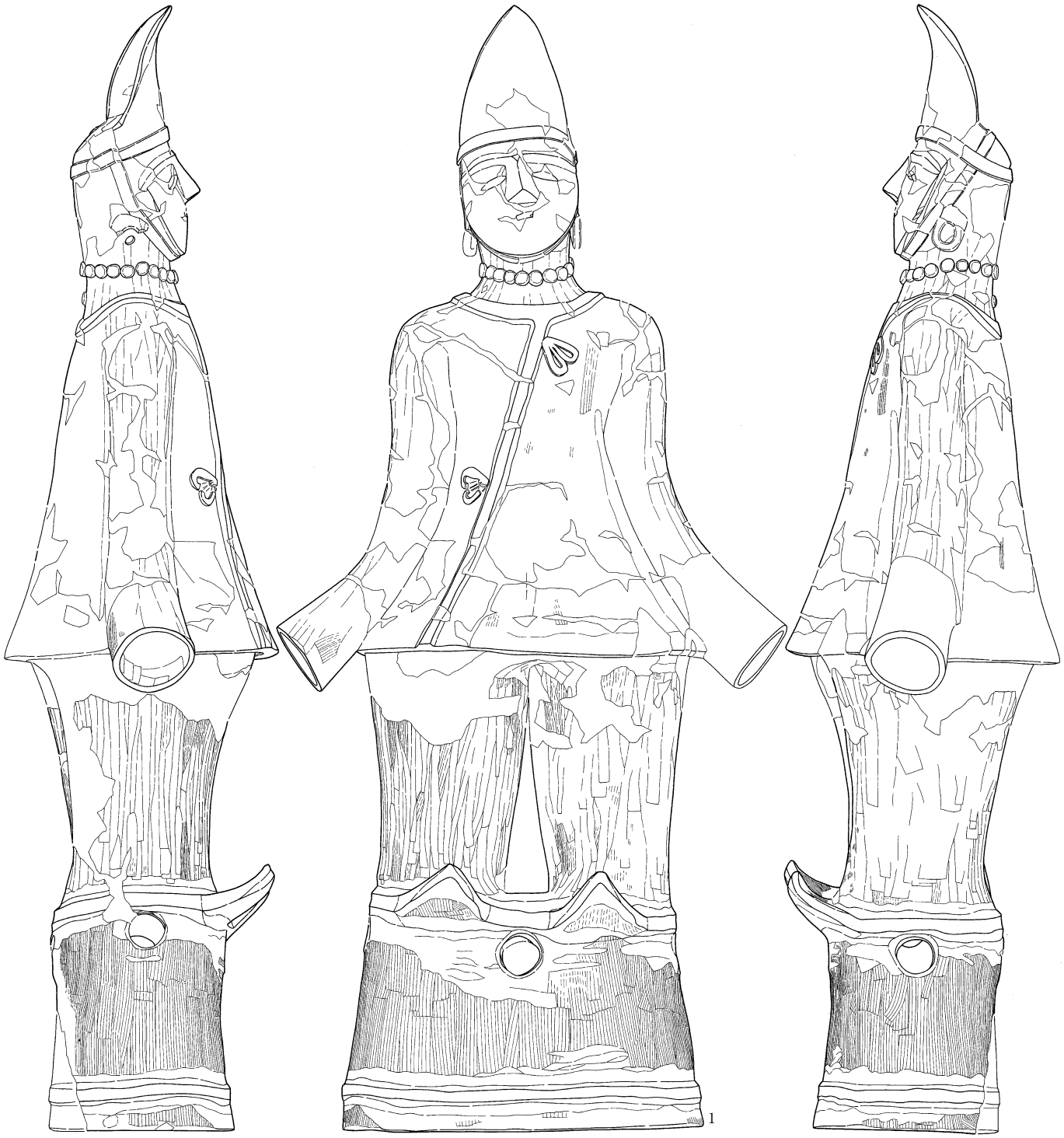


第52図　円筒埴輪片（L 類）実測図

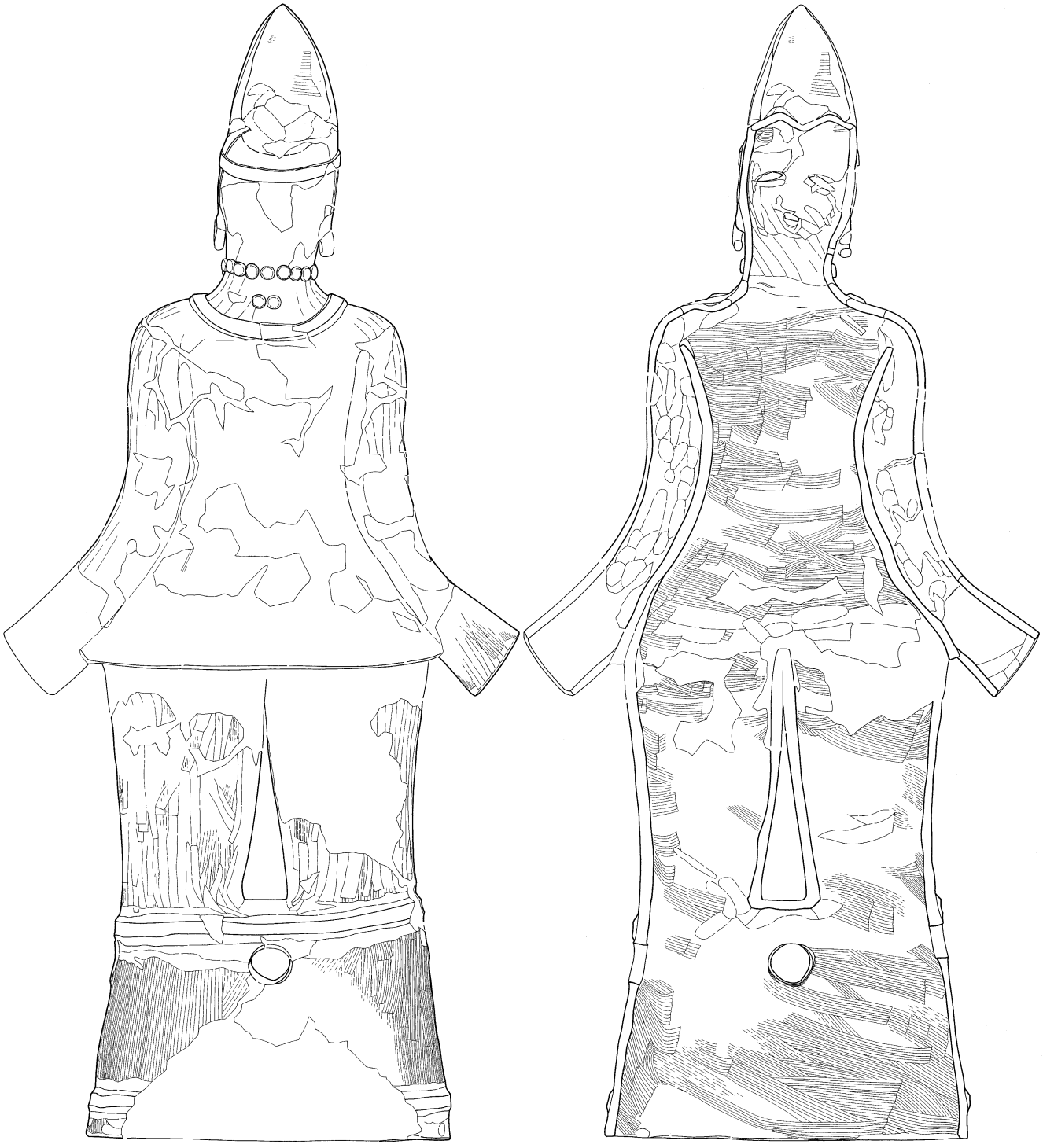
孔、基台部上位と腰部上位に 2 条の凸帯を廻らし、上下をナデつける。上位凸帯は帯表現を兼ね、下面の横方向ナデ幅が広い。胸部以上と腕部のハケメをナデ消している。

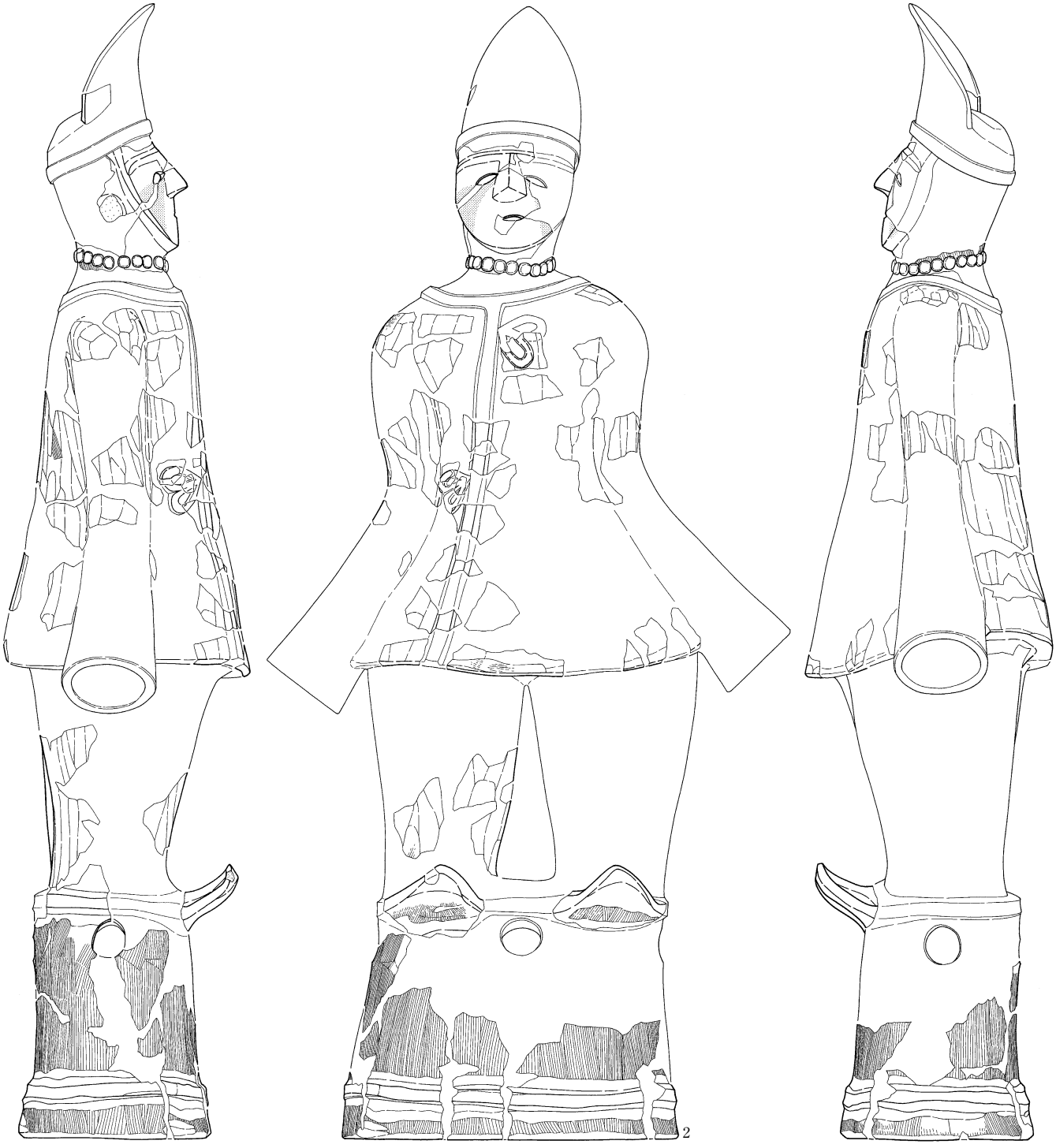
腕部は粘土棒を成形したもので、粘土紐貼付により親指を表現する。掌は木板で押圧成形したため木目圧痕が付着するが、ナデ消さない。親指以外の指表現はなく、手の甲から指にかけてやや強く押し、若干窪ませる。ソケット状に胴部に差し込み、ハケメを入れるが、ヘラナデ調整で消えている。

頭部は輪積み成形後、粘土板を貼り付け顔面にする。眉・鼻・目・口の表現は全身像に一致する。頭頂部は 7 と同一の形状を持つ（44参照）。

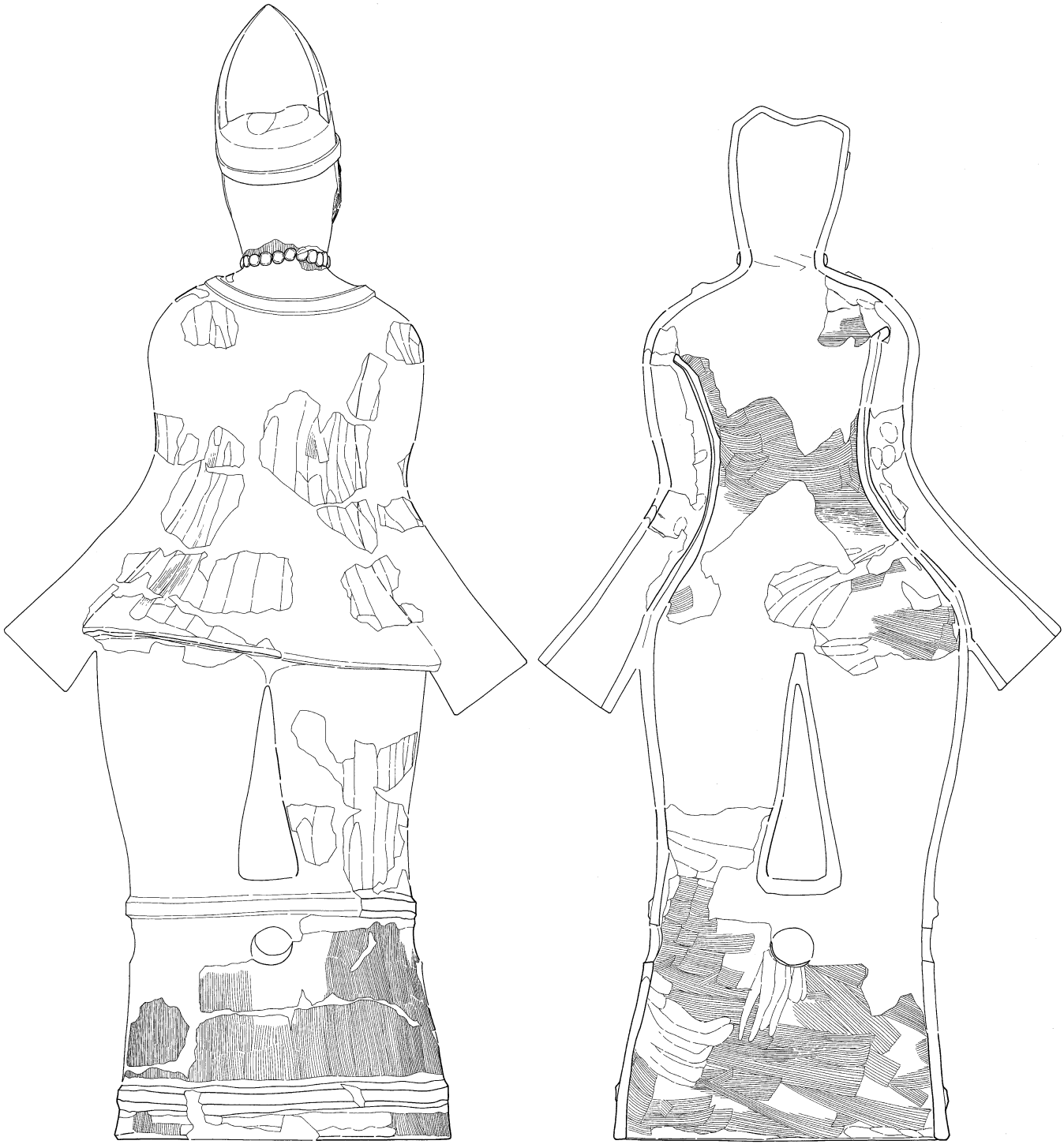


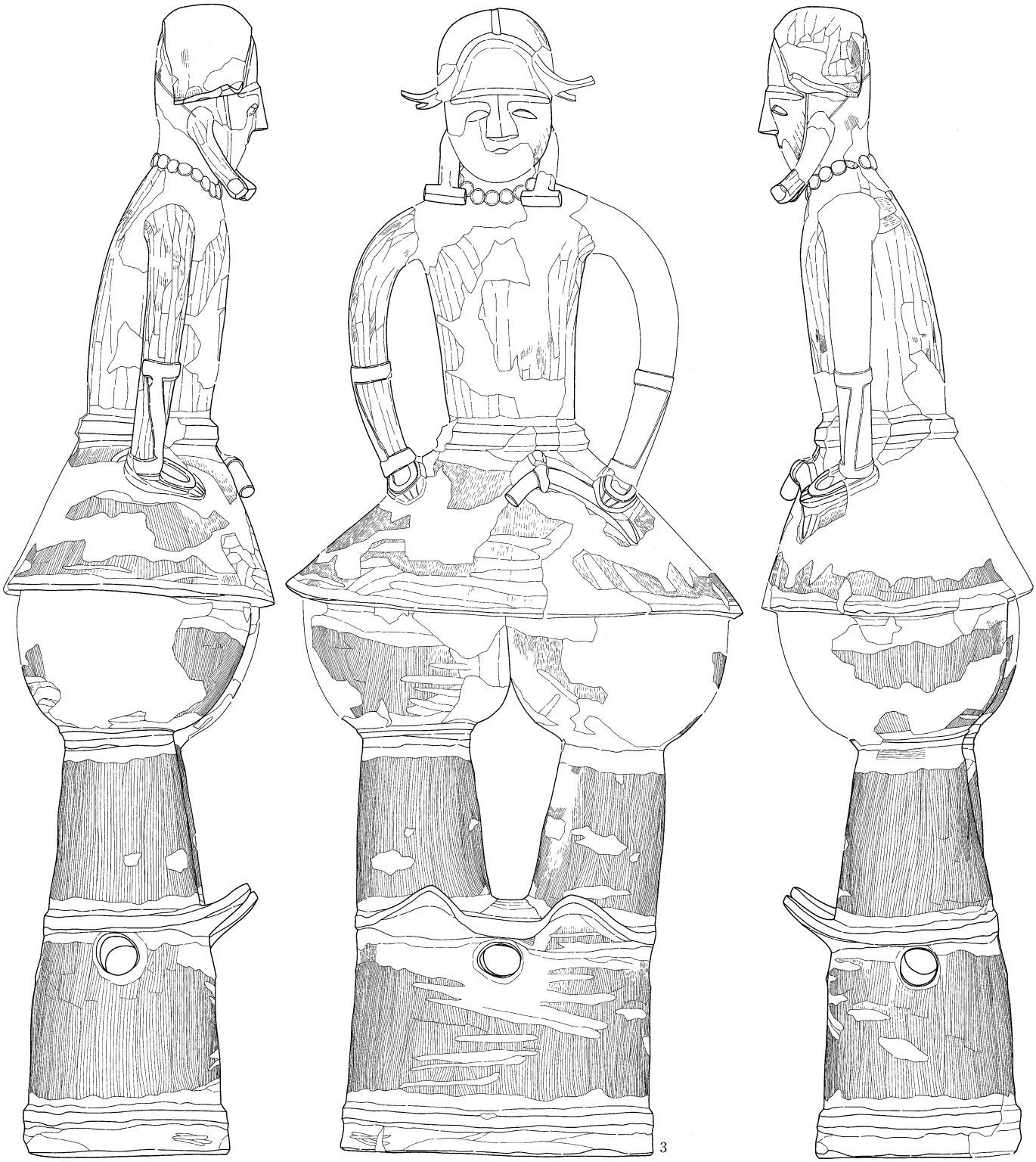
第53図　筒袖表現の人物埴輪全身像１実測図



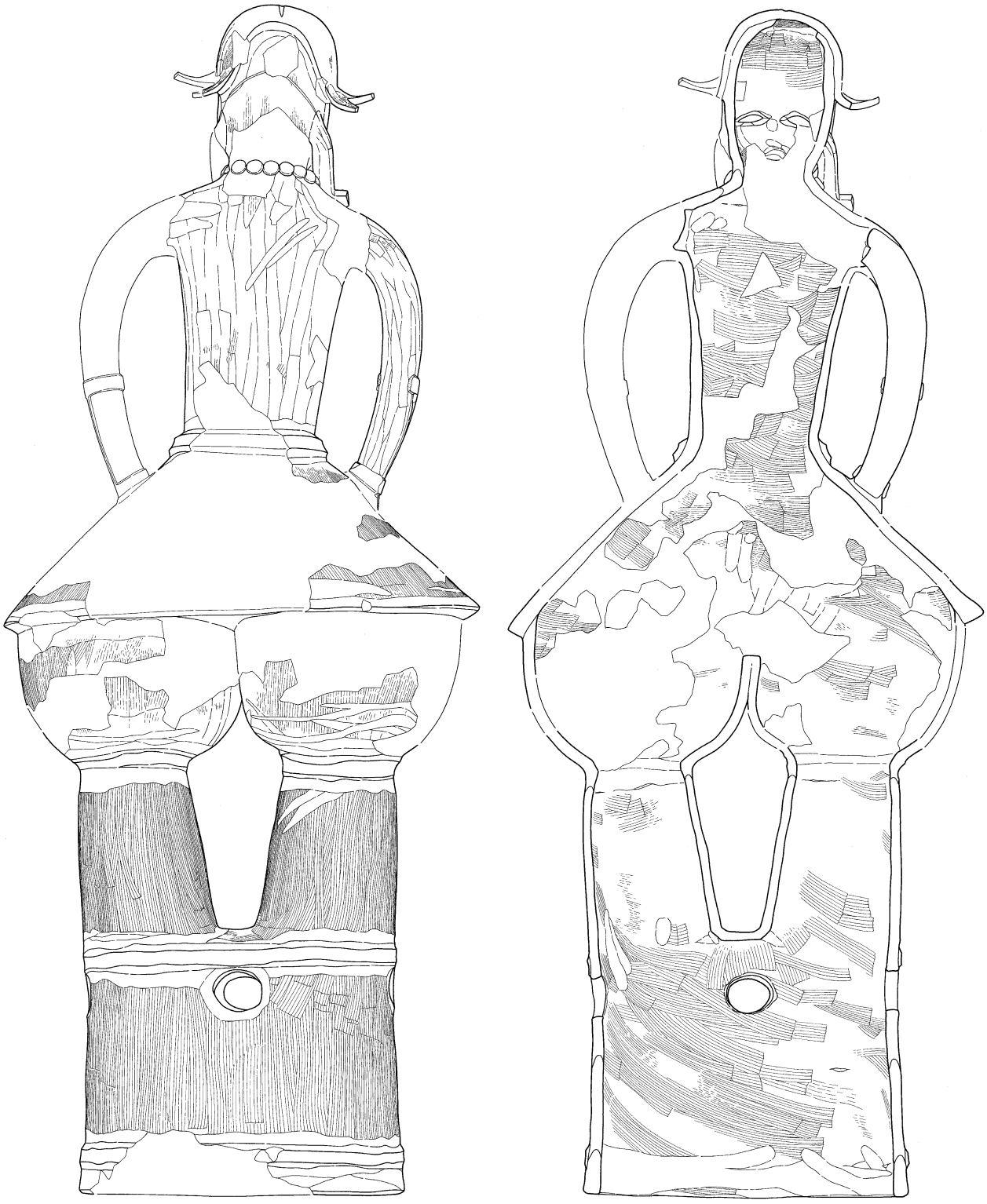


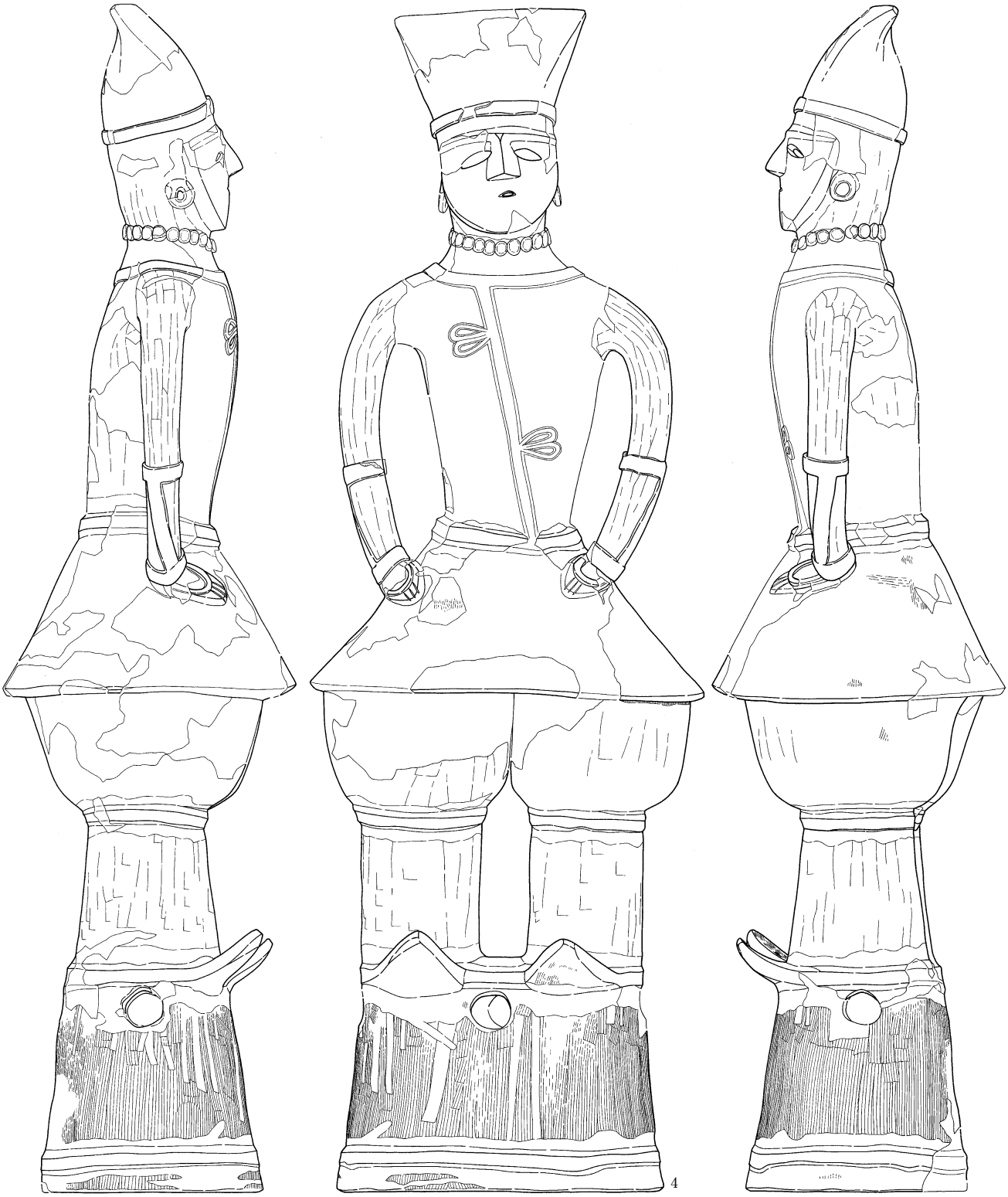
第54図　筒袖表現の人物埴輪全身像２実測図





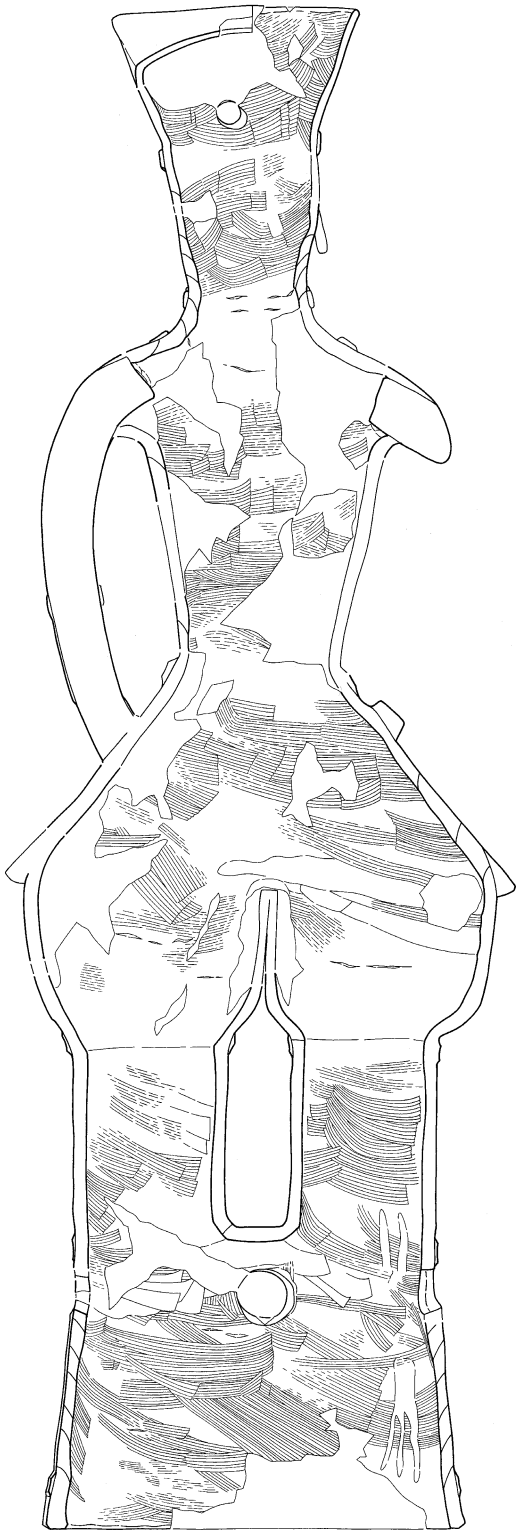
第55図　振分髪表現の人物埴輪全身像 3 実測図

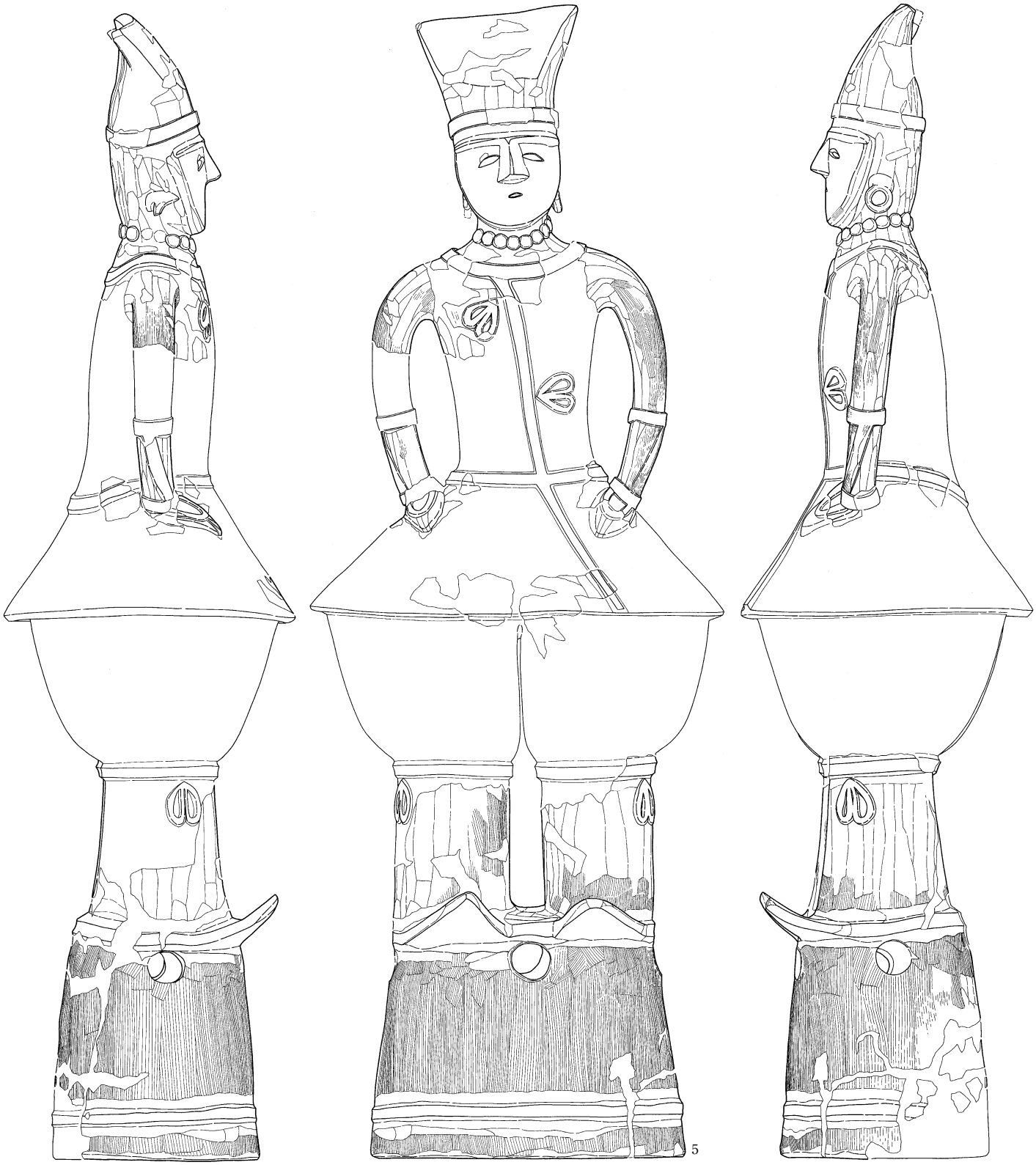




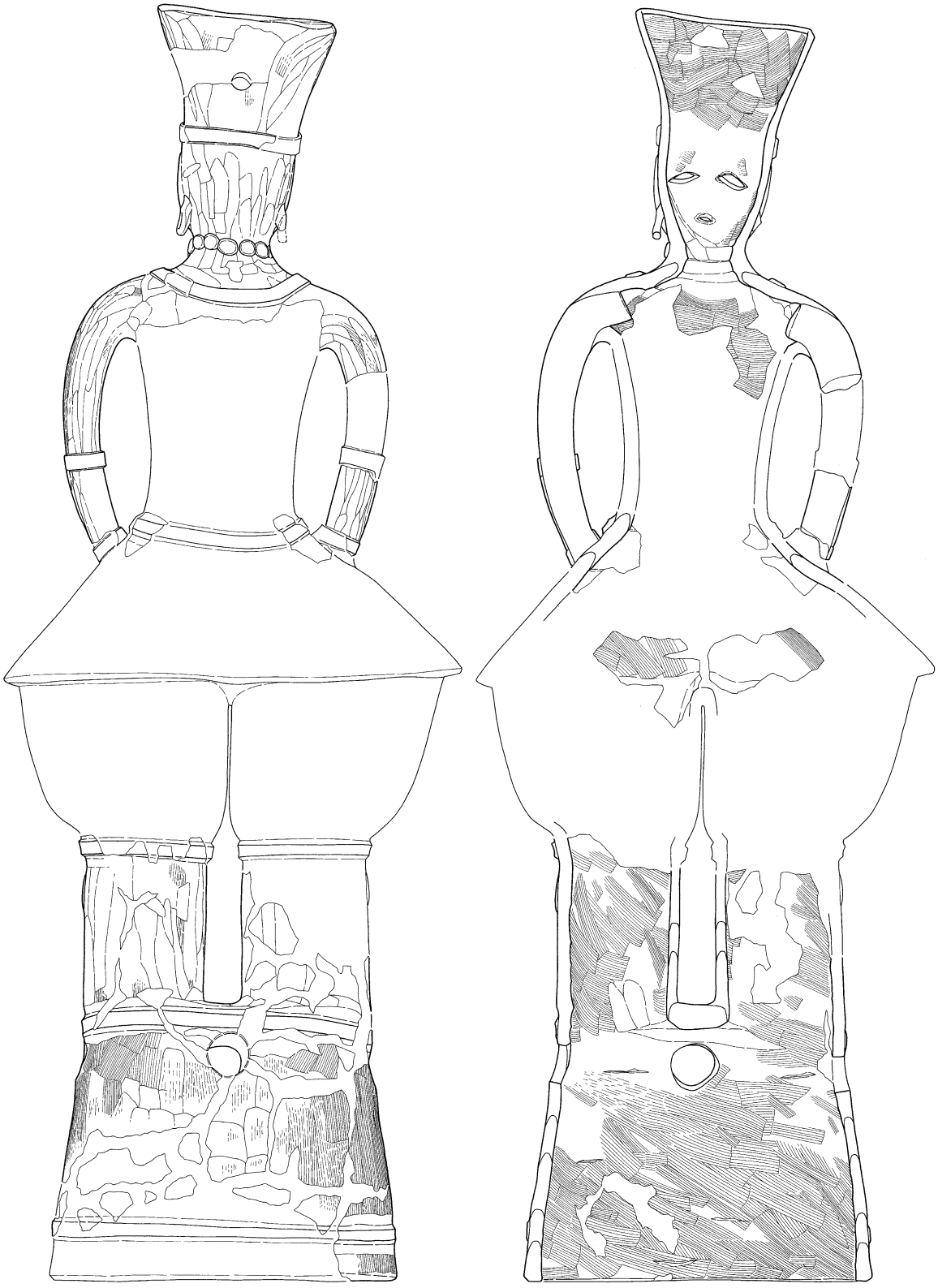
第56図　冠帽表現の人物埴輪全身像 4 実測図





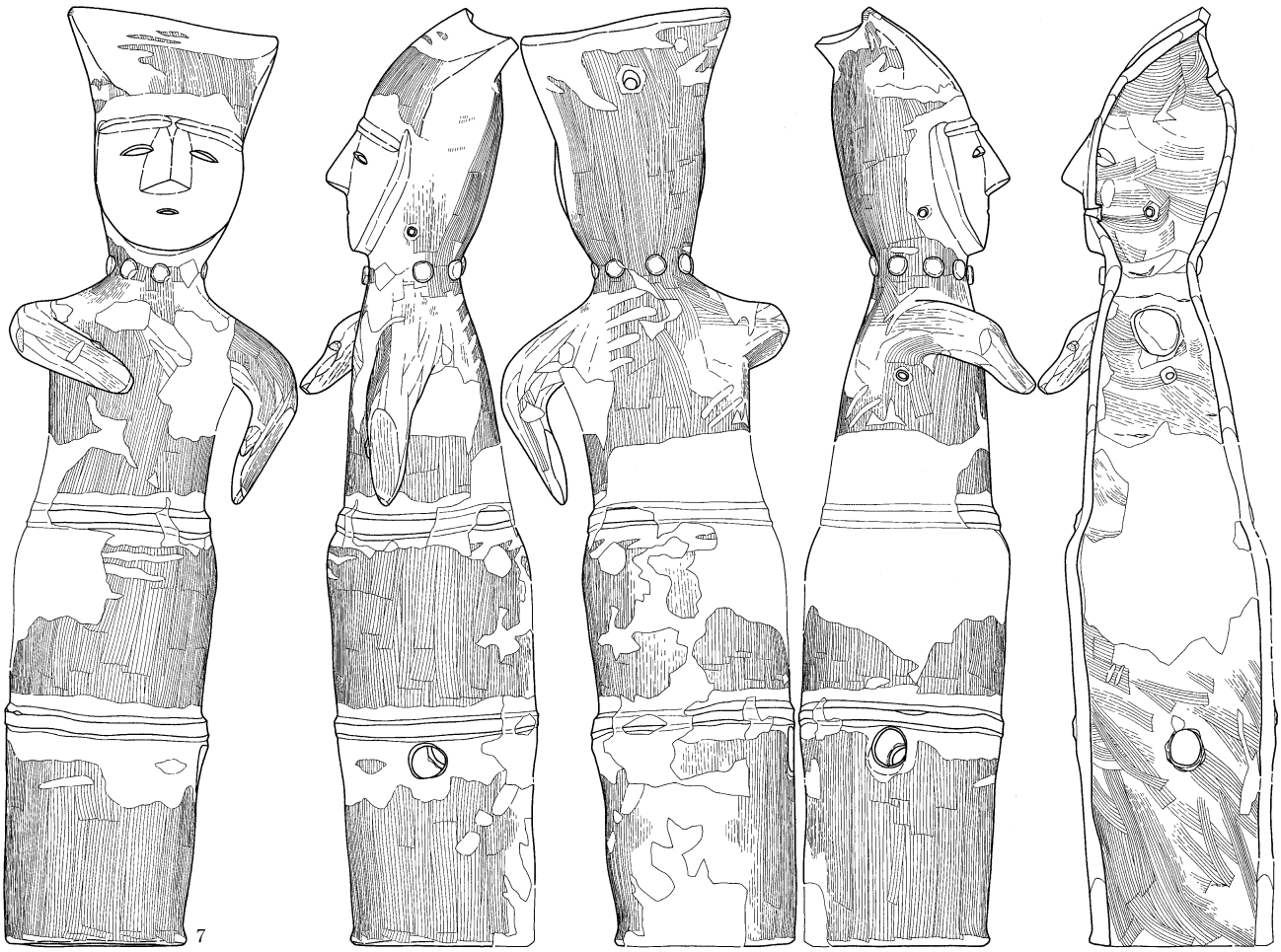


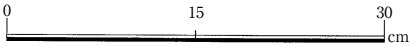
第57図　冠帽表現の人物埴輪全身像５実測図



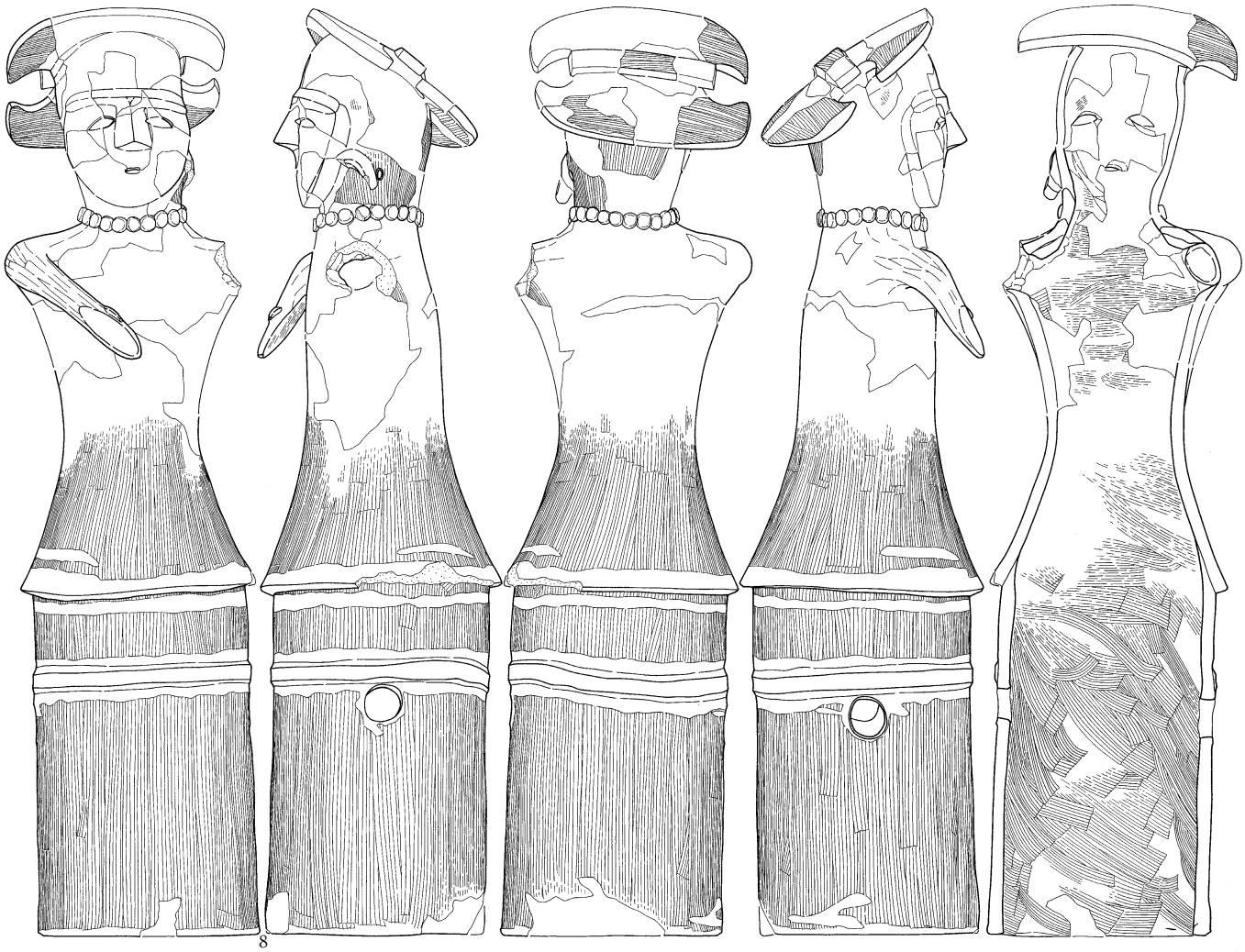


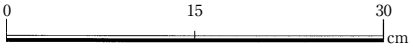
第58図　冠帽表現の人物埴輪半身像 6 実測図



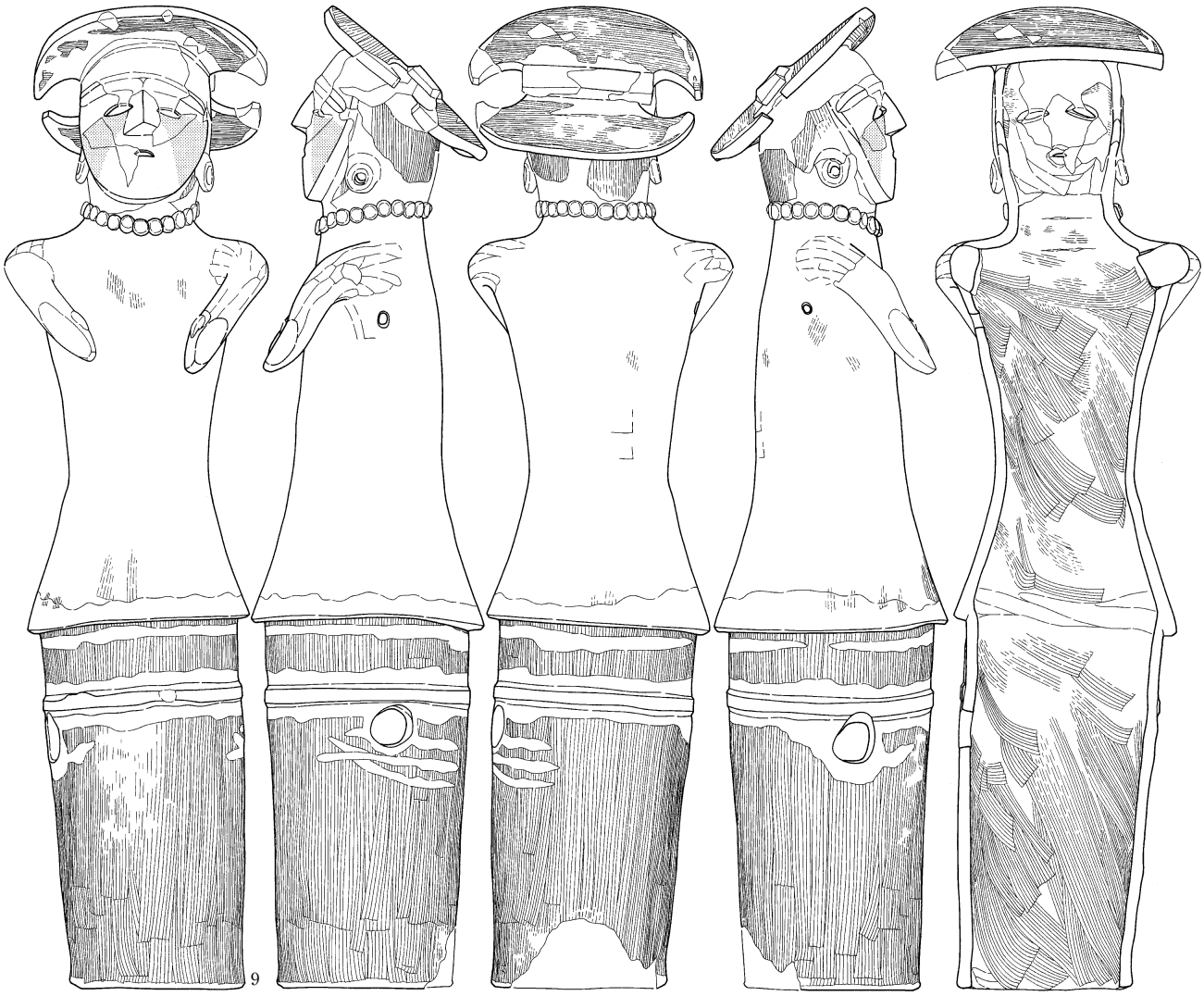


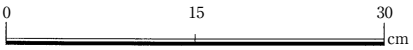
第59図　冠帽表現の人物埴輪半身像７実測図



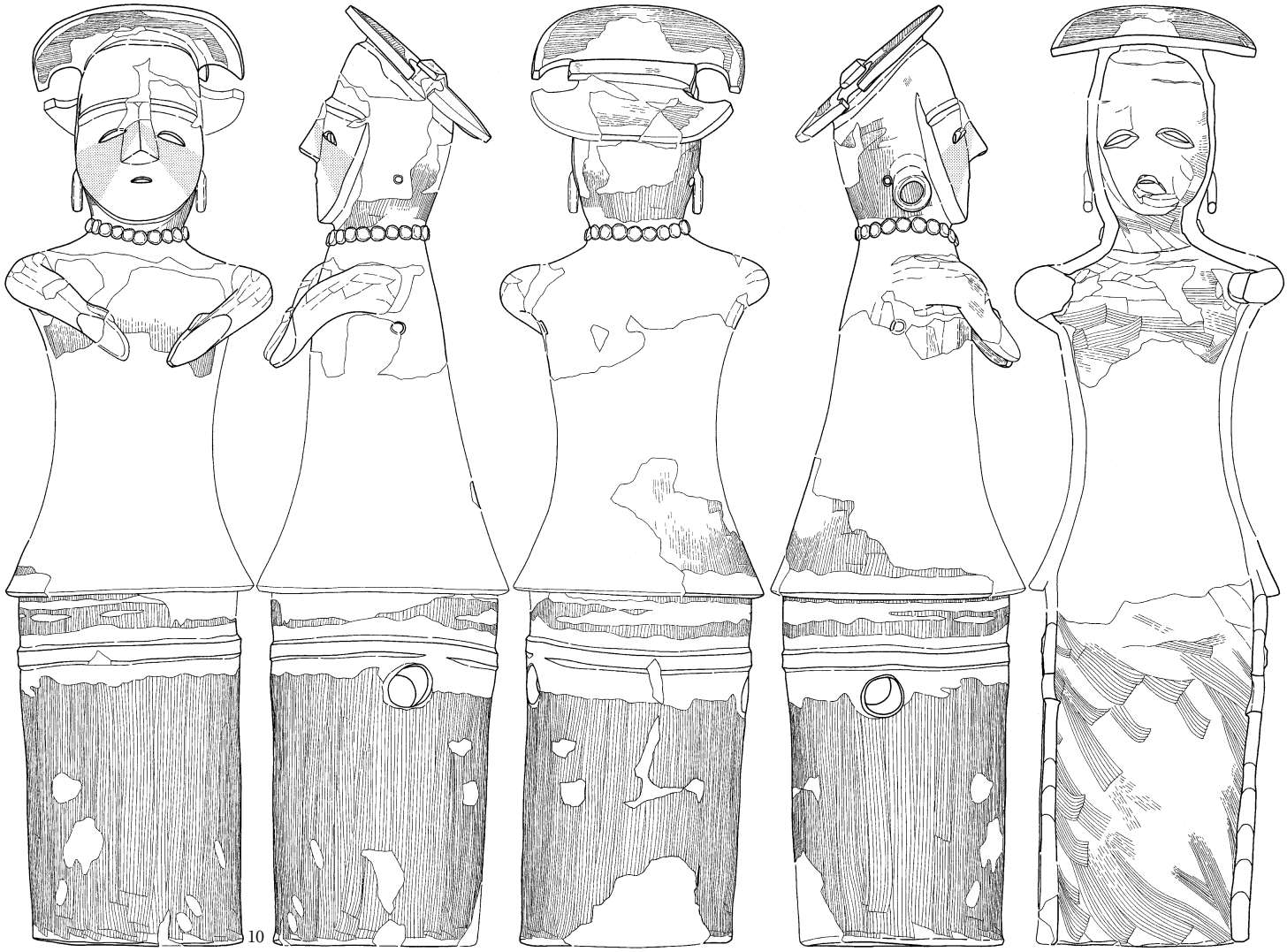


第60図　島田髷表現の人物埴輪半身像 8 実測図

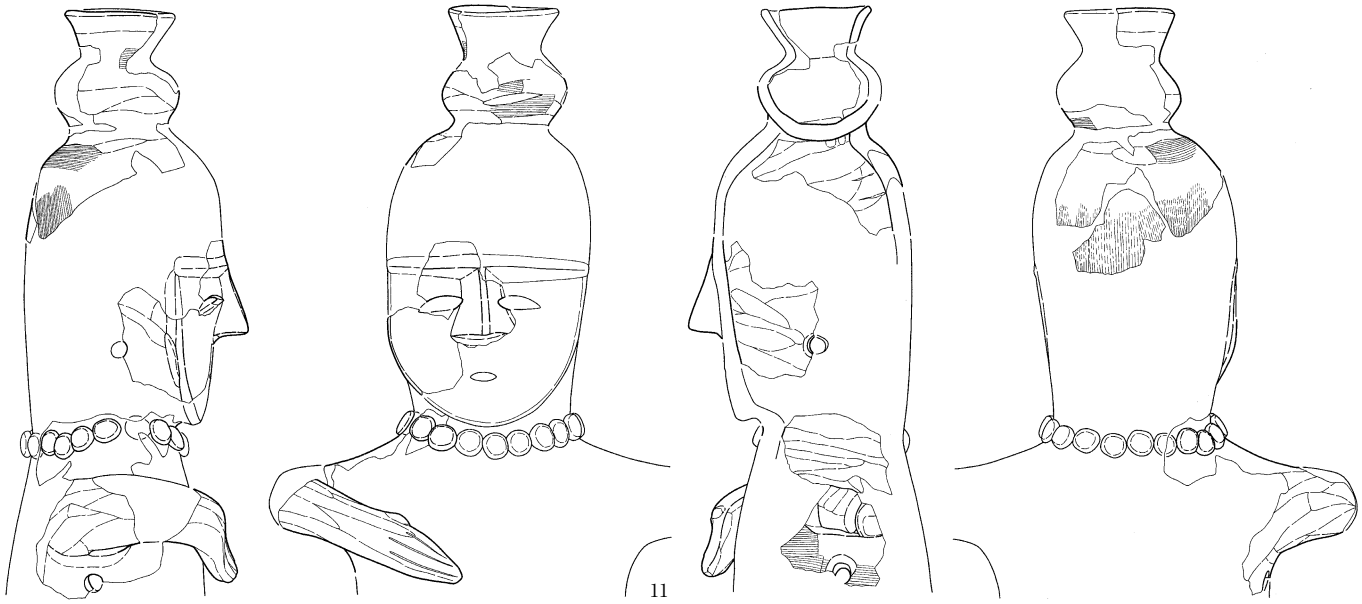


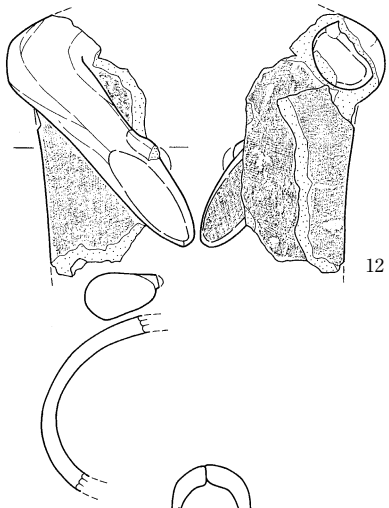


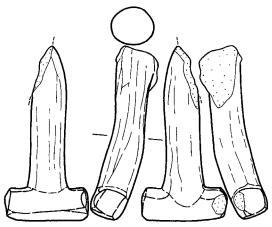
第61図　島田髷表現の人物埴輪半身像９実測図

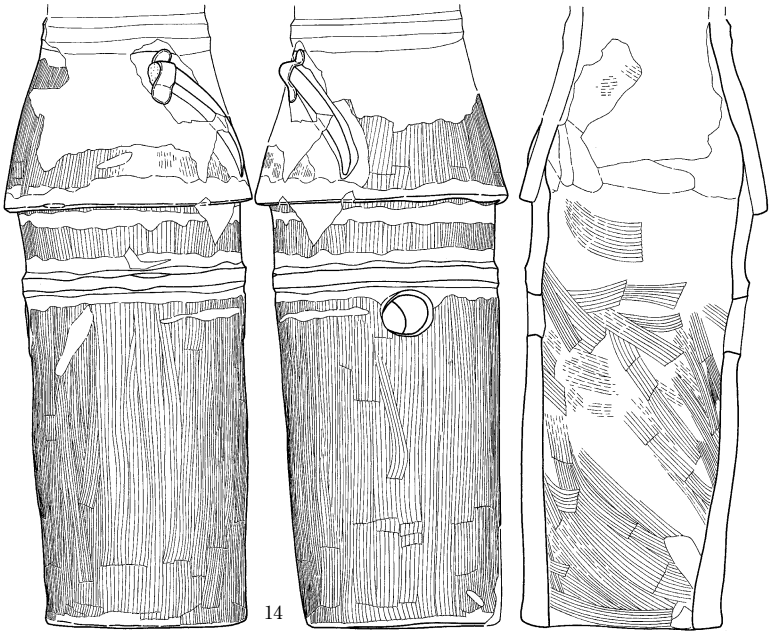


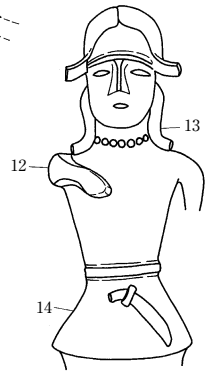
第62図　島田髷表現の人物埴輪半身像10実測図

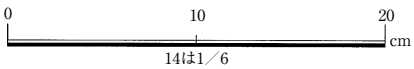












第63図　人物埴輪（壺を戴く人物11・振分髪表現の半身像12～14）実測図

7は全高74.9cm、全幅23.4cm、奥行（復元）19cmを測る。基台部を除いた人物高は58.6cmである。基台部高は6より低いが、人物高はほぼ同じである。

成形技法は各部とも6と同じであるが、以下の点において異なる。

① 基台部高が低い。

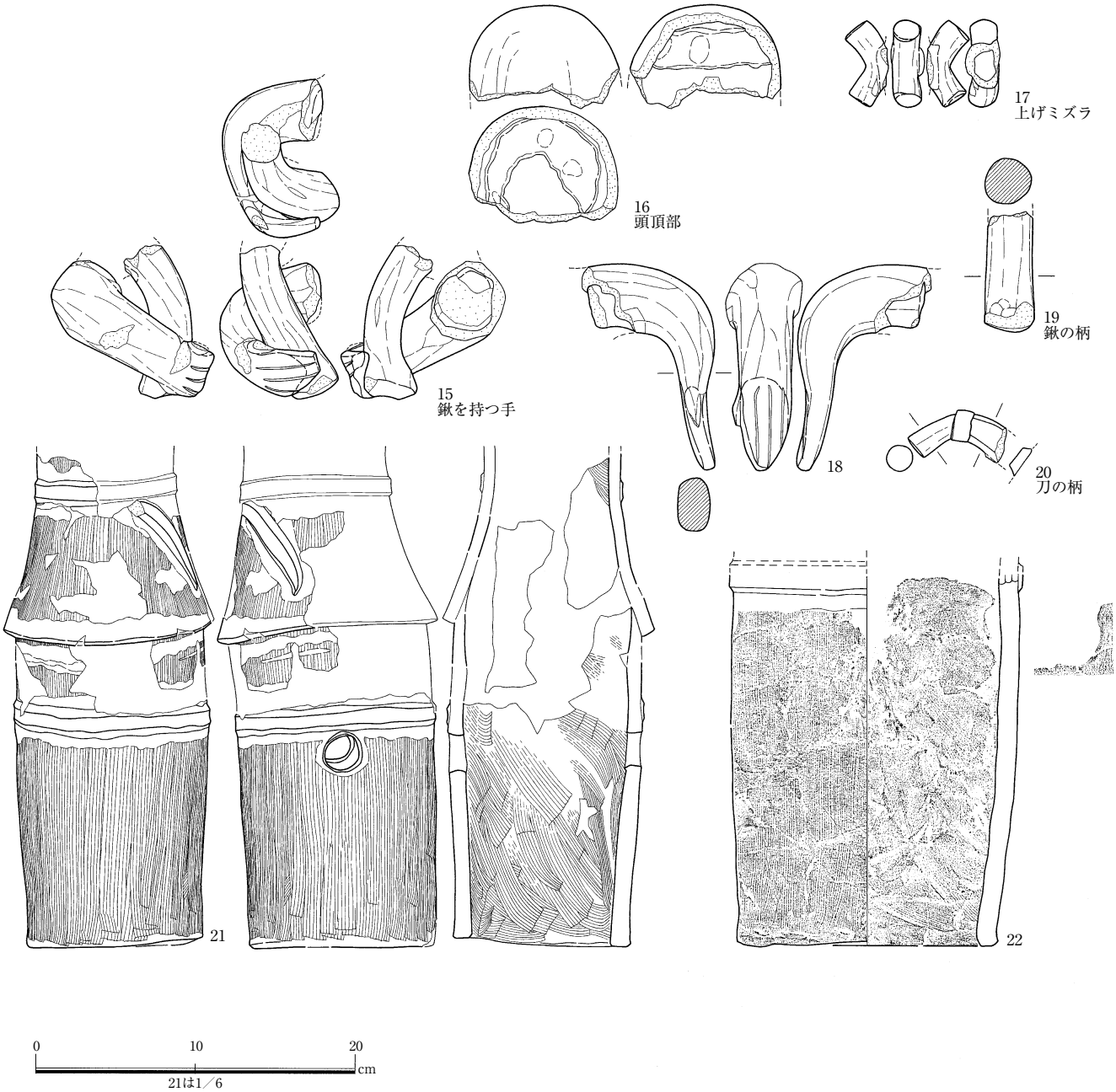
② 下位凸帯下の横方向ナデ幅が広く、上位凸帯下のナデ幅が狭い。

③ 顔面と右腕以外のハケメは消さない。手の甲にもハケメを入れる。

④ 耳表現の穿孔を施す。

②以降は個性表現のための違いと思われる。

頭頂部は最上部を平たく接合し、頭巾表現とし、後部に径1.4cmほどの透孔を穿孔する。冠帽表現



第64図　人物埴輪（鍬を持つ人物15他）実測図

の全身像に類似するが、この個体は冠と後頭部にハケメを残す点で異なる。

島田髷表現の人物埴輪半身像（4体：第60～62・66図8～10・46？・49・60・61、図版61・62・65）

冠帽半身像の隣に、4体並んでいたものと思われるが、東から3体目の個体は左腕のみ遺存している（第66図61、図版65）。特徴として、以下を挙げる。

① セット数が4体と一番多い。
② 基台部は幅広の直立円筒状に成形する傾向がある。
③ 上衣の裾表現を施す。胴部下位は基台部と別成形で、天地逆に輪積みしたものと思われる。
④ 腋の下に透孔を穿つ。
⑤ 持ち物の表現がない。
⑥ 上衣の合わせ目と帯・襟の表現がない。
⑦ 耳飾りと耳表現の透孔を持つ。透孔は筒袖全身像のように耳飾りの下にあるのではなく、貼り付け部後方に位置する。
⑧ 板状粘土で髷を表現する。

8は全高（復元）79.8cm、全幅（復元）20.6cm、奥行19.1cmを測る。基台部を除いた人物高は51.0cm、下位凸帯以上の人物高（設置高）は56.4cmである。

基台部は直立円筒状に輪積み成形し、外面縦方向、内面左上がりのハケメを入れ、両側に透孔を穿孔後、凸帯を貼り付け、上下をナデつける。

胴部下位は別成形で、天地を逆に輪積みし、基台部にはめ込んでいる。基台部との接合部の内面は段差を潰した後、横方向にナデ調整する。そのまま胴部上位を輪積みし、両腕を接合後、腋の下に透孔を穿ち、外面に縦方向・内面に右方向のハケメを入れる。外面の胴部端を上衣の裾として生かし、ナデ調整するが、指または布状工具が基台部上端に当たったため、ハケメが帯状に消えている。このナデは胴部下位にも一部及ぶ。胴部上位のハケメをナデ消すが、下位は残している。

腕部の成形技法は冠帽半身像と一致するが、ポーズが左右対称である点で異なる。

頭部の技法も基本的に冠帽半身像と一致するが、頭頂部で輪積みを止め、髷部の粘土板を斜めに蓋し、塞いでいる。髷部は粘土板をヘラ状工具で切除したもので、上下両面に横方向のハケメを施している。しかし上面については、ハケメの入った板状粘土を中央に渡し、上下をナデ付けたため、この部分のハケメが消えている。両面のハケメが髪の毛の表現であるかは不明である。端部はナデ調整し、鋭い。頭部側面から後頭部にかけての縦方向ハケメは消さず、髪の毛表現の可能性がある。耳環を付け、耳表現に幅6㎜程の透孔を穿孔する。

9は全高83.4cm、全幅22.4cm、奥行20.1cmを測る。人物部は53.6cm、設置高は58.7cmである。

成形技法は各部とも8・10と一致するが、以下の特徴がある。

① 基台部がやや細く、立ち上がりも外傾する。
② 基台部透孔周辺のナデ幅が大きい。
③ 胴部全体のハケメをナデ消す。
④ 顔面に赤彩を施す。
⑤ 人物高・設置高は3体中最も高い。

ハケのナデ消し面積の違い、赤彩の有無は、半身像同士の個性表現と思われる。

60は右腕、61は左腕である。形状・技法は他の３体と一致する。49は左耳部で、ハケメをナデ消す。ハケメは後頭部に残る。

10は全高（復元）84cm、全幅23.9cm、奥行（復元）22.6cmを測る。基台部を除いた人物高は52.9cm、設置高は28.6cmである。

成形技法は各部とも８・９と同じであるが、以下の特徴がある。

①　基台部は形状・法量ともに８に類似するが、若干大きい。

②　胴部のハケメ面積が３体中最も多く、胴部下位から胸部にかけてナデ残す。

③　顔面に赤彩を施す。

ナデ消し面積の違い、赤彩の有無は、先に述べたとおり半身像同士の個性表現と思われる。

振分髪表現の人物埴輪半身像（１体：第63・66図12～14・47、図版63～65）

冠帽全身像の西隣に１体のみ置かれていたが、遺存状況が悪く、胴部上位左側と頭部のほとんどが欠落している。12・13・14・47が同一個体と思われる。特徴として、以下を挙げる。

①　セット数が１体と少ない。

②　基台部は半身像としてはやや大型。

③　胴部は基台部と別成形である。

④　胴部全体にハケメを残す。

⑤　帯を表現する。

⑥　振分髪全身像と同型の小刀を持つ。

⑦　若干小振りだが振分髪全身像と同型のミズラを付ける。

⑧　ミズラ付け根後方に耳表現の透孔を穿つ。

14は基台部から胴部下位である。形状および成形技法は島田髷半身像９と共通するが、この個体の方が大型である。胴部下位に全身像同様の小刀を付けるが、柄部は遺存しない。中位に、帯を表現する凸帯をナデ付ける。基台部・胴部接合の内面調整は島田髷半身像に比べやや粗く、仕上げの横方向ナデが不徹底で、指頭による接合面段差の縦方向ナデ潰しが残っている。

12は胴部上半と右腕である。形状・技法は島田髷半身像８に一致するが、胴部にハケメが残る。

13は左側のミズラである。若干小振りだが、形状・技法とも全身像のミズラと一致する。

47は頭部右側である。ミズラは欠落しているが、貼り付け痕が認められる。内面に横方向のハケメを入れる。ミズラ貼り付け後、付け根の後方に径８㎜の透孔を穿ち、耳表現にする。

壺を戴く人物埴輪半身像（１体：第63図11、図版62）

振分髪半身像の西隣に１体のみ置かれていたが、遺存状況が悪く、右腕と頭の一部のみ遺存する。特徴として、以下を挙げる。

①　セット数が１体と少ない。

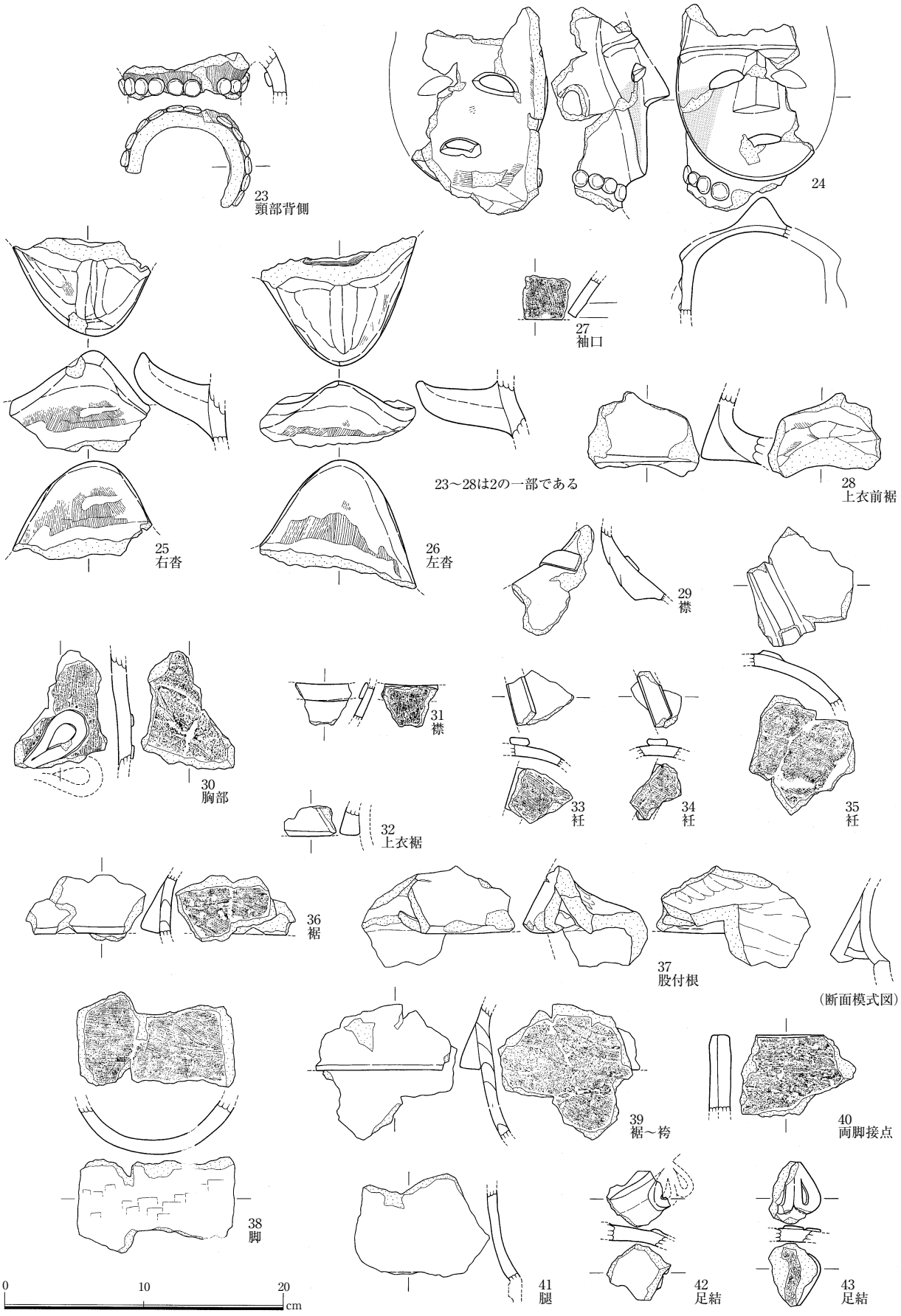
②　腋の下に透孔を穿つ。

③　手の表面に線刻３条で指表現。

④　頭部側面に耳表現の透孔を穿つ。

⑤　壺を戴く。

胴部は輪積み成形で、内面に右方向のハケメを入れた後、腋の下に径10㎜の透孔を穿つ。外面はナ



第65図　人物埴輪全身像片実測図

デ調整を施す。

腕部の成形技法は他の半身像と一致するが、粘土貼付の親指以外に3条の沈線で指が表現される。

頭部の技法も基本的に他の半身像と一致するが、頭頂部で輪積みを止め、別成形の壺を被せ、蓋をしている。壺は実際に中空で、外面に横方向のハケメを入れるが、頭部と接合の際におおむねナデ消されている。頭頂部付近は横方向のハケメ、後頭部は縦方向のハケメを残す。側頭部はハケメをナデ消す。透孔近辺に貼り付け痕が確認できず、耳環やミズラなどの表現はないものと判断される。

鍬を持つ人物埴輪半身像（2体：第64・66図15～22・55、図版63～65）

壺を戴く人物半身像の西隣に2体置かれていたが、遺存状況が悪く、胴部上位と頭部のほとんどが欠落している。15・21と18・19・20・22がそれぞれ同一個体であるが、頭部の16・17・55がどちらに帰属するのか不明である。特徴として、以下を挙げる。

① 基台部はやや低く、凸帯上段に比べ下段が短い。
② 振分髪半身像と同様の小刀を付ける。
③ 胴部は基台部と別成形である。
④ 帯を表現する。
⑤ 手の表面に3条の沈線で指を表現、右手に鍬を持つ。
⑥ 「く」の字円筒状のミズラを付ける。
⑦ 頭頂部は半球状で、頭巾を被らず、髪の毛の表現もない。
⑧ 側頭部に耳を表現する透孔を穿つ（55参照）。

21は基台部から胴部下位である。成形技法は振分髪半身像14に一致するが、基台部高が低く、凸帯上段・下段の比率も相当異なる。

15は右腕である。技法は他の半身像に一致するが、粘土貼り付けの親指以外に3条沈線による指表現を施す。鍬の柄は粘土棒をヘラナデ調整したもので、手のひらに軽く貼り付けた程度である。

22は基台部である。形状及び技法・法量は21に一致する。

15は右腕である。技法は他の半身像に一致するが、粘土貼り付けの親指以外に3条沈線による指表現を施す。鍬の柄は粘土棒をヘラナデ調整したもので、手のひらに軽く貼り付けた程度である。

20は刀の柄部で、技法は振分髪全身像に一致する。粘土棒の一方を断面台形状に整形して鞘を表現し、金具表現として粘土紐を薄く潰し巻き付ける。

18は左手である。下方を向く。

19は鍬の柄である。形状・技法・法量は15と同じである。

その他の16・17は1体目・2体目のいずれかに付属する。16は頭頂部で、半球状に輪積みした後、円盤状粘土で蓋をし、ナデ調整する。ハケメや沈線などによる装飾表現は一切認められない。17はミズラで、粘土棒の両端を切り、ヘラナデ調整し、「く」の字状に頭部に貼り付けている。

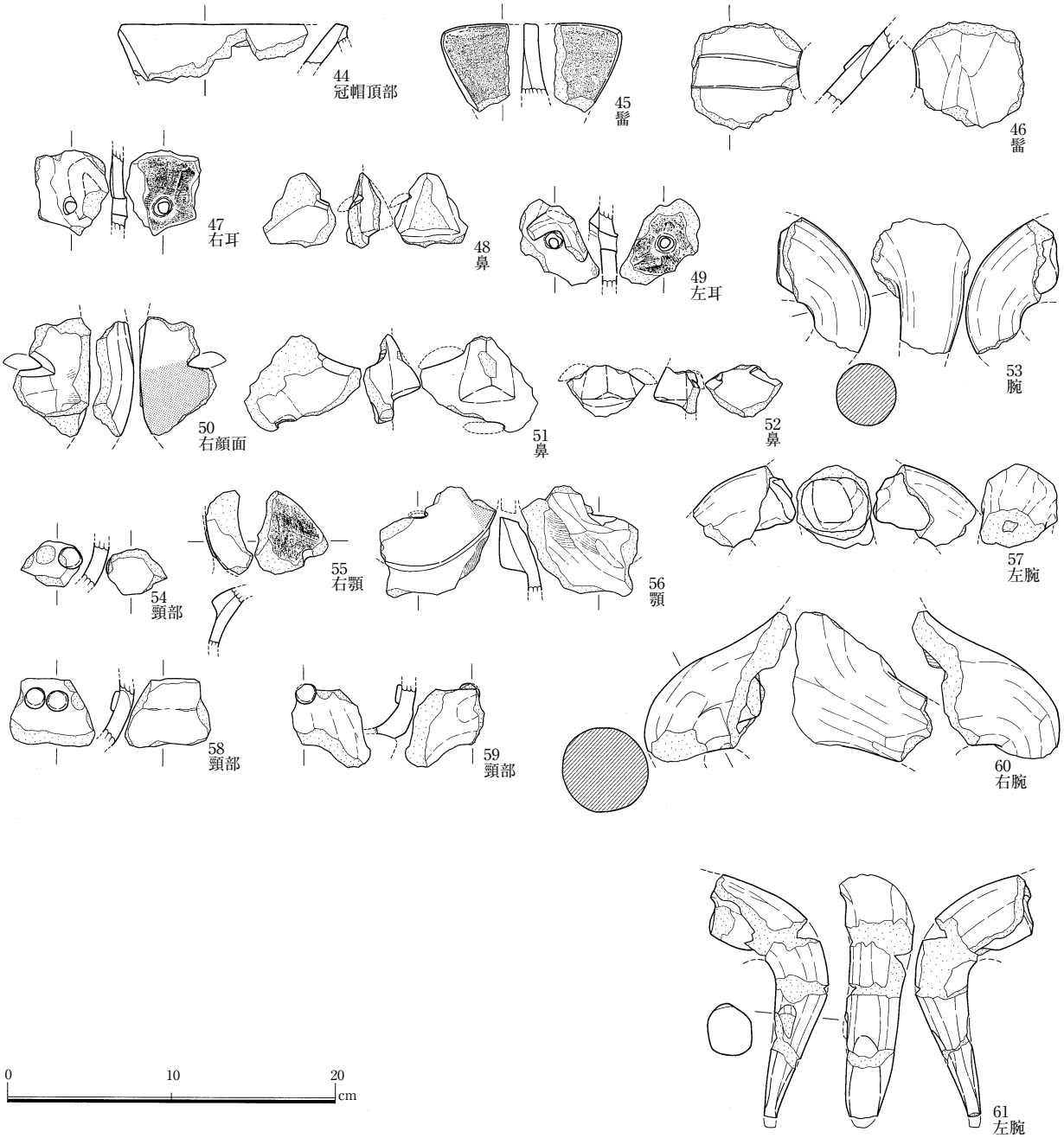
人物埴輪半身像の一部（第65・66図29・48・50～54・56～59、図版65）

これらは、すでに述べてきた半身像いずれかの一部と思われるが、未確認個体の可能性を残す。

48・50～52は冠帽半身像・壺を戴く人物半身像以外の鼻部である。

53は冠帽・島田髷以外の半身像の腕である。

54・58・59は冠帽半身像以外の頸部である。



第66図　人物埴輪半身像片実測図

56は冠帽半身像以外の顎である。

57は壺を戴く人物半身像・振分髪半身像・鍬を持つ人物半身像いずれかの左腕である。島田髷半身像８とは接合しない。

なお、29・44は人物埴輪ではないと思われる。29は整理段階で島田髷半身像の髷部に分類したため、ここに掲載したが、頭部裏面に頭部との接合痕が認められず、ハケメも施されていないので、島田髷とは考えがたい。馬形埴輪の一部と推測する。44は整理段階において女子像の髷の撥形部として分類したため、ここに含めたが、前述の埴輪配列の面から考えて、島田髷半身像以外の女子像が置かれたスペースが認められないため、形状・技法ともに類似した靱の板状部下端と推測する。

動物埴輪

水鳥形埴輪（２体：第67図62～71・72？・73・74、図版66）

白鳥像と思われ、主体部前のテラス東端から、最少２体が出土している。配列のピッチが人物半身像にくらべ若干開くが、２個体で完結するものと判断している。特徴として、以下を挙げる。

①　基台部は間隔の狭い２条凸帯で、下位凸帯の下方に透孔を穿つ。孔の外面はナデない。

②　粘土板の張り出し部に粘土紐を貼り付け、指を表現し線刻で水掻きを描く。

③　体部は輪積み成形、頭部は粘土塊をソケット状に差し込む。

④　翼は粘土板を胴部に貼り付けたもの。ハケメ以外の装飾的表現はない。

73は石室前から列ぶ中段テラスの埴輪群の東端に位置する個体である。２体目にくらべ、体部のハケメをナデ消す傾向があるようだ。

基台部（73）は底部付近しか遺存しないが、２体目同様の技法を持つものと思われる。

脚部は胴部から基台部に密着する。上位凸帯直下に粘土板で張り出しを設け、上下両面にハケメを施す。上面に粘土紐を貼り付け指を表現し、水掻きを描く。この面のハケメはナデ消す傾向にある（70）。さらに体部まで２本の粘土紐を貼り付け、脚とする（68）。

体部は基台部から直接輪積み成形したものと思われ、複雑にハケメが交差する（71）。これは意図的に羽を表現した可能性がある。尾の技法は２体目と一致するが、意匠の面でやや細かいようで、上面のハケメをナデ消し、線刻で羽を描く（63）。翼は粘土板を切り抜き、胴部に貼り付けたものである。翼面にハケメを施すが、全体にナデ消す傾向がある（67・69）。

頸部は輪積み成形で、体部と別個に作られた可能性もあるが、不明である。頭部接合後、縦方向のハケメを入れ、ヘラナデ整形後にナデ調整を施したものと思われる。これによってハケメはまばらに消える（62）。頭部は粘土塊からなり、水鳥らしい扁平な嘴を付ける。ソケット状に頸部へ差し込み接合する。目は棒状工具で刺突する。

２体目は１体目の西側に並んで置かれていた。１体目よりハケメを多く残すものと思われるが、遺存度が悪く、詳細不明である。

基台部（74）は凸帯が２条とも遺存する。凸帯間は他の器種に比較して狭い。縦方向のハケメを入れた後に凸帯を廻らし、上下をナデつける。その後両側面に透孔を穿つが、人物像とちがい、孔周辺をナデないためシャープな印象がある。

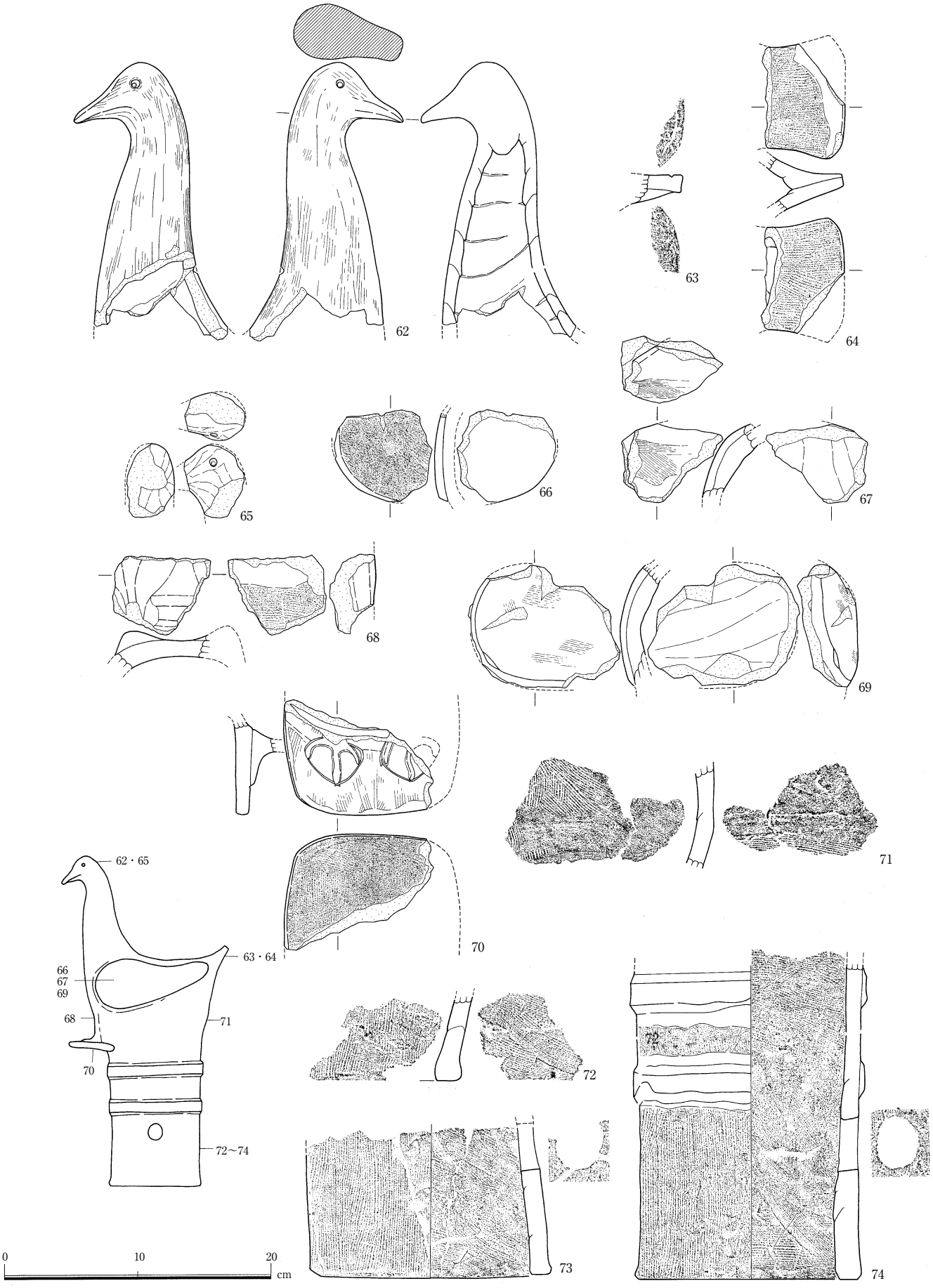
脚部・体部の形状と技法は、１体目に共通するものと思われる。尾は別成形と思われ、輪積みした円筒の端部を平らに押しつぶし尾羽を表現、一方を体部に接合したものと思われる。上下両面ともハケメを入れる。羽表現と思われる（64）。翼は１体目と同一の形状を持つが、よりハケメを残している。頭部も１体目と同様の技法である（65）。

その他、72は底部の破片で水鳥形のほか朝顔形の可能性がある。

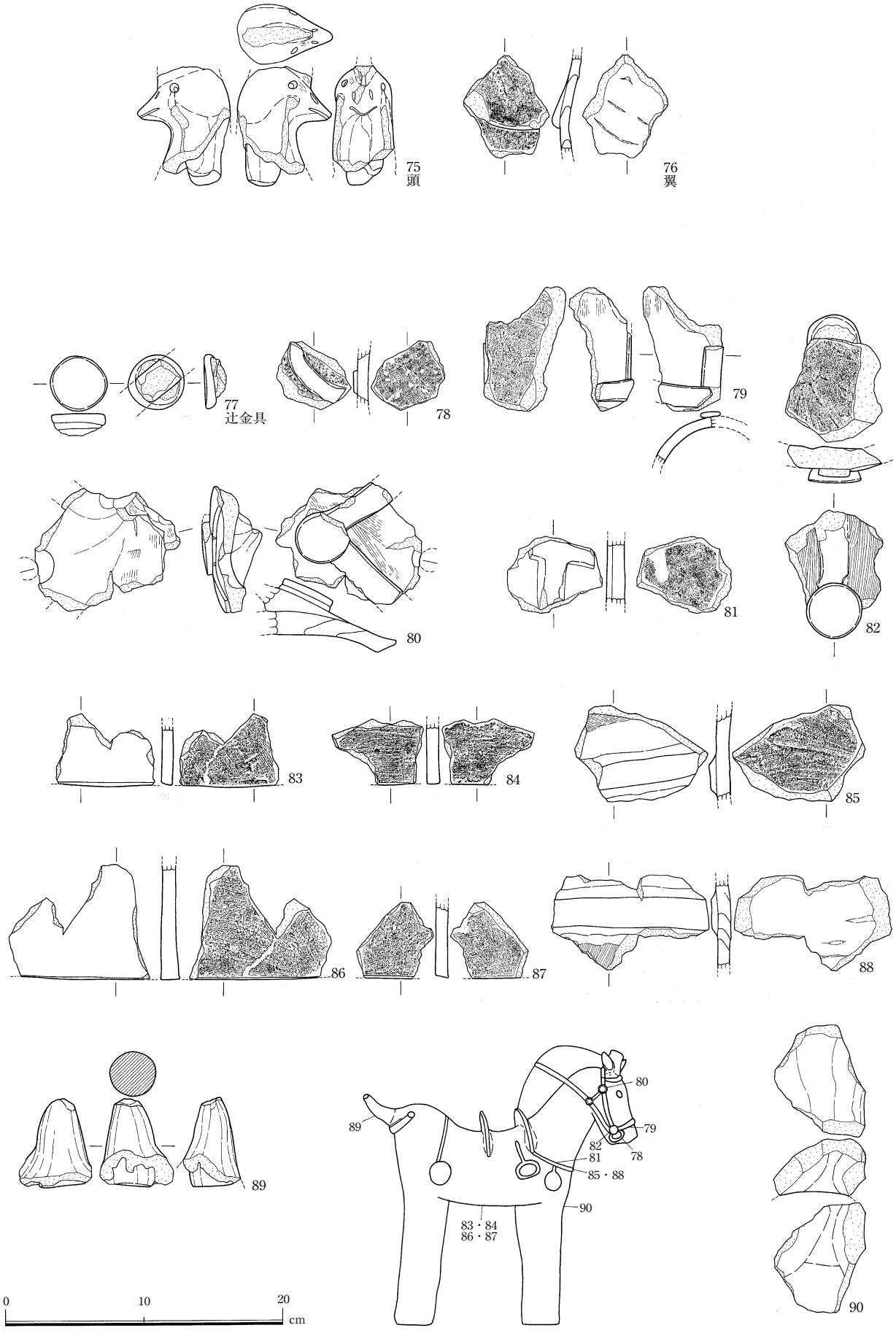
鶏形埴輪（１体以上：第68図75・76、図版66）

２ｃトレンチ出土であるが、後円部墳頂上にあったものが流れたと考えられる。破片２点が出土しており、同一個体の可能性が高い。成形技法は水鳥と一致する。

75は頭部で、技法は水鳥と同様であるが、両頬と頭頂に粘土板を貼り付け、鶏冠を表現する。嘴の上下を分ける沈線を施し、鼻の穴を刺突する点も水鳥と異なる。



第67図　水鳥形埴輪片実測図



第68図　鶏形埴輪片・馬形埴輪片実測図

76は体部左側下半で、輪積み成形後、粘土板を貼り付け、翼を表現する。翼全体が粘土板の水鳥と違い、翼縁辺部のみ貼り付けて表現する。ハケメは全面ナデ消している。

馬形埴輪（２体以上：第68図77～90、図版66）

人物像が並ぶテラス上の前方部両端付近に配列されたものと思われる。色調の相違から最少２個体を確認した。77・78は同一個体、79・81・86～89は別の同一個体と思われる。

77は頭部の辻金具で、丁寧にナデ調整した径4.1㎝、厚さ0.7㎝の粘土板を面繋に貼り付ける。

78は頭部と轡で、77と同一個体の可能性が強い。頭部にハケメを入れてから、粘土紐を潰しナデ整形した轡を貼るが、両側にナデ付け調整を行わないのでハケメがよく残る。

80は目の周辺で、輪積み成形後、頸部に差し込み、段差をナデ延ばす。外面はハケメを入れた後に面繋と辻金具を付け、目表現の透孔を穿つ。ハケメをナデ消すが、不完全である。

82は口の側面で、面繋の上に辻金具を貼り付ける。

84は障泥下部である。粘土板で、裏全面にハケメを残す。表側にハケメはなく、きれいにナデ消されたものと思われる。

85は胸繋で、体部正面からやや左側の部分と思われる。胸繋の貼り付け時に両側をナデ調整しているが、これ以外の部位のハケメはよく遺存する。部位によるものなのかもしれないが、ハケメを残す個体とナデ消す個体を作り分けた可能性も考えられる。

79は頭部で、ナデ整形した粘土紐を貼り、面繋にする。ハケメを概ねナデ消している。

81は体部の胸繋で、79と同一個体の可能性が強い。内面に右傾斜のハケメを残すが、外面ハケメはナデ消されている。胸繋は両面をナデつけ、体部にしっかりと貼り付けている。

83・86・87は障泥下部で、79と同一個体の可能性が強い。形状・技法は84と一致する。

88は胸繋正面で、79と同一個体の可能性が強い。技法は85と一致する。

89は尾で、79と同一個体の可能性が強い。粘土棒をヘラナデ整形し、ソケット状に体部へ差し込み接合、ナデ調整する。

90は前脚の付け根部である。目の届きにくい部位のためか、ナデ調整が粗い。ハケメも当初から施されていないものと思われる。

家形埴輪

入母屋型家形埴輪（１棟以上：第69・70図91～122、図版67・68）

墳頂部から流出したものと思われる。上屋根が別個組み合わせ式の分離入母屋で、すべて同種だが、数個体に分かれる可能性がある。

111は棟部である。平部は頂部に向け内弯し、端部をナデ調整する。端部付近から枝分かれするように別の粘土板を貼り付け、アオリ部を作るが、ナデ整形のため外面の平部との境は明確に見えない。平部内面縦方向、外面横方向にハケメを入れ、外面のみナデ消すが不徹底である。外面に鋸歯状の沈線を入れ、下辺が横に連続するかたちの三角形列に赤彩を施す。

104・106・112は破風板上部、107は中部、94～98は下部である。平部から妻部を角形に輪積み成形し（104）、隅に粘土板を貼り付け破風板にする。両面縦方向のハケメをナデ消すが不徹底で、端部を丁寧にナデ調整する。平部の鋸歯状文は破風板まで及ぶが（107）、破風板の妻側にも鋸歯状文を施している（94～98）。

91～93・99～101・103・105・108～110・113～122は平部で、上にいくほど湾曲する。輪積み成形で、内外面にハケメを入れ、外面をナデ消すが、部位によって不徹底である。鋸歯状文を施し、赤彩する（92・99・101）。内面にハケメ後の斜方向竹管圧痕が残る個体があり（101）、竹管を支持具等に利用したものと思われる。平部下端は緩やかな弧を描き、端部に木板圧痕を残す（109）。

寄棟型家形埴輪（２棟以上：第70図123～134、図版68）

墳頂部から流出したものと思われる。色調から、123～125・127・129～134は同一個体、126・128・130は別の同一個体と見られるが、さらに数個体に分かれる可能性がある。

123は前者の屋根部である。上部には粘土板を貼り付け、飾りにする（123）。外面縦方向のハケメ、内面斜方向のハケメを入れ、外面上部のハケメをナデ消すが不徹底である。

124・125・127・129・131～134は前者個体の壁部である。輪積み成形で、外面縦方向のハケメ、内面右傾斜のハケメを施し、凸帯をナデ付け柱表現とする。外面ハケメは消さない傾向が強いが、ナデ消すものもあり（125）、個体が分かれる可能性を残す。下端部に木板圧痕がある（134）。上部のハケメを入れた後、四角形の窓を切り出す。外周は人物全身像基台部透孔のようなナデを施さず、シャープな印象を受ける（124）。縦辺は柱凸帯に沿うが（127）、横辺は桁に沿わない。

126・128は後者個体の屋根部で、輪積みにより壁部から一体成形する（128）。下部の壁との境は輪積み段階で屈曲し開くが、屈曲部の外面に断面三角形の粘土紐をナデ付け、廂表現とする。このため帯状にハケメが消えている。外面のハケメを消さない個体と思われる。

130は後者個体の壁部で、ハケメを消さない。

器財埴輪

大刀形埴輪（４本以上：第71図135～153、図版69・72）

墳頂部から流出したものと思われる。色調および鍔の相互関係から、最低４本を確認した。135・136・141・142がおそらく153と同一個体、137・139・144が同一、138・147が同一と思われる。

153は基台部を損失するが、遺存度良好である。輪積み一体成形で、柄部を細くするため、鞘との境にくびれが生ずる。外面縦方向のハケメ、内面右傾斜のハケメを入れ、ナデ消さない。柄頂部に粘土板の柄頭で蓋をする。把頭はハケメをナデ消している。鍔は水滴形の粘土板をナデ付け、両面に放射状のハケメを入れるが、接合部と端部のナデ調整のため、一部消えている。横方向、把頭から鍔にかけ、勾金を接合する。勾金は粘土板をナデ整形するが、裏面に木板圧痕を残す（141）。径2.5㎝大の粘土玉にヘラで口表現の切り込みを入れた鈴を貼り付ける（135・136）。この接合には粘土を使用する。鞘部に頂部を赤彩した粘土紐の凸帯をナデ付ける。

137～139・143～149は鍔部、150～152は鞘部で、形状・技法は153と一致する。

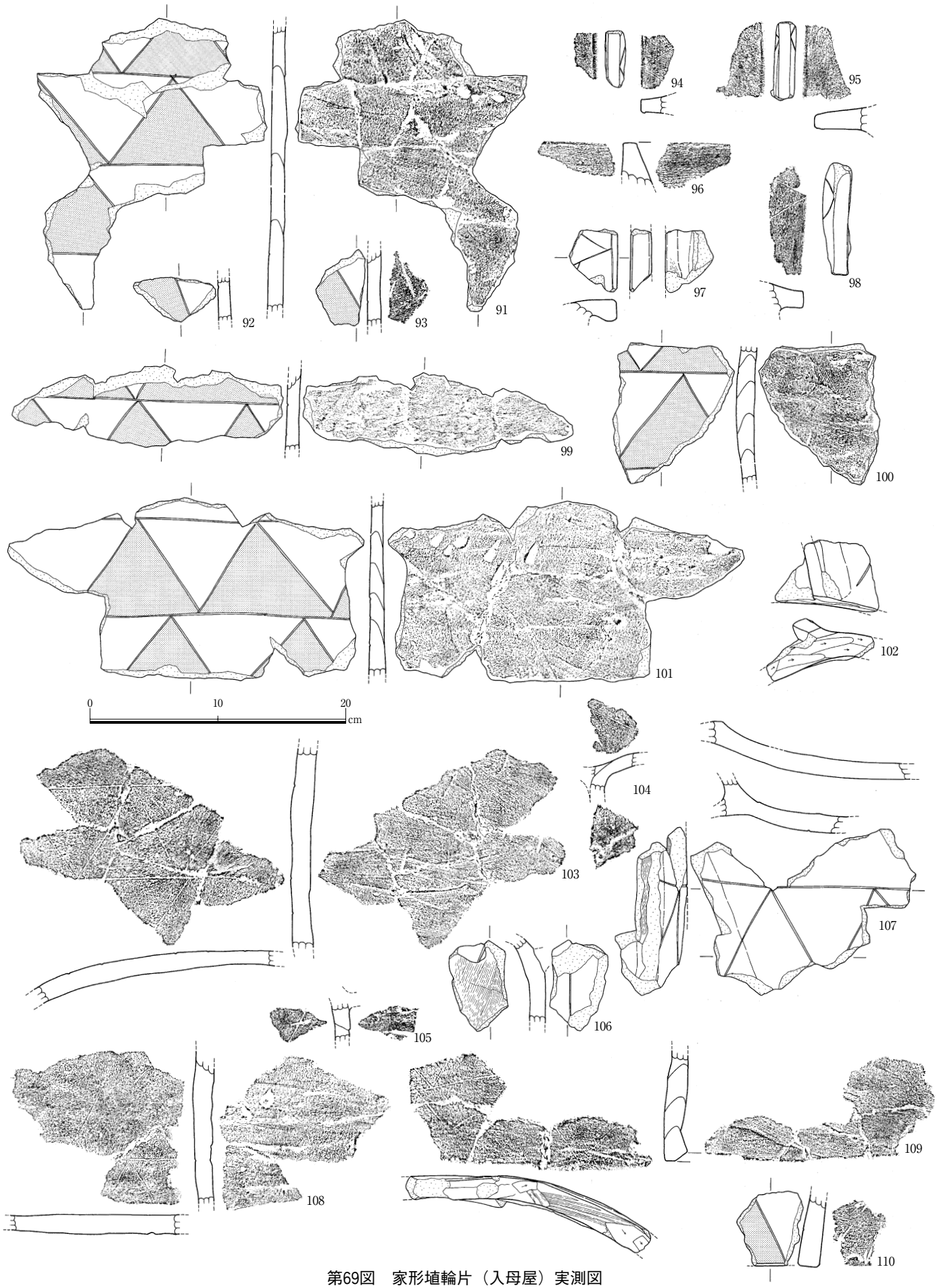
矛形埴輪（４本以上：第72図154～158、図版69）

墳頂部から流出したものと思われる。刃部の数から、確実に４個体以上は存在する。

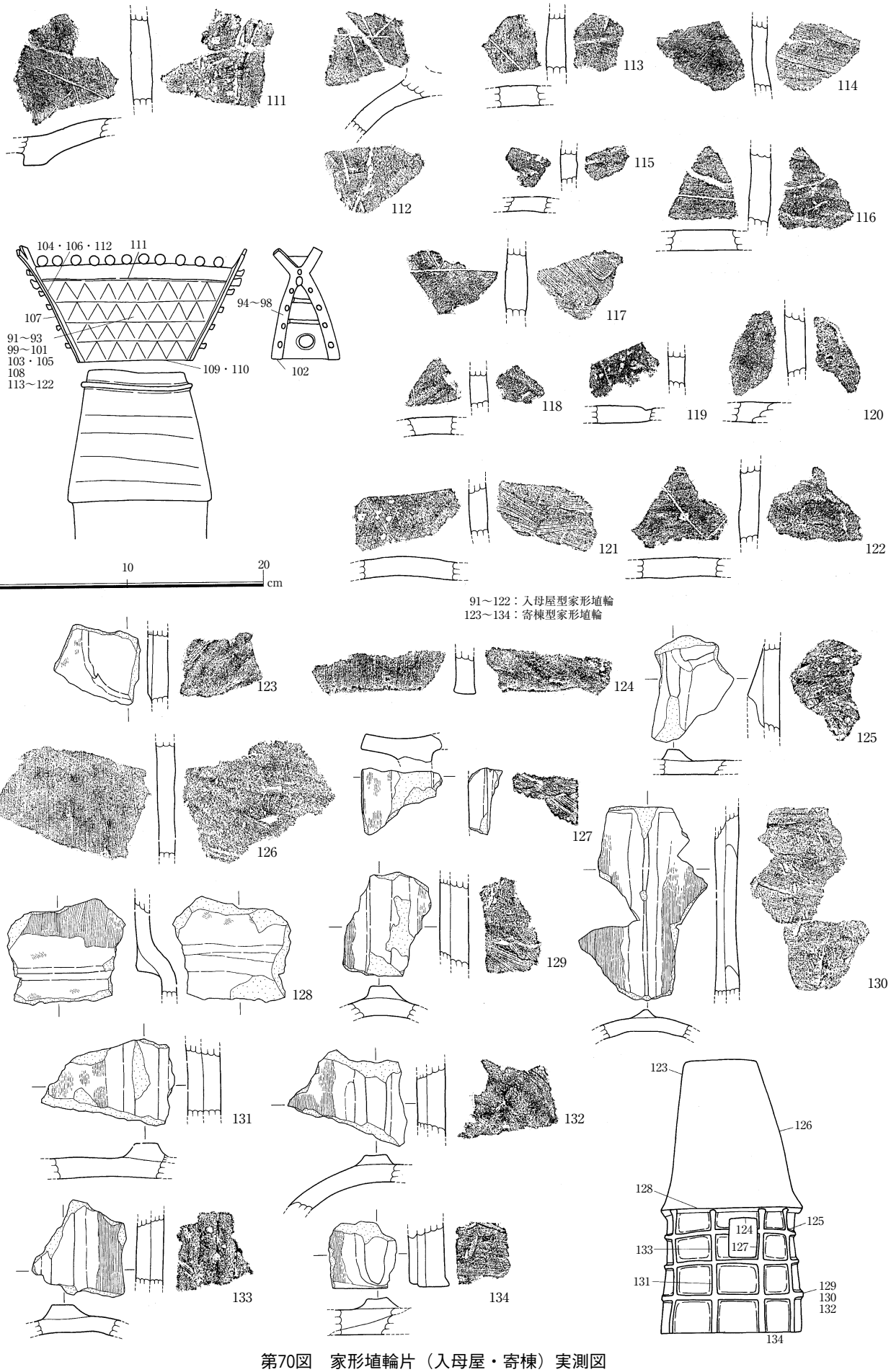
154・156～158は刃部で、断面楕円形の粘土棒両面に粘土紐を貼り付け、峰を表現する。付け根をソケット状に基台部へ差し込み接合する。基台部は輪積み成形で、縦方向のハケメを入れる（155）。刃部付近は半球状を呈し、推定径1.8㎝の透孔を穿つ。

靫形埴輪（３個以上：第73図164～181、図版70）

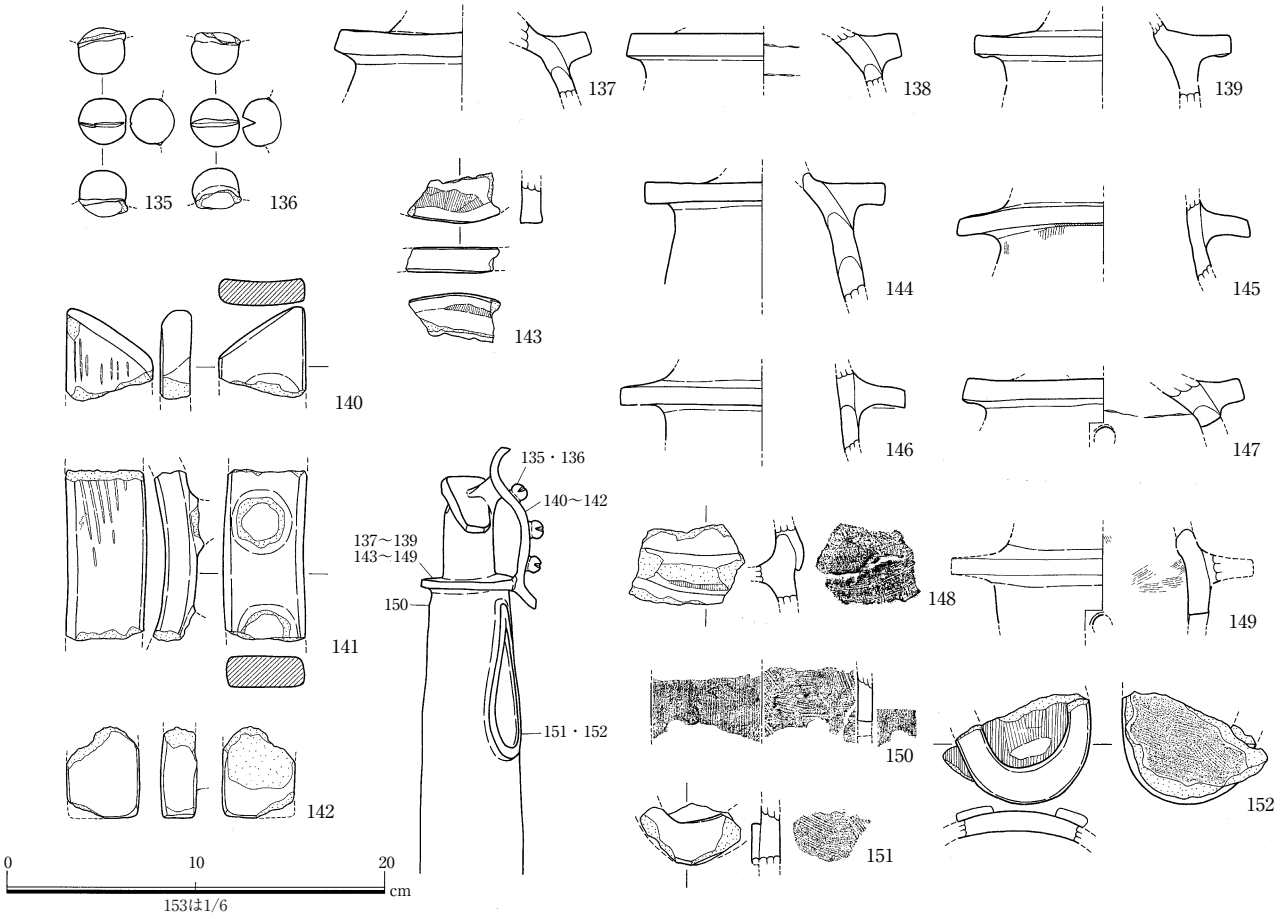
墳頂部から流出したものと思われる。164は166・167と接合せず、164と167も別個体なので、最低

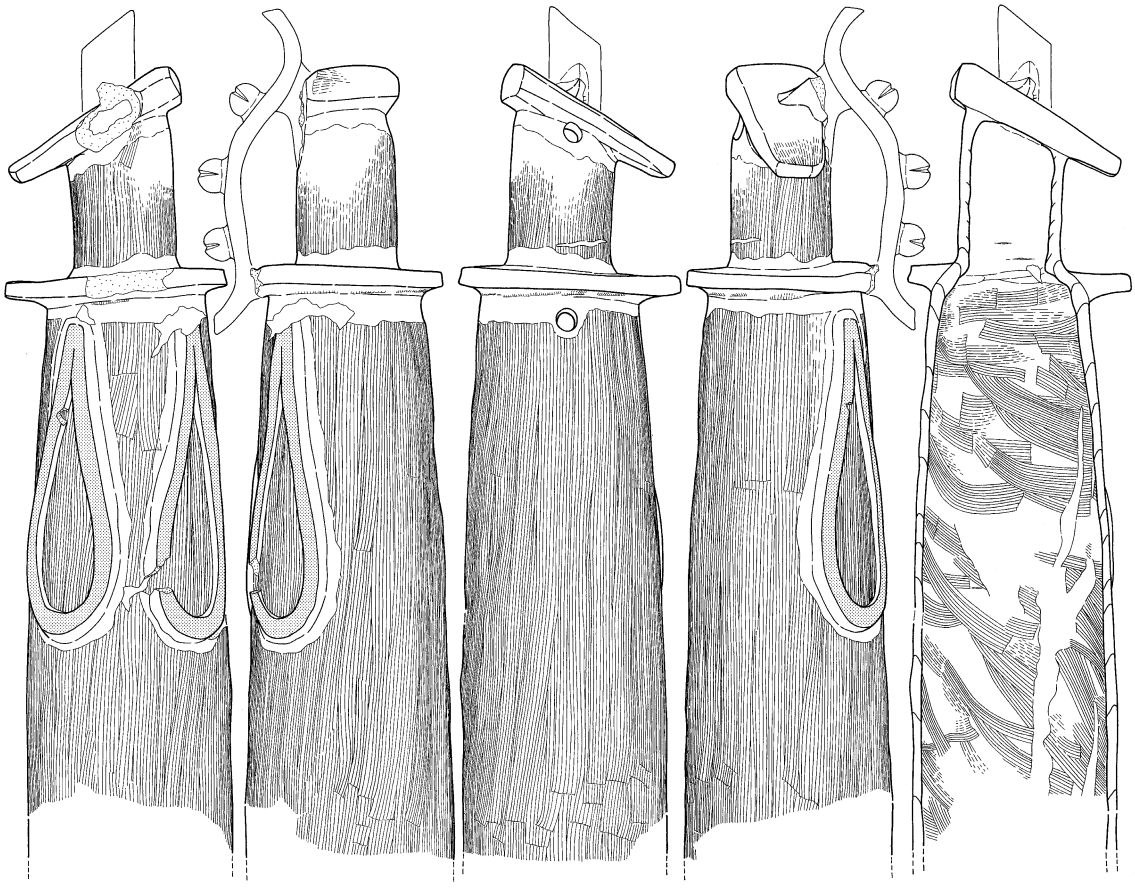


第69図　家形埴輪片（入母屋）実測図

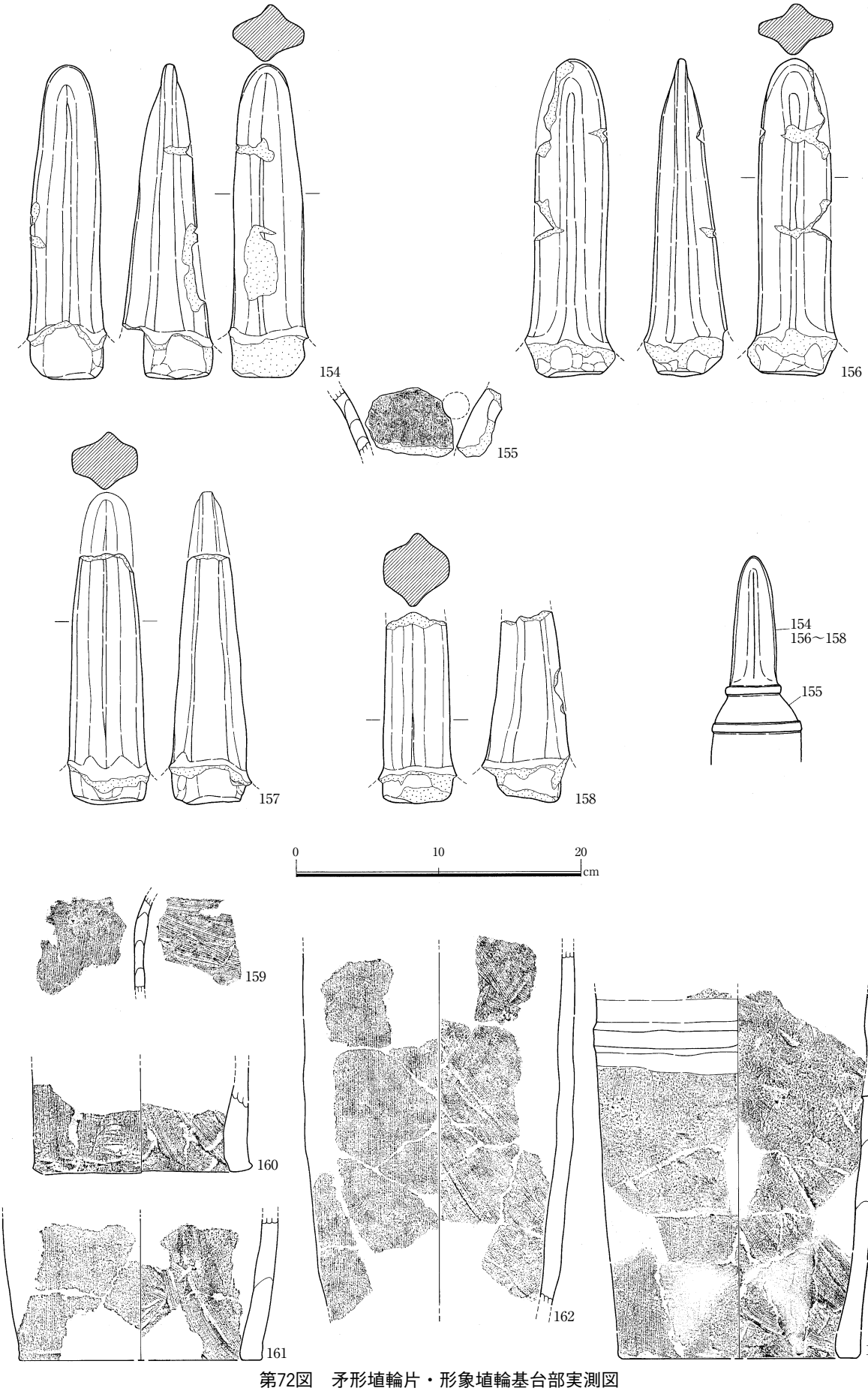


第70図　家形埴輪片（入母屋・寄棟）実測図

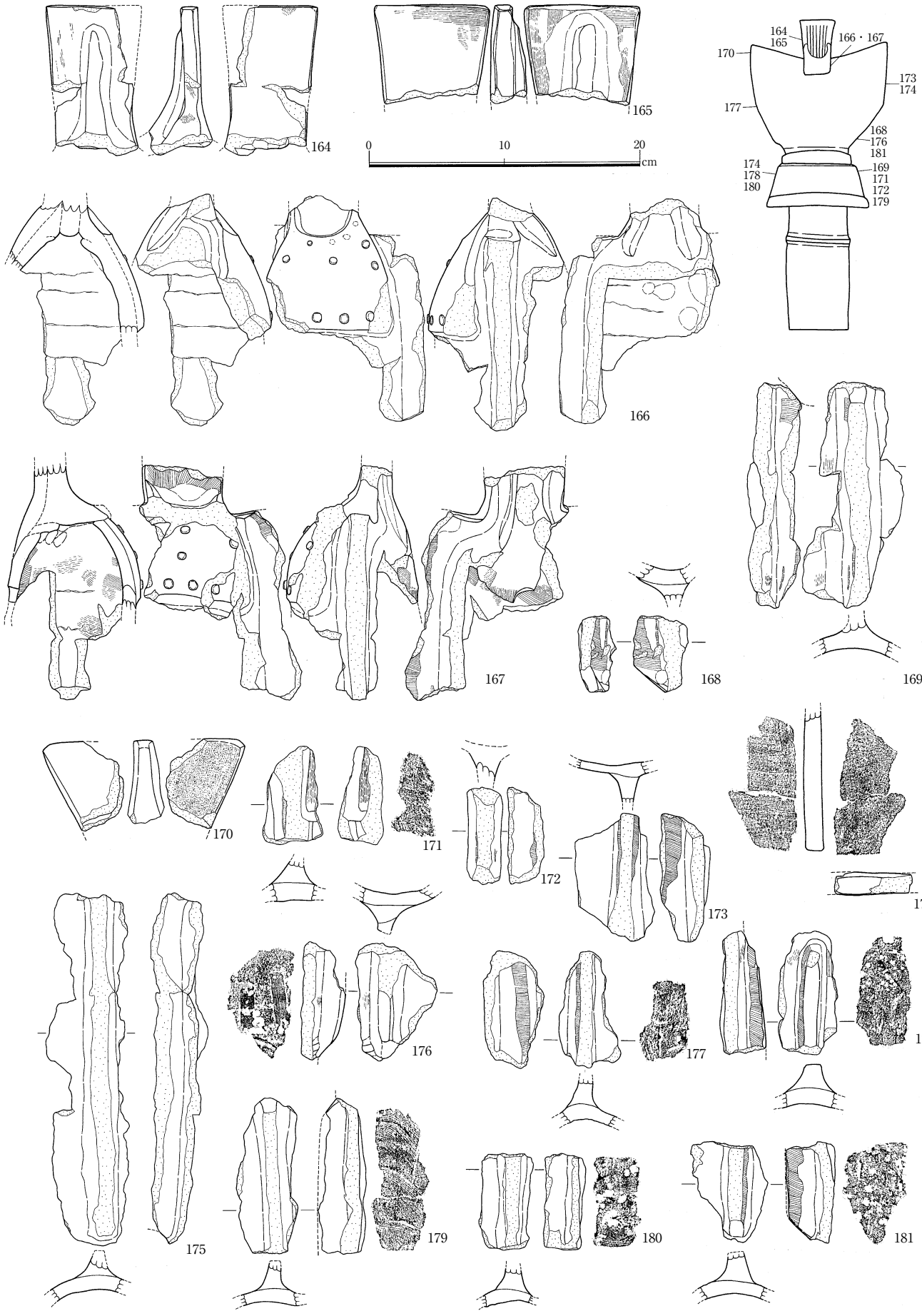




第71図　大刀形埴輪実測図



第72図　矛形埴輪片・形象埴輪基台部実測図



第73図　靱形埴輪片実測図

3個体は確実に存在する。

164・165は上端の板状部で、撥状に切り出した粘土板の両面に縦方向のハケメを入れ、ソケット状に本体と接合する。体部上端から背面にかけ、凸帯をナデつける。正面はナデ調整しハケメを消すが、矢の表現を施さない。

166・167は体部である。輪積み成形後、正面に半円形・上端U字状の粘土板を貼り付け、その上に径7㎜大の円盤を並べ、鋲を表現する。両側には凧形の粘土板を貼り付け、板状部にする。

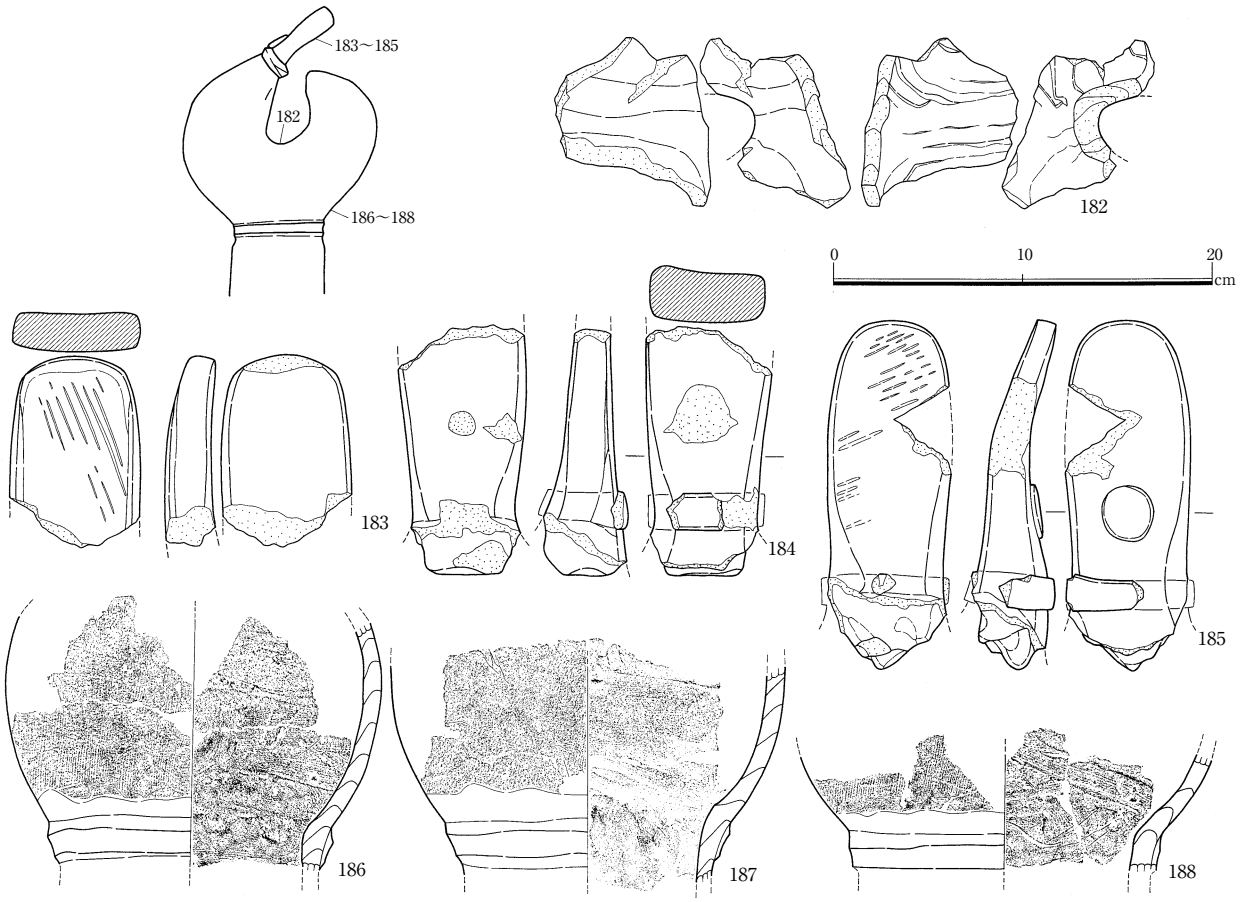
168～181は板状部である。両面横方向のハケメを入れるが、正面のハケメをナデ消す個体が多い（168・170・171・174・177・178・180・181）。168・170・173・174・176～178・181は上の板状部で、169・175・179・180は下の板状部である。

鞆形埴輪（3個以上：第74図182～188、図版71）

墳頂部から流出したものと思われる。上端部の数から、最低3個体は確実である。

183～185は上端部で、粘土板をナデ調整するが裏面に木板圧痕残る（183）。ソケット状に革袋部に差し込み接合し、粘土紐を貼り付け、結び紐を表現する。表面には径3.8cmの円盤を貼り付け飾る。

182・186～188は革袋部で、基台部から輪積みで一体成形する（186～188）。内面は横方向のハケメ、外面は縦方向にハケメを入れる。上位内面は指頭・工具が届かなくなるため、輪積み痕が顕著に残る。外面のハケメをナデ消す個体がある（152）。



第74図　鞆形埴輪片実測図

翳形埴輪（４個以上：第75・76図189～203、図版71・72）

墳頂部から流出したものと思われる。右側板状部下端の数から、最低４個体は確実である。

189は本体部を輪積み成形後、内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメを施す。円筒状の輪積み部をやや扁平に潰し、頂部をふさぐ形で、人字状に貼り合わせた２枚の扇状粘土板を接合し、板状部を作る。両面に放射状のハケメを入れた後、本体接合部に沿って横方向のハケメを入れる。本体正面に半円状の粘土板を貼り付け、正面のナデ調整でハケメを消す。板状部に放射状の沈線を入れ、１区画おきに赤彩を施す。裏面は板状部ハケメを装飾的に残し、本体部ハケメは一部ナデる。

193・202・203は189と同様である。裏面中央からやや右寄りに推定径2.2cmの透孔を穿つ（203）。

190は189と異なり、本体部を扁平にせず、断面円筒状のまま板状部を貼り付ける。本体正面は半円状の張り板部のみナデ調整し、基台部から続く部位に対しては縦方向のハケメを残す。裏面上位に径3.1cm大の透孔を穿つが、その後貼り付けた骨に隠れてしまうため、粘土板で塞ぎ、真下に径2.9cm大の孔を穿ち直している。本体が円筒状のため板状部との境が明瞭なので、板状部の接点に沿った横方向のハケメは施さない。189に比べ板状部が大きいので、骨はその歪曲防止策かもしれない。

不明基台部（第72図159～163、図版64）

形象埴輪の基台部だが、形態は不明である。しかし162・163は靱か翳の可能性がある。

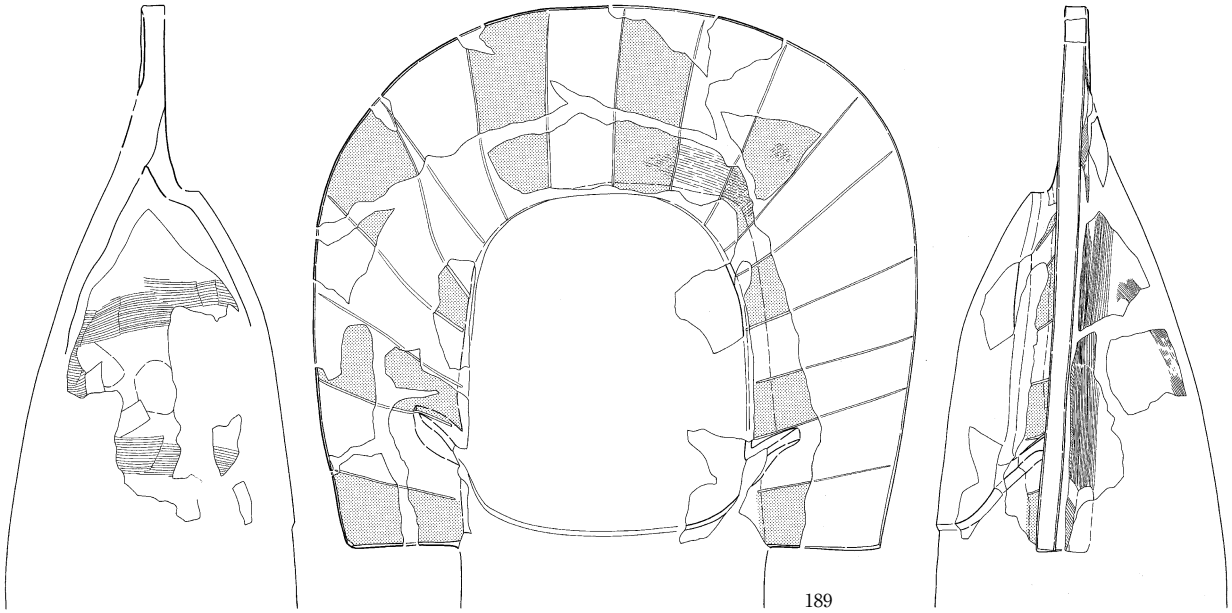
以上、形象埴輪について記した。各形態における小片資料については、観察表を参照されたい。

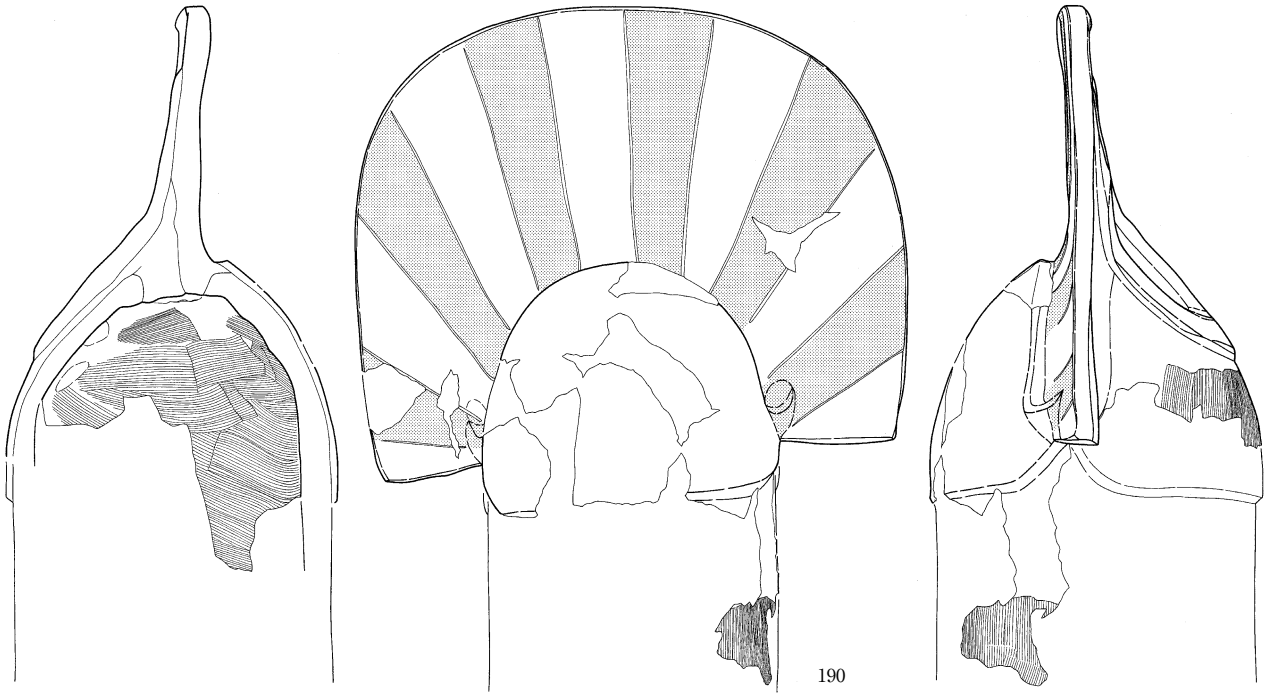
なお、表中の「胎土」・「色調・焼成」は、生産地である埼玉県鴻巣市生出塚遺跡の発掘調査報告書に準じ、同遺跡出土の円筒埴輪片を実際に参照しながら記載した。表では同じ用語を使ったが、厳密には一致しない。改めて標準土色帖に基づいて表現すると、最も多い「赤褐色」が「2.5YR４／８赤褐」で、やや黄色味の強い「淡褐色」が「５YR５／６明赤褐」、やや明度が低い「暗赤褐色」が「10R３／６暗赤」周辺色域に相当する。また、山倉１号墳の埴輪は赤みの強い色調が普通で、赤彩が施してあっても色相の変化に乏しく、見落とす傾向が強い。実測時に細心の注意をはらったが、全体視

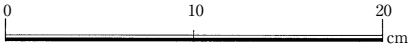
第３表　主要形象埴輪法量一覧

掲載番号	分類		全高	全幅	奥行	形象部高	設置高	形象部幅	形象部奥行	基台部高	基台部幅	基台部奥行	基台部透孔径
1	人物	筒袖全身像	113.6	51.6？	27.8？	94.8？	94.8？	51.6？	27.8？	24.1	36.5	18.9	3.6～4.2
2	人物	筒袖全身像	113.5？	52.2？	24.5？	92.8？	92.8？	52.2？	24.5？	26.0？	33.7	19.2	3.4～4.2？
3	人物	振分髪全身像	119.5	47.4	28.2	99.0	99.0	47.4	28.2	26.7	32.6	21.5	4.5～4.8
4	人物	冠帽全身像	120.6？	40.2？	29.9？	100.6？	100.6？	40.2？	29.9？	23.0	33.4	22.6？	4.1
5	人物	冠帽全身像	124.1？	44.5？	31.2？	100.6？	100.6？	44.5？	31.2？	27.1	33.6	22.5？	3.8～4.1
6	人物	冠帽半身像	81.7？	23.7	20.4	58.4？	58.4？	23.7	17.2	23.2	18.3	18.4	2.8～3.4
7	人物	冠帽半身像	74.9	23.4	19.0？	58.6	58.6	22.9	19.0	19.5	16.4	16.8	2.7～3.1
8	人物	島田髷半身像	79.8？	20.6？	19.1	51.0	56.4	20.6？	19.1	29.0	19.5	19.4	3.2～3.3
9	人物	島田髷半身像	83.4	22.4	20.1	53.6	58.7	22.4	20.1	30.4	17.3	16.5	3.6
10	人物	島田髷半身像	84.0	23.9	22.6？	52.9？	28.6？	23.9	22.6？	31.6	20.0	21.3	3.8
14	人物	振分髪半身像	—	—	—	—	—	—	—	33.4	17.6	18.0	4.0
21	人物	鍬を持つ半身像	—	—	—	—	—	—	—	29.8	18.4	19.3	3.6
22	人物	鍬を持つ半身像	—	—	—	—	—	—	—	—	18.5	18.5	3.6？
73	動物	水鳥	—	—	—	—	—	—	—	—	18.2？	18.2？	3.6？
74	動物	水鳥	—	—	—	—	—	—	—	—	17.4？	17.4？	3.9？
189	器財	翳	—	32.1？	—	—	—	32.1？	15.5？	—	—	—	—
190	器財	翳	—	29.3	17.8	—	—	29.3	17.8	—	—	—	—

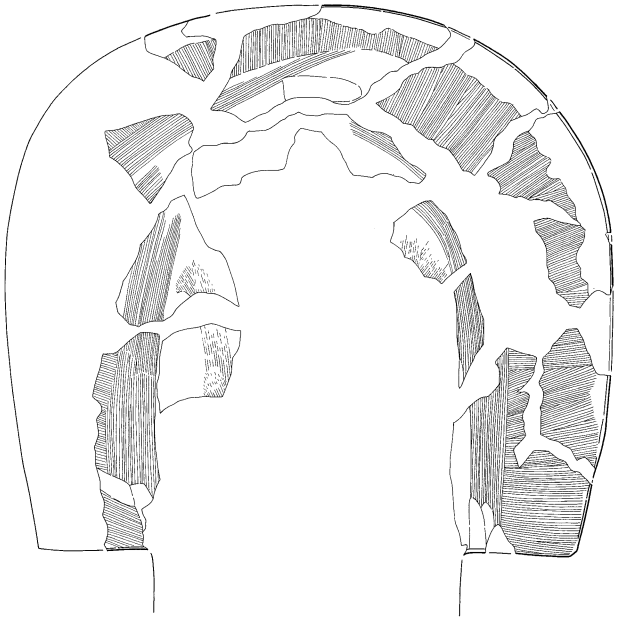
（単位：cm）

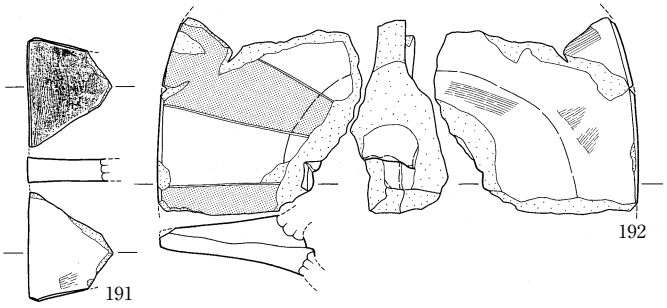


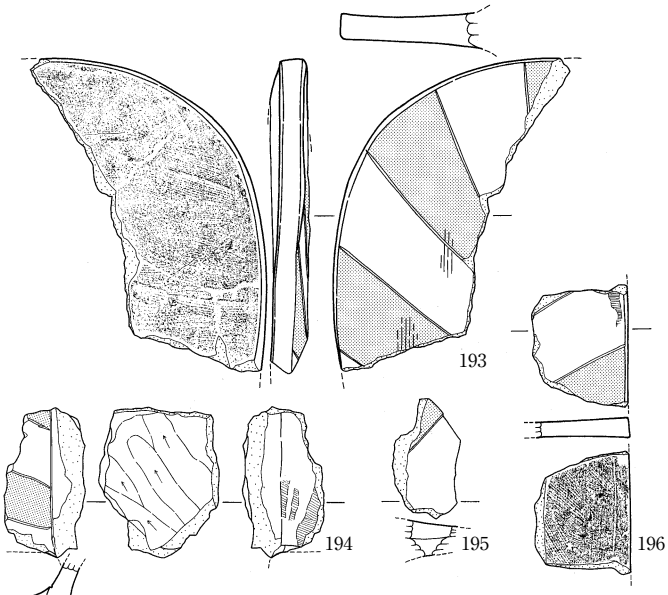


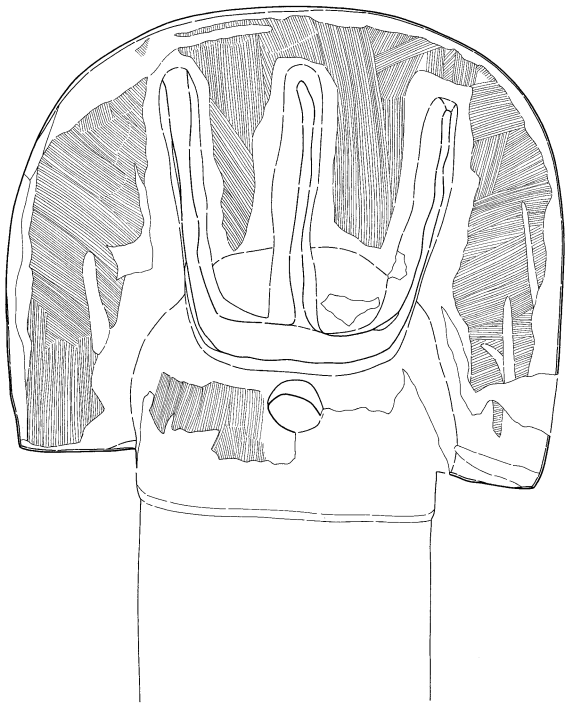


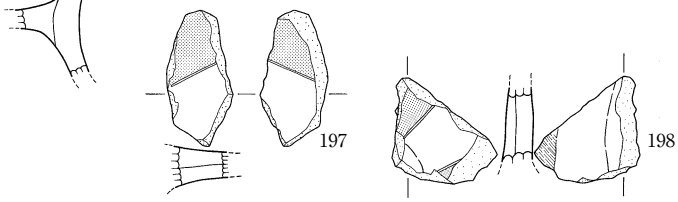
第75図　翳形埴輪実測図

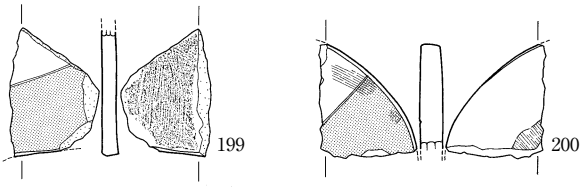


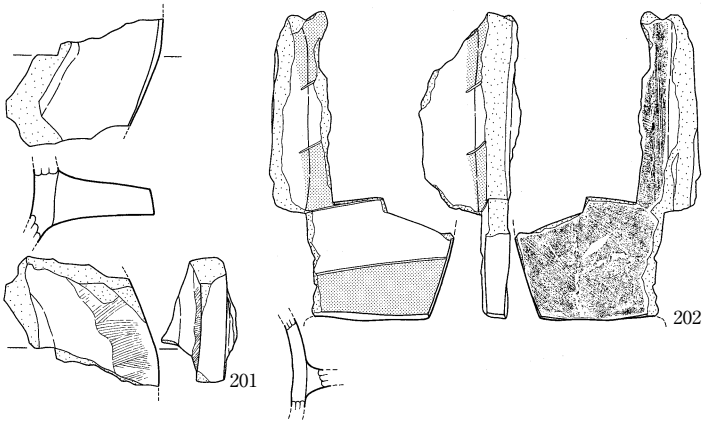

191
192

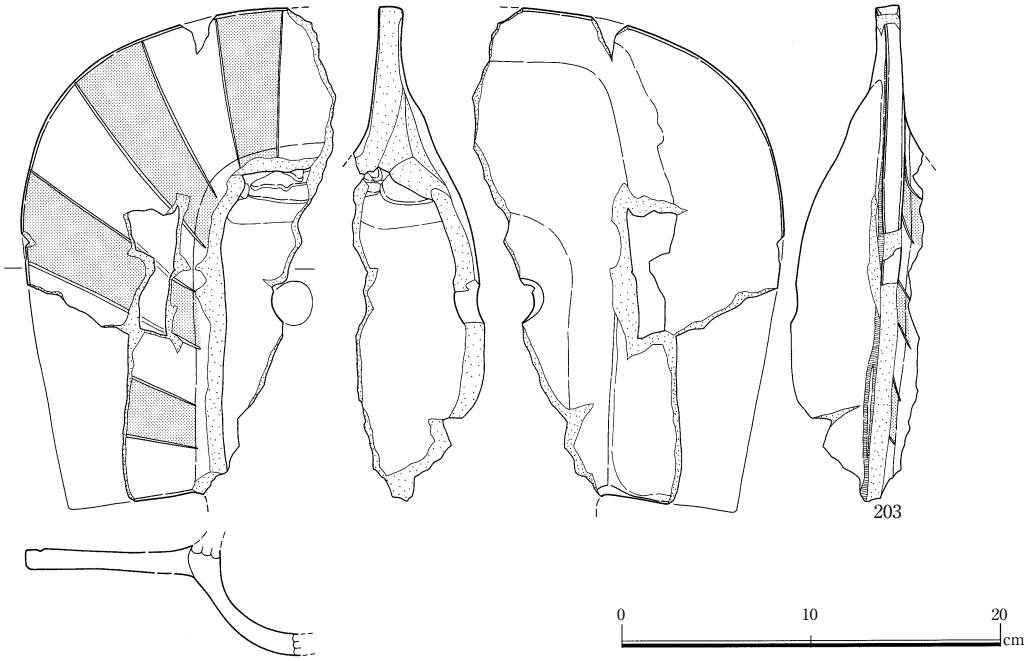

193
194
195
196




197
198


199
200


201
202



第76図　翳形埴輪片実測図

できない破片資料は、なおも見落としている可能性を残すものである。

焼成については、基本的に「普通」と記載したが、元々、胎土が粗く練りも不十分のため、土器と比べ脆い。この傾向は焼成時の背面側に顕著で、円筒と同じくほとんどの個体の基台部背面下位が一部欠落している。これにより、すべての形象埴輪が正面を火口に向け焼成されたことがわかる。

第４表　円筒埴輪観察表

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
1	542	A	26.4	36.6	72.2	23.0？	38.6？	11.3	7.3	10.0	21.3	18.9	25.9	55.2	パ・酸・チ・角	～５㎜の礫混じり若干砂っぽい	赤褐～暗赤褐色	普通 基底部に不良部あり	A/A	5～5.9	9	17	全体的につくりが雑、明瞭な指紋が多く見られる	90
			全体：縦のハケメ（７本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付、きついヨコナデで上下がくぼむ、口縁部もヨコナデされ端部が凹面をなす、体部の一部にハケメを切って縦方向のナデが見られるが、亀裂と一致するので、それを消すためのものと思われる、基底部：板押圧により多角形を呈する→凸帯間中間に略円形の透孔（径５～5.9cm）が対向する位置に穿たれる												ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：左上がりのハケメ（８本/２cm）、基底部は６cm、以上が3.5cm毎ぐらいの接合痕が明瞭									
2	559	A	15.8	22.4	70.7	22.5？	38.6	10.7	6.7	10.4	21.5	17.4	26.9	55.7	パ・酸・チ・角	～３㎜の礫多く混じり若干砂っぽい	赤褐～褐色	普通 基底部に不良部あり	A/A	5.9	9.5	15	４とよく似る 明瞭な指紋が多い 円筒埴輪総論第12図右	80
			底部から１cmぐらい以上：ハケメ（７本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付、きついヨコナデ、口縁部もヨコナデされ端部が凹面をなす、基底部：板押圧により歪んだ多角形を呈する→凸帯間中間に略円形透孔（5.9cm）が対向する位置に穿たれる、体部：一部にハケメを切るきつい縦のナデが見られる、亀裂と一致するのでそれを隠すためのものと思われる、底面：植物の茎状圧痕が少し見られる												ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（９本/２cm）→透孔以下：ハケメを切るかたちでナデが施される、外面と同じく接合痕・亀裂を消すものか									
3	093・098 099・100 101・181 573	A	—	—	—	—	(20.8)	—	—	9.9	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～３㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	A/A	6.2	10	—	反転復元　拓本	40
			縦のハケメ→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ→略円形透孔２ヶ所が対向する位置に穿たれる												透孔付近をナデのまま残して、他に左上がりのハケメが施される									
4	なし	A	46.6	68.7	67.8	21.6	(17.2)	—	9.2	—	—	—	—	—	パ・酸・チ	～２㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	A/A	4.9～5.3	9.5	—	シャープなつくり 外面上位は復元	80
			口縁・凸帯の稜がシャープである 縦のハケメ（８本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部ははっきりとくぼむ→凸帯間に略円形透孔（4.9～5.3cm）２ヶ所が対向する位置に穿たれる												接合痕が明瞭 口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（８本/２cm）→口縁部：きついヨコナデで少し立ち上がり内面も少しくぼむ									
5	541	A	—	—	—	—	(26.1)	11.2	—	—	18.6	—	—	—	パ・酸・チ・角	～４㎜の礫少し混じり若干砂っぽい	赤褐色	普通 基底部に不良部あり	A/A	6.2	11	20	内外面ともにいくつか非常に明瞭な指紋が認められる	100
			縦のハケメ（７本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯を貼り付けてきついヨコナデを施す、基底部：板押圧により多角形から楕円を呈する→凸帯上に略円形の透孔（径6.2？cm）が対向する位置に２ヶ所穿たれる、端面：ナデ、底面：植物茎状圧痕が少し見られる												ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：左上がりのやや疎らなハケメ（８/２cmと12本/２cmの２種類か）									

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
6	544基底部 560	A	—	—	—	—	(25.6)	10.7	—	—	21.2	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～5㎜の礫まばらに混じる	暗赤褐色	普通 基底部に不良部あり	A/A	?	—	21.5	透孔の位置は合成 体部の所々に指紋がよく残る	90
			縦のハケメ（7本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形に歪む、幅4㎝ぐらいでナデ状の単位が巡る→凸帯上側に円形透孔が穿たれる、底面：細い植物の茎状圧痕が多く見られる													場所により接合痕がはっきり残っている やや疎らな左上がりのハケメ（8本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ								
7	563	A	—	—	—	—	(28.5)	10.4	—	—	20.5	—	—	—	パ・酸・チ・角	まれに～2㎜の礫混じる	赤褐～褐色	良好	A/A	—	9.5	17.5	断面上位は復元	90
			縦の粗いハケメ（7本/2㎝） →緩M字状凸帯をきっいヨコナデで貼り付ける、基底部：板押圧で六角形になる、底面：植物茎状圧痕がある													接合痕が一部に良く残る ナデ→底部：横のヘラケズリ →以上：左上がりのハケメ（11本/2㎝）								
8	569基底部 570	B	16.0	21.3	75.1	23.9？	43.7	11.5	9.2	7.1	26.6	21.4	16.6	62.0	パ・酸・チ・礫・角	～8㎜の　礫・シャモット混じる	橙褐に近い赤褐色	良好	B（裏）/B	4.8？	10.5	24	断面上位反転復元	60
			縦のハケメ（10本/2㎝）→低台形～緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧、斜位のナデ状単位が5㎝ぐらいを巡る、底面形は多角形に歪む、口縁部：ヨコナデ、端部が若干くぼむ、→凸帯間に略円形透孔2ヶ所が対向する位置に穿たれる 底面：粘土板接合痕（Z）が残り、植物圧痕も多く認められる													ナデ→第1段中位以上：口縁部が横、以下が左上がりのハケメ（12本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ、口縁部：ヨコナデで少し立ち上がる								
9	537	B	21.6	29.0	74.4	23.7？	42.5	10.6	6.1	8.9	27.1	14.5	21.1	64.4	パ・酸・チ・礫・角	～1㎝の大きい礫が混じり砂っぽい	橙褐～淡褐色 凸帯は近い色だが濃淡が地肌と違う	若干不良 基底部に不良部あり	B/B	4.8	9.5	17	上位の遺存が不良	60
			基底部：板押圧で多角形に歪む→以上：縦のハケメ（11本/2㎝）→緩M字状凸帯2条が貼付・ヨコナデされる、貼付位置は基底部上の粘土帯5・7段目上の接合痕にほぼ一致する、口縁付近ヨコナデ→凸帯間下寄りに略円形の透孔（径4.8㎝）がおそらく対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（Z）がある													3～4㎝幅の接合痕が明瞭に残る ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（11本/2㎝）								
10	204・555 556基底部	B	26.6	40.3	65.9	21.0？	41.4	8.6	8.3	6.8	26.2	20.1	16.5	63.4	パ・酸・チ・礫・角	凸帯が別胎土 ～6㎜の礫混じり砂っぽい	体部：赤褐～暗い体部 凸帯：淡褐色	普通	B/B	5.2？	10	24	凸帯が別胎土 上位は反転復元	60
			縦のハケメ（10本/2㎝）、ストロークが短く斜めに重なるところが見られる→緩M字状凸帯2条（体部と別胎土）貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が弱く面取りされる、基底部：板押圧で歪む、6㎝ぐらいのところにナデ状単位が巡る→凸帯間に略円形透孔が穿たれる													ナデ→底から15cm以上：左上がりのハケメ（13本/2㎝）、接合痕がよく残る→口縁部：ヨコナデで上に立ち上がる								
11	554	B	3.8	5.2	73.8	23.5	42.8	9.7	10.8	7.0	24.8	25.4	16.4	58.2	パ・酸・チ・礫・角	まばらに最大1.5cmの礫が混じり、砂っぽい	淡褐色～淡橙褐色	普通	B/B	4.1～5.2	8	17	上位の遺存が悪い	70
			ナデ？→底部を除いて縦のハケメ（12本/2㎝）、ストロークが短く斜めに重なるところが多い→緩M字～低台形凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁付近ヨコナデされるが、端部凹まない、基底部：板押圧で七角形に歪む、工具のあたった平面の単位が明瞭→凸帯間中間に略円形透孔（径4.1～5.2㎝）が対向する位置に2ヶ所穿たれる、底面：粘土板接合痕（Z）がある 体部に明瞭な指紋が残る													底部：横のヘラケズリ→ナデ→口縁部が横、以下が左上がりのハケメ（12本/2㎝）、底に近いほど疎らである→口縁部ヨコナデで内面に少しだけ立ち上がる感じ								
12	579	B	—	—	—	—	(23.1)	11.7	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～4㎜のシャモット多い まれに～8㎜の円礫混じる	暗赤褐	普通	B（裏）/B	—	11.5	20.5	下半が遺存不良上位は反転復元	70
			下向きのハケメ（12本/2㎝、反時計回り） 基底部が板押圧により五角形に近い 底部端面は成型時のままのようで、外縁部だけが接地するかたちに外傾している													底部：反時計回りの雑なヘラケズリ →以上：左上がりのハケメ（14本/2㎝） 支えの指圧痕が下部に目立つ								
13	580	B	—	—	—	—	(28.1)	9.0	—	—	24.6	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	1㎝を超える礫がまばらに混じり砂っぽい 凸帯は明らかに別胎土	橙褐に近い赤褐色 凸帯は暗赤褐色	普通	B/B	?	—	24	粗雑かつ重厚なつくり 凸帯が別胎土でつくられる	90
			破断面に色の違う粘土帯が見られる 体部に凸帯胎土が斑点状に付着している 縦のハケメ（10本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形に歪む、6㎝の幅でナデ状の単位が巡る→凸帯上側に円形透孔が穿たれる、体部：一部にヒビ消しの縦のナデが施される、底面：植物の茎状・その他の圧痕がある													接合痕がはっきり残る 左上がりのやや疎らなハケメ（12本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ、底面の幅が一定しない								
14	564	B	4.1	—	—	—	(29.3)	10.2	—	—	24.0	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まれに1㎝大の礫混じるが、大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	良好	B/B	5.0？	10	23	全体的にやや粗雑なつくり 指紋も目立つ	60
			縦のハケメ（10本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形に歪む、8㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る、底面は板押圧により歪んでおり直立しない→凸帯の上側に略円形透孔が穿たれる													接合痕が明瞭に残る 全面：左上がりのハケメ（13本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ								
15	543	B	—	—	—	—	(30.7)	10.0	—	—	26.5	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～2㎜の礫多く混じり砂っぽいまれに1.5㎝を超える礫がある	暗赤褐色～暗い淡褐色	やや不良 基底部に大きく不良部あり	B/B	?	10	23.5	砂っぽいが厚手のつくり 底部が焼成不良で大きく欠失する	100
			器面が荒れてざらついている 斜めに重なる縦のハケメ（11本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で隅円方形に近く歪む、5～6㎝の幅にナデ状の単位が巡る→凸帯直上に透孔が2ヶ所対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（Z）がある													下位ほど疎らな左上がりのハケメ（12本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ								
16	558	B	—	—	—	—	(27.2)	9.6	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	大きい粒は目立たないがかなり砂っぽい まれに1㎝の礫	暗い橙褐色～暗赤褐色	普通 基底部に不良部あり	B/B	—	—	22	つくりが粗雑	60
			縦のハケメ（10本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形に歪む、5㎝幅でナデ状の単位が巡る													下位はナデ、上位はかなり疎らなハケメ（13本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ								
17	525	B'	—	—	—	—	(35.3)	11.7	—	11.7	19	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～5㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐 凸帯だけ少し clear	良好	B/B	4.5～5	12	22	つくりが粗い 透孔以上の遺存が不良 13と酷似する	90
			縦のハケメ（11本/2㎝）→断面低い台形～三角形の凸帯2条が貼付・ヨコナデされる、基底部：板押圧で歪む→凸帯間中程に略円形透孔（径4.5～5㎝、一方が反時計回りの1周、他方が正・反半周ずつ穿っているように見える）が対向する位置に2ヶ所穿たれる、底面：粘土板接合痕（Z）がある													ナデ→底部：横のヘラケズリ→以上：左上がりのハケメ（12本/2㎝）、下位はハケメのない部分が広がり、3㎝ぐらい毎の接合痕がよく分かる								
18	545	B'	5.6	—	—	—	(28.0)	12.3	—	—	20.5	—	—	—	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫混じる	橙褐～淡褐色（下位）	普通	B/B	4.5～5.2	12	23	傾きが強い 14と酷似する	90
			縦のハケメ（12本/2㎝）、斜めに切り合うところが目立つ→断面低い台形～三角形の凸帯が貼付・ヨコナデされる、基底部：板押圧で多角形に歪む→凸帯ヨコナデ直上に略円形透孔（径4.5～5㎝、時計回り）が対向する位置に2ヶ所穿たれる													ナデ→底部：狭い幅で反時計回りのヘラケズリ→以上：左上がりのハケメ（14本/2㎝）、底面から10cmほどはハケメのない部分が広がる、全面：2.5～4㎝ぐらい毎の接合痕がよく分かる								
19	074・098 099・101 181・572～ 574・574 012	B'	21.0	30.4	69.1	22.0？	40.4？	10.8	9.9	11.1	19.4	24.5	27.5	48.0	パ・酸・チ	～2㎜の礫混じる	乳白色～淡褐色	若干不良	B/B	4.7	11	20	上下は合成・反転復元 遺存不良	50
			全面に亀裂が生じている、つくりも雑に見える 縦のハケメ→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデでにぶく面を持つ→凸帯間下寄りに円形透孔が穿たれる→基底部：板押圧、底面：粘土板接合痕（S）													左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ								

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要素	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
20	552	D	14.5	19.7	73.8	23.5	46.9	9.0	9.3	8.9	28.7	19.8	19.0	61.2	パ・酸・チ・角	砂粒が目立たない	赤褐色	普通	D/D	5.4～6.3	9	19.5	口縁部・基底部の遺存が不良	75
			全面：縦のハケメ（13本/2㎝）→緩方向の亀裂と一致するナデが一部に見られる、指紋もあり、焼成前にヒビを消したものと思われる→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・きついヨコナデ、下段は螺旋状にずれが生じているがそのままヨコナデされる、口縁部：ヨコナデ、基底部：板押圧で六角形になるが円に近い→下段凸帯上で楕円形透孔（5.4×6.3㎝）２ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：植物茎状圧痕と粘土板接合痕（S）がある													ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁部が横、以下が左上がりのハケメ（13本/2㎝）→口縁部：きついヨコナデで端部がＹ字に近くまでくぼむ									
21	514	D	3.4	4.7	72.2	23.0？	44.1	8.9	8.9	8.7	26.4	20.2	19.8	60.0	パ・酸・チ・角	砂粒が目立たない	暗赤褐色～赤褐	普通基底部に不良部あり	D/D	6.7	10	17	丁寧なつくり 口縁部の遺存が不良	80
			全面：縦のハケメ（14本/2㎝）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁もきつくヨコナデされ端面がはっきりと凹面をなす、基底部：板押圧により多角形になるが円に近い、単位はヘラケズリあるいはきついナデのように見える、体部に縦方向の亀裂を消すための仕上げナデが見られる→凸帯間に楕円気味の透孔（径6.7㎝）２ヶ所が対向する位置に穿たれる													ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁部が横、以下が左上がりのハケメ（14本/2㎝）→口縁部ヨコナデ									
22	590	D	—	—	—	—	(17.0)	8.5	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫混じる	赤褐～暗赤褐色	やや不良基底部の欠損目立つ	D/D	—	—	20		60
			縦のハケメ（14本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形を呈する、底から４㎝ほどにナデ状の単位が巡る、底面：粘土板接合痕（S）がある												左上がりのハケメ（11本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
23	528	E１	18.2	27.0	67.5	21.5	39.8	9.5	5.7	7.6	26.5	14.3	19.1	66.6	パ・酸・チ・礫・角	～6㎜の礫・シャモット混じる	淡い赤褐色～淡褐色	普通下位が若干不良	E/E	4～5	7.5	17	凸帯がかなり上寄りにある	75
			ナデ→全面：縦のハケメ（18本/2㎝）→底部：板押圧でナデ状の面が並ぶ、緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁部もヨコナデ→凸帯間に横に長い円形の透孔（４～５㎝）が２ヶ所対向する位置に穿たれる、指紋がところどころにある													ナデ→全面：口縁付近が横、以下が左上がりの強くあたるハケメ（18本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ、口縁端部はヨコナデで少しくぼむ									
24	510	E１	9.8	14.2	69.1	22.0	41.3	9.5	7.3	8.7	25.6	17.5	20.9	61.5	パ・酸・チ・角	～３㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	E/E	5.4～6.1	8.5	15	整ったつくり	75
			縦のハケメ（16本/2㎝）→底部付近ナデもしくはヘラケズリ→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁部もヨコナデ、端部が明瞭に凹面をなす、基底部：板押圧で多角形になり、楕円形に歪む→凸帯間に略円形透孔（5.4～6.1㎝）が２ヶ所対向する位置に穿たれる、底面：植物茎状圧痕が少しある													全面：口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（16本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで少しくぼむ、底部：反時計回りのヘラケズリ									
25	538	E１	11.0	—	—	—	(33.6)	10.3	—	—	26.7	—	—	—	パ・酸・チ・礫	～５㎜の礫混じる	赤褐色	普通基底部に大きく不良部あり	E/E	5.9？	9.5	18.5	整ったつくり	100
			全面：縦のハケメ（15本/2㎝）→底部から８㎝ほどの幅がハケメを切って丁寧にナデられる→上の稜が若干高い緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ（反時計回り）、基底部：板押圧により多角形になるが円に近い→凸帯の少し上に円形の透孔（径5.9㎝？）２ヶ所が対向する位置に穿たれる													ナデ→強くあたる左上がりのハケメ（15本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで若干くぼむ、底部：ハケメを切る反時計回りのヘラケズリ									
26	591	E１	—	—	—	—	(28.5)	10.0	—	—	25.6	—	—	—	パ・酸・チ・角	～４㎜の礫混じる	赤褐色	普通基底部に大きく不良部あり	E/E	6.0？	10	16	断面上位は復元	70
			全面：縦のハケメ（18本/2㎝）→緩Ｍ字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形になるが円に近い→凸帯直上に略円形透孔（6.0㎝？）が穿たれる、底面・破断面：粘土板接合痕（S）が見られる													接合痕が目立つ、全面：左上がりのハケメ（18本/2㎝）→底部：幅2.5㎝ぐらいで反時計回りのヘラケズリ									
27	584-92	E１	38.0	46.6	81.6	23.2？	41.8？	9.6？	8.0	7.6	26.1	19.2	18.2	62.6	パ・酸・チ・礫・角	～３㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐色	良好	E/E	4.4～5.9	—	16	外形・断面の上位は合成 反転復元　拓本	35
			縦のハケメ→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、基底部：板押圧、５㎝ぐらいにナデ状の単位が巡る→凸帯間に横位卵形透孔が穿たれる、凸帯間が狭かったので形状が歪んだものと思われる													横～左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ									
28	502	E１	26.2	39.4	66.6	21.2？	41.0	9.6	7.1	9.2	24.8	17.3	22.4	60.3	パ・酸・チ・角	～４㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐色～橙褐色	普通基底部に不良部あり	E/E	6	9	15.5	上位が遺存不良	70
			ナデ→縦のハケメ（16本/2㎝）→基底部：板押圧でナデ状の面が幅５㎝ぐらいに巡る→上側の稜が若干高い緩Ｍ字状凸帯２条が貼付・ヨコナデされる、口縁部もヨコナデされ端部が面をなす→凸帯間に略円形透孔（6.0㎝）２ヶ所が対向する位置に穿たれる													ナデ→全体：左上がりのハケメ（16本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面が少しくぼむ、底部：反時計回りのヘラケズリ									
29	588	E１	—	—	—	—	(24.2)	9.9	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～８㎜の礫がまれに混じる	赤褐色	普通不良部あり	E/E	—	—	17		80
			基底部の粘土板部分が膨らんでいる 縦のハケメ（17本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形に歪むが円に近い、７㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る													比較的密な左上がりのハケメ（18本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
30	561	E１	—	—	—	—	(22.6)	10.4	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まばらに～７㎜の礫混じる	暗赤褐	良好	E/E	—	10.5	17	整ったつくり	100
			縦のハケメ（15本/2㎝）→基底部：タタキ状の多数平行する左上がりの条線が残り、ナデが施されている													底部：横のヘラケズリ？・ナデ→左上がりの単位の明瞭な細かいハケメ（13本/1㎝）									
31	562	E１	—	—	—	—	(9.2)	9.6	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	E/E	—	—	17	県セ胎土分析３ 反転復元	70
			縦のハケメ（17本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形になる、５㎝幅でナデ状の単位が巡る													左上がりのハケメ（20本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ、底面の幅が狭い									
32	581	E１	—	—	—	—	(9.1)	10.9	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まれに～３㎜の礫混じる	橙褐に近い赤褐色	良好	E/E	—	—	19.5	整ったつくり	60
			縦のハケメ（19本/2㎝）→基底部：板押圧されるが円に近い、左上がりの並行する条線を伴うナデ状の単位が５㎝ほどで巡る													左上がりのハケメ（23本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
33	526	E２	—	—	—	—	(37.3)	9.7	—	7.6	24.3	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まれに～５㎜の礫混じる 細かい粒が目立ち若干砂っぽい	赤褐色	普通	E/E	5.8	10	18.5	ハケメが丁寧にきっちり底から施され、つくりも整っている	70
			縦のハケメ（16本/2㎝）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧されるが単位が細かく円に近い、底部付近にナデ状の単位が巡る→凸帯間に略円形透孔（5.8㎝）２ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）がある													底から全面左上がりのハケメ（16本/2㎝）が施される、接合痕がところどころに露出する									
34	216 584-92	E２	—	—	—	—	(20.3)	10.2	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	まれに１㎝を超える礫が混じるが砂粒は目立たない	赤褐色～暗赤褐色	普通	E/E	—	—	19	県セ胎土分析９ 断面は反転復元	60
			縦のハケメ（17本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形になるが正円に近い、２㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る													底部すぐから左上がりのハケメ（19本/2㎝）									
35	508	E２	29.8	50.0	59.7	19.0？	37.5	9.7	7.0	7.5	22.9	18.7	20.1	61.2	パ・酸・チ・礫・角	～９㎜の礫混じり、若干砂っぽい	淡褐色	普通基底部に不良部あり	E/E	5.4	9.5	23		50
			全面：縦のハケメ（20本/2㎝）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデされ端部が面取りされる、基底部：２㎝ぐらいの幅で板押圧される→凸帯間に略円形透孔（5.4㎝）が穿たれる、全面に細かいヒビが生じている													底部から透孔付近まで左上がりのハケメ（20本/2㎝）、凸帯内面のところでナデになり、また、以上がハケメになる、口縁部：ヨコナデでほんの少しくぼむ 底部はハケメのまま未調整で内側に広がる									

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要素	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
36	549	F 1	72.2	101.3	71.3	22.7	40.5？	9.6	10.7	8.2	21.6	26.4	20.2	53.3	パ・酸・チ・角	～３㎜の礫・～２㎜のシャモット混じる	淡褐色	良好	F/F	5.6？	9.5	17.5	口縁部と以下は図上復元 断面中位は反転復元	70
			縦のハケメ（19本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条貼り付け・ヨコナデ、口縁端部はきついヨコナデで凹面を呈する、口縁以下３cmぐらいもヨコナデされる、端部は凹面をなし外側に丸く突き出る、基底部：板押圧・ナデ→下凸帯直上に対向するかたちで円形の透孔を穿つ、透孔端面：ナデ、底部：粘土板接合痕（S）がある、下側凸帯にヘラキズがある												幅２～３cmで接合痕が見られる（内傾接合） ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ →以上：主に左上がりで口縁付近は横になるハケメ（19本/２cm）→口縁部：ヨコナデ									
37	505	F 1	8.8	—	—	—	(33.1)	9.2	—	7.7	22	—	—	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫・シャモット少し混じる	淡褐色 焼け具合でところどころ橙褐色に近い	普通	F/F	5.9	9.5	16	凸帯以上は合成	100
			全面：縦のハケメ（18本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、基底部：12cmぐらいのところまで板押圧に伴う可能性のある左上がりの条線（５㎜幅で平行する）が見られる、基底部は楕円に歪む→凸帯間もちょうどの大きさで略円形透孔（5.9cm）２ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：少数の植物茎状圧痕と粘土板接合痕（S）がある												全面：上位ほど横になる左上がりのハケメ（18本/２cm）→底部：４cmぐらいの幅で左上がり～反時計回りのヘラケズリ									
38	なし	F 1	—	—	—	—	(24.0)	10.6	—	—	20.4	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～５㎜の礫混じる 凸帯が別胎土である	本体：橙褐色 凸帯：淡褐色	良好	F/F	5.5？	10.5	18	整ったつくり	100
			縦のハケメ（18本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯貼り付け・ヨコナデ、基底部：板押圧・ナデ？→円形の透孔を対向する位置、凸帯直上に穿つ・透孔端面ナデ、底部：ナデ 外面の所々に凸帯胎土の付着する指頭支持痕が見られる、底面：植物茎状圧痕がある												接合痕が各単位（幅２～３cm）ごとに明瞭に見られる ハケメに乗るかたちで指頭によると思われる別胎土の斑点が見られる　凸帯貼り付け以降の支持痕と思われる ナデ→底部：横のヘラケズリ（反時計回り） →以上：左上がりのハケメ（20本/２cm）									
39	198・582	F 1	—	—	—	—	(19.3)	10.0	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～５㎜の礫混じる	暗赤褐色～赤褐色	普通	F/F	—	—	17.5		50
			縦のハケメ（15本/２cm）→基底部：左上がりの条線多数を伴う板押圧、５cmぐらいの幅で単位が巡る												左上がりのハケメ（17本/２cm）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
40	589	F 1	—	—	—	—	(20.6)	9.3	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫混じる	橙褐色に近い赤褐色	普通	F/F	—	—	18		100
			縦のハケメ（15本/２cm）→基底部：板押圧、３cmぐらいの幅で単位が巡る												左上がりのハケメ（21本/２cm）→底部：反時計回りの幅広のヘラケズリ									
41	567・568 基底部	F 1	—	—	—	—	(18.2)	9.5	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫多く混じり砂っぽい	淡褐色	普通	F/F	—	—	16.5	整ったつくり	100
			縦のハケメ（16本/２cm）→基底部：板押圧、７～８cmの幅で左上がりの並行する条線を伴う単位が巡る												左上がりのハケメ（23本/２cm）→底部：反時計回りの幅広のヘラケズリ、底面の幅はほぼ均一で正円に近い									
42	515	F1'	4.2	6.7	62.5	19.9？	40.3	10.2	9.1	8.3	23.0	22.5	20.5	56.9	パ・酸・チ・角	～３㎜の シャモット混じる 礫は目立たない	橙褐色～赤褐色	普通 基底部に不良部あり	F/F	5.9～6.4	7	15	ヒビが顕著である	70
			全面：縦のハケメ（17本/２cm）→上側の稜の高い緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が少し広がる、基底部：板押圧により多角形になるが円に近く整っている、→凸帯間に略円形透孔（5.9～6.4cm）２ヶ所が対向する位置に穿たれる												ナデ→全面：口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（19本/２cm）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
43	532	F1'	51.4	71.8	71.6	22.8	42.4	9.8	8.8	8.2	25.5	20.7	19.3	60.0	パ・酸・チ・角	～５㎜の礫混じる	淡い橙褐色～淡褐色	普通 基底部が若干不良	F/F	6.1	8	19	基底部に細かいヒビが見られる	75
			縦のハケメ（16本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部ヨコナデで端部が明瞭にくぼみ若干垂下したようになる、基底部：板押圧で多角形になるが円に近い→凸帯間ほぼ中央に円形透孔（6.1cm）２ヶ所が対向する位置に穿たれる												底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁部付近が横、以下が左上がりのハケメ（20本/２cm）→口縁部：ヨコナデで少しくぼむ									
44	551	F1'	47.8	61.9	77.2	24.6	44.9	10.2	8.5	10.0	26.5	18.9	22.2	58.9	パ・酸・チ・角	～４㎜の　礫・シャモット混じる	淡褐色	普通 基底部に不良部あり	F/F	6	9	19	整ったつくり	80
			縦のハケメ（17本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条貼付・ヨコナデ、底部付近ナデもしくはヘラケズリ、口縁部：きついヨコナデで端部が明瞭にくぼむ、基底部：板押圧で多角形になる→凸帯間上寄りに円形透孔（６cm）２ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）がある												底部：横のヘラケズリ→ナデ？、以上：口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（17本/２cm）→口縁部：ヨコナデ									
45	546	F1'	—	—	—	—	(23.9)	9.1	—	—	24.4	—	—	—	パ・酸・チ・角	～３㎜の　礫・シャモットまばらに混じる	淡褐色 焼け具合で一部赤～橙褐色	良好	F/F	5.2	8	19	整ったつくり	100
			縦のハケメ（18本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧されるがほぼ円形をなす、底から５cmぐらいに左上がりの条線（タタキ状）が一部見られる→凸帯直上に略円形透孔（径5.2cm）が対向する位置に２ヶ所穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）がある												ナデ→底部：左上がりのヘラケズリ→以上：主に左上がりの疎らなハケメ（18本/２cm）、接合痕が良く残る									
46	578-84 582	F1'-2	—	—	—	—	(14.9)	9.7	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の　礫・シャモット混じる	橙褐に近い赤褐色	普通	F/F	—	—	15	県セ胎土分析８	65
			縦のハケメ（15本/２cm）→基底部：板押圧で多角形になるが正円に近く整っている、左上がりの並行する条線を伴うナデ状の単位が巡る、底面：植物状圧痕が少しある												左上がりのハケメ（20本/２cm）→底部：反時計回りのヘラケズリ									
47	585	F1'-2	—	—	—	—	(17.7)	10.1	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫混じる	赤褐色	普通 基底部に不良部あり	F/F	—	—	16.5	薄手	75
			縦のハケメ（16本/２cm）→基底部：左上がりの条線（５㎜幅で平行する）を伴う板押圧、底面形はほぼ正円												やや疎らな左上がりのハケメ（21本/２cm）→底部：７cmぐらいまで反時計回りのヘラケズリ									
48	584	F1'-2	—	—	—	—	(14.3)	10.8	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まれに～５㎜の礫混じる 大きい粒は目立たないが少し砂っぽい	赤褐色～暗赤褐色	普通	F/F	—	—	22	整ったつくり	100
			縦のハケメ（15本/２cm）→基底部：３cmほどの幅に左上がりの条線を伴う板押圧が施されナデ状の単位が巡る、底面形は多角形を呈する、底面：植物茎状圧痕がある												ナデ→左上がりのハケメ（20本/２cm）→底部：ごく狭い幅をヨコナデ、基底部の粘土板部分のみに亀裂が見られる									
49	535	F２	37.1	50.7	73.2	23.3？	45.3	11.0	11.8	7.8	25.5	26.2	17.3	56.5	パ・酸・チ・礫・角	～５㎜の礫混じる	赤褐色 ただし焼成の具合により橙・淡褐色と斑になる	普通 基底部に不良部あり	F/F	5～5.6	8.5	14	上位の遺存が不良	70
			底部付近を除いて縦のハケメ（15本/２cm）→緩Ｍ字状凸帯２条がヨコナデで貼り付けられる、口縁直下３cmまでがヨコナデされる口縁端部は凹面をなし外側に丸く突き出る、基底部：板押圧により若干多角形状に歪む、左上がりのタタキ状条線が見られる→下凸帯直上に略円形透孔（直径5.6cm）が対向する位置に２ヶ所穿たれる、透孔端面ナデ、底面：粘土板接合痕（S）がある												ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ→以上：口縁近くで横になる左上がりのハケメ（16本/２cm）									

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
50	547	F2	26.4	35.5	74.4	23.7？	43.1	10.6	7.4	10.2	25.5	17.2	23.7	59.2	パ・酸・チ礫・角	～6㎜の礫が多く混じる	体部：赤褐色 凸帯：橙褐に近い赤褐色	普通 基底部が若干不良	F/F	5～7	10	19	口縁・基底部が遺存不良で、基底部のひび割れが顕著である 下凸帯以上のつくりが雑である 凸帯が別胎土でつくられている	80
			全面：縦のハケメ（25本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、なお、下側のものは確実に異なる胎土でつくられている、口縁部：ヨコナデで端部が明瞭に凹面をなす、基底部：板押圧により多角形に歪む→凸帯間に楕円気味の透孔（5～7㎝）2ヶ所が対向する位置に穿たれている、透孔端部は丸く、ナデられている、底面：粘土板接合痕（S）がある												底部：反時計回りのヘラケズリ、以上：口縁部が横、以下が左上がりのナデに見えるぐらいのハケメ（25本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面がくぼむ、接合痕・粘土帯の凹凸がよく残る、上位に凸帯の胎土がなでつけられたように広がっている								
51	582	F2	27.8	39.7	70.0	22.3	(14.2)	—	7.9	9.9	—	—	—	—	パ・酸・チ礫・角	～3㎜の礫混じる	赤褐色	良好	F/F	5.7	12	—	反転復元	40
			縦のハケメ（17本/2㎝）→緩M字状凸帯2条を貼り付けてきついヨコナデ、口縁部も幅4㎝ほどヨコナデ、端部は凹面をなし外側に丸く突き出る→凸帯間に略円形の透孔（径5.7㎝）が穿たれる												ナデ→口縁に近いほど横位になる主に左上がりのハケメ（17本/2㎝）										
52	084・531 532基底部なし	F2	26.4	36.9	71.6	22.8	(28.9)	—	10.0	8.4	—	—	—	—	パ・酸・チ	～3㎜の礫混じる	赤褐色	普通 下位が不良	F/F	6.3	10	—	下位が遺存不良	70
			縦のハケメ（15本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部はくぼみ外側に丸く突き出る→凸帯間いっぱいの大きさで略円形透孔（6.3㎝）2ヶ所が対向する位置に穿たれる												口縁部が横、以下が左上がりのハケメ（16本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面が少しくぼむ 接合痕が消えていない										
53	114	朝顔	25.0	24.1	103.6	33.0	(14.0)	—	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～3㎜の　礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	F/F	—	10	—	反転復元	20
			縦のハケメ（18本/2㎝）→屈曲部：緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁から3.5㎝の幅でヨコナデ、端部はゆるく凹面をなし、丸く外に突き出る												ナデ→主に横のハケメ（21本/2㎝）、ところどころナデが切る、口縁直下3.5㎝はヨコナデ										
54	216・578 579基底部	朝顔	33.4	31.9	104.6	33.3	56.7	13.0	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～3㎜の　礫・シャモットが少し混じる	赤褐～暗赤褐色	良好	F/F	5.2？	11	20	反転復元 遺存不良のためくびれ以上、胴部、基底部の断面を合成した	40
			全面：縦のハケメ（15本/2㎝）、口縁部のハケメは特に密で25本→凸帯5条を貼り付け強いヨコナデを施す、口縁部もヨコナデで端部が凹面を呈する→最下段凸帯直上に略円形の透孔が対向する位置に2ヶ所穿たれる、底面：太い植物茎圧痕あり												底部は自重により内側に広がっている ナデ→口縁部凸帯の裏側位まで横のハケメ（18本/2㎝）、くびれ部はヨコナデ、肩部から透孔より上の部分は横のヘラケズリ、以下は主に左上がりのハケメ（同）→口縁部：ヨコナデ								
55	587基底部 588	朝顔？	22.8	22.0	103.6	33.0？	(24.4)	12.5	—	—	19.5？	—	—	—	パ・酸・チ礫	大きい砂粒は目立たない	淡褐色	普通	F/F	5.8？	8	16.5	県セ胎土分析5 断面上位反転復元 亀裂が多く生じており遺存不良	75
			縦のハケメ（17本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ→凸帯の上側に円形透孔が穿たれる、底面：基底部粘土板の接合痕（S）が明瞭である、基底部調整はなく底部が外側に広がる												接合痕が明瞭に残る 全面：左上がりのハケメ（18本/2㎝）										
56	592		—	—	—	—	(18.2)	9.0	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ礫・角	礫が多く混じり砂っぽい ごくまれに1㎝の礫混じる	橙褐色～赤褐色	良好	G/G	—	7	13.5	県セ胎土分析4 砂っぽい胎土のためか軽量で薄い	100
			器面が荒れてざらついている 縦のハケメ（14本/2㎝）→基底部：板押圧されるが底面は正円に近い、底から7～8㎝にナデ状の単位が巡る												左上がりのハケメ（14本/2㎝）→底部：反時計回りのヘラケズリ、底面幅はほぼ均一で正円に近い										
57	530	H2	3.0	—	—	—	(41.1)	10.8	—	10.4	26.1	—	—	—	パ・酸・チ礫	～5㎜の礫混じる	赤褐色	普通	H/H	5.6？	9.5	19	ハケメが上位のみで特徴的 下側凸帯以上が遺存不良	80
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→低い緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧され多角形になるが円に近い、ナデ状の範囲が底部近くに巡る→凸帯間に略円形透孔（5.6㎝？）2ヶ所が対向する位置に穿たれる 体部のところどころに指紋と別胎土（橙褐色）の汚れが見られる												ナデ→透孔より上に左上がりの疎らなハケメ（11本/2㎝）、以下は左上がりの単位の見えるナデ										
58	529	H2	—	—	—	—	(41.7)	10.7	—	—	27.0	—	—	—	パ・酸・チ礫	～5㎜の礫混じる	赤褐色	普通	H/H	5.4	8.5	17	ハケメが上位のみで特徴的 透孔以上が遺存不良	90
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧により多角形になるが円に近く整っている、幅2㎝ぐらいでヘラケズリ状の調整が底部を巡る、砂粒の移動がないので板押圧が角度を変えて2巡施されたのかもしれない→凸帯間に略円形透孔（5.4㎝）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、体部：焼成前のヒビを消すためと思われる縦の規模の大きいナデが一部に見られる、底面：粘土板接合痕（S）が残る												ナデ→透孔より上に左上がりの疎らなハケメ（11本/2㎝）、以下は左上がりの単位の見えるナデ										
59	512	H1	7.7	12.3	62.8	20.0	37.1	10.7	7.0	9.3	25.9	16.6	22.0	61.4	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫混じる	赤褐	良好	H/H	5.7	9	15	整ったつくり	80
			底面から2㎝ぐらい以上に縦のハケメ（8本/2㎝）→緩M字～低台形凸帯2条を貼付・ヨコナデする、底部付近がナデられる、口縁付近もナデで、端部が若干凹面をなす、基底部：板押圧で多角形になるが円に近い→凸帯間中間に略円形透孔（径5.7㎝）が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（Z？）が残る												全面ナデ→口縁近くは横、以下は、左上がりのハケメ（9本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面が少しくぼむ										
60	513	H1	—	—	—	—	(35.4)	10.2	—	—	24.9	—	—	—	パ・酸・チ礫・角	まれに～5㎜の礫混じる	赤褐色 ただし焼成の具合により橙褐色と斑になる	普通 基底部が不良	H/H	6.0？	9.5	14	透孔以上が遺存不良	90
			縦のハケメ（8本/2㎝）→緩M字状凸帯貼り付け・ヨコナデ、基底部：板押圧、ナデ状の単位が巡る→凸帯直上に略円形の透孔が2ヶ所対向する位置に穿たれる、透孔端部ナデ、底面に植物茎状圧痕あり												ナデ→底部：指頭のくぼみ、成形時のゆがみが残る→以上：主に左上がりのハケメ（9本/2㎝）が若干疎らに施される										
61	548	H1	—	—	—	—	(31.4)	10.5	—	—	26.5	—	—	—	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫混じる 凸帯が別胎土である	体部：赤褐色 凸帯：橙褐に近い赤褐色	良好	H/H	4.5？	9	15	県セ胎土分析2 凸帯の胎土が明瞭に異なる	100
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、凸帯の別胎土が斑点となって付着する、基底部：5㎝ぐらいまでが板押圧され単位が巡る、体部の一部にヒビを消すためと思われる縦のナデが施される→凸帯上側に略円形透孔（4.5㎝？）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：植物茎状圧痕と粘土板接合痕（S）がある												接合痕がはっきりと残る ナデ→下位ほど疎らな左上がりのハケメ（10本/2㎝）、上位：凸帯胎土が斑に付着する										
62	523	H1	33.0	52.3	63.1	20.1	42.2	9.0	8.6	9.8	26.1	19.3	22.0	58.7	パ・酸・チ礫・角	～6㎜の　礫・シャモット若干多く混じる	暗い淡褐色	普通 基底部に不良部あり	H/H	4.8～6.2	10	16	円筒埴輪総論第12図左	90
			縦のハケメ（8本/2㎝）→緩M字凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形になるが円に近い、また、底部から4㎝のあたりにナデ状の押圧単位が巡る→凸帯間に略円形透孔（4.8～6.2㎝）2ヶ所が対向する位置に穿たれる												ナデ→基底部付近が疎らで、口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（9本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面がゆるくくぼむ										

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要素	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
63	521	H1	—	—	—	—	(37.3)	9.8	—	—	23.3	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～6㎜の礫混じる	橙褐に近い赤褐色 基底部付近に斑に赤褐色が見られる	普通 基底部に不良部あり	H/H	5.9	8.5	17		80
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、接合痕を消すためと思われるナデが一部に見られる、基底部：板押圧で多角形になるが円に近い→凸帯間に略円形透孔（5.9cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）がある												ナデ→左上がりのハケメ（11本/2㎝） 接合痕がよく残る									
64	511	H1	—	—	—	—	(29.3)	10.6	—	—	24.4	—	—	—	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫・まれに～6㎜のシャモット混じる	赤褐色	普通 基底部に不良部あり	H/H	6.0	9	17	県セ胎土分析1	100
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字～低台形凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧され多角形になるが円に近い、ナデ状の範囲が底部近くに巡る→凸帯の上に略円形透孔（6㎝）が2ヶ所対向する位置に穿たれる 底面：粘土板接合痕（S）が残る												ナデ→下位ほど疎らなハケメ（11本/2㎝）									
65	522	H1	—	—	—	—	(17.0)	—	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じり、若干砂っぽい	体部：暗赤褐色 凸帯：赤褐色	やや不良	H/H	6.0？	10.5	—	下位ほど遺存不良	100
			縦のハケメ（8本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ→凸帯直上に略円形透孔（6.0？㎝）が対向する位置に穿たれる												ナデ→左上がりのハケメ（10本/2㎝）、接合痕は消えていない									
66	560	H1	—	—	—	—	(23.4)	10.5	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たないがやや砂っぽい	暗赤褐色	普通	H/H	—	—	19	断面上位は復元	80
			縦のハケメ（8本/2㎝）→基底部：板押圧されるが円に近い、底から7㎝ぐらいにナデ状の単位が巡る												底部すぐからやや疎らな左上がりのハケメ（10本/2㎝）									
67	115・146 501基底部	H1	—	—	—	—	(17.3)	9.9	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～8㎜の円礫混じる	暗い淡褐色 焼け具合で一定せず	普通	H/H	—	—	18		80
			縦のハケメ（9本/2㎝）→基底部：単位が不明瞭なものの板押圧が施され、ゆるい多角形を呈する												ナデ→やや疎らな左上がりのハケメ（12本/2㎝）									
68	504	I	45.2	72.3	62.5	19.9	39.3	10.2	7.3	12.7	19.5	18.5	32.2	49.4	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	赤褐に近い橙褐色	普通	I/I	5.6	9.5	19	基底部の粘土板の高さがない	90
			全面：縦のハケメ（14本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、基底部：～2㎝の狭い幅の板押圧で多角形となるが円に近い、一部の単位に葉脈の圧痕が見られる、口縁部：ヨコナデでゆるく面取りされる→凸帯間に略円形透孔（5.6cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：1㎝大のシャモットを踏み込んでいる（混和材としてでなく）												ナデ→口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（14本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面がほんの少しくぼむ、底部：板押圧に対応するヘラケズリ状のナデ									
69	503	I	21.3	30.0	71.0	22.6	38.2	10.8	8.0	12.6	17.7	20.9	32.9	46.2	パ・酸・チ・礫・角	大きい礫は目立たない	赤褐に近い橙褐色	普通	I/I	5.1	9.5	18	基底部の粘土板の高さがない	75
			底面に植物茎圧痕がある 底部を除いて縦のハケメ（14本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、底部1㎝ぐらいの幅が段をなして板押圧され丸い多角形を呈する、口縁部：ヨコナデ、外反し面取りされる→凸帯間に略円形透孔（5.1cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）が残る												接合痕が低い位置にも見られる ナデ→口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（14本/2㎝）→口縁部：ヨコナデ、底部：板押圧に対応するヘラケズリ状のナデ									
70	527	I'	12.0	20.7	58.1	18.5？	43.5	11.0	7.5	10.5	25.5	17.2	24.1	58.6	パ・酸・チ・礫・角	大きい礫は目立たないまれに5㎜大のシャモットあり 下側凸帯は別胎土である	暗赤褐色 下側凸帯は赤褐色	普通 基底部に不良部あり	I/I	5.9	10	17	上位が遺存不良	70
			全面：縦のハケメ（14本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、下側は別胎土でつくられる、基底部：板押圧で多角形に近く歪む、底部3～4㎝幅にナデ状の単位が巡る、口縁部：ヨコナデ、端部は若干くぼむ→凸帯間に略円形透孔（5.9cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる												底から20cm以上は、口縁付近が横、以下が左上がりのハケメ（14本/2㎝）、以下は、ヘラケズリ状の左上がりのナデ、口縁部はヨコナデで明瞭にくぼむ									
71	586	I'	—	—	—	—	(23.9)	10.5	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ	～3㎜の礫混じり少し砂っぽい	赤褐に近い橙褐色	良好	I/I	—	—	15		95
			縦のハケメ（12本/2㎝）→基底部：板押圧で多角形に近く歪む、5㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る、底面：礫・植物茎状圧痕がある												底部：ヨコナデ→以上：下位ほど疎らな左上がりのハケメ（13本/2㎝）									
72	540	I'	—	—	—	—	(20.0)	10.9	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫	～2㎜の 礫・シャモット混じる	暗赤褐色	普通 基底部に不良部あり	I/I	—	—	17.5		100
			縦のハケメ（14本/2㎝）→基底部：板押圧で丸い多角形を呈する、5㎝ぐらいにナデ状の単位が巡る、体部の一部にハケメを切るナデが見られる												ナデ→底部を少し残して左上がりのハケメ（16本/2㎝）、接合痕がよく残る									
73	553	I'	19.3	30.0	64.4	20.5？	44.4	9.8	7.7	11.3	25.0	17.5	25.7	56.8	パ・酸・チ	～4㎜の 礫・シャモット混じる	淡褐色	普通 基底部に不良部あり	I/I	5～5.6	9	14		85
			全体：縦のハケメ（14本/2㎝）→底部：ヘラケズリあるいはナデ→若干上側の稜が高い緩M字状凸帯2条が貼付・ヨコナデされる、口縁部もヨコナデで弱く面をなす、基底部：板状押圧により8角形に歪む→凸帯間中間に略円形透孔（5～5.6cm）が2ヶ所対向する位置に穿たれる												ナデ→底部：指圧痕が巡る→全体：口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（14本/2㎝）→口縁端部はヨコナデでごくわずかにくぼむ									
74	079・180 555・556	朝顔I	37.0	40.4	91.7	29.2？	66.8？	13.2	12.6	10.4	16.0	32.3	26.7	41.0	パ・酸・チ・角	～4㎜の 礫・シャモット混じる	淡い赤褐色	普通	I/I	5.2？	—	—	口縁～肩部は破片を合成したもの 反転復元 拓本	70
			縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部がきっちり面をなし若干くぼむ→肩部凸帯下（3段目）に対向する円形透孔が穿たれる												左上がりのハケメ→口縁部と屈曲部：ナデ・ヨコナデ									
75	506	J	2.4	3.5	68.8	21.9？	43.4	10.8	8.8	9.0	25.5	20.3	20.8	58.9	パ・酸・チ・礫・角	～3㎜の礫混じる	赤褐に近い橙褐色	普通	J/J	5.9	9.5	16	上位が遺存不良	65
			全面：縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で多角形を呈するが円に近い、底から5㎝ほどに単位が巡る、口縁部：ヨコナデ、端部が平面をなす→凸帯間に略円形透孔（5.9cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：植物茎状圧痕がある												口縁近くが横、以下が左上がりのハケメ（10本/2㎝）、下ほど疎らである→口縁部：ヨコナデでゆるくくぼむ、底部：ナデ状のヘラケズリ									
76	082・539	J	31.5	46.4	67.8	21.6	41.5？	10.7	7.5	10.5	23.4	18.1	25.4	56.5	パ・酸・チ	～5㎜の礫まばらに混じる	橙褐に近い赤褐色	普通 基底部に不良部あり	J/J	4.8～5.7	8	17	上半は反転復元 上下は図上で合成した	65
			縦のハケメ（9本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデでゆるく面をなす、基底部：板押圧で多角形を呈する、5㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る→凸帯間下寄りに略円形透孔（4.8～5.7cm）が穿たれる												ナデ→左上がりのハケメ（9本/2㎝）→口縁部：ヨコナデ、端部が若干立ち上がる									
77	524	J	—	—	—	—	(37.8)	11.0？	—	10.0	25.7	—	—	—	パ・酸・チ・角	～5㎜の 礫・シャモットが混じる	少し橙褐色に近い赤褐色	普通 下位が不良	J/J	5.9	9.5	17	断面上端・下位は反転復元	75
			全面：縦のハケメ（10本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧で楕円に歪む、幅4㎝ほどで単位が巡る→凸帯間上寄りに略円形透孔（5.9cm）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：植物茎状圧痕がある												接合痕が目立つ ナデ→左上がりのハケメ（12本/2㎝）→底部：幅2.5㎝ぐらいで反時計回りのナデ状のヘラケズリ									

番号	注記	類型	口縁残存長 cm	口縁残存率 %	口縁周復元値 cm	口径 cm	器高 cm	底径 cm	3段高 cm	2段高 cm	1段高 cm	3段比 %	2段比 %	1段比 %	胎土主要	胎土状態	色調	焼成	ハケメ外/内	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
			外面の特徴												内面の特徴									
78	509	K	48.1	68.1	70.7	22.5	44.4	10.0	9.1	11.9	21.9	21.2	27.7	51.0	パ・酸・チ・礫・角	～5㎜の礫多く混じる 砂っぽい	赤褐色	普通 基底部が不良	K/K	5.4～6.1	11.5	16		75
			全面：縦のハケメ（12本/2㎝）→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が強くくぼむ、基底部：板押圧されるが円に近い、3㎝ぐらいの幅で単位が巡る→凸帯間中程に略円形透孔（5.4～6.1㎝）2ヶ所が対向する位置に穿たれる、底面：粘土板接合痕（S）がある												ナデ→全面：口縁近くが横、以下底部までが左上がりのハケメ（12本/2㎝）→口縁部：ヨコナデで内面がゆるくくぼむ									
79	550	K	—	—	—	—	(29.2)	—	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～5㎜の礫混じる	赤褐色	普通 基底部全体が不良である	K/K	6.2	12.5	16	底部が特に遺存不良である	90
			縦のハケメ（12本/2㎝）→緩M字状凸帯を貼り付けてきついヨコナデ→下凸帯直上に略円形の透孔（径6.2？㎝）が2つ対向するかたちで穿たれる												2.5～3.5㎝位の間隔で接合痕が見られる ナデ→全面：左上がりのハケメ（14本/2㎝）									
80	534	朝顔・形象？L	—	—	—	—	(18.6)	11.8	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	～2㎜の 礫・シャモット混じる パミスが目立ち 若干砂っぽい	赤褐色～暗赤褐色	やや不良 基底部に大きく不良部あり	L/L	—	—	20	粗雑なつくり 遺存不良	90
			縦のハケメ（11本/2㎝）、基底部調整は施されておらず、底部が外側に突き出ている、底面：太めの植物茎状圧痕がある												ナデ→底部すぐからやや疎らな左上がりのハケメ（14本/2㎝）									
81	084・086 089・532 533・536 基底部 537・543 544	朝顔K	30.8	29.2	105.5	33.6？	66.8？	14.0？	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ	～4㎜の礫混じる	赤褐色	普通	K/K	4.5～5.2	12	15.5	反転復元 口縁・体部は合成	40
			全面：縦のハケメ（11本/2㎝）→緩M字状凸帯が体部に4条、口縁部中位に2条貼付・ヨコナデされる、口縁部：ヨコナデされ端面がゆるく凹面をなす、基底部：7㎝ぐらいが板押圧されナデ状の単位が巡る、底面形は円に近い→第2・3凸帯間に略円形透孔（4.5～5.2㎝）が時計回りにヘラ状工具で穿たれる、底面：植物茎状圧痕が少し見られる 円筒埴輪をつくる要領で肩部以下まで成形してから反転し、底部タタキを行っている												ナデ・指圧痕→口縁部が横、口縁湾曲部・肩部をとばして以下が左上がりのハケメ（11本/2㎝）、肩部は指圧痕がよく残る、また、全面に接合痕が見られる									
82	566	朝顔K	—	—	—	—	(22.5)	13.3	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・礫・角	まばらに～10㎜の礫混じる	赤褐色～暗赤褐色	普通 基底部が大きく欠損する	K/K	—	—	18	断面上位は反転復元	50
			縦のハケメ（12本/2㎝）→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、基底部：板押圧されるが円に近い、5㎝ぐらいの幅にナデ状の単位が巡る、底面：植物茎状圧痕がある												左上がりのやや疎らなハケメ（12本/2㎝） 接合痕・工具痕がよく残る									
83	533	朝顔K	—	—	—	—	(18.9)	13.7	—	—	—	—	—	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色～赤褐色	やや不良 基底部が大きく欠損する	K/K	—	—	20	県セ胎土分析6 遺存不良	75
			縦のハケメ（12本/2㎝）→凸帯貼付に伴うヨコナデ、基底部：板押圧が細かい単位で施され、底面形が円に近い、ナデ状の単位は1.5㎝ぐらいを巡る、底面：植物の茎状圧痕がある												ナデ→底部は横、以上が左上がりのハケメ（12本/2㎝）									

第５表　円筒埴輪破片資料観察表

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ／２cm	内面調整	内面ハケメ／２cm	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存％
84	3a	010	A	—	(6.0)	9.6？	パ・酸・チ・角	～３㎜の礫まれに混じる	暗赤褐色	普通	×	A	縦のハケメ→板押圧	9	左上がりのハケメ	9	—	—	16.5	反転復元拓本	20
85	10	572	A	—	(11.5)	10.9？	パ・酸・チ・角	～５㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	普通 底部に不良部あり	○	A	縦のハケメ→基台部：ナデ状の単位が巡る板押圧、底面：植物茎状圧痕一部に指紋が見られる	7	まばらな左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	8	—	—	17	反転復元拓本	30
86	08	584-92	B'	—	(7.4)	9.4～11.0	パ・酸・チ	～２㎜の礫・シャモット混じる	橙褐に近い赤褐色	普通	×？	B'?	縦のハケメ（12本／２cm）→底部：板押圧後に異なる工具による横のハケメ（20本／２cm）（あるいは板押圧時の木目圧痕）が見られる 底面端部は稜がなく丸くナデられている	12	左上がりの単位の認められるナデ→基部調整に対応する指頭圧痕	—	—	—	21.5	外面調整が特徴的である	80
87	11	520	朝顔D?K?	—	(6.1)	—	パ・酸・チ礫・角	～８㎜の礫混じる	赤褐色	普通	?	D?K?	縦のハケメ→縦M字状凸帯貼付・ヨコナデ	14	横～左上がりのハケメ	14	—	—	—	肩部 反転復元拓本	15
88	07	140	B?	23.4？	(5.2)	—	パ・酸・チ	～７㎜の礫まばらに混じり、少し砂っぽい	赤褐色	普通	?	B?	縦のハケメ→ヨコナデ	11	横～左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	12？	—	10	—	反転復元拓本	5
89	12b	087	D	—	(4.6)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧	16？	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	17	—	—	18.5	反転復元拓本	5
90	11	516	D	—	(4.5)	8.8？	パ・酸・チ礫・角	～６㎜の礫多く混じる	暗赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧が巡る	12？	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	18	—	—	20	反転復元拓本	15
91	08	100	D	—	(4.4)	8.0？	パ・酸・チ・角	～５㎜の礫まれに混じる	赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧	14	若干疎らな横～左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	12	—	—	17	反転復元拓本	10
92	03	575	D	—	(6.2)	8.8	パ・酸・チ	～２㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	やや不良	○	D	縦のハケメ→板押圧	14	横～左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ、底面幅はまちまち	13	—	—	15.5	拓本	90
93	12b	084	D	—	(8.4)	9.6？	パ・酸・チ・炭化植物	～２㎜の礫・シャモット混じり、若干砂っぽい	赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧	14	左上がりのハケメ→反時計回りのヘラケズリ	13	—	—	19	反転復元拓本	15
94	3e 10	013 099	D	—	(9.9)	8.8？	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫・シャモットやや多く混じる	赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧（幅５cmぐらい）	14	接合痕が明瞭、親指の明瞭な指紋が残る左上がりの疎らなハケメ→底部：幅２cmぐらいで時計回りのヘラケズリ	14	—	—	18	反転復元拓本	20
95	10	570	朝顔？D?I?	—	(5.8)	12.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	淡褐に近い赤褐色	普通	×	D?I?	粘土板の縦の接合面でパイ状に剥がれている	—	指紋を伴うナデ→左上がりのハケメ	13	—	—	17	反転復元拓本	25
96	09	211	朝顔？D	—	(6.1)	9.6？	パ・酸・チ礫	まれに～５㎜の礫・シャモットが混じる	赤褐色	普通	×	D	縦のハケメ→板押圧	13	左上がりのハケメ	13	—	—	19	反転復元拓本	20
97	09	055	D	—	(5.0)	9.7？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	D	縦のハケメ→板押圧	15	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	11	—	—	21	反転復元拓本	10
98	08	215	朝顔？D	—	(7.7)	12.8？	パ・酸・チ・角	まれに～８㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	D	縦のハケメ、条線が細く使用期間が短いかもしれない	12	ナデ状のかなり細かい条線を持つ左上がりのハケメ	?	—	—	19	反転復元拓本	30
99	10	183	E1-2	21.9？	(8.5)	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	?	E	縦のハケメ→口縁部：ヨコナデ	18	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	19	—	—	—	反転復元拓本	5
100	2c 11b	031 146	E1-2	22.6？	(8.0)	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	?	E	縦のハケメ→縦M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が面を持つ	15	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ少しくぼむ	19	—	—	—	反転復元拓本	20
101	11 11b	146 501	E1-2	—	(17.5)	—	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	?	E	縦のハケメ→縦M字状凸帯２条貼付・ヨコナデ→凸帯間に略円形透孔が穿たれる	17	ナデ→左上がりの密なハケメ、凸帯の裏に対応する布目圧痕がある	19	?	—	—	反転復元拓本	30
102	02e	180	E1-2	22.6	(9.9)	—	パ・酸・チ	～３㎜の礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	?	E	縦のハケメ→縦M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が凹面をなす→凸帯下に略円形透孔が穿たれる	18	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ少しくぼむ	16	?	—	—	反転復元拓本	20
103	05b	171	E１	—	(3.9)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのハケメ→底部：幅2.5cmぐらいが反時計回りのヘラケズリ	14	—	—	17	反転復元拓本	10
104	10	093	E１	—	(4.0)	8.0？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	16？	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	24	—	—	15	反転復元拓本	5
105	03b	027	E１	—	(5.7)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	15	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	17	—	—	14	反転復元拓本	10
106	07	140	E１	—	(5.4)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	22	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	16	反転復元拓本	15
107	07	208	E１	—	(4.9)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	16？	反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	16	反転復元拓本	25
108	?	000	E１	—	(4.8)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	17	—	—	17	反転復元拓本	10
109	08	578-84	E１	—	(5.6)	8.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧、底面：粘土板接合痕（R）	14	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	20？	—	—	18	反転復元拓本	10
110	07a	049 135	E１	—	(5.4)	9.6？	パ・酸・チ	～３㎜の礫混じる	淡褐色	普通 底部に不良部あり	○	E	縦のハケメ→板押圧、植物状圧痕がある	16？	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	18	—	—	16	反転復元拓本	15
111	3e	013 229	E１	—	(7.2)	11.0？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	淡褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	19	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	16	反転復元拓本	15

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ/2cm	内面調整	内面ハケメ/2cm	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存%
112	12	219	E1	—	(7.2)	11.5?	パ・酸・チ・角	～5㎜の礫がまばらに混じる	赤褐色	普通 底部に不良部あり	○	E	縦のハケメ→板押圧	21	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	20	—	—	16	反転復元拓本	10
113	4b	033	E1	—	(7.5)	9.6?	パ・酸・チ・礫・角	～7㎜の礫がまれに混じる	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	17	左上がりのハケメ→横のヘラケズリ	20	—	—	17	反転復元拓本	10
114	07	049 135 137	E1	—	(10.3)	10.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない 炭化した植物の跡が見られる	赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→基部：5㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る板押圧、一部に植物状の圧痕を伴う	20	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	18	反転復元拓本	50
115	3d 08	009 214	E1	—	(11.1)	9.6?	パ・酸・チ礫	～7㎜の礫少し混じる	赤褐色に橙褐色混じる	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧（幅4.5㎝ぐらい）	16	左上がりの疎らなハケメ→底部:幅2.5㎝ぐらいで反時計回りのヘラケズリ	16	—	—	17	反転復元拓本	40
116	12b	204	E1	—	(12.7)	8.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	○	E	縦のハケメ→板押圧	19	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	20	—	—	16	反転復元拓本	20
117	07	042?	E2	—	(2.5)	9.7?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×?	E	板押圧、底面に植物茎状圧痕	—	左上がりのハケメ	20?	—	—	20	反転復元拓本	10
118	06a	172 173	E2	—	(6.0)	9.9?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	E	縦のハケメ→板押圧	16	粘土板の重畳・接合部が明瞭である 左上がりの密なハケメ	19	—	—	17	反転復元拓本	25
119	12	548-561	朝顔F	—	(4.5)	13.0?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	淡褐に近い赤褐色	普通	×	F	端部が内外に広がる 縦のハケメ	17	左上がりのハケメ	22	—	—	22.5	反転復元拓本	10
120	08	111	F	—	(3.3)	9.6?	パ・酸・チ	まれに4㎜の礫混じる	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	16?	縦のハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	16?	—	—	16	反転復元拓本	10
121	07	121	F	—	(2.4)	9.6?	パ・酸・チ	～2㎜のシャモット混じる	暗赤褐色	普通	×	F	剥落が著しい	—	横のハケメ	16?	—	—	18	反転復元拓本	15
122	表採	—	F	—	(2.5)	9.8?	パ・酸・チ礫	～4㎜の礫がまばらに混じる	赤褐色	普通	○	F	板押圧	—	左上がりのハケメ→横のヘラケズリ	—	—	—	16	反転復元拓本	5
123	07	142 156	F	—	(5.5)	9.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18?	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	15	反転復元拓本	10
124	11b?	063	F	—	(4.7)	9.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	○	F	板押圧	—	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	20?	—	—	17.5	反転復元拓本	10
125	12b	204	F	—	(4.2)	8.0?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18?	左上がりのハケメ→底部：幅広の反時計回りのヘラケズリ	20?	—	—	15.5	反転復元拓本	10
126	08	584-92	F	—	(4.2)	9.8?	パ・酸・チ・炭化植物	砂粒がほとんど目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18	ハケメ→ヘラケズリあるいはナデ	18?	—	—	16	反転復元拓本	25
127	08	104	F	—	(4.6)	10.5?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18?	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	20	—	—	17	反転復元拓本	10
128	05b	170	F	—	(4.2)	8.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのヘラケズリ	—	—	—	17.5	反転復元拓本	5
129	07	049	F	—	(6.1)	9.4?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧、底部外面に植物？圧痕が見られる	18?	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ、底部内面に明瞭な指紋が残る	21	—	—	16	反転復元拓本	10
130	10	098	F	—	(5.5)	9.6?	パ・酸・チ・礫・角	～5㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧（タタキ状の左上がりの条線が伴う）	18	縦のハケメ→底部：横のヘラケズリ	21	—	—	15	反転復元拓本	10
131	07b	043	F	—	(6.1)	9.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧、底面に植物茎状圧痕	20	左上がりのハケメ	19	—	—	17	反転復元拓本	10
132	07	139	F	—	(6.2)	9.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	板押圧	—	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	17	反転復元拓本	10
133	10	229	F	—	(5.1)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色 破断面は淡褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	12?	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	21	—	—	15.5	反転復元拓本	5
134	12a	207	F	—	(5.5)	9.7?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧、底面：破断面に粘土板接合痕(R)が明瞭	16	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	19	—	—	15	反転復元拓本	10
135	07	126	F	—	(7.3)	9.6?	パ・酸・チ・角	ごくまれに8㎜大の礫が混じるものの、砂粒は目立たない	淡褐色	普通 底部に不良部あり	○	F	縦のハケメ→板押圧	17	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	18?	—	—	17	反転復元拓本	10
136	06b	174	F	—	(6.0)	9.5?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	板押圧	18	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	21	—	—	17	反転復元拓本	10
137	08	113	F	—	(6.5)	9.5?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	14?	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	13	—	—	16	反転復元拓本	10
138	07	129	F	—	(7.0)	9.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	19	—	—	17	反転復元拓本	10
139	04	137	F	—	(9.0)	11.0?	パ・酸・チ・礫・角	ごくまれに1㎝を超える円礫が混じるものの、他に砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	14	—	—	19	反転復元拓本	20
140	07a	054	F	—	(5.0)	9.6?	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧（タタキ状の左上がりの条線が伴う）	24?	横のハケメ→底部：横のヘラケズリ	22?	—	—	16	反転復元拓本	10
141	3d	010	F	—	(7.5)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	淡褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18	器面が荒れている 左上がりのハケメ→底部：左上がりのヘラケズリ	20?	—	—	18	反転復元拓本	10
142	06b	197	F	—	(11.1)	9.6?	パ・酸・チ・角・炭化した植物	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧（左上がりの平行する多数の条線が範囲に伴う）	17	縦に近い左上がりのハケメ→底部：単位幅5㎝近い反時計回りのヘラケズリ	23	—	—	16	反転復元拓本	10

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ/2cm	内面調整	内面ハケメ/2cm	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存%
143	4c	025	F	23.6？	(3.8)	—	パ・酸・チ 礫・角	～2㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色に橙褐色の斑	普通	？	F	縦のハケメ→ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が凹面をなし外側に突き出る	17	横のハケメ→ヨコナデ	19	—	—	—	反転復元拓本	10
144	08	584-92	F	—	(4.1)	10.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F?	縦のハケメ→板押圧	24？	縦のハケメ→反時計回りのヘラケズリ	24？	—	—	14	反転復元拓本	15
145	07	051	F	—	(3.5)	10.0？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F?	板押圧	—	左上がりのハケメ→反時計回りのヘラケズリ	18？	—	—	16.5	反転復元拓本	10
146	04	137	F	—	(11.7)	—	パ・酸・チ	ごくまれに～9㎜の礫混じるが、他に大きな砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	？	F	縦のハケメ→ほとんど高さのない緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ→凸帯間に略円形透孔が穿たれる	17	ナデ→上位より上側から左上がりのハケメ	21	5.2？	—	—	透孔位置は合成 反転復元	20
147	09f	047	F1	—	(13.0)	9.4？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧（底から12cm近くまで及ぶ）、底面：植物茎状圧痕	17	左上がりのハケメ→底部：左上がりのヘラケズリ	21	—	—	19	反転復元拓本	20
148	07	155	F1	—	(5.5)	9.4？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧（左上がりの平行する条線が範囲に伴う）	16？	左上がりのハケメ→底部：左上がりのヘラケズリ	20？	—	—	14.5	反転復元拓本	10
149	07	129 135	F1	19.8？	(16.0)・(5.5)	—	パ・酸・チ・角	まれに5㎜大の礫混じる	灰褐色に近い橙褐色	普通	○	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が面をなす→凸帯間に円形透孔が穿たれる→基底部：板押圧	16	口縁部が横、以下が左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	21	4.8？	—	16	透孔位置は合成 反転復元拓本	10
150	09 08	214 584-92	F2	23.8？	(12.5)	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	？	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：強いヨコナデで端部が凹面をなし、外に突き出る→凸帯下に略円形透孔が穿たれる	21	横のハケメ→口縁部：ヨコナデ	19	5.6？	—	—	反転復元拓本	20
151	08	214 584 584-92	F1	—	(18.3)	9.6？	パ・酸・チ	砂粒が目立たない	橙褐色	普通 底部に不良部あり	○	F	浅いヒビが表面に多く見られる 縦のハケメ→板押圧	16？	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	21	—	—	17	反転復元拓本	40
152	07	160	F2	23.8？	(10.0)	—	パ・酸・チ・角	～5㎜の礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	？	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が凹面をなしバチ形になる→凸帯下に略円形透孔が穿たれる	23	横～左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	23	？	—	—	反転復元拓本	25
153	08	199	F2？	23.2？	(9.0)	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	？	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ	17	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	18	—	—	—	反転復元拓本	10
154	05b	169	F2	23.0？	(15.3)	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	？	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ（反時計回り）、口縁部：ヨコナデ→凸帯下に略円形透孔（5.6cm）が穿たれる	21	接合痕が消えていない 横に近い左上がりのハケメ	21	5.6	11	—	透孔位置は合成 反転復元拓本	30
155	10	222	F1'-2	—	(4.8)	9.6？	パ・酸・チ	まれにバミス状の3㎜大の粒が混じる	暗赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧	18	左上がりのハケメ	23	—	—	16	反転復元拓本	15
156	4b	033	F1'-2	—	(4.1)	9.6？	パ・酸・チ・角	まれに5㎜の礫混じる	橙褐混じりの赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	19	左上がりのハケメ→底部：ヘラケズリ	19	—	—	18	反転復元拓本	5
157	10	098	F1'-2	—	(4.2)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色～淡褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	20	—	—	15.5	反転復元拓本	20
158	07	156	F1'-2	—	(6.3)	8.8？	パ・酸・チ 礫・角	ごくまれに～9㎜の礫混じる	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧 底面にモミ状圧痕あり	18	縦に近い左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリあるいはナデ	20	—	—	17	反転復元拓本	10
159	09b	047	F1'-2	—	(6.3)	8.5？	パ・酸・チ 礫・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧、底面：植物茎状圧痕が見られる	24	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	21	—	—	15	反転復元拓本	30
160	07a	049	F1'-2	—	(10.0)	9.6？	パ・酸・チ・角	ごくまれに1cmを超える円礫が混じるものの、他に砂粒は目立たない	橙褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	16	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	16？	—	—	16	反転復元拓本	15
161	4d	007	F1'-2	—	(8.6)	10.0？	パ・酸・チ・角	～4㎜の礫・シャモット混じる	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧	18	左上がりのハケメ→底部：左上がりのヘラケズリ	18	—	—	17	反転復元拓本	20
162	10	099	F1'-2	—	(9.7)	9.6？	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	橙褐色に近い赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→板押圧、底面：植物茎状圧痕が見られる	20	左上がりの疎らなハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	20	—	—	16	反転復元拓本	10
163	12a 12	076 219	F1'-2	—	(10.2)	10.2？	パ・酸・チ 礫・角	まれに5㎜大の砂粒混じる	赤褐色	良好	○	F	縦のハケメ→板押圧	17	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	18	？	—	16	反転復元拓本	50
164	11	501-508	F1'-2	—	(10.5)	10.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→基底部：斜位の平行する条線を伴う板押圧	17	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	26	—	—	14	反転復元拓本	20
165	08	591	F1'-2	—	(7.6)	9.8	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	F	縦のハケメ→基底部：4cmぐらいの幅でナデ状単位が巡る板押圧	17	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	23	—	—	17.5	反転復元拓本	60
166	04	165	朝顔・形象F	—	(3.3)	12.7？	パ・酸・チ	～2㎜の礫が混じる	暗赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧？	19	斜位のハケメ	28？	—	—	17.5	反転復元拓本	10
167	05	166	朝顔・形象F	—	(3.5)	12.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	淡い赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧？	22	横～左上がりのハケメ	22？	—	—	14	反転復元拓本	10
168	表採	—	朝顔・形象	—	(3.5)	13.7？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	淡い赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧？	18	左上がりのハケメ	18	—	—	19.5	反転復元拓本	10
169	09	151	朝顔・形象F	—	(2.8)	9.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ→板押圧？	20	左上がりのハケメ	22？	—	—	16.5	反転復元拓本	10

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ/2cm	内面調整	内面ハケメ/2cm	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存%
170	08	591	朝顔F	—	(6.5)	13.0?	パ・酸・チ・角	まれに3㎜大の礫混じるが、大きい砂粒は目立たない	淡い赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ	19	左上がりのハケメ	16?	—	—	16	反転復元拓本	20
171	05a	057	朝顔・形象F	—	(5.5)	13.0?	パ・酸・チ・角	～5㎜の礫がまばらに混じる	赤褐色	普通	×	F	縦のハケメ、底面が外に広がったままである	25	左上がりのハケメ	21	—	—	22	反転復元拓本	20
172	11 11a 11b	114 115 146 507 509	朝顔?	—	(17.7)	—	パ・酸・チ・角	まれに～4㎜のシャモット混じる	橙褐に近い赤褐色	良好	?	F	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ→凸帯の上側に略円形透孔が穿たれる	21	ナデ→左上がりのハケメ、接合痕は残り気味である	18	—	—	13	朝顔55と同一個体の可能性が高い 透孔位置は合成 反転復元拓本	50
173	10 03e～f	181 575	G	—	(10.4)	10.7?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たないが、若干砂っぽい	赤褐色	普通	○	G	縦のハケメ→基底部：6㎝ぐらいの幅でナデ状の単位が巡る板押圧、底部が歪む	11	左上がりの単位が見えるハケメ状のナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ	10	—	—	19	雑なつくり	50
174	06b	197	H	—	(3.4)	9.6	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧	8?	ナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	16	反転復元拓本	5
175	3a	011	H	—	(4.7)	10.8?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	ナデ	—	—	—	17	反転復元拓本	10
176	10	569	H	20.4?	(11.8)	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	普通	?	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部が少しくぼむ→凸帯下に略円形透孔が穿たれる	9	左上がり～横のハケメ→口縁部：ヨコナデ、内面が若干くぼむ	10	?	—	—	反転復元拓本	15
177	09	179	H	21.0?	(8.3)	—	パ・酸・チ・角	まれに～2㎜のシャモット混じる	赤褐色	普通	?	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：それほど強くないヨコナデ、端部は方形に近い	10	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	10	—	—	—	反転復元拓本	10
178	08	214	H	21.6?	(8.5)	—	パ・酸・チ	～2㎜の礫・シャモット混じる	橙褐に近い赤褐色	普通	?	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部は面をなす	8	横のきついハケメ→口縁部：ヨコナデ	10	—	—	—	反転復元拓本	10
179	08	188	H1	—	(5.5)	9.8?	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧、底面：植物の茎状圧痕	8	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	12?	—	—	14	反転復元拓本	15
180	08	188	H1	—	(6.1)	9.6?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ	9	—	—	14	反転復元拓本	10
181	3e	184	H	—	(4.6)	9.6?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	淡褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	7	ナデ	—	—	—	17	反転復元拓本	20
182	08 09	187 178	H1	—	(15.8)	11.0?	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	暗い淡褐色～赤褐色	普通 底部に小さく不良部がある	×	H	縦のハケメ→基底部：最大8㎝くらいまでナデ状の単位が見られる板押圧	9	ナデ→左上がりのハケメ ハケメがまばらで接合痕が消えていない	10	—	—	17	反転復元拓本	70
183	07	129	H1	—	(6.2)	9.6?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ	9	—	—	18	反転復元拓本	10
184	06b	196	H1	—	(6.3)	9.6?	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫少し混じる	暗赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧	8	ナデ→左上がりの疎らなハケメ	10?	—	—	15.5	反転復元拓本	20
185	3b	027	H1	—	(8.2)	10.4?	パ・酸・チ礫	～4㎜の礫・シャモット混じる	赤褐に近い淡褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧	9	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	10	—	—	13	反転復元拓本	10
186	07	140	H1	—	(8.3)	9.8?	パ・酸・チ礫・角	～5㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、底面：粘土板接合痕（R）	8	左上がりのハケメ	9	—	—	17	反転復元拓本	20
187	3d	009 010	H1	—	(10.5)	10.6?	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通 基底部に不良部あり	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ	9	—	—	15	反転復元拓本	20
188	08	215	H1	—	(10.7)	9.9?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	11	—	—	15	反転復元拓本	10
189	09	048	H1	22.0?	(15.1)	—	パ・酸・チ・角	～5㎜の礫・シャモット混じる	橙褐色	普通	?	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、弱く面取りされる→凸帯下に略円形透孔（5.2㎝?）が穿たれる	8	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデ	9	5.2?	—	—	反転復元拓本	20
190	11	177 523	H1	—	(10.6)	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	?	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ→略円形透孔（6.2?）	9	左上がりのハケメ	11	6.2?	—	—	反転復元拓本	60
191	07	051	H1	—	(7.9)	9.6?	パ・酸・チ礫・角	まれに～7㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	H	底面に粘土板接合痕（R）がよく残る、縦のハケメ→板押圧	8	ナデ→左上がりのハケメ	9	—	—	15	反転復元拓本	25
192	08	185	H1	—	(6.9)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	9	ナデ→左上がりの疎らなハケメ→底部：ナデ	9	—	—	15.5	反転復元拓本	5
193	10	099	H1	—	(4.4)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	9	左上がりのハケメ、底直上に指紋を伴う圧痕がある	9	—	—	16	反転復元拓本	10
194	4c	022	H1	—	(4.2)	9.6?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗い淡褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	7	左上がりのハケメ、底部内面には指頭圧痕が巡る	10?	—	—	14.5	反転復元拓本	10
195	04	225	H1	—	(4.0)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、底部外面に松葉の結節部状圧痕	8	横のハケメ	10?	—	—	17	反転復元拓本	10
196	07	069	H1	—	(3.0)	11.0?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	H?	板押圧、底面：植物茎状圧痕	—	横のハケメ	—	—	—	16	反転復元拓本	5
197	3c	024 025	H1	—	(7.2)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	淡い暗赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、底面に細い植物茎状圧痕が見られる	8	底部が横、以上が左上がりのハケメ	9	—	—	17	反転復元拓本	25
198	3c	028a	H1	—	(4.6)	9.6?	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	9	左上がりのハケメ、指紋が残る	9	—	—	18	反転復元拓本	10
199	05b	068	H1	—	(5.4)	9.6?	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	ナデ→左上がりのハケメ	9	—	—	14	反転復元拓本	10

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ/2cm	内面調整	内面ハケメ/2cm	透孔 略径 cm	体部 最薄 mm	体部 最厚 mm	備考	遺存 %
200	07	139 140	H1	—	(4.4)	9.5？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	12？	左上がりのハケメ	10	—	—	17	反転復元 拓本	20
201	08	188	H1	—	(5.8)	8.8？	パ・酸・チ礫	～5㎜の礫がまれに混じる	暗赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ	9	—	—	18.5	反転復元 拓本	10
202	08	106	H1	—	(7.0)	11.0？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧 底面：明瞭な粘土板接合痕（R）が残る	8	左上がりのハケメ→底部：横のヘラケズリ	8	—	—	17	反転復元 拓本	20
203	07	128	H1	—	(7.3)	9.6？	パ・酸・チ礫	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、底面に弱い植物茎状圧痕が見られる	7	ナデ→左上がりのハケメ	10	—	—	16.5	反転復元 拓本	10
204	？	000	H1	—	(7.1)	9.2？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	9	ヨコナデ→左上がりの疎らなハケメ	10	—	—	13	反転復元 拓本	10
205	10	098	H1	—	(4.7)	9.2？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧	8	左上がりのハケメ→横のヘラケズリ	8？	—	—	17	反転復元 拓本	10
206	08	109 185	H2	—	(8.3)	10.0？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通 底部に不良部あり	×	H	縦のハケメ→板押圧、板押圧の範囲に松葉状圧痕が見られる	8	ナデ、底部に指頭圧痕が巡る	—	—	—	15	反転復元 拓本	25
207	08	214 578 584- 92	H2	19.6？	(19.2)	—	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	？	H	縦のハケメ→緩M字状凸帯2条貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、端部は外側につまみ出される→下凸帯直上に略円形透孔が穿たれる	9	透孔以上の部分に疎らな左上がりのハケメ、以下はナデのままで明瞭な指紋がいくつか見られる	9	4.5？	9.5	—	反転復元 拓本	30
208	08	107	H2	—	(5.2)	9.2？	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	普通	○	H	縦のハケメ→板押圧、一部に板状工具の角が当たったような跡がある	8	横のナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	15	反転復元 拓本	15
209	08	226	H2	—	(5.8)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、板状工具の木口面の角のような圧痕がならぶ	7	ナデ	—	—	—	16.5	反転復元 拓本	10
210	09e	048	H2	—	(7.4)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧、底に松葉状圧痕がある	6？	ハケメ状の単位があるナデ	—	—	—	16.5	反転復元 拓本	15
211	2a	012	H2	—	(7.4)	10.3？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	H	縦のハケメ→板押圧	8	ナデ	—	—	—	17	反転復元 拓本	20
212	12	528	I'	19.4？	(8.7)	—	パ・酸・チ礫・角	まれに～3㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	？	I	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで端部が面をなす	13	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデでくぼみ、立ち上がる	13	—	—	—	反転復元 拓本	10
213	08	589 590	I'	20.0？	(9.3)	—	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	普通	？	I	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：きついヨコナデ、端部は凹面をなす	13	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデで端部が上に立ち上がる	13	—	—	—	反転復元 拓本	10
214	10	571	I-I'	—	(13.6)	10.5	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	I	縦のハケメ→底部：低い位置に単位の巡る板押圧	13	ナデ→左上がりの疎らなハケメ	13	—	—	16	反転復元 拓本	25
215	8e	013	I-I'	—	(1.7)	9.6？	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	×	I	板押圧	—	横のハケメ	14？	—	—	19	反転復元 拓本	10
216	06a	172	I'	—	(5.4)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	良好	×	I	縦のハケメ→板押圧	15	ナデ、指紋が残る	—	—	—	16	反転復元 拓本	10
217	09	152	I-I'	—	(2.7)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	I	板押圧	—	横のハケメ	12	—	—	17	反転復元 拓本	5
218	09b	041	I-I'	—	(3.6)	9.4？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	淡褐色	普通	×	I	縦のハケメ→板押圧、底部付近に指紋が残る	13	ナデ→左上がりのハケメ、底部付近に指紋が残る	14？	—	—	13	反転復元 拓本	5
219	09	075	朝顔 I-I'	—	(5.4)	12.4？	パ・酸・チ・角	～3㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	I	縦のハケメ、底面：基底部の粘土板接合痕（R）と植物圧痕が見られる、底面が外に広がっている	12	左上がりのハケメ	14	—	—	17	反転復元 拓本	20
220	06a	173	朝顔 I-I'	—	(4.3)	—	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	？	I	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ	13	左上がりのハケメ	14？	—	—	—	県セ胎土分析10 肩部 反転復元 拓本	15
221	11 11b	146 501	J	19.2？	(9.5)	—	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たないが、若干砂っぽい	暗赤褐色～橙褐色	普通	？	J	縦のハケメ→緩M字状凸帯貼付・ヨコナデ、口縁部：ヨコナデで弱く内湾する	9	左上がりのハケメ→口縁部：ヨコナデで弱く内湾する	10	—	—	—	反転復元 拓本	30
222	09	151	J	—	(4.0)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	J	縦のハケメ→板押圧	11	左上がりのハケメ、指紋が残る	9	—	—	16	反転復元 拓本	5
223	06a	172	J	—	(4.8)	10.0？	パ・酸・チ礫・角	～3㎜の礫混じる	暗赤褐色	普通	×	J	縦のハケメ→底部：板押圧	12	ナデ、底部に指頭圧痕が巡る	—	—	—	18	反転復元 拓本	10
224	08	214	J	—	(6.8)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	J	縦のハケメ→板押圧、底面：植物茎状圧痕	11	ナデ→左上がりの疎らなハケメ、板押圧に対応するものか底部に指頭圧痕（一部に指紋あり）が巡る	10	—	—	16	反転復元 拓本	25
225	07	135	J	—	(5.1)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	J	縦のハケメ→板押圧	8	横のハケメ	9	—	—	15	反転復元 拓本	10
226	09	065	K	—	(4.2)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	15	ヨコナデ	—	—	—	14.5	反転復元 拓本	15
227	08	185	K	—	(4.0)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たないが若干砂っぽい	赤褐色	普通	×	K	板押圧	—	左上がりのハケメ	12	—	—	19	反転復元 拓本	10
228	06b	174	K	—	(4.0)	9.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	K	板押圧	—	横のハケメ	13	—	—	23	反転復元 拓本	10
229	08	578- 84	K	—	(5.1)	9.6？	パ・酸・チ・角	～2㎜の礫まじり、若干砂っぽい	暗赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	10？	左上がりのハケメ	11	—	—	19	反転復元 拓本	10
230	09	121	K	—	(6.5)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	10	左上がりのハケメ	10	—	—	21	反転復元 拓本	10
231	08	188	K	—	(6.4)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	11	左上がりのハケメ、指紋が残る	12	—	—	16	反転復元 拓本	10

番号	地区	注記	類型	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土要素	胎土状態	色調	焼成	内面ケズリ	外面ハケメ	外面調整	外面ハケメ／2cm	内面調整	内面ハケメ／2cm	透孔略径 cm	体部最薄 mm	体部最厚 mm	備考	遺存 %
232	12	223	K	—	(4.9)	9.7？	パ・酸・チ・角	まれに～５㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	9	底部を幅広く残す横のハケメ	12？	—	—	19	反転復元拓本	20
233	2e	005	K	—	(5.4)	9.8？	パ・酸・チ・礫・角	まれに～５㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	K	板押圧	—	左上がりのハケメ	15	—	—	18	反転復元拓本	10
234	11	520	K	—	(6.1)	12.8？	パ・酸・チ・礫	まれに～８㎜の礫混じり、若干砂っぽい	暗赤褐色	若干不良	×	K	縦のハケメ→板押圧、底面に細い植物茎状圧痕が見られる	10	左上がりのハケメ	12	—	—	19	反転復元拓本	25
235	2b	006？	K	—	(5.9)	9.8？	パ・酸・チ・角	～３㎜の礫少し混じる	橙褐に近い赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	13	左上がりのハケメ	14	—	—	17	反転復元拓本	10
236	08	188	K	—	(6.1)	9.6？	パ・酸・チ・礫	～５㎜の礫がまれに混じる	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧	11	ナデ、底部内面に指紋が残る→左上がりのハケメ	12	—	—	20	反転復元拓本	25
237	10	097 101	K	—	(9.4)	9.3？	パ・酸・チ・礫・角	～５㎜の礫がまれに混じる	暗い淡褐色～赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧、底面に植物茎状圧痕が少しある	11	ナデ・ヨコナデ→底部付近を残して左上がりのハケメ	12	—	—	17	反転復元拓本	20
238	08	584- 92	K	—	(9.5)	10.0？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→８cmぐらいまで板押圧、底面：植物茎状圧痕が少し見られる	11	左上がりのハケメ	11	—	—	17	反転復元拓本	20
239	08	185	K	—	(7.3)	9.3？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧、底面：粘土板接合痕（R）	12	粘土板の重畳・接合部が見られる 左上がりのハケメ	10	—	—	19	反転復元拓本	20
240	08	103 106	K	—	(13.3)	10.2	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→基部：７cmぐらいの幅でナデ状の単位が巡る板押圧、底面：粘土板接合痕（R）	12	左上がりのハケメ	12	—	—	18	拓本	60
241	？	注記なし	朝顔K？	—	(6.2)	12.4？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗い淡褐色	不良	×	K?	縦のハケメ→板押圧	9	ナデ・ヨコナデ→左上がりのハケメ	14？	—	—	17	反転復元拓本	40
242	08	186	K	—	(9.6)	10.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧、底面：切れ込み状の圧痕が見られる	11	ナデ→左上がりのハケメ	11	—	—	20	反転復元拓本	25
243	10	092 519 562	朝顔K	—	(11.3)	—	—	大きい砂粒は目立たないが、若干砂っぽい	赤褐色	普通	?	K	縦のハケメ→屈曲部：緩Ｍ字状凸帯貼付・ヨコナデ、凸帯上には布目を伴うおそらく指頭による圧痕がきわめて明瞭に残る、ヨコナデは皮ではなく布によって施されたことを示すのかもしれない	12	横～左上がりの密なハケメ	13	—	—	—	反転復元拓本	40
244	08	103	朝顔K？	—	(11.4)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たないが若干砂っぽい	赤褐色	普通	×	K	縦のハケメ→板押圧、一部に指紋が残る	11	左上がりのハケメ	12	—	—	17	反転復元拓本	20
245	06a	172	L	—	(5.6)	9.7？	パ・酸・チ・礫・角	～５㎜の礫まばらに混じる	赤褐色	普通	×	L	縦のハケメ→板押圧	14	ナデ	—	—	—	17	反転復元拓本	10
246	10	099	L	—	(4.2)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	淡い赤褐色	普通	○	L	縦のハケメ→板押圧	11	反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	17.5	反転復元拓本	5
247	3c	025	L	—	(2.7)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	L	縦のハケメ→板押圧	12？	左上がりのハケメ	12？	—	—	15.5	反転復元拓本	5
248	06b	174	L	—	(3.8)	9.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	L	縦のハケメ→板押圧	9	左上がりのハケメ	12？	—	—	15	反転復元拓本	5
249	10	092 094	L	—	(7.4)	9.6？	パ・酸・チ・角	～９㎜の礫・シャモット混じる	暗赤褐色	やや不良	○	L	縦のハケメ→板押圧 体部・底面の一部に植物の茎状圧痕が見られる	14	左上がりの単位の分かるナデ→底部：反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	22.5	反転復元拓本	30
250	12	220	L	—	(9.4)	8.4？	パ・酸・チ・角	～３㎜の礫混じる	赤褐色	普通	×	L	終端の工具痕が多く残る縦のハケメ→底部：板押圧	12	左上がりのハケメ→底部：ナデ	12	—	—	17	反転復元拓本	5
251	12	001	朝顔L？	—	(4.3)	13.2？	パ・酸・チ・角	～６㎜のシャモット混じる	暗赤褐色	普通	×	L	縦のハケメ→板押圧？	10	左上がりのハケメ	14？	—	—	24	反転復元拓本	5
252	07	175	?	—	(1.5)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	?	縦のハケメ→板押圧、底面に植物茎状圧痕	10	指頭圧痕	—	—	—	20	反転復元拓本	15
253	2a	012	?	—	(3.3)	9.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	?	板押圧	—	左上がりのハケメ→反時計回りのヘラケズリ	—	—	—	16	反転復元拓本	5
254	3c	028a	?	—	(3.4)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	?	板押圧	—	左上がりのハケメ	26？	—	—	15	反転復元拓本	5
255	05	166	?	—	(3.1)	9.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	?	板押圧	—	横のハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ	10？	—	—	16	反転復元拓本	15
256	08	584- 92	?	—	(3.1)	9.7？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	暗赤褐色	普通	×	?	板押圧	—	摩滅が著しい	—	—	—	16	反転復元拓本	10
257	3c	016	?	—	(3.3)	9.6？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	?	板押圧	—	ナデ	—	—	—	16.5	反転復元拓本	10
258	07	203	?	—	(3.8)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	×	?	板押圧	—	ナデ、底部に指頭圧痕残る	—	—	—	17	反転復元拓本	20
259	11b	144	?	—	(2.8)	9.6？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	赤褐色	普通	○	?	板押圧	—	横のヘラケズリ	—	—	—	14	反転復元拓本	10
260	2b	006	?	—	(4.5)	9.5？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐色	普通	○	?	板押圧	—	横のヘラケズリ？	—	—	—	19	反転復元拓本	10
261	8e	013	?	—	(4.3)	9.8？	パ・酸・チ	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	×	?	縦のハケメ→板押圧	16？	ナデ、指圧痕が巡る	—	—	—	18	反転復元拓本	5
262	07b	043	?	—	(4.1)	9.0？	パ・酸・チ・角	～２㎜の礫・シャモット混じる	淡い赤褐色	普通	○	?	板押圧	—	横のヘラケズリあるいはナデ	—	—	—	19.5	反転復元拓本	5
263	07	130	?	—	(5.2)	9.7？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たない	橙褐に近い赤褐色	普通	○	?	縦のハケメ→板押圧	18	左上がりのハケメ→底部：反時計回りのヘラケズリ、非常に明瞭な指紋が残る	24	—	—	18	反転復元拓本	15
264	05a	167	?	—	(4.1)	11.8？	パ・酸・チ・角	大きい砂粒は目立たず緻密	淡褐色	普通	○	?	縦のハケメ→左上がりの平行する条線を伴う板押圧、粘土板の接合痕が破断面に認められる	16？	ハケメ？→底部：反時計回りのヘラケズリ	?	—	—	17	反転復元拓本	15
265	09	217	朝顔？	—	(3.3)	11.0？	パ・酸・チ・角	まれに５㎜の礫混じる	赤褐色に橙褐色混じる	普通	○	?	板押圧	—	横のヘラケズリあるいはナデ	—	—	—	18	反転復元拓本	15

第６表　形象埴輪観察表

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
1	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照		7区　4-126
2	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照	23～28と同一	7区　4-127
3	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂	淡褐色 普通	本文参照	F	本文参照	29？・31～34・36と同一と思われる	7区　4-066
4	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照	35と同一か　脚結付く	7区　4-067
5	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照	37～43と同一か 脚結なし　人物部に一部ハケメ残す	7区　4-068
6	人物	冠帽半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	44と同一個体	9区　4-119
7	人物	冠帽半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm		9区　4-118
8	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照	胴部以高のハケメ消す	7区　4-121(基台部) 7区　4-123･152(肩)
9	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照	上衣以高のハケメ消す	7区　4-213
10	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	胸部以高のハケメ消す	9区　4-120
11	人物	壺を戴く人物半身像	パ・酸・チ・角少	暗赤褐色 普通	本文参照	F	本文参照		7区　4-069
12	人物	振分髪半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	輪積み成形、タテハケ 右腕はナデ整形でソケット状に胴部に差し込む 18本/2cm 掌面に木目圧痕がある	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	半身振分髪男子と同一 胴部ハケメ消さない	4区　4-137 7区　4-069
13	人物	振分髪半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	—	12と同一　左ミズラ、半身像振分髪男子	7区　4-069
14	人物	振分髪半身像	パ・酸・チ 礫・砂	暗赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	12と同一　基台部から腰部のみ　帯表現	7区　4-069
15	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ整形、鍬を持つ。沈線で指表現、親指は粘土貼付。胴部にソケット状に差し込む。	F?	—	右腕、鍬持つ	7区　4-124
16	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ	不明	輪積痕無調整	頭部　装飾なし	7区　4-155
17	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	—	ミズラ	7区　4-208
18	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ整形、親指貼付、他の指は沈線で表現。胴部にソケット状に差し込む。掌面に板に押圧した跡がある（ハケメではない木目圧痕）。	F?	—	左腕	7区　4-124
19	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ	F?	—	鍬の柄	9区　4-124
20	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土紐片側潰し鞘部表現、鍔巻き付け	不明	—	刀	7区　4-067
21	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ 礫・砂	暗赤褐色 不良	タテハケ 16本/2cm	F	右傾斜ハケ 16本/2cm	基台部から腰部のみ帯表現	7区　4-124
22	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ、横に透孔 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	基台部のみ	5トレンチ　4-125
23	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後首飾り貼付 18本/2cm	F	輪積痕ナデ潰す	2の頚部裏側　ハケメ残す	7区　4-124
24	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	顔面貼付後ナデ、目から頬を赤彩	F	一部ハケ 18本/2cm	2の顔面　赤彩	1トレンチ・4トレンチ・4cトレンチ・7区　4-124・4-124・4-021・4-069
25	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	上面中央に隆起、下面ハケ後ナデ 18本/2cm	F	ナデ	2の右沓　上面隆起線	7区　4-143
26	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	上面中央に隆起、下面ハケ後ナデ 18本/2cm	F	ヨコハケ 18本/2cm	2の左沓　上面隆起線	7区　4-143
27	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色	タテハケ後ナデ、袖口の内面をヘラ削り調整する	F	袖口付近横方向ヘラケズリ	2の袖口	7区
28	人物	筒袖全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	裾部に脚部はめ込む。ナデ	F	ハケ後ナデ 18本/2cm	2の上衣前裾中央	7b区　4-043
29	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ、粘土紐で襟表現	—	輪積痕指頭で潰す	3と同一個体と思われるが、2と同一の可能性もある	7区
30	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	5と同一　胸部	7区　4-126・130
31	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ、粘土紐で襟表現	F	ハケ 18本/2cm	3と同一個体と思われる	7c区　4-058

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
32	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	袴部との接合痕あり	3の上着裾下部か	—
33	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後粘土紐貼付で裾表現 22本/2cm	F	右傾斜ハケ 22本/2cm	3と同一個体の可能性あり	9b区　4-047
34	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後粘土紐貼付で裾表現 22本/2cm	F	右傾斜ハケ 22本/2cm	3と同一個体の可能性あり	9区　4-178
35	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	胴部。輪積成形、ハケ後ナデ。粘土帯貼付裾表現	F	右傾斜ハケ 22本/2cm	4と同一個体の可能性強い	7区　4-068
36	人物	振分髪全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	袴から胴部に向け輪積み成形。上着下裾は粘土紐巻付け整形し表現。上着部ハケ後ナデ	F	右傾斜ハケ後ナデ 22本/2cm	3と同一個体の可能性あり	7区　4-142・155
37	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	胴部に脚部差込む。胴下部に粘土板を巡らし衣裾下部を表現。胴部との空隙には粘土板で蓋をする。横方向ナデ	不明	横方向ナデ	5と同一か　股付け根部	7b区・7区 4-043・066
38	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	タテ方向ヘラナデ後横方向ナデ	F	右傾斜ハケ 24本/2cm	5と同一	7区　4-068
39	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	袴から胴部に向け輪積み成形。上着下裾は粘土紐巻付け整形し表現。上着部ハケ後ナデ、袴部タテハケ後横方向ナデ2条 24本/2cm	F	右傾斜ハケ後ナデ 24本/2cm	5と同一	7区　4-068
40	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	両脚上端部を接合している	F	ヨコハケ後横方向ナデ 18本/2cm	5と同一か　両脚上端部	7区　4-066
41	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	横方向ナデ	不明	横方向ナデ	5と同一個体	7区　4-068
42	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	ナデ	5と同一　脚結部	7区　4-156
43	人物	冠帽全身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	F	左傾斜ハケ 18本/2cm	5と同一　脚結部	7区　4-162
44	人物	冠帽半身像	—	—	—	F	—	6と同一　頭巾頂部	7区　4-067
45	器財	靱か	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	粘土板2枚重ねる。ハケ後ナデ 18本/2cm	F	—	ヒレ部	7区　4-159
46	動物	馬か	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	突帯ナデ付け　ハケメ残さない	F?	横方向ナデ、ハケなし	島田髷半身像に似るが、頭部との接合痕なく、裏面にハケメないことから馬の一部と推測　胸繋部か	9区　4-152
47	人物	振分髪半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	12と同一　右耳　ミズラ付け根	7b区　4-044
48	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	ナデ	冠帽・壺を戴く人物以外の半身像の鼻	7c区　4-058
49	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ後ナデ	F	ヨコハケ 18本/2cm	61と同一　左耳	5a区　4-193
50	人物	島田髷半身像か	パ　多・酸・チ・砂	赤褐色 普通	顔面粘土板貼付、ナデ、頬に赤彩	F	一部ハケ 18本/2cm	右顔面　49と同一か	7区　4-156
51	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	指頭でナデ	鼻	7区　4-135
52	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	指頭でナデ	鼻	5区　4-166
53	人物	半身像	—	—	腕を胴部にソケット状に差し込む、ナデ	—	—	腕	7区　4-213
54	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	ナデ	頸部、首飾付	7区　4-068
55	人物	鍬を持つ半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	耳に透孔、顔面粘土板貼付、ナデ	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	右顎	7区　4-141
56	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	頸部タテハケ後ナデ、顔面貼付、頬に赤彩 18本/2cm	F	右傾斜ハケ後ヘラナデ 18本/2cm	下顎	7c区　4-058
57	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	腕を胴部にソケット状に差し込む、ナデ	不明	—	壺を戴く人物・振分髪・鍬を持つ半身像いずれかの左腕	5区　4-166
58	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	ナデ	不明	ナデ	頸部、首飾付	9区　4-124
59	人物	半身像	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	頸部タテハケ後ナデ	F	指頭でナデ	頸部、首飾付	7区　4-176
60	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	腕を胴部にソケット状に差し込む、ナデ	F	一部ハケ 14本/2cm	49と同一　右腕	5トレンチ　4-166
61	人物	島田髷半身像	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ整形、ソケット状に胴部に差し込む 掌面に木目圧痕	不明	—	49と同一　左腕	7区・7c区 4-045・140・4-058
62	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	暗赤褐色 普通	タテハケ後ナデ 14本/2cm	K	輪積み無調整	白鳥と思われる	9区　4-064・075

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
63	動物	水鳥	パ・酸・チ・砂・角少	暗赤褐色 普通	輪積みによる２面結合部が尾羽になる。上面ハケ後ナデ、羽線刻、下面ハケ 14本/２cm	K	—	62と同一個体の可能性大　尾	９区　4-075
64	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	赤褐色 普通	輪積みによる２面結合部が尾羽になる。ハケ 14本/２cm	K	輪積み痕無整形	65と同一個体の可能性大　尾	９区　4-075
65	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	暗赤褐色 やや不良	ナデ、棒状工具で刺突、目を表現	不明	—	65と同一　頭部	９区　4-178
66	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	暗赤褐色 やや不良	右傾斜ハケ後ナデ 12本/２cm	K	—	65と同一個体の可能性大　肩部	９区　4-075
67	動物	水鳥	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土板で翼表現、ハケ後ナデ 12本/２cm	K	指頭でナデ	62と同一個体の可能性大　肩部	９f区　4-052
68	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	赤褐色 普通	輪積み、凸帯１条遺存、粘土貼付脚表現、ナデ	K	ヨコハケ 14本/２cm	62と同一個体の可能性大　脚	９区　4-211
69	動物	水鳥	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	翼粘土板貼付、ヨコハケ後ナデ 14本/２cm	K	ナデ	62と同一個体の可能性大　翼	９f区　4-052
70	動物	水鳥	パ　多・酸・チ・砂	暗赤褐色 普通	基台部に粘土板貼付台座とし、粘土紐で指表現。水掻きを線刻。台座部ハケ後ナデ 14本/２cm	K	—	62と同一個体の可能性大　脚	９区　4-075
71	動物	水鳥	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ハケ14本/２cm ナデ	K	右傾斜ハケ 14本/２cm	造形部下部 62と同一個体	９区　4-073
72	形象	水鳥か	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	タテハケ 12本/２cm	K	右傾斜ハケ 16本/２cm	水鳥とハケメ同じ　基台部下端部	９区　4-075
73	動物	水鳥	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	横に透孔２個、タテハケ 11本/２cm	K	右傾斜ハケ 13本/２cm	62と同一個体の可能性大　基台部のみ	９区　4-071・075
74	動物	水鳥	パ・酸・チ礫・砂	赤褐色 普通	横に透孔、凸帯２条遺存、タテハケ 11本/２cm	K	右傾斜ハケ 13本/２cm	65と同一個体の可能性大　基台部のみ	９区　4-072
75	動物	鶏	パ　多・酸・チ・砂	暗赤褐色 普通	粘土貼付鶏冠表現。ハケ後ナデ、頸部ソケット状に体部へ差し込む	不明	—	頭部	２c トレンチ 4-032
76	動物	鶏か	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	粘土紐弓状に貼付翼表現。ハケ後ナデ 18本/２cm	F (D？)	輪積み痕無整形	肩部　75と同一個体の可能性大	７区　4-069
77	動物	馬	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	面繋上に円形粘土板貼付辻金具表現。ナデ	不明	—	頭部（辻金具）	５トレンチ　4-166
78	動物	馬	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	ハケ後粘土紐貼付、轡表現 18本/２cm	F	ハケ 24本/２cm	左口部（轡）　77と同一個体か	５トレンチ　4-166
79	動物	馬	パ　多・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土紐で面繋表現、ハケ後ナデ 18本/２cm	F	ハケ 24本/２cm	口左側面	５a トレンチ 4-193
80	動物	馬	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	透孔で目を表す。粘土紐貼付馬具表現。ハケ後ナデ 24本/２cm	F?	ハケ後ナデ 24本/２cm	右側頭部	７区　4-049
81	動物	馬	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	粘土紐で胸繋表現、ナデ	F	ハケ後ナデ 24本/２cm	胸側面（杏葉垂下部か）　79と同一個体か	11f区　4-203
82	動物	馬	パ　多・酸・チ・砂	淡褐色 普通	粘土紐で面繋表現、ヨコハケ。円形粘土板の辻金具貼付、ナデ 24本/２cm	F	ハケ 18本/２cm	口右側面	５トレンチ　4-166
83	動物	馬	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土板からなる。ハケ後ナデ	F	右傾斜ハケ 24本/２cm	79と同一個体か　障泥下部	12区　4-223
84	動物	馬	パ・酸・チ・砂・角少	乳白色 普通	粘土板にタテハケ後ナデ 16本/２cm	F	タテハケ後ナデ 16本/２cm	障泥	３c トレンチ 4-026
85	動物	馬	パ・酸・チ・砂	淡褐色 普通	ヨコハケ後粘土紐貼付胸繋表現、ナデ 20本/２cm	F	右傾斜ハケ 20本/２cm	胸繋	７区　4-051
86	動物	馬	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土板からなる。ハケ後ナデ	F	右傾斜ハケ 24本/２cm	79と同一個体か　障泥下部	12区　4-223・ 4-548-61
87	動物	馬	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土板からなる。左傾斜ハケ後ナデ 24本/２cm	F?	左傾斜ハケ 24本/２cm	75と同一個体か　障泥下部	10区　4-566-71
88	動物	馬	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土紐で胸繋表現。タテハケ後ナデ 18本/２cm	F	ナデ	79と同一個体か　胸正面	12a区　4-081
89	動物	馬	パ　多・酸・チ・砂	赤褐色 普通	棒状粘土をソケット状に臀部に差込み尾を表現。ナデ	不明	—	79と同一個体か　尾	10区　4-181
90	動物	馬	パ・酸・チ・砂	乳白色 普通	ナデ	F	ハケ後ナデ 16本/２cm	脚付け根	５a 区　4-193
91	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ヨコハケ後ナデ、鋸歯状文、一部赤彩 22本/２cm	F	右傾斜ハケ 18本/２cm	95と同一個体か　上屋根下位平部	２c トレンチ 4-029

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
92	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩	F	ナデ	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-065
93	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩	F?	右傾斜ハケ後ナデ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-149
94	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色	粘土板両面鋸歯状文線刻、タテハケ後ナデ 20本/2cm	F?	—	95と同一個体か　上屋根破風板	9区　4-065
95	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	粘土板に両面鋸歯状文線刻、右傾斜ハケ後ナデ 24本/2cm	F?	—	上屋根破風板	9a区　4-041
96	家	入母屋	パ多・酸多・チ多・砂多	赤褐色 普通	粘土板片面のみ鋸歯状文線刻、ハケ後ナデ	F	—	95と同一個体か　上屋根破風板	2cトレンチ 4-029
97	家	入母屋	パ・酸・チ	赤褐色 普通	粘土板片面のみ鋸歯状文線刻、ハケ後ナデ	不明	—	95と同一個体か　上屋根破風板	—
98	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	粘土板片面のみ鋸歯状文線刻、タテハケ後ナデ　20本/2cm	F	—	95と同一個体か　上屋根破風板	9区　4-065
99	家	入母屋	パ・酸・チ礫・砂	橙褐色 普通	右傾斜ハケ後ナデ、鋸歯状文、一部赤彩 20本/2cm	不明	ナデ	95と同一個体か　上屋根下位平部	2cトレンチ 4-029
100	家	入母屋	パ多・酸・チ多、砂多	赤褐色 普通	左傾斜ハケ後ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩 20本/2cm	F	右傾斜ハケ 24本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-065
101	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩	F	右傾斜ハケ後ナデ・斜方向に竹管圧痕5、支えか 18本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	2・2cトレンチ 4-056・4-029
102	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	破風板貼付、ナデ、鋸歯状文線刻、底面ヘラ削り	F	右傾斜ハケ後ナデ 24本/2cm	95と同一個体か　上屋根下位妻部	2cトレンチ 4-029
103	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	右傾斜ハケ後ナデ、鋸歯状文線刻 20～22本/2cm	F	右傾斜ハケ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根下位平部	9区・9区・9l区・11区・2cトレ 4-149・4-211・4-178・4-192・4-029
104	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	破風板貼付痕あり、ナデ	F	ナデ	95と同一個体か　上屋根破風板付近	2cトレンチ 4-029
105	家	入母屋	パ・酸・チ礫・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	不明	ナデ	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-149
106	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	破風板貼付痕あり、ハケ後ナデ、鋸歯状文線刻	F	ヨコハケ 24本/2cm	95と同一個体か　上屋根上半平部（破風板付く）	9区　4-149
107	家	入母屋	パ・酸　多・チ・砂	橙褐色 普通	破風板を粘土板貼付表現、右傾斜ハケ後ナデ、鋸歯状文線刻 20本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	95と同一個体か　上屋根中位破風板付近	2c・3eトレンチ 4-029・4-013
108	家	入母屋	パ多・酸少・チ多、砂多	赤褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻	F	左傾斜ハケ後ナデ、竹管圧痕あり（支えか） 18本/2cm	95と同一個体か　上屋根中位平部	2cトレンチ・9区 4-029・4-065
109	家	入母屋	パ・酸・チ多・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭、底面棒状敷物痕	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部下辺	9区　4-149
110	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩	不明	ハケ後ナデ	95と同一個体か　上屋根平部下辺	7区　4-135
111	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少	橙褐色 普通	タテハケ後ナデ、アオリ部は別の粘土板貼付、鋸歯状文 20本/2cm	F	左傾斜ハケ後ナデ 24本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部・アオリ部	9区・2cトレンチ 4-047・4-029
112	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	破風板貼付痕あり、ナデ、鋸歯状文線刻	F	ヨコハケ後ナデ 18本/2cm	95と同一個体か　上屋根中位平部破風板付近	7区　4-140・4-156
113	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F	右傾斜ハケ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	2cトレンチ 4-020
114	家	入母屋	パ・酸・チ多・砂・角少	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻	F	右傾斜ハケ後ナデ 21本/2cm	95と同一個体か　上屋根上位平部	9区　4-149
115	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ	F?	ヨコハケ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	7区　4-155
116	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F?	右傾斜ハケ後ナデ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-149
117	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F	右傾斜ハケ 20本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-149
118	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F	右傾斜ハケ後ヨコハケ 24本/2cm	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-055
119	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	不明	ナデ	95と同一個体か　上屋根平部	2cトレンチ 4-029

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
120	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少・シャモット	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F	左傾斜ハケ 20本/2㎝	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-149
121	家	入母屋	パ・酸・チ・砂	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F	ヨコハケ 20本/2㎝	95と同一個体か　上屋根平部	10区　4-202
122	家	入母屋	パ・酸・チ・砂・角少・シャモット	橙褐色 普通	ナデ、鋸歯状文線刻、一部赤彩施すと見られるが不明瞭	F?	ヨコハケ後ナデ 20～22本/2㎝	95と同一個体か　上屋根平部	9区　4-065
123	家	寄棟	パ少・酸少・チ多・角少	淡褐色 普通	タテハケ後ナデ、粘土板貼付装飾 18本/2㎝	F	左傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	123～134は同種寄棟だが、数個体に分かれる可能性あり　屋根部	5aトレンチ 4-167
124	家	寄棟	パ多・酸少・チ少、砂多、角少	淡褐色 普通	壁を切除し窓表現、タテハケ 21本/2㎝	F?	右傾斜ハケ後ナデ 18本/2㎝	123と同一個体か　窓上辺部	9区　4-149
125	家	寄棟	パ少・酸少・チ多・砂多	橙褐色 普通	隅部に粘土紐貼付、柱・桁表現、ナデ	F?	タテハケ後ナデ 16本/2㎝	123と同一個体か　隅壁部	5bトレンチ 4-168
126	家	寄棟	パ少・酸多・チ少・砂多・角少	赤褐色 普通	タテハケ後ナデ 18本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	126・128・130は同種寄棟だが、別個体に分かれる可能性あり 123～134とは別個体 屋根部	9区　4-149
127	家	寄棟	パ少・酸少・チ多	淡褐色 普通	壁部切除し窓表現、隅部に粘土紐貼付柱表現、タテハケ後ナデ 18本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	123と同一個体か　窓・隅壁部	9区　4-149
128	家	寄棟	パ少・酸少・チ多・角少	赤褐色 普通	壁～屋根を輪積み成形、粘土紐貼付断面三角形に整形し廂表現、タテハケ 21本/2㎝	F?	右傾斜ハケ後ナデ	126と同一個体か　屋根廂部	12区　4-223
129	家	寄棟	パ少・酸少・チ多	赤褐色 普通	隅部に粘土紐貼付、柱表現、タテハケ後ナデ 20本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	123と同一個体か　隅壁部	11区　4-509-17
130	家	寄棟	パ多・酸多・チ少・礫少	赤褐色 普通	タテハケ後ナデ、隅部に粘土紐貼付、柱と桁を表現 17本/2㎝	F	右傾斜ハケ 19本/2㎝	126と同一個体か　隅部	7区　4-126・127・130
131	家	寄棟	パ少・酸少・チ多	橙褐色 普通	粘土紐貼付、柱表現、タテハケ後ナデ 24本/2㎝	F	ハケ後ナデ	123と同一個体か　壁部	9区　4-149
132	家	寄棟	パ少・酸少・チ多・チ礫	橙褐色 普通	隅部に粘土紐貼付、柱表現、タテハケ後ナデ 16本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	123と同一個体か　隅壁部	2cトレンチ 4-029
133	家	寄棟	パ少・酸少・チ多	淡褐色 普通	粘土紐貼付、柱表現、タテハケ後ナデ 16本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 16本/2㎝	123と同一個体か　壁部	2cトレンチ 4-029
134	家	寄棟	パ少・酸少・チ多	淡褐色 普通	粘土紐貼付、柱表現、タテハケ後ナデ 16本/2㎝	F	右傾斜ハケ後ナデ 22本/2㎝	123と同一個体か　壁下端部	2eトレンチ 4-014
135	器財	大刀	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土玉に線刻で鈴口表現、ナデ	不明	—	153と同一か　勾金の鈴部	—
136	器財	大刀	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	粘土玉中位までヘラ差し込み鈴口表現、ナデ	不明	—	153と同一か　勾金の鈴部	9a区　4-040
137	器財	大刀	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ 20本/2㎝・24本/2㎝	F	輪積み痕無成形	鍔部	3aトレンチ 4-009
138	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現	不明	輪積み後ナデ	147と同一個体の可能性大	8区　4584-92
139	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ 20本/2㎝	F?	輪積み後ナデ	137と同一個体の可能性大　鍔部	8区　584-92
140	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	表面ナデ、鈴貼付痕1カ所あり　裏面木板圧痕	F	—	141とは別個体の勾金上端部	9b区　4-047
141	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	表面ナデ、鈴貼付痕2カ所あり　裏面木板圧痕	不明	—	おそらく153と同一の勾金部	9区　4-070
142	器財	大刀	パ・酸・チ礫・砂・角少	赤褐色 普通	ナデ、裏面に本体との貼付痕あり	不明	—	おそらく153と同一の勾金下端部	7区　4-142
143	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	上・下面とも放射状ハケ後ナデ 20本/2㎝	F	—	146と同一個体か　鍔部	9区　4-211
144	器財	大刀	パ・酸・チ・砂	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ 20～22本/2㎝	F	輪積み後ナデ	137と同一個体の可能性大　鍔部	8区　4584-92
145	器財	大刀	パ・酸・チ・砂・角少	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ 20本/2㎝	F	輪積み後ナデ丁寧	鍔部	7区　4-140

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
146	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ 20～22本/2cm	F	輪積み後ナデ	鍔部	4cトレンチ・7区 4-023・4-124
147	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しナデ、粘土紐巡らし鍔表現、鍔上面放射状にハケ後ナデ	不明	輪積み後ナデ	鍔部	8区　4-584-92・ 4-578-84
148	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しハケ後ナデ、粘土紐巡らし鍔表現 20本/2cm	F	ヨコハケ 24本/2cm	146と同一個体か　鍔部	9区　4-148
149	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	刀部輪積み成形しタテハケ、粘土紐巡らし鍔表現後ナデ 16本/2cm	F	ヨコハケ 20本/2cm	146と同一個体か　鍔部	3cトレンチ・ 9b区　4-016・ 4-047
150	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂・角少	暗赤褐色 普通	鞘部輪積み成形後タテハケ、透孔 18本/2cm	F	ヨコハケ 18本/2cm	鞘部	9区　4-119
151	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	鞘部輪積み成形後タテハケ、粘土紐貼付飾り紐表現 18本/2cm	F	ヨコハケ 18本/2cm	鞘部	5トレンチ　4-224
152	器財	大刀	パ・酸・チ・ 砂	暗赤褐色 普通	鞘部輪積み成形後タテハケ、粘土紐貼付飾り紐表現 18本/2cm	F	ヨコハケ 18本/2cm	鞘部	9e区　4-048
153	器財	大刀	パ・酸・チ	赤褐色 普通	本文参照	F	柄内面輪積み痕ナデ消す	—	9区　4-070
154	器財	矛	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	粘土紐貼付け峰部表現、ナデ、基台部へのソケット状差し込み痕あり	不明	—	—	4トレンチ・8区 4-129・4-214
155	器財	矛か	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	輪積み成形、タテハケ後ナデ、透孔穿つ 18本/2cm	F	ナデ	基台部上部	8区　4-584-92
156	器財	矛	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	粘土紐貼付け峰部表現、ナデ、基台部へのソケット状差し込み痕あり　ソケット状端部に木板圧痕あり	不明	—	矛は4個体確認	7区　4-135
157	器財	矛	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	粘土紐貼付け峰部表現、ナデ、基台部へのソケット状差し込み痕あり	F	—	—	8区　4-110
158	器財	矛	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	粘土紐貼付け峰部表現、ナデ、基台部へのソケット状差し込み痕あり　ソケット状端部に木板圧痕あり	F?	—	—	8区　4-212
159	器財	不明	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	基台部	3dトレンチ 4-001
160	器財	不明	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	基部	3cトレンチ 4-025
161	器財	不明	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	タテハケ 18本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	基台部	8区　4-584-92・ 4-214
162	器財	靫か翳	パ・酸・チ・ 砂	淡褐色 普通	タテハケ 16本/2cm	F	右傾斜ハケ 18本/2cm	基台部	7区　4-157・213
163	器財	靫か翳	パ・酸・チ・ 砂	淡褐色 普通	初段突帯下に透孔穿つタテハケ 16本/2cm	F	右傾斜ハケ 16本/2cm	基台部	12a区　4-081
164	器財	靫	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	ハケ後ナデ、矢の表現は省略される　裏面中央に粘土紐貼付	不明	—	—	10区　4-566-71
165	器財	靫	パ・酸・チ 礫・砂・角少	赤褐色 普通	ヨコハケ・タテハケ後ナデ、矢の表現は省略される　裏面中央に粘土紐貼付 ヨコ18本/2cm・タテ24本/2cm	F	—	—	11区　4-509-17
166	器財	靫	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	本体部輪積み成形、上部に粘土板貼付装飾、ナデ	F	輪積み痕指頭押圧	164・167とは別個体	12区　4-546
167	器財	靫	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	本体部輪積み成形、上部に粘土板貼付装飾、ナデ、板状部にハケメ残す 26本/2cm	F	輪積み指頭押圧	177・178とは別個体	10・11区　4-037・ 4-523
168	器財	靫	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/2cm	F	ナデ	左上板状部下端か	1eトレンチ 4-003
169	器財	靫	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、タテハケ、粘土板貼付板状部表現、一部ハケメ残す 20本/2cm	F	ナデ	左下板状部か	12区　4-546

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
170	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	粘土板２枚重ねる。ハケ後ナデ 18本/２cm	F	—	上板状部	２ｃトレンチ 4-029
171	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F	ハケ 18本/２cm	板状部	３ｂトレンチ 4-010
172	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂・角少	赤褐色 普通	粘土板で板状部表現、本体に貼付痕あり、ナデ	F	—	板状部	７区　4-051
173	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂・角少	赤褐色 普通	本体輪積み成形、タテハケ、粘土板貼付板状部表現、両面ハケメ残す 22本/２cm	F	ハケ後ナデ	上板状部	８区　4-215
174	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	正面ナデ、裏面タテハケ 18本/２cm	F?	—	上板状部	11区　4-501-508
175	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現	不明	指頭でナデ	右下板状部上端部か	12a区　4-081
176	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、タテハケ、粘土板貼付板状部表現 18本/２cm	F?	ヨコハケ 18本/２cm	上板状部下端部	12a区　4-081
177	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F	ヨコハケ 24本/２cm	右上板状部か	10区　4-566-571
178	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F	ヨコハケ後ナデ 20本/２cm	右下板状部上端部か	12a区　4-080
179	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、ナデ	F	右傾斜ハケ 18本/２cm	左下板状部上端部か	10区　4-566-571
180	器財	靱	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F	ヨコハケ後ナデ 20本/２cm	右下板状部か	10区　4-566-571
181	器財	靱	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	本体輪積み成形、粘土板貼付板状部表現、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F?	ヨコハケ 20本/２cm	左上板状部下端部か	10区　4-566-571
182	器財	鞆	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	輪積み成形、ナデ	不明	輪積み痕無整形	本体部	３ｅトレンチ 4-184
183	器財	鞆	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	表側ナデ、裏側木板圧痕	不明	—	先端部	３ｄトレンチ 4-011
184	器財	鞆	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体部にソケット状に差し込み、接合部に粘土紐帯状に巡らし装飾表側ナデ、円盤状粘土貼付痕あり　裏側木板圧痕	F?	—	先端部	10区　4-183
185	器財	鞆	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	本体部にソケット状に差し込み、接合部に粘土紐帯状に巡らし装飾表側ナデ、円盤状粘土貼付　裏側木板圧痕	不明	—	先端部	10区　4-183
186	器財	鞆	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後凸帯付近ナデ、一部布目痕 18本/２cm	F	右傾斜ハケ 18本/２cm	本体下部	10区　4-202
187	器財	鞆	パ・酸・チ 礫・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後凸帯付近ナデ 18本/２cm	F	右傾斜ハケ 18本/２cm	本体下部	３ｄ・ｅトレンチ、 10区　4-001・ 4-184・4-222
188	器財	鞆	パ・酸・チ 礫・砂・角少	赤褐色 普通	タテハケ後凸帯付近ナデ 18本/２cm	F	右傾斜ハケ	本体下部	３ｃ・ｄ・ｅ~ｆトレンチ 4-184・4-011・ 4-575
189	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	ハケ後ナデ 18本/２cm	F	右傾斜ハケ 20本/２cm	190・192～194・198・199・201～203とは別個体	７区　4-123・136
190	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	ハケ後ナデ 18本/２cm	F	右傾斜ハケ 18本/２cm	189・191～203とは別個体　裏面に骨表現	７区　4-066・130・135・176・201
191	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板２枚を合わせ貼付、正面ハケ後ナデ、裏面ハケメ残す 24本/２cm	F	—	190・145とは別個体	11区　4-501-508
192	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	中心部輪積み成形、平部は粘土板２枚を合わせ貼付、ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩 18本/２cm	F	—	189・190・203とは別個体	７ｆ区　4-043・117
193	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板貼付、ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩、裏面ハケメ残す 18本/２cm	F	—	189・190・203とは別個体	７区　4-130・117

番号	大別	形式	胎土	色調 焼成	外面調整	ハケメ	内面調整	備考	出土地区・注記
194	器財	翳	パ・酸・チ 礫・砂	赤褐色 普通	中心部輪積み成形、平部粘土板貼付、ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩 24本/2㎝	F?	指頭でナデ	189・190・203とは別個体	7区　4-117
195	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板2枚を合わせ貼付、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩	不明	—	190とは別個体	9区　4-149
196	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板貼付、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩、ハケ後ナデ、裏面ハケメ残す 18本/2㎝	F	—	190とは別個体	7区　4-158
197	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板2枚を合わせ貼付、両面に放射状線刻し一段おきに赤彩	不明	—	190とは別個体	2cトレンチ 4-029
198	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	平部は粘土板2枚を合わせ貼付、ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩 18本/2㎝	F	—	189・190とは別個体	9区　4-178
199	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	平部粘土板貼付、ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩 18本/2㎝	F	—	189・190・202とは別個体	4トレンチ　4-137
200	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂・角少	赤褐色 普通	ハケ後ナデ、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩 24本/2㎝	F	—	189・190とは別個体	7区　4-117
201	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	扇状の粘土板を背部に立て、鞍橋を表現、正面ハケ後ナデ調整、裏面放射状ハケを一部ナデ消す 18本/2㎝	F?	ハケ 18本/2㎝	189・190・193・203とは別個体　翳板状部	2cトレンチ 4-029
202	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	中心部輪積み、平部粘土板貼付、正面放射状に線刻し一段おきに赤彩、裏面ハケメ残す 18本/2㎝	F	指頭でナデ	189～192とは別個体	4トレンチ、7区、 9区　4-137、 4-157、4-152
203	器財	翳	パ・酸・チ・ 砂	赤褐色 普通	中心部輪積み、裏面中央に透孔、平部は粘土板貼付、正面ハケ後ナデ、放射状に線刻し一段おきに赤彩、裏面ハケメ残す 18本/2㎝	F	輪積み痕無成形	189・190・192～194・201とは別個体	3cトレンチ・7区 4-017、4-157



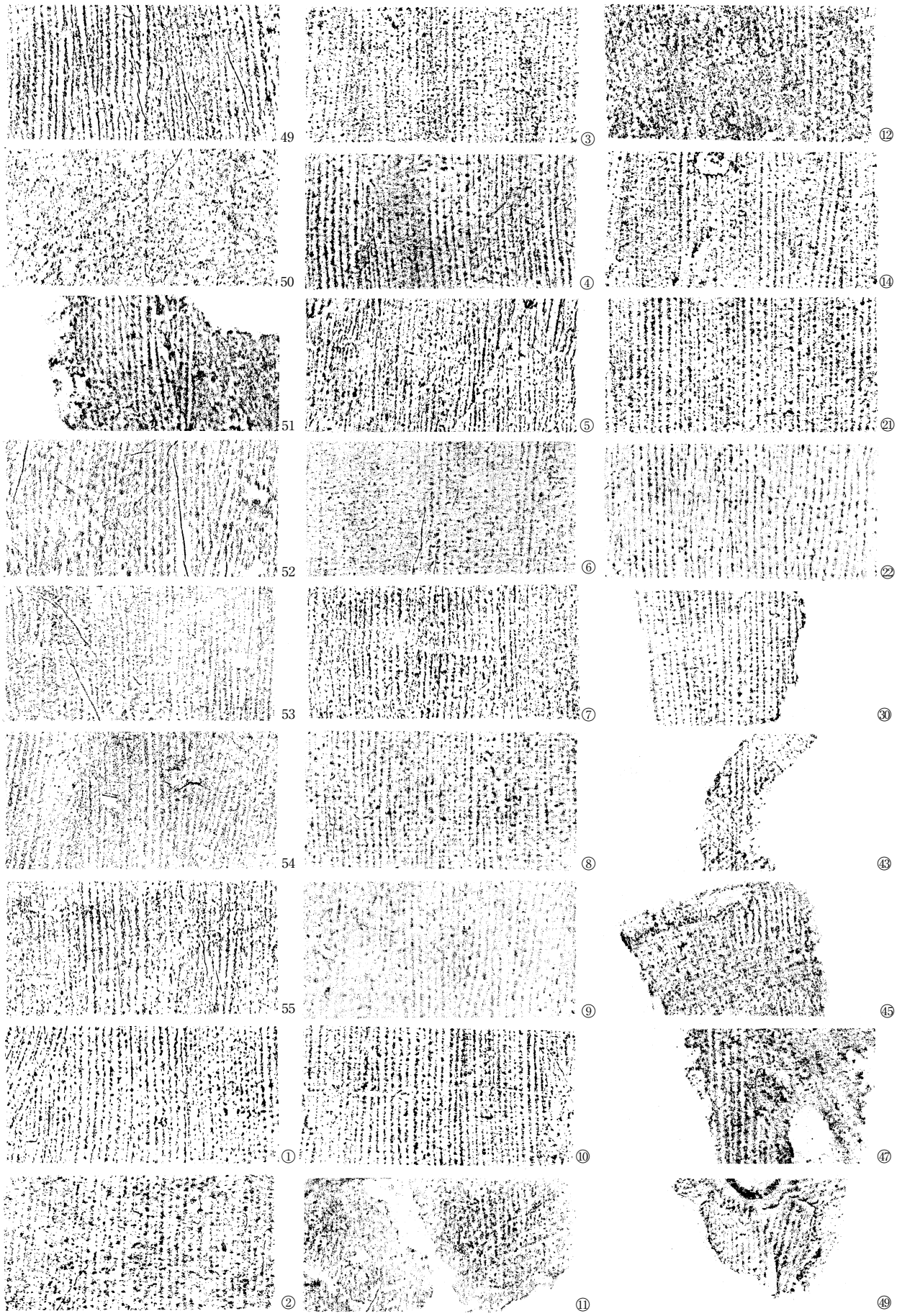
以下、第83図まで実寸
F類丸数字は形象埴輪

第77図　出土埴輪ハケメ一覧（A・B・D）



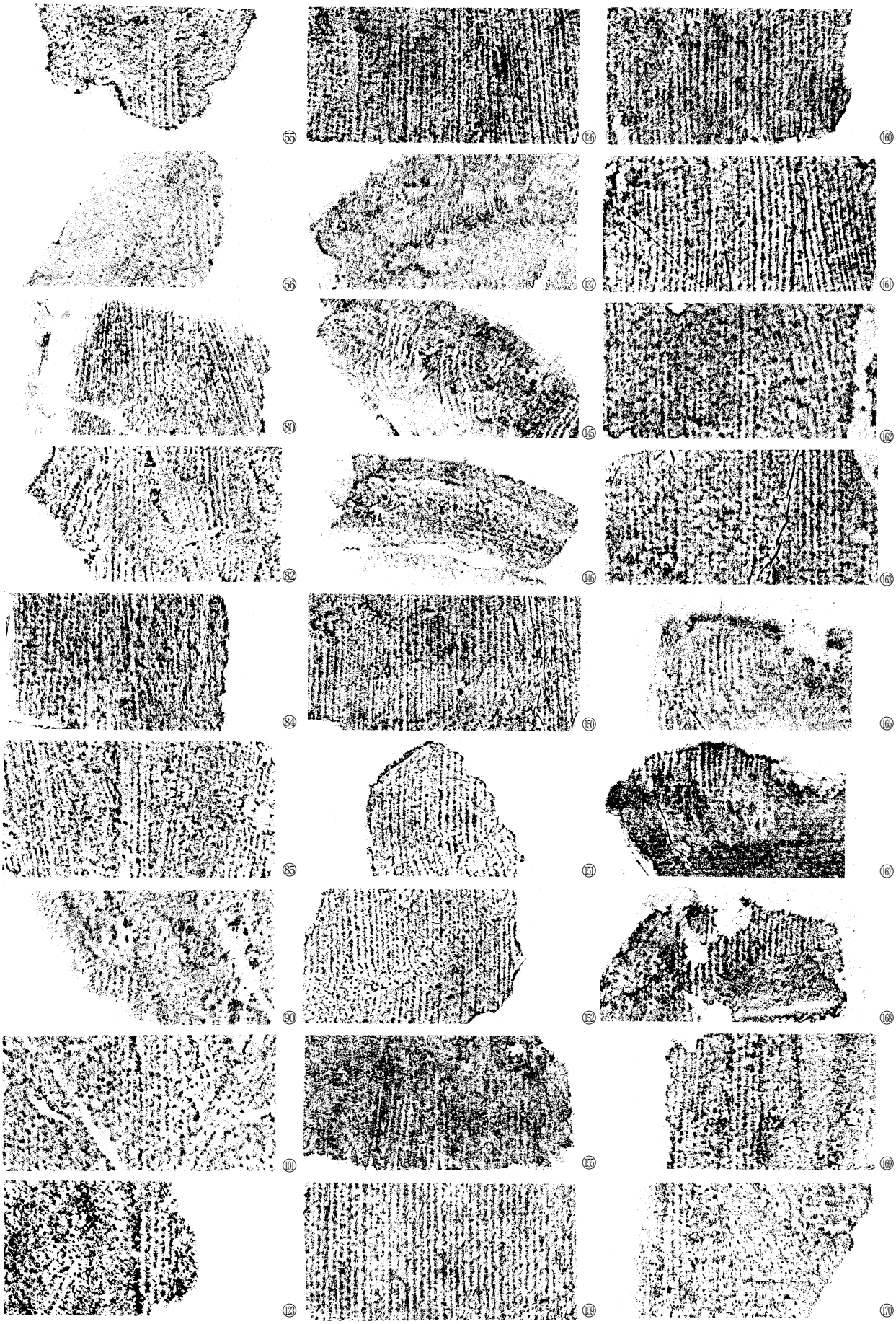
第78図　出土埴輪ハケメ一覧（E・F）

F

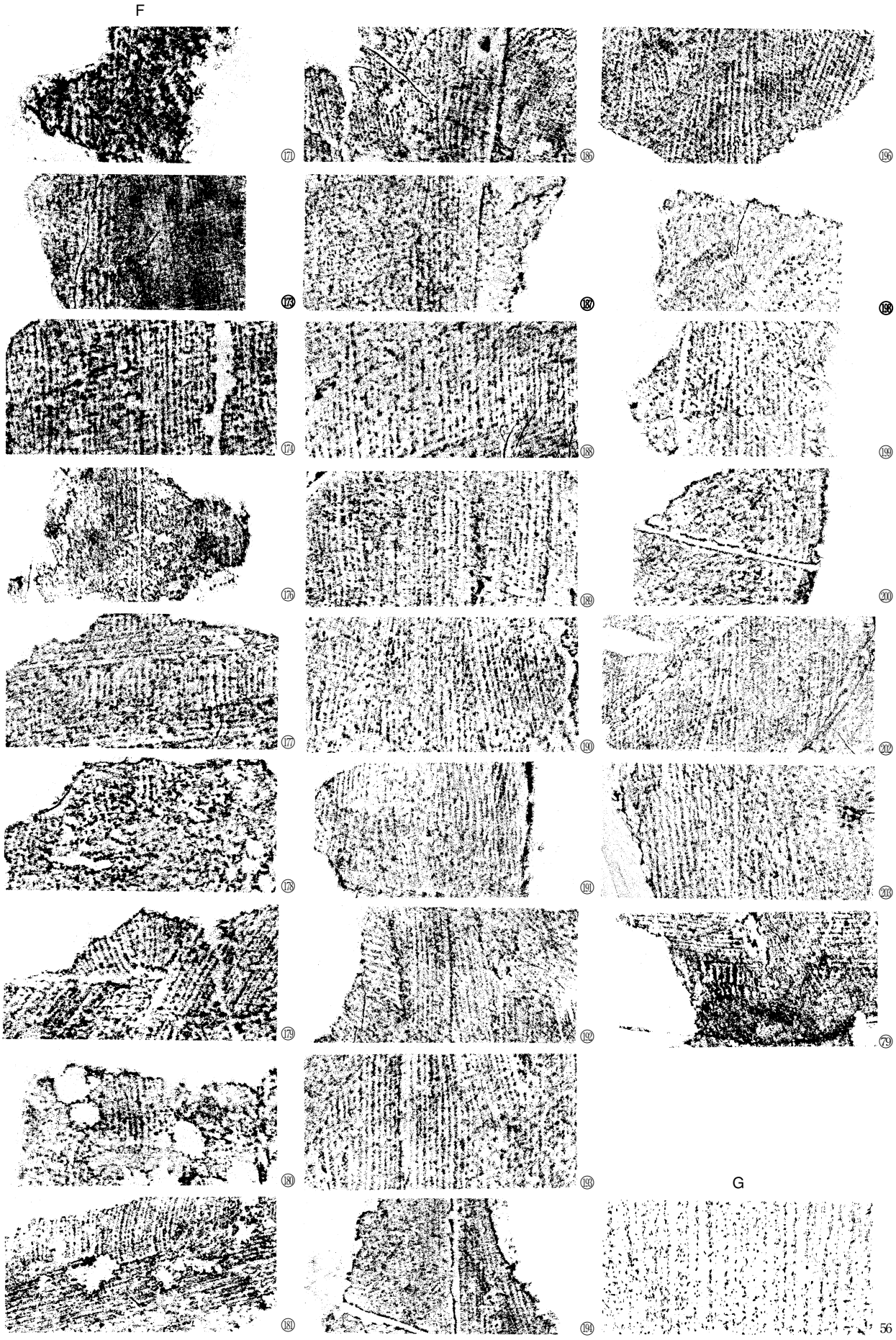


第79図　出土埴輪ハケメ一覧（F）

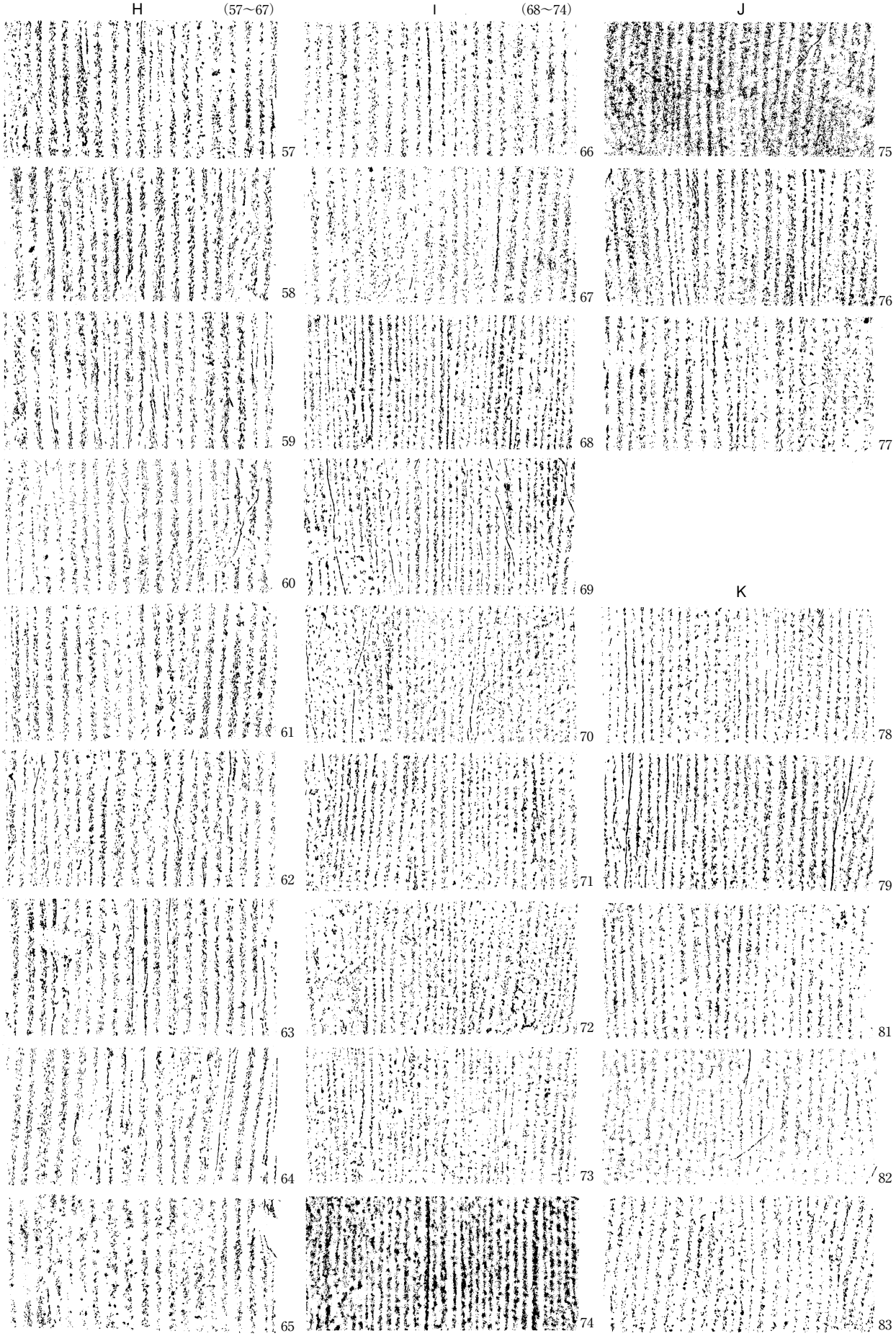
F



第80図　出土埴輪ハケメ一覧（F）



第81図　出土埴輪ハケメ一覧（F・G）



第82図　出土埴輪ハケメ一覧（H・I・J・K）



第83図　出土埴輪ハケメ一覧（K・L、A 内面・H 内面）

7　その他の出土遺物

土器　1号墳で検出された土器は、第84・85図に掲げたとおりである。

主体部付近からの出土が多い。主なものは、第9図に示したとおり裏込め土下より直線上に並べられたように出土した、完形の須恵器4・7・10と土師器壺15である。また他には、括れ部付近より完形の土師器甕14が出土している。石室床下で検出された須恵器と壺は、埋葬ではなく石室構築に関係する器物で、古墳の築造時期推定に直接関連する遺物である。いずれも、須恵器編年のTK209型式の範疇にあると思われる（田辺1981）。

破片の須恵器は、2・3・5・6が杯蓋、8・9・11・12が杯、13が横瓶である。

土師器甕14は、胴部のほぼ中央部より下、底部に至るまでの外面に、きつい縦位のヘラミガキが施される特徴を持つ。器厚は0.7～1.2cmほどで、内面には、底部より3cmほどの高さに輪積み痕が残されている。これは常総型として捉えられる甕で、6世紀末頃の型式と考えられる（樫村1998）。胎土には明瞭に雲母粒が認められ、非在地的な産物であることを示している。

土師器は他に、石室構築前に埋置された壺15と甕片16が石室付近で得られている。前者は、厚手で異質な形状の土師器である。これも非在地的な遺物であろうか。

その他に、墳丘上から小片（第85図17～33）が得られている。

17から20は須恵器大甕の破片である。この須恵器大甕片は、同一個体かは確言できないものの、図示した以外にも数片検出されている。一部に石室上の注記のあることから、本来、後円部上にあった可能性がある。これは、古墳時代後期に見られる墳丘上での使用に関係するものかもしれない（橋本1980）。市内でも、埴輪は下総型で異なるが、小谷1号墳・鶴窪古墳において確認されており（高橋1992・甘粕他2002）、本例も埴輪配置と有機的に関連する遺物と見ておきたい。

26は土師器和泉式の高杯片、21～25・29～33はロクロ土師器の杯片で、両者とも混入品である。

27はカワラケ、28が常滑の壺である。両方とも前方部上の1号土壙墓、そして埋没道との関係が問われる中世遺物である。

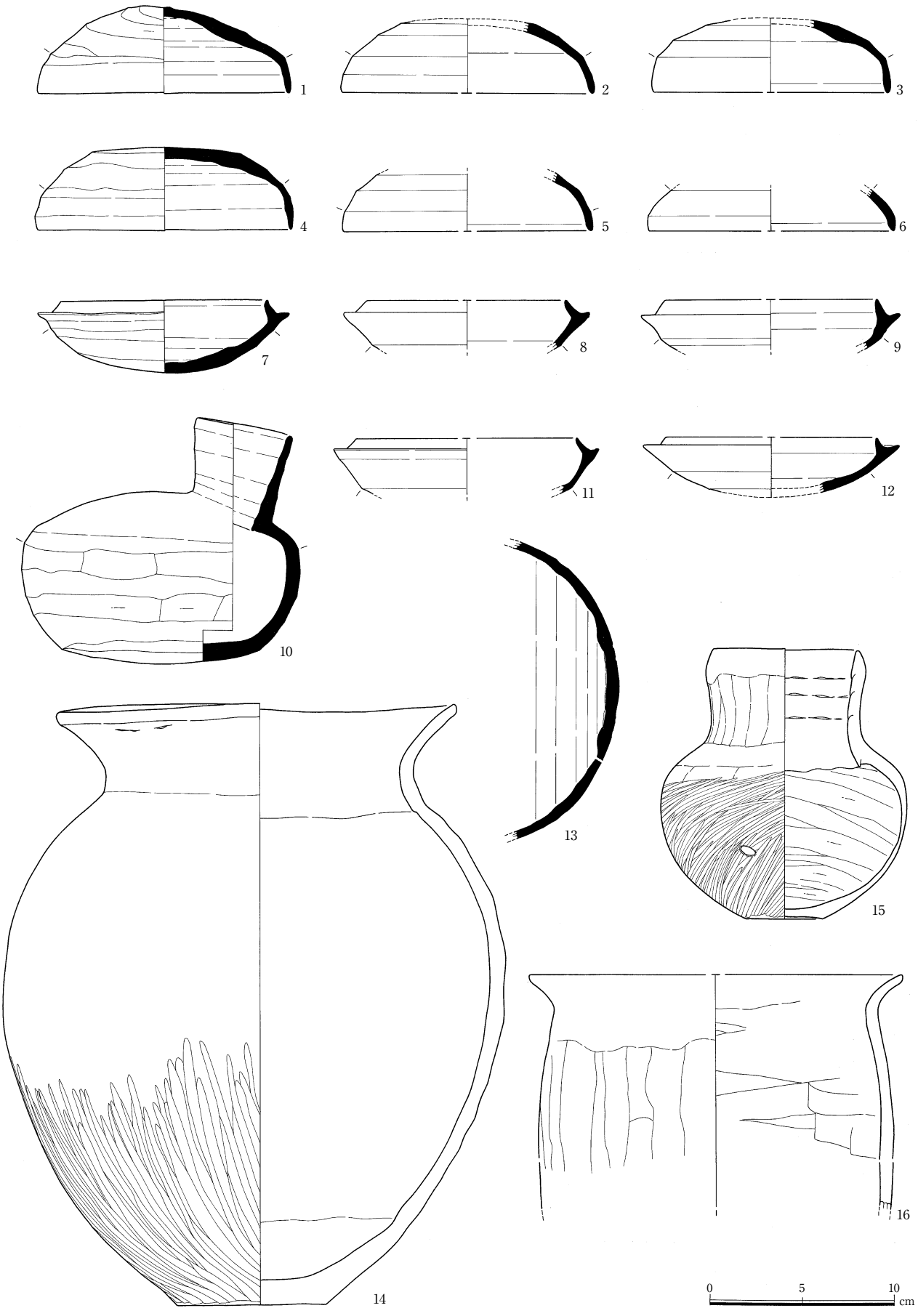
山倉1号墳の築造時期は、石室構築直前の須恵器類と上段墳丘最下層の常総型甕の形状から、TK209型式期・6世紀第4四半期と考えられる。

石製品　34・35の琥珀製棗玉のみが石室内から出土している（第85図）。本来の副葬品セットには、他にも多くの玉類が含まれていたものと思われる。

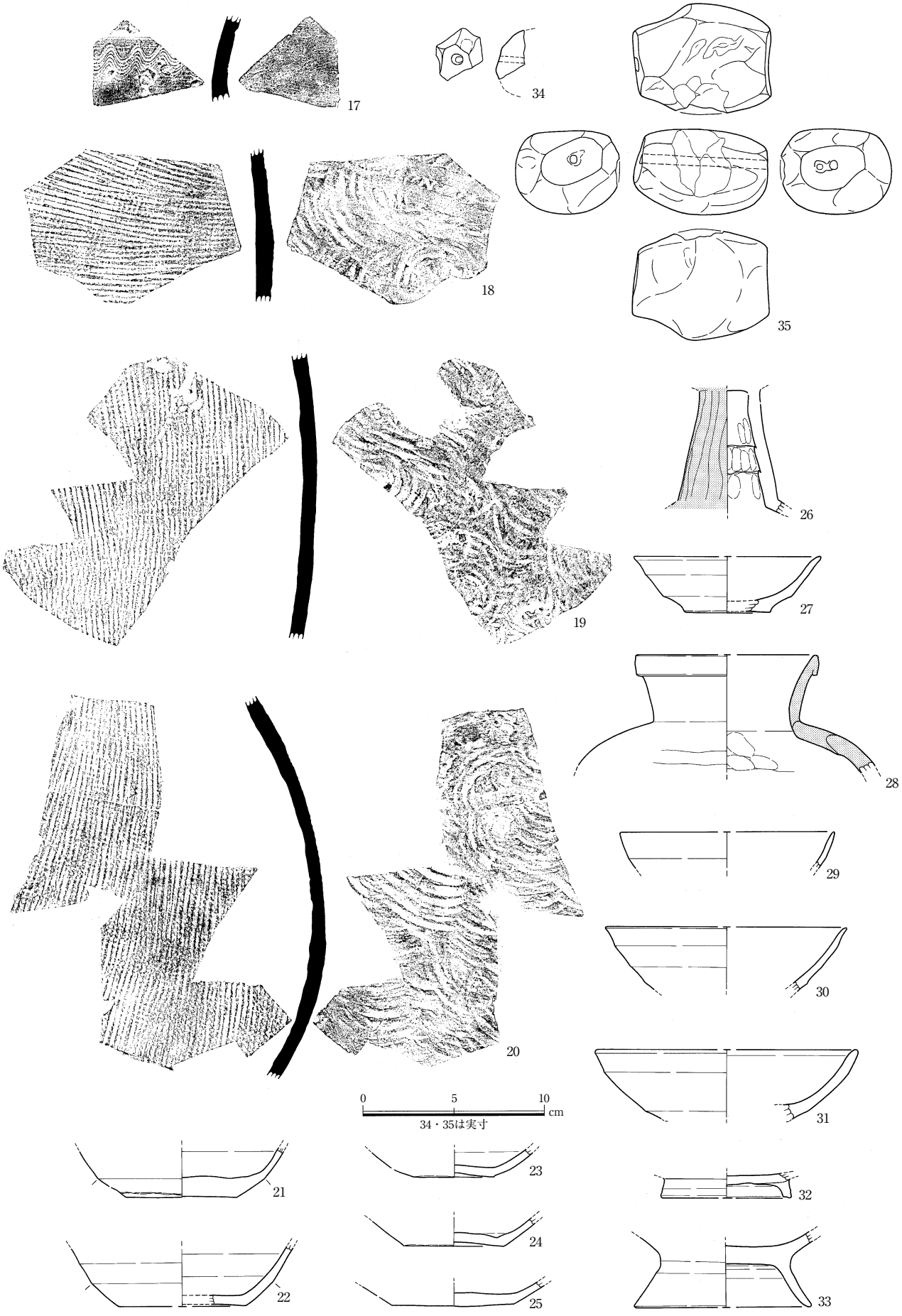
金属製品　鉄製品は、第86・87図に掲げたものが出土している。いずれも主体部内とその付近からの検出である。石室の項で述べたとおり、本来は玉類とともに副葬品としてセットをなしていたと考えられる。撹乱のため、副葬時の原位置を保っているものはなく、また、完形品は耳環13と鉄鏃15ぐらいであり、遺存数・遺存状態ともに悪い。

1～8・20・26～35は、いずれも直刀の一部である。最も良く残存しているものは長さ43cmの1で、その他は小破片となっている。しかし、破片の中には、5の刃先から、7・7'の鍔・柄部などが見られ、全体的な形状を窺うことはできる。茎部の数からすると数量は最低6振以上と考えられる。

他に、金銅製耳環13・馬具の一部と思われる環状部品11・絞具12、鏃類（14～19・22～25）・刀子21がある。10は不明鑿状製品で、刃部と思われる側の反対辺に敲打によって広がったような跡がある。なお、9の鉄釘は盗掘坑最上層出土の混入品である。



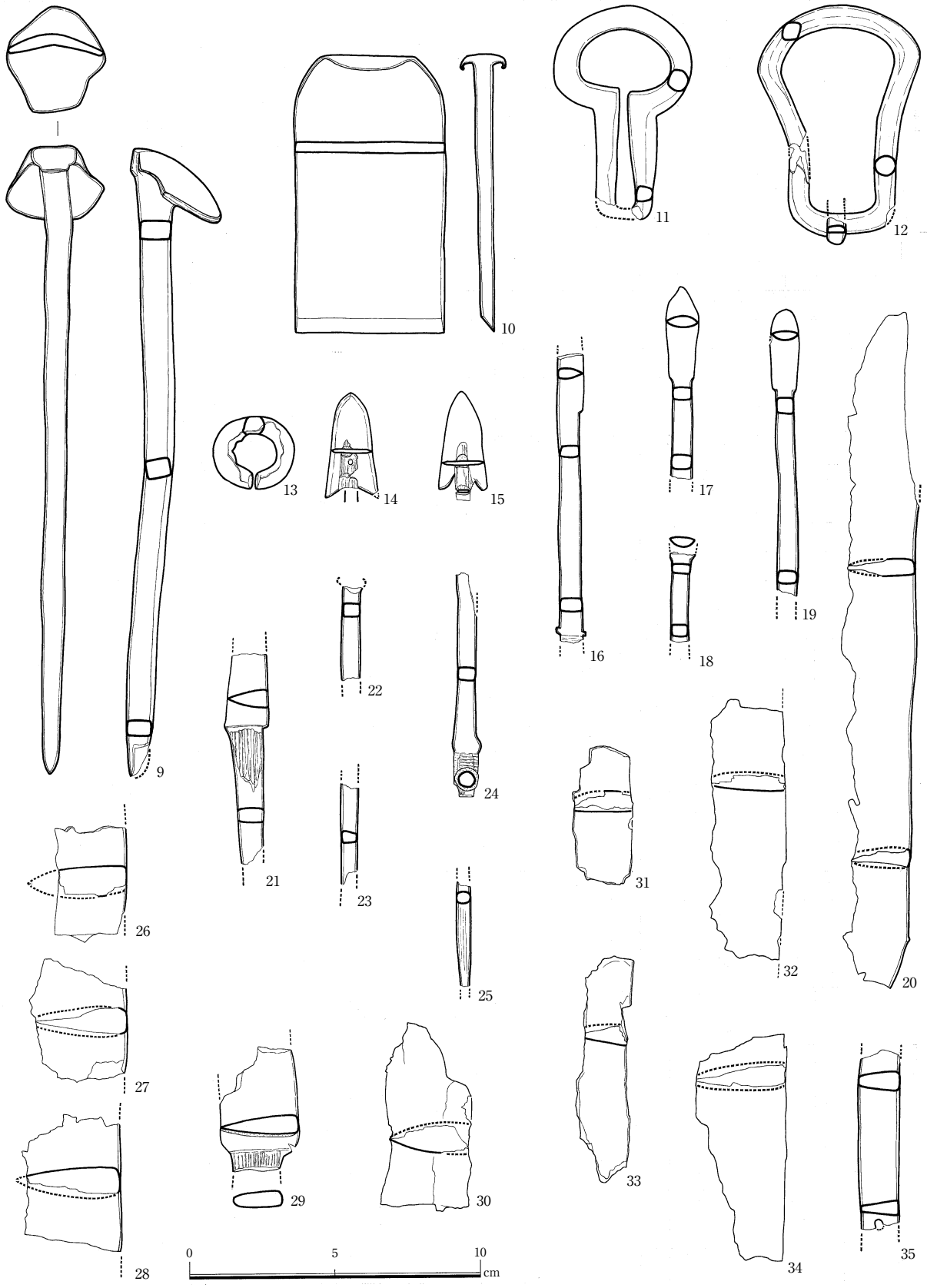
第84図　1号墳出土遺物実測図



第85図　1号墳出土遺物実測図



第86図　1号墳出土鉄製品実測図



第87図　1号墳出土金属製品実測図

第３節　１号土壙墓

１　遺構と遺物

１号墳から中世前期の蔵骨器（88図１）・カワラケ（85図27）・壺（同28）が出土している。これらは南方の微高地上で営まれたであろう中世集落に関連するものと思われるが、一般の生活遺物と異なる。人々にとって集落背後に見上げる墳丘が、特殊な場であったことを示しているが、室町期以降の遺物は認められない。しかし６号墳から室町期の板碑（第106図10）と五輪塔（同13）が出土しているので、中世後期に至ると、このような“空間”は台地の奥に移動したものと思われる。室町期は台地上の裸地化（畑地化）が進行した画期と捉えられるので、墓域の移動は台地開発の点から見ても興味深いものと言える。

中世の遺構として、確実なものはこの土壙墓が１基検出されたのみである。概要を以下に述べる。

遺構　１号土壙墓は、１号墳前方部南隅の墳頂付近に掘られる。一部撹乱で破壊されるが、長方形プランを呈し、長軸2.92m、短軸1.28m、深度1.25mを測る。中心からやや東よりに常滑大甕を置く。覆土は不明だが、埋め戻しによる単一層と思われる。なお、１号墳一括取上げ遺物の常滑産壺（第85図28）は６a型式で（中野1994）、やはり蔵骨器と思われることから、主体部付近の攪乱地区にも同様の遺構が存在した可能性がある。

遺物　１は４型式の常滑産大甕で、中世蔵骨器として確認されている中では、市内最古の資料である。比較的薄手の輪積み成形で、内面ナデ調整、外面は斜上方向にヘラ削り整形後、ナデ調整する。頸部は軽くナデるが、輪積み時の指頭圧痕を残す。口縁はいったん外反してから端部に縁帯をし、若干上方につまみ上げる。５条認められる押印帯は輪積み部の外面に施され、補強調整と装飾を兼ねたものである。文様は格子と斜格子の２種類によるが、一つのタタキ工具に２種の格子目が並んで刻まれたものと解釈する。器中からは①人骨、②銭が発見された。

①　人　骨　甕底に大腿部と頭部が遺存していた。鑑定の結果、老年期の女性１体であることが確認された。詳細は次頁を参照されたい。

②　銭　　北宋銭と見られる。遺物は所在不明で記録もないため、銭種など詳細は不明である。出土状況図に１点のみ確認できる。仮に埋葬期を常滑４型式期と仮定すれば、六道銭としては古い事例になる。

遺体の埋納方法について　人骨の遺存度は良好でなく、出土状況から詳しい判断ができなかった。大甕の頸部内径は41㎝あり、老女なら直葬できるが、再葬の可能性も残す。室町期以降の事例だが、近隣の台遺跡Ａ地点から複数の常滑大甕蔵骨器が出土しており、参考になろう。整理報告を待ちたい。

埋葬期について　４型式大甕の生産年代から、上限は12世紀末から13世紀初頭に押さえられる。ただし、日常使用の甕を転用したものと思われるため、下限期を押さえることは困難である。13世紀全般の中で捉えれば間違いないであろうが、上記一括資料の壺が６a型式なので、13世紀中葉が墓域の確立、ひいては麓の村落成長の画期になるのかもしれない。ただし断っておくが、１号墳の甕・壺は、例えば富豪農民層など村落内でも特定階層に関わる遺物と思われ、“村の墓地”とは異なるものである。この種の共同墓地は、室町期以降に先述の６号墳周辺で営まれた可能性が強いだろう。村落との有機的な関連については、今後の周辺地区の調査に期待したい。

なお、大甕の型式については、常滑市民俗資料館の中野晴久氏にご教示賜ったことを記しておく。

2　山倉１号墳出土人骨について

平田和明（聖マリアンナ医科大学・解剖学教室）

はじめに

千葉県市原市所在の山倉古墳群第１号墳の墳丘に堀り込まれた土坑の常滑大甕から、中世に属する人骨１個体分が出土した。市原市文化財センターから出土人骨の鑑定を依頼されたので、ここにその結果を報告する。

人骨所見

出土人骨は保存状態が極めて悪く、全身骨格は残存していない。出土人骨は頭蓋の一部と遊離歯および四肢骨片である。同定できた人骨所見につき以下に述べる。

山倉１号墳出土人骨は老年期の女性人骨１個体分であると思われる。

頭蓋　：欠損部が多く、頭蓋として認められる部位は、前頭骨と左右の鼻骨および左右の上顎骨前頭突起部だけである。この前頭骨の前頭鱗は前方に突出しており、眉弓の発達も弱く、頭蓋冠も薄いことから、この個体は成人女性人骨と推定される。小さいことから女性人骨と推定される。

歯　　：残存する歯はすべて遊離歯である。歯式を次に示す。

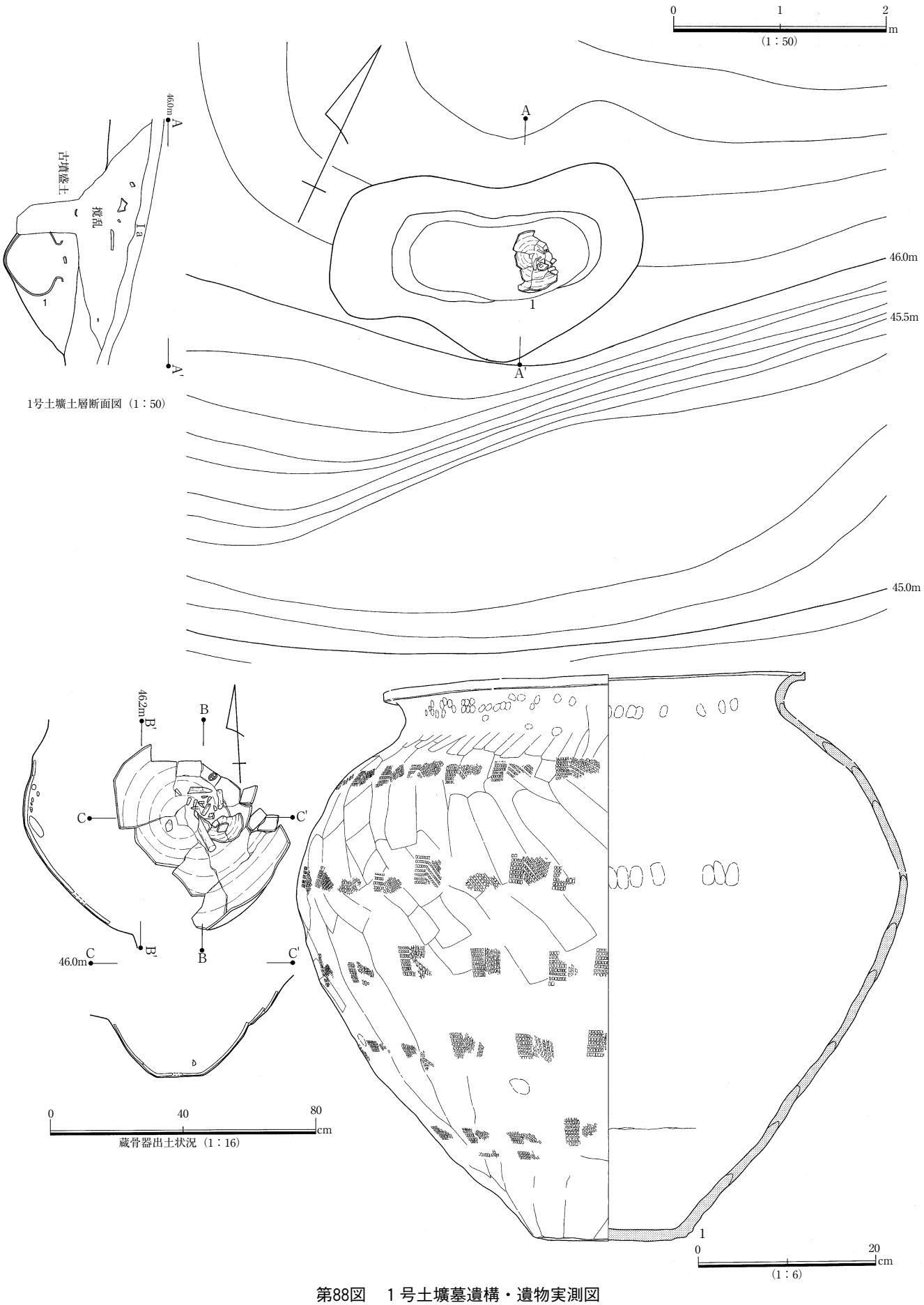
８７６５４３×１	××××××××
××６×××２×	××××××××

ただしアラビア数字は残存する永久歯を、×印は欠損を示す。歯の咬合様式は鋏状咬合型と推定される。歯の咬耗度はmartinの３度である。齲蝕は認められない。歯の咬耗度からこの人骨は老年期であると推定される。

上肢骨：約４㎝大の部位不明の前腕骨体片が残存するだけである。
下肢骨：左の大腿骨片が認められるだけである。これは大腿骨体上部および大腿骨頸の一部であり粗線上部を含む約15㎝大の骨片である。粗線の発達は弱く、骨体も比較的細いことからもこの個体は女性と推定される。

まとめ

市原市所在の山倉１号墳から出土した常滑大甕内の人骨は老年期女性人骨１個体分である。人骨の保存状態は極めて不良であり、残存部位もわずかであった。出土人骨に疾病および齲蝕等は確認出来なかった。



第88図　1号土壙墓遺構・遺物実測図

第４節　２号墳

１　概要

樹木伐採前にすでに存在の知られていた古墳であり、「国分寺台遺跡地名表」（田中・宮本1974）に遺跡番号204、山倉２号墳として記載されている。

伐採の結果、第３図に見られるように、１号墳と３号墳との間に地脹れが明瞭に確認されている。この地脹れの状態は、直径20ｍ程の範囲にかけて見られた。最高部で75㎝程の高さを有しており、その広がりの形状より円墳であろうと予想された。また、本古墳の存在する地点は、他の古墳立地地点同様に樹木が多く、木の根による攪乱が激しいものと思われた。

調査経過　直交する２本のトレンチを設定し、発掘調査を開始した。トレンチは地脹れの頂点で交叉するように幅1.5ｍで入れた。古墳の規模を把握するためにこれを掘り下げて、まず、周溝の存否を調べ、その後、周溝部全域を拡張し、円墳であることを確認した。さらに、主体部の位置等の把握のため封土部分の拡張を試みたが、主体部の検出はなされず、その位置・形状等については何ら得るところがなかった。

位置　１号墳と３号墳とに挟まれた地点に位置している（第３図）。発掘調査の結果、円墳である事が確認されるが、周溝東側部において１号墳の前方部周溝と重複し、さらに、その部分には南北に走る後世の道路跡が重なっている。このため、東側周溝は外側肩が破壊されている。西側周溝は、３号墳に接するようにみられる。

２　遺構と遺物

周溝　周溝はほぼ円形に認められ、外径では南北22ｍ、東西22ｍを有し、茶褐色土層～ローム層上面部より掘り込んでいる。場所によって溝の状態には相違が見られるが、概ね、上部で２～３ｍ、底面部幅0.7～１ｍ、深さ0.6ｍ程を有し、断面形は逆梯形を呈している。周溝底面部は部分的に凹凸が見られるものの、全体的にみると平坦である。

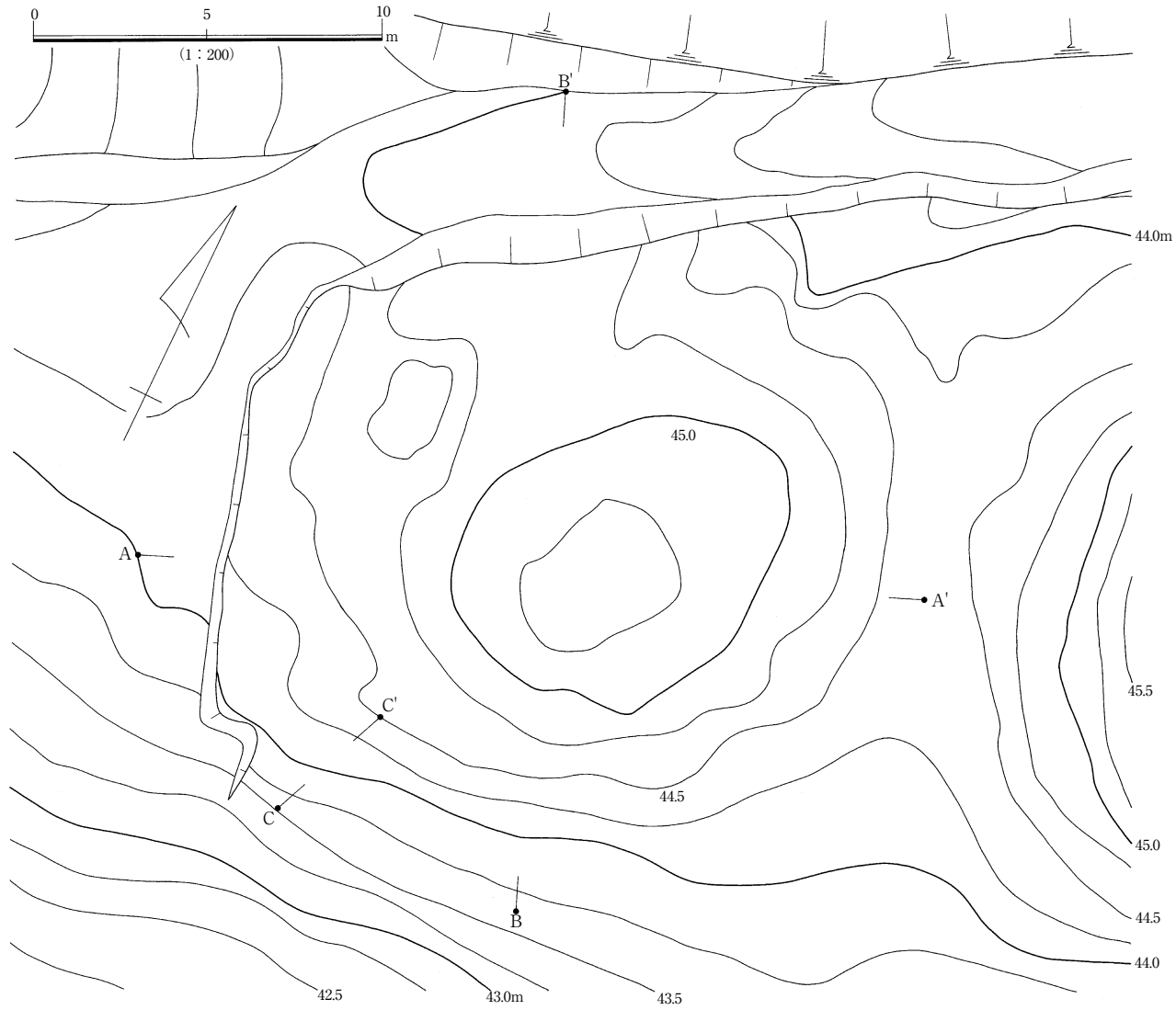
周溝覆土は、部位によって堆積状態を若干異にしているが、基本的には以下の３つの層により成立している。第89図Ａ－Ａ’は、東西の断面図であるが、その西側周溝断面図に基本層位が顕著にみられる。周溝底面より、以下の通りである。

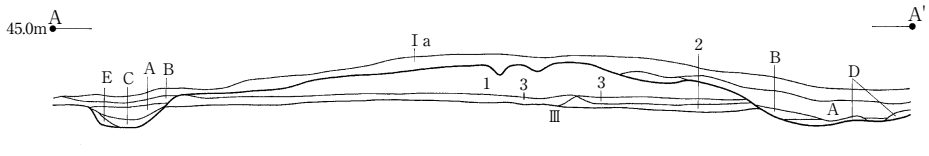
Ｅ：第１次堆積土であり、ローム粒を多く混入するため、黄褐色を呈する土層で、底面全体を覆うことはなく、周溝上部より底面の中程にかけてレンズ状に見られ、厚さは最厚部で10㎝程を測る。

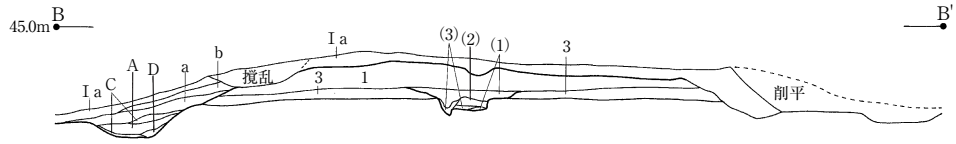
Ｃ：Ｅに続いて堆積する土層として把握されるもので、黒褐色を呈する。Ｅ層とは異なり底面全体を覆うようになるが、土層上面部は未だ窪みを有する状態である。この層の堆積時においては、視覚的に周溝の存在が明瞭だったことが窺える。第１次堆積土Ｃと同様、レンズ状に堆積し、その端は周溝上部あるいは間近に至る。最も厚いところで20㎝程である。

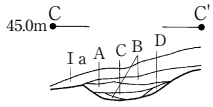
Ａ：この層が堆積終了した時点で周溝は完全に埋めつくされた状態となる。上面はほぼ平坦となるが下面は脹らみを見せるレンズ状堆積である。色調は、黒褐色より若干茶色味を帯びており、最も厚い部分で27㎝程である。

以上のＥ・Ｃ・Ａの３層が、第２号墳周溝内における覆土の基本であるが、第89図に見られるよう









2号墳覆土
1 ：黒色土、墳丘盛土
2 ：茶褐色土、墳丘盛土
3 ：ローム粒主体土、墳丘盛土
A ：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
B ：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層
C ：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層、ローム粒含む
D ：茶褐色土、周溝覆土、自然堆積層
E ：茶褐色土、周溝覆土、流入層
a ：黒褐色土、流入層
b ：黒褐色砂質土、流入層
(1)：黒褐色土
(2)：茶褐色土
(3)：黄褐色土

第89図　2号墳測量図（表土除去前）・土層断面図

に場所によっては、各土層間に短期間に堆積したと思われる10～20cm程の厚さを有する茶褐色土層が見られるので、位置によって埋積する期間・程度に違いがあったようである。

封土　第89図の断面図に見るように、Ia 層の表土（木の根等による攪乱層）下には、すぐ自然堆積土の黒色土層があり、盛土として把握できる土層は見られない。しかし、当初はこの黒色土層上に現状よりも高く盛土がなされていたものと見られ、その後の削平乃至流失により盛土の部分は消滅したものと思われる。立地からすると、おそらく、地形的要因が大きかったと考えられる。

埋葬施設　変則的古墳である可能性等を考慮して、墳丘裾部の精査を試みたが、埋葬施設は検出されなかった。盛土の遺存状態が悪く、旧状を留めていない点からすると、墳丘上にあったとしても流失あるいは破壊された可能性が高いものと思われる。

遺物　第100図に掲げた土器のうち、１～３の土器が２号墳において検出されている。いずれも土師器で、杯形のみである。このうち１・２の土器は、東南部周溝において、第１次堆積土のＥ層（黄褐色土層）が堆積した後に、その上に落ち込んだ状態で検出されている。

これらの杯形土器は、その器形から便宜的に２つに分けることが出来る。

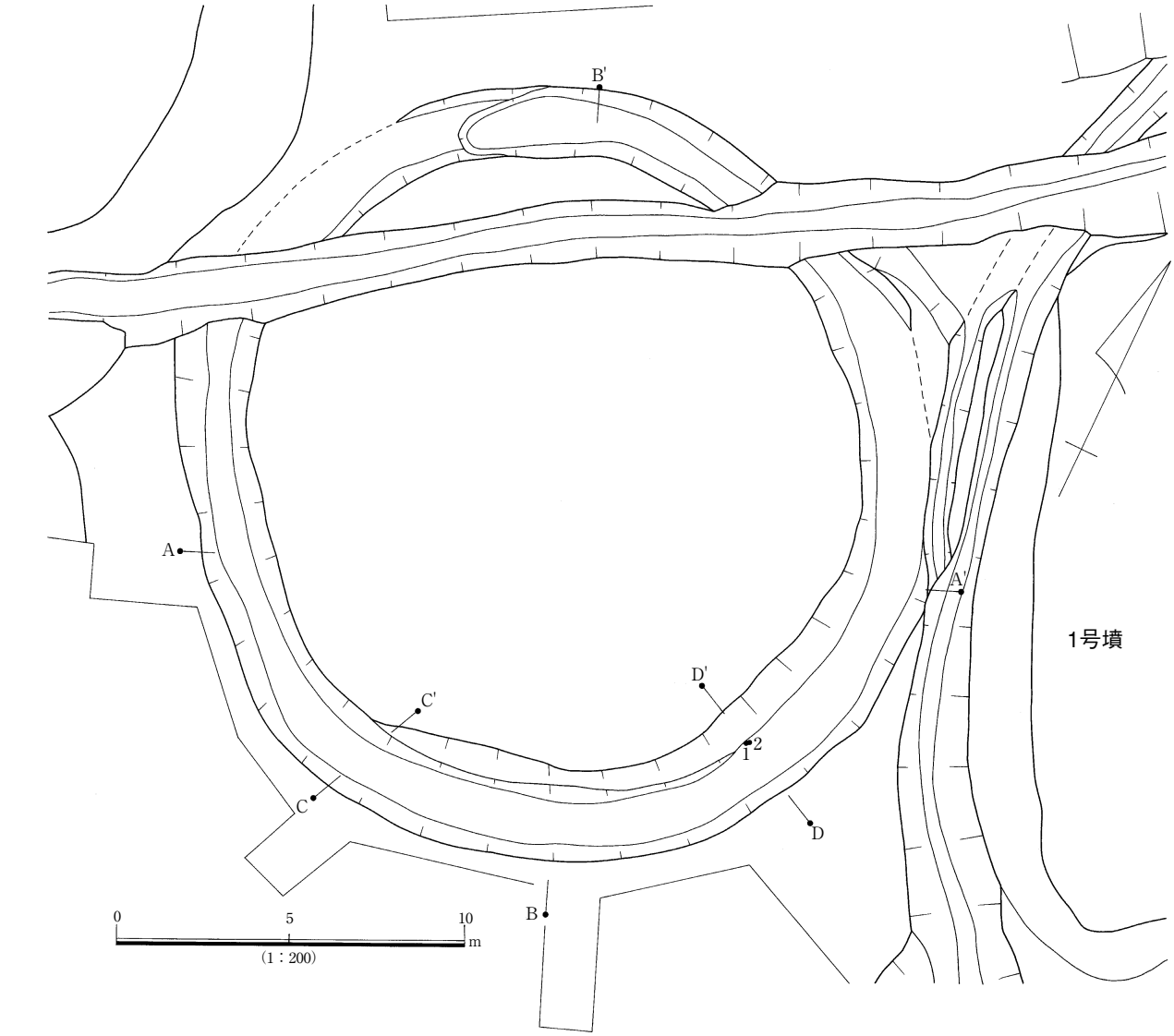
まず、丸底を有し、口縁部が垂直的な立ち上がりを見せる形態であり、第100図１・２である。この２点の土器は重なる様にして検出されたものであり、いずれも破損部は多いが、全体の形状は良く捉えられる。大きさ・胎土・色調等は共に大きく相違しない。

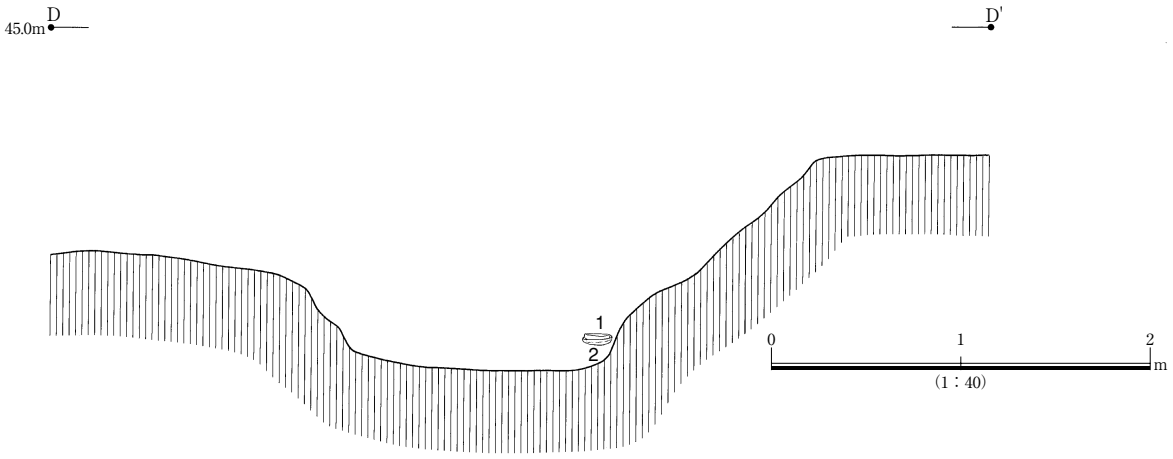
１は浅い丸底の体部を持ち、途中で屈曲を見せ、外反する口縁へと至る器形である。胴部から底面にはヘラケズリの痕跡はなく、丁寧なヘラミガキで仕上げられている。色調は黄褐色を呈するが、部分的に黒斑がある。２は口径14cm、器高3.3cmを数える土器で、底面よりゆるやかなカーブを描きながら立ち上がり、口唇より下1.7cm程の所に口唇部と平行した稜線を有し、それより上、口縁部は垂直的な立ち上がりを見せている。器壁の厚さは底面で0.5cm、胴部で0.7cmである。口縁部はナデが見られ、稜線より下、胴部から底面に至るまでヘラケズリによる器面調整を行っている。

次の３の土器は、破片の状態で検出され、第100図に示したものは復元実側によるものである。口径14cm、器高4.3cm、底面径７cmを計り、器厚は、底面部で0.7cm、口縁部で0.5cmである。器面の状態を見ると、ロクロによる器面調整が行われた痕跡があり、底面部にはヘラケズリ痕がある。これは、１・２からは時期的にもかなり新しくなる平安時代のものであろう。

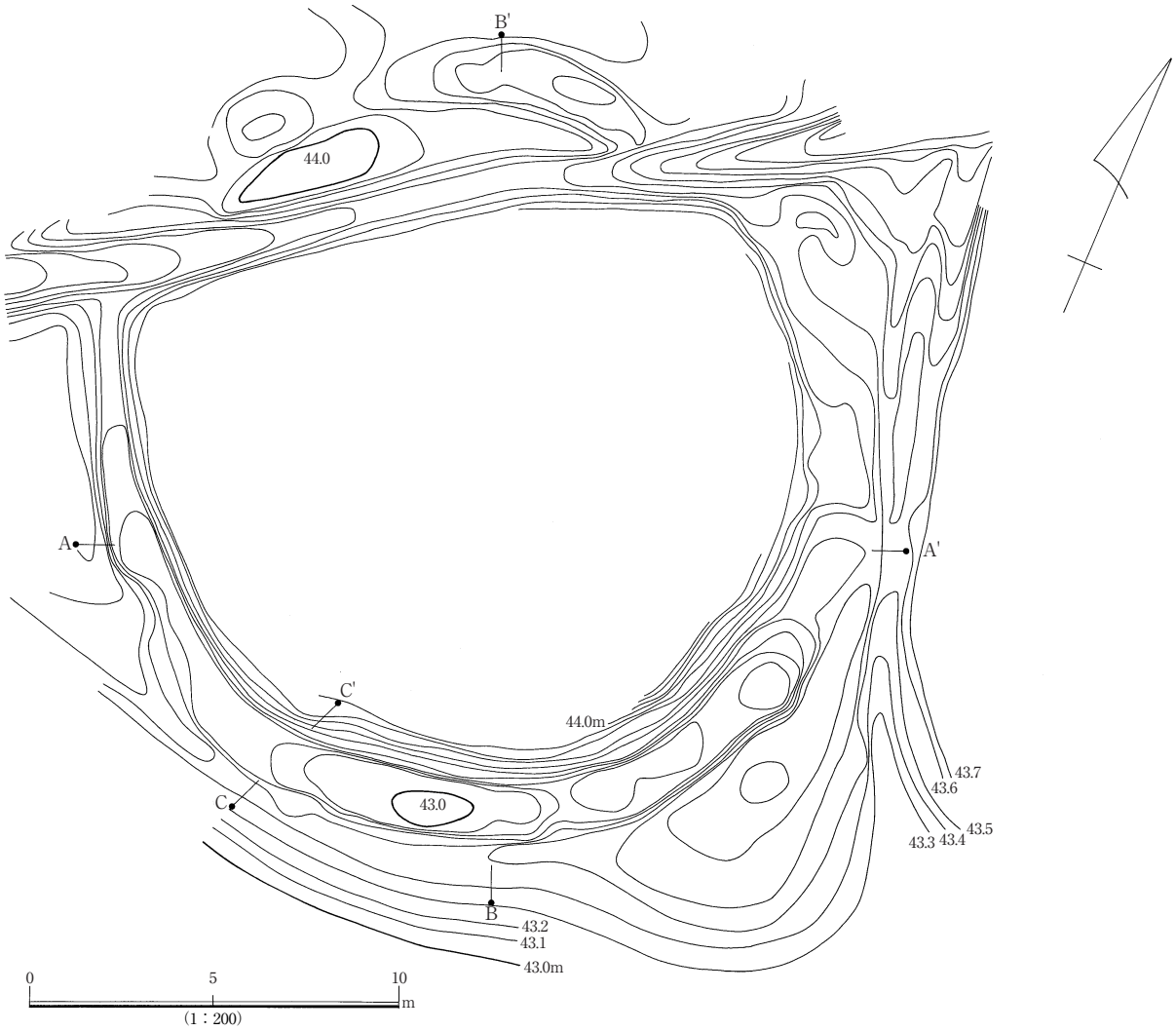
２号墳の出土遺物はこれら４点の杯形土器以外に形の判明するものがない。そのうえ、主体部が遺存しないため、そこからの遺物を判断材料にできないので、これら４点のうち周溝下部から出土した土器１・２をもって推定しなければならない。

本墳の群中での位置関係を見ると、後期末とした１号墳に先行することが明らかである。それに加えて、以上の周溝下層出土の模倣杯に、扁平で赤彩を失った特徴が認められるので、２号墳は後期後半の築造とするのが妥当である。





第90図　2 号墳平面図（完掘状況）



第91図　2号墳測量図（完掘状況）

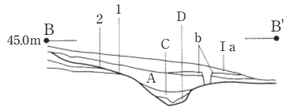
第5節　3号墳

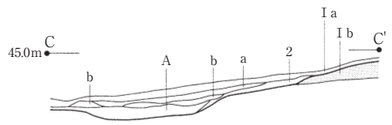
1　概要

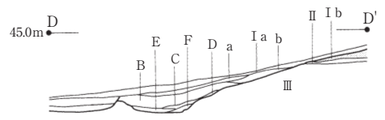
伐採後の時点で、高さ1.25mあまりの円形の地脹れが見られ、古墳であることが明瞭であった。発掘調査前の等高線は厳密に言えば円形でなく西側に僅かに張り出しているが、無理に張り出させなくとも等高線を引ける程度の平坦さであった。2号墳との間には道路があるが、これは当時、廃棄されているに等しく荒れはてていた。第3図上の明瞭な道路は、造成工事に伴う伐採工事の際、旧道を業者が整地したものである。なお、太平洋戦争後、開墾のために当台地にも鍬が入れられたといい、墳丘はこの時点で現状まで削平されたものと考えられる。

調査経過　当初は円墳として認識していたが、調査の進展に伴い、帆立貝形前方後円墳とも云うべき古墳であることが明確となった。周溝を全掘したものの、遺物の出土はほとんどなかった。また、発掘及び実測の一応の終了後、変則的古墳の可能性を考え、括れ部・南側後円部全体、北側後円部墳丘の内面前方部の両辺を延長した内面を精査したが、埋葬施設を確認することはできなかった。

位置　東に約2mで2号墳、西に1mで4号墳となる。既掘古墳中では中央に位置する。地形上は、舌状尾根の稜線上にあり、最高標高45.3mである。



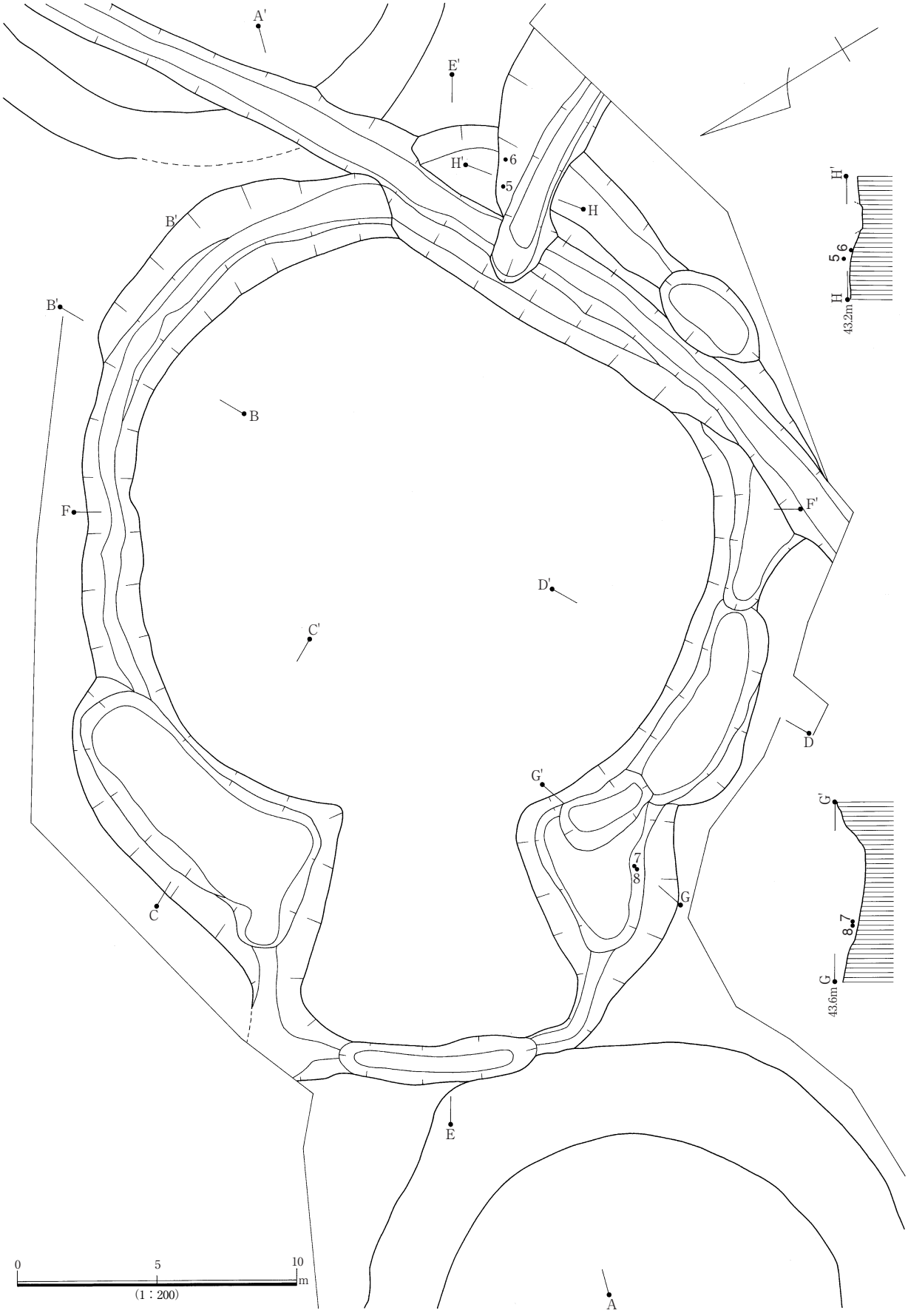




3号墳覆土
1：黒色土、墳丘盛土
2：茶褐色土、墳丘盛土
A：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
B：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層
C：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層、ローム粒含む
D：茶褐色土、周溝覆土、自然堆積層
E：ローム主体土、周溝覆土、自然堆積層
F　ローム主体土、周溝覆土、周溝掘込み時の撹拌層
a：黒褐色土、流入層
b：黒褐色土、流入層、ローム含む



第92図　3号墳測量図（表土除去前）・土層断面図



第93図　3号墳平面図（完掘状況）

遺存状況　発掘前にも痕跡程度に遺っていた道路は、現地表下約1.5ｍに埋没していた中世以降によく見られる堀割道路の跡である。道路は自然に堆積した部分が１ｍ弱ある。この時まで堀割道路として機能していたものであろう。しかし、地表下50㎝以高は非常に軟質で、短期間に埋没した可能性が強い。これは、人為的な結果であろう。また、現地表では道路幅も極端に縮小している。他に、それと略々直交して平野部に下る堀割がある。こちらは前者よりも30㎝程深いが同類と考える。

このように２条の堀割道路によって、古墳の後円部南東部が破壊されているものの、その近辺の周溝の原形を追うことは可能である。

これらの他に侵蝕による変形があるが、これを含めた変形作用を経た古墳の現状数値を示すと、以下の通りである。便宜上、ローム面での数値である。

中軸線長（＝全長）＝28.20（±0.8）m、後円部直径＝21.10（±0.5）m、前方部長＝7.9（±0.2）m、前方部最大幅9.9m、括れ部幅＝6.5m、後円部中心から前方部最前面までの最短距離＝18.3m。

なお、張り出し部西コーナーはともに隅円をなし、前辺も呼応して弧状をなす。これらから、築造時の整形が厳密な直線でなされていないことが窺われる。

墳丘と周溝　墳丘高は40㎝ほどの封土しか残存しておらず、旧状は未詳である。また、張り出し部には盛り土が残存していなかった。張り出し部のコーナーは厳密に言うと四半円形をなす。なお、この張り出し部の主軸（E－31°－S）は隣接する４号墳と２号墳を結んだ線上には乗らない。

周溝は括れ部周辺が極端に幅広となっている。この箇所は平坦で深さ約40㎝である。後円部北側の周溝は深いＵ字状をなし、溝底で幅員80㎝である。この部分の周溝は、幅員・深さ共にほぼ同程度であるが、狭まった箇所によって３ヶ所に区画でき、連続一様の溝でないことが明瞭である。他方、後円部南側周溝は平坦で逆台形をなす。溝底幅員1.6ｍで、やはり凹地と狭まった箇所があり、３区画となる。前方部前辺側の周溝は幅も狭く浅い。右辺コーナーはブリッジをなし、切れている。

築造状況　上記でも明白なように、溝形状はまちまちである。掘削を担った単位、あるいは工程上の単位を反映しているのかもしれない。

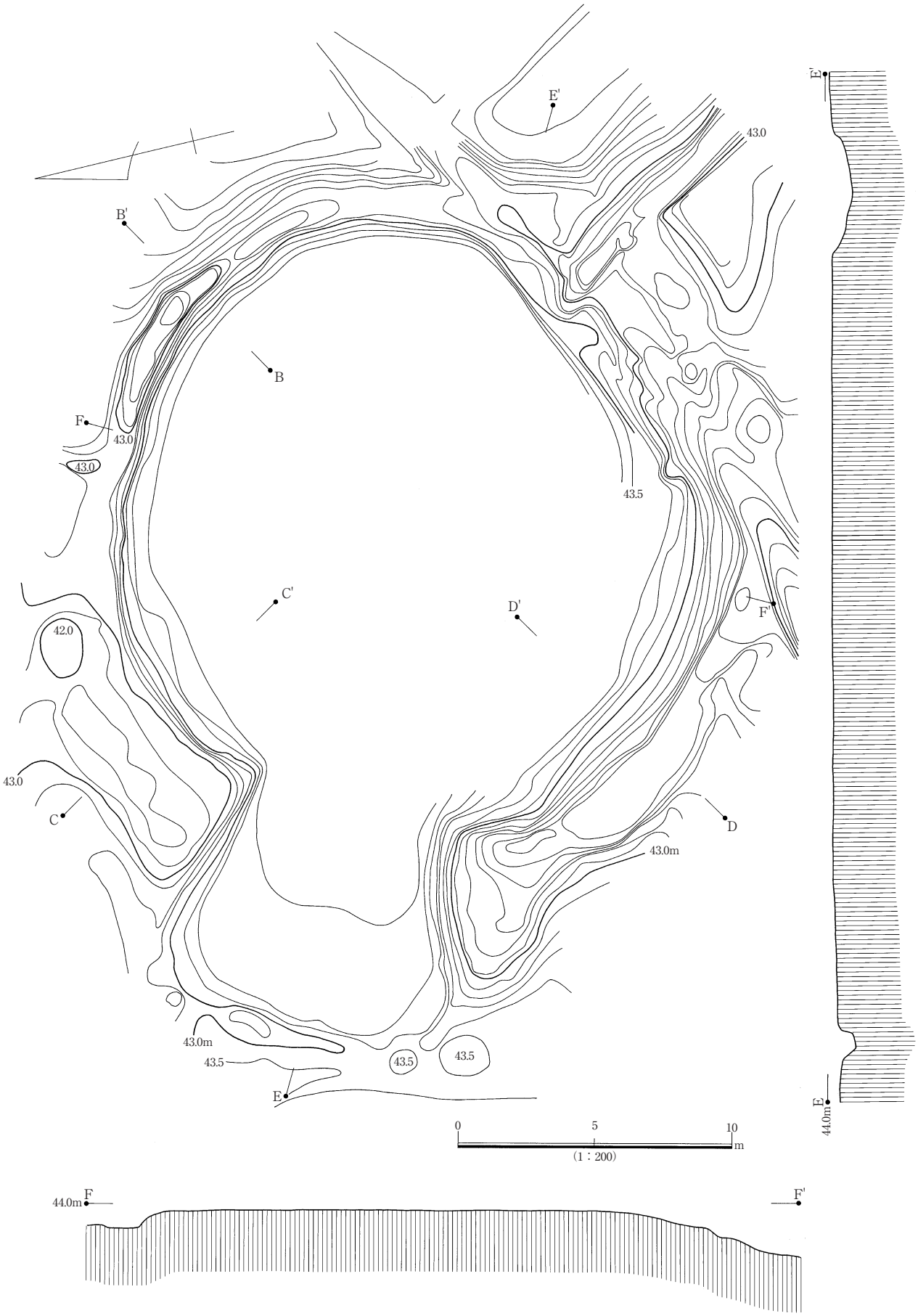
埋葬施設　墳頂部には検出できなかった。また、括れ部周辺・後円部南半の精査においても確認し得なかった。構築されていたとしても、墳丘上にあったために、盛土の流失・削平のために遺存しなかったものと考えられる。

遺物　土師器が数片出土している（第100図５～８）。５・６・７が杯、８が甕底部である。

５・７の杯は２号墳と近い時期のものと思われる。８は特徴が少ないが、ヘラケズリで仕上げられているので古墳時代後半の遺物であろう。

唯一、本墳の時期を示していそうなのは６の口縁外面が段状になる杯である。須恵器蓋を模倣した形状をしており、須恵器模倣土師器としては古相の後期初めの所産と見られる。

西に隣接する４号が古墳中期初めで、東の２号墳が１号墳に先行する後期後半の時期だと見られるので、破壊を伴わずに立地上挟まれる本墳は、時間的にもその中間の位置と考えられよう。そして、遺物では、須恵器模倣杯片６が型式的に後期初めと想定できるので、本墳の築造時期は、後期初めに近い後期の前半期にあるとしたい。



第94図　3 号墳測量図（完掘状況）

第6節　4号墳

1　概要

発掘調査に先立つ樹木伐採の結果、舌状台地先端部にも地脹れが認められたため、古墳の存否を明確にする事を目的として、発掘調査を実施した。この結果、円墳である事が明らかとなった。

調査経過　3号墳発掘調査の際に用いられた東西トレンチの延長線がそのまま、4号墳の墳頂部（地脹れ部の最高位置であり、古墳中心とは限らない）を通るため、これを利用した。3号墳との築造時期の前後関係等を把握する意味もあって、このトレンチを延長し、それに墳頂部で直交するように、さらに南北のトレンチを1本設定し作業を開始した。

この東西・南北2本のトレンチ精査の結果、古墳の周溝と思われる溝を検出し、大体の規模は明らかとなったが、この時点では古墳の形状が円墳か方墳かの区別はできなかった。その後、これを拡張する形で平面的に調査し、円墳である事が明らかとなった。

位置　5号墳（西側）と3号墳（東側）とに挟まれた地点に位置している。3号墳と5号墳とは非常に近接した状態を呈して築造された古墳で、特にその西側周溝部は一部、5号墳周溝の東側部と重複関係を持っている。

2　遺構と遺物

周溝はほとんど途切れることなく、一様に墳丘を囲むように見られたが、場所によって幅・深さ・断面形状等に相違が見られる。

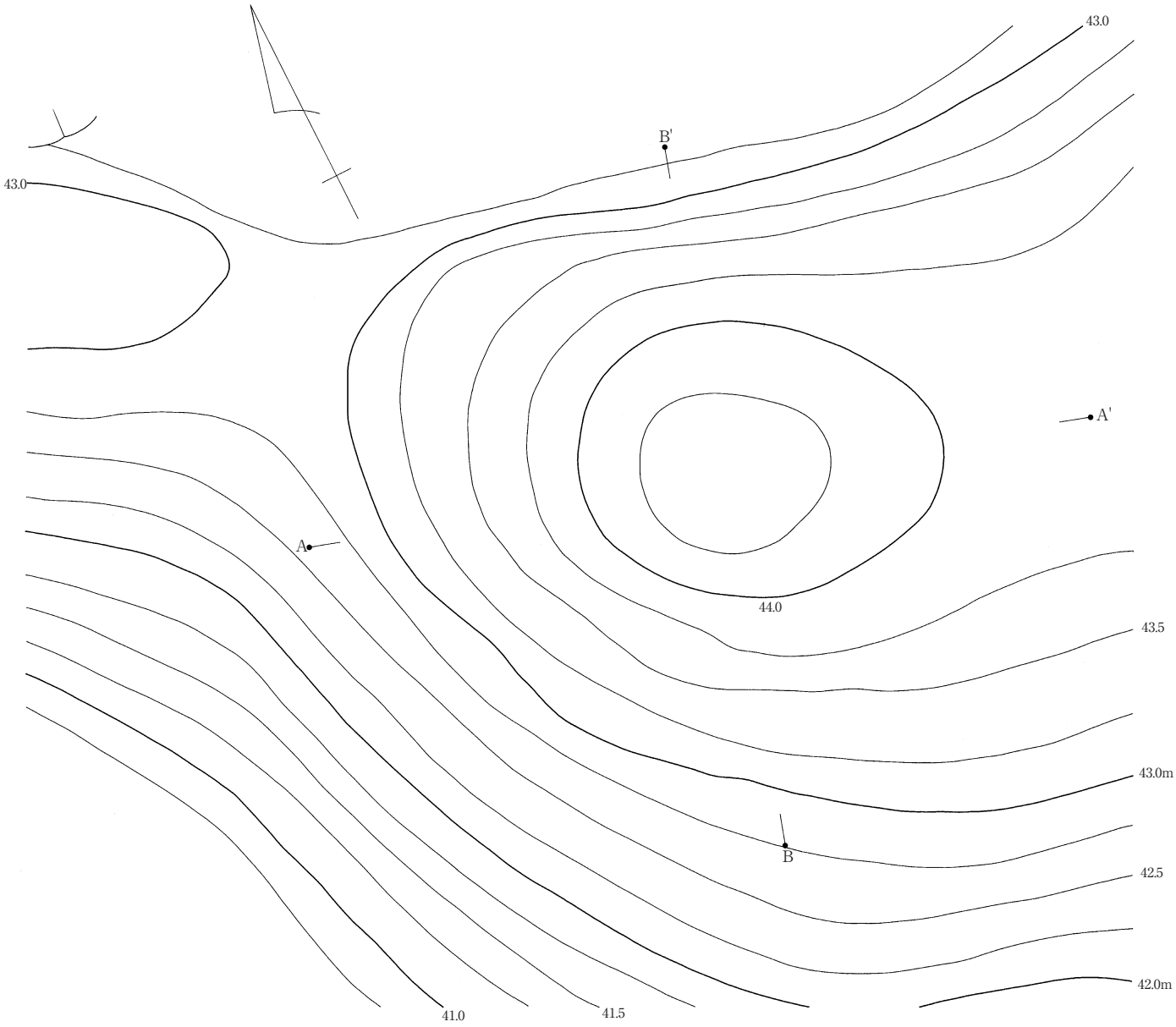
周溝　溝の状態が最も良く観察されるのは、東側周溝部である。その部分では、幅は、上部で2.5m程、底面部で1～1.5m、深さ0.75～1.8mを有している。溝の断面形は第95図A－A'に見るように、内側は非常になだらかな傾斜面をみせるが、外側は強い立ち上がりを見せており、溝を掘る際には、外周壁側のガイドを意識して行われたものと思われる。

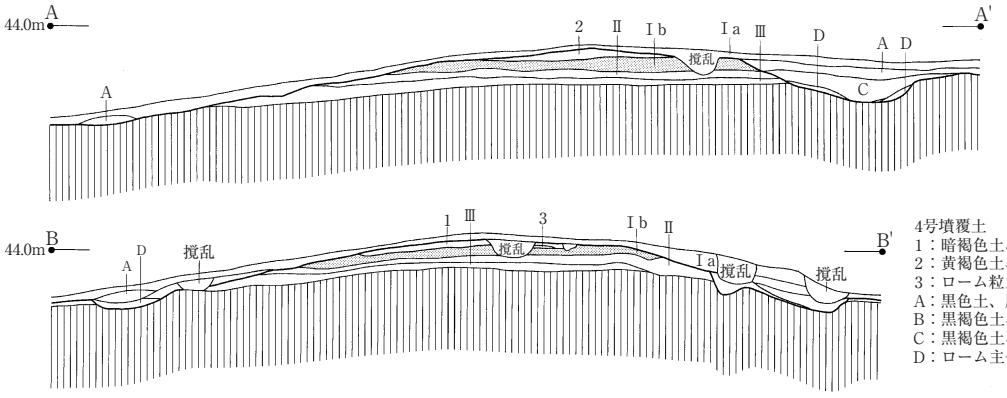
他の部分における溝の状態は、東側部のそれに比べて幅も狭く、また深さもあまりないので極めて簡単に掘られているように見える。特に、北側部は、わずかに溝状を呈するのみであり、外側壁は若干の立ち上がりを見せた後、自然地形上の傾斜面へと続いている。開墾により削平されたこともあるだろうが、やはり、地形上、自然的な変成作用による土の流失の影響が大きいためと考えられる。

溝内を充満している堆積土の状態は、東側溝部において顕著に認められる。堆積土層は少なく、溝を直接埋めているものは、C・Dの2層だけである。

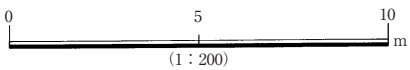
D層は、第1次堆積土として把握されるもので、ローム粒子を多量に混入しているため、黄色味が強くなっている。底面直上の壁寄りにレンズ状に堆積するもので、内壁・外壁面部共に10～20cmの厚さをもって見られる。このD層の真上にC層の堆積がある。D層が内外壁の立ち上がり部に薄く見られたのに比べ、C層は、溝をほぼ埋めつくすように見られるもので、自然堆積によるものならば、Dに比較して長時間にわたって堆積したと考えられる。厚さは、溝の中心部が最も厚く、60cm程を有し、この部分ではレンズ状に堆積した下面が溝の底面に接した状態となっている。また、D層がローム粒を多く混入していたのに比較して、黒色味が強く、黒褐色を呈している。

墳丘・封土　本墳も他の古墳（2・3・5号墳）同様、発掘調査を開始する以前は樹木の多く茂って





4号墳覆土
1：暗褐色土、墳丘盛土、ロームブロック混入
2：黄褐色土、墳丘盛土
3：ローム粒主体土、墳丘盛土
A：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
B：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層
C：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層、ローム粒含む
D：ローム主体土、周溝覆土、自然堆積層、周溝掘込み時の攪拌層



第95図　4号墳測量図（表土除去前）・土層断面図

いた所であり、木の根による撹乱は激しいものと思われていた。だが第95図の土層断面図に見るとおり、撹乱は少なかった。旧表土は10～30cmと薄いものであったが、盛土と見做される土層は１層のみしか残存していないことが分かった。これは平坦な黒色土上に20cm程積まれているものである。

本古墳群の位置する舌状台地上は、前述しているように、山林となる以前に畑地として開墾されたという。本来は高く盛土が残されていたのであろうが、その時点ですでに開墾を阻むほどの地形ではなくなっており、破壊が進んでいたものと思われる。

埋葬施設　周溝及び墳丘を全掘したが、主体部は検出されなかった。これは、前述したように盛土の遺存状況から考えて、流失・削平されたものと思われる。

遺物　主体部が確認されず、従って副葬品等の出土は見られなかったが、残された周溝内から第100図９～12に掲げた土器が発見されている。築造時期は、これらの土器が目安になるだろう。これら４点の土器のうち、11・12はいずれも溝底面より浮いた状態で検出されている。しかし、９・10は、いずれも南側溝底面に接し、また、距離的にも近接して出土しており、小型壺・高杯（用途は器台か）と形式においても揃うため、元々のセットであると見られる。

９・10は胎土及び製作技法的にも似た様相が窺われる。

９は高杯である。口縁部・脚部の一部が破損しているが、残された部分より形状は良く把握できる。大きさは、高さ9.6cm、口縁部径9.3cm、杯部との接合部で幅３cm、脚部の裾部で7.6cmである。また、器壁の厚さを見ると、口唇部は小型壺10と同様に尖っており、口唇部では0.7cm、脚部で1.2～0.5cmを計る。胎土・色調等は10と同様のものである。

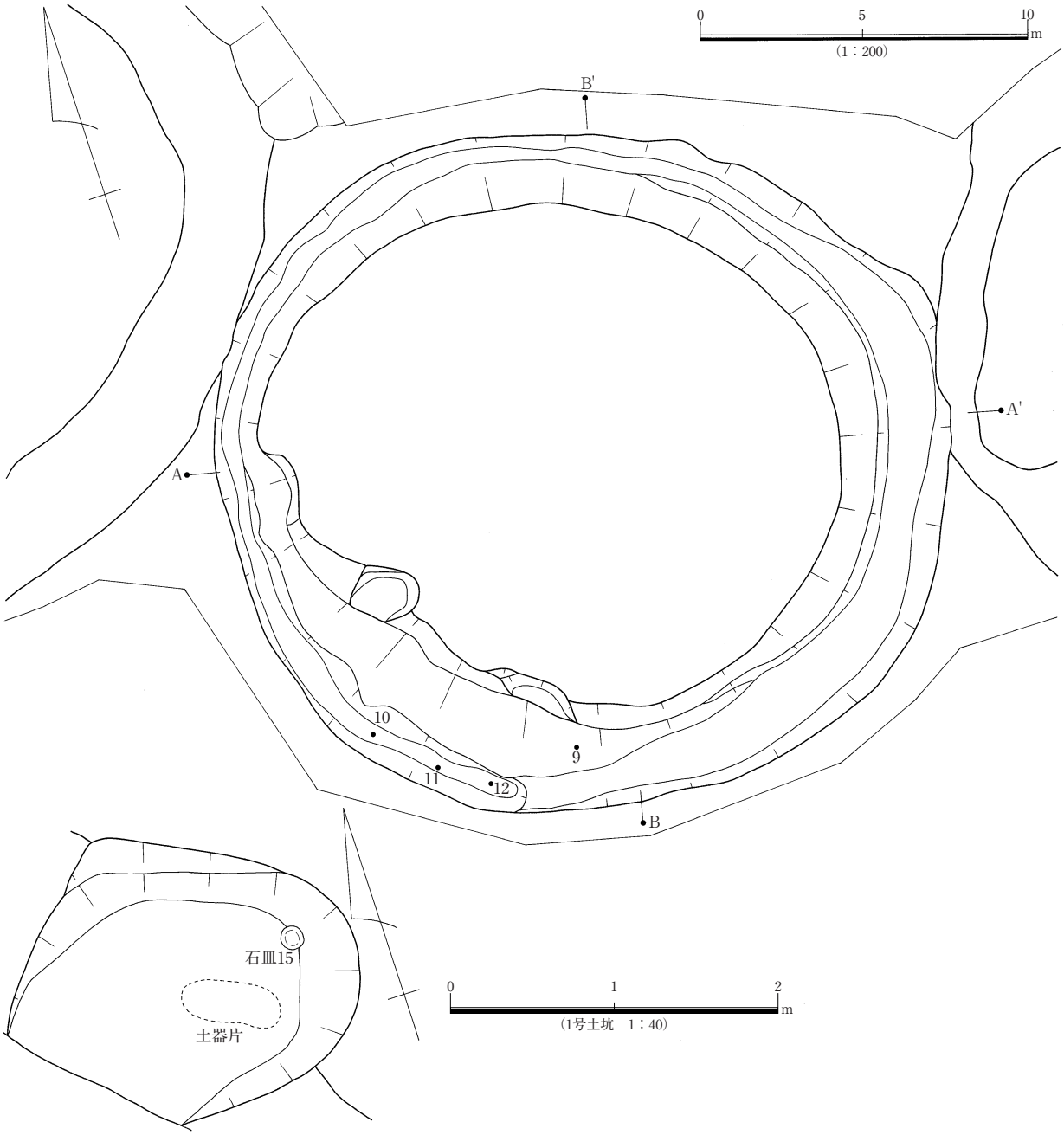
調整を見ると、まず、口縁部は、10の小型壺と同様に口唇直下より２cm程下部までヘラ状工具による整形痕が、幅１cm程縦方向にみられる。また、杯・脚部との接合部より下3.5cm程にかけて縦方向にヘラケズリの跡が見られる。内面においては、口縁部は横ナデ状の痕をわずかに残し、脚部は頂部に円錐形のヘラケズリがなされ、裾部内面にはナデが見られる。

10は、口縁部を一部欠損しているが、大部分遺存する小型壺である。胴部は丸みを持ち、頸部のくびれ部を経て外反する口縁部を持つ。大きさは、口縁部径8.5cm、高さ9.7cm、胴部の最大幅7.3cmを有する。口唇部は薄く尖るように作られ、以下頸部に至るまで徐々に厚くなり、頸部にある口縁部と胴部との接合部で0.6cmを計る。また、胴部は口縁部に比べて厚くなり、0.8cm程である。

外面は、口縁部においては口唇直下より頸部に至る縦位方向のヘラ状工具によると思われる整形痕が、0.6～0.7cm幅の単位で見られる。胴部は口縁部に比較して整形は粗いが、同じく縦方向に行われている。また、底部は丸底に近い平底となるが、底面にケズリ痕が見られる。

内面は、胴部において輪積あるいは巻き上げの接合痕が一部明瞭に残されており、その状態より粘土帯の幅は1.5cm程であった事が知られる。

11・12は、共に甕形である。いずれも口縁部及び他の部分を欠損したもので、図は復元実測によるものである。11は、現存部で高さ12cm、胴部の最大幅15cmを計る小形品である。厚さは1.5cm程で平均しているが、底部のみは若干の窪みを見せているため、胴部等に比較して薄くなる。頸部はくの字で、くびれに向かう斜位のハケメが見られる。また、胴部の調整は明瞭でないが、胴部中に混入する砂礫の移動方向より、左から右へ横位に工具の動く調整のなされた事が窺われる。また、胴部上位には接合痕が明瞭に認められる。

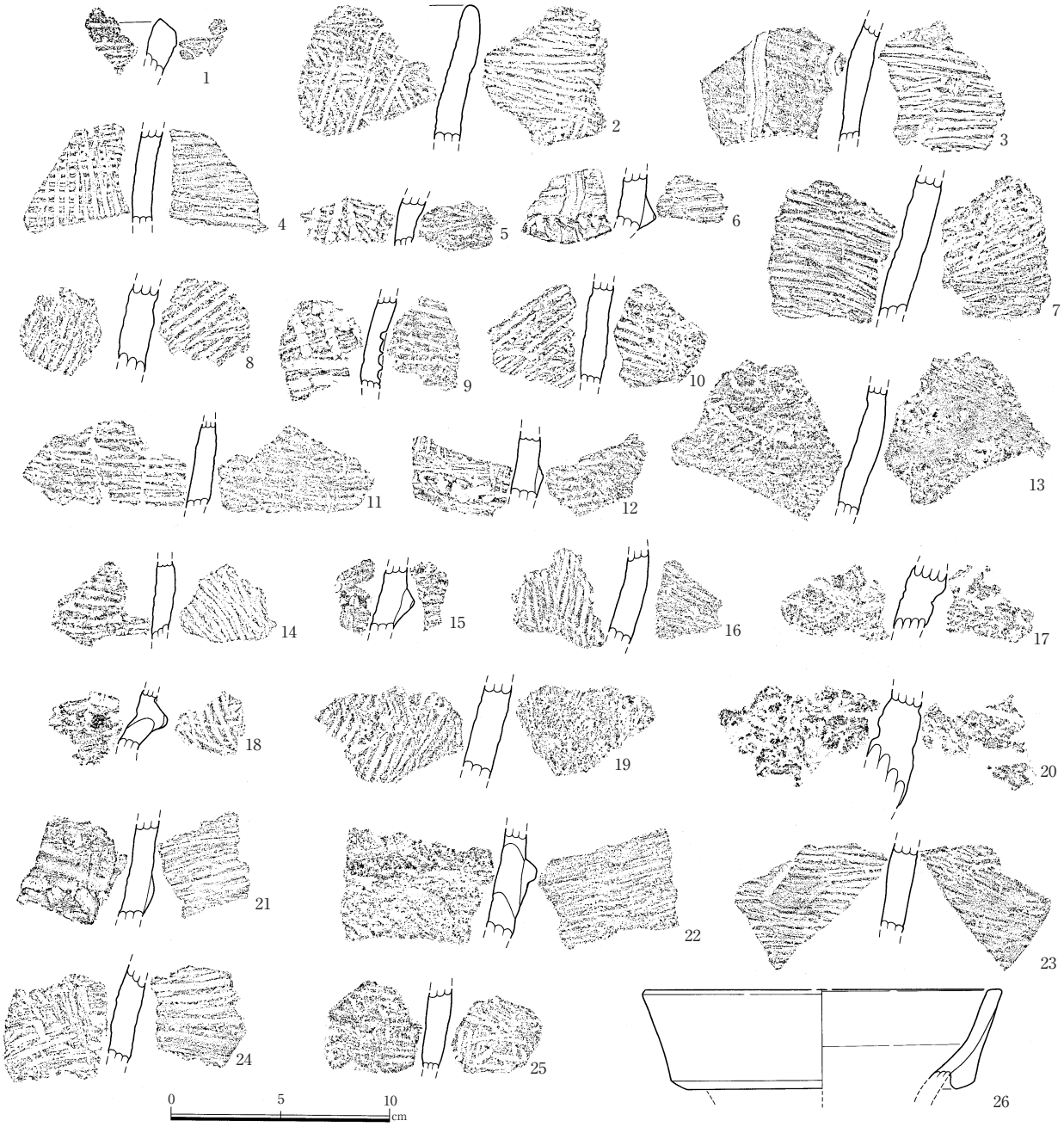


第96図　4号墳・1号土坑平面図

12は、現存部で高さ20cm、胴部最大幅で26cmを有する。器壁は胴部で0.6cmを測るが、底部に向かうにつれて厚くなり、底部で1.1cmある。また、底部は11とは異なり平坦である。外面には、底部より８cm程より上に横位・斜位のハケメが施されている。それらハケメは重複する部分が多く、明確に単位・幅を見る事が出来ない。以下、底部に至るまでハケメは見られないが、胎土中に混入する砂礫の移動方向が斜位方向に認められ、ヘラ状工具による調整が行われていたものと思われる。色調は黒褐色を呈している。

これらの土器は、古墳前期土師器の特徴を残存させるものの、特に９・10がすでに精製土器の性質を失っているように見受けられ、小型土器とはいえ中期に入る新しい様相を示すと言える。甕11・12もハケメを未だ備えており、中期としても前半と見られる。

本墳は、これに伴うと見られる９・10の土器から、古墳中期初め頃の築造と考えられる。



第97図　4 号墳内 1 号土坑出土遺物

第 7 節　1 号土坑

概要　4 号墳の南側周溝内墳丘側肩で検出された遺構である（第96図）。明瞭な焼土は認められなかったが、炉穴だと思われる。西側にある穴も、遺物の出土はないが、同様の遺構かもしれない。

遺物　遺物は縄紋土器片が少量出土しており、完形の石皿も見られた（第97・108図）。土器片はいずれも、早期後葉条痕文系土器後半に属するもので、貝殻条痕文が内外面に施されている。一部に、粘土紐による区画のある破片（12・15・18・21・22）が見られる。

他に、混入品で大廓式の壺口縁片（26）がある。隣接する 5 号墳の築造時期との関係を考えることも可能な資料である。なお、石皿は検出状況が不明で、本遺構の土器に伴うかは不明である。

第8節　5号墳

1　概要

調査のための樹木伐採後、当古墳の存在が推測された。しかし、あくまで可能性として発掘を行ったものである。本古墳は舌状尾根の先端に位置しているが、その先端から北西に降った斜面も通常の自然地形とは異なると考えることができ、もう1基の存在も示唆されていた。この推測のもとに、下る稜線と尾根先端を古墳と想定して、トレンチを設定した。

調査経過　トレンチの設定は米田と西田氏があたり、発掘調査は両人が日を別にして交互に担当した。

4号墳から東西トレンチを延長して本墳の第1トレンチとし、それと直交するものを第2トレンチとした。また、稜線の古墳の有無を確認するために、北方向に降るトレンチを設定した。

結果、尾根先端に第5号墳を認知し、先の稜線上には古墳が存在しないことを確認した。

位置　尾根の先端に位置し、南東辺を除き他周は傾斜面となる。群中では西端にあたり、4号墳と密接する。築造時期は、西側周溝に土師器が出土しており、溝底密着の出土状況から、この土器の時期とほぼ一致するものと考える。東側周溝からは、須恵器が出土したが、溝底上1ｍあまりでの出土で、形状からも本墳に伴う遺物とは考えられない。

2　遺構と遺物

発掘前、4号墳の西側墳裾と見做し得るあたりから、尾根先に向かって30ｍあまりの地脹れを認めた。4号墳周溝（この時点では未発掘）掘削によって残存独立した丘尾の可能性も考えたが、古墳を想定することがより適当であった。また、北東斜面には地滑りの跡が認められた。

墳丘と周溝　北斜面の地滑りによって、その位置の周溝も崩壊していた。しかし、周溝底はこの崩壊地の左右で、方墳に近似した屈折を示すため、本来の周溝もこの地では直線に近い形状を示していた可能性がある。この対辺では墳裾・掘り込み部ともに不明確になる。第99図破線は、僅かに傾斜の変化を示している部分で、外堤にあたるものは確認不能である。

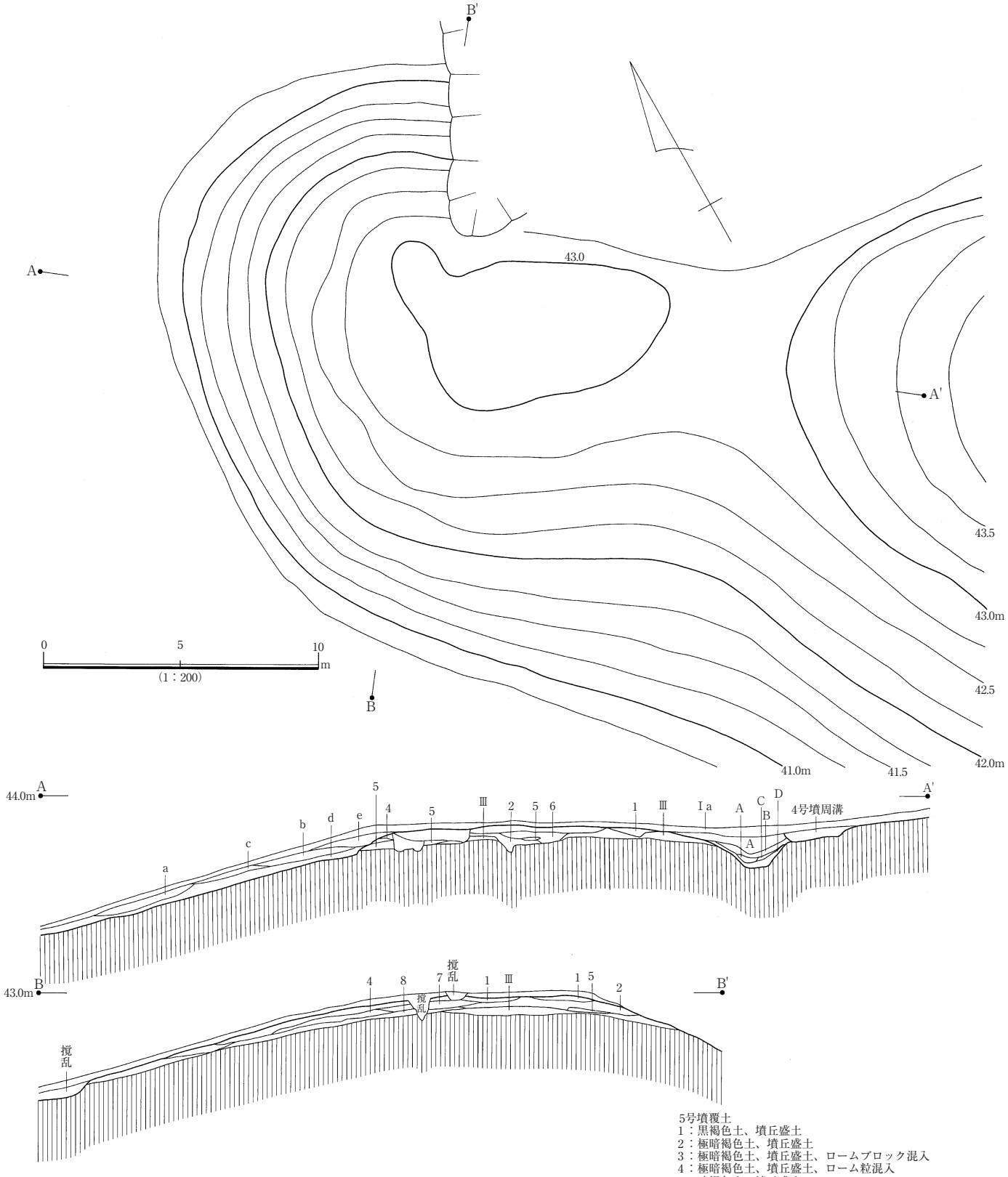
南東部周溝と北西部周溝は中程では直線的形状をなすが概ね弧状である。ローム面でとらえる墳丘の現状値は最大径で20.5ｍである。残存封土はまったく無い。

4号墳と接する南東側も遺存が良いとは言えないが、本区画に認められる弧状の掘方を根拠に、墳形はほぼ円形と見なせる。ただ、南西側を除き他の3辺に通じて溝と墳裾の一部に直線的形状が見られるのも事実であり、そのまま円墳と確定するのは難しい。

しかし、北東側については、地滑りで直線的に崩壊したと見られるので、墳形の判断材料にはならないと言える。また、他辺も基本的にはカーブしており、積極的に方墳であるとする根拠にはならない。よって、隅丸方形の可能性がある円墳としておきたい。

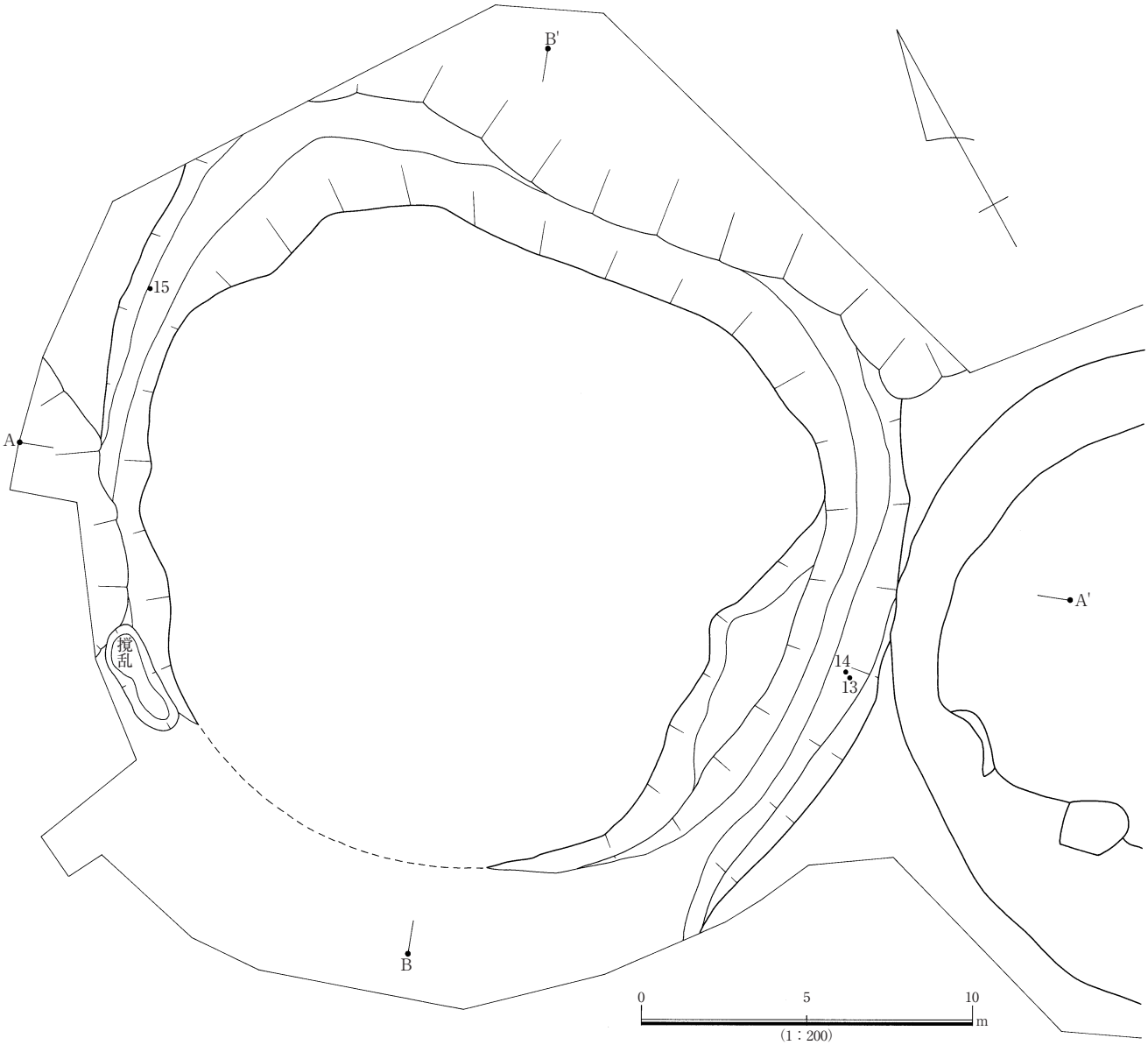
遺物　完形の須恵器13と土師器片14・15が出土している。13の杯蓋は、周溝最上層で検出された混入品である。14・15とも一括取り上げ遺物であるが、前者の杯の破片は本墳には伴わないと思われる。

本墳は群中最西端の位置にあり、尾根上の群の始発に築造されたと推察できる。隣接する4号墳が古墳中期初めと見なせるので、それ以前の所産であると見るのが妥当であろう。15のヘラミガキの施される土師器壺片は、古墳前期に属すると考えられるので、これが築造時期に近い唯一の遺物となる。



5号墳覆土
1：黒褐色土、墳丘盛土
2：極暗褐色土、墳丘盛土
3：極暗褐色土、墳丘盛土、ロームブロック混入
4：極暗褐色土、墳丘盛土、ローム粒混入
5：暗褐色土、墳丘盛土
6：明褐色土、墳丘盛土
7：明褐色土、墳丘盛土、ローム粒混入
8：ローム主体土、古墳以前の旧表土、Ⅲ層が流出したもの
A：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
B：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層、ローム粒含む
C：ローム主体土、周溝覆土、自然堆積層
D：ローム主体土、周溝覆土、自然堆積層、周溝掘込み時の攪拌層
a：黒褐色土、墳丘流出土
b：極暗褐色土、墳丘流出土
c：暗褐色土、墳丘流出土
d：茶褐色土、墳丘流出土
e：明褐色土、墳丘流出土

第98図　5号墳測量図（表土除去前）



第99図　5号墳平面図（完掘状況）

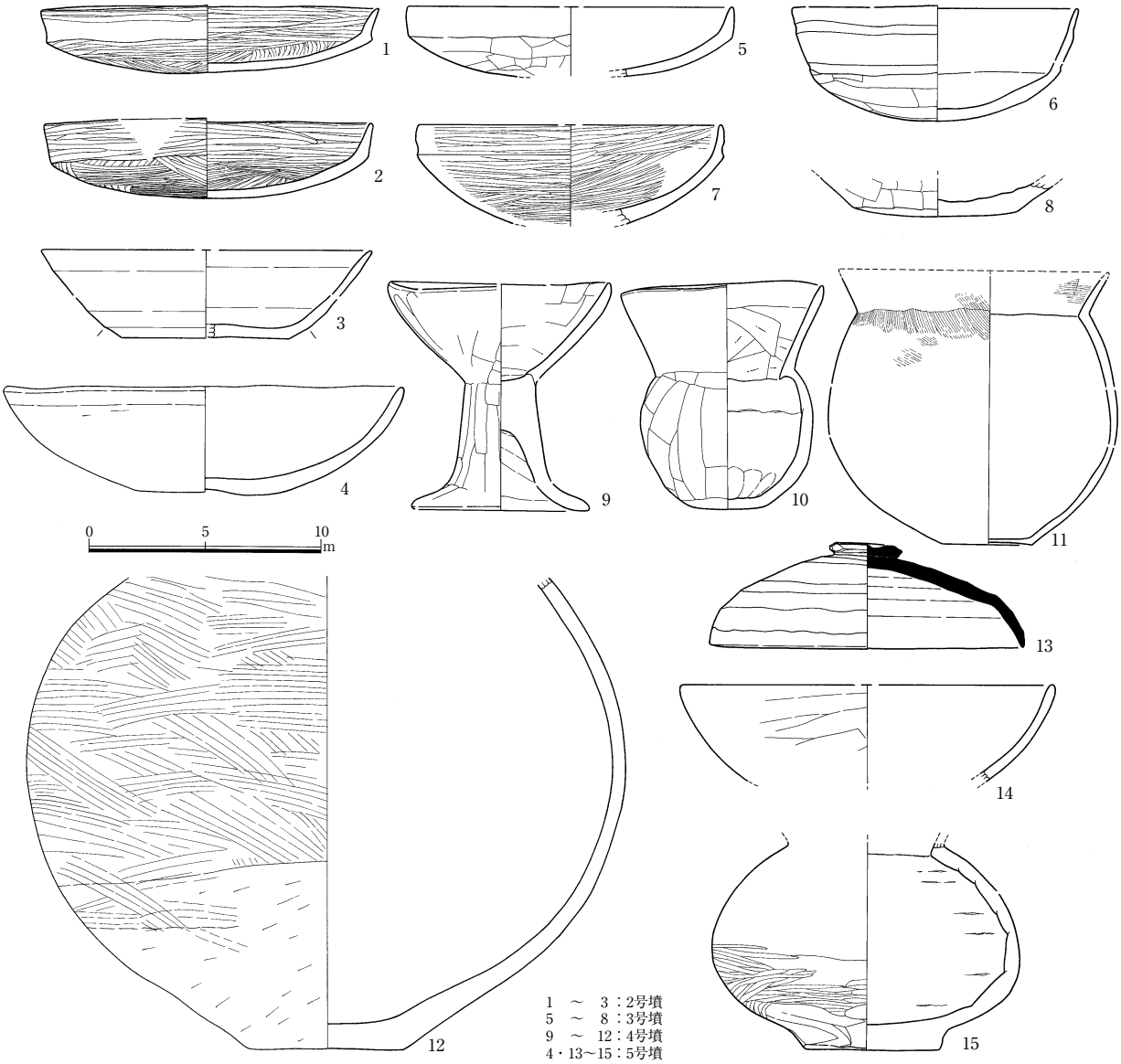
第9節　6号墳

1　概要

調査経過　調査前における墳丘は南北14m、東西12mの規模を有していたが、墳丘裾部における後世の改変が著しく、東側を除いてはほとんど原形を保っていない。したがって、墳丘測量の結果が即、墳形を示すものとは想定していなかった。

調査は、南北辺に直交させてトレンチを設定し、墳丘における表土層の除去をおこない原形の検出につとめた。現状における墳丘盛土部の規模は南北約10.8m、東西約9.8mを測り、各辺に1.8m～2.0mのテラス状の部分があることを確認し、範囲を全面に拡張した。

位置　第2図のとおり、本墳のみは1号墳の北約100mの位置にやや離れて存在し、群の中でもやや特異な位置を占めている。これは帰属時期と関係するのかもしれない。



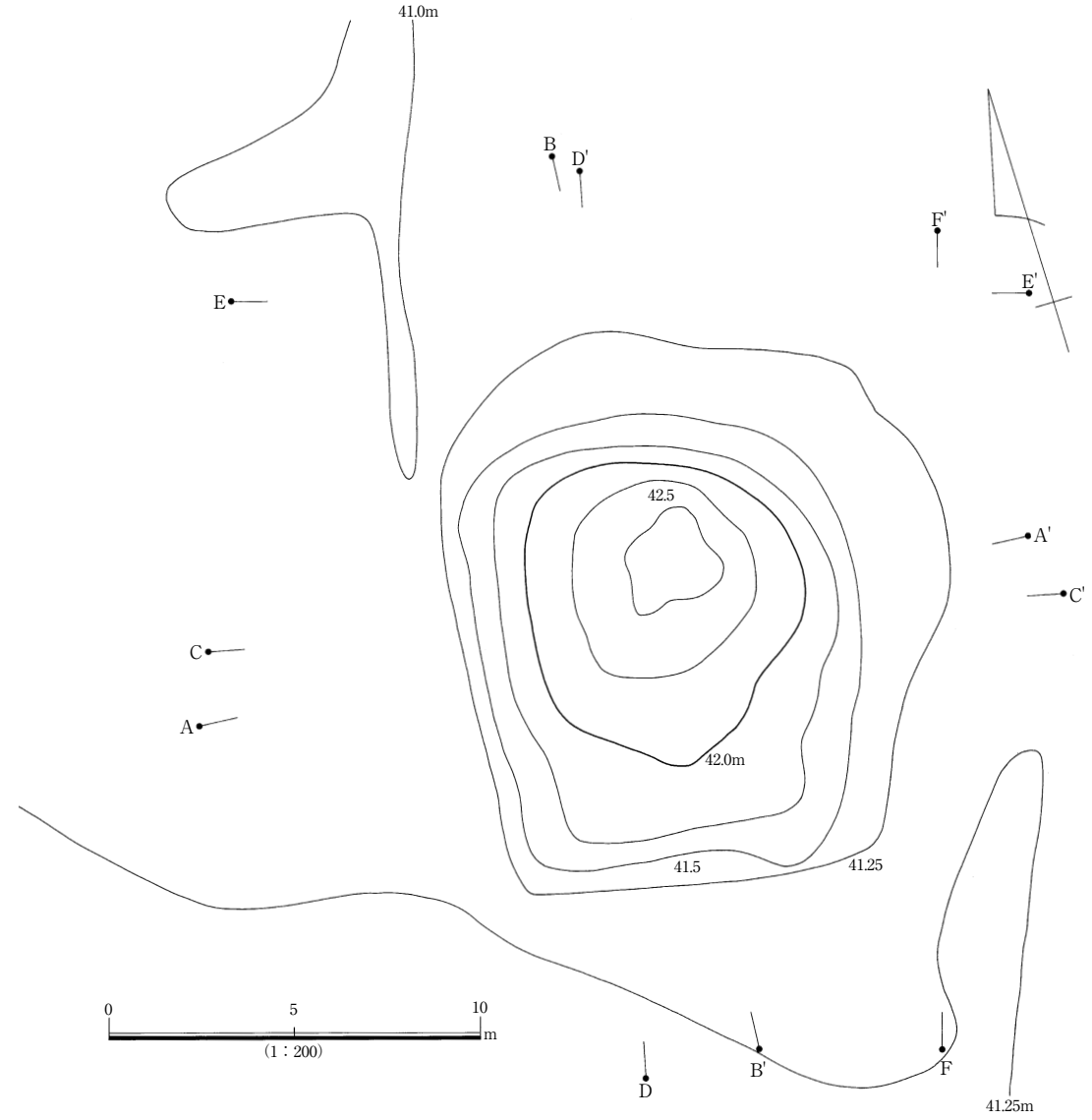
第100図　2・3・4・5号墳出土遺物実測図

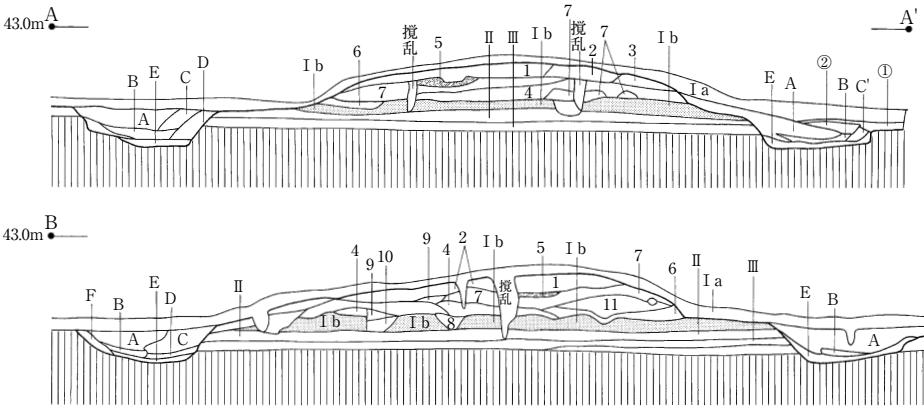
2　遺構と遺物

墳丘　封土は表土層を含めて1.3m認められる。南北トレンチでの観察によると、封土構築過程は、墳丘の南側でまず旧地表の黒色土を盛り、その上に暗褐色土＋ロームブロック土を南側から北に移動しながら盛土し、次に逆に北側から南へと盛土を行っているというものである。

この北側から盛土した第2層目のロームブロック混入暗褐色土層が内部施設のベースになっている。全体的には、まず墳丘裾部を高く盛り、その後に中央部を主体とした盛土をおこなっている。なお、墳丘構築以前における旧地表にはかなり凸凹が見られる。

一方、東西トレンチでは東側よりロームブロック混入の暗褐色土層を盛り、その上に暗褐色土混入ロームブロック土を盛りあげ、この層をベースとして内部施設が設置されている。棺の置かれた下の層は暗褐色土混入ロームブロックのやや固く締まった層をベースとしているが、この層が木棺を設置する際の掘り込み土壙の底面を示すものかどうか不明である。内部施設の上は暗褐色土＋ロームブロック土層で覆われている。





6号墳覆土
1：暗褐色土、墳丘盛土、ロームブロック混じる
2：ロームブロック主体層、墳丘盛土、ソフトローム混じる
3：黒褐色土、墳丘盛土、ソフトローム混じる
4：暗褐色土、墳丘盛土、ロームブロック混じる
5：ロームブロック主体層、主体部裏込め層
6：褐色土、墳丘盛土
7：ロームブロック主体層、墳丘盛土、暗褐色土混じる
8：暗褐色土、ロームブロック混じる
9：暗褐色土、ローム粒混じる
10：暗褐色土
11：ロームブロック主体層、墳丘盛土、暗褐色土混じる
A：黒褐色土、周溝覆土、自然堆積層
B：黒色土、周溝覆土、自然堆積層
C：黒褐色土、周溝覆土、墳丘流入層、ローム粒含む
C'：暗褐色土
D：暗褐色土、周溝覆土、墳丘流入層、ローム粒含む
E：ロームブロック主体層、周溝造成時の攪乱層
①：暗褐色土、硬化層、近世以降路面に使用
②：暗褐色土、ローム粒含む、近世以降の道路覆土

第101図　6号墳測量図（表面除去前）・土層断面図

本墳の墳丘下層と周構内から、築造以前の竪穴住居跡２棟が検出された。そこには、いずれも旧地表面まで完全に埋まった後に、墳丘が構築されている堆積状況が窺われた。

周溝　周溝は墳丘裾部がほぼ原形を保っていると思われる東側で、裾部より約1.8m幅の平坦面をおいて周溝の掘り込みがおこなわれている。これは、北および西側においては後世の改変が認められるが、東側同様1.8m～2.0m幅のテラスを有し、現状墳丘裾部の４辺を囲っていたものと思われる。なお、北東隅だけは、掘り残されたように浅くなっている。

周溝は内側において直線的に掘り込まれ、北辺14.6m、南辺13.0m、西辺15.0m、東辺14.8mを測り、北辺がやや長い方台部を呈する。周溝内側がほぼ直線的に掘り込まれているのに対し、外側は全体的に丸味を帯びている。これは内側を基準にして周溝形が決定された可能性を強くするものである。

周溝規模は各辺の中央付近において最大幅をもち、広いところで3.5m、深い部分で旧地表面より1.4mを測る。逆に最小幅は各隅にあり、幅1.7m、深さは旧地表より0.7mである。南東隅のみが深く、幅広いのは周溝内埋葬施設の存在によるものと考えられる。

周溝内の土層は最下層がロームブロック＋暗褐色土、その上層がローム粒混じりの黒色土ないしは黒褐色土と腐植土でほぼ近似した堆積状態を示している。周溝内には恒常的に水が溜まっていた形跡は認められなかった。埋葬施設が掘り込まれるのに支障がない程度に乾いていたはずである。

埋葬施設　内部施設は墳丘内に１基、周溝内に２基の計３基が検出されている。

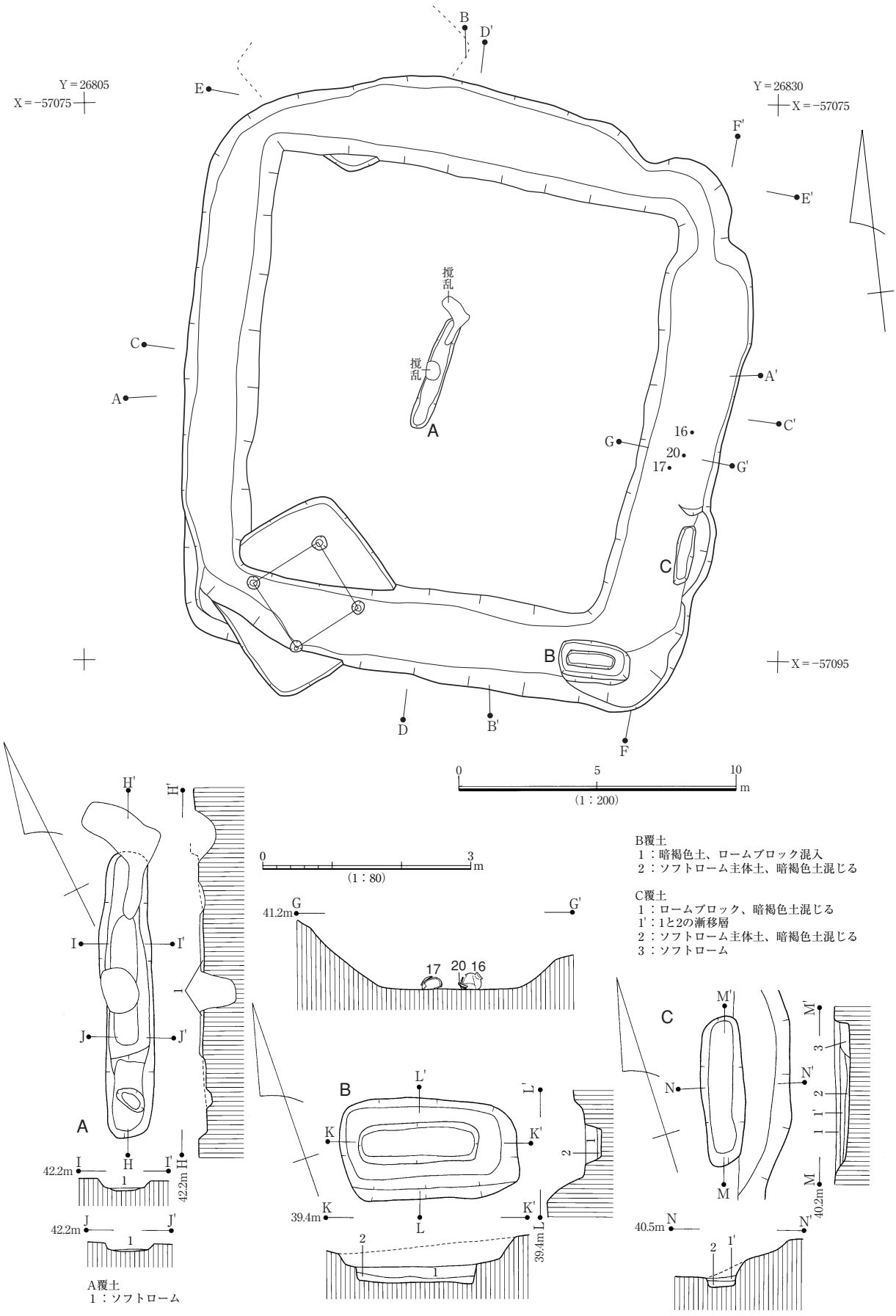
A　墳丘のほぼ中央部に主軸を北北東に向けて設置されたもので木棺直葬の埋葬施設と思われる。この施設は盛土工程における第２層目の暗褐色土混入ロームブロック層をベースにして設置されたもので、旧地表より約50㎝上位である。規模は長軸4.2m、短軸0.7m、深さは検出面より約10㎝を測る。底面に1.5m×0.17mの範囲にソフトローム単純土層が約５㎝の厚さで敷かれていた。こうした手法は他の古墳においても認められるもので、副葬品はこの土層の中ないしは上面より検出されるのが通例であるが、本墳では検出することが出来なかった。壙内の充満土はロームブロックの混入した暗褐色土層で、内部施設のベースになる土層より暗褐色土の含有量が多い。木棺を設置するための掘り込み土壙は検出することは出来なかった。最初から土壙を掘り込まなかったのか、ベースになる層と同じ土層を埋め込んだため検出できなかったのかは、粘土の使用が全く認められないため不明であった。墳丘東西セクション図で見られる木棺痕跡下の土層は部分的に見られるもので、木棺下に全体的に見られるものではない。

B　周溝南東隅の南側辺に周溝底面を掘り込んで設置されたものである。規模は長軸2.6m、短軸1.6mの土壙を掘り込んで、その内部に長軸1.7m、短軸0.7mの掘り込みをもつものである。

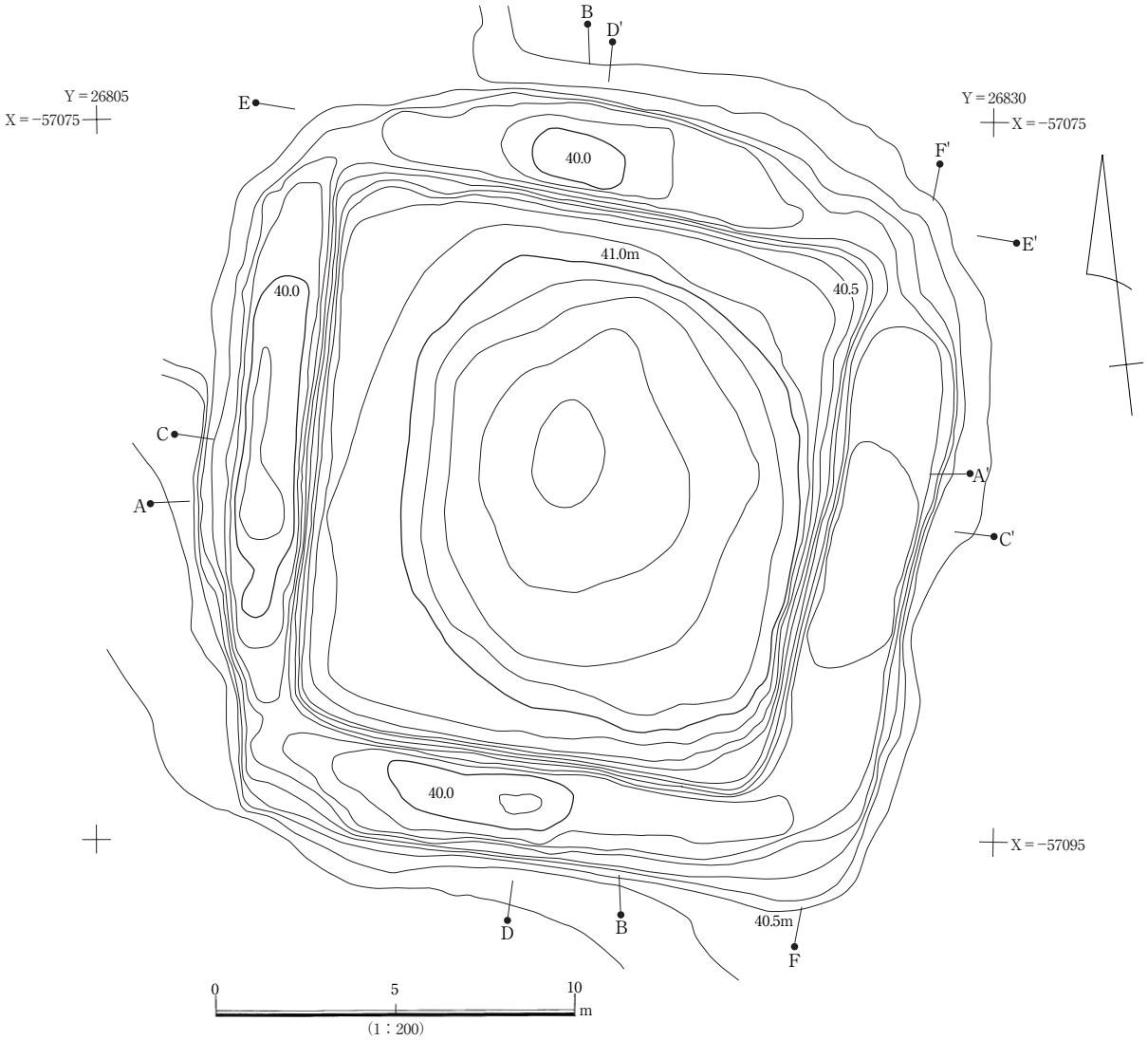
覆土はロームブロック混入の黒褐色土層で、明らかに埋め込まれた土層である。この土壙内の土層は周溝底面とほぼ水平位まで埋め込まれていたもので、その上層に堆積した土層は周溝内と同一の流土であった。従ってこの土壙は周溝の掘削後、かつ、周溝内に土が流入する以前に設置されたものである。古墳築造の契機となったと考えられる墳丘上の埋葬施設構築から、さほど期間をおかずに形成されたものと思われる。判別可能な出土遺物はなかった。

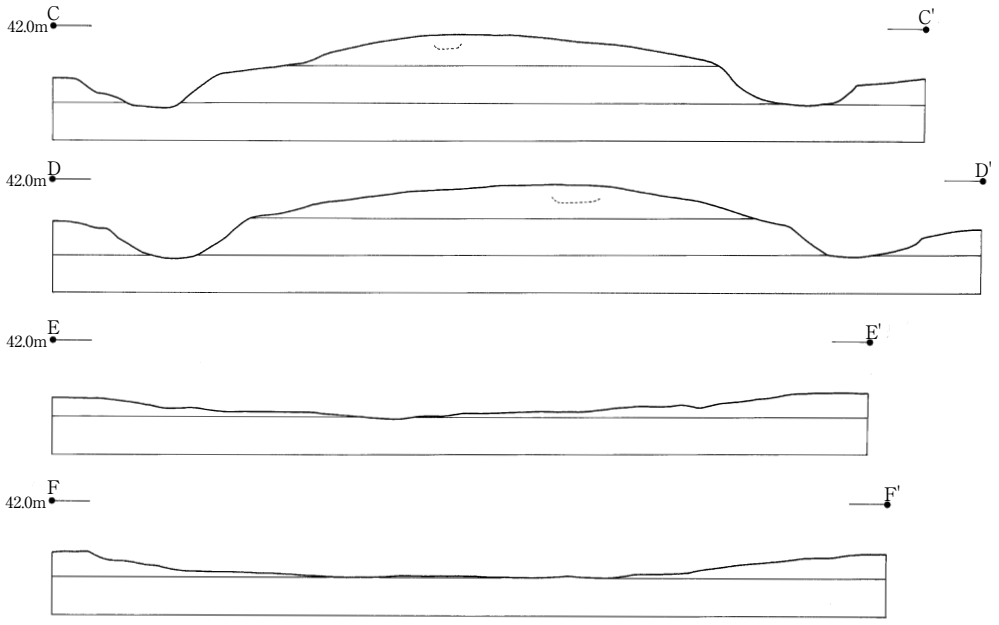
C　東側周溝の外側壁に接して軸を揃えて設置されたものである。周溝外堤が隅丸長方形の土坑を避けるように掘り込まれているので、同じく周溝内に検出されたＢと同様の形状を持つと思われる。

長軸2.3m、短軸0.6m、深さは周溝底面より0.3mを測る。覆土はＢと同じロームブロックの混入

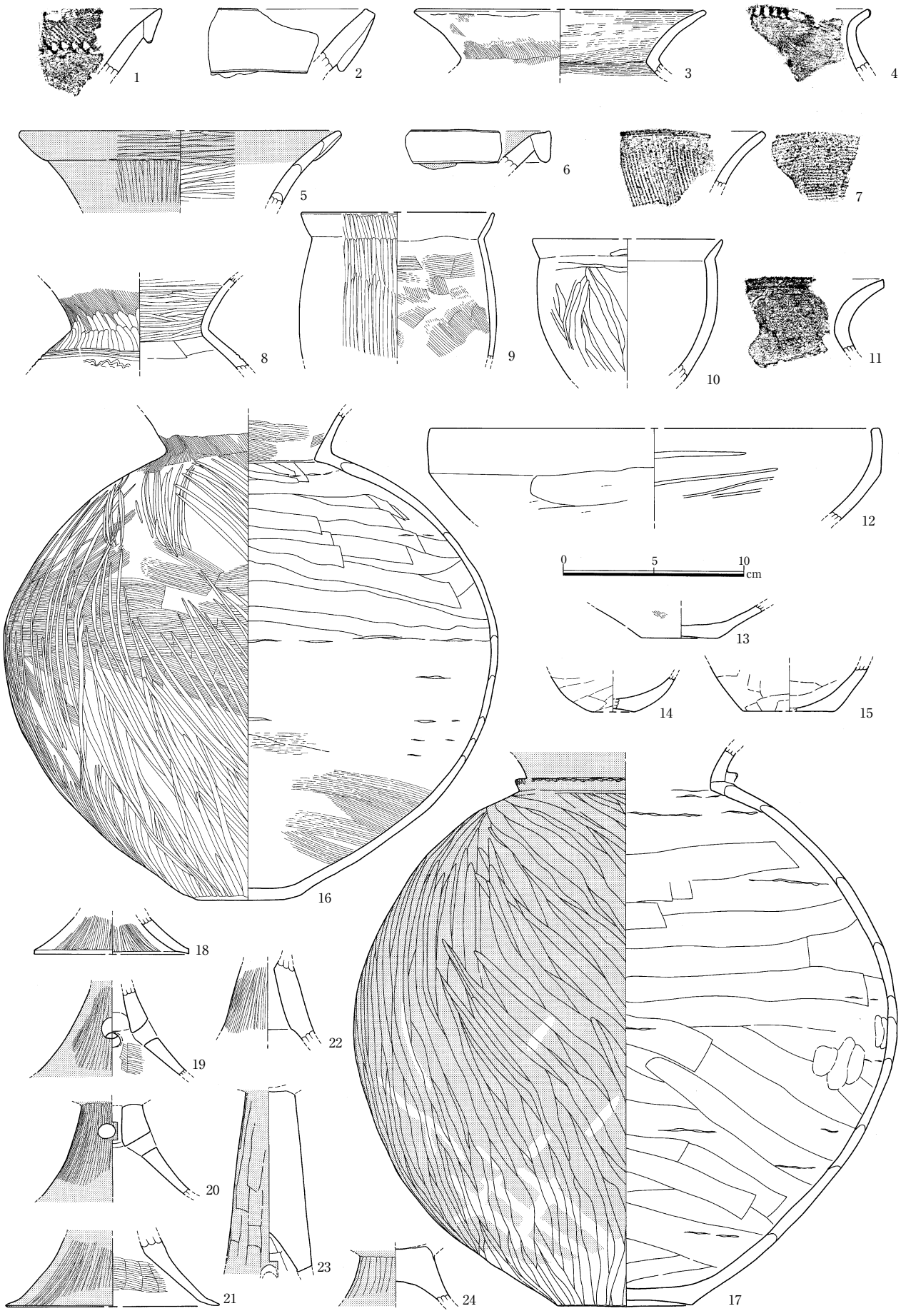


第102図　6 号墳平面図（完掘状況）





第103図　6号墳測量図（表土除去後）・エレベーション図



第104図　6 号墳出土遺物実測図

した黒褐色土である。これも、やはり人為的に埋められた土層と見受けられ、周溝内に土層が充満した後に掘り込まれたものではない可能性もある。なお、土壙内からの出土遺物は皆無であった。

Cの遺存状態が悪いのは、ある程度埋積が進んだ周溝上面から掘り込んでいたために、調査時に西半分の掘方を見逃したためかもしれない。東側が周溝東辺を歪めていることもそれを示唆している。

遺物　本墳に伴う遺物の他に、下層の竪穴住居跡と関係する土器などが得られている（第104図、図版112)。12が縄紋土器、4が弥生土器甕、6が弥生土器壺、3・7・13が土師器甕、1・2・5・6・8・9・11・16・17が土師器壺、14・15が土師器小型土器で14は壺、18から24が土師器高杯である。

築造時期を示すと考えられる遺物には、東側周溝内より検出された古墳前期の土師器がある（16・17・20)。いずれも周溝のほぼ中央部底面に密着した状態で検出されている。出土位置は埋葬施設Cに近いが、周溝底面に接して置かれた点を根拠に、本墳築造当初の供献土器とするのが妥当である。

壺16　以下の2個体とともに東側周溝部中央で周溝底に密着した状態でまとまって出土した。口縁部をわずかに欠損するだけで全体が復元できる遺存状態である。胴部はほぼ旧状に近く、器高現存で26.0cm、胴部最大径27.3cm、底部径4.9cm、頸部径8.6cmを測る。胴部には数段の接合痕が認められる。

外面はハケメの後にヘラミガキで仕上げられる。内面は下半ハケメが施された後ナデ、上位は横・斜め方向のヘラナデである。口縁部は横ナデである。胎土には若干砂礫を含み、焼成は良好である。

壺17　口縁部を除いて復元可能である。5に赤彩のある口縁部片があるが、同一個体かは確定できない。現存高30.5cm、胴部最大径29.9cm、底径7.5cmを測る。胴部はほぼ球形に近い形態を呈する。頸部に稜のある断面三角形の凸帯を有し、稜にヘラ状工具による刻み目が巡らされる。

胴部には割れ目と接合痕が所々に残り成形の単位が示されている。頸部の凸帯は貼り付けである。調整は外面ヘラケズリ後、丁寧なヘラミガキ、底部および底部付近はヘラケズリである。内面は胴部横方向のヘラナデ、口縁部が指頭によるナデである。底部を除いた外面全体と口縁部内側に赤彩が施され、横・斜め・縦方向の赤彩時の工具の動きが見られる。胎土には若干の雲母と砂粒が認められ、焼成は堅緻である。なお、下位には格子状に赤彩の剥げている箇所の認められることが注目される。剝落が規則的に見られるので、これは被籠痕と考えられる。もし、このような日常的な使用痕跡が認められるならば、墳墓での使用に際して特別に製作された土製品ではなかったことが想定できるだろう。

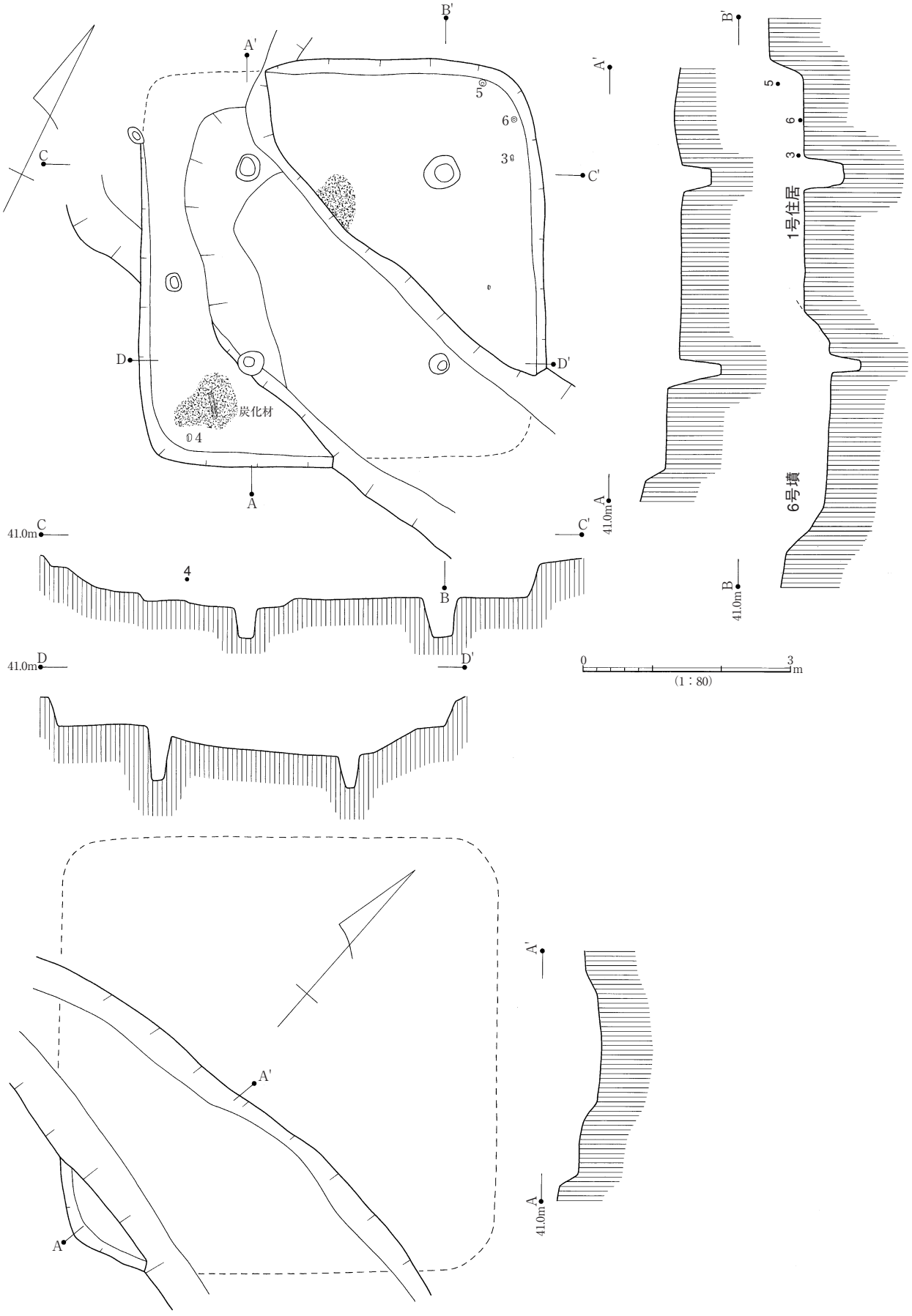
高杯20　赤彩と縦方向のヘラミガキで仕上げられる中空の高杯脚部である。遺存量は壺に比べて少なく、完形に復元するには破片がまったく足りない。

第10節　1号住居跡・2号住居跡

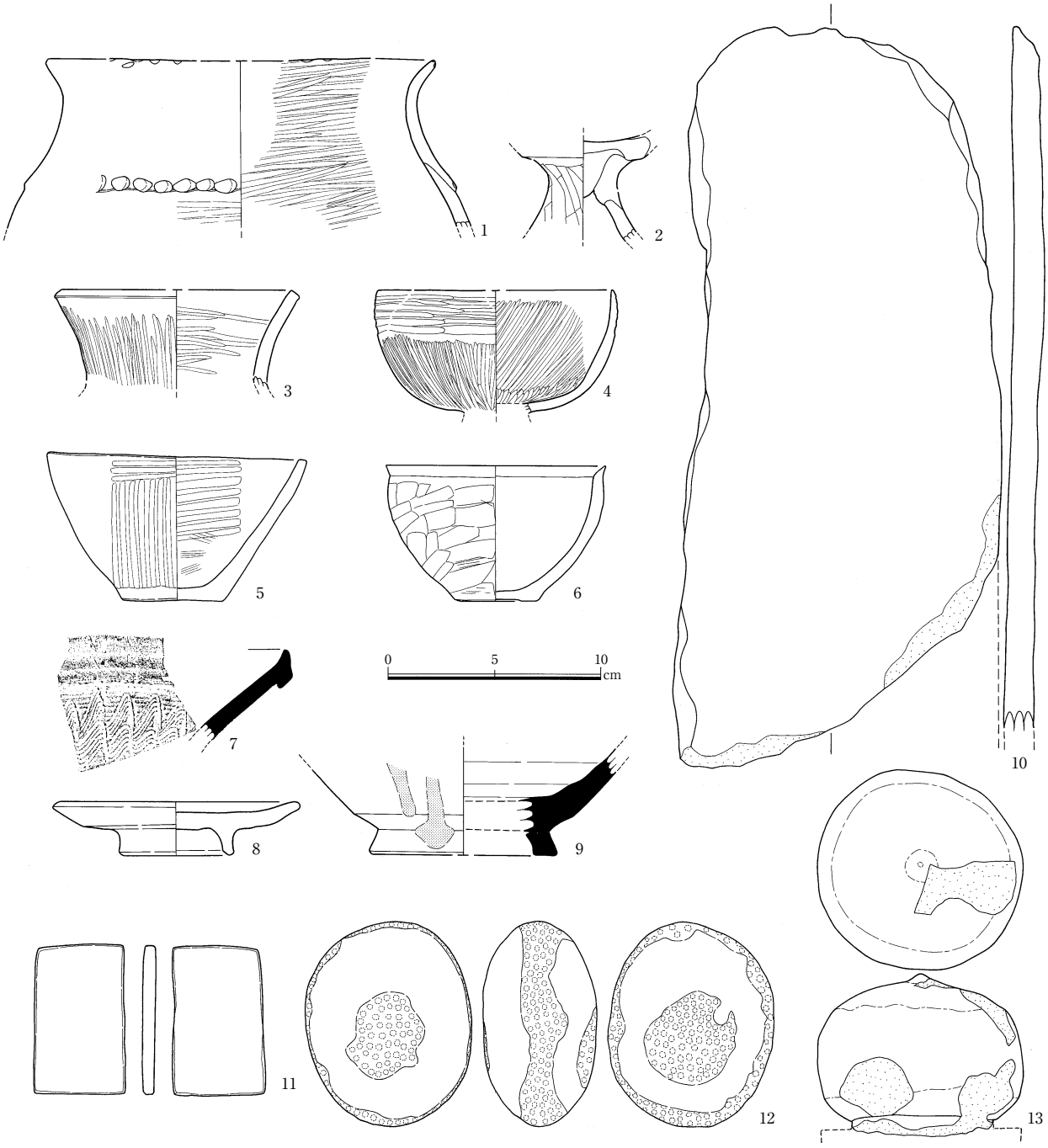
前記の通り、6号墳下層から竪穴住居跡が2棟検出されている。遺物が出土しているのは1号住居跡のみである。南隅のごく一部しか遺存しない2号住居跡は、遺構・遺物とも詳細が不明である。

遺構　1号住居跡は6号墳南西周溝にかかって検出されている。深さは墳丘下で50cmほどであり、残存覆土中には焼土・炭化材があった。ほぼ正方形のプランを持ち、4本の主柱による上屋が伴ったようである。柱穴間はいずれも2.8mほどの間隔で一定し、主軸方位はN－27°－Wである。

北西柱穴―北柱穴間の若干床面中央寄りの位置には、若干掘りくぼめられて、地床炉が設定されている。また、南西辺側にはハシゴ穴とも考えられる20cmほどの穴がある。



第105図　1号・2号住居跡平面図



第106図　1号住居跡出土土器・表採遺物実測図

遺物　土器片と砥石が出土している（第106図、図版114）。

土器は、2～6の形状より弥生終末期に属すると考えられる。1の甕上位片もくびれがさほど強くないが、同時期としても無理はない。3は壺の口縁である。2は、口縁部の大きく開いていく杯部を持つ高杯の脚柱部で、4が東海地域に原型のある、大きく開く低い脚部を持つタイプの高杯の杯部である。口縁外面に櫛描文を意識したと見られる横位の沈線が6条施されており、密にヘラミガキがなされる精製品である。5・6は鉢であるが、後者は所在不明である。5はヘラミガキで仕上げられており、弥生土器に近い雰囲気である。対して、6は口縁端部が内面に稜を持ち、細い幅で面が巡り、小型壺などの器種に接近している。他には、長方形の小型の砥石11が出土している。

いずれも遺構の時期を示していると思われ、西広遺跡上層遺構とのつながりに興味が持たれる。

第11節　遺構外出土の遺物

1　縄紋土器

今回の調査では、炉穴の可能性のある１号土坑を除いて明瞭な遺構を確認できなかったが、墳丘内外から縄紋土器片の検出が見られた（第107図、図版113）。以下は石器も含め、すべて一括取り上げ遺物である。

１～６は撚糸紋の土器で、１と３は比較的条の間隔が密であるのに対し、４～６は間隔が大きい。いずれも焼成は比較的良好である。夏島式である。

７の口唇部は小波状を呈し、谷の部分に刺突列が施されており、山の部分は小さな瘤状の突起を作っている。表面には縦方向とジグザグ状の隆帯があり、この隆帯の両側に刺突列がある。内面も条痕がある。胎土に繊維を含む。８～10、13・14は器面の内外面に条痕が施されるほかに、沈線・口唇の刻み目などがあるものである。いずれも胎土に繊維を含む。以上は茅山下層式に比定される。

11・12・15は胎土に繊維を含み、器面に条痕のある土器である。15は平底の底部で、底面の縁につまんだような凹凸がある。底面にも条痕がつけられている。茅山上層式である。

16～18は、深鉢形土器の口縁部破片で、太い沈線で区画された枠状紋を構成する磨消縄紋がある。中期の加曽利EII式であろう。

19・20は後期初頭に位置づけられよう。22～25は加曽利Ｂ式に比定される。22は無紋であるが、口縁部内側に隆帯があり、その上に刻み目が入れられている。その他の紋様は認められない。25は粗製深鉢形土器である。

26は安行Ⅰ式の粗製深鉢である。

28・29は安行Ⅱ式の紐線紋のある粗製深鉢形土器であり、口縁は著しく肥厚している。

30～33は晩期の姥山Ⅱ式土器で、30は口縁がやや内傾し、沈線で幾何学的紋様を構成し、内部を交互にやや長い刺突で充填している。焼成は良好である。　（鷹野光行）

2　石器

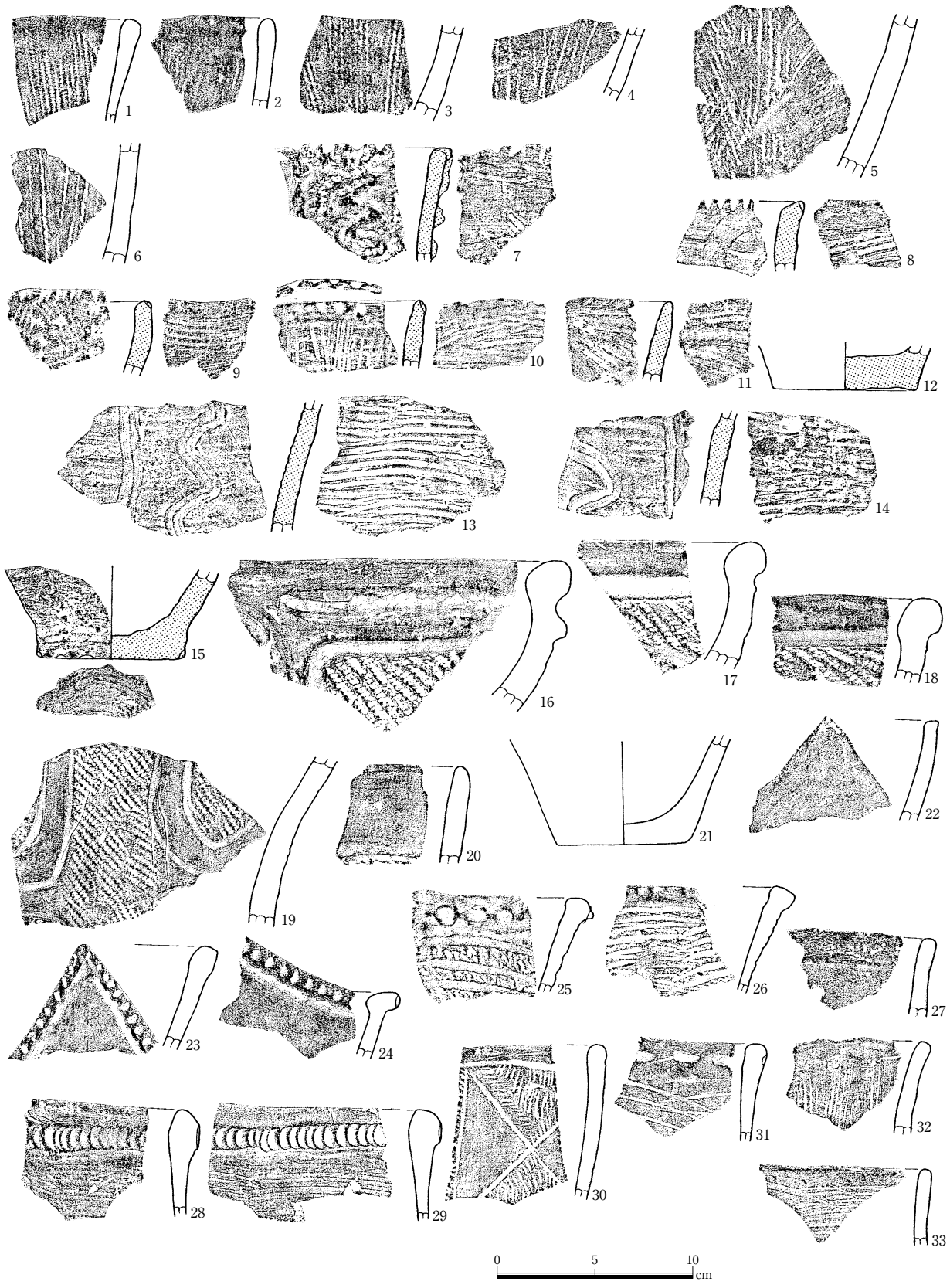
縄紋土器片と同じく、石器も古墳群封土に混ざり込むかたちで出土している（第106図12、第108図１～14、図版114）。磨石・敲石が主体で、少数の石皿が混じる。石材には、輝石安山岩・輝緑岩・凝灰質砂岩・石英斑岩・多孔質輝石安山岩・砂岩が利用されている（第８表）。

本古墳群の近くには、地続きで西広貝塚があり、古墳群の下層には、縄文時代各期の生活残滓が含まれていた可能性が高い。遺構は見られないが、磨石・敲石・石皿は縄文時代の遺物であろう。

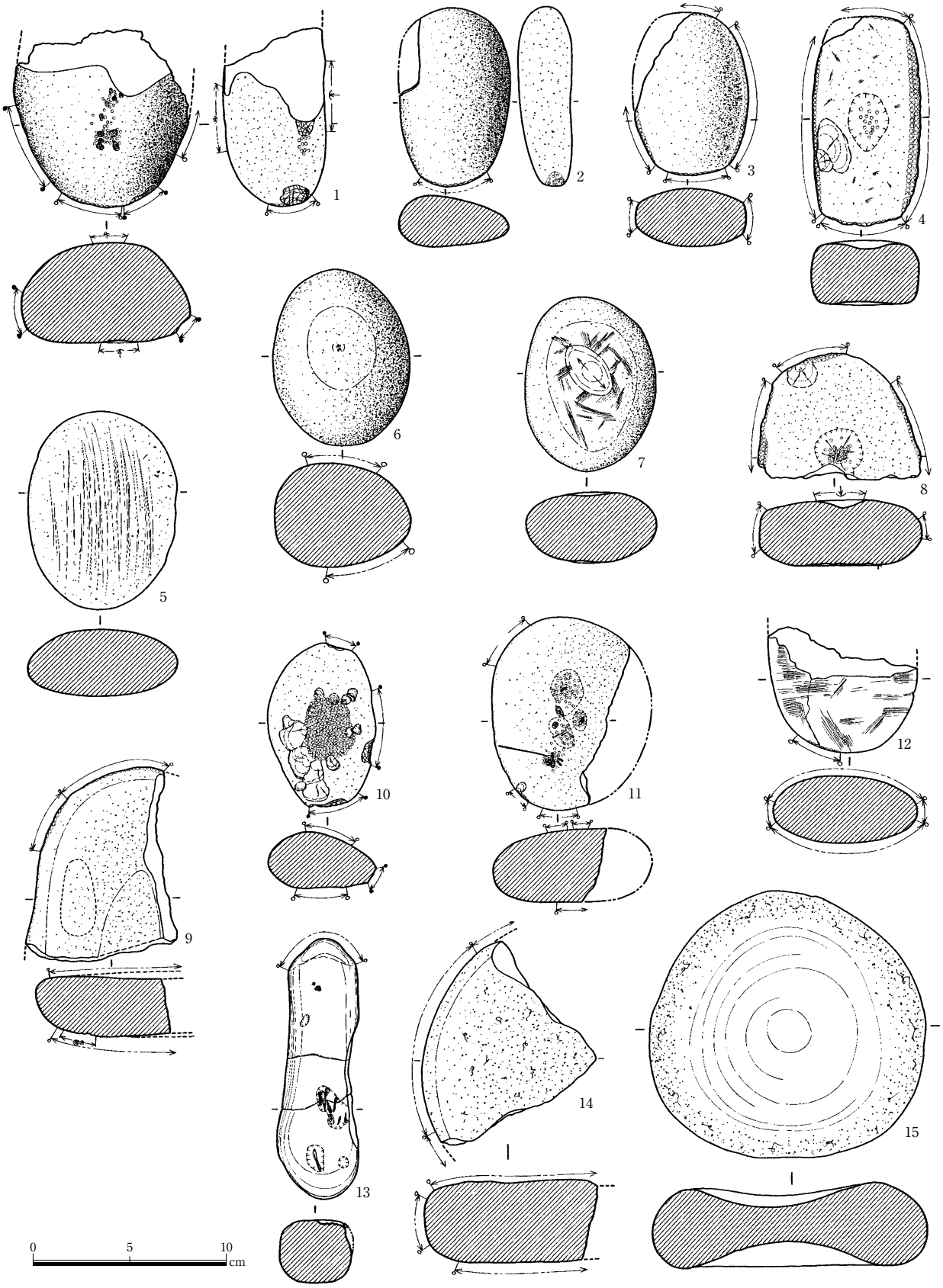
3　その他の遺物

上記の他には、須恵器７・９、ロクロ土師器８・板碑10・五輪塔空輪部13が出土している（第106図、図版114）。土師器８は完全に遺存する高台付きの杯または皿で、10世紀に属すると思われる。

板碑10は緑泥片岩を加工したもので、厚さは1.5㎝である。銘は無く、形状も不明である。６号墳近くでの採集であり、石室に関係する可能性は低い。輝石安山岩製の五輪塔13も同じく６号墳近辺での検出である。前述のように、これらの遺物から、大局的には、中世後半期に１～５号墳の占地する尾根状部から、台地上へ墓域が移動したと見られる。この墓域の動きが、開削が中世期と思われる、尾根を大きく破壊して通る道路跡の動態とどう関連してくるかについては、今後の検討が必要である。



第107図　遺構外出土縄紋土器拓影



第108図　遺構外出土石製品実測図

第７表　土器観察表

遺構	図	番号	種別	器種	遺存	色調　表面 断面	外面の特徴	内面の特徴	焼成	胎土	口径 cm	最大径 cm	高さ cm	底径 cm	出土位置	備考
１号墳	84	1	須恵器	杯蓋	1/2	7.5Y5/1灰	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良	やや密、パミス粒	13.5	13.5	4.8	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	2	須恵器	杯蓋	1/4以下	5Y4/1灰 2.5YR4/2灰赤	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良好	パミス・長石粒	(13.5)	(13.5)	(4.0)	—	主体部	TK209型式
１号墳	84	3	須恵器	杯蓋	1/4	7.5Y5/1灰	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良	やや密、パミス粒	(12.7)	(12.7)	(4.0)	—	主体部	TK209型式
１号墳	84	4	須恵器	杯蓋	完形	2.5Y4/1黄灰	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良好	長石粒	13.7	13.7	4.5	—	主体部裏込下	TK209型式
１号墳	84	5	須恵器	杯蓋	1/4以下	5B4/1暗青灰 2.5YR4/2灰赤	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良	長石粒	(13.4)	(13.4)	—	—	主体部裏込下	TK209型式
１号墳	84	6	須恵器	杯蓋	1/4以下	2.5Y5/1黄灰 5YR4/2褐灰	右回転ヘラケズリ、口縁周辺横ナデ	横ナデ	良	パミス粒	(13.2)	(13.2)	—	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	7	須恵器	杯	完形	2.5Y6/1黄灰	下半右回転ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ、見込横方向ナデ	良	長石粒	11.2	13.7	4.5	—	主体部裏込下	TK209型式
１号墳	84	8	須恵器	杯	1/4以下	5Y5/1灰 7.5YR4/2灰褐	下半右回転ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ	良好	やや密、パミス粒少	(10.8)	(13.4)	—	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	9	須恵器	杯	1/4以下	2.5Y7/2灰黄	下半右回転ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ	良	やや粗、パミス粒少	(11.5)	(14.1)	—	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	10	須恵器	平瓶	完形	5YR4/1灰	下半左方向ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ	良好	長石粒	5.3	15.1	13.2	—	主体部裏込下	TK209型式
１号墳	84	11	須恵器	杯	1/4以下	5Y5/1灰 7.5YR4/2灰褐	下半右回転ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ	良好	やや粗、パミス粒少	(11.9)	(14.3)	—	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	12	須恵器	杯	1/4以下	2.5Y6/2黄灰	下半右回転ヘラケズリ、上半横ナデ	横ナデ	良	粗、パミス少長石粒多	(11.4)	(13.9)	(3.3)	—	主体部一括	TK209型式
１号墳	84	13	須恵器	横瓶	1/4以下	5Y6/1灰	横ナデ	横ナデ	良	白色粒	—	—	—	—	９ｃ区一括	TK209型式
１号墳	84	14	土師器	甕	完形	5YR5/6明赤褐	横方向ナデ、下半縦方向にヘラナデ	横方向ナデ	良好	長石・金雲母粒多	21.3	27.2	32.5	8.1	03C トレ	常総型甕 ６世紀末
１号墳	84	15	土師器	坩	完形	10YR6/4にぶい黄褐	体部ヘラケズリ後ヘラナデ、上部は横方向ナデ、頸部縦方向ヘラケズリ後横方向ナデ	体部ヘラナデ、頸部横方向ナデ	良好	パミス・酸化鉄・石英粒	7.9	13.3	14.7	4.2	主体部床面下	
１号墳	84	16	土師器	長胴甕	1/4以下	7.5YR5/6明褐	胴部縦方向ヘラケズリ、頸部横方向ナデ	横方向ヘラナデ	良好	白色粒・酸化鉄粒	(20.1)	(19.2)	—	—	９ｃ区一括	古墳後期末
１号墳	85	17	須恵器	甕	小片	7.5Y4/1灰 破断面7.5YR5/2灰褐	櫛描き波状文が２帯施される	ナデ	良好	堅緻、白色微粒	—	—	(4.6)	—	12a 区一括	古墳後期
１号墳	85	18	須恵器	甕	小片	7.5Y5/1灰 破断面7.5YR5/2灰褐	格子状タタキ	同心円状当具痕	良好	堅緻、白色微粒	—	—	(8.3)	—	７区一括	古墳後期
１号墳	85	19	須恵器	甕	小片	7.5Y3/1オリーブ黒 破断面7.5YR5/2灰褐	格子状タタキ、自然釉で光沢がある	同心円状当具痕	良好	堅緻、白色微粒	—	—	(15.5)	—	７・９区一括	古墳後期
１号墳	85	20	須恵器	甕	小片	7.5Y4/1灰 破断面7.5YR5/2灰褐	格子状タタキ	同心円状当具痕	良好	堅緻、白色微粒	—	—	(19.9)	—	２ｃ・９区一括	古墳後期 17～20は同一個体の可能性がある
１号墳	85	21	ロクロ土師器	杯	1/3	5YR6/8橙	横ナデ、下部ヘラケズリ、底部糸切痕をナデ消す	横ナデ	良好	やや粗、白色粒	—	—	—	6.0	７区一括	９世紀前葉
１号墳	85	22	ロクロ土師器	杯	1/4以下	7.5YR6/6橙	上部横ナデ、下部ヘラケズリ、底部ヘラ切り	横ナデ	良好	パミス粒少	—	—	—	(7.0)	７区一括	９世紀前葉
１号墳	85	23	ロクロ土師器	杯	1/4	10YR6/4にぶい黄橙	横方向ナデ、底部ロクロ右回転糸切痕無調整	横方向ナデ	良	やや粗、白色粒	—	—	—	4.5	７区一括	９世紀後葉～10世紀
１号墳	85	24	ロクロ土師器	杯	1/4	10YR5/4にぶい黄褐	縦方向ナデ、底部ロクロ右回転糸切痕無調整	横ナデ	良	やや粗、砂・パミス粒	—	—	—	5.5	７a 区一括	９世紀後葉～10世紀、
１号墳	85	25	ロクロ土師器	杯	1/4	10YR6/4にぶい黄橙	下部右回転ヘラ切り、底部ヘラ切り	横ナデ	良	やや粗、白色粒	—	—	—	6.7	３ｃトレ一括	９世紀前葉
１号墳	85	26	土師器	高杯	1/4	10YR7/4にぶい黄橙(赤彩部2.5YR4/6赤褐)	脚部縦方向ヘラケズリ、全面赤彩	輪積みを指頭圧着	良	やや粗、パミス・酸化鉄粒	—	—	—	—	11b 区一括	和泉式期
１号墳	85	27	土器	カワラケ	1/3	7.5YR5/6明褐	横ナデ、体部屈曲する 底部は回転糸切り無調整 外周もナデない	横ナデ ただし見込みはナデない	良	パミス	(10.3)	(10.3)	3.1	(4.6)	７区一括	11世紀以降
１号墳	85	28	常滑	壺	1/4以下	7.5YR4/4褐 7.5YR7/2明褐灰	体部横方向ヘラケズリ後横ナデ	頸部横ナデ	良好	やや粗、酸化鉄粒	(10.0)	—	—	—	６a 区	６a 型式
１号墳	85	29	ロクロ土師器	杯	1/4以下	7.5YR6/6橙	横ナデ	横ナデ	良好	酸化鉄粒	(11.7)	(11.7)	—	—	全体一括	９世紀前葉
１号墳	85	30	ロクロ土師器	杯	1/4以下	7.5YR6/8橙	横ナデ	横ナデ	良好	粗小礫・白色粒	(13.2)	(13.2)	—	—	７区一括	９世紀前葉
１号墳	85	31	ロクロ土師器	杯	1/4以下	5YR5/6明赤褐	横ナデ	横ナデ	良好	密、パミス・酸化鉄粒	(14.1)	(14.4)	—	—	５区一括	９世紀

遺構	図	番号	種別	器種	遺存	色調　表面 断面	外面の特徴	内面の特徴	焼成	胎土	口径 cm	最大径 cm	高さ cm	底径 cm	出土位置	備考
1号墳	85	32	ロクロ土師器	杯	1/4	10YR6/6明黄褐	付高台、横ナデ	見込横方向ナデ	良	やや粗、砂粒 パミス粒	—	—	—	(7.1)	5区一括	9世紀後葉、灯明用途
1号墳	85	33	ロクロ土師器	高足高台杯	1/3	7.5YR6/6橙	付高台、横ナデ	横ナデ	良好	やや粗、白色粒	—	—	—	(9.5)	5区一括	9世紀後葉～10世紀
1号土壙	88	1	常滑	甕	ほぼ完形	7.5YR5/2灰褐 10YR4/1褐灰	斜上方にヘラケズリ、口縁横帯あるが未発達、押印帯は2種工具で6条	指頭圧痕無調整	不良	長石粒多	47.7	69.1	63.5	17.4		4型式、蔵骨器
1号土抗	97	1	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR6/6橙 10YR3/1黒褐	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	2	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR7/8黄橙 7.5YR4/1褐灰	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	3	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR5/6明褐 10YR3/1黒褐	縦方向に沈線区画	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	4	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR6/6橙 10YR1.7/1黒	貝殻条痕文交差	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	5	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR4/4褐 2.5Y2/1黒	刺突文の交差	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	6	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/6明赤褐 2.5Y2/1黒	粘土紐に押捺、縦方向に沈線	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	7	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/6明赤褐 7.5YR3/1黒褐	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	8	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5YR5/8明赤褐 7.5YR3/1黒褐	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	9	縄紋土器	深鉢	1/4以下	10YR5/4にぶい黄褐 2.5Y2/1黒	刺突文の交差	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	10	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5YR4/6赤褐 7.5YR2/1黒	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	11	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5Y3/1黒褐 2.5Y2/1黒	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	12	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/8明赤褐 10YR4/1褐灰	粘土紐による区画	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	13	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR4/6赤褐 2.5Y3/1黒褐	無文	無文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	14	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5YR4/8赤褐 10YR1.7/1黒	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	15	縄紋土器	深鉢	1/4以下	10YR3/2黒褐 10YR4/4褐	粘土紐に押捺、縦方向に沈線	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	16	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/6明赤褐 7.5YR2/1黒	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	17	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5Y7/4浅黄 2.5Y2/1黒	縄紋の押圧	無文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	18	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5YR4/8赤褐 10YR1.7/1黒	粘土紐による区画、刺突文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	19	縄紋土器	深鉢	1/4以下	2.5YR5/8明赤褐 7.5YR3/1黒褐	貝殻条痕文	器面荒れる、貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	20	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR7/8黄橙 2.5Y2/1黒	無文	無文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	21	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/6明赤褐 10YR2/1黒	粘土紐による区画、無文帯	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	22	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR6/6橙 2.5Y3/1黒褐	粘土紐による区画	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	23	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR5/6明褐 2.5Y2/1黒	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	24	縄紋土器	深鉢	1/4以下	5YR5/6明赤褐 7.5YR3/1黒褐	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	25	縄紋土器	深鉢	1/4以下	7.5YR5/8明褐 2.5Y4/1黄灰	貝殻条痕文	貝殻条痕文	良好	パミス粒・繊維	—	—	—	—	一括	早期条痕文期後半
1号土抗	97	26	土師器	壺	1/4以下	2.5Y6/3にぶい黄	口縁帯貼り付け、横方向ナデ、口縁部に面あり	横方向ナデ	良好	砂粒・パミス粒	(15.1)	—	—	—	一括	大廓式並行期混ざり込み
2号墳	100	1	土師器	杯	3/4以上	10YR6/6明黄褐	全面ヘラミガキ	全面ヘラミガキ	良好	密、酸化鉄粒	14.4	14.5	2.9	—	周溝内	
2号墳	100	2	土師器	杯	3/4以上	7.5YR5/6明褐	全面ヘラミガキ	全面ヘラミガキ	良好	密、黒色微細粒	14.0	14.2	3.4	—	周溝内	
2号墳	100	3	土師器	杯	1/4	7.5YR7/6橙	横ナデ、底部付近ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	横ナデ	良	酸化鉄粒少	(14.1)	(14.2)	3.8	(7.1)	全体一括	
5号墳	100	4	土師器	杯	1/4	10YR7/4にぶい黄橙(赤彩部2.5YR4/6赤褐)	横ヘラミガキ、赤彩	磨滅のため不明赤彩？	良好	1㎜以下の砂粒	17.4	17.4	4.9	6.0	一括	
3号墳	100	5	土師器	杯	1/4以下	10YR6/4	下部横方向ヘラケズリ、口縁付近横方向ナデ	横方向ナデ	良好	酸化鉄粒多	(13.9)	(14.0)	(3.0)	—		鬼高式期 6世紀末
3号墳	100	6	土師器	杯	3/4	7.5YR7/6橙	下部横方向ヘラケズリ、口縁付近横方向ナデ、2条の沈線	横方向ナデ	良好	酸化鉄粒多	12.2	12.2	5.0	—		鬼高式期5世紀末、築造時期か
3号墳	100	7	土師器	杯	1/4	10YR6/4にぶい黄橙(黒色部7.5YR4/2灰褐)	全面ヘラミガキ	全面ヘラミガキ 黒色処理	良好	酸化鉄粒少	(12.9)	(13.2)	(4.5)	—		鬼高式期 6世紀末
3号墳	100	8	土師器	甕	1/4以下	7.5YR7/6橙	斜上方にヘラケズリ	劣化進み器面遺存せず	良	やや粗、砂粒	—	—	—	7.1		古墳後期
4号墳	100	9	土師器	高杯	3/4	7.5YR5/6明褐	脚部から口縁付近にかけ縦方向ヘラケズリ	斜上方に指頭で押さえナデ	良	小礫・パミス粒	9.3	9.6	9.8	7.6	全体一括	和泉式期初頭
4号墳	100	10	土師器	小型丸底壺	3/4以上	10YR5/4にぶい黄褐	体部下方向ヘラケズリ、頸部はヘラケズリ痕をナデ消す	体部無調整、頸部ヘラナデ	良	パミス粒多	8.5	8.7	9.7	3.4	全体一括	和泉式期初頭

遺構	図	番号	種別	器種	遺存	色調　表面 断面	外面の特徴	内面の特徴	焼成	胎土	口径 cm	最大径 cm	高さ cm	底径 cm	出土位置	備考
4号墳	100	11	土師器	甕	1/2	7.5YR6/6橙	表面劣化、体部縦方向ハケ、頸部ハケ後横方向ナデ	横方向ナデ	良好	パミス粒	(11.5)	(12.4)	(11.7)	3.7	全体一括	
4号墳	100	12	土師器	甕	1/2	10YR7/4にぶい黄橙	粗いハケメ、下位ヘラケズリ	ヘラナデ、ヘラミガキ	良好	～2㎜の砂粒、スコリア状粒目立つ	—	25.8？	(20.1)	6.8	一括	
5号墳	100	13	須恵器	杯蓋	完形	7.5YR5/1灰	口縁横ナデ、その他右回転ヘラケズリ	横ナデ後中心部横方向ナデ	良	長石・白色粒黒色粒多	13.3	13.4	4.5	—	東側周溝上層	7世紀末、混ざり込み
5号墳	100	14	土師器	杯	1/4以下	7.5YR6/6橙(赤彩部2.5YR4/8赤褐)	横方向ヘラケズリ	劣化進み調整痕見えず	良好	やや粗、パミス粒	15.8	16.0	—	—	全体一括	7世紀末、混ざり込み
5号墳	100	15	土師器	壺	3/4	7.5YR4/4褐	体部斜上方にヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	下部横方向ナデ、上部無調整	良	パミス粒少	—	13.1	—	5.8	全体一括	
6号墳	104	1	弥生土器	壺	1/4以下	7.5YR6/6橙(赤彩部7.5YR5/8明褐)	頸部斜上方ヘラナデ、口縁帯縄紋、下部に押捺、頸部のみ赤彩	横方向ナデ	良	やや粗、小礫白色粒多	—	—	—	—		
6号墳	104	2	土師器	壺	1/4以下	7.5YR5/6明褐	口縁帯貼り付け横方向ナデ、口縁部に面あり	横方向ナデ	良好	やや粗、酸化鉄粒多	—	—	—	—		
6号墳	104	3	土師器	甕	1/4以下	10YR5/4にぶい黄褐	縦方向ハケ後口縁付近横方向ナデ	横方向ハケ後頸部横方向ナデ	良	パミス粒多	(15.8)	—	—	—		
6号墳	104	4	弥生土器	甕	1/4以下	7.5YR6/8橙	横方向ナデ、口縁部縄紋原体による押捺	横方向ナデ	良好	やや粗、パミス粒多	—	—	—	—		
6号墳	104	5	土師器	壺	1/4以下	5YR6/8橙(赤彩部2.5YR4/8赤褐)	頸部縦方向ヘラミガキ、口縁帯横方向ヘラミガキ、赤彩	横方向ヘラミガキ、口縁付近に赤彩	良好	密、白色粒少	(17.6)	—	—	—		
6号墳	104	6	弥生土器	壺	1/4以下	5YR5/6明赤褐(赤彩部10R4/6赤)	頸部縦方向ヘラミガキ、口縁帯横方向ナデ、赤彩	横方向ヘラミガキ、赤彩	良好	やや粗、酸化鉄粒多	—	—	—	—		
6号墳	104	7	土師器	甕	1/4以下	5YR4/4にぶい赤褐	縦方向ハケ、口縁部ぬるい面あり	横方向ハケ	良好	密、パミス粒	—	—	—	—		
6号墳	104	8	土師器	壺	1/4以下	10YR6/6明黄褐	肩部櫛描波状文、櫛描文、頸部縦方向ハケ後、下部を縦方向ヘラナデ	胴部横方向ヘラナデ、頸部横方向ヘラミガキ	良好	やや密、酸化鉄粒	—	—	—	—		
6号墳	104	9	土師器	小型甕	1/4以下	7.5YR6/6橙	ヘラケズリ・ハケ後縦方向ヘラミガキ	ハケ後ヘラナデ	良好	密、パミス粒	(10.5)	(10.9)	—	—		
6号墳	104	10	土師器	鉢	1/4以下	7.5YR6/6橙	体部縦方向ヘラナデ、頸部横方向ヘラナデ	縦方向ナデ	良好	パミス粒	(10.4)	(10.5)	—	—		
6号墳	104	11	土師器	甕	1/4以下	5YR6/8橙	体部斜上方ハケ後頸部横方向ナデ、口縁部ぬるい面あり	横方向ハケ後横方向ナデ	良好	パミス・長石粒少	—	—	—	—		
6号墳	104	12	縄紋土器	浅鉢	1/4以下	7.5YR5/6明褐	体部横方向ヘラケズリ、口縁付近横方向ナデ、口縁にぬるい面あり	横方向ヘラナデ	良好	小礫・パミス粒	—	—	—	—		
6号墳	104	13	土師器	甕	1/4以下	7.5YR6/6橙	斜上方ハケ後横方向ナデ	表面劣化し調整痕遺存しない	良	酸化鉄粒多	—	—	—	—		
6号墳	104	14	土師器	小型丸底壺	1/4以下	5YR6/8橙	表面劣化し、素地のヘラケズリ痕露出	横方向ナデ	良好	砂粒・パミス粒	—	—	—	(2.4)		
6号墳	104	15	土師器	小型丸底壺？	1/4以下	10YR6/4にぶい黄褐	表面劣化し、素地のヘラケズリ痕露出	斜上方ヘラナデ	良	密、パミス粒少	—	—	—	(5.0)		
6号墳	104	16	土師器	甕	3/4以上	10YR6/4にぶい黄橙	ハケ後縦方向ヘラミガキ	下部ハケ後横方向ナデ、上部ヘラナデ	良	酸化鉄粒多	—	27.3	—	4.9		
6号墳	104	17	土師器	壺	3/4以上	10YR6/6明黄褐(赤彩部2.5YR4/8赤褐)	斜上方にヘラナデ、赤彩（籠目痕あり）	下部斜上方ヘラナデ、上部横方向ヘラナデ	良好	砂粒・パミス粒	—	29.9	—	7.5		
6号墳	104	18	土師器	高杯	1/4以下	7.5YR6/6橙(赤彩部5YR4/6赤褐)	縦方向ヘラミガキ、赤彩	縦方向ヘラミガキ	良好	密、パミス粒少	—	—	—	—		
6号墳	104	19	土師器	高杯	1/4以下	7.5YR6/6橙(赤彩部2.5YR5/8明赤褐)	縦方向ヘラミガキ、赤彩	ハケ	良好	パミス粒少・酸化鉄粒	—	—	—	—		
6号墳	104	20	土師器	高杯	1/3	7.5YR6/6橙(赤彩部2.5TR4/8赤褐)	縦方向ヘラミガキ、脚部3孔、赤彩	横方向ナデ	良好	密、パミス粒	—	—	—	—		
6号墳	104	21	土師器	高杯	1/4以下	5YR5/8明赤褐(赤彩部2.5YR4/8赤褐)	縦方向ヘラミガキ、赤彩	ハケ	良好	パミス粒少・酸化鉄粒多	—	—	—	(11.9)		
6号墳	104	22	土師器	高杯	1/4以下	10YR7/6明黄褐	縦方向ヘラミガキ	横方向ナデ	良好	パミス・酸化鉄粒少	—	—	—	—		
6号墳	104	23	土師器	高杯	1/3	5YR5/6明赤褐(赤彩部2.5YR5/6明赤褐)	縦方向ヘラケズリ、脚部3孔、赤彩	横方向ヘラケズリ	良好	パミス・白色粒・酸化鉄粒	—	—	—	—		
6号墳	104	24	土師器	高杯	1/4以下	7.5YR6/6橙(赤彩部5YR4/4にぶい赤褐)	縦方向ヘラナデ、赤彩	横方向ナデ	良好	パミス粒少	—	—	—	—		

遺構	図	番号	種別	器種	遺存	色調　表面 断面	外面の特徴	内面の特徴	焼成	胎土	口径 cm	最大径 cm	高さ cm	底径 cm	出土位置	備考
1号住居	106	1	弥生土器	甕	1/4以下	10YR5/4にぶい黄褐	胴部横方向ヘラナデ、頸部下方輪積み痕残し押捺、口縁部2方向から押捺	横方向ヘラナデ	良好	やや密、酸化鉄粒少	(18.0)	—	—	—		
1号住居	106	2	弥生土器	高杯	1/4以下	10YR6/6明黄褐	脚部斜下方にヘラケズリ	斜上方にナデ	良好	小礫少・酸化鉄粒多	—	—	—	—		
1号住居	106	3	弥生土器	壺	1/4以下	7.5YR5/4にぶい褐	縦方向ヘラミガキ、口縁に面あり	横方向ヘラミガキ	良	密、パミス粒	(10.8)	—	—	—		
1号住居	106	4	弥生土器	高杯	1/4以下	10YR6/4にぶい黄橙	放射状にヘラミガキ、口縁部に櫛描を意識した沈線6条	見込放射状ヘラミガキ、体部斜上方ヘラミガキ	良	密、パミス含む	(10.9)	—	—	—		
1号住居	106	5	弥生土器	鉢	完形	黒（黒斑と二次焼成）～7.5YR6/6橙	縦のヘラミガキ(底面に及ぶ)、口縁は横のヘラミガキ、端部は角張っておさまる	横のヘラミガキ、底付近はケズリ状の調整	良	密、3㎜大のシャモット含む	11.8	12.1	7.1	4.6		
1号住居	106	6	弥生土器	鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		遺物所在不明
遺跡一括	106	7	須恵器	甕	1/4以下	7.5Y5/1灰 2.5YR4/3にぶい赤褐	頸部櫛描波状文	横ナデ	良好	密、白色粒	—	—	—	—		
遺跡一括	106	8	ロクロ土師器	杯	完形	10YR6/6明黄褐	横ナデ、付高台	横ナデ	良好	小礫多	11.0	11.6	2.5	5.1		10世紀
遺跡一括	106	9	須恵器	瓶	1/4以下	10YR7/2にぶい黄橙	下部右回転ヘラ切削り、付高台、自然釉	工具で横ナデ	良	密、黒色微細粒	—	—	—	8.6		

第8表　石製品観察表

遺構	図	番号	種別	石材	遺存	色調	特徴	最大長cm	最大幅cm	厚さcm	重量g	備考
1号住居	106	11	砥石	砂岩	完形	2.5Y6/2灰黄	全面が磨られており平滑である　仕上砥か	7.0	4.3	0.4	37.3	
1号墳	85	34	棗玉	琥珀	小片	光沢のある暗褐	35と同型の玉破片　木口面に小孔が穿たれる	1.0	0.9	0.5	0.2	
1号墳	85	35	棗玉	琥珀	完形	光沢のある暗褐	平行に向き合う木口面両端は楕円の平面形を呈し、そのほぼ中央同士を結ぶ小孔が穿たれている	2.5	2.0	1.6	5.2	
6号墳	106	10	板碑	緑泥片岩	1/3	7.5Y6/2灰オリーブ	無銘で意匠は粗い　平面部に1㎜の礫が多く認められる	34.6	15.3	1.5	1770.3	戦国期か武蔵型
表採	106	12	敲石	不明	完形	10YR3/1黒褐	平面部中央に窪み、周囲に敲打痕がある　被熱の為か一部、赤変する	9.5	7.8	5.1	540.3	
表採	106	13	五輪塔	輝石安山岩	一部欠損	2.5Y6/2灰黄	空輪部	9.7	9.6	7.4	680.9	
全体	108	1	磨石	輝石安山岩	1/2	2.5Y7/2灰黄	ほぼ全面が平滑に磨れている　平面部と周囲に敲打痕がある	9.2	9.0	5.2	599.5	
全体	108	2	磨石？	輝石安山岩	一部欠損	7.5YR4/2灰褐	表面が平滑である	9.2	5.7	2.7	207.0	
全体	108	3	磨石	輝緑岩	一部欠損	5Y6/2灰オリーブ	ほぼ全面が平滑で、周囲に敲打痕がある	8.4	5.9	3.2	241.3	
全体	108	4	磨石	輝石安山岩	一部欠損	2.5Y5/1黄灰	平面部がよく磨れており中央に窪みがある　側面に敲打痕がある	10.8	5.0	3.1	325.5	
全体	108	5	磨石	凝灰質砂岩	完形	2.5Y6/3にぶ黄	全面が磨れている	10.2	7.7	3.3	365.0	
全体	108	6	磨石	石英斑岩	完形	2.5Y6/2灰黄	全面が磨れており、側面に敲打痕が見られる	9.2	7.2	5.5	505.3	
全体	108	7	敲石	輝石安山岩	一部欠損	2.5Y7/2灰黄	全面が平滑	9.0	6.8	3.6	259.1	
全体	108	8	敲石	多孔質輝石安山岩	1/2	2.5Y7/3浅黄	表面がざらついており、砂っぽい	8.3	6.7	3.3	183.0	
全体	108	9	磨石	砂岩	1/4以下	7.5YR5/2灰褐	平面部がかなり平滑で、側面に敲打痕がつづく　被熱のためか赤変している	9.9	7.7	3.2	380.5	
全体	108	10	敲石	砂岩	完形	2.5Y4/1黄灰	長軸両端と平面部中程に敲打痕が著しい	8.4	5.5	2.8	190.3	
全体	108	11	敲石	砂岩	1/2	10YR5/3にぶ黄褐	全体的に平滑	10.0	7.1	3.9	327.0	
全体	108	12	磨石	石英斑岩	1/2	10YR7/3にぶ黄橙の粒が10YR5/3にぶ黄褐に斑に入る	全体が平滑で、端部に敲打痕が見られる	7.6	6.0	3.7	197.5	
全体	108	13	磨石	凝灰質砂岩	一部欠損	2.5Y6/3にぶ黄	表面がざらついており、やや脆弱である	13.3	4.2	3.3	177.6	
全体	108	14	石皿(磨石)	輝石安山岩	1/4	2.5Y6/3にぶ黄	全面が平滑である　破断面も若干磨れているように見受けられるので、石皿から磨石に転用した可能性も考えられる	8.9	8.7	4.4	340.5	
1号土坑	108	15	石皿	—	完形	—	—	13.9	14.5	4.3	不明	遺物所在不明

第９表　金属製品観察表

遺構	図	番号	注記	種別	最大長 cm	最大幅 cm	高さ・厚さ cm	重量ｇ	状態	備考
１号墳	86	1	203-09f-3022	直刀	43.0	5.0	1.6	555.8	片関　丸い　先端部欠損する	
１号墳	86	2	203-09-3023	直刀	13.8	3.0	1.1	53.2	遺存不良	
１号墳	86	3	203-09-3023	直刀	18.7	3.5	1.3	108.0	遺存不良　先端・基部欠損	
１号墳	86	4	203-09-3005	直刀	19.8	3.2	1.6	157.6	遺存不良　先端・基部欠損	
１号墳	86	5	203-09-3025	直刀	(6.1) (12.5) (6.1)	1.2～2.2	1.6	(12.6) (52.4) (23.4)	遺存不良　先端・基部欠損	
１号墳	86	6	203-09-3019	直刀	24.1	3.0	1.3	102.1	遺存不良　先端・基部欠損	
１号墳	86	7	203-09-3010	直刀	21.1	3.3	身0.9/ 柄2.8～3.1	123.6	片関　斜台形の茎中央に目釘穴があり金具がはまっている 柄と刃部の間に幅1.2～1.5cmの金具がある	
１号墳	86	7’	203-09-3010	直刀	7.1	6.3	0.4～0.7	47.3	卵形の輪郭を持ち、中に同形の穴がある　７と組み合う	
１号墳	86	8	203-09-3009	直刀	5.0	1.9	1.2	20.5	茎に木質が付着	
１号墳	87	9	203-09-3003	釘状製品	22.1	軸0.9/ 頭3.2	3.0	50.3	断面長方形の長い軸部を持つ 太い側の端には約45度の傾きをもって卵形の板状部が続く	混入品
１号墳	87	10	203-09-3001	鏨状製品	9.6	5.3	1.5	112.9	長軸の一端に刃部を持つ　刃の反対側の辺は両肩が丸まり、中央が敲打を受けたかのようにひしゃげている	
１号墳	87	11	203-09-3025	環状部品	7.4	5.0	1.1	36.2	断面円形で鍵穴状の平面形を呈する　馬具の一部	
１号墳	87	12	203-09-3004	絞具	8.1	5.9	1.0	33.0	断面円形でゆるんだ鍵穴状の平面形を呈する 内側の掛け金の軸部分が欠損する　馬具の一部か	
１号墳	87	13	203-09-3013	金銅製耳環	2.8	2.5	0.7	11.8	鍍金が一部遺存し光沢を放つ 断面・平面とも略円形	
１号墳	87	14	203-09-3008	鉄鏃	3.5	1.9	身0.2/ 矢柄0.6	2.5	腸抉柳葉式　基部が折損する鏃身中程に矢柄先端と思われる木質（竹？）が遺存	
１号墳	87	15	203-09-3025	鉄鏃	3.8	1.7	身0.3/ 矢柄0.5	2.7	腸抉柳葉式　片面に矢柄の木質（竹？）が遺存する 茎も扁平	
１号墳	87	16	203-09-3021	鉄鏃	10.0	1.0	0.6	13.3	長頸片刃箭式　先端と基部を欠損する	
１号墳	87	17	203-09-3031	鉄鏃	6.7	1.2	0.6	7.8	長頸柳葉式　篦被で折損する軸部断面長方形	
１号墳	87	18	203-09-3021	鉄鏃	3.1	0.7	0.7	3.3	長頸鏃　軸部　断面長方形	
１号墳	87	19	203-09-3032	鉄鏃	9.9	1.0	0.6	11.3	長頸柳葉式　篦被で折損　軸部断面長方形	
１号墳	87	20	203-09-3030	直刀	23.2	2.7	1.1	76.9	刃部片　ごく一部に棟～刃部両側が遺存する	
１号墳	87	21	203-09-3024	刀子	7.3	1.5	刃0.7/ 柄0.8	13.5	両関か　棟側に明瞭な段がある　茎に柄の木質が付着する	
１号墳	87	22	203-09-3020	鉄鏃	3.2	0.6	0.6	3.2	長頸鏃の軸部か	
１号墳	87	23	203-09-3018	鉄鏃？	3.5	0.6	0.6	2.4	軸部　両側を欠損する	
１号墳	87	24	203-09-3018	鉄鏃	7.6	軸0.6/ 突起1.1	0.7	9.0	長頸鏃　篦被～茎　茎には樹皮状の木質が付着	
１号墳	87	25	203-09-3034	鉄鏃	3.6	0.5	0.6	1.4	茎部端か　丸みを帯びた方形の断面	
１号墳	87	26	203-09-3020	直刀	4.0	2.6	0.9	20.8	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	27	203-09-3020	直刀	4.4	3.5	0.8	18.8	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	28	203-09-3020	直刀	4.9	3.5	1.0	32.8	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	29	203-09-3020	直刀	4.3	2.8	0.9	18.6	関部片　両関　木質が全体に付着する	
１号墳	87	30	203-09-3009	直刀	6.6	3.0	1.0	26.0	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	31	203-09-3001	直刀	4.9	2.1	0.7	9.7	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	32	203-09-3008	直刀	8.9	2.6	0.5	24.2	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	33	203-09-3012	直刀	7.8	1.8	0.7	14.9	刃部片　遺存不良	
１号墳	87	34	203-09-3009	直刀	7.8	3.3	0.8	25.3	刃部片　棟から刃部が一部遺存する	
１号墳	87	35	203-09-3017	直刀？	6.2	1.6	0.9	17.0	茎部片　断面梯形 端部寄りに目釘穴がある	

第３章　考察

第１節　山倉１号墳出土埴輪について

１　はじめに

山倉１号墳から出土した円筒埴輪（普通円筒埴輪・朝顔形埴輪）は、調査時に樹立位置を確認できたものが83個体ある。以下では、これに破片資料を加えて、それらの形状と成形・調整の痕跡を観察し、そこに見られる特徴によって円筒埴輪の分類を試みる。その上で、埴輪の生産体制のイメージ、生出塚遺跡との関係等、派生する議論に触れることとする。

２　円筒埴輪の製作工程の推定

山倉１号墳出土の普通円筒埴輪はいずれも、２条凸帯３段構成で第２段（凸帯間）の対向位置に略円形の透孔を２孔穿つ同一形式で、器高40cm前後、底径10cm前後、口径20cm前後のものである。そこに見られる製作技法は概ね同一で、その製作工程は以下のように考えられる。

①：一定幅（５～10cm）の粘土帯を作る。

②：粘土帯を立て、長辺が輪になるようにつなぎ基部を作る。

③：粘土紐を随時作りながら積み上げ（巻き上げ）、ナデで整えながら大体の形を作り上げる。

④：内外面にハケメを施し、器面を整える。

⑤：倒立させて（口縁側を下に向けて置き）、自重による底部の変形を矯正するため底部調整を行う。外面にはいわゆる板押圧を施す。内面にはヘラケズリを施すものと施さないものがある。

⑥：再び正立させる。粘土紐を作り、凸帯として貼付し、ヨコナデを施す。

⑦：第２段（凸帯間）の対向位置に略円形の透孔を２孔切り抜く。穿孔面にナデを施すものと、施さないものがある。

⑧：口縁部をヨコナデで仕上げる。口縁部内面には横位のハケメが見られるものがある。

⑨：一部の埴輪の外面に、ハケメを切る強いユビナデが見られる。これは製作中に生じた亀裂を補修するために施した「ごまかしナデ」と考えられる。

そして、これらの工程を示す標準的な痕跡は以下の通りである。

①②：底面に基部（粘土帯）の接合痕が残る。それを向かって見たときに、接合部の右側が乗っているかたちのものをＳ接合、逆をＺ接合と呼ぶことにする（図版95）。一般的に①の工程の粘土帯作成時には、粘土塊を押し延ばした掌紋、また作業台の木目圧痕の見られることが多い（川西1978、中島他1988、犬木1995等）。しかし、本例ではどちらも、その後の調整によって確認できない。

③：粘土紐の積み上げ（巻き上げ）は、上から見て逆時計回りに行い、口縁部まで一気に成形する。ほぼ水平の亀裂や割れ目、内面の調整の弱い部分には粘土紐の接合痕が見られる。粘土紐の接合は、断面で見ると内面側が低く外面側が高く傾いている。これは、拇指を内面に当て、残りの指を外面に当てて、拇指を下方に動かすようにナデつけるためである（巻頭図版５左下）。

④：外面のハケメは、向かってやや左上がり気味に下から上へ工具を動かして施される。口縁部付近の傾きはやや大きい。調整の順序は、上から見て時計廻りである。これは右利きの工人が右手で工

具を使い、左手で埴輪を支えたからである（左利きの場合、逆になる）。内面のハケメは、右下から左上に施す。調整は下位から上位へ順次、反時計回りに行う。内外面調整において埴輪を支えた左手の痕跡と思われる、指紋・掌紋あるいは指頭圧痕を少数認める（図版93）。

⑤：底部調整は、自重によって変形した底部を調整するための技法で、外面がいわゆる板押圧である（川西1978）。個体によって単位幅や圧痕の具合が異なり、すべて一様だったのか不確定だが、木目状の条痕（後述のＥ・Ｆ類に見られる）や弧状の工具圧痕（Ｂ類に見られる）を勘案すると、杓文字状あるいはラケット状の平らな面を持つ工具を用いて施したと思われる。Ｅ類・Ｆ類の左上がりの条痕は、倒立した普通円筒埴輪に対して右利きの工人が、工具を時計回りに小刻みに押しつけたことを示唆する。この調整は押圧ではなくタタキの可能性も考えられるが、ここでは内面の当て具痕の有無によってタタキと押圧を区別する見解に従っておく（大谷2003）。

内面側に生じるバリ状の部分を処理する底部調整としては、底面に向かって時計回りにヘラ状工具でヘラケズリを行う。ヘラケズリの幅はまちまちで、５㎝近く削り取るものから、形だけ施したような１㎝以下のものまで存在する。このヘラケズリの有無で普通円筒埴輪は大きく二分される。

⑥：凸帯は突出度が小さく、断面形が緩いＭ字形を呈する。凸帯の貼付位置の設定は特に行わない。凸帯のヨコナデは、凸帯の上辺に人差指、側面に中指、下辺に薬指を当てて、指と器面の間に布を挟んで施す。その証拠に、朝顔243の凸帯上には布目圧痕が見られる。この布目圧痕は人物埴輪筒袖全身像１の基台部の凸帯にも明瞭に残るので、形象埴輪についても同様と思われる。なお、類型ごとの貼付位置（高さ）は遺物観察表で示した（第４表）。

ところで、興味深いのは、凸帯と体部の色調の異なる埴輪が少なくないことである（巻頭図版５右下等）。凸帯だけ色調の異なる埴輪は、他の古墳でもしばしば見られるので、凸帯を目立たせるため意図的に異なる素地を用いた可能性もある。しかし、山倉１号墳の場合では、体部の途中で色調が変わる埴輪も少数ながら見受けられるので、これは体部を成形した素地が尽きてしまったためと考えられる。これには、一個体の製作中に素地の在庫が尽きる場合や、埴輪製作の最終段階に寄せ集めの粘土を混ぜ合わせて素地を作る場合等が想定できる。焼成前に焼き上がりの色調を予測するのは難しかったとも考えられるので、この色調の相違は意図的でない可能性の方が高いだろう。

⑦：透孔は、刀子あるいはヘラ状工具で外面から時計回りに穿つものが多い。これは右利きの人間が正対して自然な動作をとった場合と一致する。ただ、ほとんどの場合、穿孔後にナデを施すので、進行方向が確実に見分けられるものは少ない。

透孔の形は、切り込む箇所と、手首の返しが難しくなって切り抜くスピードが遅くなるか、あるいは工具を持ち直すために手を止める箇所で、角張る例が多い。また、透孔上辺が上方へ歪む例も見られるが、これは埴輪を乾燥場所等へ運搬する際に指を掛けた痕跡と考えられる。

⑧：口縁部のヨコナデは、拇指を内面、人差指を端面、その他の指を外面に当てて、つまむようなかたちで指を折り曲げたぐらいの範囲に施す。凸帯同様の水平方向の擦痕が見られるので、凸帯のヨコナデと同じく、指と器面の間に布を挟み込んで施したと考えられる。

その他、底面に植物の茎状圧痕が多く見られる。これは、埴輪の自重によって底面が作業面に貼り付くのを防ぎ、埴輪を作業面から離しやすいようにする措置の痕跡と考えられる。

また、ハケメの粗いものに目立つが、器面に指紋・掌紋の残るものが少なからず見られる。これら

は埴輪を支持・運搬する際に付いたものであろう。

製作工程の痕跡は以上のようなものだが、他に、焼成の様子を示す痕跡もある。

底部の一部が焼成不良（焼きむら）になっている例が多い。現状では、一見、斜めに切り落とされたように見えるものが多く（図版75：15・16等）、その範囲は、著しい例では底径の半分近くに達する。ただし、欠損自体は、遺物取り上げや水洗の際に生じたものである。この焼きむらは、焼成時にその部分への火の回りが悪かったことを示し、その反対側が窯詰め時の焚口方向と考えられる。

実測図では、底部の焼成不良部の位置と、透孔位置、樹立時の墳丘外側の方向（調査時に器面に記録されたマーク）を示したが、どちらとの間にも目立った相関は見出しがたい。つまり、窯詰時に円筒埴輪を置く向きは一定せず、焼成不良部の位置については墳丘設置に際しても特に配慮がなかったようである（なお、透孔位置と樹立時の墳丘外側の方向は一致する傾向にあるので、これは意識した可能性が高い）。焼きむらのある埴輪は生焼けでありながらも完全な形状を維持していたために、配列には影響を与えなかったものと思われる。

3　円筒埴輪の形態的分類

続いて、円筒埴輪のプロポーションや製作の痕跡に見られる変異を整理し、分類を試みたい。

まず大きく、底部調整において内面ヘラケズリを施すグループ（α）と施さないグループ（β）に分ける（朝顔形埴輪は除く）。観察表で言えば、概ね１～56の個体と、57以下の個体に分かれる。

次いで、口縁部ヨコナデの強弱、プロポーション、凸帯貼付位置（各段の高さ）等で細分する。

口縁部のヨコナデが弱い特徴のものは少数派で、10・11・19・75・76・77がある。反対に端面がはっきり凹面を呈するほど強くヨコナデするタイプは、１・２・４を代表とし、他に20・21・36・43・44・49・50・51・52・78がある。中間的な様相を持つものは、23・25・27・28・35・59・62・68・69・70・73である。ヨコナデが強いものをａ、中間のものをｂ、弱いものをｃとする。この類別とα／βの二分を組み合わせると、以下のように分類できる（第14～52図、図版73～93）。

α－ａ：１・２・４・20・21・36・43・44・49・50・51・52

α－ｂ：23・25・27・28

α－ｃ：10・11・19

β－ａ：78

β－ｂ：35・59・62・68・69・70・73

β－ｃ：75・76・77

この分類は、プロポーション・凸帯・透孔位置・内外面の調整等の特徴でさらに細分できる。

α－ａ類では、１・２は若干背の低い器体、目立って立体的な凸帯、粗いハケメと特徴的で、まず分離できる。次いで、20・21は、１・２に比べて大きい器体、底部が丸まる特徴、底部内面ヘラケズリの幅の狭さで抽出可能である。残る36・43・44・49・50・51・52は、口縁部のヨコナデが強いだけでなく、外面側に丸く肥厚するという特徴を持つため別の一群としてまとめることができる。それぞれを、α－ａ－１、α－ａ－２、α－ａ－３とする。

α－ａ－１：１・２・４

α－ａ－２：20・21

α－a－３：36・43・44・49・50・51・52

α－b類の23・25・27・28は、プロポーションの類似と均一な器厚に加え、凸帯間隔（第２段間）が狭く、それに合わせて透孔を穿たれること等の特徴で一致するため、そのまま同一類型と見なせる。

α－c類はプロポーションと凸帯貼付位置（各段の高さ）・透孔位置の顕著な違いによって、10・11と19に分ける。10・11に比べて19は、凸帯間が大きく離れ（第２段が広く）、器体も太い。前者をα－c－１、後者をα－c－２とする。

α－c－１：10・11

α－c－２：19

β－b類は、α－b類と底部内面ヘラケズリの有無以外で一致する35と、それ以外に分ける。前者をβ－b－１とする。後者は、粗いハケメと細く直線的な器体の59・62、背の低い器体と広がる口縁が特徴の68・69、前者より細かいハケメを持ち、細く直線的だが透孔付近で若干太くなる器体を持つ70・73に細分できる。それぞれ、β－b－２、β－b－３、β－b－４とする。

β－b－１：35

β－b－２：59・62

β－b－３：68・69

β－b－４：70・73

以上、形態的な特徴で分類してきたが、遺存の程度のため、ここまでで触れなかった資料がある（下記括弧外）。それらは判断の基準となる属性の一部が欠けているが、他の属性の類似で判断が可能である。それぞれの個体の帰属は、以下のように考えられる。

α－a－１　：（１・２・４）・３・５・６・７

α－a－２　：（20・21）・22

α－a－３－１：（36）・37・38・39・40・41

α－a－３－1’：（43・44）・42・45

α－a－３－２：（49・50・51・52）・46・47・48

α－b　：（23・25・27・28）・24・26

α－c－１　：（10・11）・８・９・12・13・14・15・16

α－c－２　：（19）・17・18

α－x　：　56

β－a　：（78）・79

β－b－１　：（35）・33・34

β－b－２－１：（59・62）・60・61・63・64・65・66・67

β－b－２－２：　57・58

β－b－３　：（68・69）

β－b－４　：（70・73）・71・72

β－c　：（75・76・77）

β－x　：　80

α－a－１は底部内面ヘラケズリを施し、粗いハケメと立体的な凸帯が特徴で、３・５・６・７が

合致する。特に５・６・７は最下段（第１段）の高さも近似し、底面が多角形に歪む点でも共通する。

α－a－２は、底部調整で底部が丸くなる特徴があり、内面ケズリを伴うので、22が相当する。

α－a－３は、37・38・39・40・41・42・45・46・47・48が該当する。底部内面ヘラケズリを施し、底面形がほぼ正円を呈する点と、器壁の厚さが安定している点、細かいハケメが共通する。

また、本類型は、器体の大小と最下段の高低で、さらに細分も可能である。それは漸移的な区分となるが、器体が小さく、最下段の低い36・37・38・39・40・41をα－a－３－１、器体が大きく、最下段が高い49・50・51・52をα－a－３－２とし、中間的な42・43・44・45をα－a－３－１'とする。

α－bは、最下段が高い点で共通する24・26を含める。29・30・31・32は遺存部分が少なく確定できないが、本類型か、α－a－３類に帰属させられる。

α－c－１は、基部粘土帯の不安定な形状と、器壁の厚さ、底部調整によって底部端面が内屈する点で、８・９・12・13・14・15・16が属する。これらは、外面ハケメが斜めに傾き気味で、切り合いがちであるところでも共通する。

α－c－２には17・18が加わる。太い器体、間隔の開く凸帯間、内屈する底部端面がよく似る。

α類には、以上に帰属しない特徴的な個体56が残るので、これを新しくα－xとする。その特徴は、極めて薄い器壁とほぼ正円の底面形、ストロークが短く密な内面ハケメにある。

β－aは79が当てはまる。内面のハケメの具合と若干厚みのある凸帯、色調が78と類似する。

β－b－１には33・34が合致する。凸帯間の詰まった様子と、底部を除いて薄手で器壁が安定している点で共通している。

β－b－２には57・58・60・61・63・64・65・66・67が属する。最下段が高く、粗いハケメ、基部から安定して薄い器壁が共通する。この類型は、底部内面ヘラケズリを施さないが、整った底面形と一定した基部器壁厚を持っている。本類型の中では57・58が内面調整のハケメを上位だけに施すという著しい特徴を持つ。そのため、57・58をβ－b－２－２、他をβ－b－２－１と細分する。

β－b－４には71・72を加える。これらは、直線的なプロポーションと底部から薄手で安定する器壁、β－b－２より細かいハケメで一致する。

β類にも、どの類型にも入れがたい特徴を持つ80が残るので、これをβ－xとする。80は底径が若干大きく、底部調整を施さないので、朝顔形埴輪の可能性がある。

以上のように、形態的な特徴に基づいて円筒埴輪の分類を進め、その結果、17類型を設定した。続いては、ハケメの識別を行った上で、これらに対しさらなる検討を加えたい。

４　ハケメの識別

まず、ハケメの識別・同定方法に触れておく。

ハケメが鮮明な埴輪を選び、条線と直交するように、用紙（今回は10㎝四方の紙を用いた）の一辺を当てて固定し、条線の凹部をバーコードの要領で、鉛筆で転写していく。また、条線の間隔だけでなく、凹部のピークが進行方向の左右どちらにあるか等の特徴も記入する。このとき、なるべく最大幅に近い箇所を狙うようにし、同一個体の器面でできるだけ条線パターン全体と両端をおさえるように心がける。このようにしてハケメの条線間隔を転写した紙片を、実際の工具（原体）に対して、「転写コード」と呼ぶことにする（図版95）。山倉１号墳のハケメの識別・同定は、異なるハケメを確

認するごとに、この転写コードを作成・追記しながら行った。

従来のハケメの同定は、拓影（川西1977等）や写真（犬木1995等）を用いて行われてきたが、転写コードの利点は、ハケメの条線を順次書き加えられるので、識別・同定を行いながら工具幅により近いハケメの条線パターンの復元が容易に行えることである。なお、工具幅全体のハケメの条線パターンを復元する試みは、藤沢敦氏が拓影によって行っている（藤沢他1991）。

ハケメの識別・同定は、概ね前項で分類した類型ごとに試行した。その結果、A・B・D・E・F・G・H・I・J・K・Lの合計11種類のハケメを確認できた（第77～83図、図版96・97）。なお、ハケメ（工具・転写コードも共通）のアルファベット記号は確認順に付したものである（Cは後にBと同一と判明したため欠番）。

転写コードを作成して確認できた各ハケメの復元最大幅は、ハケメAが6.5cm、ハケメBが6.2cm、ハケメDが5.4cm、ハケメEが6.5cm、ハケメFが6.0cm、ハケメGが3cm、ハケメHが6.5cm、ハケメIが5.4cm、ハケメJが5.8cm、ハケメKが6.5cm、ハケメLが5.5cm、ハケメMが5.5cmである。焼成前に器面に当てられた、実際のハケメ工具（原体）の幅は、それぞれの計測値を1割増やした程度と考えられる。そうすると、山倉1号墳の埴輪には、ハケメGが3cm強で他の約半分なのを除けば、6～7cm幅の先端を持った工具が標準的に用いられたことが分かる。なお、一般的に、外面のハケメには工具の右半分の条線、内面には左半分の条線が多い。これは、工具の接触部位と幅が、器面の屈曲に規定されることによる。持ち手を右とすると、外面ハケメを施す自然な動作は腕を巻き込む方向なので、埴輪と正対した場合、工具の右側が器面に接するためである。内面は、巻き込む方向で施すと、進行方向である工具の左側が、内弯する器面に掛かり気味になる（第25図等）。

ハケメの工具同士の関係を見ると、ハケメAとハケメHの逆目（註1）がよく似た条線を示し、ハケメDとハケメIが逆目で一致する。ハケメDとハケメIは条線パターンが正逆の関係で一致し、想定工具幅も等しいため、両者は打ち割りによって製作された双子の工具である可能性が高い（横山1978、犬木1995）。一方、ハケメAとハケメHは、条線パターンが厳密には一致せず、想定工具幅も若干異なるため、打ち割りによるとは言い切れないが、少なくとも同じ原材から作られた工具だと見られる。

さて、これまで形状による分類を行ってきたが、これをハケメの分類と重ね合わせてみる。この結果を細別類型の順に対比すると以下のようになる。

ハケメ

A ＝ α－a－1　　：1・2・3・4・5・6・7
D ＝ α－a－2　　：20・21・22
F ＝ α－a－3－1　：36・37・38・39・40・41
F ＝ α－a－3－1’：42・43・44・45
F ＝ α－a－3－2　：46・47・48・49・50・51・52
E ＝ α－b　　：23・24・25・26・27・28
B ＝ α－c－1　　：8・9・10・11・12・13・14・15・16
B ＝ α－c－2　　：17・18・19
G ＝ α－x　　：56

K ＝ β－a　　：78・79
E ＝ β－b－１　　：33・34・35
H ＝ β－b－２－１：59・60・61・62・63・64・65・66・67
H ＝ β－b－２－２：57・58
I ＝ β－b－３　　：68・69
I ＝ β－b－４　　：70・71・72・73
J ＝ β－c　　：75・76・77
L ＝ β－x　　：80

このように、ハケメの分類と形態的な類型の間には、強い相関が認められる。これは、まず、型式内における、いわゆる手法属性（註２）の離散的なあり方に基づく分類が、ある程度有効なことを示していると思われる。また、同じハケメが複数の細別類型にまたがって見られることは注目される。

両者の分類の相関が確かめられたため、両方の分類記号を併記するのは煩雑なので、ここからは、以下のようにハケメの分類に基づく記号に一本化して記述する。

A　：１・２・３・４・５・６・７
B　：８・９・10・11・12・13・14・15・16／**B’**：17・18・19
D　：20・21・22
E１：23・24・26・25・27・28・29・30・31・32／**E２**：33・34・35
F１：36・37・38・39・40・41／**F１’**：42・43・44・45／**F２**：46・47・48・49・50・51・52
G　：56
H１：59・60・61・62・63・64・65・66・67／**H２**：57・58
I　：68・69／**I’**：70・71・72・73
J　：75・76・77
K　：78・79
L　：80

A・D・G・J・K・Lの各類は、ハケメの分類と形態的な分類がまったく一致するので、さらなる操作は不要である。ただし、残るB・E・F・H・Iの各類は、それぞれ考慮すべき点がある。

ハケメBを施すα－c－１・α－c－２は、プロポーションと凸帯貼り付け位置（各段の高さ）が大きく異なる。この区分はこの要素による限りはっきりしている。だが、他の要素は、底部内面ヘラケズリを施すこと、底部調整の板押圧の具合で大きく内屈する底部端面、凸帯に異なる素地の使われることが目立つ点、器壁の色調が混在する点、作りが粗いこと等、完全に共通するわけではないが、ある程度のまとまりがある。このため、変異幅はやや大きいが、α－c－１とα－c－２は同一類型内のヴァリエーションと考えて、同じB類に所属させることとする。

ハケメEを施すα－bとβ－b－１は前項の形態的な分類では、底部内面ヘラケズリの有無に基づく最初の大別で分かれてしまう。しかし、改めて見直すと、それ以外の要素はかなり類似する。両類型は、常に同じ要素がセットになるわけではないが、最下段が高いことと、狭い凸帯間隔に合わせて穿った透孔は概ね共通する。そこで考えてみると、器物に見られる諸属性は本来、並列関係にあるはずで、それをツリー状・階層分岐的に分類するのは便宜的な手続きに過ぎない。とすれば、α／βの

第10表　円筒埴輪属性一覧

工人	分類	個体番号	ハケメ工具外／内	底部内面ケズリ	突帯別胎土	基部条線	底部調整幅cm	底面形	底部接合	透孔ナデ	ごましかナデ	口縁部ナデ	指紋遺存
A	A	1	A/A	○	×	×	浅	多角	?	○	○	強	○
	A	2	A/A	○	×	×	浅	多角	?	○	○	強	○
	A	3	A/A	?	×	—	—	—	—	○	—	—	
	A	4	A/A	?	×	—	—	—	—	○	×	強	
	A	5	A/A	○	×	×	4	多角～楕円	?	○	×	—	○
	A	6	A/A	○	×	×	4	多角	?	○	×	—	○
	A	7	A/A	○	×	—	3	多角	?	—	×	—	
B	B	8	B 裏/ B	○	×	×	5	多角	Z	×	×	微強	
	B	9	B/B	○	△	×	—	多角	Z	×	×	普通	
	B	10	B/B	○	○	×	6	多角	?	△	×	弱	
	B	11	B/B	○	×	×	—	多角	Z	×	×	弱	○
	B	12	B 裏/ B	○	×	×	—	多角	?	—	×	—	
	B	13	B/B	○	○	×	6	多角	?	?	×	—	
	B	14	B/B	○	×	×	8	多角	?	○	×	—	○
	B	15	B/B	○	×	×	6	隅円方形	Z	?	×	—	
	B	16	B/B	○	×	×	5	多角	?	—	×	—	
	B'	17	B/B	○	×	×	—	多角	Z	×	×	—	
	B'	18	B/B	○	×	×	—	多角	?	×	×	—	
	B'	19	B/B	○	×	×	—	—	S	△	×	弱	
D	D	20	D/D	○	×	×	—	多角～円	S		○	強	○
	D	21	D/D	○	×	×	—	多角～円	?		○	強	
	D	22	D/D	○	×	×	4	多角	S		×	—	
E	E 1	23	E/E	○	×	×	—	円	?	○	×	微強	○
	E 1	24	E/E	○	×	×	—	多角～楕円	?	○	×	強	
	E 1	25	E/E	○	×	×	8	円～多角	?	○	×	微強	
	E 1	26	E/E	○	×	×	—	円～多角	S	○	×	—	
	E 1	27	E/E	○	×	×	5	?	?	○	×	微強	
	E 1	28	E/E	○	×	×	5	円～多角	?	○	×	微強	
	E 1	29	E/E	○	×	×	7	円～多角	?	—	×	—	
	E 1	30	E/E	○	×	左上	—	楕円	?	—	×	—	
	E 1	31	E/E	○	×	×	5	多角	?	—	×	—	
	E 1	32	E/E	○	×	左上	5	円～多角	?	—	×	—	
	E 2	33	E/E	×	×	×	—	円	S	○	×	—	
	E 2	34	E/E	×	×	×	2	円	?	—	×	—	
	E 2	35	E/E	×	×	×	2	楕円	?	○	×	微強	
F	F 1	36	F/F	○	×	×	—	円	S	○	×	強	
	F 1	37	F/F	○	×	左上	12	楕円	S	○	×	—	
	F 1	38	F/F	○	○	×	—	円	?	○	×	—	
	F 1	39	F/F	○	×	左上	5	—	?	—	×	—	
	F 1	40	F/F	○	×	×	3	円	?	—	×	—	
	F 1	41	F/F	○	×	左上	8	円	?	—	×	—	
	F 1'	42	F/F	○	×	×	—	円～多角	?	○	×	微強	
	F 1'	43	F/F	○	×			円～多角	?	○	×	強	
	F 1'	44	F/F	○	×	×	—	多角	S	○	×	強	
	F 1'	45	F/F	○	×	左上	5	円	S	○	×	—	
	F 1'～2	46	F/F	○	×	左上	—	円	?	—	×	—	
	F 1'～2	47	F/F	○	×	左上	—	円	?	—	×	—	
	F 1'～2	48	F/F	×	×	左上	3	多角	?	—	×	—	
	F 2	49	F/F	○	×	左上	—	円～多角	S	○	×	強	
	F 2	50	F/F	○	○	×	—	多角	S	○	×	強	
	F 2	51	F/F	?	×	—	—	—	—	○	×	強	
	F 2	52	F/F	?	×	—	—	—	—	○	×	強	
	朝顔	53	F/F	?	×	—	—	—	—	—	×	微強	
	朝顔	54	F/F	×	×	×	×	—	?	○	×	微強	
	朝顔？	55	F/F	×	×	×	×	円～多角	S	○	×	微強	
G	G	56	G/G	○	×	×	8	円	?	—	×	—	
H	H 2	57	H/H	×	×	×	2	円～多角	?	○	×	—	○
	H 2	58	H/H	×	×	×	2	円～多角	S	○	○	—	
	H 1	59	H/H	×	×	×	2	円～多角	Z?	○	×	微強	
	H 1	60	H/H	×	×	×	—	円～多角	?	○	×	—	
	H 1	61	H/H	×	○	×	5	円	S	○	○	—	
	H 1	62	H/H	×	×	×	4	円～多角	?	○	×	微強	
	H 1	63	H/H	×	×	×	—	円～多角	S	○	×	—	
	H 1	64	H/H	×	×	×	—	円～多角	S	○	×	—	
	H 1	65	H/H	?	△	—	—	—	—	○	×	—	
	H 1	66	H/H	×	×	×	7	円	?	—	×	—	
	H 1	67	H/H	×	×	×	—	多角	?	—	×	—	
I	I	68	I/I	×	×	×	2	円～多角	?	○	×	微強	
	I	69	I/I	×	×	×	1	円～多角	S	○	×	微強	
	I'	70	I/I	×	○	×	4	円～多角	?	○	×	微強	
	I'	71	I/I	×	×	×	5	多角	?	—	×	—	
	I'	72	I/I	×	×	×	5	円～多角	?	—	△	—	
	I	73	I/I	×	×	×	—	多角～楕円	?	○	×	微強	
	朝顔 I	74	I/I	×	×	—	—	—	?	○	×	強	
J	J	75	J/J	△	×	×	5	円～多角	?	○	×	微強	
	J	76	J/J	×	×	×	5	多角	?	○	×	弱	
	J	77	J/J	△	×	×	4	楕円	?	○	×	—	
K	K	78	K/K	×	×	×	3	円	S	○	×	強	
	K	79	K/K	—	×	—	—	—	—	○	×	—	
	朝顔 K	81	K/K	×	×	×	7	円	?	○	×	微強	
	朝顔 K	82	K/K	×	×	×	5	円	?	—	×	—	
	朝顔 K	83	K/K	×	×	×	1.5	円	?	—	×	—	
L	朝顔？	80	L/L	×	×	×	×	多角～円	?	—	×	—	

区分も他と同じ一属性と見なして、むしろ家族的類似性（註３）を重視し、α－ｂとβ－ｂ－１は一括して、Ｅ類にまとめることができる。

ハケメＦを施す各類型の場合、そもそもα－ａ－３内の細分はプロポーションの漸移的変異を基準に設定したものである。しかし、内外面のハケメの一致と、その他の要素の共通性、すなわち、口縁部の外面側への丸い突出、ほぼ正円の整った底面形、全体の整った作り等の類似を勘案すると、この細分をむやみに遵守する必然性はない。そこで、α－ａ－３の細別類型をまとめて、Ｆ類としたい。

ハケメＨを施すβ－ｂ－２－１とβ－ｂ－２－２は、内面調整のハケメの範囲で細分した。だが、これ以外の要素はほとんど一致するので、Ｈ類としてまとめる。

ハケメＩを施すβ－ｂ－３とβ－ｂ－４は、プロポーションと凸帯位置（各段の高さ）で細分した。一見、確かに別類型に分離したくなるが、細部を見ると（図版83・103）、凸帯の作り、下から左方向へ横に間延びして切り抜く透孔、整った底面形・安定して薄い器壁等、類似する点が多いので、まとめてＩ類として考えたい。

さて、形状に基づく分類を行い、ハケメの識別結果を合わせて分類を進めた。その結果、第10表の通り、山倉１号墳の円筒埴輪はＡ類～Ｌ類の11類型に大別できる。

上述の通り、ハケメ（工具・原体）の異同は、手法属性のまとまりのそれぞれとの間に明瞭な相関を確認できる。この様相と、内外面のハケメに同じ工具が同一方向にほぼ一貫して使われる事実を重ね合わせると、山倉１号墳の円筒埴輪の場合、その製作に当たっては、ハケメ工具はそれぞれの工人が占有していたと考えられ、工具の属人性が認定可能だと思われる。すなわち、先に設定したＡ類～Ｌ類の11類型は、円筒埴輪を製作した工人それぞれの作品を表しているのである。

５　工人の作品として見た各類型

一般的に、土器等を対象とした型式学的検討においては、製作・使用・廃棄のタイミングがバラバラで、様々な経緯の結果として集合した資料群を秩序づけることになる。その方法は、属性の揃った中心的事例を基準資料とすることによって各型式を設定して、それらの間で変異の大きさの勾配を見出し、資料を位置づけるというものである。このときの主な目的は時間軸に沿った変異の分布の把握である。そのため、同一地域内の型式の変異は時系列の変化に還元してイメージされることが多い。

これに対して、本節でいま検討している埴輪の場合は、製作時期は古墳築造を契機とする短期間に収まり、使用機会は一回限りの配置で完結するという、極めて限定された存在様態を示す。このため、埴輪を対象とした分類では、土器等を対象とする場合に比べて条件が恵まれていることによって、土器等における「型式」の内部を議論することが可能になる。つまり、型式学的分類においては切り分ける基準に用いられる諸属性に対して、いわば、まとめる作業を行うことによって個体同士の関係が推定できるわけである。具体的に言えば、それは、製作者を想定して、その作品群に対して資料の帰属を考えることである（川西1977、犬木1995等）。

以下では、埴輪という資料の考古学的な特性を踏まえ、埴輪を製作した工人を仮定していくつかの検討を試みる。だが、このように、対象によって検討手段を切り替えることは、もちろん対象の性質に応じた選択であり、採用しない他方を否定するものではないことをまず確認しておきたい。

さて、山倉１号墳に埴輪を供給するための生産地における埴輪生産プロジェクトにおいては、それ

ぞれの工人が常に同じハケメ工具を使うような体制であったと考えられる。実際、そう前提して、形態的な分類による各類型をハケメの異同で再分類した方が、理解しやすい資料も存在する。以下では、各工人の手法・クセの視点で、改めて円筒埴輪（作品）のまとまり具合の特徴を記述しながら、他器種についても検討したい（各属性の相関関係は第10表参照）。

工人Ａの作品（第14・15・77図、図版73・98）

ハケメは最も粗い工具Ａを用いて施す。内面のハケメは、工具Ａの同端裏向きを進行方向に対して鋭角をなすように施す例が下位に多い。内外面とも本来の最大幅を呈する単位は皆無である。口縁部のヨコナデは強く、端面が明瞭に凹面をなす。また、透孔の穿孔面にもナデをしっかりと施す。

外面の底部調整は、条痕（木目）が伴わないか、それが非常に判りにくい工具で施す。また、内面の底部調整としてヘラケズリを行う。他に、製作中に生じた亀裂を修正するために、ごまかしナデを施し、ヘラ状工具の刺突・押圧による補修も行うのも工人Ａの特徴である（図版94）。なお、ハケメが粗いためか器面に指紋を見出しやすい（図版93）。

工人Ａの作品に共通するのは、粗い作風ながらも手慣れて安定した作りである。山倉１号墳の場合、作ったのは普通円筒埴輪１種類だけのようである。

なお、ハケメ工具Ａは工人Ｈの作品のハケメＨの条線パターンの逆目とよく似ている（図版96）。このことは、仮に両工具が同じ原材から作られたとすれば、工人Ａと工人Ｈの近しい関係を物語ると言えよう。

工人Ｂの作品（第16～20・77図、図版74・75・99）

ハケメＢを施す。口縁部のヨコナデが緩いうえ、底部調整の板押圧（あるいはタタキ）の一単位が大きく、全体に粗雑な印象の作りである。底部は、粗い底部調整によって横断面形が多角形に近く歪み、また、底部端面が大きく内屈しているものが目立つ。基部はほとんどがＺ接合である。

プロポーションは、凸帯間が膨らむ太めのものから、細いものまである。ただ、基部粘土帯と粘土紐積み上げの境に窪みが目立ち、その箇所の作りが不連続であることは共通の特徴と見なせる。透孔穿孔面のナデは、施さないか、ごく弱いナデが多い。

胎土は、色調が部分的に粘土紐単位で異なるものがあり（巻頭図版５下左）、素地の捏ね方が不充分だったか、あるいは、別の素地を混合して用いた可能性が考えられる。工人Ｂの作品では、器体の太さや胎土中の砂礫の量等において変異が大きい。この砂礫量の不定は、器壁の厚さにも影響しているかもしれない。10・11のように砂礫が多く混じる胎土の個体は比較的に薄手かつ細身で、そうでない８・18等は厚手で太めである。このことを含めて、工人Ｂの作品は不安定さが特徴と言える。

技術の未熟な工人が不均質な素地を材料として埴輪を製作すれば、変異の幅が大きくなると考えられるので、これらの作品はプロジェクト終盤というコンテクストを反映したものかもしれない。

実際、Ｂ類の最下段（第１段）高／器高比の分布を見ると、ばらつき具合は他類型に比べて大きい（第111図）。ただ、グラフ化したのは、計測可能な資料に限られるわけであるが、資料の遺存度は偶然に左右され、Ｂ類の示す「下手さ」に起因して遺存数も減ったことも考えられる。このため、グラフに見られる段差をつなぐ特徴を持つ個体の存在した可能性を考えて良いと思われる。

他類から想定できるハケメ工具の属人性を踏まえると、変異幅の大きいＢ類は、胎土から示唆される不安定な環境（例えばプロジェクト終盤）の中で、不安定な技術システム（例えば初心者）に

よって残された痕跡であると見るのも、あながち無理な視点ではないだろう。

工人Ｄの作品（第21・77図、図版76・94・95・100）

ハケメＤを施す。作りは端整な部類で、口縁部に向かって直線的に大きく開くプロポーション、底部調整で底部が丸く仕上がること、内面ヘラケズリの幅の狭いことが特徴的である。基部はＳ接合である。また、一部に、指紋の残る資料がある（図版93）。個体数は少ない。

ハケメ工具Ｄは工具Ｉと同幅・同一条線ながら走行方向が逆という関係にある（図版96）。このような関係にあるハケメ工具は、打ち割りによって作られた別工具と考えられる。もしそうであれば、工具の使い始めが揃うことを意味するので、工人Ａと工人Ｈの関係と同様に、工人Ｄと工人Ｉは近い時期に活動していた可能性が窺われる。

興味深いのは、20の第１条凸帯の貼り付けが行き違っていることである（図版95）。凸帯位置の設定を行わなかったことを示す好例なのはもちろんだが、このことには、これを直さずに貼り付けてしまう、この工人の意識の有り様、立場が示唆されているのではないだろうか。

工人Ｅの作品（第22～25・78図、図版76～78・95・100）

条線間隔の細かいハケメＥを施す。小振りの整った作りで、器壁も概ね安定している。作品には、底部内面ヘラケズリを行わない個体もあるが、許容内の変異と考えたい。工人Ｅは、普通円筒埴輪のみを作り、形象埴輪・朝顔形埴輪は製作していないようである。

Ｅ類の一部に、底部調整の板押圧に伴う左上がりの条痕が見られる。これは、用いられたのが木目と軸の合う工具だったとすると、右利きの工人が口縁部を下にして置いた埴輪を回りながら螺旋状に押圧（あるいはタタキ）を施したと考えられる。この条線が明瞭なのは、Ｅ類とＦ類である。

工人Ｆの作品（第26～32・53～66・68～76・78～81図、図版49～72・78～80・85・95・101・102）

工人Ｆの特徴は、端整な作りの作品と、製作個体数の多さである。透孔の切り方も歪みが少なくほぼ正円で、凸帯もごく低いまま一定にヨコナデで仕上げ、安定した技術が感じられる。

また、工人Ｆは、普通円筒埴輪の製作数が確認した工人の中で最も多いうえに、朝顔形埴輪も作り、水鳥形埴輪を除くほぼすべての形象埴輪を製作したと考えられる、圧倒的多数の製作者である。人物埴輪については、面立ちや、その他の部位の類似から、一見して同一の作風が窺われる。

ハケメは工具Ｆで施すが、ほぼ一定して、外面には工具の右端近く、内面には左端近くが当たっている。形象埴輪のハケメの具合もすべて同様である。なお、形象埴輪のハケメも円筒埴輪と同じく、どの部位のハケメも一致しているので、形象埴輪の製作は工人Ｆが全工程を一貫して行った可能性が高い。分業があったとしても、素地作りや、粘土紐の供給においてサポートを受けたぐらいであったと思われる。

ところで、工人Ｆの作品はレパートリーの広さを示している。このため、他のプロジェクトに参加した場合も相対的に多く製作していたとしても不思議ではない。今後、これまでに蓄積された資料を検索すれば、その作品に遭遇する可能性は高いと思われる。そのような事例が重ねられれば、生産地－供給先の関係だけではなく、工具の寿命や持ち替えのパターン、そして手法・技法の変化を考慮しながら、一工人の中での変容という興味深いテーマの展開することが期待できる。

工人Ｇの作品（第33・81図、図版81・102）

ハケメは他の半分ほどの幅しかない工具Ｇで施す。内面のハケメは、斜めに短いストロークで、き

つく密に施すのが特徴的である。これは、工具幅が狭いために、しっかり器面に当てられたという見方もできる。底部調整は、外面に板押圧、内面にヘラケズリを施し、底面形はほぼ正円に整っている。

非常に薄手の作りで軽量である。また、色調は、オレンジに近く明るい橙褐色で、焼き上がりも良い。このため、全体的に端整な印象である。

円筒埴輪の１個体しか確認できないが、一見して独特な外観を呈するものである。工人Ｂの作品と比べると明瞭だが、相対的に熟達した技量が感じられる。

工人Ｈの作品（第33～36・82図、図版81・82・94・102）

粗い条線が特徴的なハケメＨを施す。器壁は薄めで、整った作りのものが多く、口縁の開きの小さい直線的なプロポーションを呈する。底部調整に内面ヘラケズリを施さないが、底面形は整っている。また、外面の板押圧の具合も安定している。工人Ａと同じく、ときにごまかしナデを行う（図版94）。基部は、確実なものはすべてＳ接合である。

工人Ａと工人Ｈは、指紋の遺存・ごまかしナデが共通する上に、Ａ類のハケメＡは、Ｈ類のハケメＨとほぼ逆目の関係にある。両者は空間的にも時間的にも近い者であった可能性が高い。

なお、57・58では中位以下に内面のハケメを施していない。これは、前工程のナデによる仕上がり具合が良いために、ハケメを省略した可能性が考えられよう。工人は機械ではないので、作品にこの程度の変異があることになんら不思議はない。全作品に完全な一致を期待するのは誤りである。

工人Ｉの作品（第37～39図、図版83・85・103・104）

内外面ともにハケメＩを施す。小振りのＩ類とそれに比べて背の高いI’類とに分けられるが、ハケメ工具の一致と、底部内面ヘラケズリが行われないこと、口縁端部の作り、凸帯の形状、胎土等に、共通性が見出せる。両者は同一工人の作品内における変異と見ることができる。

ところで、69は器高が低く口縁部が大きく開く特徴を持つが、このことは朝顔形埴輪と同時に製作していた可能性を示唆する。というのも、最下段が低く、口縁が開くというのは、まさに朝顔形の特徴だからである。両者を並行製作していたために形がつい似てしまったのではないだろうか。また、朝顔形埴輪74は円筒部の凸帯が別素地で作られているが、その色調は円筒のものに似ている（円筒部体部が赤褐色、凸帯が橙褐色）。これも、その可能性を補強する事実と言えよう。

工人Ｊの作品（第40・82図、図版84・104）

内外面ともにハケメＪを施す。口縁部のヨコナデが緩い特徴を持つ。底部内面に、ヘラケズリかナデか判断に迷う擦痕が見られる。ヘラケズリを行っていたとしても非常に弱い程度のものである。

Ｊ類は概して整った作りで、形状が安定している。個体数は少ない。

工人Ｋの作品（第41・42・67・82・83図、図版95・105）

内外面ともにハケメＫを施す。工人Ｋは、普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・水鳥形埴輪を作り、工人Ｆ以外では唯一、朝顔形埴輪に加えて形象埴輪を製作することが確認できる。

工人Ｋは、朝顔形埴輪にも底部調整を施すという興味深い特徴を持つ。これは、普通円筒埴輪の内外面にハケメを施す工程（上述の④工程）まで行った後、埴輪を倒立させ、底部外面に板押圧を施し、再び正立させ、肩部以上を成形するという手順を踏んだ結果と考えられる。

遺存の良好な朝顔81の内面で見ると、肩部を積み上げた粘土紐は、円筒部内面のハケメを覆っている。そして、円筒部の高さは、普通円筒埴輪の器高とほぼ一致する。このことは、はじめから朝顔形

埴輪を連続して何本も作るのではなく、複数の工人が数を打ち合わせながら円筒埴輪と平行して製作していたことを窺わせる。朝顔形埴輪が個体数の少ないわりに、複数の工人で分担して製作されているのは、円筒埴輪を製作する場面・段階で、複数の工人が互いに数を調整しながら作業を進めていたことを反映していると考えられよう。

なお、形象埴輪で唯一ハケメが異なることについては、形象埴輪の製作を一手に担う工人Ｆが、水鳥形埴輪を作る際に別の工具を使ったためにハケメだけが異なるという可能性も考えてみた。しかし、水鳥形埴輪と他の形象埴輪は、透孔や凸帯の特徴が相違し、器壁の厚さも異なる。また、細かく見れば、胎土の色調・雰囲気も違っている。山倉１号墳の埴輪では、ハケメの異同と手法属性のまとまり具合が一致することからすれば、やはり、別の作者と見るのが妥当である。

工人Ｌの作品（第41・83図、図版84・104）

内外面ともにハケメＬを施す。埴輪列中からの出土は80の１個体のみである。80は底部調整を施さないので、朝顔形埴輪の可能性が高い。器壁・底面形ともに歪みがあり、整った作りとは言えない。また、工人Ａ・工人Ｈと同様に、亀裂を補修するごまかしナデを行っている。

破片には、底部調整を施すものがあり（第52図245他）、普通円筒埴輪も製作したことは確かである。ただ、個体・破片資料ともごく少数なので、本来の製作数自体が少ないと思われる。

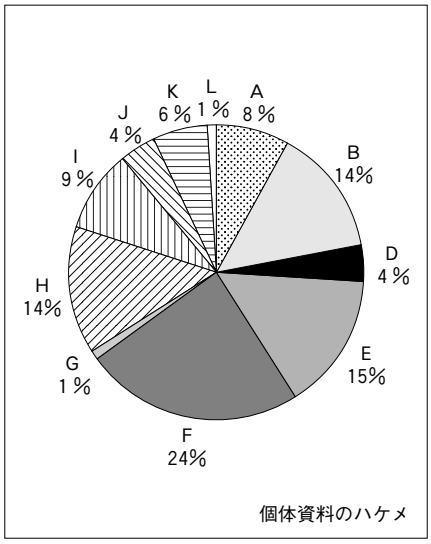
以上、あえて工人の作品と表現しつつ各類型の特徴を見てきた。

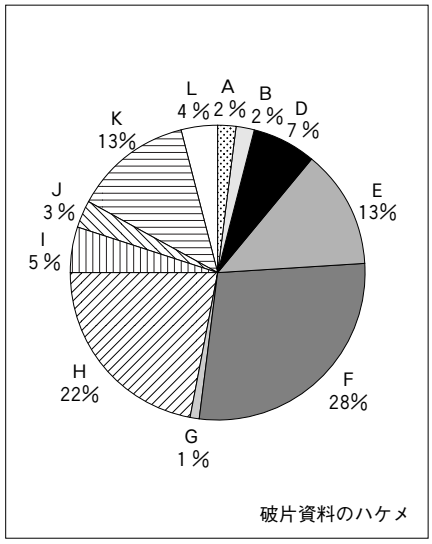
ハケメの一致でＡ類～Ｌ類にまとめた同じ類型の中には、細部の形状の相違で、型式学的分類では別型式とされるような大きな変異を示すものがある。だが、一人の工人という視点から考えると、別の一貫性を見出せるのである。一言で言えば、未熟で下手な工人もいるし、熟練していながら粗雑な工人もいるということである。前者の作品群は不安定で、後者の作品群は一貫して粗い。これは工人の個性という観点から見なければ、説明が困難である。まとめる視点を持たなければ、個性の発現も別型式に分解されてしまうだろう。

また、工人の編成状況という面から理解できる点もある。製作する工人すなわちシステムが仮に一定でも、環境は変動する。例えばプロジェクトの終盤であるとか、条件はその時々で変化するのであり、そのために、発現するかたちは様々に変化することが予想される。実際は、いまシステムとした工人側も必ず安定しているわけではないのだから、システム側の変動と環境の変動、両者の相乗でより大きな相違となって現れると見るのが自然である。同じ人間であっても、時間をかけて良い時と急かされる時では結果の違うことが当然であるように。そのような状況的要因と工人自体の安定性が絡み合って結果としての作品が生まれると言える。

さて、ハケメの識別は、一致する（それである）か、一致しない（それでない）か、デジタルに判断できる。しかも再現可能性・共通認識が確保できるという利点を持っている。

終末期の２条凸帯３段構成の円筒埴輪は、埴輪として最低限の属性しか持たないし、単純に有無で判断できるような属性自体が少なく、区切りのつけにくい漸移的な特徴が多い。そういった資料群に対してこそ、ハケメの一致というデジタルな指標の存在価値があるのではないだろうか。後述するように、山倉１号墳のような規模の古墳に供給される埴輪の場合、一生産地で賄われることが多いと見られる上に、「発注」を受けて生産されることによって製作時期もまとまっていると考えられる。このため、ハケメの識別・同定作業が同工品の認定に繋がることが望めるのである。そうなれば、形状





個体資料		破片資料	
A	6	A	3
B	11	B	4
D	3	D	12
E	12	E	22
F	20	F	51
G	1	G	1
H	11	H	40
I	7	I	9
J	3	J	5
K	5	K	22
L	1	L	7
計	80	計	176

個体資料	降順	破片資料	降順
F	20	F	51
E	12	H	40
H	11	E	22
B	11	K	22
I	7	D	12
A	6	I	9
K	5	L	7
D	3	J	5
J	3	A	3
G	1	B	4
L	1	G	1
計	80	計	176

指数	占有率%	ハケメ	人物	家	器財	動物	朝顔	円筒	
35.5	27.7	F	○	○	○	○	○	○	(馬＋鶏？)
25.5	19.9	H						○	
17	13.3	E						○	
13.5	10.5	K				○	○	○	(水鳥)
8	6.3	I				△	○	○	(鶏？)
7.5	5.9	D					△	○	
7.5	5.9	B						○	
4.5	3.5	A						○	
4	3.1	J						○	
4	3.1	L					△	○	
1	0.8	G						○	

指数＝破片＋個体÷2　　△は可能性

第109図　円筒埴輪におけるハケメの比率と製作器種の対応関係

や凸帯位置の変遷等の型式学的把握を縦糸に、同工品の認定とそれに基づく工人の追跡を横糸とすることで、埴輪生産の現場の実像により近づけることが期待できよう。

続いては、以上を踏まえて数量的な検討を加えながら、生産体制について考えてみたい。

6　個体数・種別から推定する生産体制のイメージ

ハケメ各類の円筒埴輪が全体に占める割合は、第109図の円グラフに示した通りである。グラフは、左が上記の類型設定に用いた個体資料、右が破片資料をデータとする。一見して判るのは、共通してＦ類が多いことと、概ね双方で多寡の分布傾向が一致することである。破片資料は、部位と大きさを基準に、実測対象にする破片を無作為に抽出したもので、実測もハケメの識別前に行った。そ

れにも関わらず、両方の集合で割合が似ていることは、ハケメ同定の妥当性を保証するとともに、本来の配列数・製作数における割合が良好に反映されている可能性を示している。

なお、グラフを細かく見ると、A類とB類は個体数に比べて破片が少ない。これは、ハケメが粗いことや、胎土が特徴的という点で、目にとまりやすく、破片の多くが個体資料と接合できたためとも解釈できる。ただ、同じように粗いハケメのH類は逆の様相なので確定はできない。

さて、第109図下段の表は、個体資料数と破片資料数を加えて、2で割った値を指数とし、それを用いて降順に並べ、製作した埴輪との相関を示したものである（占有率は指数の百分率比）。

占有率最高の工人F（27.7）は、朝顔形埴輪に加えて、ほぼすべての形象埴輪を作る。対して、2番目に多い工人H（19.9）と、次の工人E（13.3）は普通円筒埴輪のみを製作している。この上位3人の作品で円筒埴輪全体の約6割を占める。

工人K（10.5）は、少なくとも朝顔形埴輪に加えて水鳥形埴輪2体を作る。工人I（6.3）は朝顔形埴輪を作り、可能性は非常に低いが、鶏形埴輪を作ったかもしれない。これ以下の工人D（5.9）・工人B（5.9）・工人A（3.5）・工人J（3.1）・工人L（3.1）・工人G（0.8）の中では、工人D・工人Lに朝顔形埴輪を作った可能性がある他は、いずれも普通円筒埴輪だけを製作している（註5）。

はたして、図表に表されるこの数量比は、単純に各工人の技量差に基づくのだろうか。製作個体数の多い工人Fが最も多種の埴輪を作っているということは、その見方を一見支持するように思われる。だが、その差はあまりにも大きすぎる。そしてまた、円筒埴輪を作る「並」の工人が、円筒埴輪だけを作っているのなら、いくら技量に差があるとしても、形象埴輪も作っている工人より、円筒埴輪の製作においては個体数を伸ばすとも考えられる。単純に、埴輪製作の作業で均等割の分業があったというイメージでは、工人Fに超人的な力量を想定しなければならなくなるだろう。

これらの点を解釈するには、工人の個性だけではなく生産体制についての仮説が必要である。

ここで考えられるのは、仮に生産地を1ケ所と見なす場合、熟練度の違いが現れる上に各工人の業務分担がそれに重なるために、並列的に作業する場合と比べ、製作個体数の差が大きくなった可能性である。つまり、難易度の高い形象埴輪を作ることのできる工人は、同時により良い円筒埴輪の製作者であっても構わないのだが、作業分担の偏りがさらに製作数の格差に拍車をかけたと考えられるのである。我々が目にするのは、結局、結果としての個体数にすぎない。

このことを説明するには、やはり分業があるものの、各作業のニーズの時系列変化によって埴輪製作への参加者が増えるというモデルが当てはまると考えられる（第110図上）。

はじめに製作を開始するのは難易度の高いもので、限られた工人（以下、「エース工人」という）が担当し、他の工人は粘土採掘・素地作り・築窯・燃料採集等、プロジェクト全体が円滑に進むように環境整備から手をつけたと思われる（t1～t3）。この中でエース工人に対する素地・粘土紐の供給もサポートとして行われていたかもしれない。そして、徐々に手の空いた者から、必要に応じて次に難易度の高い動物形埴輪などの製作にかかり（t4～t5）、最後に総出で円筒埴輪の製作に取りかかったのだろう（t6）。人物埴輪・器財埴輪等の形象埴輪を作り続けたエース工人が最後まで埴輪製作に専従した結果が、個体数と種類の多さの原因であると考えられる（図で「遺物として遺存」とした灰色のコマが多いほど結果として残る埴輪が多いということである）（註6）。

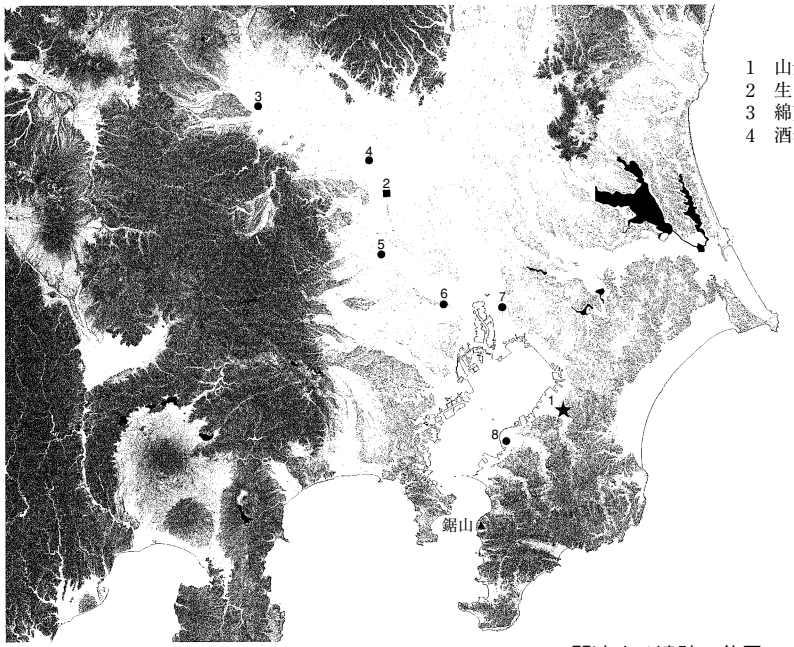
このようなイメージでとらえれば、器種の偏りと、個体数の多寡がうまく説明できると思われる。

時系列→	t1	t2	t3	t4	t5	t6	t7
工人あ	形象製作	形象製作	形象製作	形象製作	形象製作	円筒製作	燃料採集 焼成
工人い	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	築窯	築窯	形象･円筒製作	円筒製作	円筒製作	燃料採集 焼成
工人う	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	築窯	築窯	形象･円筒製作	円筒製作	円筒製作	燃料採集 焼成
工人え	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	築窯	築窯	円筒製作	円筒製作	円筒製作	燃料採集 焼成
工人お	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	築窯	築窯	粘土捏ね	円筒製作	円筒製作	燃料採集 焼成
工人か	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	築窯	粘土捏ね	粘土捏ね	燃料採集 焼成	円筒製作	燃料採集 焼成
工人き	粘土採掘 (兼灰原掘削？)	粘土捏ね	粘土捏ね	粘土捏ね	燃料採集 焼成	円筒製作	燃料採集 焼成
工人く	粘土紐供給 など補助	粘土紐供給 など補助	粘土紐供給 など補助	粘土紐供給 など補助	粘土紐供給 など補助	円筒製作	燃料採集 焼成
工人け	燃料採集	粘土捏ね	燃料採集	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成
工人こ	燃料採集	燃料採集	燃料採集	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成	燃料採集 焼成

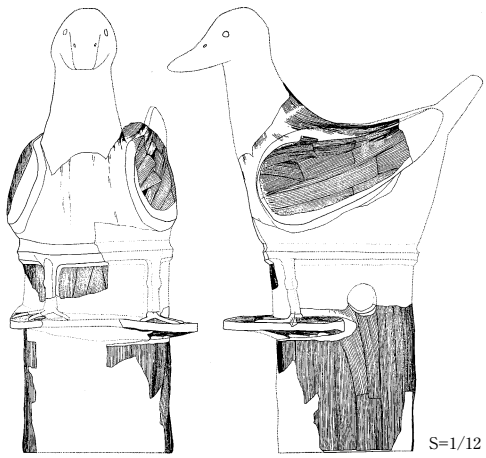
エース工人体制のイメージ　　遺構として遺存　遺物として遺存

工人	ハケメ工具	山倉１号墳 出土資料	生出塚遺跡 一致例	他遺跡のハケメ一致資料 同工品の可能性があるもの
A	A	円筒	円筒・大型円筒	A の逆目とほぼ一致：赤羽台４号墳(円筒・形象)
B	B	円筒	円筒	
D	D	円筒	円筒	
E	E	円筒	円筒	
F	F	円筒・朝顔・全身像・半身像・馬・鶏・家形・靫・鞆・大刀・矛・翳	円筒･朝顔･家形	F の逆目と一致：南大塚５号墳（円筒外面）
G	G	円筒	円筒	
H	H	円筒	円筒・大型円筒	
I	I	円筒・朝顔	円筒	
J	J	円筒	円筒・不明形象	
K	K	円筒・朝顔・水鳥	円筒・朝顔・水鳥	K と一致：法皇塚（半身像）、南大塚４号墳（円筒内面）
L	L	円筒・朝顔？	円筒・半身男子	

山倉１号墳の工人のレパートリー



1　山倉1号墳　　5　南大塚4・5号墳
2　生出塚遺跡　　6　赤羽台4号墳
3　綿貫観音山古墳　7　法皇塚古墳
4　酒巻14号墳　　8　金鈴塚古墳



S=1/12

関連する遺跡の位置　　生出塚遺跡20号窯出土の水鳥形埴輪

第110図

また、「工人け」や「工人こ」のような遺物として残らない活動を行ったメンバーがいたことも想定できよう。以下では仮に、この不均等な役割分担の体制を、エース工人体制と呼びたい。

さて、このモデルでは粘土採掘・築窯等で代表させたが、実際は他にも多様な作業が要求されたものと思われる。埴輪工人集団は埴輪製作に専従していた可能性も考えられるが、それはその時々のエース工人や中核的なメンバーだけであったかもしれず、多くは他の生業に要する時間をそれぞれ持っていたと考えるのが自然である。埴輪製作以外の生業活動が、図中の雑務に混ざり込むのが現実に近いと予想されよう。

ただ、このように補足したところで、上に述べたモデルはあくまでも大雑把なイメージにすぎない。

まず、各作業の規模が明確ではない。さらに１つのプロジェクト内での反復性も不明である。現実には、埴輪の乾燥期間・焼成後の窯を冷ます期間等が必要で、全体的に作業はそのリズムに規定されていたことが考えられるので、断続的にあるパターンが繰り返され、散発的に製作が行われる形態が基本であったことを想定できる。図の「築窯」の部分を窯が次に使えるようにするメンテナンスと読み替えて、t1～t7を複数回繰り返すかたちがそれに近いのかもしれない。なお、その単位の反復が行われている場合にもエース工人は作り続けていると見ることは可能である。

次の問題点としては、常に同じメンバーが参加して、最初から最後まで作業する必然性のないことが挙げられる。忙しくなるタイミングだけパートタイムのメンバーを増員しても不思議はないということである。ただし、この場合は、エース工人のあり方がますます際だつことになるだろう。

また、これとは反対に、窯が複数あれば、使用のタイミングをずらして、ある程度連続して生産することが予測できる。つまり、常に忙しい場合も想定可能である。これは定着的な埴輪生産地であれば可能だろう。窯の操業は焼成後すぐに再開できるわけではないので、もし、複数の窯が並行稼働しており、さらに効率性を求めたとするならば、火を入れる時期をずらして焼成したものと考えられる。これは生産地の技術的環境の復元に関わることなので限定的に言及するだけにとどめるべきかもしれないが、可能性としては成立する方法である。しかし、古墳時代に「経済人」を前提とする必要はないから、それはあくまで効率重視の場合の極端な例としておきたい。現実的には、やはり、それ以外の生活があると思われ、全員がフルタイムの埴輪工人とは限定できないのである。

このように生産地における環境の想定如何で細部は変わってしまうものの、エース工人体制のモデルは適宜変更を加えることでおおまかなイメージとしては適用できると考える。以下も、このモデルに基づいて推論する。

7　同じハケメを持つ資料と生産地

ここまでの解釈では、ハケメ工具と手法（クセ）の組み合わせから、全工程に常時携わったかは別にして、結果として最少11人の工人が山倉１号墳の埴輪を製作したと推定した。そして、各工人が製作した埴輪の個体数に不均等があることから、エース工人の存在を仮定した。埴輪自体から推察できることは以上の通りであるので、続いては埼玉県鴻巣市生出塚（おいねづか）遺跡との関係について述べたい。

生出塚遺跡は、古墳時代後期の継続的な埴輪生産遺跡で、埴輪窯40基・工房２軒・粘土採掘坑１基が検出されている（山崎1999b）。この生出塚遺跡の埴輪と山倉１号墳の埴輪が類似することは、早くから注意されていて、山倉１号墳の埴輪は、生出塚遺跡から供給されたか、その製作者集団が派遣

されたか、いずれにしても生出塚遺跡の製作者集団が作った埴輪と推定されてきた（山崎他1987、車崎1988等）。後に、両者の関係は胎土分析によって追認されて（三辻1994）、ほぼ定説となり、埴輪の遠距離供給の好例として位置づけられた（車崎1995等）。さらに、生出塚遺跡Ｐ地点（31号窯）・46地点（39号窯・40号窯）の調査の結果、出土埴輪に酷似する資料の存在が確認されたことで、山倉１号墳の埴輪は生出塚遺跡31号窯で焼成されたと推定されるまでに至っている（山崎1999b）。

今回の整理作業では、山倉１号墳出土埴輪のハケメの識別を含めての分類作業を行った後に、これら既往の成果・所見に基づいて、供給元と目される生出塚遺跡31号窯の資料と実際に一致するかどうかを確認すべく、ハケメの同定作業を試行した。内容は、山倉１号墳のハケメ各類の転写コードおよび破片資料を持参して、それと生出塚遺跡の埴輪のハケメを対比するというものである。なお、両者の外面のハケメが一致することは、既に一部については、山崎武氏が拓影によって確認されていた。

作業は、鴻巣市遺跡調査会で山崎武氏と高田大輔氏に御協力いただき、2003年６月10日に実施した。円筒埴輪および形象埴輪の形態的特徴の一致については、既に山崎氏によって詳細に検討されており（山崎1999b）、このときもそれを改めて追認できた。

この作業の結果、大変興味深い事実が判明した。

まず第一に、山倉１号墳の埴輪のハケメ11種類がすべて、生出塚遺跡Ｐ地点・46地点の資料中に確認できた。結果の詳細は第11表の通りである（「報告No.」は山崎1999bの番号）。表中の「実見」は当日に転写コードを直接照合した資料で、他は後日送付していただいた拓影の原寸コピーで識別したものである。未知のハケメが１点、不確定のものが数点あるが、Ｐ地点の報告資料のほとんどが一致することは間違いない。

両者のハケメが一致する事実は、胎土分析の結果も踏まえれば、山倉１号墳の埴輪が、生出塚遺跡Ｐ地点31号窯で焼成されたことを直接的に示している。そして、ハケメ工具が一通り見られることは、前記のハケメ工具の属人性を勘案すれば、この11種類の工具を用いる工人が同じメンバー構成で31号窯を利用して製作にあたっていたことを意味する。つまり、山倉１号墳の埴輪は複数の生産地からの供給や、時間的に隔たった製品の寄せ集めではなく、生出塚遺跡31号窯という一生産地から同時期に供給されたことが強く示唆されるのである。

Ｐ地点の北西側隣接調査区の46地点では、31号窯と灰原を共有する39号窯・40号窯が検出されており、この３基が一つの支群をなして山倉１号墳の埴輪焼成に使われた可能性も指摘されている（山崎1999b）。そして、39号窯が最も古く、他が連続して構築されたと想定されている。このうち、39号窯と31号窯は対向しており同時操業が可能な位置関係にも見受けられるが、31号と40号は接近しすぎており、これらが同時に稼働したとは思えない。遺構の配置を見る限り、前述の、可能性としての並行稼働による効率化という想定は、ここでは当てはまらないのかもしれない。仮に、連続的に築かれた窯それぞれと山倉１号墳へ供給した埴輪が対応するならば、モデルに即して言うと、この場合は焼成・メンテナンスだけでなく築窯のフェイズも反復されることがあったと考えることもできる。

さて、Ｐ地点31号窯の遺存する焼成部は、長軸2.48ｍ・最大幅1.44ｍである。続いては、この数値を参考に焼成の量的側面を検討してみたい。

焼成部面積の算定は削平も傾斜もあるので容易ではないが、仮に3.6㎡とする。普通円筒埴輪の口径をやや大きく見て、25㎝毎で密着していたとすると最大57本、間隔を含めて30㎝と仮定すると40本

第11表　山倉１号墳出土埴輪のハケメと一致する生出塚遺跡Ｐ地点他の資料

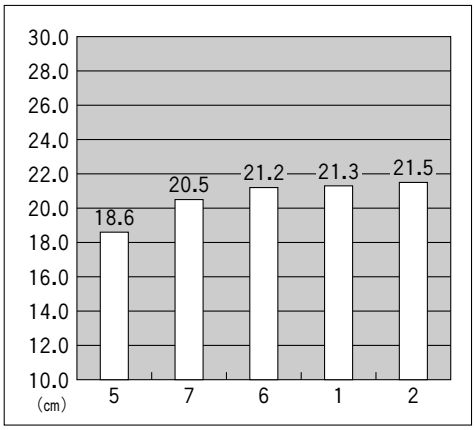
報告№	注　　記	ハケメ類型	器　種	実見	拓影	備　考
1	Ｐ地点	K	円筒		○	
2	Ｐ地点ハニ窯２区	J	円筒	○	○	
3	Ｐ地点	H	円筒		○	
4	Ｐ地点	B	円筒		○	
5	Ｐ地点31号窯	G	円筒	○	○	
6	Ｐ地点	F	円筒		○	
7	Ｐ地点	I	円筒		○	
8	Ｐ地点	B	円筒		○	
9	Ｐ地点	E	円筒		○	
10	Ｐ地点	B	円筒		○	
11	Ｐ地点	L	円筒		○	
12	Ｐ地点	B	円筒		○	
13	Ｐ地点ハニ窯２区	K	円筒	○	○	
14	Ｐ地点	D?	円筒		○	
15	Ｐ地点	A	大型円筒		○	
16	Ｐ地点	I	円筒		○	17と同一
17	Ｐ地点	I	円筒		○	16と同一
18	Ｐ地点	A	大型円筒		○	
19	Ｐ地点	F	円筒		○	
20	Ｐ地点	A	大型円筒		○	
21	Ｐ地点	L	円筒		○	
22	Ｐ地点　33と接合	H	大型円筒		○	
23	Ｐ地点	H	円筒		○	
24	Ｐ地点	B	大型円筒		○	（内面は未知）
25	Ｐ地点	A	大型円筒		○	
26	Ｐ地点埴輪窯３区	B	円筒	○	○	
27	Ｐ地点	B	円筒		○	
28	Ｐ地点	I	円筒		○	
29	Ｐ地点	L?	円筒		○	
30	Ｐ地点	K?	大型円筒		○	
31	Ｐ地点	H	円筒		○	
32	Ｐ地点	H	円筒		○	
33	Ｐ地点　22と接合	H	大型円筒	○	○	
34	Ｐ地点ハニ窯２区	D	円筒	○	○	
35	Ｐ地点埴輪窯３区	B	円筒	○		
36	Ｐ地点31号窯	L	円筒	○	○	
37	Ｐ地点	未知	大型円筒？	○	○	24と関係か
38	Ｐ地点	D	円筒		○	
39	Ｐ地点	F	円筒		○	
40	Ｐ地点	B	円筒		○	
41	Ｐ地点	I	円筒		○	
42	Ｐ地点埴輪窯２・３区	E	円筒	○	○	
	Ｐ地点31号窯炭化物層焚口	B	？	○		報告外
	Ｐ地点31号窯覆土	D	円筒	○		報告外
	Ｐ地点　グリッド	H	円筒		○	グリッド１
	Ｐ地点14号墳２区覆土	J	不明形象	○		グリッド10
	46地点埴輪窯３区トレンチ	A	大型円筒	○		未報告
	46地点39号窯炭化物層	F	円筒	○		未報告
	46地点ハニグン A−２区フ	F	家形	○		未報告
	46地点埴輪窯上層覆土	F	朝顔	○		未報告
	46地点	L	半身男子	○		未報告
	46地点	K	大型朝顔	○		未報告
第３集	D・E地点20号窯	K	水鳥	○		展示

A類

図番号	最下段高
5	18.6
7	20.5
6	21.2
1	21.3
2	21.5

(cm)

平均	20.6
標準偏差	1.2

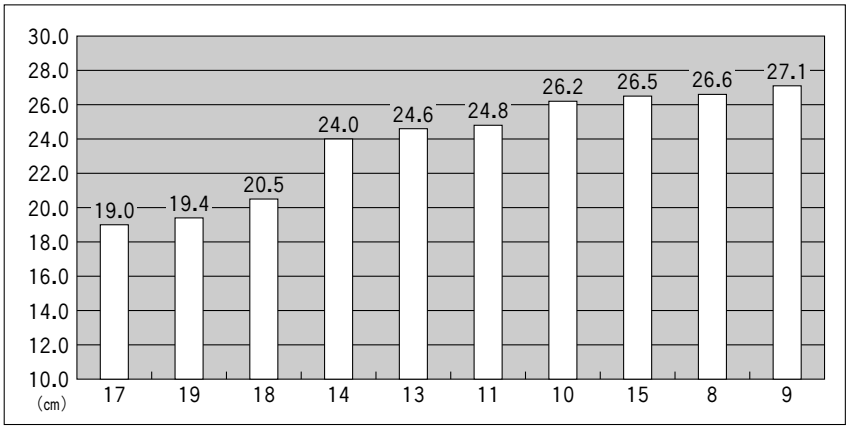


B類

図番号	最下段高
17	19.0
19	19.4
18	20.5
14	24.0
13	24.6
11	24.8
10	26.2
15	26.5
8	26.6
9	27.1

(cm)

平均	23.9
標準偏差	3.1

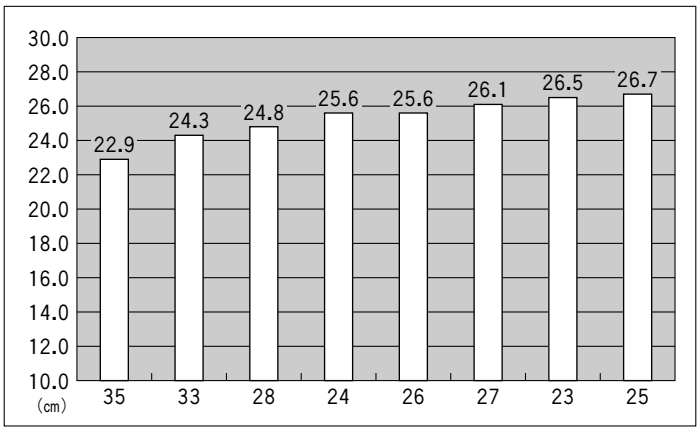


E類

図番号	最下段高
35	22.9
33	24.3
28	24.8
24	25.6
26	25.6
27	26.1
23	26.5
25	26.7

(cm)

平均	25.3
標準偏差	1.3

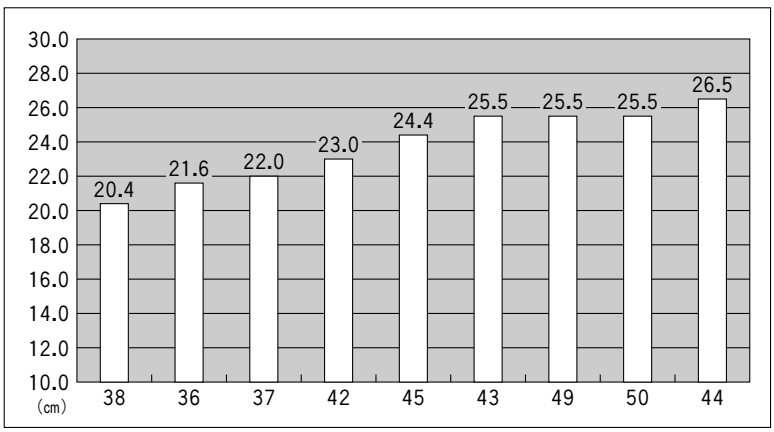


F類

図番号	最下段高
38	20.4
36	21.6
37	22.0
42	23.0
45	24.4
43	25.5
49	25.5
50	25.5
44	26.5

(cm)

平均	23.8
標準偏差	2.1



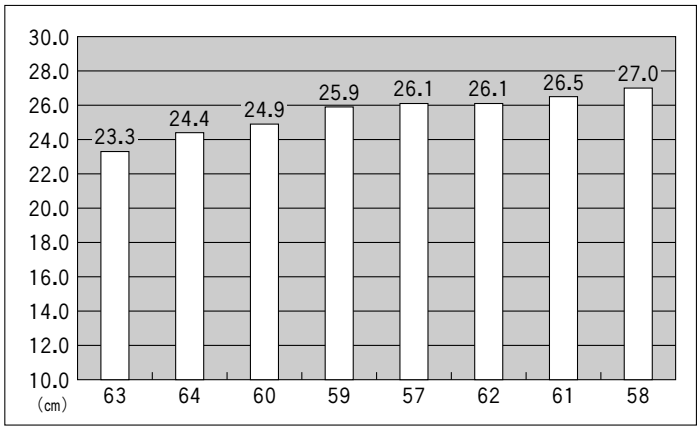
第111図　円筒埴輪最下段高の比較

H類

図番号	最下段高
63	23.3
64	24.4
60	24.9
59	25.9
57	26.1
62	26.1
61	26.5
58	27.0

(cm)

平均	25.5
標準偏差	1.2

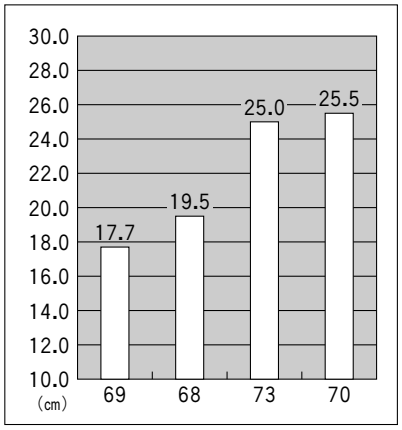


I類

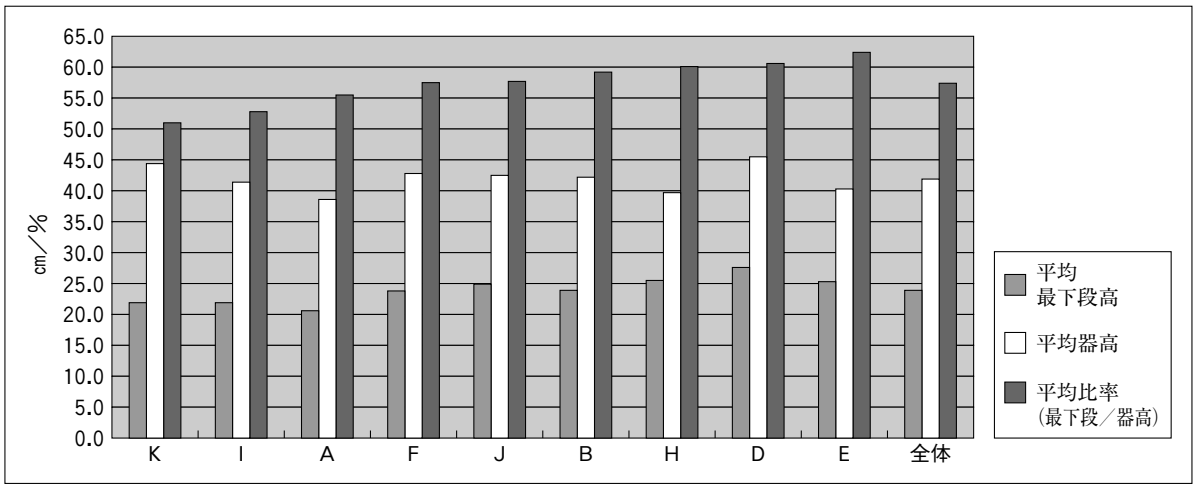
図番号	最下段高
69	17.7
68	19.5
73	25.0
70	25.5

(cm)

平均	21.9
標準偏差	3.9



類型	平均 最下段高	例数	平均器高	例数	平均比率 (1段／器高)	比率例数
K	21.9	1	44.4	1	51.0	1
I	21.9	4	41.4	4	52.8	4
A	20.6	5	38.6	1	55.5	2
F	23.8	9	42.8	6	57.5	6
J	24.9	3	42.5	2	57.7	2
B	23.9	10	42.2	5	59.2	4
H	25.5	8	39.7	2	60.1	2
D	27.6	2	45.5	2	60.6	2
E	25.3	8	40.3	5	62.4	5
全体	23.9cm	50	41.9cm	28	57.4%	28



になるので、一度に窯詰された円筒埴輪の数は50本と見積もる。山倉１号墳で必要な円筒埴輪の数を後述の配置復元案に基づき、仮に200～250本、そのうち１割程度が朝顔形埴輪として割増しして、円筒埴輪は合計で、ほぼ５回分の窯詰の量に相当すると考えられる。他に形象埴輪があり、うち確定できるのは人物埴輪全身像５体である。その他は推定になるが、人物埴輪半身像が10～15体、器財埴輪は各種（靫・鞆・大刀・矛・翳）合計20～30個体以上、家形埴輪が３個体以上、鳥形埴輪が３体以上、馬形埴輪が数体である。形象埴輪の焼成に必要な床面積を正確に算出するのは困難だが、概算すれば、窯詰４～５回分と考えられる。これに加えて損料を瓦の場合を参考にして２割程度と見積もれば、ごく粗い計算の結果だが、山倉１号墳の埴輪を焼き上げるには、11～12回の窯詰が必要だったことになる。使用した窯が１基、１回の焼成ごとに１週間の冷却・メンテナンスが必要として、各焼成に10日間を見込むと、110～120日の期間で完了することになる。築窯から開始した場合には、窯が完成するまでと、また最初に作られた埴輪が充分に乾燥するまでの期間を加えるとして、非常に大雑把な見当ではあるが、全体で４～５ヶ月程度の日数が想定できる。これは、10数名の関わる仕事としては力量的に無理のない程度ではないだろうか。期限が厳しくない、あるいは無いという条件ならば、もっと緩やかに、半年以上とも想定できるだろう。しかし、推測の多い概算ではあるが、山倉１号墳の埴輪の生産は、１年を超える期間を要するプロジェクトではなかったように思われる。

なお、山倉１号墳へ供給された埴輪の生産の実態については、未報告の生出塚遺跡46地点の詳細が明らかになれば、より具体的な推定が可能になるだろう。そのとき、上記のモデルと数量的検討の適合性が議論できると思われる。そして、埴輪の搬出作業について、さらには、工人たちが前のプロジェクトからどのようにそのプロジェクトへ移行してきたのか、次のプロジェクトへとどう移行するのか（しないのか）等、具体的な様相が追跡できるようになることが期待できよう。

もう一つ、ハケメの同定によって判った重要なことは、生出塚遺跡20号窯出土の水鳥形埴輪（第110図下右）のハケメが、山倉１号墳の水鳥形埴輪のハケメＫと一致することである（図版97、山崎1987・1994）。この生出塚遺跡20号窯の操業時期は６世紀後葉とされており、山倉１号墳の時期に先行する（山崎2000）。両資料は、全体的に表現が近似し、同工品の可能性が高いが、時期差があると考えられるので、同一工人の作品内での経時的変化というトピックに関係してくる資料と言えるだろう。これが同工品とすれば、大きさ、脚の付け根や足の表現、基台部等に見られる違いが何に起因するのか、興味の持たれるところである。

このハケメＫと一致する条線は、さらに市川市法皇塚古墳出土の人物埴輪半身像（山崎他2002：図12－66、図13－82・84）（註７）、川越市南大塚４号墳（小泉・田中1988）の円筒埴輪片内面でも確認している（図版97）。まだ他の形態的特徴についての検討を経ていないが、ハケメ工具の属人性が一時的なものでなく、プロジェクト間を超える通時的なものであったとすれば、上記の諸例は、工人Ｋが水鳥形埴輪以外の形象埴輪をレパートリーに持っていたことを意味する。

また、他にも興味深い資料が存在する。例えば、山倉１号墳の工人Ｌは、山倉１号墳では円筒埴輪しか検出されていないが、ハケメＫの場合と同じ仮定をすれば、生出塚遺跡46地点出土資料にあるとおり人物埴輪半身像を製作している可能性が高い（第11表）。また、同じ窯跡からは大型円筒埴輪が出土しており、近い時期に製作されていたと見られるが（山崎1999b）、これらにも山倉１号墳と共通するハケメＡ・ハケメＨ等が認められる（第11表）。

これらのことは、工人の製作可能なレパートリーもプロジェクト上の要求がなければ実現しないという場合があったことを示している。要するに、同じ工人であったとしてもメンバー構成と役割分担によって、結果として生産される埴輪に違いがあったのだろう。つまり、一定数の製作者は編成の都合により、「エース工人」となる場合のみに、主体的に形象埴輪の製作に当たっていたことが窺われるのである。また、当然のこととして、円筒埴輪を製作する場合でも、要求があってはじめて大型品を製作していたことが考えられる。

8　エース工人体制からの示唆

東京都北区赤羽台４号墳の埴輪は、山倉１号墳と同じく、６世紀後葉に生出塚遺跡から供給されたものである（大谷他1986、谷口他1997）。ここで確認できる外面のハケメは１種類である（註８）。外面のハケメの観察だけで、内面のハケメや形態的特徴を検討していないため不確定だが、円筒埴輪と形象埴輪（人物・馬形・鞆形）はいずれも外面のハケメが同一であることから、一人の工人の作品と考えたい。とすると、この場合は、エース工人だけで賄える生産規模だったために他の工人の作品が見られない事例とも想定できよう。前述のエース工人体制がとられており、第110図上で言えば、ｔ１～ｔ３で埴輪製作が済んでしまうようなプロジェクトだったのかもしれない。

赤羽台４号墳は直径約20ｍの円墳であり、仮に、埴輪列を最大に見積もって墳丘裾に想定し、周囲63ｍとすれば、山倉１号墳と同じ５本／1.6ｍ間隔の配列として円筒埴輪約200本の規模になる。その埴輪列の一部は形象埴輪（人物埴輪・馬形埴輪）と考えられ、さらに墳頂部に配列された埴輪も勘案しなくてはならないが、これは山倉１号墳のエース工人Ｆの事例を考えれば、一人の工人だけで製作することが不可能ではない数量だと思われる。

なお、この１種類だけのハケメは、山倉１号墳のハケメＡの逆目とほぼ一致する（図版97）。つまり、赤羽台４号墳の埴輪は、工人Ａか、あるいは打ち割り工具を分有する可能性のある工人Ｈの同工品かもしれない。この点は、今後、技法・手法の詳細な検討によって確定されると思われる。

仮に工人Ａまたは工人Ｈの作品であれば、いずれにしろ、山倉１号墳では見られない種類の埴輪を作ったケースになる。もし、そうであれば、工人のレパートリー（製作可能な埴輪の種類）は常に表出するとは限らないということを示す好例になるだろう。

また他に、埼玉県川越市南大塚５号墳では、その円筒埴輪の外面に、山倉１号墳の工人Ｆの内面に多い工具左半分の逆目と一致するハケメが見られる（図版97、川越市教育委員会文化財保護課2003）。この円筒埴輪は、ヨコナデによって口縁端部が外側へ突出する具合、凸帯の形状、整った作りにおいて、山倉１号墳のＦ類の資料とよく似ており、古相の同工品である可能性が高い（註９）。なお、さらに、このハケメＦは、生出塚遺跡１次調査出土の人物埴輪武装全身像（山崎1987）の基台部外面のハケメとも一致すると見られる（註10）。

次に、生出塚遺跡の産物ではないが、筒袖表現の人物埴輪全身像の出土等で知られる埼玉県行田市酒巻14号墳のハケメの示唆する体制も興味深い。この古墳の埴輪は、吉見町和名埴輪窯跡群から供給された可能性も考えられている（中島氏の御教示による。埼玉県立埋蔵文化財センター他2003）。

酒巻14号墳の円筒埴輪の外面のハケメは４種類が識別できる。だが、それらは実質２組の逆目の工具で構成されている（図版97）。このような事例はプロジェクトの開始と工具の使用開始時期が近

かったことを示すと思われ、その時点における継続性の低さを反映しているとも考えられる。転写コードの照合が未了であるが、人物埴輪等の形象埴輪も、円筒埴輪・朝顔形埴輪に見られる 4 種のハケメのいずれかと合致するようであり、円筒埴輪を製作する工人の中に形象埴輪の製作者と見なせる者が混じっている可能性が考えられる（註11）。円筒埴輪において、ハケメとその他の属性のまとまり方が相関することを確認できれば、仮に形象埴輪類で共通の 1 種類のハケメが見いだされた場合、ここでもエース工人体制がとられていたと見なせるだろう。

さて、以上の生出塚遺跡関係資料から示唆されるのは、まず、生産体制が同じでも、規模が変われば、結果として残るものが多様になるということである。形になって遺跡に遺存するのはエース工人の作品が多い。だが、その製作過程には数人の工人が痕跡の残りにくい別の作業を並行して行い、あるいはエース工人のサポートを行っていたことだろう。生出塚遺跡のように継続期間が長く、製作技術の成熟した段階では、各工人の姿が遺物として現出するのは、赤羽台 4 号墳を例とできるような小規模プロジェクトではなく、必要量を一工人の工程達成分では期日中に賄えないような、規模の大きいプロジェクトに出合った場合に限られるのではないだろうか。

さらに、プロジェクトによってメンバーが変わりエース工人となる者が異なる場合にも、遺物として残存する様相の変わってくることが、工人の編成という視点で推定できる。これにより、山倉 1 号墳の埴輪の様相は、工人 F がエース工人として参加した場合のものであり、可能性としては、違うレパートリーを持った他の工人がエース工人として大多数の埴輪を製作するという選択肢の存在したことが理解できるのである。

エース工人体制を想定した場合、この二つの見方を導くことができる。

9　まとめ

以上のようにエース工人体制を推定し、そのモデルに基づいて考えてみると、エース工人の人物像が問題となる。山倉 1 号墳の場合では工人 F であり、また、可能性としては工人 A、工人 H、工人 K、工人 L もそうである。おそらく他にも、別のプロジェクトでエース工人になる者がいたことだろう。彼らはメンバー内でどういう関係にあり、そして社会的にいかなる存在だったのだろうか。

今後、古墳出土埴輪の再検討を基礎に、生出塚遺跡の埴輪生産体制の復元が進められていくだろう。このとき、通常はほとんど捨象されてしまう、文字の記録に残らない個人の活動が鮮明になり、工人ごとの系譜が追跡可能になることで、その人物像を推測する手がかりが得られるかもしれない。

他方、生産体制自体が共時的・通時的にどのように位置づけられるのか、という次元の議論も必然的に要求されると思われる。例えば、矢田野エジリ古墳で想定された製作者集団のモデルは、須恵器工人の生産体制を半身に持つ点で独特かもしれない（樫田1997）。それと同様に、生出塚遺跡も埴輪の生産に特化していたとすれば、そのこと自体を反映した独自の特徴を持つはずである。埴輪の生産体制に関する資料の外面的な検討に際しては、そのことを視野に入れなければならないだろう。そしてまた、山倉 1 号墳のような遠距離にある古墳へ供給する埴輪を焼成したのは、その存続期間の終盤であるという点で、内的にも経時的変化を考えなければならない。

本節で検討したような、埴輪の諸特徴から推定されるモデルの妥当性と、歴史的脈絡におけるその事象自体の意義は、これらの議論を踏まえなければ明確にできないと思われる。

第２節　墳丘築造企画と埴輪配列の推定復元

１　はじめに

山倉１号墳の墳丘は、前述の通り、中世以降の道路跡による破壊や盛土の流出・風化作用によって遺存状態が悪い。そこで以下では、築造企画を想定して墳形の推定復元を試み、それに基づいて墳丘規模と埴輪配列を推定する。次いで、埴輪に関連する論点にも触れたい。

２　築造企画推定の方法

山倉１号墳は２段築成の前方後円墳で、台地の狭い突端尾根上に主軸方位を合わせるようにして築造されている。表土除去後に10㎝刻みの等高線図が作成されているが、これによると、下段墳丘が前方部長と後円部径が同じ程度の前方後円形、上段墳丘はやや細長い前方後円形を呈する（第５図）。横穴式石室は後円部の中央から南側に開口し、下段墳丘上面を床面として築かれている。周溝は、調査時の観察所見によれば、墳丘相似形の可能性が高い。なお、ほぼ後円部中心位置、下段墳丘上面レベルで須恵器杯蓋（第84図４）が検出されており、墳丘築造に関する遺物と考えられる。

一般的に、古墳はなんらかの墳丘築造企画法に則って造られたと考えられている。山倉１号墳の場合も、後円部がほぼ正円形で、その中心に石室奥壁が位置すること、全体がほぼ左右対称形であること、後円部東側周溝が想定主軸上で浅くなり掘削の基準に用いられた可能性の窺われること等が、築造企画の存在を示している。

山倉１号墳の墳丘外形と類似する事例には群馬県高崎市綿貫観音山古墳がある。その報告で梅澤重昭氏が行った墳丘築造企画の推定方法（梅澤1998）を山倉１号墳に適用してみると、綿貫観音山古墳の１／２規模でほぼ一致するのである。綿貫観音山古墳は、墳丘中段テラスの埴輪列が横穴式石室入口前から巡るという配列を持っており、その点においても似ている。前節の通り、山倉１号墳の埴輪が遠距離供給されたことが確実になった今、他に築造企画が流通していたとしても、そのことに不思議はない。このため以下では、綿貫観音山古墳で想定された築造企画方法を参考にする。

梅澤氏の方法は、堅田直氏の方法（堅田1982）と近似し、主軸上の定点とそれらを中心とする円弧と交点を利用するものである。これは保渡田八幡塚古墳の築造企画を若狭徹氏が検討した際にも援用されている（若狭1995・2000）。それらの成果として、太田天神山古墳以降、保渡田八幡塚古墳を経て、綿貫観音山古墳に至る上野地域での系譜が梅澤・若狭両氏により提示されている（梅澤1978・1998、若狭1995）。なお、太田天神山古墳がコナベ古墳と相似形であることも梅澤氏によって想定されており、これらの企画のルーツは近畿地方にあると見られている（梅澤1978・2003、塚田1999）。

方法　梅澤・堅田・若狭各氏の方法で重要な変数は、後円部設定の基準にする円と前方部設定の基準にする円の半径（r・r'）、前方部中心Ｏ－後円部中心Ｏ'間の距離で、梅澤・若狭両氏の方法では、さらに前方部側縁部を決める線の起点になる点（h）の主軸上の位置がそこに加わる（註12）。

基本的な作図法は次の通りである。まず、はじめに主軸線を設定する。主軸上にある両中心から同じ半径ｒの円を描き、その両交点を通るように同じく主軸上の起点ｈから線を引く。前方部側の半径ｒの円と主軸が交差する点と直角に交差する線を引き、それを前方部前端とする。ここまでで墳丘外形は作図可能である。なお、墳丘上の上段部・テラス部等における前方部隅の位置と前方部側の周溝

隅は、O'と前方部外形隅を結ぶ直線上に位置するとされる。

このような方法を参考にするが、現実の測量図を見ても、墳丘外形の前方部隅と各コーナーは一致していることもあれば、そうでないこともあるため、山倉１号墳への適用に際しては、一律に同じO'からの線上にあるとはせずに、墳丘外形以外の隅角のそれぞれについて交点が設定され、対応して起点があったと想定する。これは築造企画の系譜を遡った諸例でもその方が理解しやすいためである。

さて、次に規模・尺度を想定するが、綿貫観音山古墳の１/２に近似するということから、その推定復元後円部半径ｒを割りかえして求めた。綿貫観音山古墳ではｒ＝28.8m、築造時の尺度が24㎝を１単位（尺）として用いており、120尺で企画されたとされるが（梅澤1998）、復元図によると、後円部上の各企画円の径は3.2mが最大公約単位と見られるので、山倉１号墳ではその半分1.6mが墳丘の設計に用いられた単位（a）だと仮定する。また、その３倍にあたる単位（A）も設計上の基準によく表れるので、これも単位の一つとする（註13）。

築造企画の推定　山倉１号墳の想定企画に数値を入れると以下の通りである（第112図）。

・中心Ｏ・O'を４Ａ（＝12a）19.2mの間隔を空けて設定する。
・ＯとO'から等しく３Ａ（＝９a）14.4m離れた２点ｘ・ｘ'を設定する。
・O'から前方部側に８ａ（＝９Ａ－１a）12.8mの位置ｂで主軸に直交する線を引く。
・Ｏから後円部側に７Ａ（＝21a）33.6m離れた主軸上の起点（括れ部設定に用いるｈからＯに近づいていく各点をｈ１・ｈ２…とする）ｈ２からｘ・ｘ'を通る線を引く。
・その交点を前方部コーナーとする。
・周溝は相似形なので、繰り返しである（ｒ＝10a、O'－ｂ間＝３Ａ＝９a、Ｏ－ｈ間＝10Ａ＝30a）。
・墳丘上の各段は、括れ部の処理が増えている。これは、中段テラス外縁北側にある円筒埴輪列の並び方と等高線図から考えると、弧線あるいは直線が間に挟まるように作られており、明瞭な角を示さないように見受けられる。上段墳丘の構築時の意図しない工法上の問題かもしれないが、綿貫観音山古墳の上段墳丘も同様に角を持たないことから、築造企画に基づくものと考える。この箇所については、上段の前方部形態の設定の際に用いられる点が利用されている。すなわち、両中心から３Ａと２Ａ、８ａと５ａの距離にある点に主軸上の各起点からの線を通して前方部側縁が設定されているが、これと同じ方法による４点が括れ部設定に用いられているのである。
・中段テラスの幅は、綿貫観音山古墳が１ａで巡らせていることから、同じく１ａとすれば、これを上段墳丘の前方部端の位置とできる。
・上段墳丘上面は下段墳丘と同じ傾斜・間隔を当てはめて、直径４ａの円形とする。

以上の想定築造企画に基づく山倉１号墳の墳丘は、全長：49.6m（10Ａ＋１ａ＝31a）、墳丘長：46.4m（10Ａ－１ａ＝29a）、後円部直径：28.8m（６Ａ＝18a）、前方部長：22.4m（14a）となる。

３　系譜の想定できる築造企画

続いては、同一系譜とされる各企画との一致点・相違点を見て、その異同に注目してみたい。

一致点　図示のように、山倉１号墳はａ＝1.6m（第112図：１/500）、綿貫観音山古墳はａ＝3.2m（第113図：１/1000）、保渡田八幡塚古墳はａ＝3.2m（第116図左：１/2000）、太田天神山古墳はａ＝6.4m（第116図右：１/4000）、コナベ古墳はａ＝6.4m（第117図左：１/4000）、津堂城山古墳はａ＝

6.4m（第117図右：1/4000）で、同じ方法を用いて作図できる。

つまり、山倉1号墳と相似形と認めれば、上の諸古墳の築造企画は、以下のように、きれいな整数比で捉えられる。

山倉1号　：　綿貫観音山・保渡田八幡塚　：　太田天神山・コナベ・津堂城山　＝1：2：4

中心O－O'の想定距離は、いずれも4A＝12aで、上記の順に次のような値になる。

19.2m　38.4m　38.4m　76.8m　76.8m　76.8m

括れ部設定半径r・r'は両方とも3A＝9aである。

14.4m　28.8m　28.8m　57.6m　57.6m　57.6m

この同一系譜と見なせる諸例で興味深いのは、周溝形を設定するのにも、前方部と同じくO・O'から一定距離の点（図上は2円の交点）を利用している点である。具体的には、コナベ古墳を例にすると、周溝外側の両コーナーは、Oから6A、O'から4Aの位置にある2点を通るように、Oから後円部側に7Aの位置の起点hから線の引かれることで設定されたと見られる。この7AはO－O'間4Aと前方部「基準円」半径3Aを加えた距離であり、Oからは前方部「基準円」端と起点hが等距離になる。

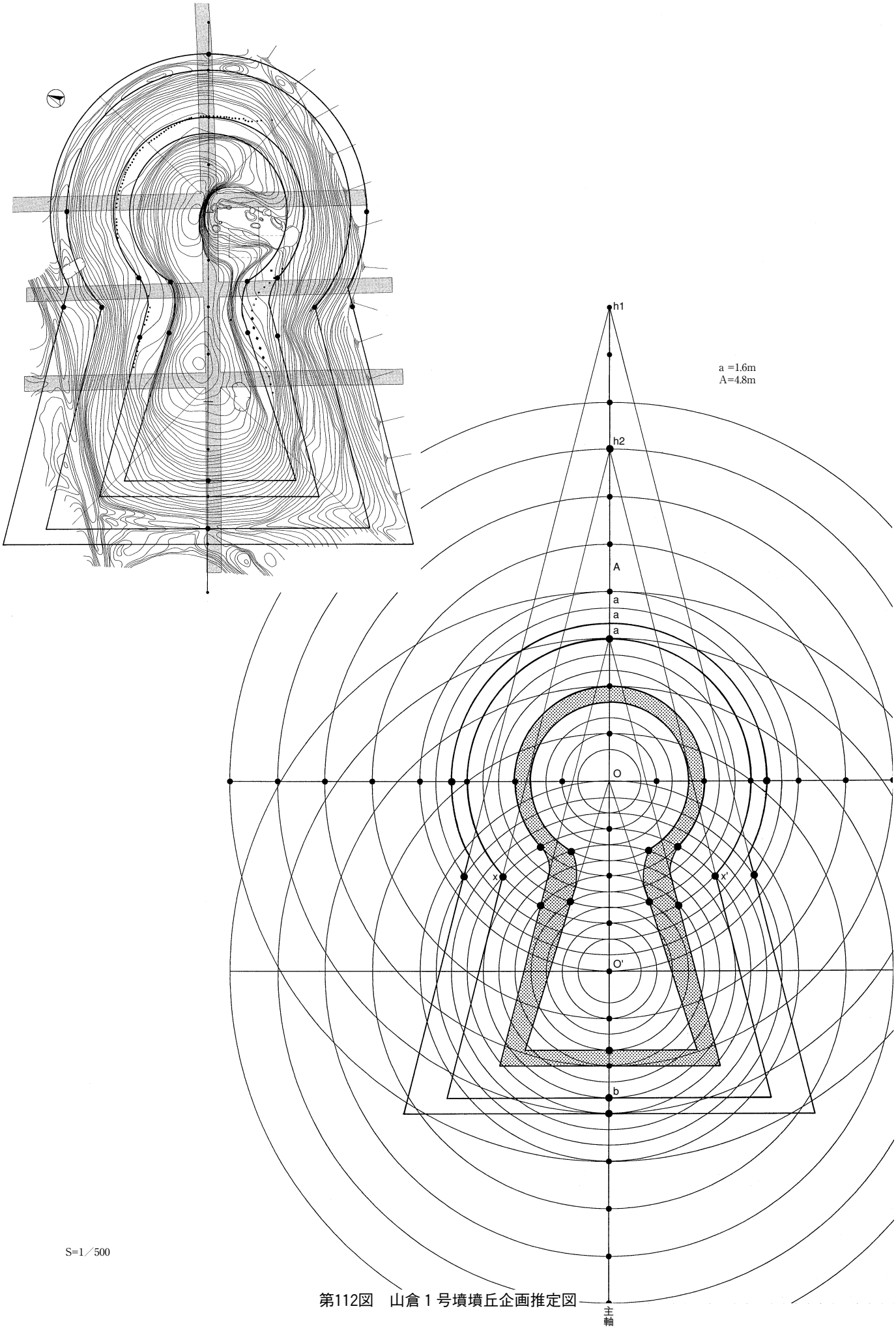
この設定法は津堂城山古墳・太田天神山古墳でも認められ、用いられる後円部側の「基準円」の径が前方部側より常に2A（6a）分大きいという一定の関係を見出すことができる。墳丘外形の設定時には両者が同じ距離を用いて、すなわち同じ半径の「基準円」の交点を見かけ上利用しているが、前方部側の周溝コーナーは、前方部設定と同一の原理を、その数字を変えて適用していると考えられる。こう見れば、後円部側の各弧状部は周溝までOからの一定距離（基準円）を利用し、括れ部と前方部側の各コーナーはそれに加えて、前方部側中心O'からの距離と主軸上の起点hxを利用しているという一貫した方法をとっていることが判る。

ところで、すべての想定企画に共通することだが、主軸上の後円部側に離れて位置する起点hはそれより遠くに動くことはなく、墳丘上の前方部の設定においてはOに向かって近づいていくだけである。このため、この点は、両中心と共に、まず、最初の基準点として設定されたと考えられる。また、先の系譜上では墳丘外形括れ部を決定する位置がOから7A・9Aで共通しており、築造企画型式を見る際の変数の一つとして有効なことが窺われる。

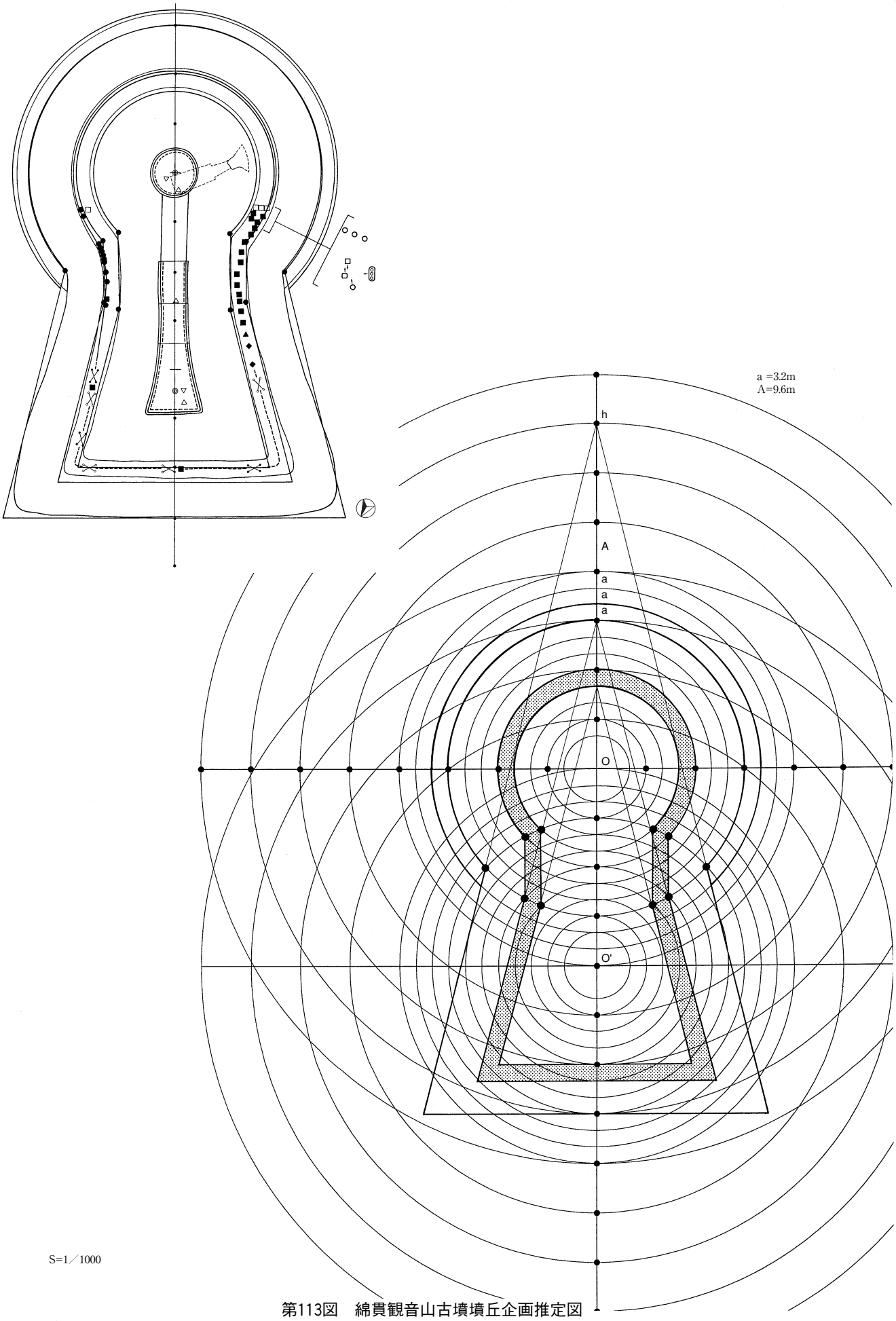
相違点　さて、以上に見た諸古墳の推定築造企画と山倉1号墳はほぼ一致するが、細かく見ると異なる点もいくつかある。

まず、山倉1号墳では、両中心から半径10a（3A＋1a）は周溝になるのに対して、綿貫観音山古墳は、後円部側に壇状の低い墳丘が巡り、前方部側では墳丘裾にあたる。前方部の相違については、両者の周溝形態の差によるものと思われる。

後円部については、綿貫観音山古墳も括れ部設定には3Aの位置を用いていることが重要である。これは、参考として図示した同一系譜の例を時期がさかのぼるように見ていくと、この10aの位置は造り出し部分と連続するようなかたちで墳丘に巡らされているようにも思われる。このタイプの系譜では、前方部の設定においても後円部と同じく10aの位置が用いられていたものが、造り出しの消滅に伴う形状の変化によって、企画が変容したのかもしれない。横穴式石室を主体部とする綿貫観音山古墳の後円部周囲は後出型式の持つ「退化器官」である可能性も考えられる（註14）。



第112図　山倉１号墳墳丘企画推定図



第113図　綿貫観音山古墳墳丘企画推定図

4　埴輪配列の復元

続いて、以上の墳丘復元案に基づいて山倉１号墳における埴輪配列の内容を推定してみたい。

まず、出土状態から確認できる点を整理しておく。第一に、中段テラスの埴輪列は、後円部南側の横穴式石室入口西側から南側括れ部を経て前方部南側にかけて水鳥形埴輪と人物埴輪が配列され、また前方部北側から後円部北側・東側にかけて円筒埴輪が配列されている（第112図）。この埴輪配列は、石室入口から後円部東側の円筒埴輪列の間には遺存しない。第二に、馬形埴輪は、破片の多くが前方部から出土し、中段テラスの人物埴輪列に続くように配列された可能性が大きい。第三に、器財埴輪はほとんど破片ばかりだが、大刀形埴輪、矛形埴輪、靱形埴輪、翳形埴輪がある。破片は後円部から多く出土するので、後円部墳頂平坦面を巡るように配列されたと考えられる。石室入口西側の人物埴輪列近くで出土した大刀形埴輪も基台部がなく、墳頂部から転落した資料と見なせる。第四に、家形埴輪は、寄棟造表現と入母屋造表現のものがあり、入母屋造には分離造形と判る破片がある。破片の多くは後円部から出土するが、、寄棟造の破片は前方部でも出土する。第五に、鶏形埴輪は破片資料だが、後円部中央付近から出土し、後円部墳頂に置かれたものと思われる。第六に、円筒埴輪の底部破片の出土位置は各所に散在する。円筒埴輪列は、中段テラスだけでなく、墳頂平坦面にも巡っていたと考えられる。

中段テラスの埴輪列　円筒埴輪の樹立位置を確認できた部分は限られているが、これは墳丘の遺存の具合による残存状況にすぎない。本来は、石室東側から後円部を経て、途切れずに前方部まで続いていたと見られる。円筒埴輪は、大体１個体分ほどの間隔をおいて配列され、遺存部分の配列間隔は平均1.6ｍごとに５本程度である。また、朝顔形埴輪の割合は10本に１本程で、この比率は生出塚遺跡で確認される割合より若干高いようである。配列方法は、調査時の所見では、数個体をまとめて樹立するのではなく、１個体ずつ穴に埋めたとされる。ただ、第11・12図の通り数個体単位で直線的に列ぶ事実があるので、その単位を意識して配列したことは確かである。なお、一部に同一類型の円筒埴輪がまとまって列ぶ現象が見られるが、これは偶然の一致と考えられる。

中段テラス南側の形象埴輪列は、第114図に示す通りである。人物埴輪がかなり良好に遺存するので、一見、それだけで形象埴輪列が完結するようにも見えてしまう。だが、石室寄りには水鳥形埴輪２体が配列されている。また、墳丘企画の近似する綿貫観音山古墳と同じように、前方部側にある程度の数の馬形埴輪が配列され、たぶん人物埴輪半身像の「馬子」も伴っていたと考えられる。この形象埴輪列はどこまで続くのか確認できないが、おそらく前方部西側にまで続き、円筒埴輪列に接続するものと思われる（第112図）。

中段テラスに配列された形象埴輪は、水鳥形埴輪２体、人物埴輪15体以上、馬形埴輪数体である。築造企画の推定では綿貫観音山古墳を参考にしたが、埴輪配列の内容でも興味深い類似性が認められる。まず、石室入口から人物埴輪を中心に形象埴輪が連なり、円筒埴輪と一体になるという配置である。そして、綿貫観音山古墳の人物埴輪の構成は、頭巾状被物を被る半身像、分銅形島田髷の半身像、５体の全身像、下げミズラの座像で、山倉１号墳の構成と似ている。それに続く、鍬を持つ人物埴輪半身像、馬形埴輪という順序も近似する。埴輪配列の意味にまで本項では触れることはできないし、両古墳の埴輪配列に時期的先後はあるが、墳形の相似が認められるならば、配列のアイデアにも関連のある可能性が考えられよう。

もちろん相違点もある。これまでの研究で指摘のある通り、人物埴輪の配列には群（隊）から列へ変化する傾向があり（市毛1985）、山倉１号墳は完全に列になっている点で後出的である。むしろ、距離的に近い千葉県横芝町姫塚古墳の列化した配列に近いとも言える（杉山2000）。

だが仮に、若干遡る時期に築造された綿貫観音山古墳がその地域内で規範的な存在であったとすると（徳江1998）、その配列から要素の脱落、一部変容したものが、周辺に存在しても不思議ではない。そのような事例の一つと関連するのが、山倉１号墳の埴輪配列なのではないだろうか。

このように想定すると、山倉１号墳において人物埴輪全身像の後方に位置する振分髪人物埴輪半身像、壺を戴く人物埴輪半身像は、ルーツにおいて前方の群に配置されていたことが、先行する綿貫観音山古墳の配列との対比で推測される。反対に、綿貫観音山古墳の人物埴輪の全身像群と半身像・座像群を区切る位置（第115図「？」）には形象埴輪基台部1868が出土しているが（徳江1998）、山倉１号墳をその構成が変化した事例とすれば、それは水鳥形埴輪である可能性が考えられる（註15）。

さて、中段テラスに配列された円筒埴輪の数は、どのように円筒埴輪列を推定するかによって大きく変動する。仮に、推定企画を元に計算し、円筒埴輪列が石室入口東側から後円部を巡り前方部北側中央付近まであったと推定すると、上記の配置間隔で180本程度の円筒埴輪が列べられたことになる。

なお、綿貫観音山古墳でも中段テラスの円筒埴輪配列は1.6ｍに５本の間隔で配列されていたと推定されている（徳江1998）。この配列間隔は、築造企画の尺度と関係する現象なのかもしれない。

墳頂平坦面の埴輪列　墳丘盛土の流出によって、墳頂平坦面自体が不明瞭なほどで、そこに配列された埴輪の樹立位置はまったく確かめることができない。そのため、埴輪列の存否さえ想像の域を出ないかもしれないが、家形埴輪や器財埴輪（大刀形埴輪・矛形埴輪・靫形埴輪・靱形埴輪・翳形埴輪）の破片が墳丘各部で出土するので、それが墳頂部平坦面に配列されたことはまず間違いない。しかも、器財埴輪の破片の多くは後円部側で出土しており、群馬県吉井町神保下條２号墳で推定されるように（右島他1992）、器財埴輪は後円部墳頂平坦面に巡らすように配列された可能性が大きい。器財埴輪の数は確定できないが、各種類の遺存個体数からすると、かなり控えめに見積もっても20個体、おそらく30個体以上になるだろう。また、後円部墳頂には家形埴輪２個体以上と鶏形埴輪１体が配置され、寄棟造家形埴輪１個体は破片の出土位置から見て前方部墳頂に置かれたと思われる。

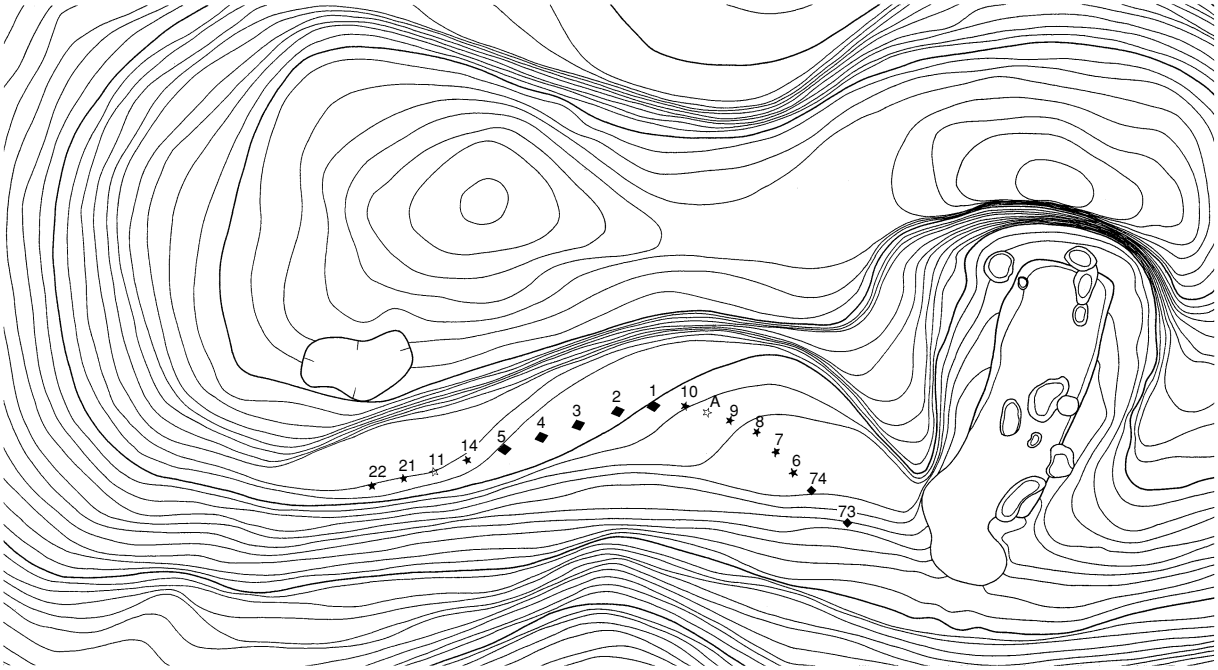
円筒埴輪の底部破片は、墳丘南側からも少なからず出土している。この位置の中段テラスには形象埴輪が列べられたので、円筒埴輪は、中段テラス埴輪列ではなく、墳頂部埴輪列から転落したものと考えるのが自然である。配列間隔と数量は確かめるべくもないが、中段テラスと同様、墳頂平坦面にも円筒埴輪列が巡らされていたことは確実であろう。

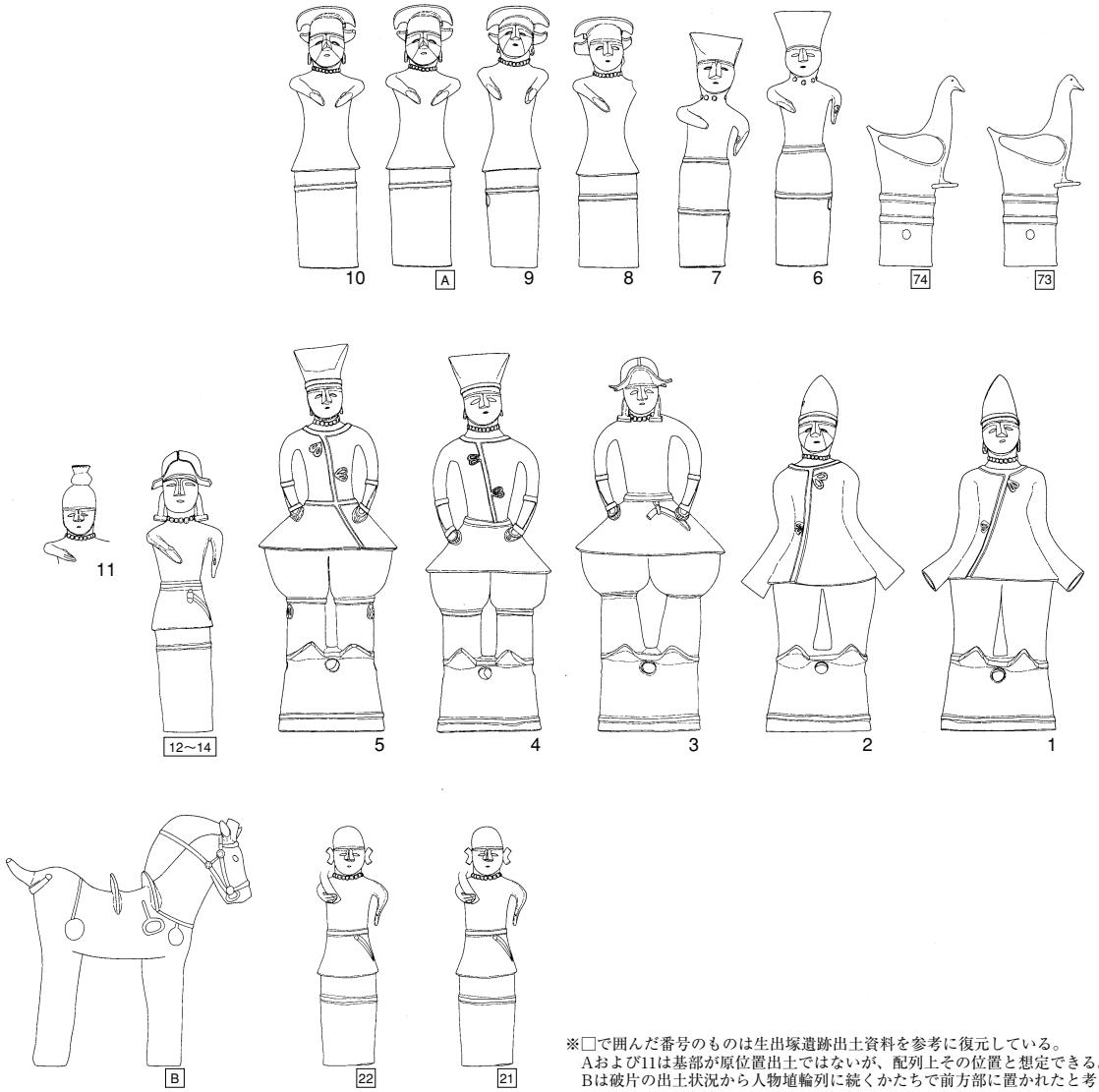
山倉１号墳の埴輪配列は、推定墳丘企画に基づいてこのように推定復元できる。

5　築造企画と埴輪の示唆する系譜

以上で配列に見た様相に加えて、個別の埴輪の形状にも示唆される特徴が多い。

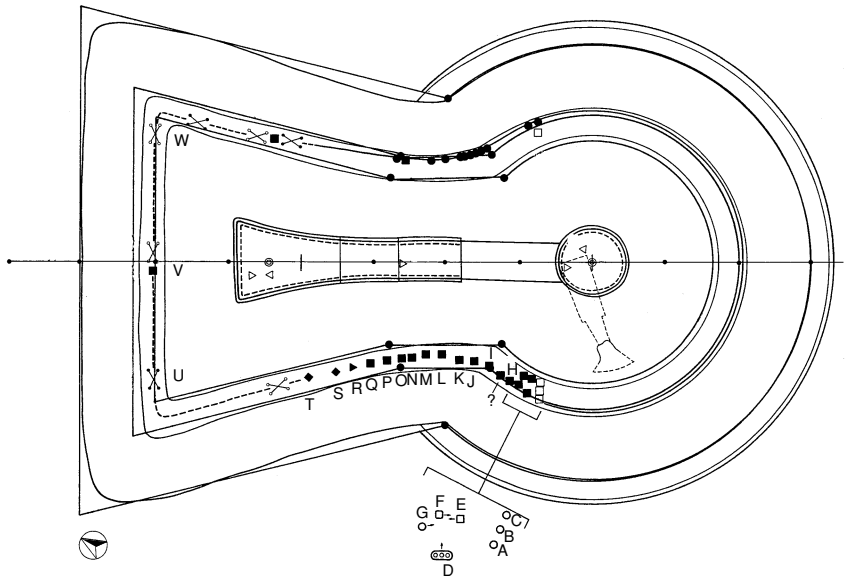
生出塚遺跡では、島田髷の表現は両側の刳り込みの弱いのが通例であるが（山崎1987）、山倉１号墳の人物埴輪は、ほぼ円形の板の両側に透孔を穿つ要領で分銅形に作っている。また、同じく生出塚遺跡の埴輪では、島田髷人物埴輪半身像の上衣裾表現部を作る際に凸帯と同様に貼り付けるが（法皇塚古墳の埴輪も同様：山崎他2002）、山倉１号墳ではラッパ状に開く円筒状のパーツを作り、それを



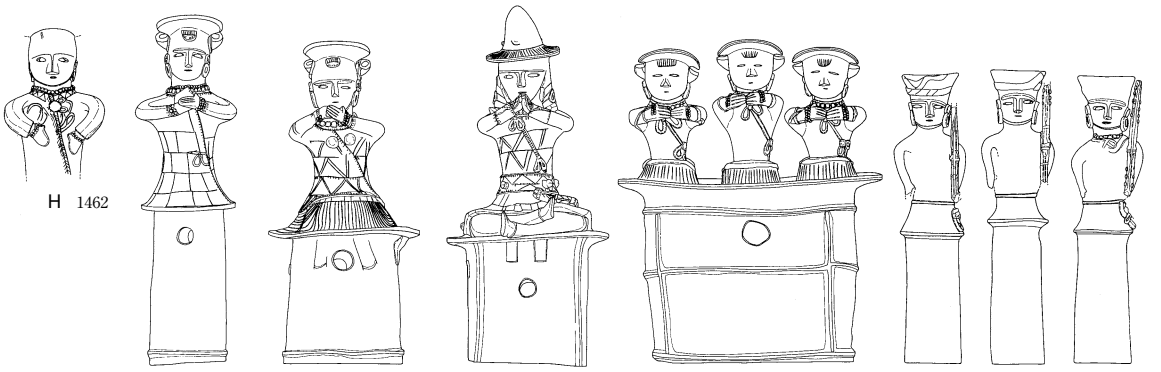


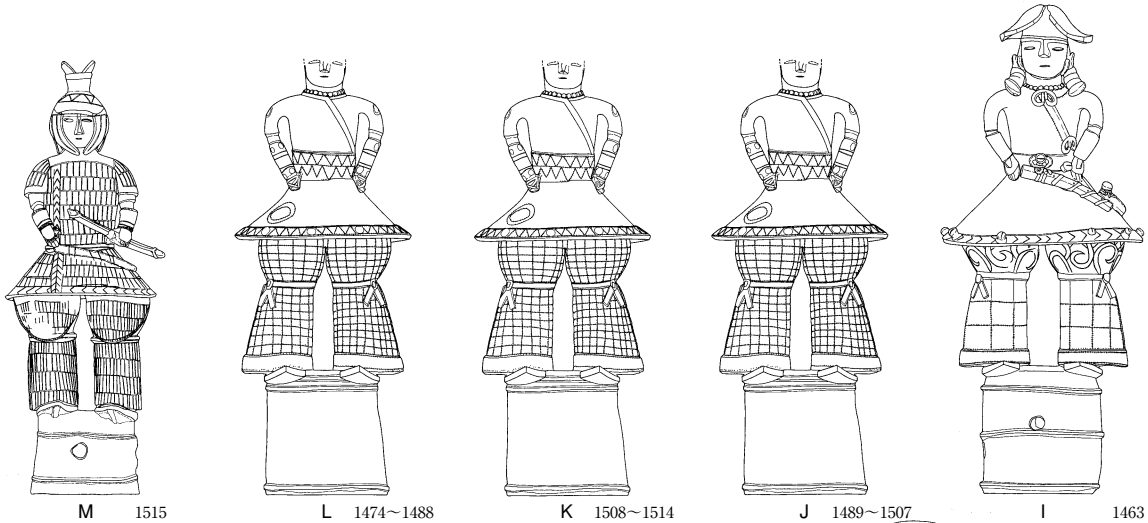
※□で囲んだ番号のものは生出塚遺跡出土資料を参考に復元している。
Aおよび11は基部が原位置出土ではないが、配列上その位置と想定できる。
Bは破片の出土状況から人物埴輪列に続くかたちで前方部に置かれたと考えられる。

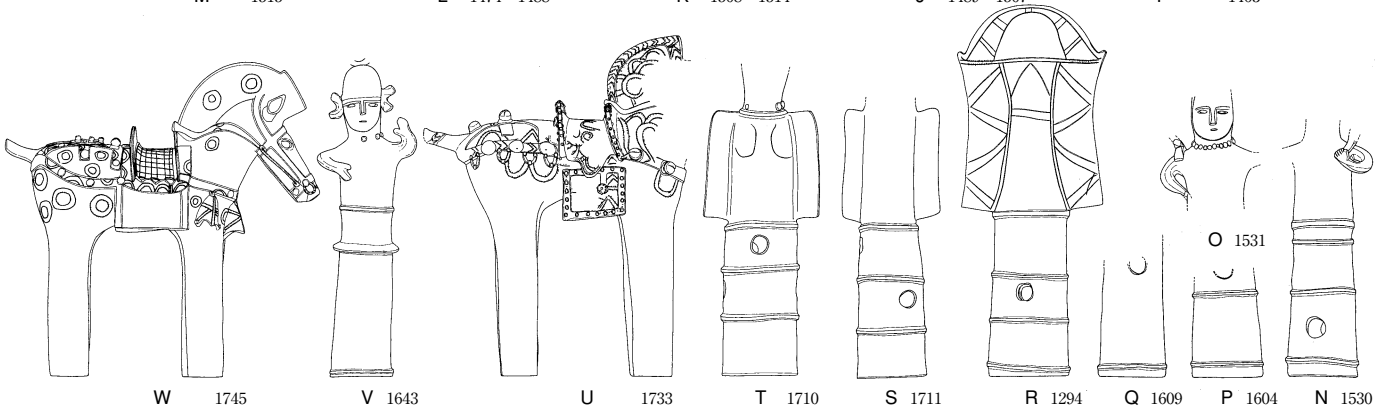
第114図　山倉１号墳形象埴輪配列復元図



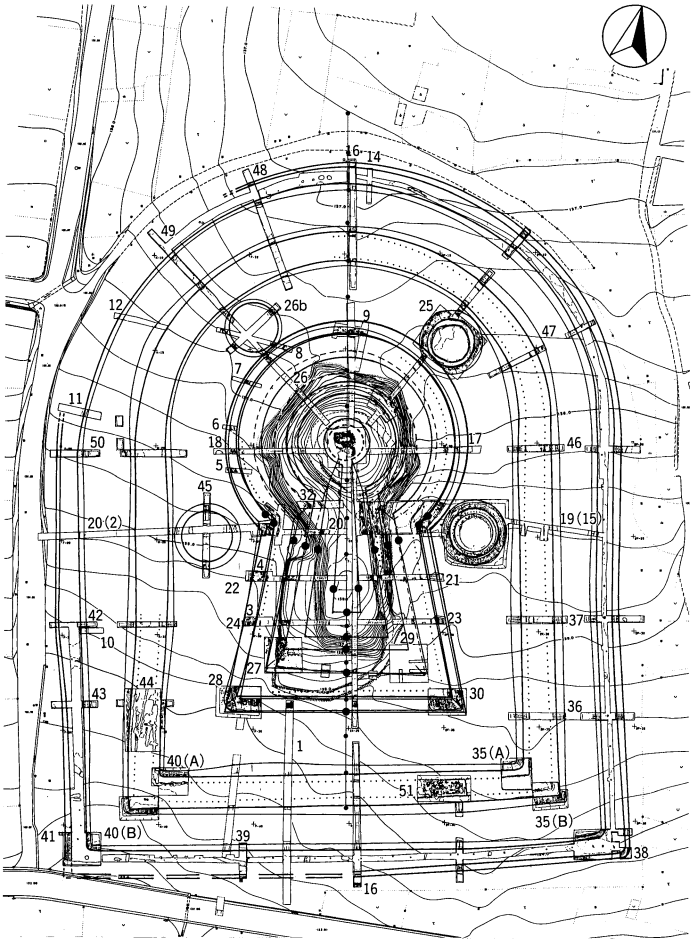
埴輪：S=1／24
（徳江他1998より）

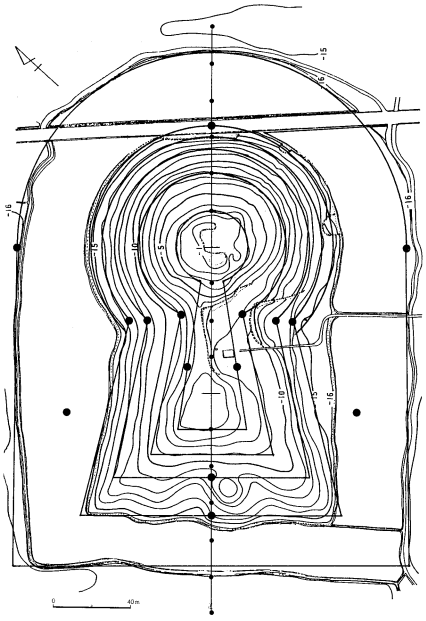


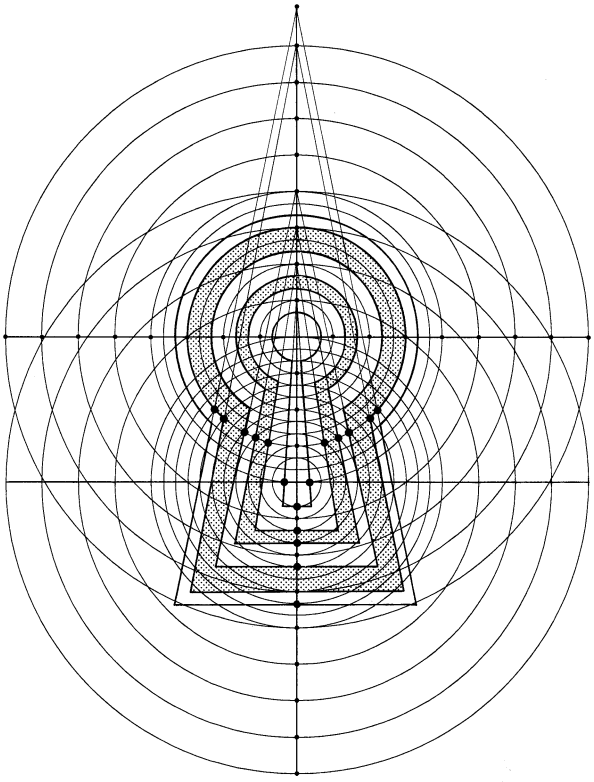




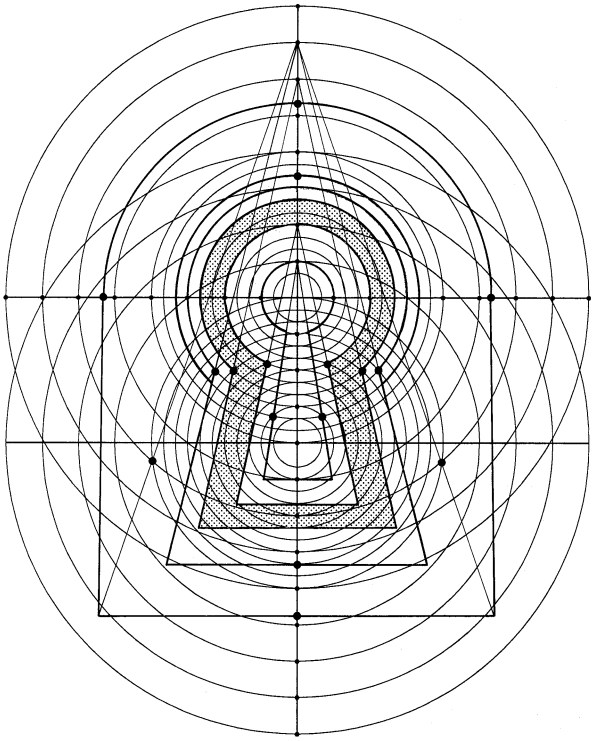
第115図　綿貫観音山古墳埴輪配列図





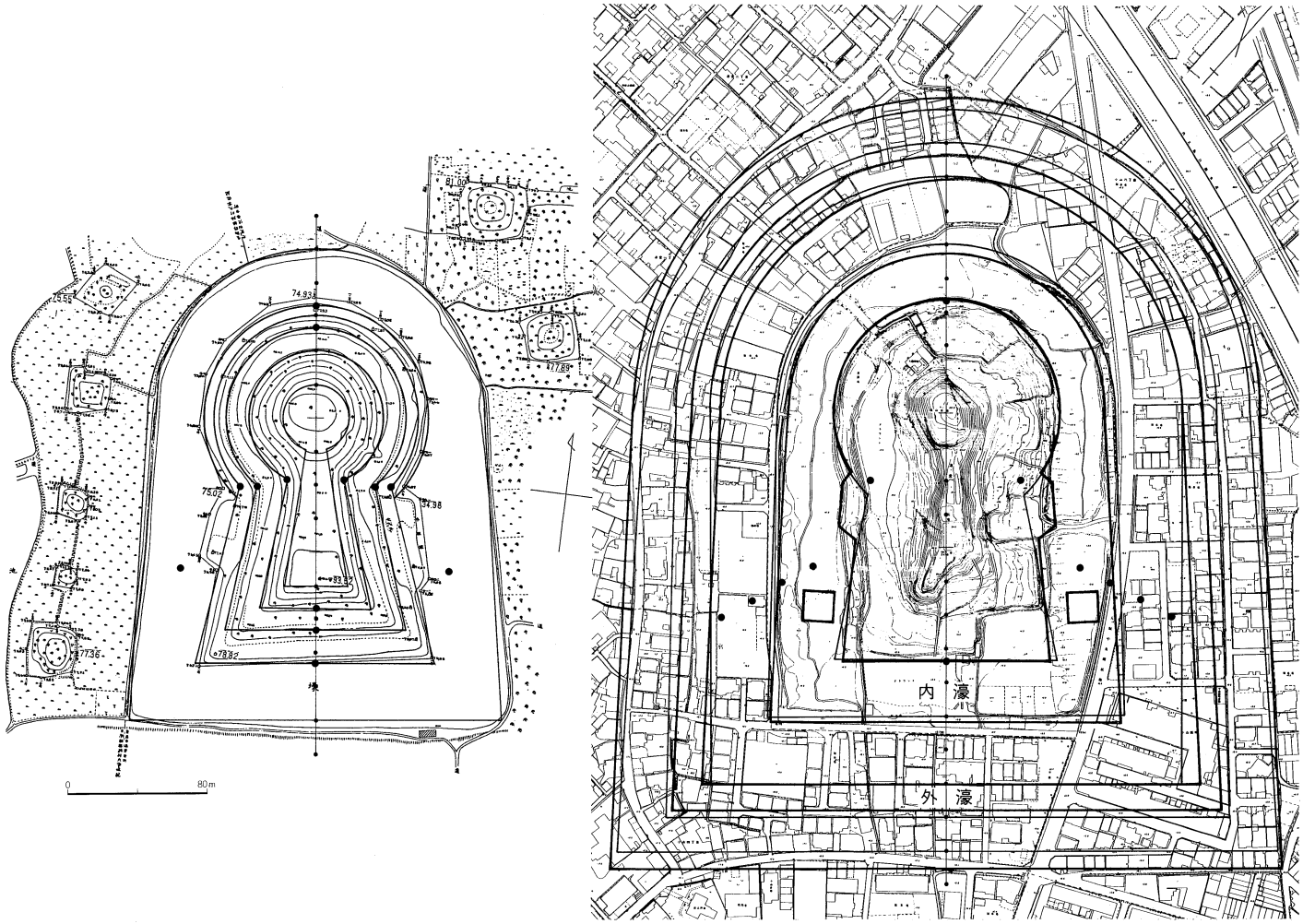


保渡田八幡塚古墳　S=1／2000
（若狭他2000より）



太田天神山古墳　S=1／4000
（甘粕他1994より）

第116図　墳丘企画の比較１



コナベ古墳　S=1／4000
（広瀬・天野1992より）

津堂城山古墳　S=1／4000
（天野他1993より）

第117図　墳丘企画の比較２

逆位に接合することで裾を作り出しており、この点でも異なっている。そして、筒袖表現の人物埴輪全身像という特徴的な形式が組成する。山倉１号墳の埴輪が生出塚遺跡から供給されたことは上述の通り確実だが、このように、埴輪自体には生出塚遺跡の特徴と異なる様相も見られるのである。

さきの検討をふまえれば、このような特徴が見られる直接の原因は、山倉１号墳の工人Ｆがモデルとした埴輪の特徴を引き継いだことによると思われる。

このことを考えるのに興味深い資料が酒巻14号墳で出土している（中島他1988）。それは筒袖表現の人物埴輪全身像である（第119図）。これは山倉１号墳と同じく２体あり、サイズと各部位の要素もほとんど一致する。また、山倉１号墳の筒袖表現の人物埴輪２が沓上面に縦の隆帯を施し別人を表現したのと同様に、被り物に円形装飾を付加して差異を表している。ただ、山倉１号墳では袖口が円筒状になるが、酒巻14号墳では円筒を半截して上衣裾に貼り付けて表現しており、また、上衣の衽も逆という点で異なる。両者は個別に創作されたとは思えない程度の類似を示しているが、仕上がりは大いに異なり、別の工人の手によるものと見られ、同工品でないことはほぼ確実である（註10）。

この現象を単純に解釈すれば、一方が他方をモデルにした場合と、両者に共通のモデルが存在した場合が考えられよう。仮に前者の場合とすると、整美な方が手本となるはずなので、山倉１号墳の埴輪が酒巻14号墳例のモデルになったと仮定できる。だが、双方の埴輪配列を見ると、組成する形式に違いがあるので、そのうちのごく一部だけを正確に真似たということになり不自然である。酒巻14号墳には褌表現の人物埴輪全身像があり、島田髷表現の人物埴輪座像（第120図）も存在するが、このような形式は山倉には見られない。そうすると、両者の筒袖表現の人物埴輪全身像に共通のモデルのあった可能性の方が現実的と思われる。

また、一般的に焼物の模倣は、「模倣縮小」という現象が生じる傾向にある。乾燥前にモデルと同じ寸法に作っても、模倣品は焼成後に１割程度縮んでしまう。つまり、厳密なレシピを教わったのでなく、作品をそのまま模倣する場合、サイズが小さくなっていくのである。この現象を考慮すると、やはり、寸法・構成要素の共通する両者は、同じモデルを見た可能性が高いと思われる。

ところで、筒袖表現の全身像は渡来人を表現するものとの評価が根強い（若松1988、飯島他1999等）。だが、何を表現するのかということをおいて、構成要素に注目すれば、衽の向き、沓の形状等は、他の人物埴輪と同じ脈絡で理解できるものである。そしてまた、筒袖の衣服についても、島田髷表現の人物埴輪等に伴って表されることがあり、要素としては他の人物埴輪と共通すると言える。

綿貫観音山古墳を見ると、手を前に差し出す、容器を差し出すという他の島田髷人物埴輪半身像の姿勢とは異なって、第115図Ｈの人物埴輪だけが両手を胸の下に当てる姿勢をとっている。また、この人物埴輪は、配列内で、後出する山倉１号墳の筒袖表現の全身像と同じく、振分髪表現の全身像の前に位置する。これに類するような筒袖表現を持つ埴輪が、後続する時期に、例えば筒袖の衣服で舞う人物というようなイメージを持って、被物等に別の要素が組み合わされて、群馬県南部の近い生産地において、山倉１号墳・酒巻14号墳例のモデルとなる全身像が生み出されたのかもしれない。

脚が基台部上に表現されて全身像として作られるのは、階層性の表現である場合と、その動きや役割・属性（褌を締めていることや性器を露出すること等）が表現される必要のある場合があると見られているが（稲村1999等）、仮定するモデルの場合も、舞い踊るという動きのイメージを付託するため、あるいは衣服の特徴を強調するために、全身像として製作された可能性を考えられないだろう

か。山倉１号墳・酒巻14号墳例として模倣された時点では、その全身像という製作上の属性から、男性と見なされて、実際の配列位置になったと解釈することもできよう（註16）。これらを勘案すると、全身像で表現されるのは基本的に男性であるという原則に一見抵触するようでも、筒袖表現の全身像は、形状面では女性を表現した人物埴輪の要素にルーツを持つ埴輪である可能性を指摘しておきたい。第114図の通り、他の全身像と比べ肩の位置が明らかに低く作られている点も傍証とできよう。

また、酒巻には円形板状表現の島田髷を持つ座像が存在するが、これも遠くには綿貫観音山古墳に見られるような形式がルーツにあるのかもしれない（第120図）。両者には時期差があるので、綿貫観音山古墳の埴輪が直接のモデルではないにしろ、筒袖表現の全身像の場合と同じく、人間をモデルに創作したのではなく、すでに成立していた埴輪の形式（作品）を模倣したと見るのが妥当と思われる。そして、このような関係が成り立つ背景には、群馬県南部から埼玉県域等にわたる埴輪生産の場の営まれ方の特徴があったと考えられるのではないだろうか。

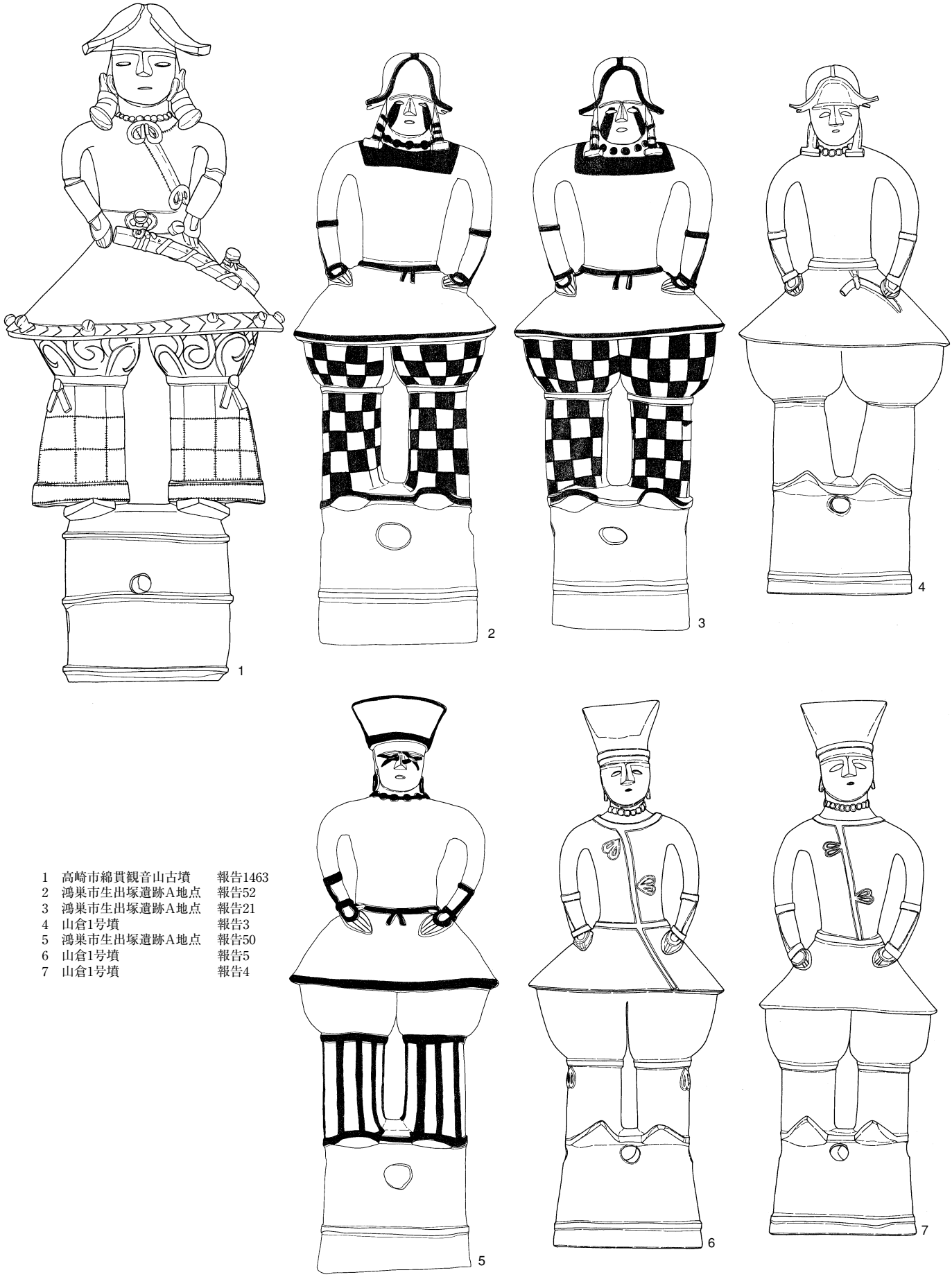
山倉１号墳の振分髪表現の人物埴輪全身像も類例と並べてみると、綿貫観音山古墳の形象埴輪を焼成していたとされる藤岡市本郷埴輪窯、そして以後に同様の埴輪を供給する太田市域等の群馬県東南部の窯で生産された埴輪の類例から模倣が行われて、要素の脱落と模倣縮小が生じた可能性が窺われる（第118図）。図示したのは、綿貫観音山古墳の振分髪全身像Ⅰと生出塚遺跡Ａ地点15号窯出土の振分髪全身像２体であるが、図の左から右へ、要素の変容・脱落および縮小の傾向が看取できる。中間段階では装飾は赤彩によって補われているが、山倉１号墳例に至ると下衣の装飾は赤彩すら無くなっている。２～７は同工品の可能性が指摘されているが、その中でさえ変容が生じているようである。これは、過去に製作した物は「出荷」されてしまい、手元に見本として置いておけないという埴輪・土製品の生産面での特徴に起因すると思われる。厳密に言えば、「設計図」を物として外部記憶に残さない場合、自分の頭にあるレシピとイメージを模倣するしかないためである（註17）。

なお、人物埴輪全身像の籠手が粘土紐の貼付で表現されるのは群馬東南部の埴輪の特徴とされるので、直接的なモデルはそのような作品である可能性も考えられる（稲村1999）。

さて、以上を整理すると、おそらく、山倉１号墳・酒巻14号墳例ともその作者は、初めは規範的な個体を見たのであり、以後は一工人内での模倣が繰り返されたと捉えるのが妥当と思われる。両例の想定される時期はTK209型式期で６世紀末（中島他1988）、綿貫観音山古墳例はTK43型式期で６世紀第四半期前半ごろとされる（徳江他1999）。つまり、綿貫観音山古墳は先行し双方のモデルのルーツとなる可能性のある埴輪を持っているので、それらの作品か、以後に広がる埴輪の特徴から可能性の想定できる群馬東南部などにおいて同様の作品を製作している場を、山倉１号墳と酒巻14号墳の埴輪を作ったそれぞれの工人は目にする機会があったと考えられよう。また、基台部の低位置凸帯という特徴も一致するので、配列する前の埴輪を見学した可能性がある。実際に起こりそうなのは、同じ形式の埴輪を製作する時に工房等で見学した場合と、近くで作業に加わった場合、すなわち「研修」に参加した場合である（註18）。

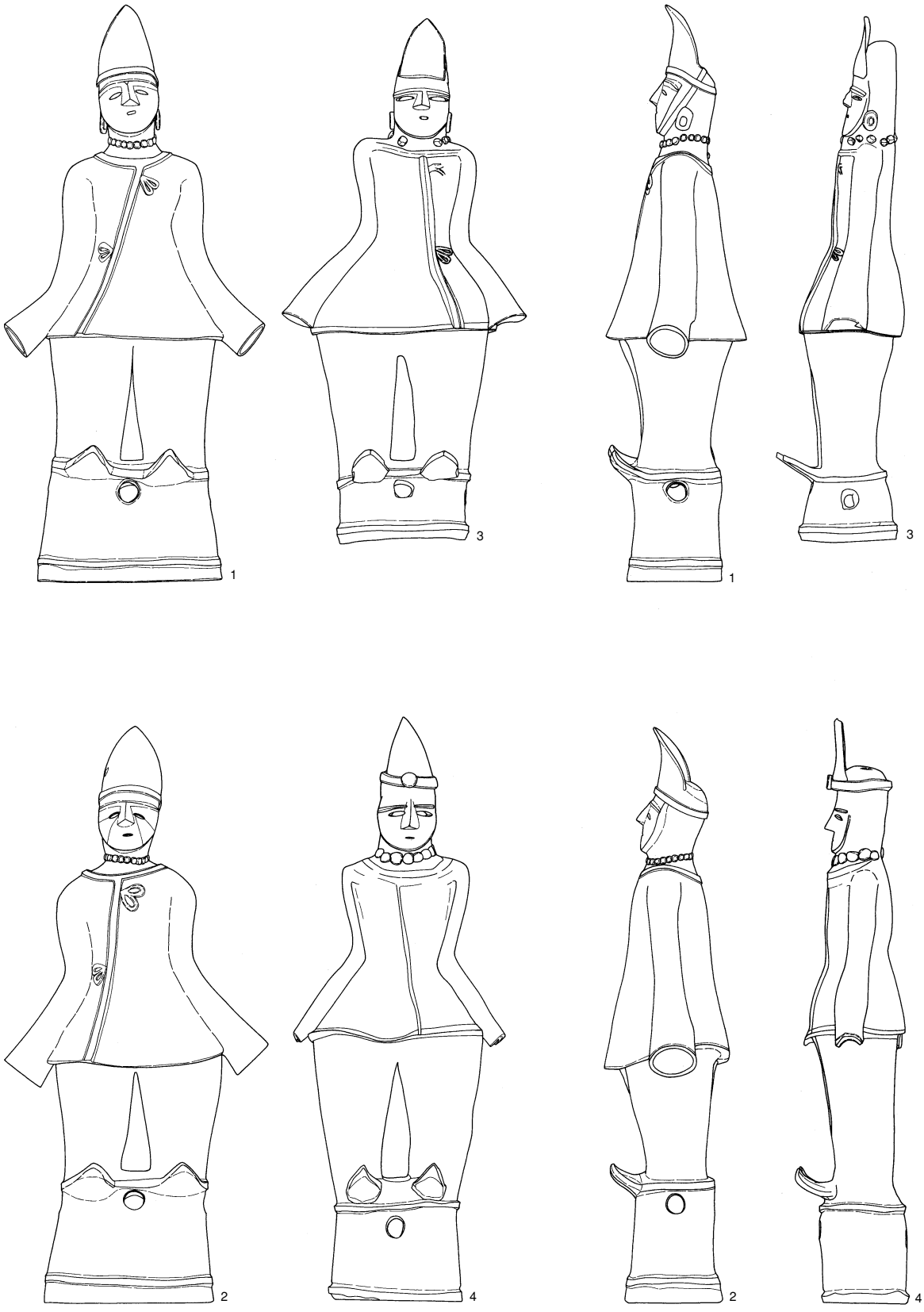
この場合、果たして、レシピの模倣、つまり作り方の伝達はあったのだろうか、あるいは、モノを見てそれまでに保持していた技術を基盤に類似したものが生み出されたのだろうか（作品の模倣）。

上述の山倉１号墳に見られる島田髷の形状や半身像上衣裾部の製作技法を勘案すると、そこには、一定のレシピの模倣（工程の習得）とともに、モデルとなる作品を実際に目にする機会があったと考



1　高崎市綿貫観音山古墳　報告1463
2　鴻巣市生出塚遺跡A地点　報告52
3　鴻巣市生出塚遺跡A地点　報告21
4　山倉1号墳　報告3
5　鴻巣市生出塚遺跡A地点　報告50
6　山倉1号墳　報告5
7　山倉1号墳　報告4

第118図　人物埴輪の比較１（S＝１/12）



1　山倉1号墳　　報告1
2　山倉1号墳　　報告2
3　酒巻14号墳　報告№5
4　酒巻14号墳　報告№7

第119図　人物埴輪の比較２（S＝１/12）



1　綿貫観音山古墳　報告1450
2　酒巻14号墳　報告№16

第120図　人物埴輪の比較３（S＝１/12）

えるのが自然である（註19）。山倉１号墳の工人Ｆは、生出塚遺跡だけでなく、上野東南部地域に想定される別の生産地に参加した結果、一定のレシピと作品のイメージを模倣することができ、後に生出塚遺跡における生産でその影響が発現した、という過程が考えられる。

つまり、先に見た、山倉１号墳の埴輪が示唆する生出塚遺跡の内的な変容は、人物埴輪の製作技法の一部が上野地域の技法に類似していることから推察して、至近因としては、エース工人の交替から生じていると考えられるのである。先述のように推定される埴輪配置もまた、「上野型」・「北関東的」と呼ばれるものであり（右島1995、山崎2002）、古墳築造企画の共通性と共に、ここにも関連性を見出すことができよう。

6　まとめ

墳丘築造企画の系譜を想定し、埴輪配列の復元を行った。その中で、墳丘築造企画と埴輪配列は綿貫観音山古墳のものに類似することが窺われた。そして、そこに埴輪自体の検討において認められた上野地域との類似を重ねて見ることによって、異なる生産地に参加するかたちの交流のあったこと、直接的にはエース工人の交替でその変容が発現したことを推定してみた。

以上では、それぞれの系譜に注目して推測を重ねたが、この問題は、各要素がどのように相関するか、という実際面での検討によって裏打ちされなければならない。なぜ、山倉１号墳においてこれらの要素が揃ったのか、という疑問に答えるには、古墳時代後期後半における「古墳構築材」の流通や各要素の相関関係についての議論が進められる中で、他の事例との対比によって解釈することが必要である（山崎1999、日高1999a・b、太田2002等）。この際、共通する遺物の存在から直接的に血縁・婚姻関係や政治的関係を想定するのではなく、その流通過程の実態、すなわち、各現場の実情や流通現象自体の方向性・強度等を議論するという視点は、言うまでもなく重要である。墳丘企画・埴輪配列・石室構築技術等のレシピが誰の頭の中にあり、どのように流通・運用・実現されたのか、という

問いの構えを欠いた議論は、知らずに偏った社会像を導き出す恐れがあると思われる。

註

註１　逆目は、あるハケメ工具を基準に見た時、同じ進行方向でありながら逆の条線間隔の配列を示すことを言う。同じ工具端を逆方向に用いてもそうなるが、埴輪製作でのハケメ工具はほとんど一方向に使われるので、同じ木材から作られた別の工具と見なせる場合が多い（犬木1995）。なお、第10表中のＢ（裏）は逆目であるが、同一端の裏面を用いた例である。

註２　犬木努氏が弁別したもので、手法は各人のいわばクセで、「同一工人において、原則として例外なく発現するような属性」、技法は「共通の技術伝統のもとで、複数の人間の製作品に現れるような属性」とされる（犬木1995）。

註３　階層分岐的なツリー状の分類は絶対的なものではない。どの属性がはじめの弁別に用いられるかは、その属性内で分離する強度がどれほど大きいかという判断によって、直観的に選択されるにすぎない。つまり、分類者側の問題である。

実際の器物を分類する際に設定されるカテゴリーには、中心的な事例（プロトタイプ）を認定できるが、常にその周辺には様々な偏差を持つ成員も存在し、それらが、近似する他のプロトタイプとの間に漸移的な境界を持つ集合をなしている。そのため、それぞれの集合内の成員すべてにおいて明確に一致する弁別的要素は通常期待できない（レイコフ1993等）。

たとえば、日常生活では、Ａ家はＡ家、Ｂ家はＢ家の特徴を持っている。もしＡ家が父・母・子供３人という構成とすると、父親（ABC）と母親（DEF）はまず似ていないが、３人の子供は父母の特徴をいくつか持っており、かつ子供同士（ABD・BCE・ACF）はそれぞれ違うということが多い。これはＢ家も同様である。つまりＡ家・Ｂ家という集合同士のまとまり方は明確に映るが、その各成員に「Ａ家の特徴」という弁別的要素が共通しないのが一般的である。ウィトゲンシュタインはこのようなあり方を「家族的類似性」として定義する（ウィトゲンシュタイン1999：六五～六七）。本事例の場合は、まず、発見的方法として階層分岐的分類が有効だとしても、解釈には家族的類似性の認識を前提とする必要があると思われる。

註４　型式学と同工品論の関係は微妙である。例えば、第111図に見られるような各工人の作品における最下段高の分布を見ると実態の複雑さが表れている。これによると、一工人内にも変異がある上に、その幅もそれぞれ異なっており、編成によっては特定の工人の作品しか残らないために、ある工人の傾向が型式として認識される場合のあることを示唆している。

武蔵地域の円筒埴輪の型式編年では、最下段の伸長化という指標の有効なことが確認されているが（山崎2000）、短めに作る傾向のある「古い」要素を持つ工人が編成に加わらない場合、「新しい」要素を持つ工人だけで製作が行われるために、型式として新相を示すということがあるのかもしれない。あるいはそれが型式変化そのものである可能性もある。

型式変化の動因は最終的には製作者に帰するが、それについては判断停止し、資料群の平均した様相を対象にしなければ、型式学的な議論はできないということであろう。

註５　下総型埴輪の研究においても、工人ごとの製作個体数に差のあることが示されている。例えば、千葉県我孫子市高野山１号墳では、山倉１号墳とほぼ同じで、11人いるうちの４人の工人で70％の円筒埴輪が製作されたと見られている（犬木1995）。

註６　車崎氏がすでに、山倉１号墳の資料を用いて同様の想定を行っている（車崎1988）。この論考では、製作者数・不均等な役割分担などについても積極的な議論を行っている。

註７　2003年８月10日、市立市川考古博物館で山路直充氏の御協力のもと観察した。山倉１号墳ハケメＫが人物埴輪半身像に見られたほか、家形埴輪片に５種類以上のハケメが確認できた。

註８　2003年８月10日、北区飛鳥山博物館で鈴木直人氏の御協力のもと観察を行った。展示品（谷口他1997）と破片資料の外面ハケメだけを対象に調べたが、すべて同じ工具によるものに見受けられた。

註９　2003年９月５日に田中信氏・平野寛之氏の御協力のもと南大塚古墳群４号墳と５号墳の埴輪の一部を観察した。４号墳では規模が小さいにも関わらず、外面に５種類以上のハケメが認められる。このような事例が存在するので、前の想定は常に一定とは言えないようである。市川市法皇塚古墳では円筒埴輪が下総型埴輪、形象埴輪が生出塚遺跡の製品と別々の生産地から供給されており（山崎他2002）、プロジェクトごとの事情で体制自体も変化すると見るのが自然である。

註10　生出塚遺跡Ｐ地点・46地点の資料見学の際に、この資料が、ハケメＦの転写コード右半分とほぼ一致するものの、ごく一部で異なることを確認している。ただ、その時点ではまだ、F'としていた左半分を認識していなかったため、ハケメＦの全体幅の転写コードを作成しておらず、確定には至っていない。

註11　2003年８月９日、行田市立郷土博物館で中島洋一氏の御協力のもと観察を行った。対象は円筒埴輪79個体（うち朝顔形埴輪２）と形象埴輪片で、外面のハケメの条線のみを検討した。この結果、本文の通り４種類のハケメ工具が確認できた。仮に手法属性で２大別され、２組の工具がそれぞれに対応するなら、最低２人の工人の関与が想定できる。だが、ハケメ工具が１方向にだけ使いやすい形状であると見る、これまでの帰納的なモデルからすると、４人以上としておく方が妥当と思われる。なお、遺存良好な人物埴輪を中心とした形象埴輪群は、同日に、埼玉県立博物館に展示中のものをガラス越しに観察した。その限りでは４種のいずれかに合うように見受け

られたが、未確定である。

註12　円は中心から等距離にある点の集合であり、推定図中の円はそれを示すための便法でしかない。何重も円を地面に描いて現実の築造を進めたと見ているのではなく、たとえば、二つの基準円の交点はある尺度に基づいた単位の距離を二つの中心から延ばしたときに両者が一致するところである、ということを表しているにすぎない。このため、現実には、主軸と主軸上の点を元に、線対称の図形が描かれる要領で築造企画があったと考えられる。主軸上の点は、二つの中心点、交点を見通すときの基準点（起点）、そして、墳丘・周溝・周堤の端を決める基準点となる。

註13　aを160㎝ときりの良い数字にするのは、メートル法を古墳時代に適用するからではない。発見的方法として有効に使えると考えるからである。仮に158㎝や161㎝が現実の値であったとしても、数%拡大・縮小することで企画の推定に用いられるのであれば、その検討を踏まえて数値を微調整し、後で尺度の推定を行えばよいと思われる。

註14　図示していないが、大阪府藤井寺市仲津山古墳（天野他1993）の1／2相似形が富津市内裏塚古墳（小沢1985・1998）であるという想定（塚田1999等）も同じ方法で確認できた。仲津山古墳も築造企画の系譜が津堂城山古墳に連なると見られるので、コナベ古墳・太田天神山古墳とはいわば企画上の「兄弟」にあたると言える。内裏塚古墳は、山倉1号墳のほぼ3倍の規模にあたり、想定築造企画も似ているが、内裏塚古墳群内の後続する墳形は前方部が大きく発達したものであり、両者に墳丘築造企画の直接的な系譜上の関係はないと考えられる。

　なお、周辺では他に、山倉1号墳に対して規模がほぼ2倍で、主軸方位と主軸に対する横穴式石室の向きがほぼ同じという、木更津市金鈴塚古墳が存在する（滝口他1952）。当時の上総地域の規範的な存在であったと思われるこの古墳が石室・石棺材に房州石（磯石）・緑泥片岩を用いることと、内裏塚古墳群古塚古墳と埼玉古墳群将軍山古墳が同型であることは（塚田1999）、山倉1号墳の墳丘築造企画・石室石材・埴輪・埴輪配列が当地で揃った背景にどのような関係があったかを示唆しており興味深い（山崎1987・1999a）。埴輪（生出塚遺跡製品・下総型埴輪）の供給域と房州石（磯石）利用石室の分布のありかたは、これらと相関する現象なのだろう（日高1997等）。

註15　ちなみに津堂城山古墳・太田天神山古墳・保渡田八幡塚古墳と、墳丘企画の系譜が想定できる古墳において水鳥形埴輪の出土が見られる。墳丘形態もさることながら、4世紀後葉～末の津堂城山古墳から6世紀末の山倉1号墳に至るまで、200年以上も変わらない構成要素があるとしたら、その意義は重要だと思われる（車崎氏の御教示による）。

註16　酒巻14号墳では、女性を表現したと見られる島田髷の人物埴輪と交互に並ぶかたちで、男性と思われる褌の人物埴輪とともに筒袖表現の人物埴輪全身像が配置されている（中島他1988）。この配列を指示した者は男性と見ていたようである。

註17　土製品と土器の違いをこのような側面で説明できるかもしれない。前者は使用が日常的でなく、ときに遺棄に近い用途を持つため、日頃から手にしたり目にすることが少ない。対して、後者は使用・製作の時空上の距離が常に近い、すなわち、日常的に使用するため身近な上に製作の頻度も高い。こう比べると、形状の安定性において両者は大きく異なる可能性が考えられよう。一般的に型式学的検討に耐えうる型式が設定できるほど安定するのは、当然、後者ではないだろうか。

註18　菱田哲郎氏の想定する須恵器生産における工人の移動パターンで言う「帰郷型」と同様である（菱田1992・2003）。

註19　料理のレシピや鶴の折り方を読み聞きするだけで、目的物を忠実に再現できる人間はそういないのではないだろうか。

引用・参考文献

相京邦彦 1995「47草刈33号墳」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報平成5年度』千葉県教育庁生涯学習部文化課

浅利幸一 1989「千葉県市原市国分寺台遺跡群の調査－古墳時代集落跡を概観して」『MUSEUM ちば　－千葉県博物館協会研究紀要』第20号　千葉県博物館協会

浅利幸一・大村直 1987『千葉県市原市御蔭目浅間神社古墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第21集　（財）市原市文化財センター

甘粕　健・車崎正彦・加藤一郎 2002『鶴窪古墳』市原市教育委員会

甘粕　健・杉山晋作・車崎正彦 1994『前方後円墳集成』東北・関東編　山川出版社

天野末喜他 1993『新版　古市古墳群　－藤井寺の遺跡ガイドブック№6－』藤井寺市教育委員会事務局

飯島義雄他 1999『観音山古墳と東アジア世界　－海を越えた鏡と水瓶の縁－』群馬県立歴史博物館

石井則孝・轟　俊二郎他 1971『千葉県市原市姉ヶ崎町　原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会

石野博信他 1992『古墳時代の研究』第9巻古墳Ⅲ埴輪　雄山閣

市毛　勲・戸田　健 1965『千葉県市原市西広貝塚　附　山倉貝塚』市原市教育委員会

市毛　勲他 1976『南向原　古墳・方形周溝墓・住居址の調査』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会

市毛　勲他 1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会

市毛　勲 1985「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部

市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』北部編
稲村　繁 1999『人物埴輪の研究』同成社
犬木　努 1995「下総型埴輪基礎考－埴輪同工品論序説－」『埴輪研究会誌』第１号　埴輪研究会
犬木　努 1996「埴輪製作における個体内・工程別分業と種類別分業　－千葉県小見川町城山１号墳出土埴輪の再検討－」『埴輪研究会誌』第２号　埴輪研究会
犬木　努 2002a「埴輪同工品論の現在」『季刊考古学』第79号　雄山閣
犬木　努 2002b「埴輪同工品論の論理と方法」（大学合同考古学シンポジウム実行委員会2002所収）
犬木　努 2003「同工品識別をめぐる諸問題（覚書）」（森下・廣瀬他2003所収）
梅澤重昭 1998「綿貫観音山古墳の設計・企画」（徳江他1998所収）
梅澤重昭 1999「毛野の前方後円墳の系譜」『第４回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞前方後円墳の築造企画　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
梅澤重昭 2003「太田天神山古墳の企画・設計について」『新世紀の考古学　－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
太田博之 2002「埴輪の生産と流通　－生出塚埴輪窯製品の広域流通をめぐって－」『季刊考古学』第79号　雄山閣
大谷晃二 2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16　島根県教育委員会
大谷　猛他 1986『東北新幹線建設工事に伴う遺跡発掘調査概要　赤羽台・袋低地・船渡』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
大谷　猛・中島広顕 2003「北区赤羽台古墳群」『第８回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞後期古墳の諸段階　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
大場磐雄・亀井正道 1951「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第３号
大村　直 1991『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡　－不特定遺跡発掘調査報告(2)－』財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集　（財）市原市文化財センター
小久貫隆史 1996『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第293集　（財）千葉県文化財センター
小久貫隆史他 1999「実信地区」『市原市市原条里制遺跡　－東関東自動車道（千葉富津線）、市原市道80号線埋蔵文化財調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告第354集　（財）千葉県文化財センター
小沢　洋 1985「Ⅴ．内裏塚古墳の調査」『千葉県富津市　二間塚遺跡群確認調査報告書Ⅱ（昭和59年度）　－富津古墳群周溝確認調査－』富津市教育委員会
小沢　洋 1998「内裏塚古墳」『平成９年度　－千葉県富津市－　富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
忍澤成視他 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　市原市教育委員会
樫田　誠 1997『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』（第二版）石川県小松市教育委員会
樫村宣行 1998「「常総型甕」編年小考　－茨城県南部を中心として」『列島の考古学　－渡辺誠先生還暦記念論集－』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
堅田　直 1982「前方後円墳の墳丘について　－築造の原則－」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
神野　信 1994「３章総論２節　房総における埴輪の生産と流通」（深沢他1994所収）
川越市教育委員会文化財保護課 2003『南大塚古墳群（第２次）』発掘調査現地説明会資料
川西宏幸 1973「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第４号　史学研究会
川西宏幸 1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第２巻第４号　（財）大阪文化財センター
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号
木川浩司 2001「君津・市原地域の円筒埴輪編年試論－千葉県の円筒埴輪編年①－」『埴輪研究会誌』第５号　埴輪研究会
木對和紀 1990「姉崎上野合遺跡」『平成元年度　市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀 2004a『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅻ　市原市教育委員会
木對和紀 2004b『平成15年度　市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
熊野正也・谷口　榮・野口良也 2003「葛飾区柴又八幡神社古墳の調査」『日本考古学協会第69回総会　研究発表要旨』日本考古学協会
車崎正彦 1980「常陸久慈の首長と埴輪工人」『古代探叢』早稲田大学出版部
車崎正彦 1988「埴輪の作者」『早大所沢文化財調査室月報』№34　早大所沢校地文化財調査室
車崎正彦 1992「２埴輪の種類と編年　１円筒埴輪　B 関東」（石野他1992所収）
車崎正彦 1995「関東における埴輪製作者集団」『日本考古学協会　1995年度茨城大会　シンポジウム２　関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会茨城大会実行委員会
小泉　功・田中　信 1988『南大塚古墳群発掘調査報告書』川越市遺跡調査会

小出紳夫 2001「姉崎妙経寺遺跡（４次調査）」『市原市文化財センター年報　平成10年度』（財）市原市文化財センター
小出義治他 1980『上総山王山古墳』上総山王山古墳発掘調査団
鴻巣市市史編さん調査会 1989「生出塚遺跡」『鴻巣市史』資料編１考古　埼玉県鴻巣市
越川敏夫他 1984『市原市姉崎・原１号墳周湟址及び集落跡の調査』原遺跡調査会
小林三郎他 1976『法皇塚古墳』市立市川博物館研究調査報告第三冊
小林行雄 1960『埴輪』陶器全集第１巻　平凡社
小林行雄 1974『埴輪』陶磁大系第３巻　平凡社
近藤　敏 2003「姉崎山新遺跡第３地点」『第18回　市原市文化財センター遺跡発表会要旨　平成15年度』（財）市原市文化財センター
近藤　敏他 1987『菊間手永遺跡』（財）市原市文化財センター
斎木　勝他 1974『市原市菊間遺跡　－市原市菊間地区における公営住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告－』（財）千葉県都市公社
佐伯秀人 1992「内裏塚古墳」『－千葉県富津市－　内裏塚古墳群』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第67集　（財）君津郡市文化財センター
埼玉県立埋蔵文化財センター他 2003『彩の国埼玉　発掘調査速報展2003』
坂本和俊 1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』６　群馬土器観会
櫻井敦史 2003「八幡御墓堂遺跡」『市原市文化財センター年報　平成12年度』（財）市原市文化財センター
笹生　衛 1990『千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集　－椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告』千葉県文化財センター調査報告第185集　（財）千葉県文化財センター
佐藤康二 2003『特別展「埼玉の名宝シリーズ４　めざめろ古代－新指定の考古資料－」』埼玉県立博物館
志村　哲 1998「関東の器財埴輪」『第12回企画展　器財埴輪の世界　－関東の器財埴輪－』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
白井久美子・芳賀正和 1997「古墳に使用された磯石」『土筆』第４号
白石太一郎 1993「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　国立歴史民俗博物館
白石真理 2001「埴輪の生産」『北区飛鳥山博物館研究報告』第３号　東京都北区教育委員会
須田　勉他 1976『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団
杉山晋作他 1986『千葉県富津市　内裏塚古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会
杉山晋作 1994「打出古墳」『前方後円墳集成　東北・関東編』山川出版社
杉山晋作 1996「東国の人物埴輪群像と死者儀礼」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集　国立歴史民俗博物館
杉山晋作 2000a「千葉における前方後円墳の終焉とその後」『第５回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞前方後円墳の終焉とその後　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
杉山晋作 2000b「千葉県／姫塚古墳の埴輪配列」（若狭・内田2000所収）
清藤一順他 1988「吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度　市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会
大学合同考古学シンポジウム実行委員会編 2002『埴輪を見分ける』
森下章司・廣瀬　覚他 2003『第52回埋蔵文化財研究集会　埴輪　－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
高橋一夫・本間岳史 1994「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』第29号　埼玉県
高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会
高橋康男 1992『市原市小谷１号墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第45集　（財）市原市文化財センター
高橋康男 1998『市原市五霊台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第64集　（財）市原市文化財センター
滝口　宏他 1952『上總金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室
滝口　宏他 1969『昭和四十三年度　市原市山倉貝塚調査報告（住居址・遺構編）－付・山倉貝塚人骨所見概報』山倉貝塚調査団
滝口　宏・平野元三郎 1964「市原市西広モチ塚古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会（市毛・戸田1965所収）
田中新史・宮本敬一 1974「国分寺台の遺跡分布調査概要」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1977「1976年度の古墳調査について」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1979「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」『伊知波良』２　伊知波良刊行会
田中新史 1981「根田古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1982「古墳の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史 1985「古墳時代終末期の地域色　－東国の地下式系土壙墓を中心として－」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学考古学会
田中新史 1996「養老川流域の石棺・石室　－総の石材利用古墳の中で－」『土筆』第４号　土筆舎
田中新史 2000『上総市原台の光芒　市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
谷口　榮・三宅俊彦他 1997『－平成９年特別展－　人物埴輪の時代』葛飾区郷土と天文の博物館
塚田良道 1999「測量図の比較から古墳の系譜を考える」『第４回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞前方後円墳の築造企画　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
塚田良道・中島洋一 1999「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』第４集　行田市郷土博物館
徳江秀夫他 1998『綿貫観音山古墳Ⅰ　墳丘・埴輪編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
徳江秀夫 1998「綿貫観音山古墳の埴輪群の造形とその祭祀表現」（徳江他1998所収）
徳江秀夫他 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第255集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
轟　俊二郎 1973『埴輪研究』第１冊
中島洋一他 1988『酒巻古墳群　昭和61年度～昭和62年度発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第20集　行田市教育委員会
中島洋一・門脇伸一 1994『酒巻21号墳（２次）　白山愛宕山古墳（１、２次）　白山２号墳』行田市文化財調査報告書第30集　行田市教育委員会
中野晴久 1994「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
中村恵次他 1968『千葉県木更津市　清見台古墳群発掘調査報告』清見台古墳群発掘調査団
萩原恭一 1994「３章総論１節　房総における埴輪の変遷と分布」（深沢他1994所収）
橋本博文 1980「埴輪祭式論　－人物埴輪出現後の埴輪配列をめぐって－」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
蜂屋孝之 2000「姉崎粟塚遺跡」『市原市文化財センター年報（平成８年度）』（財）市原市文化財センター
土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』学生社
土生田純之 1992「４埋葬施設　３横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』第７巻　古墳Ⅰ　墳丘と内部構造　雄山閣
土生田純之 1998『黄泉国の成立』学生社
菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第３号　考古学研究会
菱田哲郎 2003「須恵器生産からみた地域間関係」（森下・廣瀬他2003所収）
日高　慎 1995「人物埴輪の共通表現とその背景」『筑波大学　先史学・考古学研究』第６号
日高　慎 1996「人物埴輪表現の地域性　－双脚人物像の脚部の検討」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会
日高　慎 1997「埴輪から見た交流と地域性　－柴又八幡神社古墳をめぐって」（谷口他1997所収）
日高　慎 1999a「下総型埴輪と墳丘企画」『考古学と遺跡・遺構』同志社大学考古学シリーズⅦ　同志社大学
日高　慎 1999b「下総型埴輪が樹立された前方後円墳形態」『考古学ジャーナル』№443　ニュー・サイエンス社
日高　慎 1999c「人物埴輪の共通表現検討とその有効性　－頭巾状被りものをつける人物埴輪をもとにして－」『埴輪研究会誌』第３号　埴輪研究会
日高　慎 2001「埴輪の地域性」『北区飛鳥山博物館研究報告』第３号　東京都北区教育委員会
平野雅之・諸墨知義 1987『－千葉県富津市－　富士見台遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第26集　（財）君津郡市文化財センター
広瀬和雄・天野末喜 1992『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社
廣瀬　覚 2000「寺戸大塚古墳における埴輪生産組織復原にむけての予察　－第６・７次調査出土埴輪の総括にかえて－」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　（財）向日市埋蔵文化財センター
廣瀬　覚 2003「埴輪の伝播と工人論　－前期古墳における生産組織分析の事例から－」（森下・廣瀬他2003所収）
深沢克友他 1994『千葉県文化財センター研究紀要』15　（財）千葉県文化財センター
藤沢　敦・江川　隆 1991『菅沢２号墳』山形市教育委員会
松尾昌彦 1997「横穴式石室石材の交流と地域性　－房州石使用古墳を中心として」（谷口他1997所収）
松尾昌彦他 2002『平成14年度企画展　はにわの十字路　－古代東国の交流と地域性－』松戸市立博物館
松尾昌彦 2003「千葉県域の後期古墳に見る画期とその意味」『第８回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞後期古墳の諸段階　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
右島和夫 1989「東国における埴輪樹立の展開とその消滅　－上野地域の事例を中心に－」『古文化談叢』第20集（下）　九州古文化研究会
右島和夫他 1992『神保下條遺跡　鏑川流域における埴輪出土古墳の調査』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第137集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
右島和夫 1995「「上野型埴輪」の成立」『研究紀要』12　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

水野正好 1971「埴輪芸能論」『古代の日本』第2巻風土と生活　角川書店
水野正好 1977「埴輪の世界」『日本原始美術大系』3土偶埴輪　講談社
三辻利一 1994「千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光X線分析」(深沢他1994所収)
村山好文 1985「印旛・手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な甕形土器について」『日本考古学研究所集報』Ⅶ　日本考古学研究所
山崎　武他 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集　鴻巣市遺跡調査会
山崎　武他 1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ　生出塚遺跡（A地点)』鴻巣市文化財調査報告第2集　埼玉県鴻巣市教育委員会
山崎　武・塩野　博 1991「生出塚と馬室埴輪製作跡」『考古学ジャーナル』№331　ニュー・サイエンス社
山崎　武 1993「埼玉県における埴輪窯跡の調査」『古代を考える54　埴輪製造所遺跡の検討』古代を考える会
山崎　武他 1987・1994『鴻巣市遺跡群Ⅲ　生出塚遺跡（D・E地点)』鴻巣市文化財調査報告第3集　埼玉県鴻巣市教育委員会
山崎　武 1999a「生出塚窯産埴輪が供給された前方後円墳形態」『考古学ジャーナル』№443　ニュー・サイエンス社
山崎　武 1999b『生出塚遺跡P地点』鴻巣市遺跡調査会報告書第9集　埼玉県鴻巣市遺跡調査会
山崎　武 2000「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第4号　埴輪研究会
山崎　武 2002『生出塚遺跡M地点』鴻巣市文化財調査報告第11集　鴻巣市教育委員会
山崎　武他 2002『市川市出土の埴輪』市立市川考古博物館研究調査報告第8冊　市立市川考古博物館
横山浩一 1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号　九州大学九州文化史研究施設
横山浩一 1993「刷毛目板の形状について」『論苑 考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会
横山　滋 1991『模倣の社会学』丸善ライブラリー8　丸善
吉田恵二 1973「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第3号　考古学研究会
米田耕之助 1976「上総山倉一号墳の人物埴輪」『古代』第59・60合併号　早稲田大学考古学会
ジョージ　レイコフ 1993（池上嘉彦他訳、原著1987)『認知意味論』紀伊國屋書店
若狭　徹 1995「上野西部における5世紀後半の首長墓系列　－保渡田八幡塚古墳の設計企画を起点として－」『群馬考古学手帳』5　群馬土器観会
若狭　徹 1999「保渡田八幡塚古墳－その規格」『第4回東北・関東前方後円墳研究会大会　＜シンポジウム＞前方後円墳の築造企画　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
若狭　徹他 2000『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
若狭　徹・内田真澄 2000『はにわ群像を読み解く　保渡田八幡塚古墳の人物・動物埴輪復原プロセス』かみつけの里博物館
若松良一 1988『'88さいたま博覧会協賛特別展図録　はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館
若松良一他 1989『奥の山古墳　瓦塚古墳　中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第七集・別冊　埼玉県教育委員会
早稲田大学文学部考古学研究室 2002『埴輪を造る　－実験考古学の挑戦－』早稲田大学會津八一記念博物館
ルートヴィヒ　ウィトゲンシュタイン 1999（藤本隆志訳、原著1953)『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集8　大修館書店

第３節　生出塚埴輪窯の生産と供給について

山崎　武

１　はじめに

生出塚埴輪窯は、これまでの調査成果から５世紀末に生産が開始され埴輪消滅期の６世紀末まで継続的な操業が行われたことが明らかになっている。そして本埴輪窯の成立や発展については、北方８㎞に位置する埼玉古墳群の形成と密接な関係が想定される（註１）。このような理由から筆者は埼玉古墳群の首長の下に生出塚窯（工人集団）が掌握されていたと考えている。もしそのような捉え方が許されるならば、生出塚窯産の埴輪が供給された古墳（被葬者）は、埼玉古墳群（首長）と何らかの関係があったことを示唆したものであり、まさに古墳時代後期における地域間交流（首長同士の結び付き）の実態を表出したものであると言えよう。このような中で山倉１号墳の埴輪群は、比較的早い段階から生出塚窯産と考えられてきたもので、６世紀後半における埴輪の遠距離供給の実態を知ることのできる好例となっている。

２　生出塚埴輪窯と広域供給

生出塚埴輪窯は、元荒川の沖積地を臨む大宮台地の東側緩斜面部に位置する。現在までに埴輪窯跡40基、工房跡（作業場）２基、粘土採掘坑跡１箇所、住居跡（工人集落）10軒が確認されているが、これらは地形から北支台と南支台とに分かれて存在している。このうち、埴輪窯跡は北支台に26基、南支台に14基、工房跡（作業場）は各支台に１基ずつ確認されている。

本窯で生産された埴輪は、円筒・朝顔形埴輪を中心として各種の形象埴輪がある。円筒埴輪は２条凸帯から高さ90㎝を超える８条凸帯のものまであり、幅広い階層の古墳に供給されていたことが判明している。形象埴輪は、人物、動物（鹿・猪・馬・鳥）、家、器財（翳・蓋・大刀・靫・鞆・矛）などがあり、関東地方で一般的に見られる種類の埴輪が生産されている。因みに、６世紀後半以降に北関東型の器財埴輪が多量に生産（樹立）される状況は、群馬県地域との関係の深さを示しており、首長層ひいては埴輪製作者集団同士の密接な関係が予想される。

ところで、生出塚埴輪窯の供給先については、近年の古墳の調査でより明らかになりつつあるが、現在、生出塚窯産の埴輪が出土した古墳は別表の通りである。これらは形象埴輪の共通表現や胎土分析の結果などを基本に筆者が実見した資料のみを挙げたものであり、この他にも可能性があるものがいくつか存在する。生出塚産埴輪を出土した古墳は、埼玉古墳群の100ｍ級の大型前方後円墳から小規模な前方後円墳を中心に円墳にまで及んでいるが、円墳の場合は比較的規模の大きいものが多い傾向が窺える。また、出土古墳は同一地域内で複数の古墳から出土している場合（埼玉古墳群など）と単独で確認されている場合とがある。後者は今後周辺地域で検出される可能性を残しているが、山倉１号墳の場合は周辺に生出塚窯産の埴輪を出土した古墳を確認できず、限定された１古墳に供給されたようである。あるいは単独で供給されている場合は性格を若干異にしているものと推察される。

生出塚埴輪窯からの広域供給は、生出塚円筒埴輪編年のⅢ・Ⅳ期（MT85～TK209型式期）でも６世紀後葉から末に集中している。６世紀前半代の生出塚窯製品の特徴（特に形象埴輪）が不詳である（註２）点は否めないが、それでもこの時期の埴輪は埼玉古墳群や地元新屋敷古墳群周辺以外ではあま

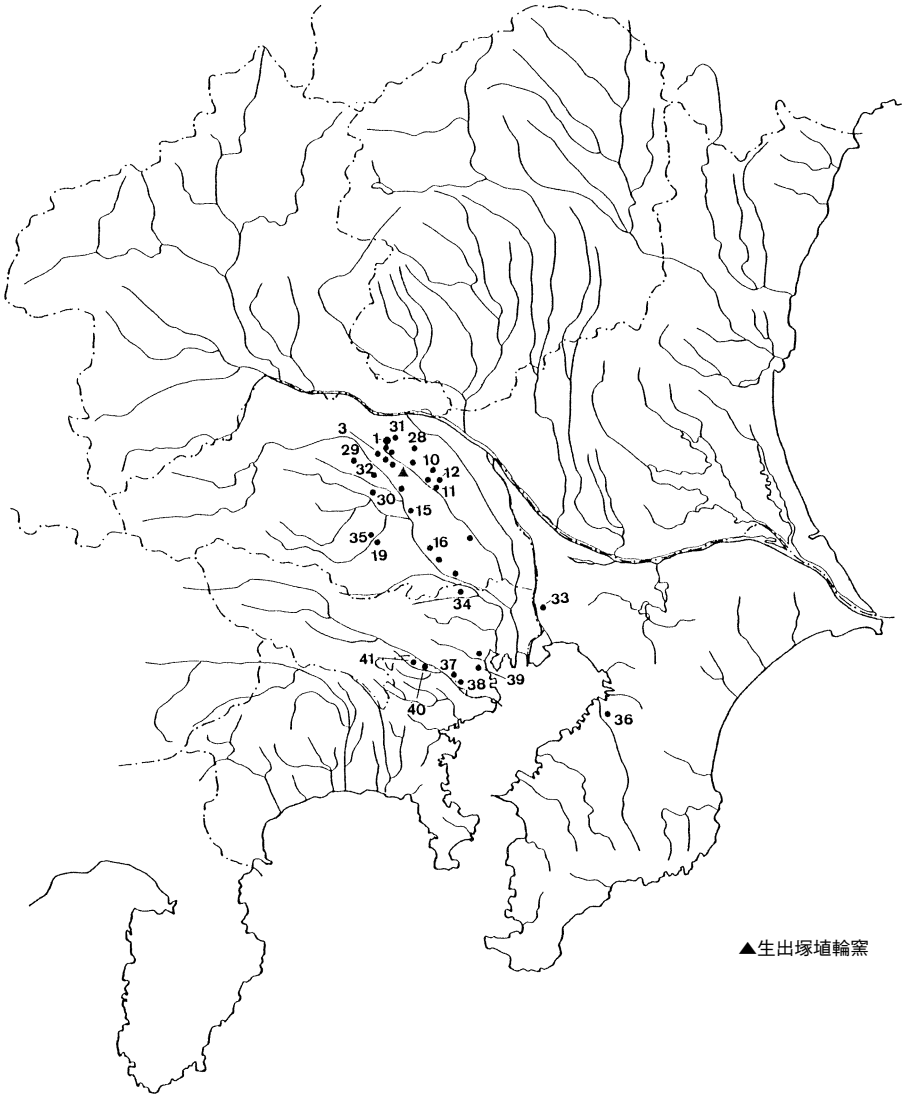
第12表　生出塚埴輪窯産埴輪出土古墳一覧

No	古墳名	所在地	墳形	規模	埋葬施設(石材)	円筒埴輪	形象埴輪								器財埴輪							時期	地図番号
							人	馬	鹿	犬	猪	水鳥	鶏	靫	靱	盾	刀	蓋	矛	鉾子	家		
	〔前方後円墳・大型円墳〕																						1
1	二子山古墳	埼玉県行田市	前方後円墳	138	−	5＜(6)条	○	○							○	○		○				Ⅰ	1
2	丸墓山古墳	〃	円墳	100	−		○															Ⅱ	1
3	鉄砲山古墳	〃	前方後円墳	109	−	4＜(6)条																Ⅲ	1
4	将軍山古墳	〃	前方後円墳	90	横穴式石室(房)	3・4条	○	○							○						○	Ⅲ	1
5	瓦塚古墳	〃	前方後円墳	74	−	4条	○	○	○	○		○			○	○	○				○	Ⅱ	1
6	奥の山古墳	〃	前方後円墳	70	−	4条？															○	Ⅲ	1
7	愛宕山古墳	〃	前方後円墳	53	−	3条	○	○								○	○	○			○	Ⅱ	1
8	天祥寺裏古墳	〃	前方後円墳？	−	−	4条	○	○								○	○			○		Ⅱ	1
9	真名板高山古墳	〃	前方後円墳	127	−	3＜条？																Ⅲ・Ⅳ	28
10	天王山塚古墳	埼玉県菖蒲町	前方後円墳	107	横穴式石室(角)																	Ⅲ・Ⅳ	11
11	東浦古墳	〃	前方後円墳	58	−		○	○														Ⅱ	12
12	三島神社古墳	埼玉県吹上町	前方後円墳	60	横穴式石室(凝)																	Ⅳ	3
13	新屋敷60号墳	埼玉県鴻巣市	帆立貝形	40	−	2条	○															Ⅰ	2
14	生出塚２号墳	〃	帆立貝形？	−	−	4条															○	Ⅱ	2
15	小沼耕地１号墳	埼玉県騎西町	前方後円墳	39	−	2条	○	○	○	○	○	○				○					○	Ⅲ	10
16	中井１号墳	埼玉県北本町	帆立貝形？	30	横穴式石室(凝)	2条	○	○													○	Ⅳ	14
17	井刈古墳	埼玉県さいたま市	前方後円墳	−	−		○	○														Ⅲ	16
18	ひさご塚古墳	埼玉県桶川市	前方後円墳	41	横穴式石室(凝)	3条	○														○	Ⅳ	15
19	弁天塚古墳	埼玉県東松山市	前方後円墳	37	横穴式石室？		○															Ⅳ	29
20	南大塚４号墳	埼玉県川越市	前方後円墳	36	横穴式石室(河)	2・3条	○							○	○		○		○		○	Ⅳ	19
21	西原古墳	〃	帆立貝形	32	横穴式石室(河)			○														Ⅳ	35
22	法皇塚古墳	千葉県市川市	前方後円墳	54	横穴式石室(房)	下総型	○	○											○		○	Ⅲ	33
23	山倉１号墳	千葉県市原市	前方後円墳	45	横穴式石室(房)	2条	○	○				○	○	○	○	○	○		○		○	Ⅳ	36
24	多摩川台１号墳	東京都大田区	前方後円墳	39	横穴式石室(泥)	3条																Ⅳ	37
25	浅間神社古墳	〃	前方後円墳	60	横穴式石室？																	Ⅳ	38
	〔円墳〕																						
26	天王山古墳	埼玉県行田市	円墳	27	−	2条	○															Ⅰ	1
27	埼玉２号墳	〃	円墳	24	−	2条	○										○					Ⅰ	1
28	埼玉３号墳	〃	円墳	13	−	2条	○															Ⅰ	1
29	埼玉４号墳	〃	円墳	18	−	2条	○	○														Ⅰ	1
30	埼玉５号墳	〃	円墳	26	−	2条	○	○														Ⅱ	1
31	埼玉６号墳	〃	円墳	22	−	2条						○										Ⅰ	1
32	武良内１号墳	〃	円墳	20	−	2条																Ⅱ	5
33	武良内２号墳	〃	円墳	30	−	2条																Ⅲ・Ⅳ	5
34	白山２号墳	〃	円墳	40	−	2条	○	○							○		○		○			Ⅳ	31
35	袋台１号墳	埼玉県吹上町	円墳	22	−	2条																Ⅳ	4
36	箕田２号墳	埼玉県鴻巣市	円墳	32	横穴式石室		○	○														Ⅲ・Ⅳ	7
37	箕田３号墳	〃	円墳	34	横穴式石室(河)																	Ⅲ・Ⅳ	7
38	べったら塚古墳	〃	円墳	23	横穴式石室																	Ⅲ・Ⅳ	6
39	側ヶ谷戸11号墳	埼玉県さいたま市	円墳	22	−	2条																Ⅲ	16
40	南原１号墳	埼玉県戸田市	円墳	16	−	2条	○															Ⅳ	18
41	白幡本ｊ宿２号墳	〃	円墳	11	−	2条	○															Ⅳ	17
42	柏崎26号墳	埼玉県東松山市	円墳	30	−	2条	○	○														Ⅳ	30
43	大境４号墳	埼玉県大里町	円墳		横穴式石室	2条	○	○														Ⅳ	32
44	赤羽台４号墳	東京都北区	円墳	20	横穴式石室(房)	2条	○	○							○				○		○	Ⅲ・Ⅳ	34
45	大井林町１号墳	東京都品川区	−	−	−																	Ⅲ・Ⅳ	39
46	日向古墳	神奈川県川崎市	円墳	30			○															Ⅲ・Ⅳ	40
47	稲荷塚古墳	〃	円墳	16			○															Ⅲ・Ⅳ	41
	〔古墳群・その他〕																						
	埼玉古墳群	埼玉県行田市																				Ⅰ～Ⅳ	1
	新屋敷・生出塚古墳群	埼玉県鴻巣市		95基																		Ⅰ～Ⅳ	2
	箕田古墳群	〃		12基																		Ⅲ・Ⅳ	7
	安養寺古墳群	〃		3基																		Ⅰ～Ⅳ	8
	笠原古墳群	〃																				Ⅲ・Ⅳ	9
	栢間古墳群	埼玉県菖蒲町																				Ⅲ・Ⅳ	11
	川田谷古墳群	埼玉県桶川市																				Ⅲ・Ⅳ	15
	三千塚古墳群	埼玉県東松山市																				Ⅲ・Ⅳ	29
	旧大宮市東宮下出土	埼玉県さいたま市																				Ⅱ	13
	大境古墳群	埼玉県大里町																				Ⅲ・Ⅳ	32
	芝丸山古墳群	東京都港区																				Ⅲ・Ⅳ	42

り認められていないことからすれば、生出塚埴輪窯の広域供給の中心は、従来どおり６世紀後半にあったといえる。

3　山倉１号墳と埴輪生産体制

生出塚窯における埴輪窯跡は概ね全長8.5m、焼成部長４ｍ、同幅1.6～２ｍ程の規模であるが、時期が新しくなるにつれて窯体の縮小と傾斜度がきつくなる傾向が認められる。また、生出塚窯の特徴は灰原が非常に深くこの灰原を共有して八手状に延びていることである。さらに灰原を共有して継続的に築かれた窯は数基で完結する一支群を形成し、比較的短期間のうちに築窯と廃棄が繰り返されたものとみられる。こうした支群は、南北の支台を合わせて７支群程検出されているが、このうち最終

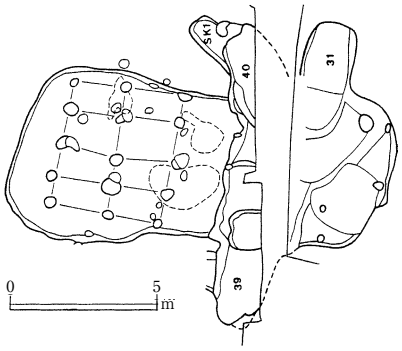


第121図　生出塚窯産埴輪出土古墳分布図

末期（生出塚編年Ⅳ期）のグループは3基で構成されるという共通性を有している。この段階に位置付けられる窯跡は、北支台に3群、南支台に1群確認されているが、南支台のP・46地点の31・39・40号窯の3基で構成される最終グループが、まさに山倉1号墳の埴輪を生産した窯であることが今回の分析でほぼ確実になった。本グループでは39→31→40号の順に操業されたことがほぼ判明しており、この内の31号窯出土埴輪が山倉1号墳と共通している事が確認されている（註3）。また、この最終段階の窯グループの操業期間は10～15年（1基の稼動年数は3～4年と推定される）程度と想定される（山崎2002b）ことから、山倉1号墳へ供給するための生産期間（時間）はどのくらいであったのかは微妙である。さらに、同時期のグループは北支台にA・D支群（1・2・6号窯）、B支群（3・4・8号窯）、C支群（16・17・20号窯）の3支群があり、山倉1号墳への供給体制がこれら同時期に操業されていた全ての窯で行われていたのかが問題となる。つまり、山倉1号墳の埴輪は、31号窯の1基で複数回焼成されたものか、それとも両支群合わせた4基の窯を同時操業して賄われたのかである。山倉1号墳のものに酷似する形象埴輪は両支群で生産しており、両支群の製作者集団は極めて近い関係にあったと思われることからすれば、4基の窯で操業したものと考えられる。この場合

は各窯とも１～２回程度の焼成で十分賄うことができたと思われる。山倉１号墳に供給する生産体制は、この最終グループの４基であった可能性を考えておきたい。

山倉１号墳の円筒埴輪は、生出塚編年Ⅳ期の中でもプロポーション及び底部調整と内面刀子削りの存在率の高さから最も新しい一群であることが明らかである。また、これは焼成窯の特定からも裏付けられることになったが、まさに生出塚埴輪窯の最終末期の稼動期に位置付けられる。この時期は出土須恵器（TK209期段階）が示すように６世紀末頃と推察されるが、この時期は埼玉中の山古墳への埴輪供給が行われていない状況から埼玉古墳群への埴輪供給の断絶があったと指摘されている。しかし、この段階においても生出塚埴輪窯では大型多条凸帯円筒埴輪が焼成されており、埼玉古墳群以外の大型前方後円墳に供給されていた可能性が高いと推定される。今、その古墳を特定する事は困難であるが、その可能性がある古墳としては菖蒲町天王山塚古墳や行田市真名板高山古墳などがその候補といえよう（註４）。なお、これら古墳の被葬者は、この時期における生出塚窯の実質的な掌握者であったものと思われ、山倉１号墳の被葬者とその時期の生出塚窯の管掌者である地域首長との関係は継続していたと考えられる。ここには工人たちが商品的価値を高めた埴輪を独自の権限で養老川流域の山倉１号墳にまで運んだ状況は想定し難いといえるだろう。



第122図　生出塚31・39・40号窯平面図

４　おわりに

山倉１号墳の埴輪は、今回の分析の結果からほぼすべて生出塚窯産であることが明らかになった。さらにその生産窯は生出塚31号窯を中心とするものであることも判明した。現在、これ以外にも東京湾沿岸地域には、生出塚窯から供給された古墳が多く存在し、今後も類例が増える可能性がある。しかし、思えば生出塚埴輪窯が発見された1979年当時は、近隣の埼玉古墳群への供給は当然取り沙汰されたものの、現状の80㎞を超えるような大きな埴輪供給圏を有するようになることはだれも想像しなかったように思う。また、1981年の15号窯跡出土人物埴輪については、山倉１号墳の人物埴輪に細かい点で非常によく類似する埴輪であり、製作者集団は極めて近い関係にあると予想したものの、本当に生出塚窯から直接製品を運んだのかはなかなか確信が持てない状況であった。その後、同遺跡の長年に亘る継続調査で生出塚窯産埴輪の特徴が次第に判ってくることによって、ある程度の同定ができるようになった。一方でこの間に研究の進展による埴輪胎土の科学的分析が広く行われるようになり、さらに考古学的手法による分析も精緻さを増してきた結果、このような著しい成果がもたらされたものである。今、生出塚埴輪窯跡の調査から早くも四半世紀を向かえるが、生出塚窯の調査から明らかになったことは決して小さくないと思われる。

埴輪の生産と供給の問題は、各地の古墳の調査が進むにつれて古墳と生産地の関係がより複雑になり、一窯跡群の供給だけでなく、それぞれ各地の生産地の実態解明がより重要な課題になった。この事実の解明は未だ遠い道程であるが、今後も未発表資料の公表と詳細な分析を継続させていく事がその最も近道なのであろう。

最後に、これまで生出塚産と考えられる埴輪の実見に際しては、各担当者の方をはじめとして多く

の関係者のご協力を頂いてきました。ここではすべての方のお名前を列挙できませんが、この場を借りてあらためて厚く御礼申し上げます。

註１　埼玉古墳群への供給は、円筒埴輪の様相から最大規模の二子山古墳に行われたことがほぼ確実視されるが、最初の稲荷山古墳の築造段階まで遡るのかが問題となっている。また、生出塚窯の生産開始は、新屋敷古墳群の結果から火山灰 FA の降下以前と考えられるが、現在、稲荷山古墳の橙褐色系埴輪が生出塚窯産とする根拠は希薄である。

註２　生出塚窯の焼成上の特徴が表出するのは、新屋敷15号墳や生出塚２号墳の段階（MT15～TK10型式期）であり、それには鮮やかな赤褐色の埴輪が出現している。また、新屋敷15号墳では人物埴輪の他に動物埴輪として馬・犬・猪・鹿が明らかになっている。以上から生出塚窯の地域色が確立するのは６世紀前葉頃と考えられる。

註３　31号窯出土埴輪は同支群内（31・39・40号窯のどれか）で焼成されたことは確実であるが、前後する39・40号窯出土埴輪とも若干接合する事実からすれば、厳密にはどの窯跡で生産されたかの特定は難しい。さらに、複数回の焼成を考慮すれば２基以上の窯で継続的に焼成された可能性もある。

註４　ここで想像をたくましくすれば、埴輪を運ぶのに大きな役割を持った元荒川に隣接して立地し、埼玉古墳群や生出塚窯よりも東京湾に近い下流域に存在する菖蒲町天王山塚古墳は、その被葬者の奥津城に相応しいと言えるかもしれない。この想定を明らかにするためには、同古墳円筒埴輪の規格の確認作業が大きな課題となる。

引用・参考文献

太田博之 2002「埴輪の生産と供給」『季刊考古学』第79号

葛飾区郷土と天文の博物館 1997『人物埴輪の時代』特別展図録

川越市立博物館 2003『はにわは語る』第21回企画展

車崎正彦 1988「埴輪の作者」『早大所沢文化財調査室月報』34

車崎正彦 1999「東国の埴輪」『はにわ人は語る』国立歴史民俗博物館

群馬県教育委員会他 2000『古墳と埴輪』

中山清隆他 1998「品川区大井林１・２号墳の埴輪片分析」『品川歴史館紀要』第13号

浜田晋介 1991「川崎の埴輪」『川崎市民ミュージアム紀要』第４集

浜田晋介 1996「川崎の埴輪Ⅱ」『川崎市民ミュージアム紀要』第９集

千葉県文化財センター 1994『研究紀要』15

日高　慎 1995「人物埴輪の共通表現とその背景」『筑波大学先史学・考古学研究』第６号

日高　慎 1999「人物埴輪の共通表現検討とその有効性」『埴輪研究会誌』第３号　埴輪研究会

松戸市立博物館 2002『埴輪の十字路』平成14年度企画展

山崎　武 1999a『生出塚遺跡Ｐ地点』鴻巣市遺跡調査会報告書第９集

山崎　武 1999b「生出塚窯産埴輪が供給された前方後円墳形態」『考古学ジャーナル』No.443

山崎　武 2001「埴輪の生産と供給」『ようこそ！はにわのふるさとへ』第15回企画展　栃木県教育委員会

山崎　武他 2002a『市川市出土の埴輪』市立市川考古博物館研究調査報告第８冊

山崎　武 2002b『鴻巣市遺跡群Ｘ』鴻巣市文化財調査報告第11集　鴻巣市教育委員会

米田耕之助 1976「上総山倉一号墳の人物埴輪」『古代』第59・60合併号

第４節　埴輪生産体制論雑感

車崎正彦

１　山倉１号墳と生出塚窯

山倉１号墳の埴輪は、生出塚窯の埴輪とよく似ている。殊に生出塚15号窯の全身像人物埴輪とは酷似していて、小林行雄（1960）の言葉でいえば「おなじ作風」つまり「おなじ作者の作品」に違いない。が、このことだけでは山倉１号墳の埴輪が生出塚窯から供給されたとまで言い切れない。何しろ80㎞も離れているのだから。もちろん九州の石棺が畿内へ運ばれたことは判っていたけれど、埴輪は毀れ易いし数も多いから近くで調達されたとみるのが暗黙の諒解だった。それゆえ轟俊二郎（1973）は下総型埴輪の分布に巡回的生産を予想したし、事実、埴輪製作集団が複数の場所で操業することは稀でなかった。その場合、胎土や焼成の具合は多少違うにせよ、同じ作風の埴輪が作られたはずだ。実際、生出塚窯と馬室窯はそういう関係だし、本郷窯と猿田窯、馬渡窯と小幡北山窯の関係もおそらくそうだろう。だからたとえば埴輪製作集団の派遣も考えられるので、もう少し證拠を固めたうえで結論を出すほうがよいと山崎武（1987）も判断したのだ。かと言って、臆せず早々に断定する意見はずいぶん多かったし、胎土分析の結果に矛盾はなかったのだから（三辻1994）、その予想は当っていたわけだが、そのへんの経緯はいわば結果論の後日譚にすぎない。もっと肝心なことは、生出塚窯の埴輪を精細に検討した山崎武（1999）が「31号窯は、円筒埴輪や形象埴輪の様相からすれば、まさしく山倉１号墳の埴輪を焼成した窯であった可能性が極めて高い」と結論したことである。その具体的な検證については小橋健司が詳しく報告するとおりで、しかも山倉１号墳の埴輪に見られるハケメはことごとく生出塚31号窯のそれと対応している。形も技術も材料も何も彼も、まさに特徴すべて完璧に一致することが確かめられたのである。これだけ道具立てが揃えばまったく躊躇なく断言できる、山倉１号墳の埴輪は、生出塚31号窯で作られて遥々運ばれたものだと。

もちろん古墳でも窯でも資料が整っていたという事情は言うまでもあるまい。それはたとえば船塚古墳と公津原窯という高々100ｍの距離の場合さえ実現できないくらい滅多にない好条件だったし、山倉１号墳の調査から僅か数年後に予期しない生出塚窯が見つかったことは何か奇蹟めいた感じさえするくらいだ。じつはだからこそ埴輪の供給範囲についての暗黙の呪縛からも解放されたわけだし、その結果、普通、これほど證拠を揃えられないのだが、それでも生出塚窯の埴輪が東京湾岸の古墳へ供給されたと容易く言えるようになったのである。このへんの事情は微妙だし複雑でむづかしいけれど、より遠距離の埴輪の供給を説くことはいまでも妙に遠慮がちなのを見れば、感じはかなり判ってもらえるだろう。翻って言えば要するに、山倉１号墳と生出塚窯との埴輪の関係というのは、論より證拠とでもいうのかともかく、くだくだしい説明をするまでもなく一見して誰も彼も納得してしまうくらい説得的で圧倒的な情報量をもっているのである。

むろん遠距離供給されたのは生出塚窯の埴輪だけでなかった。たとえば東京都の観音塚古墳・三島塚古墳や神奈川県の瀬戸ヶ谷古墳・駒岡堂の前古墳などの埴輪は、窯は特定できないけれど群馬県の何処かで作られたと推定されている（稲村1999）。千葉県でも市原市の山王山古墳・原１号墳や富津市の九条塚古墳・古塚古墳・稲荷山古墳などの埴輪は、群馬の窯で作られたと考えられる。ただこういう類の議論が何かにつけて抑制の効かない感じになりがちなのは当然で、つまりそれは認定方法が

確立していないということなのだが、埴輪の地域色はずいぶん明らかになってきたし、特に生出塚窯の埴輪の特徴はかなり明瞭に判っている。むろん認定基準を一層厳格に極めていくことは重要だが、と同時に、なぜ埴輪が遠く離れた古墳へ供給されたのかという問題を考えることも大事だろう。

東京湾岸の場合、6世紀後半にはすでに埴輪生産が終焉していたという状況があった。だから埴輪が必要ならば、他の地域の窯から運ぶ（あるいは埴輪製作集団を招聘する）他の選択肢はなかった。それゆえ市原市域で言えば、鶴窪古墳・小谷1号墳・根田1号墳・君塚古墳には下総の埴輪が、山王山古墳・原1号墳には群馬の埴輪が、山倉1号墳には生出塚窯の埴輪が、それぞれ供給された。そう説明できるけれど、しかしそれにしても、なぜ供給窯が区々なのかという疑問は残るだろう。

一古墳の埴輪が複数の窯から供給されることもあった。たとえば市川市法皇塚古墳では形象埴輪はほとんど生出塚窯から供給されたが、円筒埴輪は下総の窯の製品で賄なわれた（山崎2002）。埼玉古墳群の埴輪も複数の窯から運ばれたことが判っていて、将軍山古墳の埴輪は「3系統」に識別されている（岡本1997）。他にも、複数窯の埴輪が列べられた古墳は少なくないらしい。が、ここで大事なのは、そういうふうに埴輪が作られたのは概して規模が大きい古墳においてであったということだ。それは列べられる埴輪の数が多いのだから自然なことで、一応はそう考えて差支えない。しかし問題はむしろその先で、それはどのような社会関係にもとづく現象なのかという事情である。つまり素朴な算術的事由だけでなく、埴輪製作集団の存在形態そのものが問われるわけである。

2　埴輪と土師部

考古学では普通、埴輪製作集団は（いわば国造のような）地域の有力首長に従属していたと考えられているらしい。だから埴輪の受給の理由として首長間の政治的関係が云々されるし、血縁関係さえ言われるわけだが、しかし考えて見ればそういう支配・隷属関係を先験的前提に論を先へ進めるのは些かおかしな話だろう。たとえば生出塚窯の近傍に新屋敷・生出塚古墳群がある。その被葬者が生出塚窯の人々を支配していたと言うのはよく判る。彼らは同じ集団に属していたに違いないのだから。が、その集団を領有していたのが埼玉古墳群の被葬者なのか、その判断は意外にむづかしい。首長の権益が単なる領域支配だけだったとするならば、あるいはそう言えるかもしれない。

しかし当り前すぎて見落されがちだけれども、古代史では6世紀は部民制が成立した時期とされているし、しかも部民制の実質的な形成は5世紀後半の雄略期にまで溯るという説があることも見逃せない。鎌田元一（2001）によれば「部の制度とは、諸豪族による『カキ』の領有を前提とするところの王権への従属・奉仕の体制、朝廷の職務分掌の制度」であって、「部民制の歴史的前提は日本古来の『トモ』制に求めることができ……王権に対する人格的な隷属関係を本質とする……『トモ』制の原理の統治組織の拡大・発展として……王権に服属した地方諸集団は各種の『トモ』として伴造の統率下に組み入れられ」た。そして「部曲（カキ）とは人間集団に対する諸豪族の領有・支配の側面を表現した語であり、品部（ベ）とはそれを王権への従属・奉仕の側面からとらえた語だ」というふうに説明されている。ここでちょっと言い添えておくと、埼玉稲荷山古墳の鉄剣銘の「杖刀人」は後の丈部（杖部）との結びつきが注意されている（岸1988）。

で、喪葬・凶儀とくに埴輪生産をふくめ古墳造営を職掌としていたのが土師部（トモ）というのは定説だし、土師部を統轄していたのが伴造の土師氏一族ということも異説はない。ただここで敢えて

一族と言ったのは理由がある。『続日本紀』延暦９年条に「土師氏に惣て四腹有り」とあり、いづれも本貫は王陵が集中している百舌鳥、古市、秋篠、菅原の地に推定されている（直木1964)。そして事実、百舌鳥には梅町窯・赤畑窯・土山窯・日置荘窯が、古市には土師の里窯・誉田白鳥窯・野々上窯が、菅原には菅原東窯が（東院地区窯も）知られているのだが、しかも各々の埴輪の特徴が微妙に異なっていることも判ってきたのである。そして当り前かもしれないけれど、王陵の埴輪を製作したのは土師氏一族の本拠の窯であったに相違ないし、実際、ボケ山古墳（仁賢陵）の埴輪は野々上窯で作られた（一瀬1982)。ところが継体の王陵とされる今城塚古墳の埴輪は、『日本書紀』欽明23年条に「摂津國三島郡の埴廬」と見える高槻市土室の新池窯で作られた（森田1993)。しかしその埴輪は日置荘窯の埴輪と系譜的に繋がるというのだから（十河2003)、新池窯も「毛受腹」の土師氏が管轄していたと考えて差支えなかろう。ともかく王陵の埴輪生産を土師氏一族（トモ）の膝下の埴輪製作集団（カキ）が管掌する体制はずいぶん古く溯るようなのだが、じつはそれは当り前で、もう一度、鎌田元一（2001）の言葉を借りれば「そもそも『トモ』制とは……アジア的共同体内部における首長への奉仕役に由来し……その始源は古く、おそらく王権の発生と同時にまで遡る」のだから。

が、問題は、土師氏一族が各地の土師部（むろんすべてが埴輪製作集団とは限らない）を領有するというふうな関係が形成されたのは、何時なのかである。それは古代史では「部」の呼称が成立した６世紀前半以前に溯ると言われ、概ね５世紀後半の雄略期と推定されている。しかし一方、こういう問題を考古学的方法で證拠立てるのはすこぶるむづかしい。とは言え、埴輪窯の周辺にはハジ・ハジカ・ハニフなどといった関連地名が多いし（日高2002)、畿内的な埴輪はたとえば白石稲荷山古墳のように窖窯採用（５世紀中葉）以前にも各地に知られているわけだから、何ならそこまで溯るとさえ言えなくもない。かと言って、それは高橋克壽（1994）が説くように「畿内の技術者の派遣、指導」の結果と考えることもできるし、たとえば山形県の大塚天神古墳のように一度限りの埴輪生産などはそう考えなければ理解し難いだろう。そもそも埴輪の生産体制が何時でも何処でも同じだったとは限らないわけだし、実際たとえば尾張のように須恵器製作集団が埴輪を作る場合さえあったくらいで、それが実態なのだから仕方がない。ここでおかしな無理はしないことにする。もっと大事なことは、土師氏－土師部（カキ）という構造の体制の一層の整備が全国的に進行した時期なのである。その場合、５世紀後半から６世紀にかけて埴輪生産が各地に定着し拡大したことが判っているし、たとえば鐘方正樹（2003）は断続ナデ技法を特徴とする「Ｖ群系埴輪」のあり方に注目している。

もうたいてい察しがついたと思うが、各地の埴輪製作集団を土師部（カキ）として編成し、それを全体として中央伴造の土師氏一族が統轄するという体制が５世紀後半から６世紀にかけて整えられたと考えたいのである。とすれば事実、畿内の埴輪の形式も技法も全国各地へ伝達されたことが判っているのだが、このことは上番という部（トモ）の奉仕の形態に密着して理解できるだろう。なぜなら王権への奉仕のため上番した人々は徭役を終えれば本来の帰属集団のもとへ戻ったはずで、そういうヒトの動きに伴ってモノ（埴輪）の情報が伝播していくのは当り前のことなのだから（菱田1992)。たとえば群馬県の七輿山古墳（猿田窯）と大阪府の今城塚古墳（新池窯）との円筒埴輪は形も技法もかなり似ているのだけれど、それは猿田窯の集団から新池窯への上番勤仕がなされた結果と考えればずいぶん解釈し易くなるだろう（そう言えば新池18号窯には「鬼高式土器」があった。この事実はすこぶる示唆的なことのような気がする)。

が、普通、埴輪は集団ごとにそれぞれ特色を違えている。だからこそ埴輪の地域色も生産窯も判るわけだが、それは各々の集団で情報の受入れ方が違っていたというだけにすぎないだろう。たとえば下総では底部調整技法は（畿内的な形象埴輪も）6 世紀前葉の鴇崎天神台 3 号墳に現れながらその後ほとんど普及しないけれど、断続ナデ技法 A は 6 世紀後葉の下総型埴輪に頻繁に見られる。逆に生出塚窯では底部調整技法は顕著だが、断続ナデ技法はあまり目立たない。そもそも各地の埴輪が地域色を備えながら大筋において同調的な変遷をしていることは改めて念を押すまでもないのだが、じつはこのことに情報伝達の事情はおおよそ保證されているのである。とすれば、伝えられた情報の採否は各々の集団の裁量に委ねられていたと言わなければならないのであって、そういう情報の取捨選択はむろん細かなことを言い出せば集団ごとに違っているのだが、大まかに見れば似たような傾向の集団が地域的にまとまっていることはすこぶる重要のような気がする。

3　埴輪の生産と供給

埴輪製作集団は土師氏一族の「カキ」として土師部に編成されていった。だが、集団内部の関係に立入って見れば、埴輪製作者はその集団の首長の「カキ」としての性格もある。そしてたとえば出雲の額田部の場合、額田部臣－額田部首－額田部という構造が復原されていて、さらにそれが全体として中央の額田部連に従属するというかなり重層的な「カキ」の所有関係が判っている（鎌田2001）。しかもこういう重層構造は部民制の一般的特質のはずだから、埴輪製作集団は各々が孤立的に存在したのではなく、相互に深く関係を保ちつつ重層的構造体として存在していたに相違なかろう。しかしその重層構造を具体的に證拠立てるのはかなりむづかしく、所詮まだ確證などあるはずのない話なのだが、大雑把に言えば 6 世紀前半以降、関東の埴輪製作集団は大きく二つにまとめられていったように思う（車崎1999）。もっと大事なのは、そういう動きのなかで、幾つかの集団の廃絶と新たな集団の創設という背反的現象が恰も同時進行的になされたらしいことである。むろんその一つが東京湾岸における埴輪生産の終焉だったわけだが、それなのに古墳の埴輪配列が続けられた事情の根柢には、埴輪の生産体制に何らかの変化があったという条件が横たわっているに違いない。

ここで注目に価するのは、部の設定は、各地で自生的な展開を遂げた部族的政治統合関係（むろんその領域には広狭の違いがあった）の解体を促したのだが、しかし一方でそういう政治的関係を前提に形成されたということである（鎌田2001）。だから非常に図式的な言い方をすれば、埴輪製作集団は、まづそれぞれの地域共同体内部に存在したはずで（第 1 段階）、やがてそれが土師部（カキ）に編成され（第 2 段階）、さらに部の構造に見合うかたちに再編成された（第 3 段階）と考えられる。で、構造というのが些か曖昧ならば、何なら都合と言ってもよいのだが、とにかく第 3 段階の再編成の場合、土師部の職掌は埴輪生産だけでなかったはずだから、諸々の職掌を効率的に案配する方向でなされたと考えてよかろう。これを別の言い方でいえば、供給の広域化をふくめ埴輪生産の集約化なのである。（むろん他の職掌においても集約化がなされたに違いなく、たとえば「房州石」の横穴式石室が広域に分布していることも同じような事情と言って差支えない。）

ここで話はようやく当初の課題に戻る。第 1 ・第 2 段階の埴輪生産は多少変化したにせよとにかく地域の政治的統合の枠内を供給範囲としたのだが、第 3 段階になってからは、やはり地域社会の束縛はあったけれど、しかし往々その領域を越えて供給されるようになったのである。このことはじつは

埴輪生産の集約化の必然的な帰結なのである。ただ何かにつけて地域社会に目を奪われがちなせいでそれがずいぶん見えづらくなっているから、とかく話はおかしくなるが、そうではなく埴輪製作集団の事情を念頭に置いて考えれば、これで埴輪の広域供給の事由はきれいに解決がついている。

古墳に列べられる埴輪の品目と数量、何なら埴輪の格式と言って差支えないが、それは古墳の規模におおよそ規定されている。そして埴輪製作集団は重層的構造体だったのだから、格式高い埴輪は、必要ならば複数の窯から供給をうけることができたのである。が、重層構造ゆえに埴輪製作集団には格の違いがあったはずだ。集団の格はふだん潜在しているけれど、埴輪の供給が地域社会の枠組みを越える場合などには顕在化した。だから埴輪の格式に応じて格の異なる集団が埴輪生産を担当するというふうな現象も生じたのである。これもごく当り前の埴輪生産の集約化の帰結なのである。

最後に言い添えるならば、かつて川西宏幸（1976）は「埴輪を古墳時代研究の素材として活用するためには……大きく二つの研究方向が考えられる。……一つは、古墳時代における埴輪の生産体制をあきらかにする方向である。……もう一つは、埴輪の編年を行ない、それを古墳編年に活用する方向である」と述べて、前者のモノグラフとして『淡輪の首長と埴輪生産』を書き（川西1977）、後者のそれとして『円筒埴輪総論』を著した（川西1978）。以来、埴輪研究がすこぶる活況を呈したことは言うまでもない。むろん細かなことを言えば異論は色々あったけれども、しかし川西の円筒埴輪編年はずいぶん敷衍されたし、「一古墳内の埴輪が幾人の製作者によって作られたのか、という問題から出発し……製作者個人を識別する作業」もかなり蓄積されている。が、今日から見れば「二つの研究方向」は相互に深く連繋していると言わなくてはならないし、否むしろ離ればなれになってしまった「二つの研究方向」を連結させることこそ今日的課題のような気がする。

引用文献

一瀬和夫ほか 1982『古市遺跡群Ⅲ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 7

稲村　繁 1999『人物埴輪の研究』同成社

岡本健一ほか 1997『将軍山古墳』史跡埼玉古墳群整備事業報告書

鐘方正樹 2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会

鎌田元一 2001『律令公民制の研究』塙書房

川西宏幸 1976「埴輪研究の方法」『博士過程研究論文要旨昭和50年度』京都大学大学院文学研究科

川西宏幸 1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第 2 巻第 4 号

川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第 2 ・ 4 号

岸　俊男 1988『日本古代文物の研究』塙書房

車崎正彦 1999「東国の埴輪」『はにわ人は語る』山川出版社

小林行雄 1960『埴輪』陶器全集 1　平凡社

十河良和 2003「日置荘西町窯系円筒埴輪の検討」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会

高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第 2 号

轟俊二郎 1973『埴輪研究』第 1 冊

直木孝次郎 1964『日本古代の氏族と天皇』塙書房

菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第 3 号

日高　慎 2002「埴輪の生産と土師部の成立」『季刊考古学』第79号

三辻利一 1994「千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光 X 線分析」『千葉県文化財センター研究紀要』15

森田克行ほか 1993『新池』高槻市文化財調査報告書第17冊

山崎　武ほか 1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ　生出塚遺跡（A 地点）』鴻巣市文化財調査報告第 2 集

山崎　武 1999『生出塚遺跡（P 地点）』鴻巣市遺跡調査会報告書第 9 集

山崎　武ほか 2002『市川市の埴輪』市立市川考古博物館研究調査報告第 8 冊

写真図版





山倉古墳群の周辺（1947年）

図版2



山倉古墳群の周辺（1961年）



山倉古墳群全景（南から）



山倉古墳群全景（北東から）

図版4



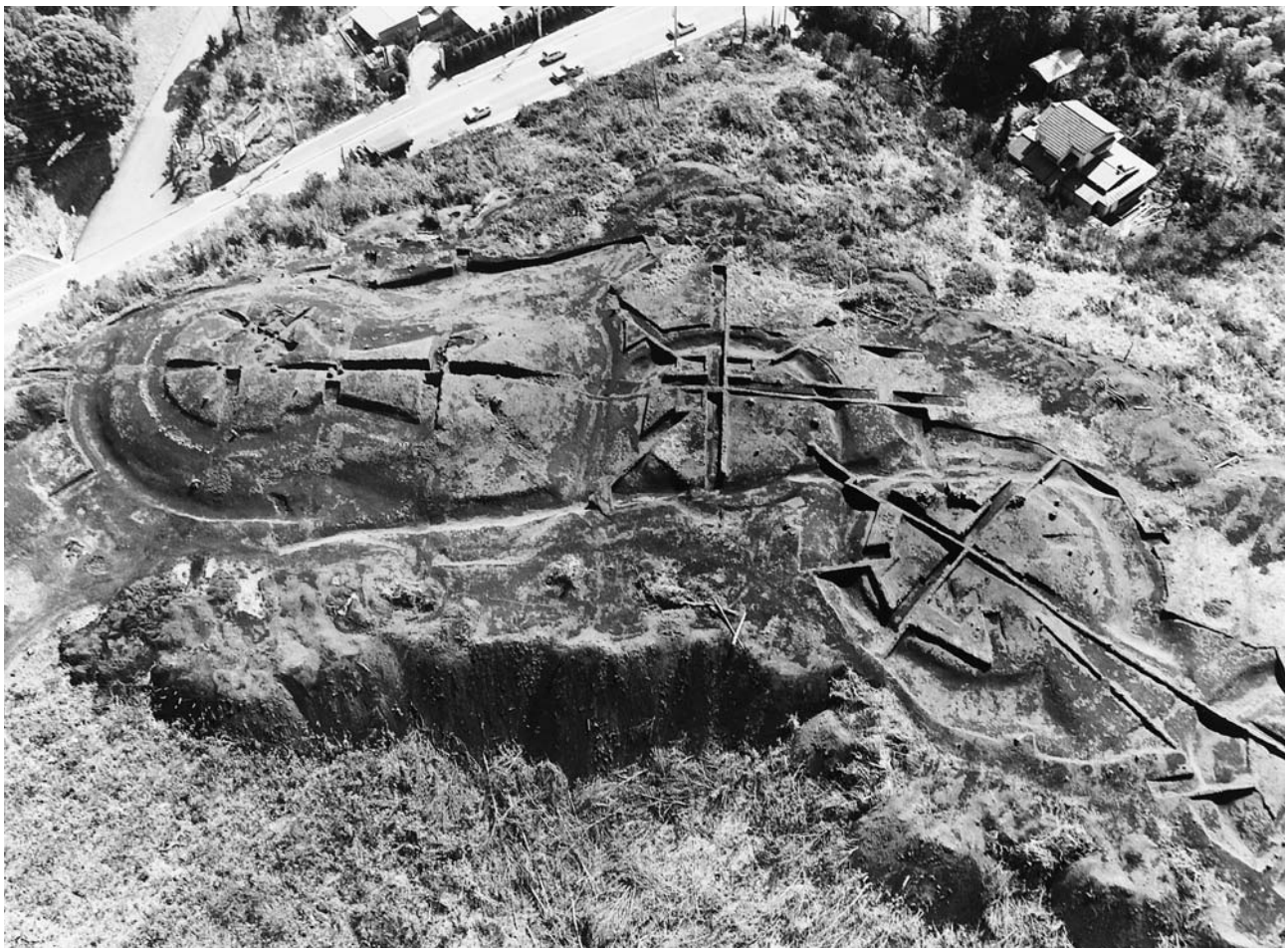
養老川側から古墳群を望む



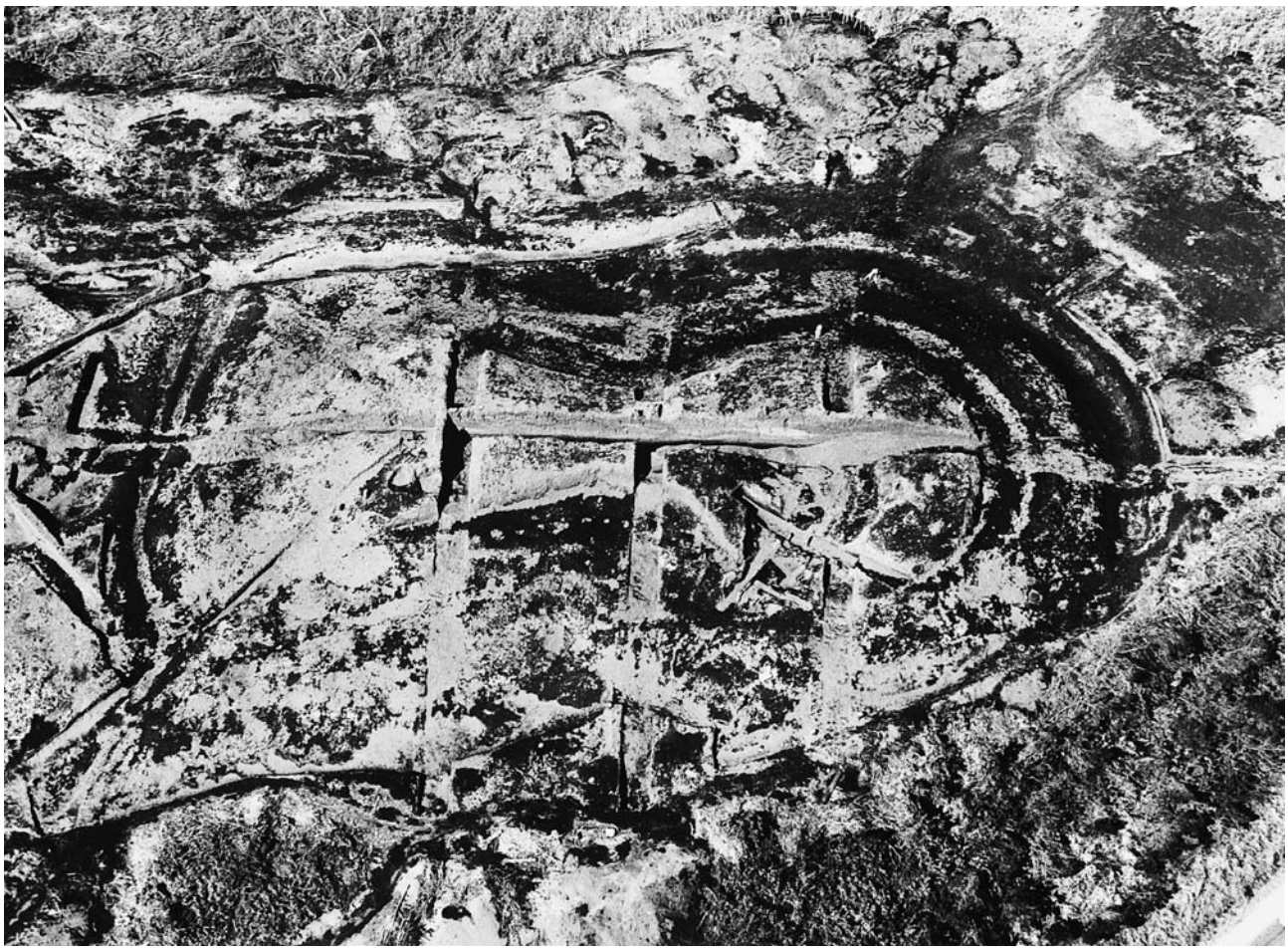
台地側からの眺望



西広を望む



1・2・3号墳（北から）



1号墳（南から）

図版6



1号墳前方部上からの眺望



1号墳調査風景



斜面部トレンチ



1 号墳円筒埴輪列（後円部東側）





1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪列



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪67



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪28・69



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪69・68



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪68・37



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪37・73



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪78・24



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪64



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪59・60



1号墳後円部（11b区）
円筒埴輪23・58・57



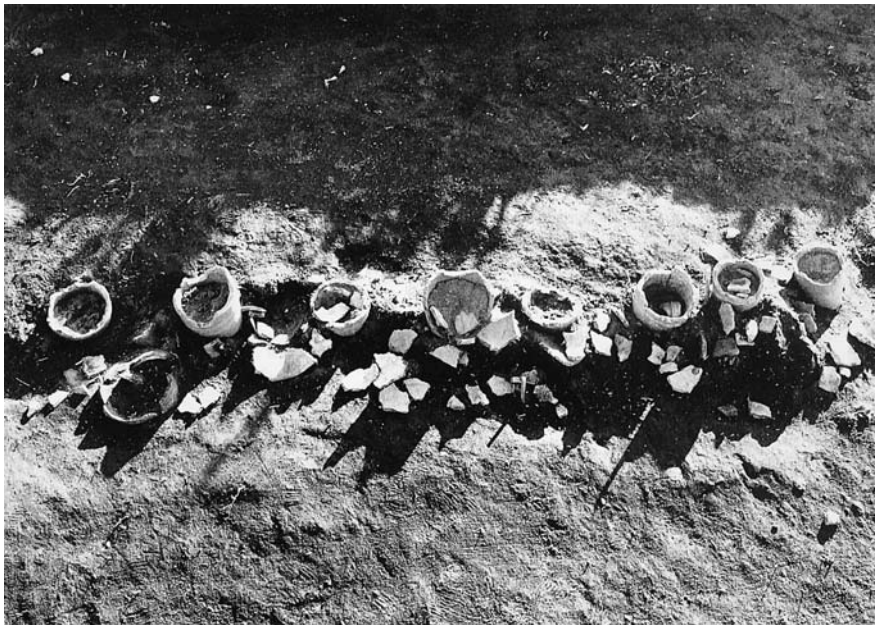
1号墳後円部東側
円筒埴輪列



1号墳後円部北東側
円筒埴輪列（12b・10区）



1号墳後円部（12a区）
円筒埴輪49・朝顔81・円筒埴輪9



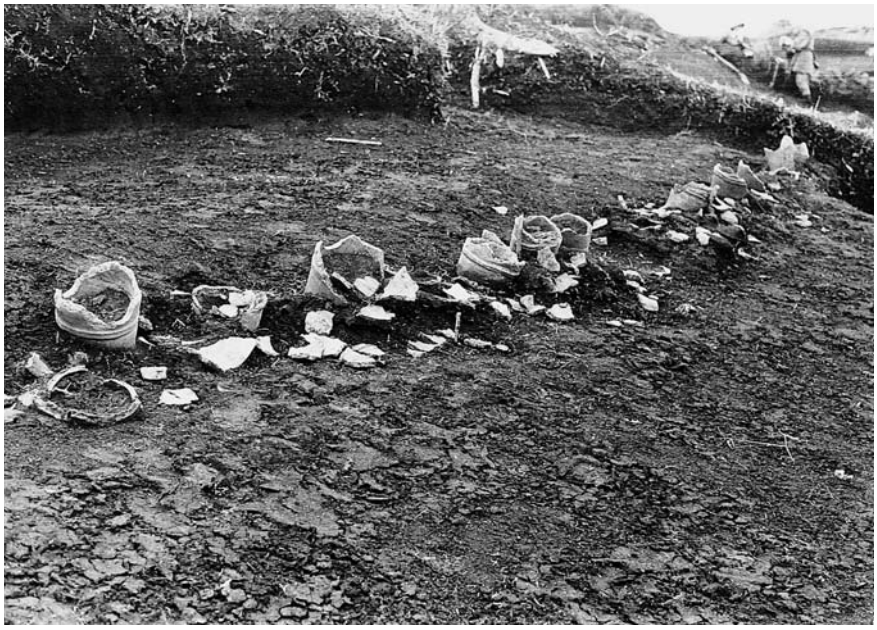
1号墳括れ部北側（12b区）
円筒埴輪61・36・79・44・20・73・11・74



1号墳後円部北東
円筒埴輪列



1号墳後円部北東
円筒埴輪列（12b区）



1号墳後円部北東
円筒埴輪列（12b区）



1号墳後円部北側（12b区）
円筒埴輪66・2・16



1号墳括れ部北側（08区）
円筒埴輪48・46・32・13・12・54

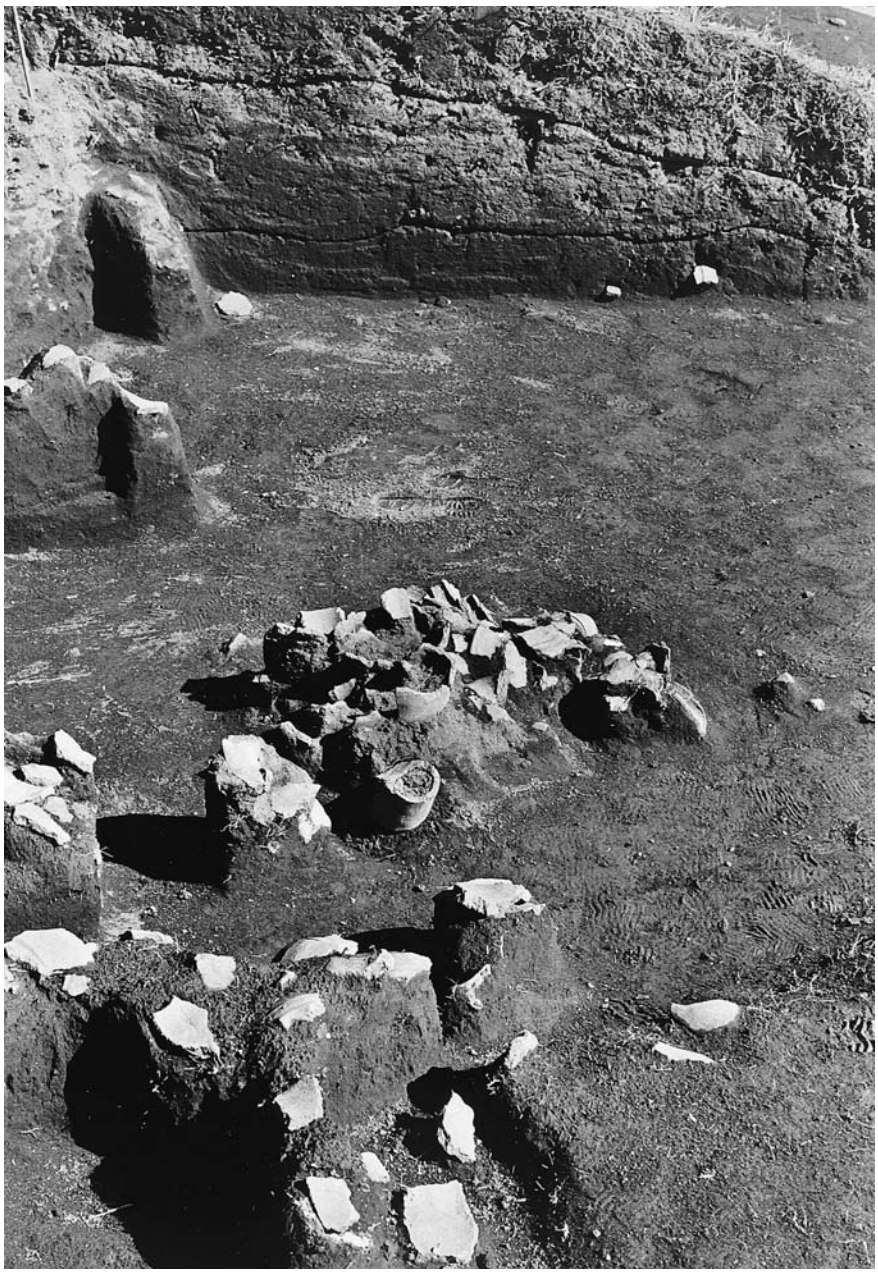


石室開口部付近
埴輪出土状況



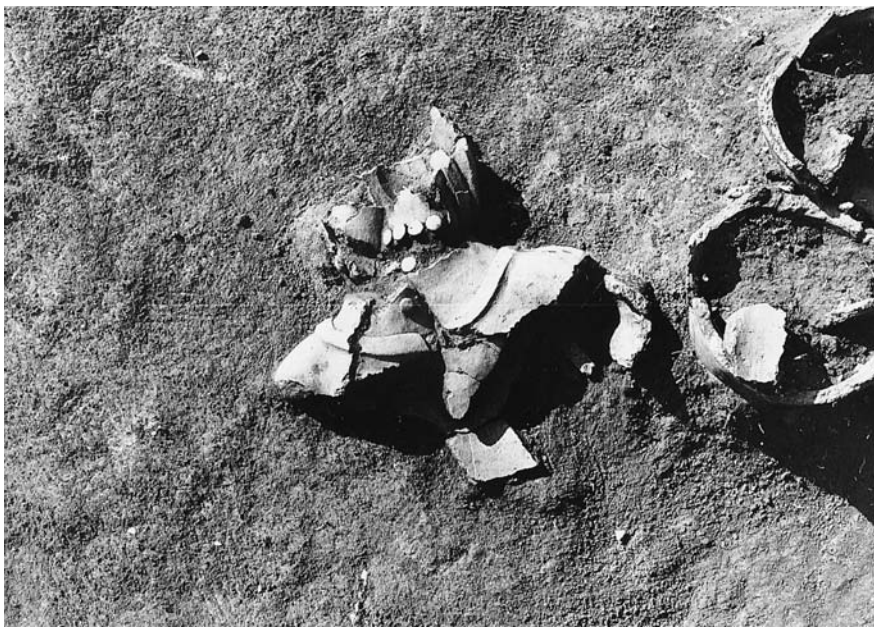


1号墳括れ部南側
人物埴輪出土状況





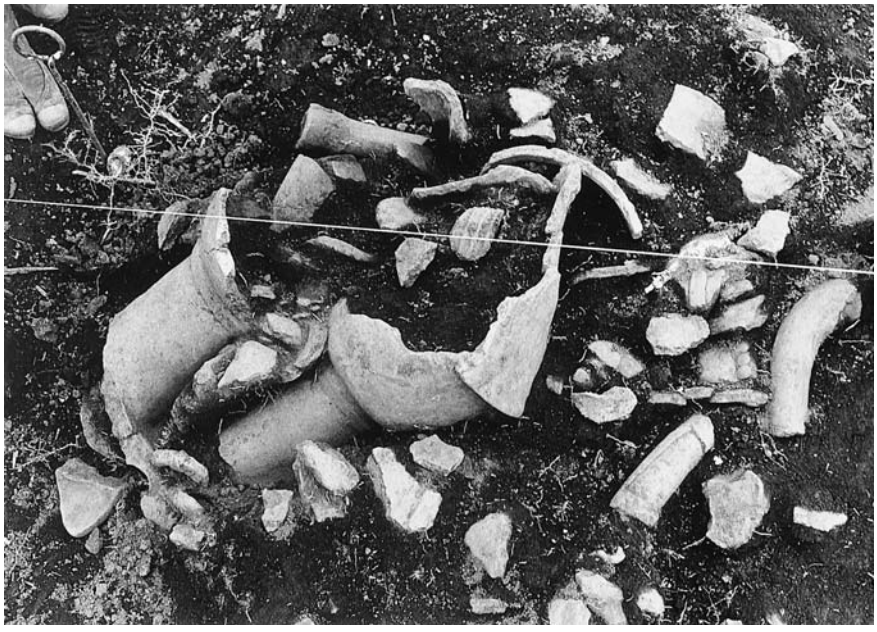
1号墳括れ部南側
筒袖表現の全身像1出土状況



1号墳括れ部南側
筒袖表現の全身像1出土状況

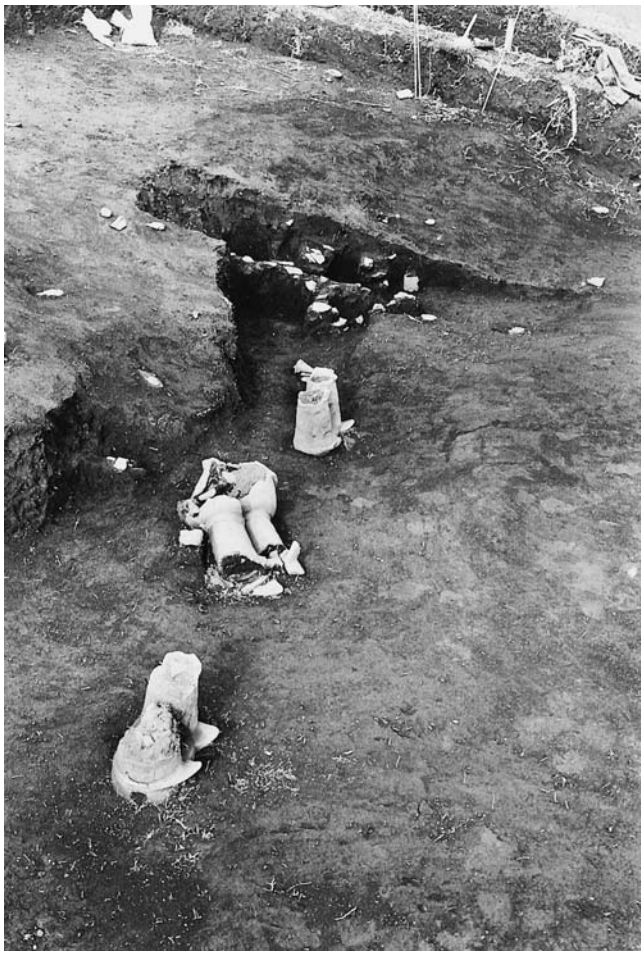


1号墳括れ部南側
振分髪表現の全身像3出土状況



1号墳括れ部南側
冠帽表現の全身像4出土状況

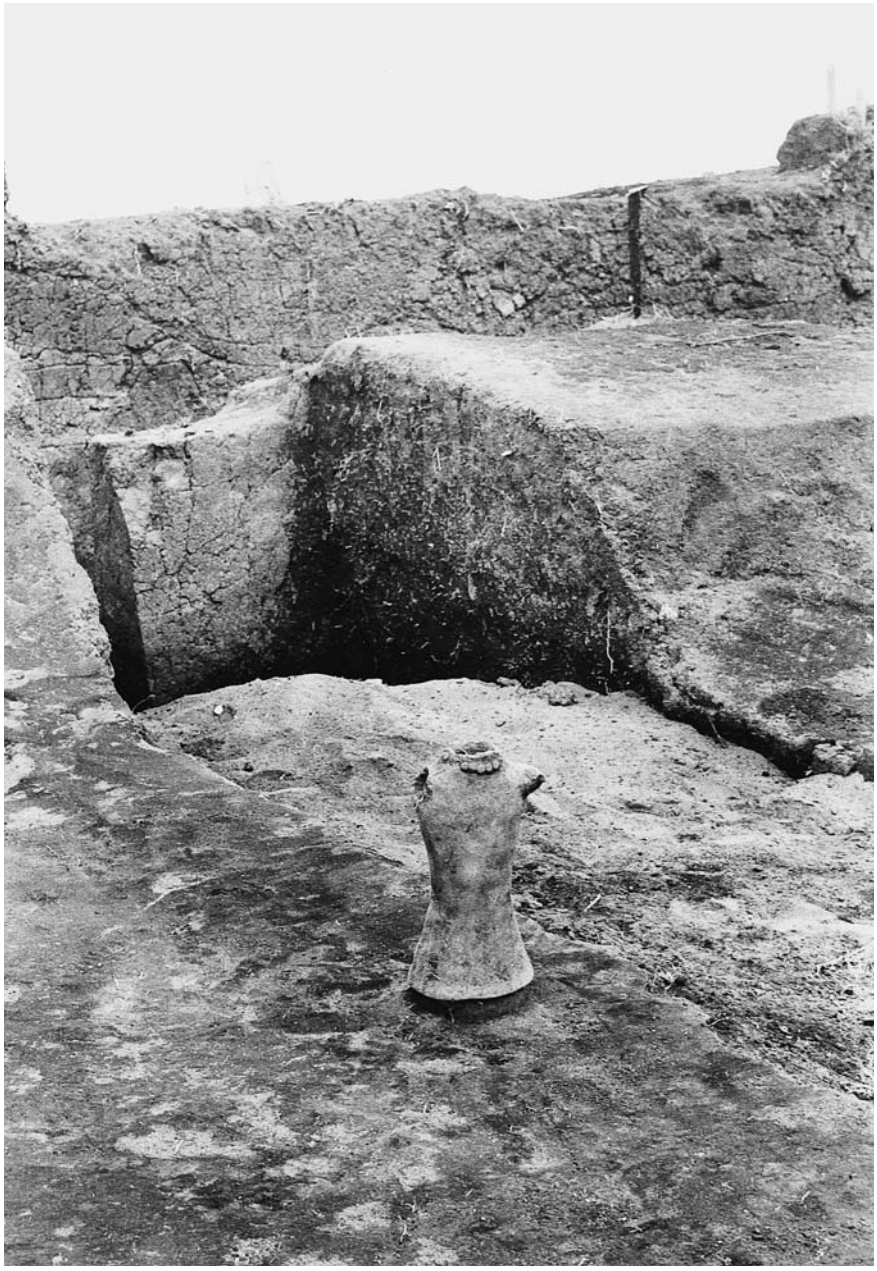


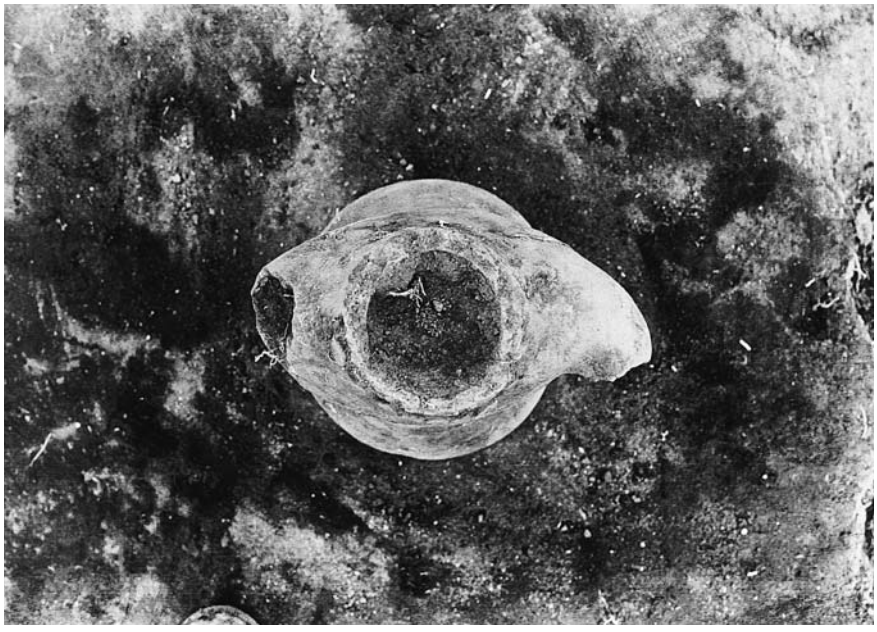


1 号墳括れ部南側
人物埴輪出土状況

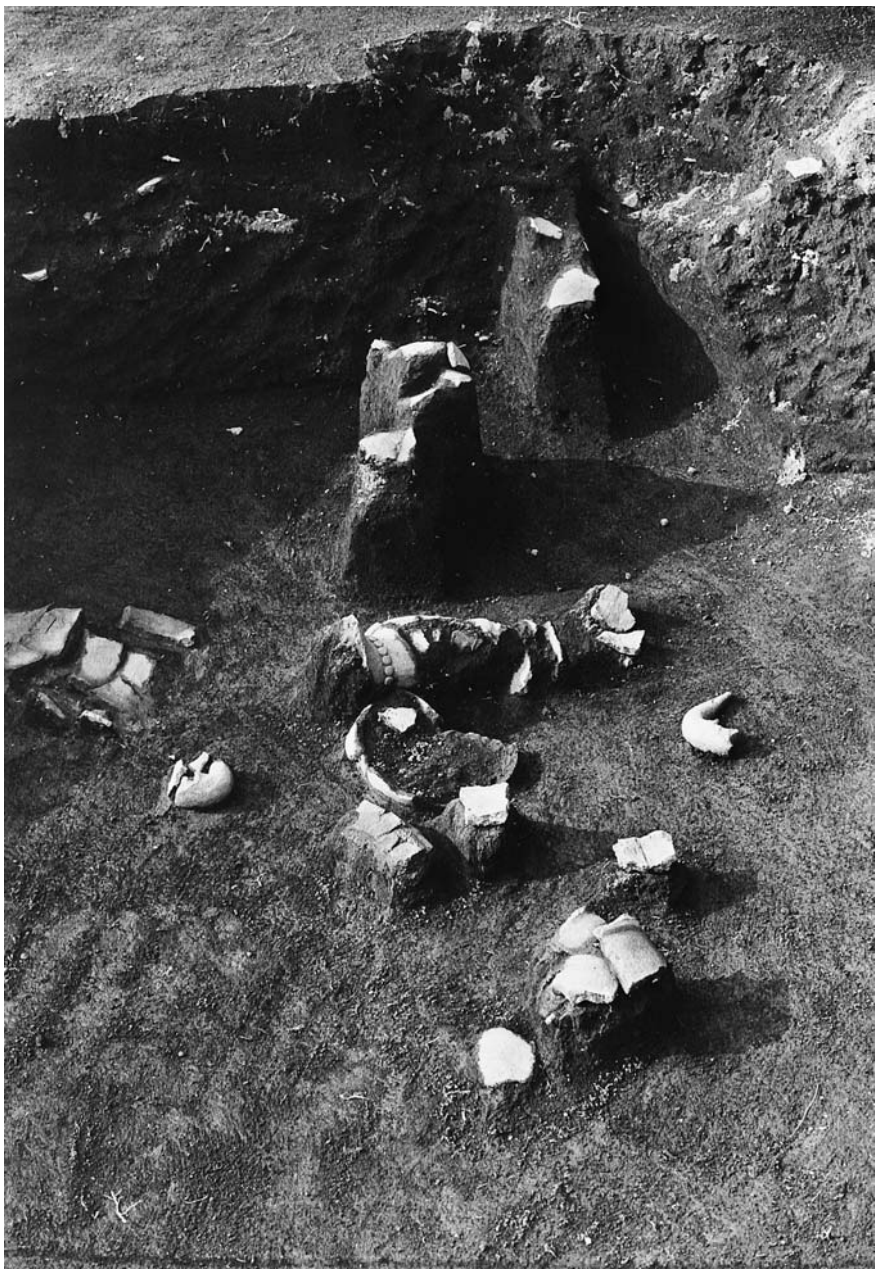
冠帽表現の全身像 5 埋設状況







1号墳括れ部南側
島田髷表現の半身像10出土状況





1 号墳括れ部南側
島田髷表現の半身像 9 出土状況



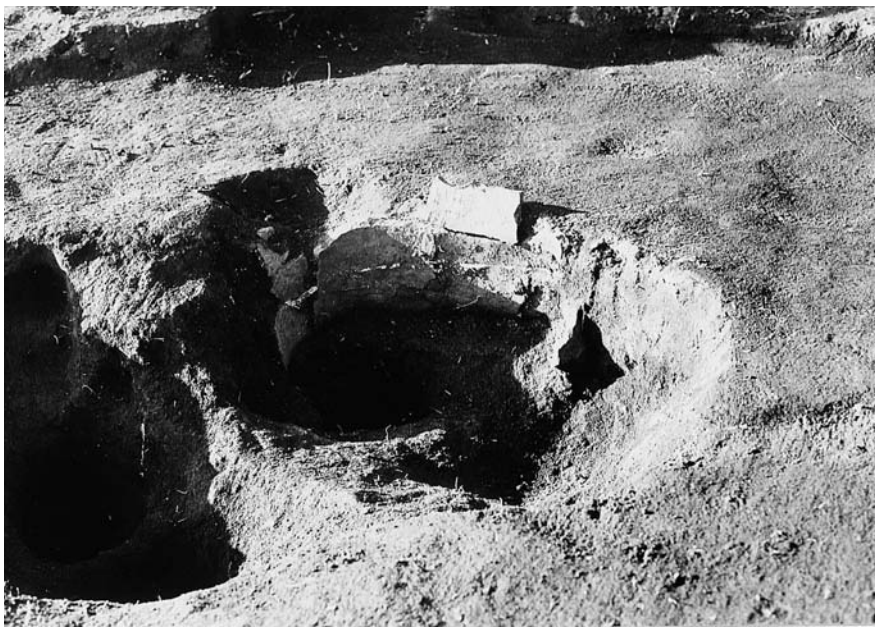
1号墳中段テラス
形象埴輪基台部出土状況



1号墳括れ部南側
冠帽表現の半身像出土状況



1号墳括れ部南側
冠帽表現の半身像出土状況



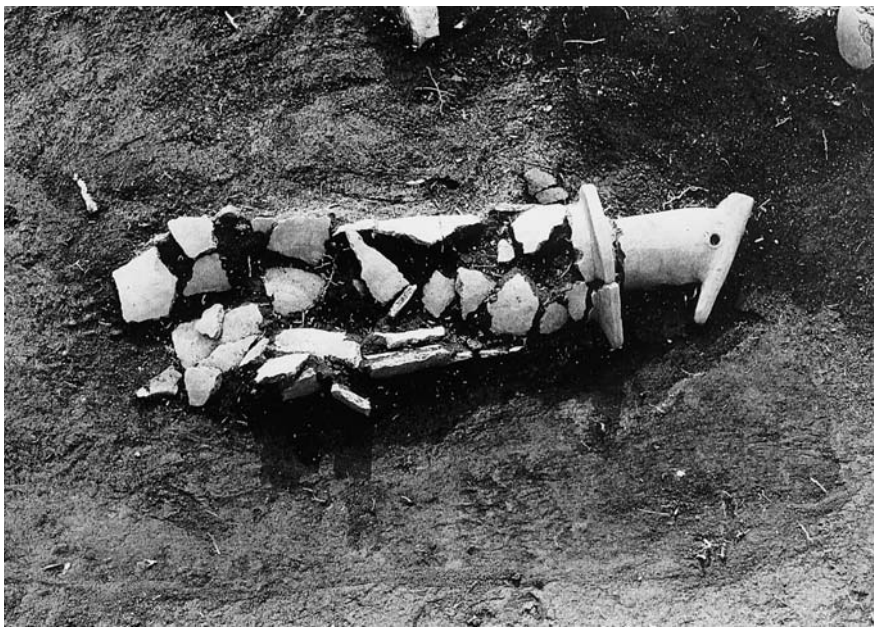
1号墳人物埴輪列
筒袖表現の全身像2基台部埋設状況



1号墳人物埴輪列
振分髪表現の半身像14出土状況



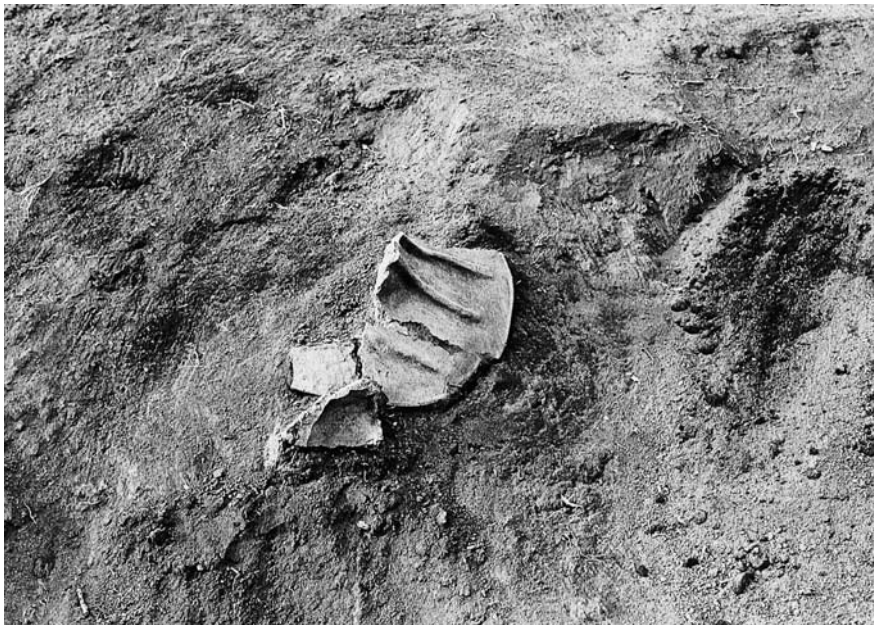
1号墳人物埴輪列
鍬を持つ人物半身像21出土状況



１号墳後円部（09b区）
大刀形埴輪153出土状況



１号墳括れ部南側（07区）
翳形埴輪190出土状況



１号墳括れ部南側（07区）
翳形埴輪190出土状況



1号墳後円部
石室検出状況



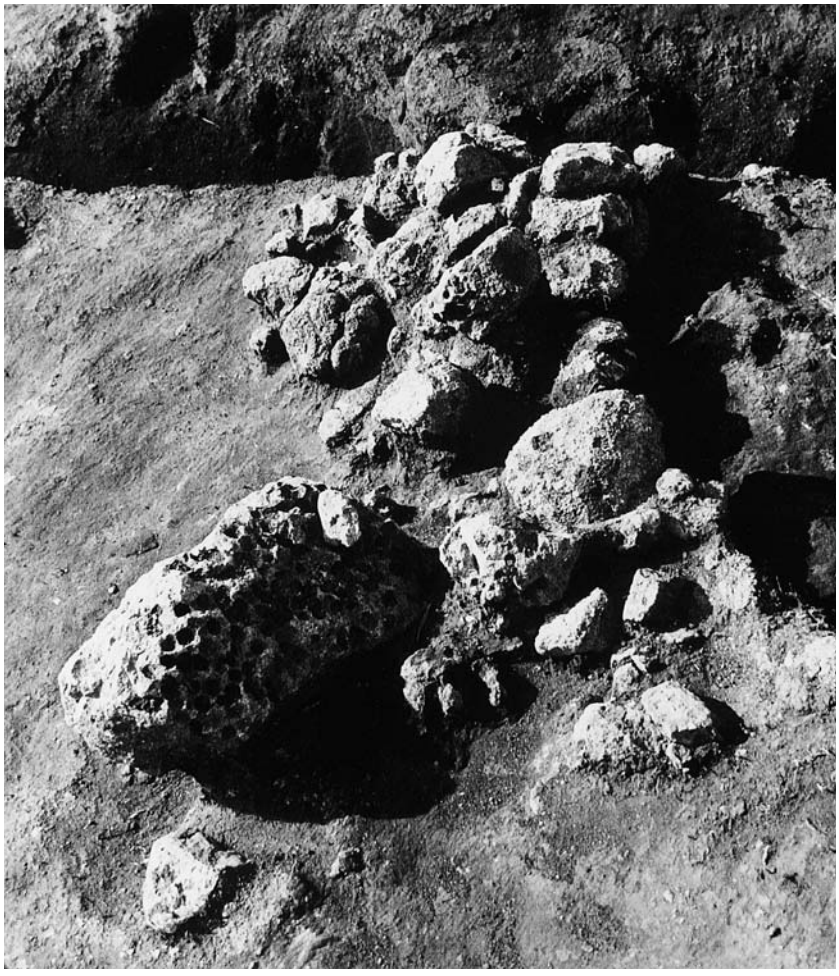
石室完掘状況



石室構築土除去後

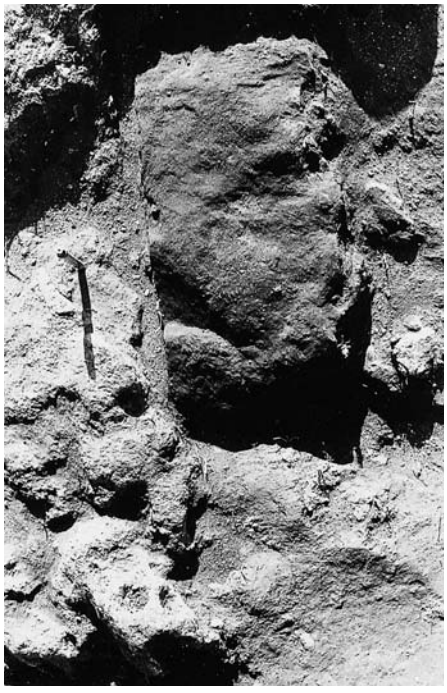


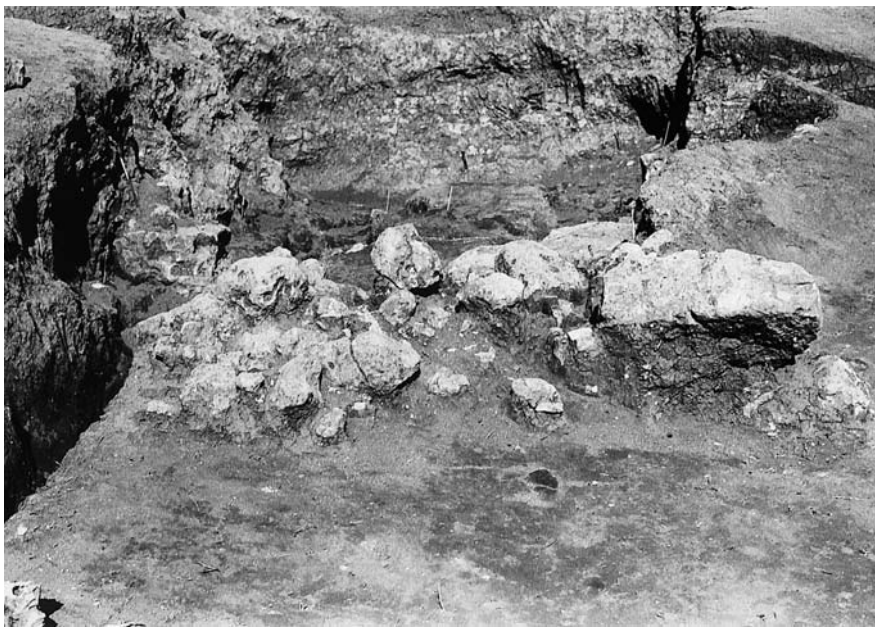
1号墳石室（南から）



石室石材出土状況

羨道部石組





1号墳
石室石材

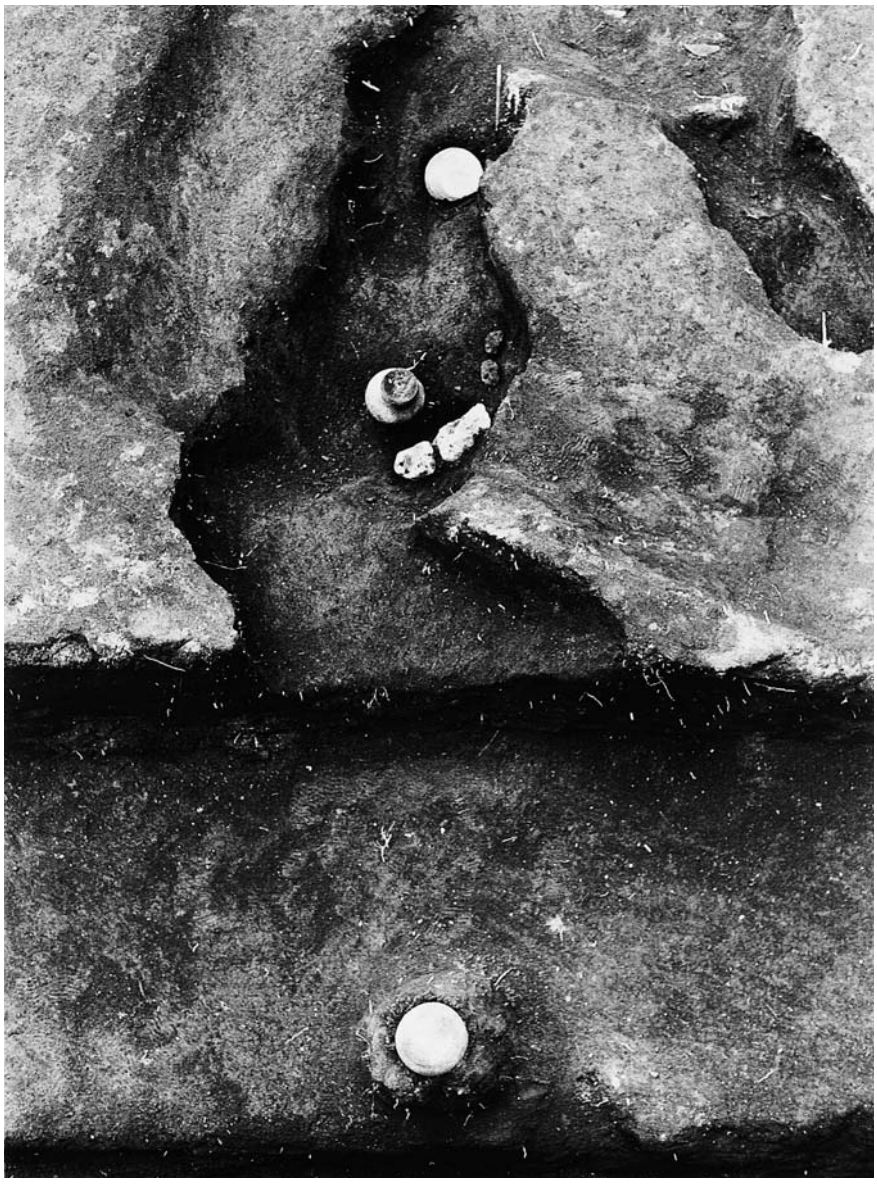


1号墳
石室石材

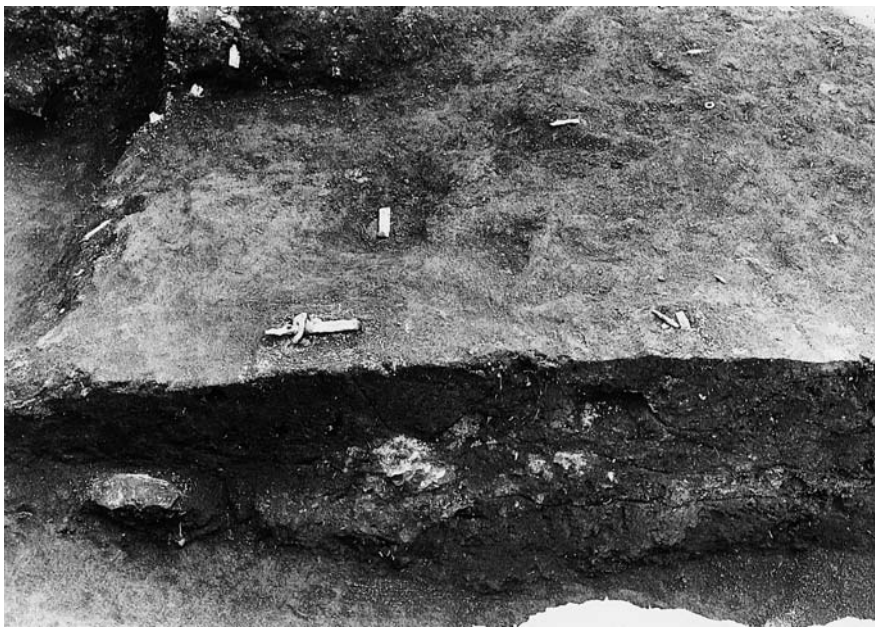


石室南東コーナー
石組状況





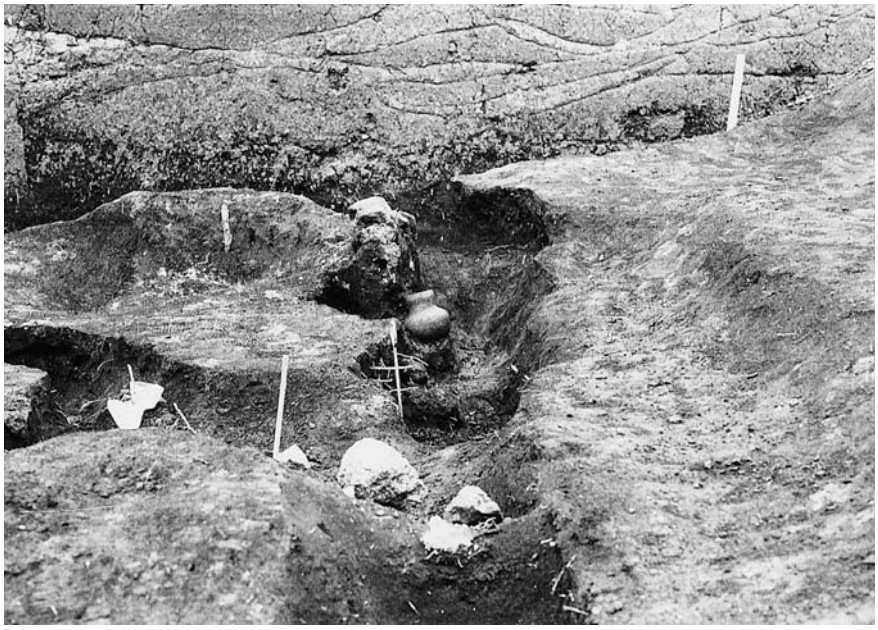
１号墳石室下部
遺物出土状況



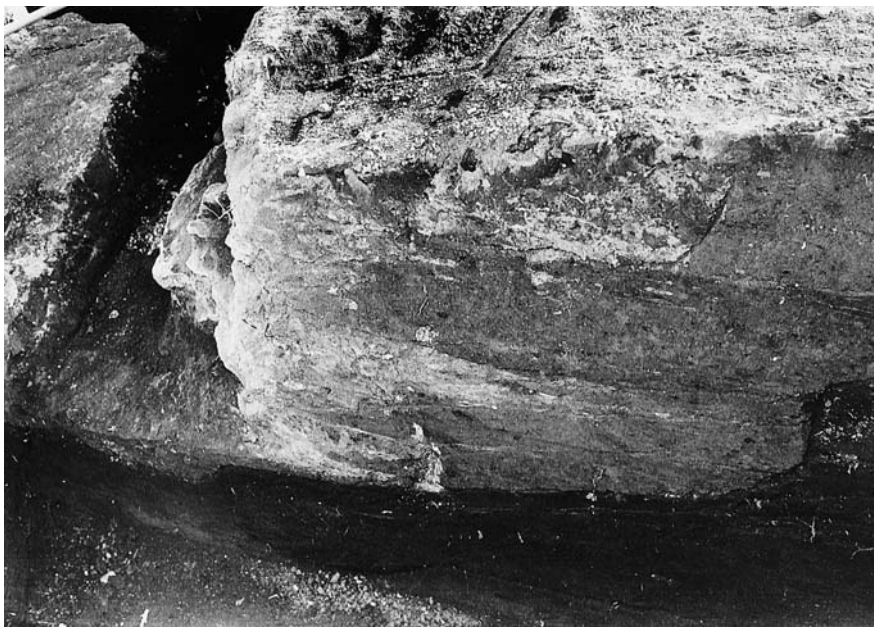
1号墳石室内
遺物出土状況



1号墳石室内
遺物出土状況



石室床面下
調査状況



１号墳
石室裏込土断面



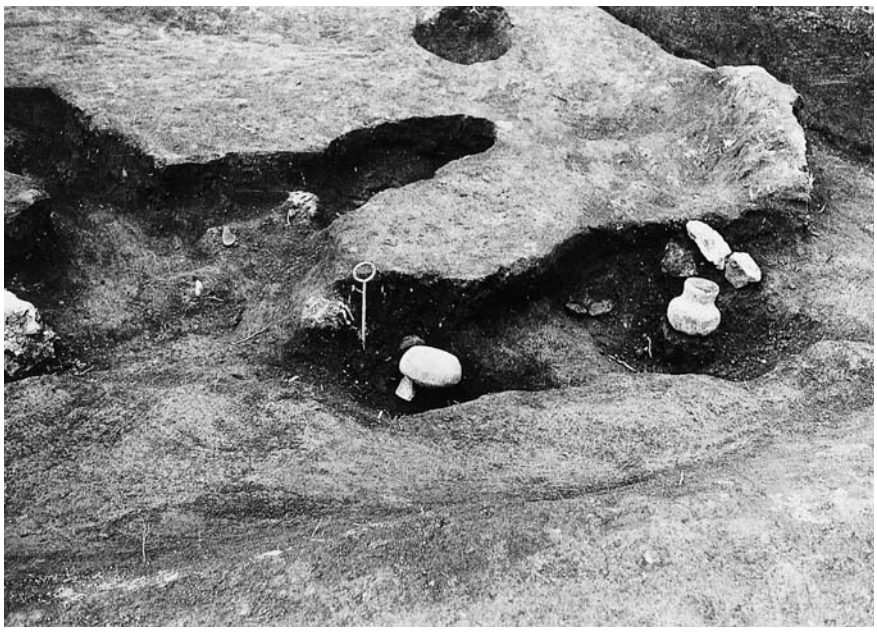
石室内
遺物出土状況



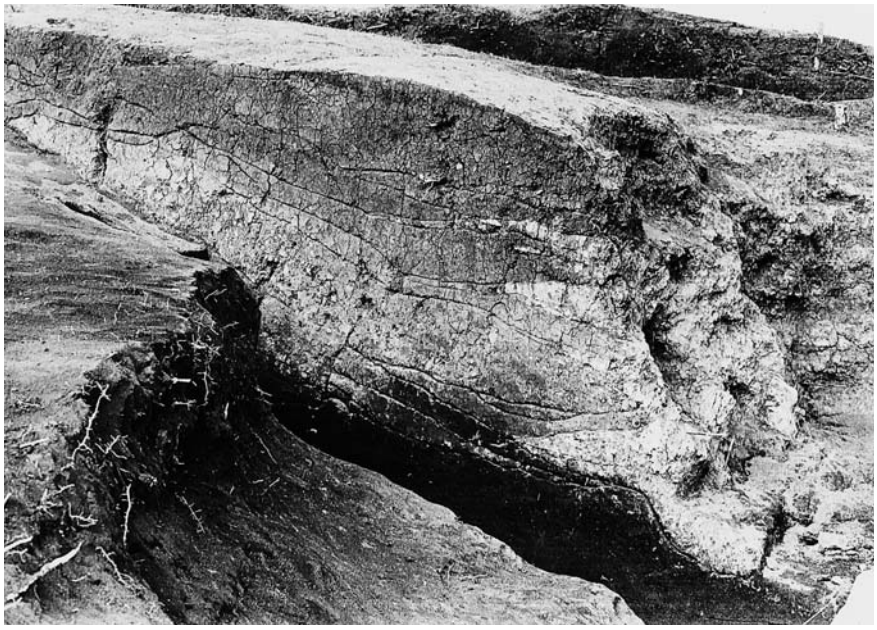
1 号墳後円部盛土（南から）



1 号墳後円部盛土（西から）



１号墳石室下部
遺物出土状況



１号墳後円部墳丘
盛土断面（SP J-J'中）



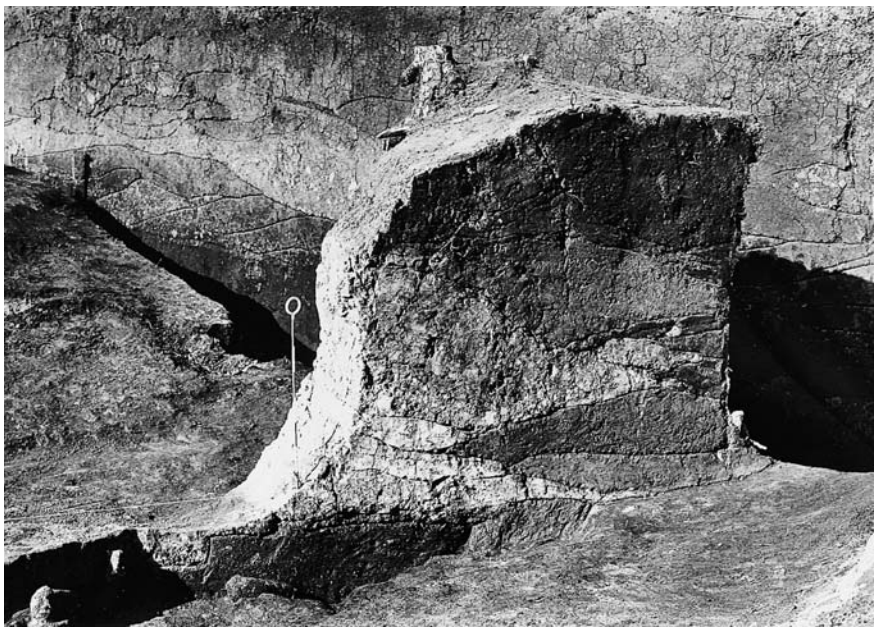
１号墳後円部墳丘
盛土断面（SP J-J'中）



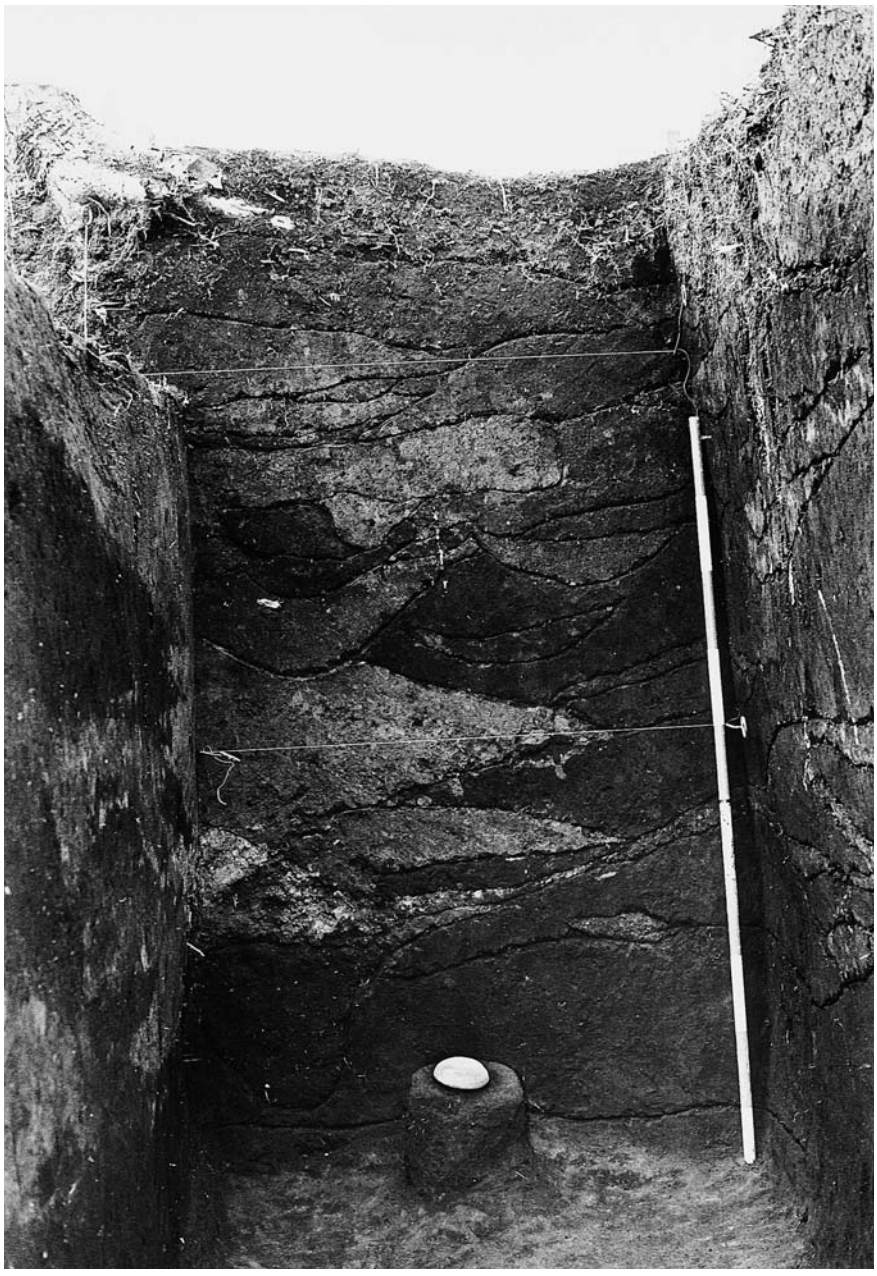
1号墳後円部
墳丘東西断面



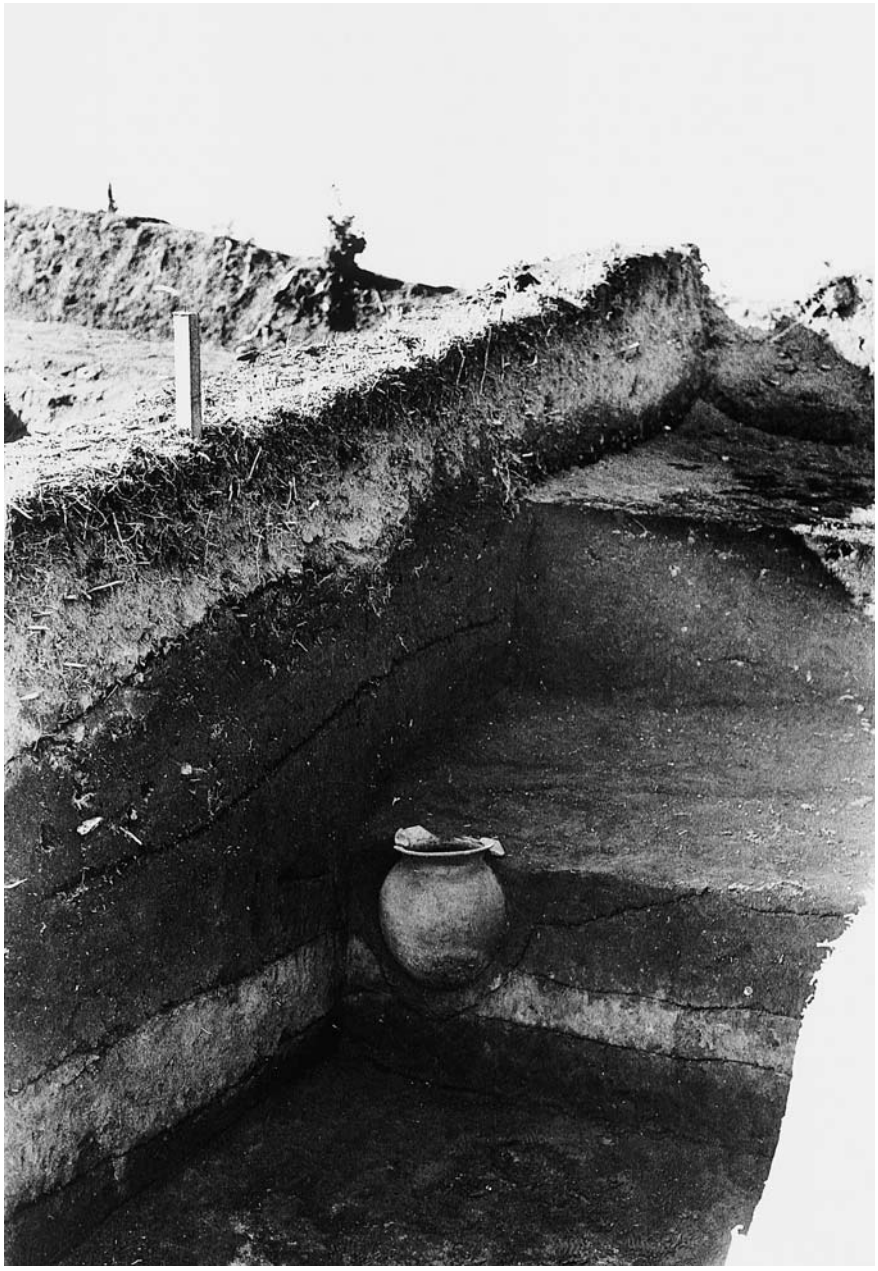
1号墳後円部
石室横断トレンチ（SPJ-J'）
と直交する西側奥壁



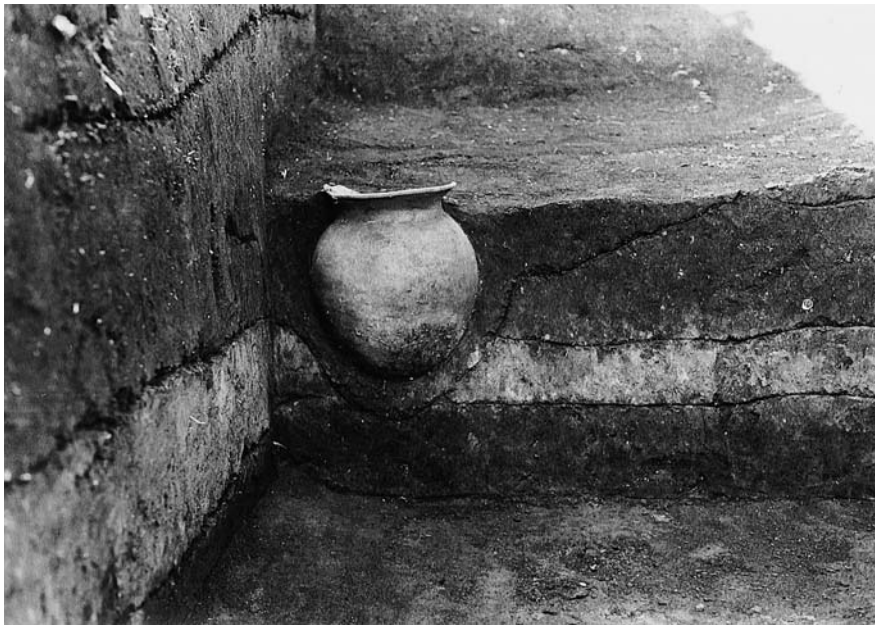
1 号墳後円部
土層断面（SP I-I'）



1 号墳後円部中心盛土下層
土器 4 出土状況（奥壁：SP D-D'）



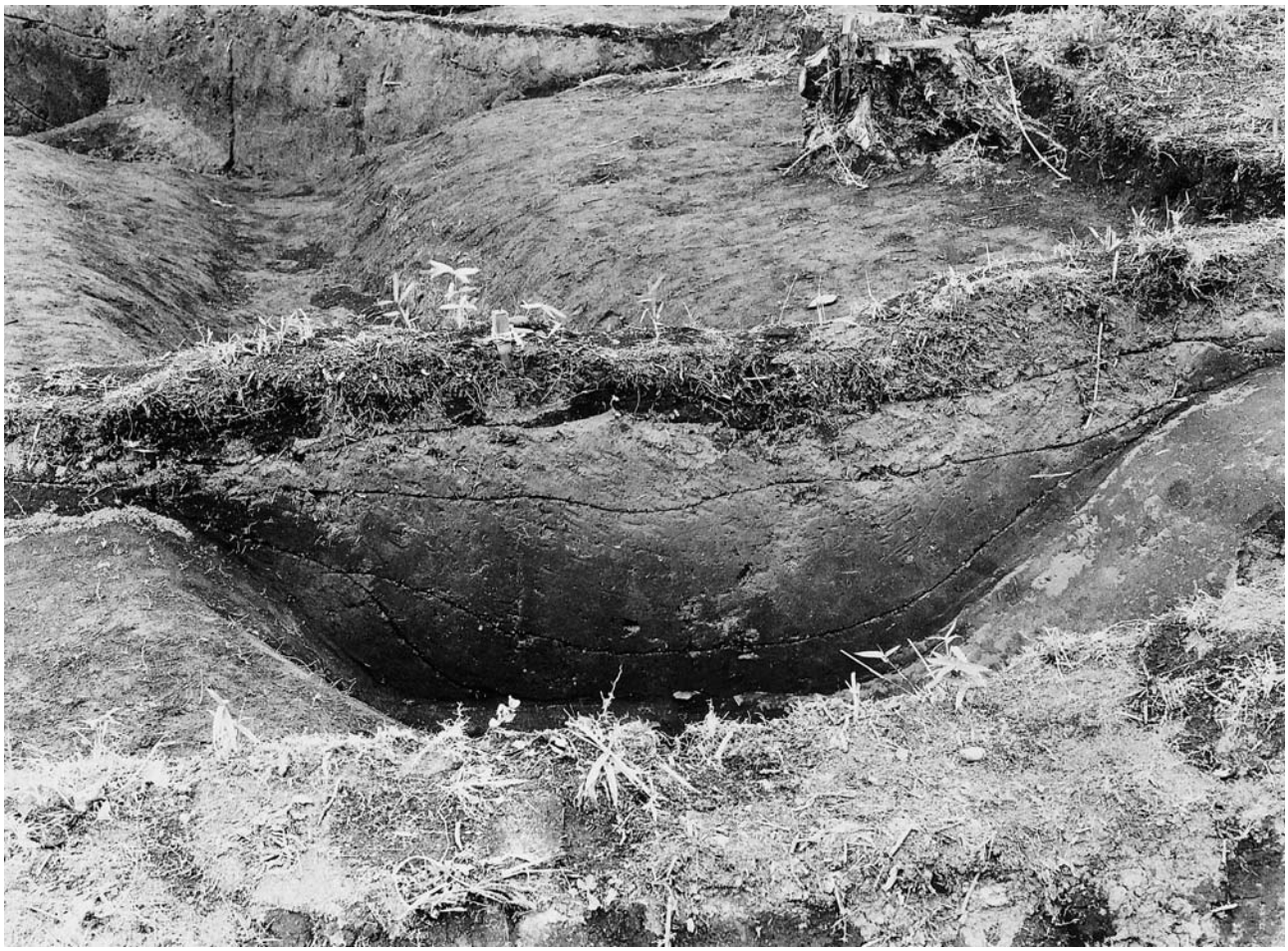
１号墳盛土内
土器14出土状況（左壁：SP C-C'）



ローム層（整地土）を切り込む



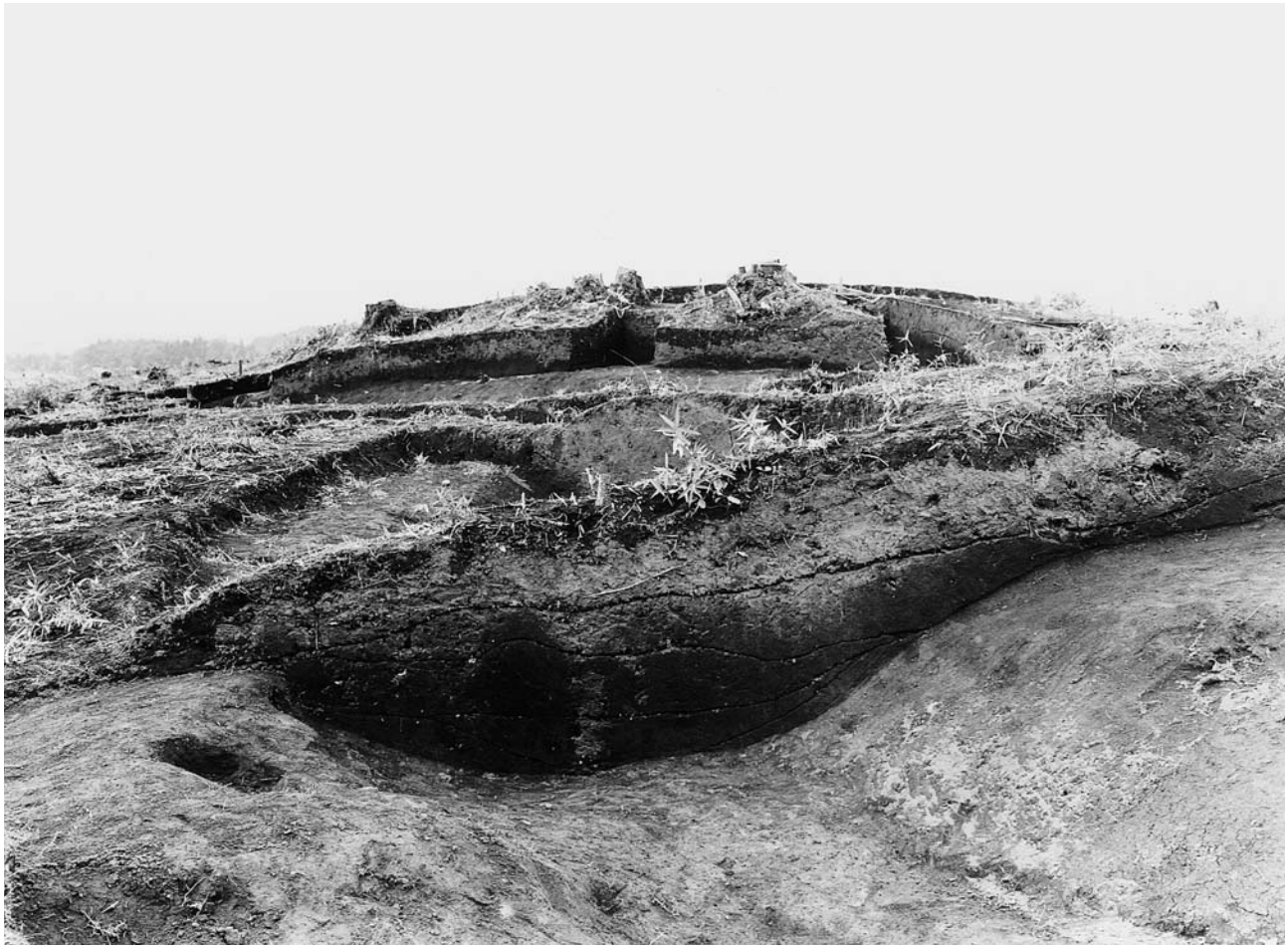
2 号墳調査状況



2 号墳周溝覆土断面（SP A-A'）



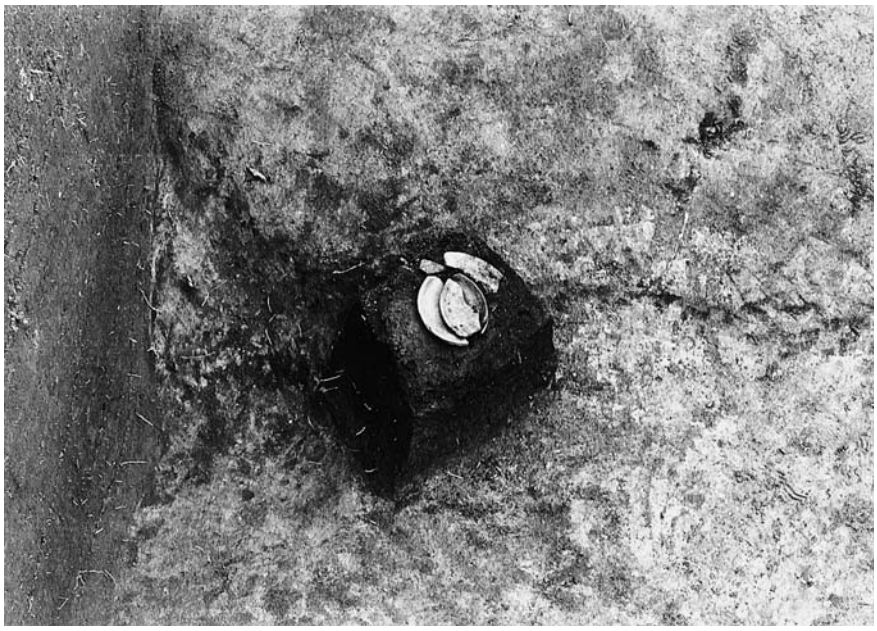
2 号墳周溝覆土断面（SP B-B'）



2 号墳周溝覆土断面（SP C-C'）



2 号墳
南東周溝断面（SP D-D'）



2 号墳
土器 1 ・ 2 出土状況



3 号墳
周溝覆土断面（SP A-A'中）



3 号墳周溝南北断面（東から）



3 号墳周溝覆土（SP A-A'中）



3 号墳
周溝覆土断面（SP B-B'）



3 号墳
周溝覆土断面（SP C-C'）



3 号墳
周溝覆土断面（手前SP D-D'）



4 号墳
トレンチ設定



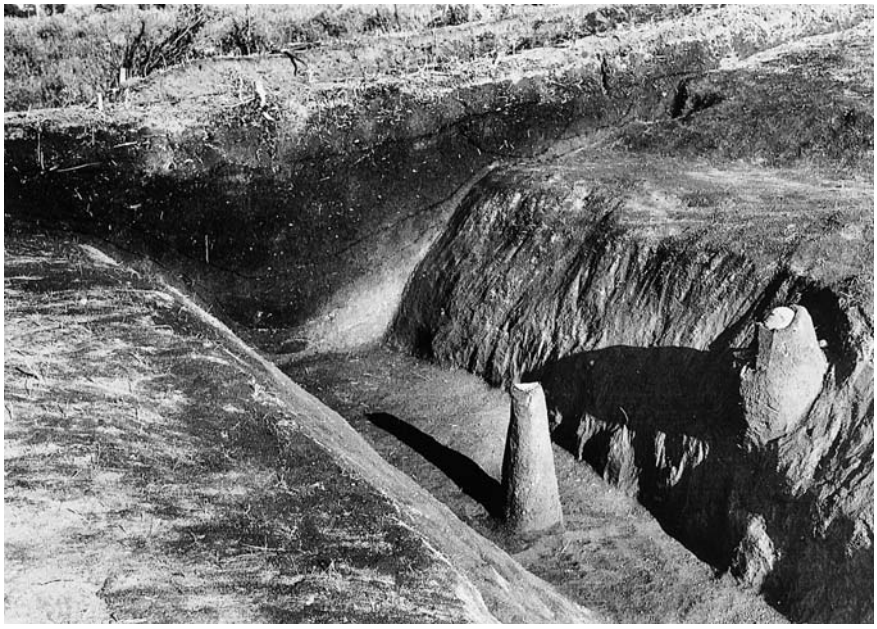
4 号墳
周溝覆土断面（SP B-B'）



4 号墳南西ベルト
土器10出土状況



5 号墳
トレンチ設定



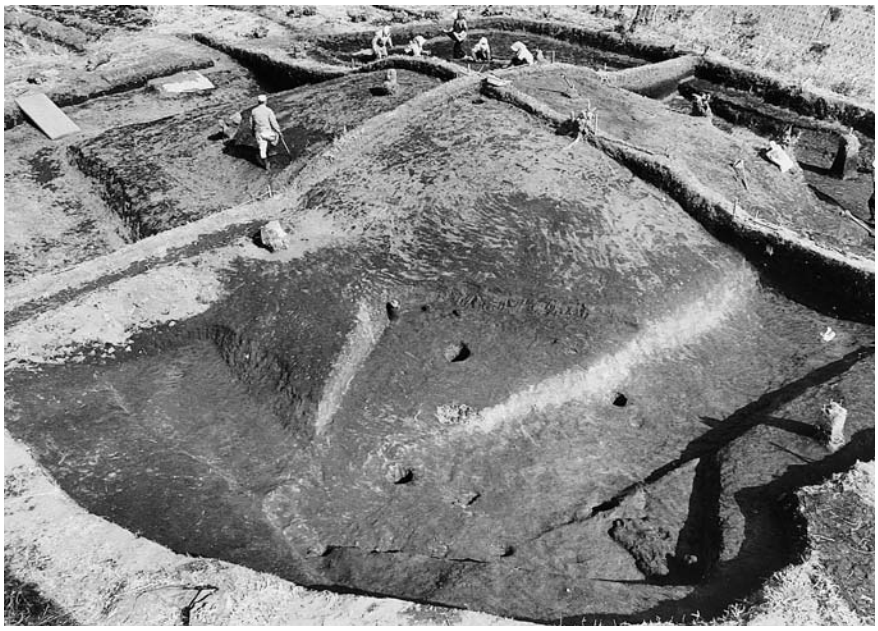
5 号墳東側
遺物出土状況



5 号墳
周溝覆土断面（SP A-A'東側）



6 号墳
調査前の状況



6 号墳
調査風景



6 号墳
西から



6 号墳南東コーナー



6 号墳
周溝覆土断面（SP A-A'西側）



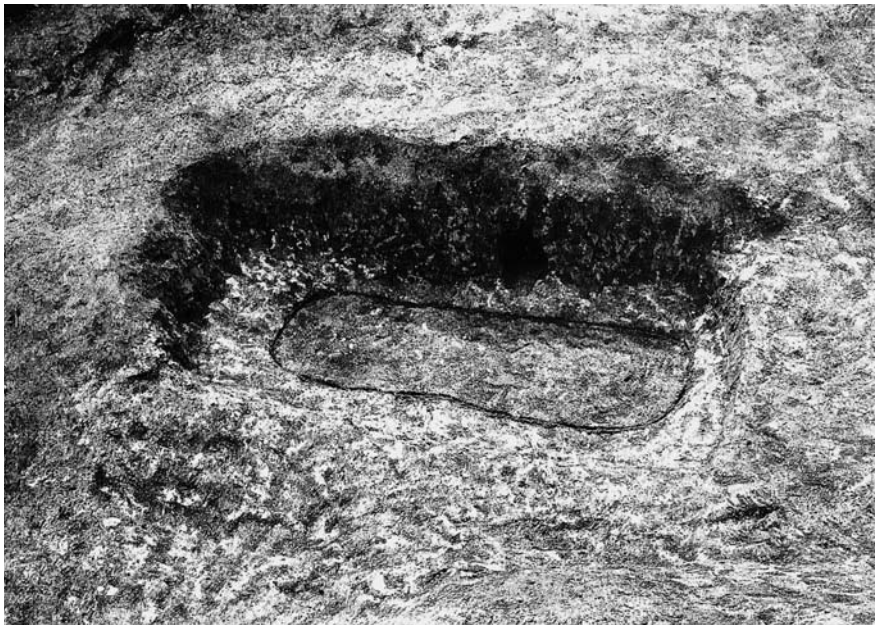
6 号墳
周溝内遺物出土状況



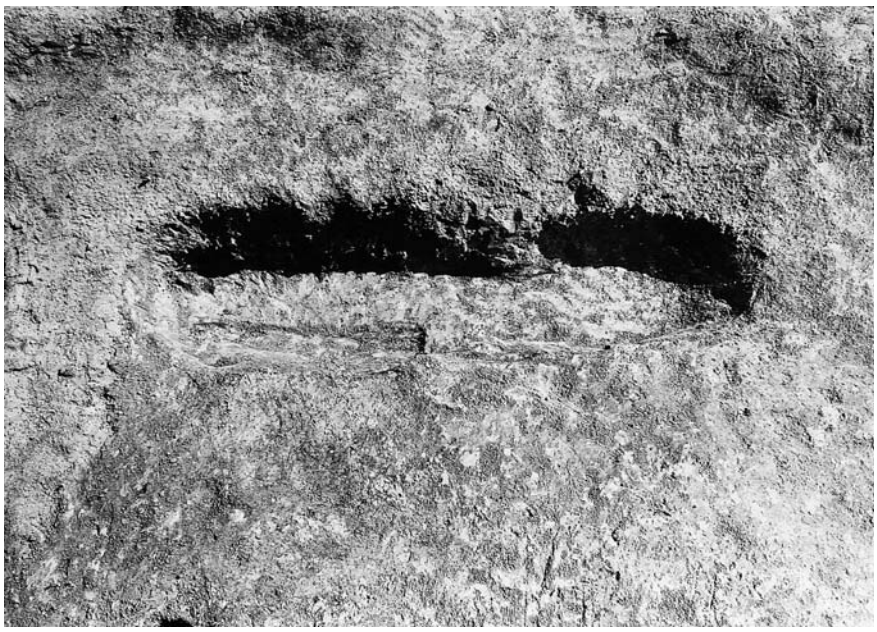
6 号墳
南側周溝断面（西から）



6 号墳南東コーナー
周溝内埋葬施設検出状況



6 号墳南東コーナー
埋葬施設Ｂ検出状況



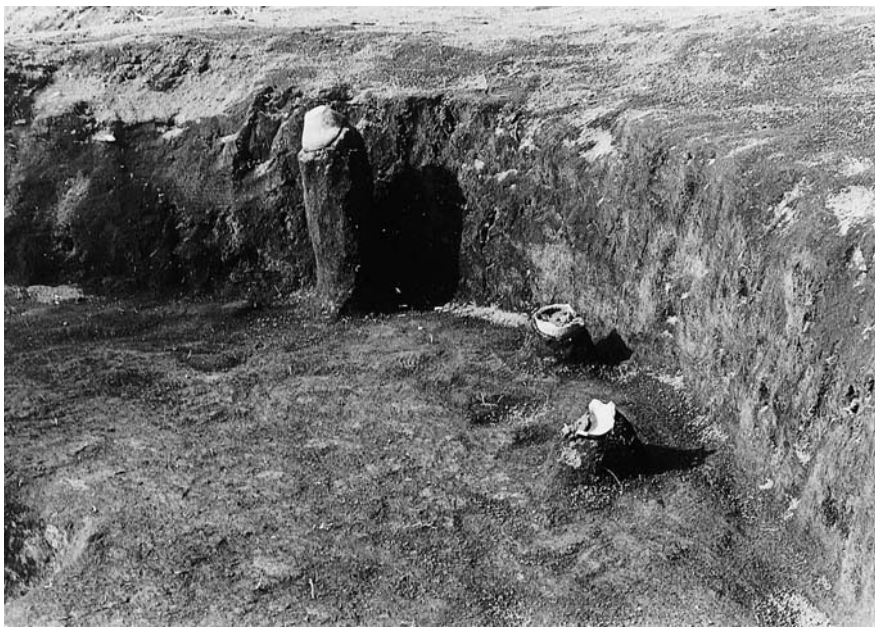
6 号墳東側周溝内
埋葬施設Ｃ完掘状況



6 号墳南側周溝内
1 号住居跡



6 号墳南側周溝内
1 号住居跡



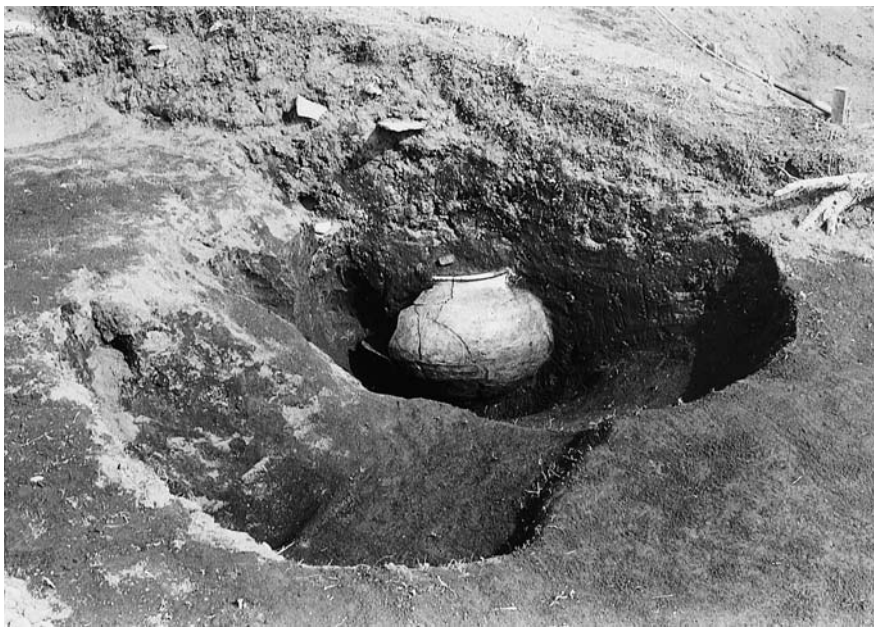
1 号住居跡北隅
遺物出土状況



1 号住居跡南隅
遺物出土状況



6 号墳北側周溝内
2 号住居跡



1号墳前方部上
1号土壙墓常滑甕出土状況



1号土壙墓
甕内人骨検出状況



1号土壙墓
銭貨が含まれている



人物埴輪半身像および形象埴輪形象部



人物埴輪全身像



1

筒袖表現の人物埴輪全身像





2

筒袖表現の人物埴輪全身像





3

振分髪表現の人物埴輪全身像





4

冠帽表現の人物埴輪全身像





5

冠帽表現の人物埴輪全身像





6



7

冠帽表現の人物埴輪半身像



8



9

島田髷表現の人物埴輪半身像



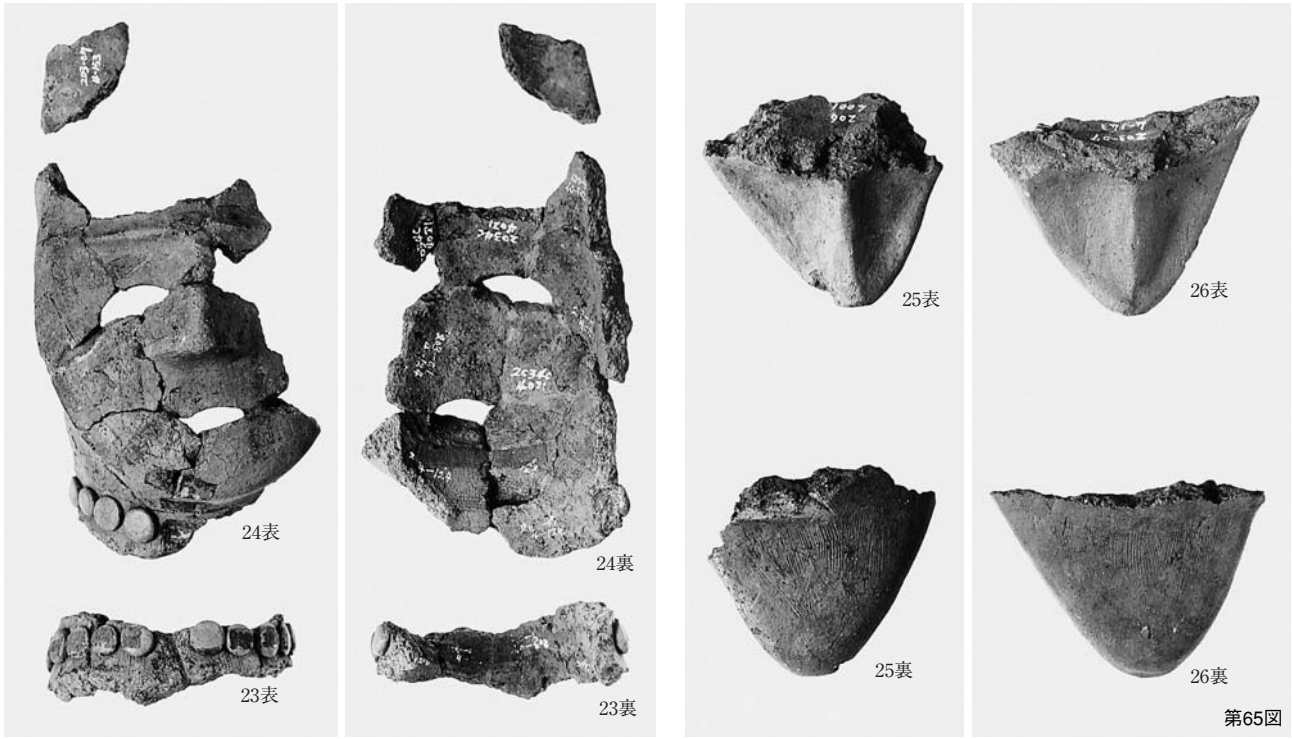
10

島田髷表現の人物埴輪半身像

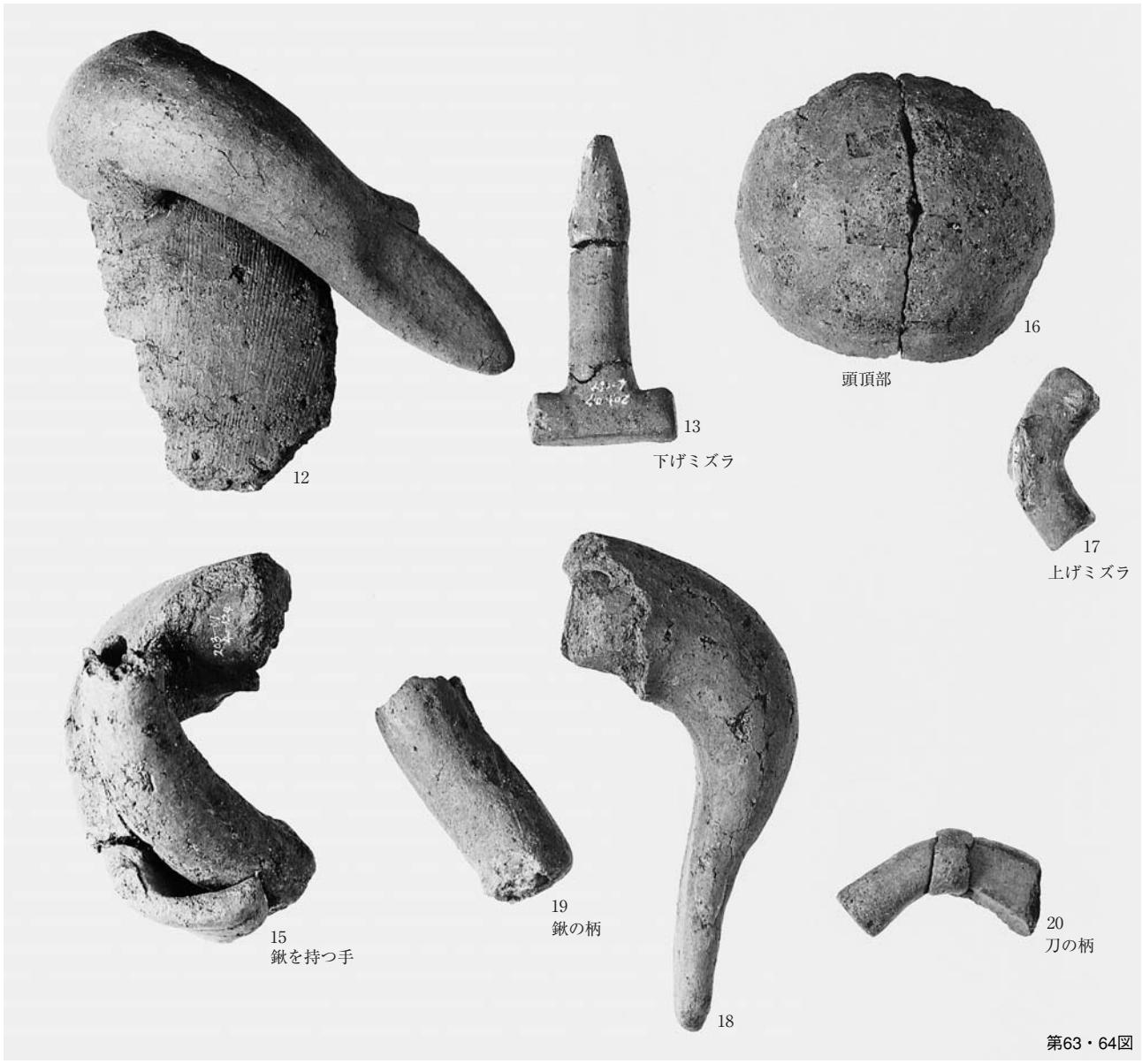


11

壺を戴く人物埴輪半身像



筒袖全身像２の一部（顔・首・沓）



人物埴輪片



第63図

振分髪表現の人物埴輪半身像



第64図

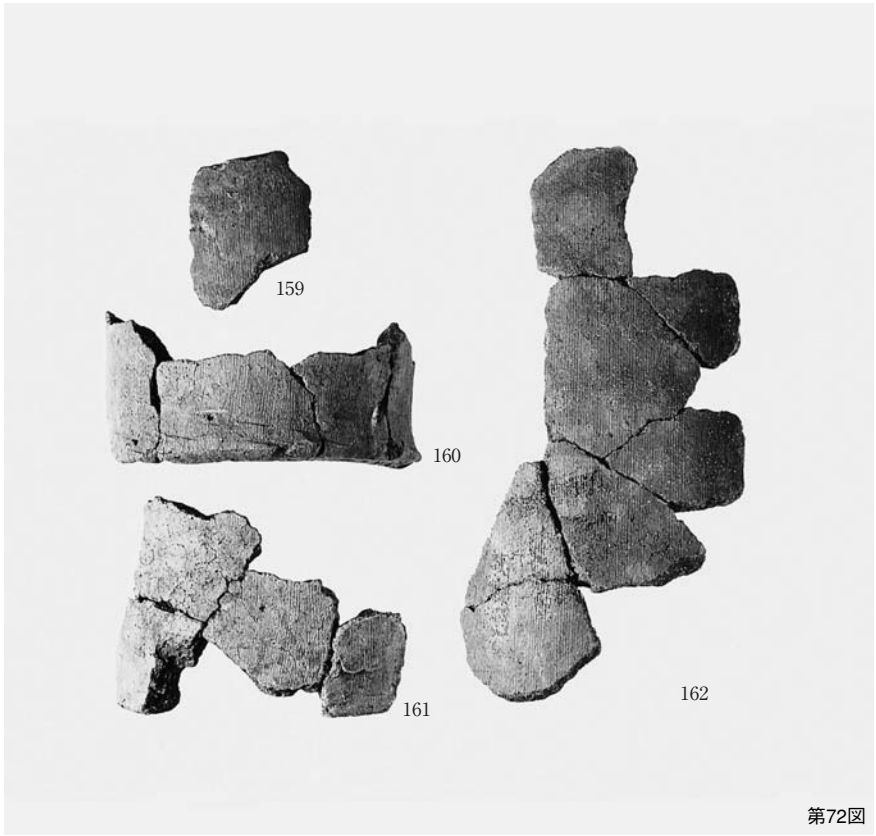
鍬を持つ人物埴輪半身像



第64図

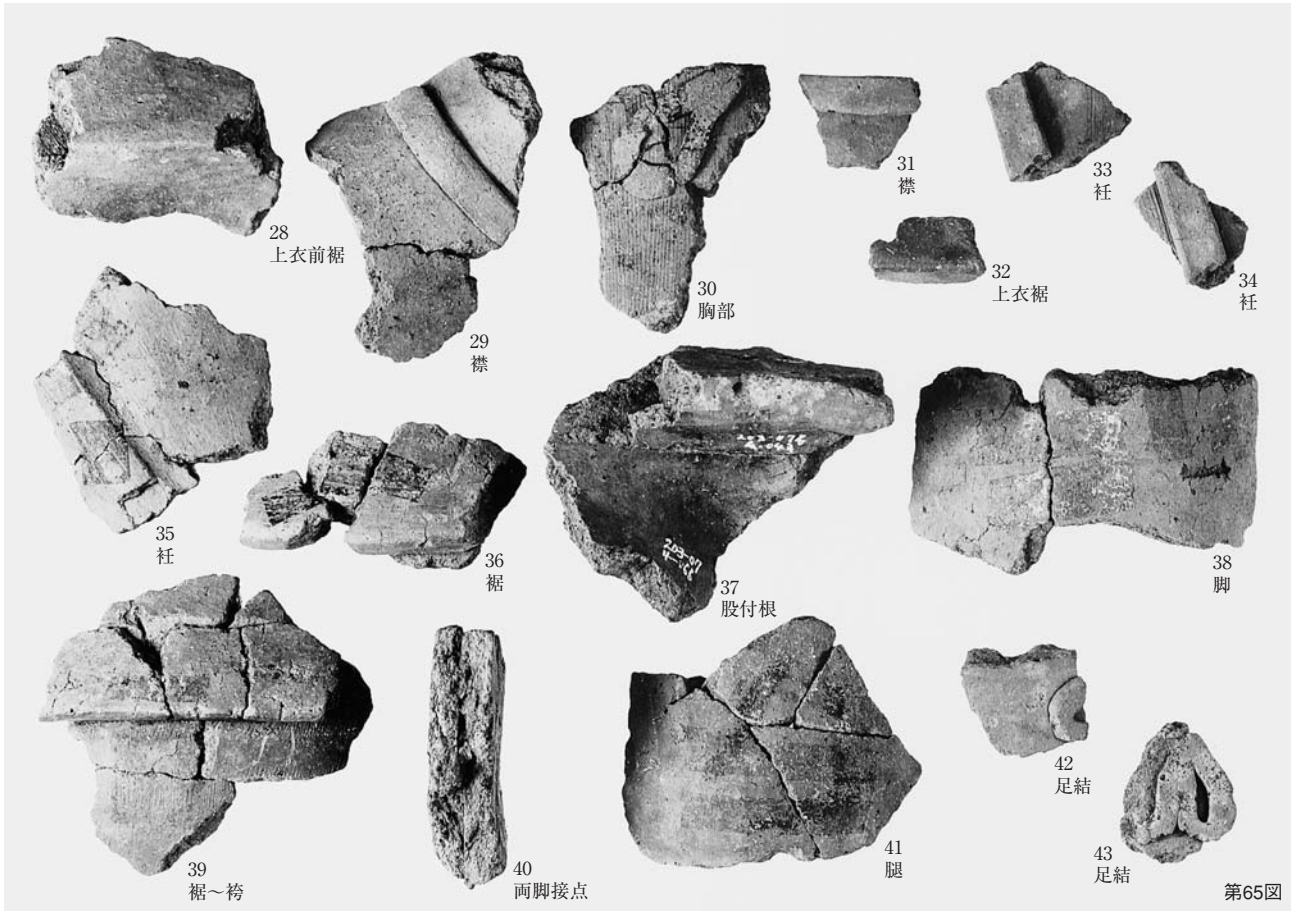


第72図

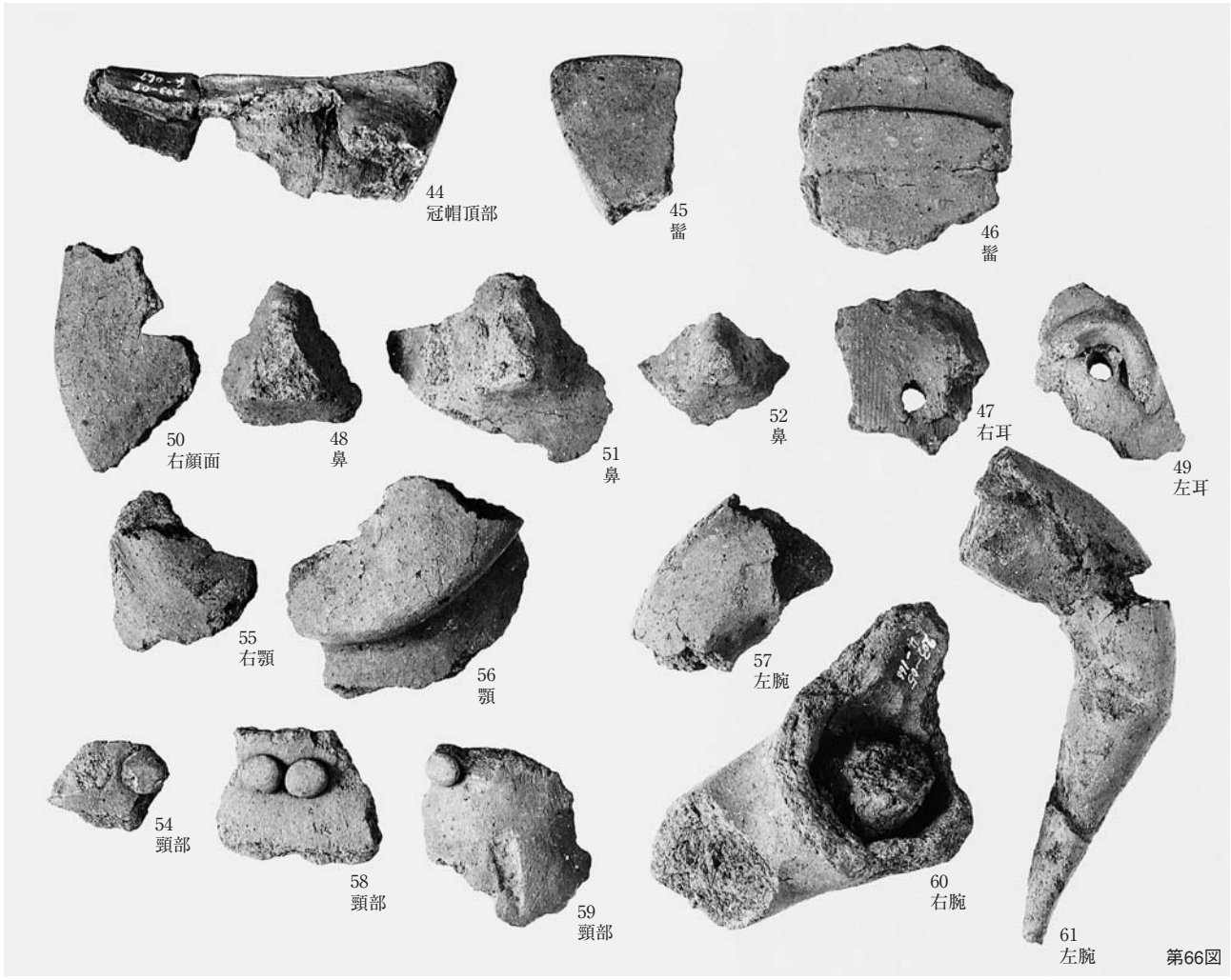


第72図

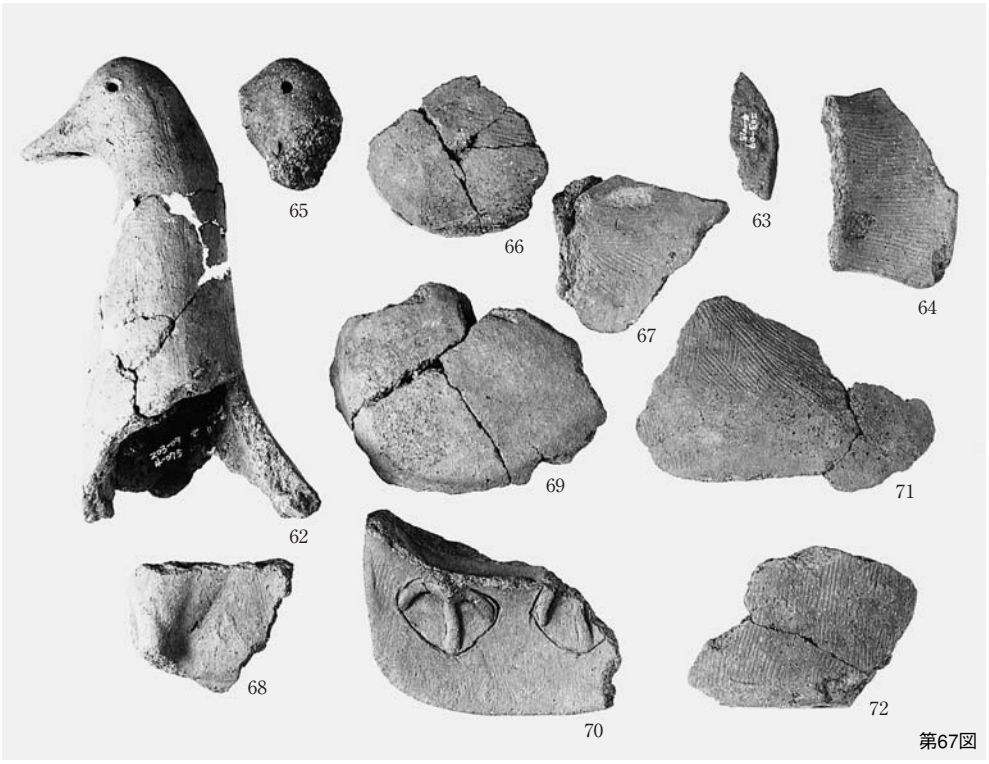
人物・形象埴輪基台部



人物埴輪全身像片



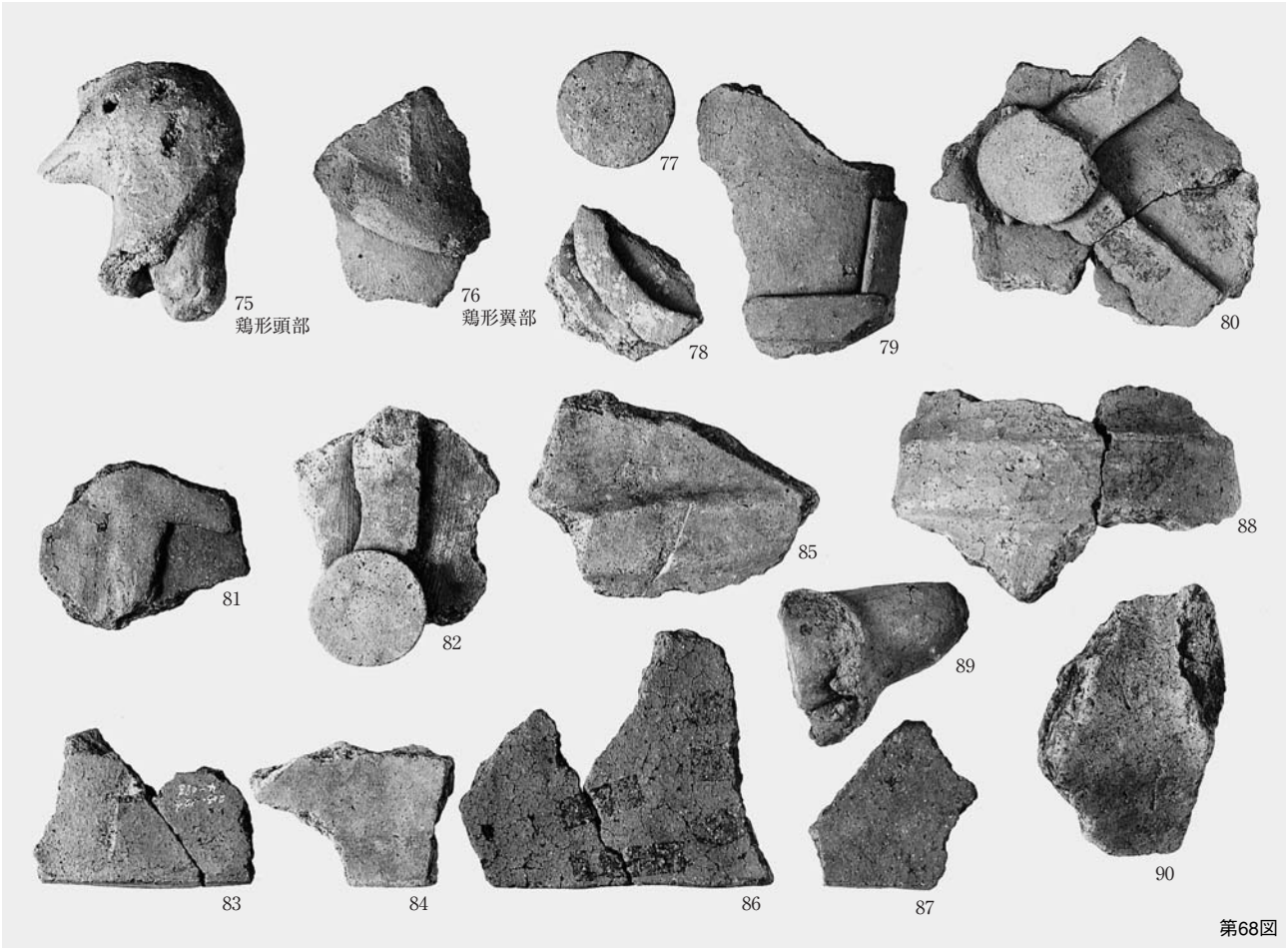
人物埴輪片



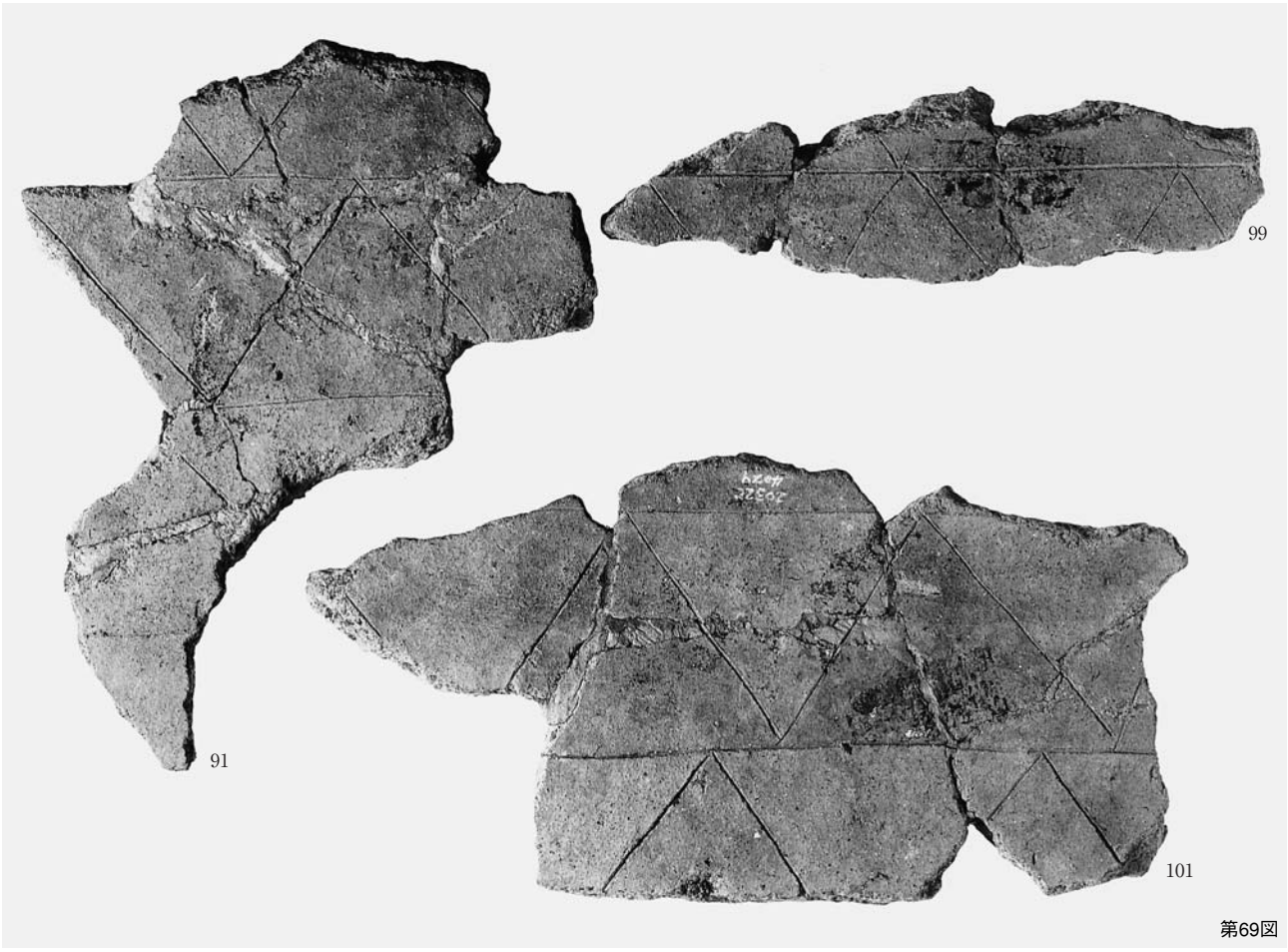




水鳥形埴輪片

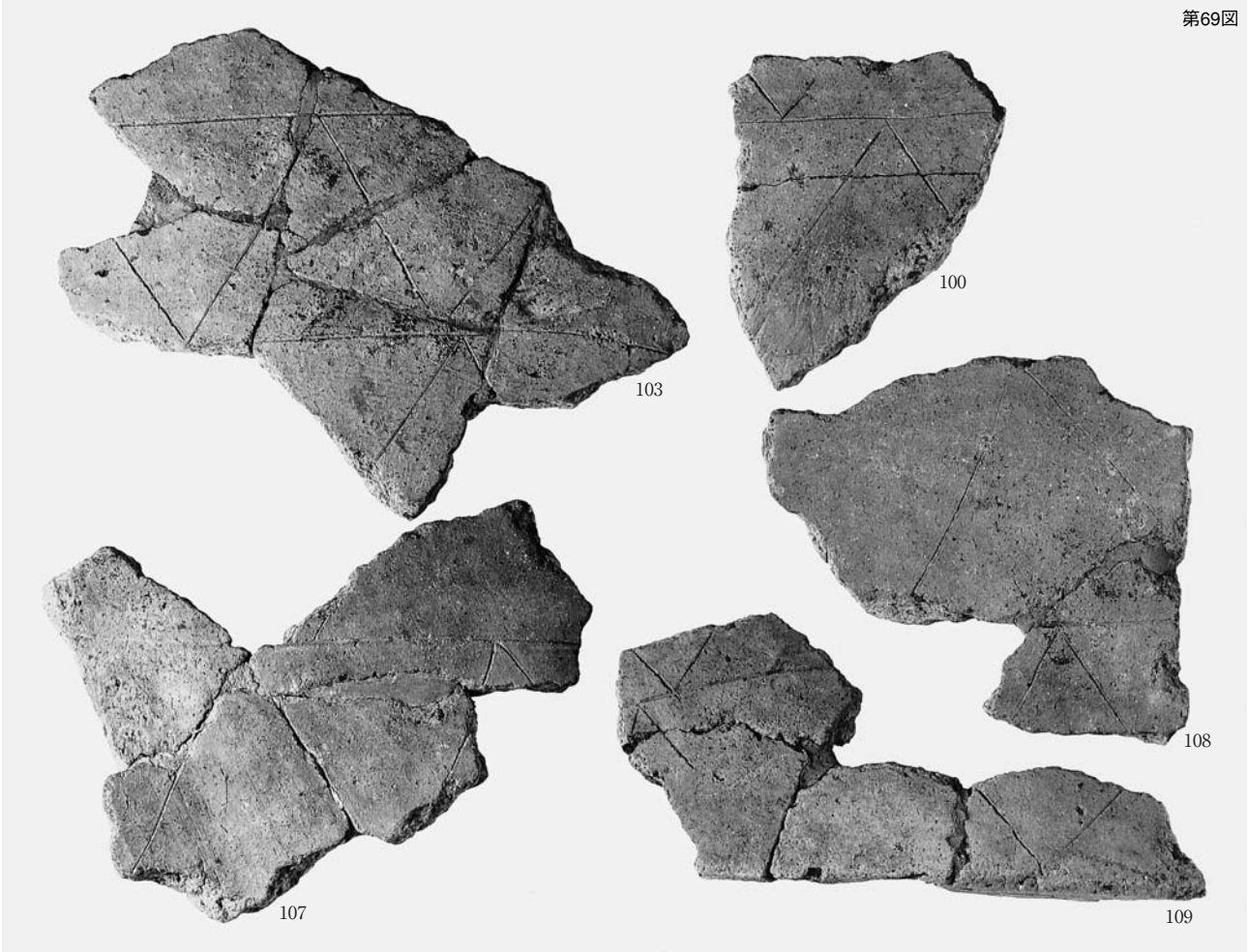


鶏形埴輪・馬形埴輪片

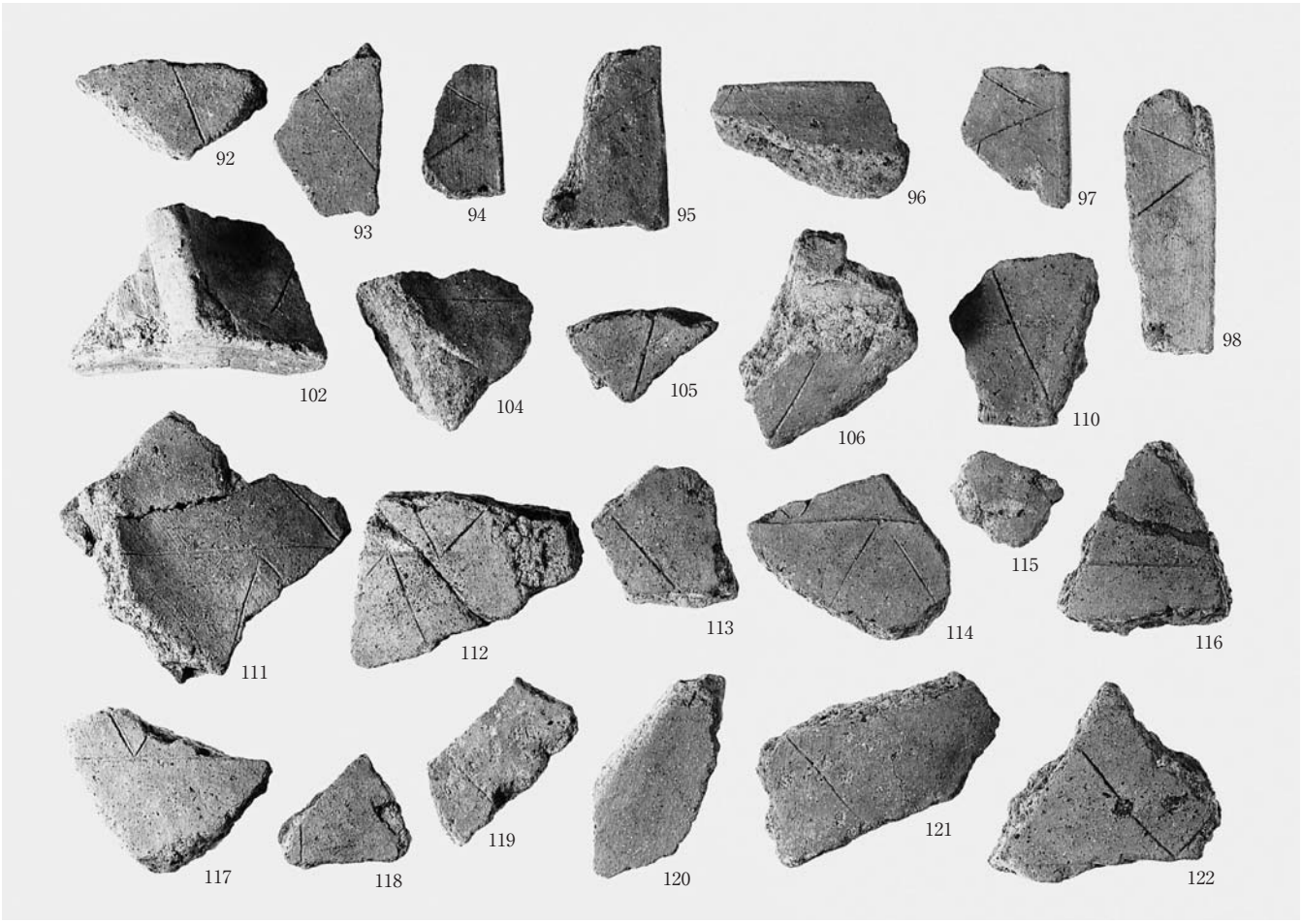


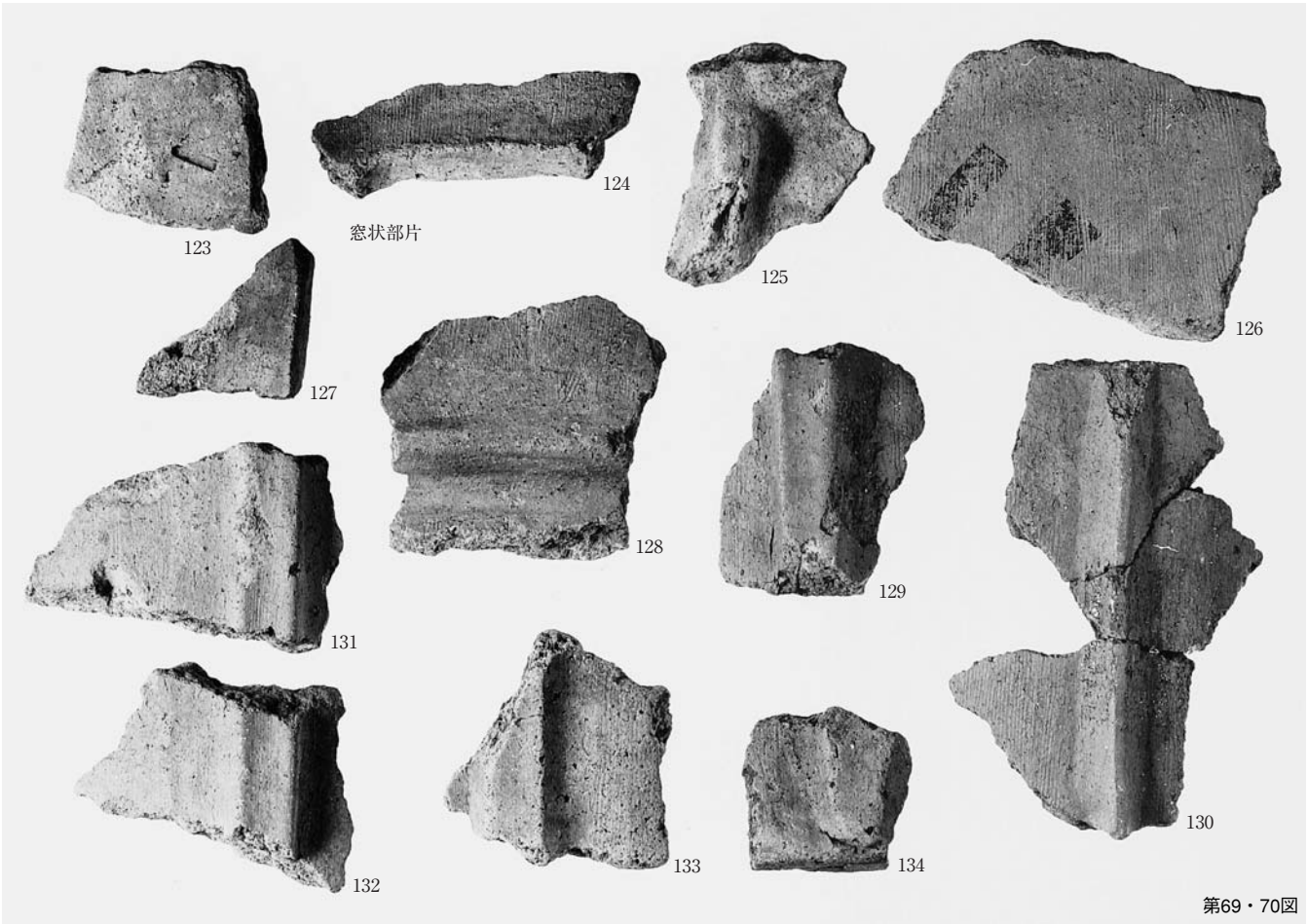
第69図

第69図



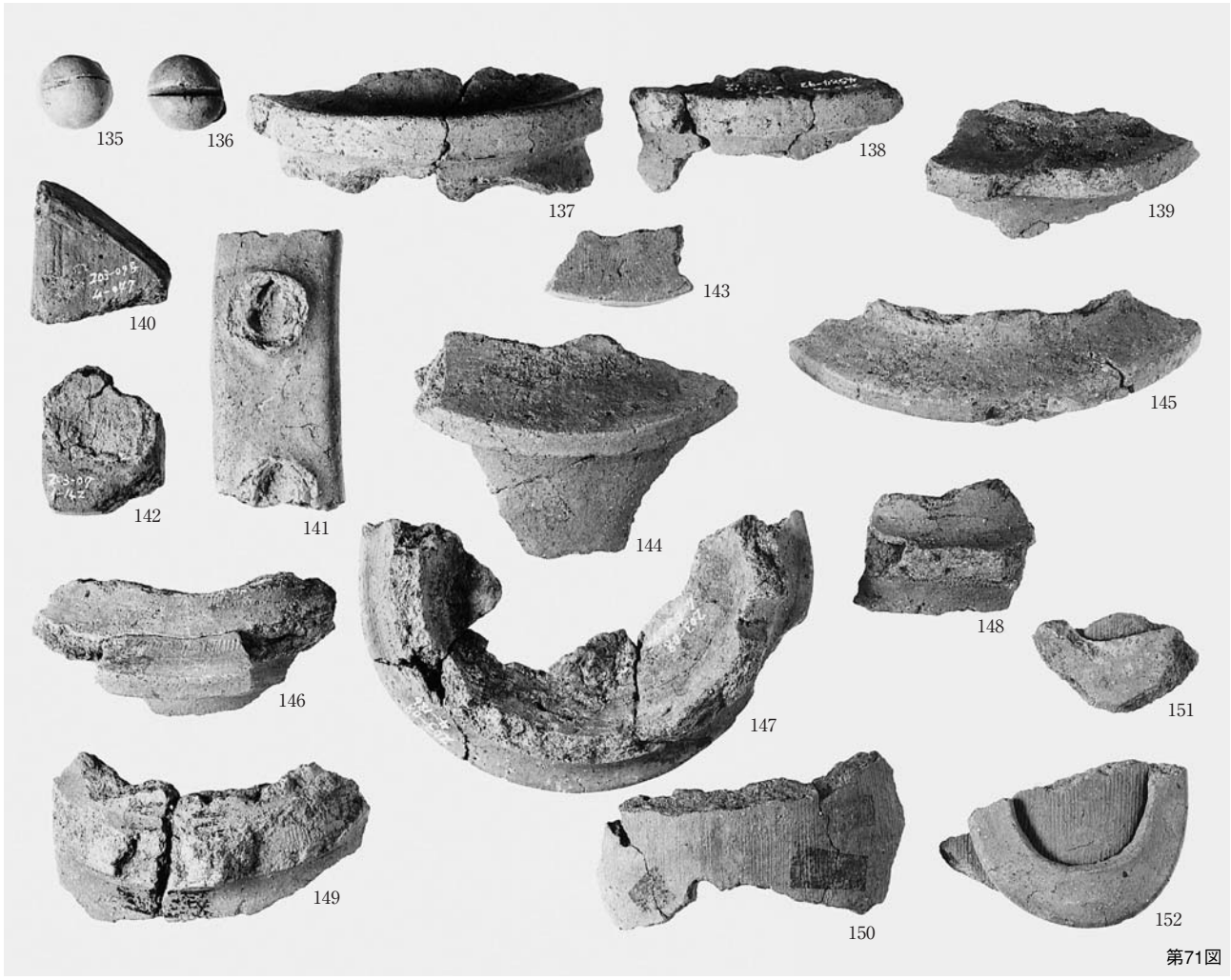
家形埴輪片





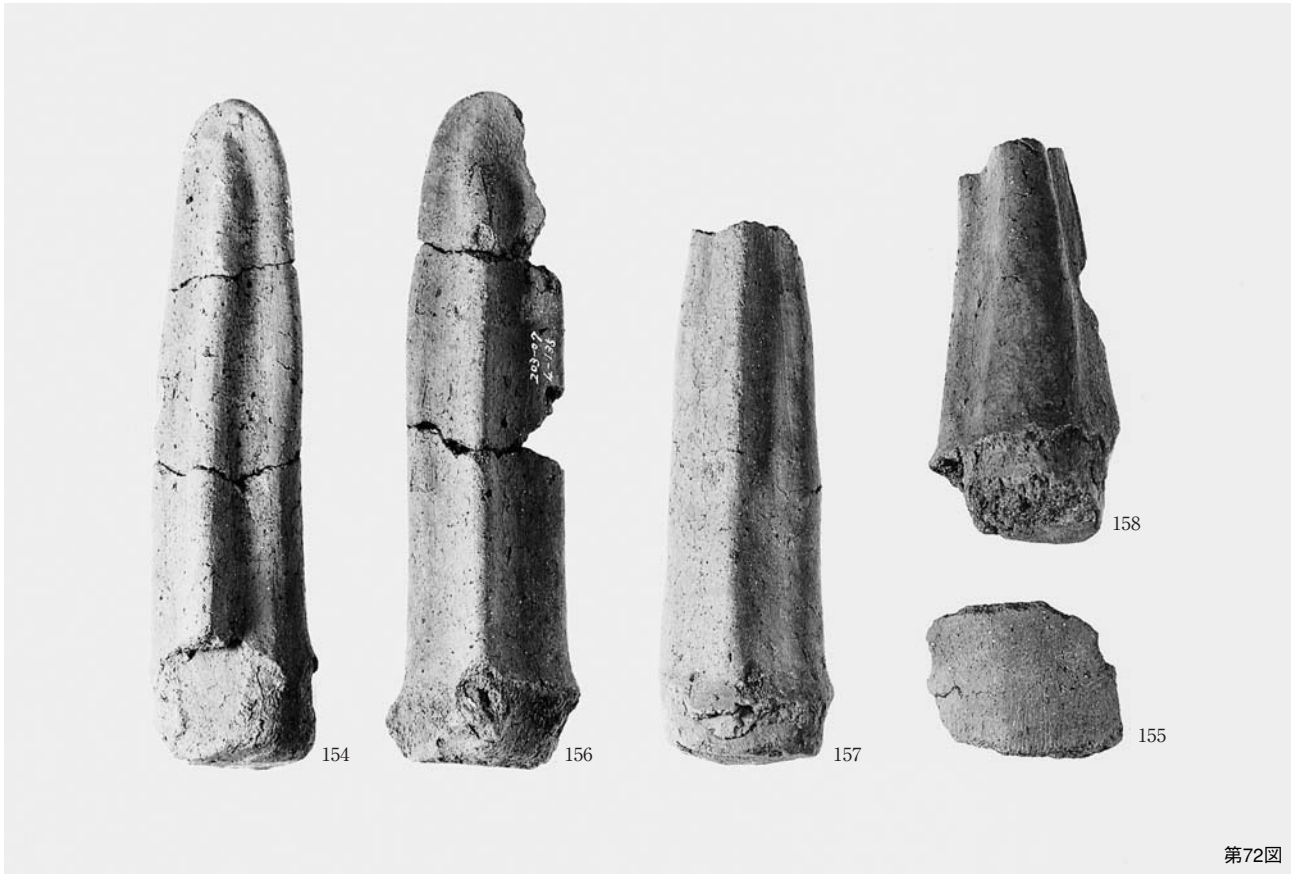
第69・70図

家形埴輪片



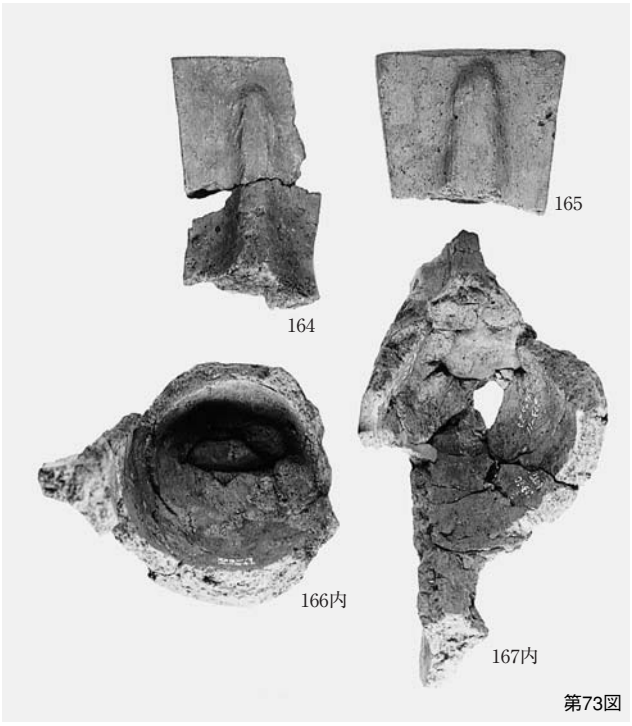
第71図

大刀形埴輪片

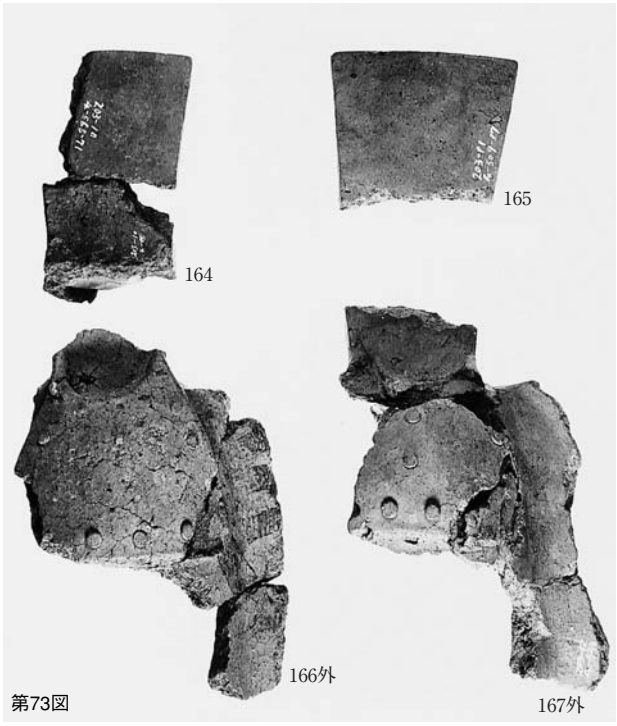


第72図

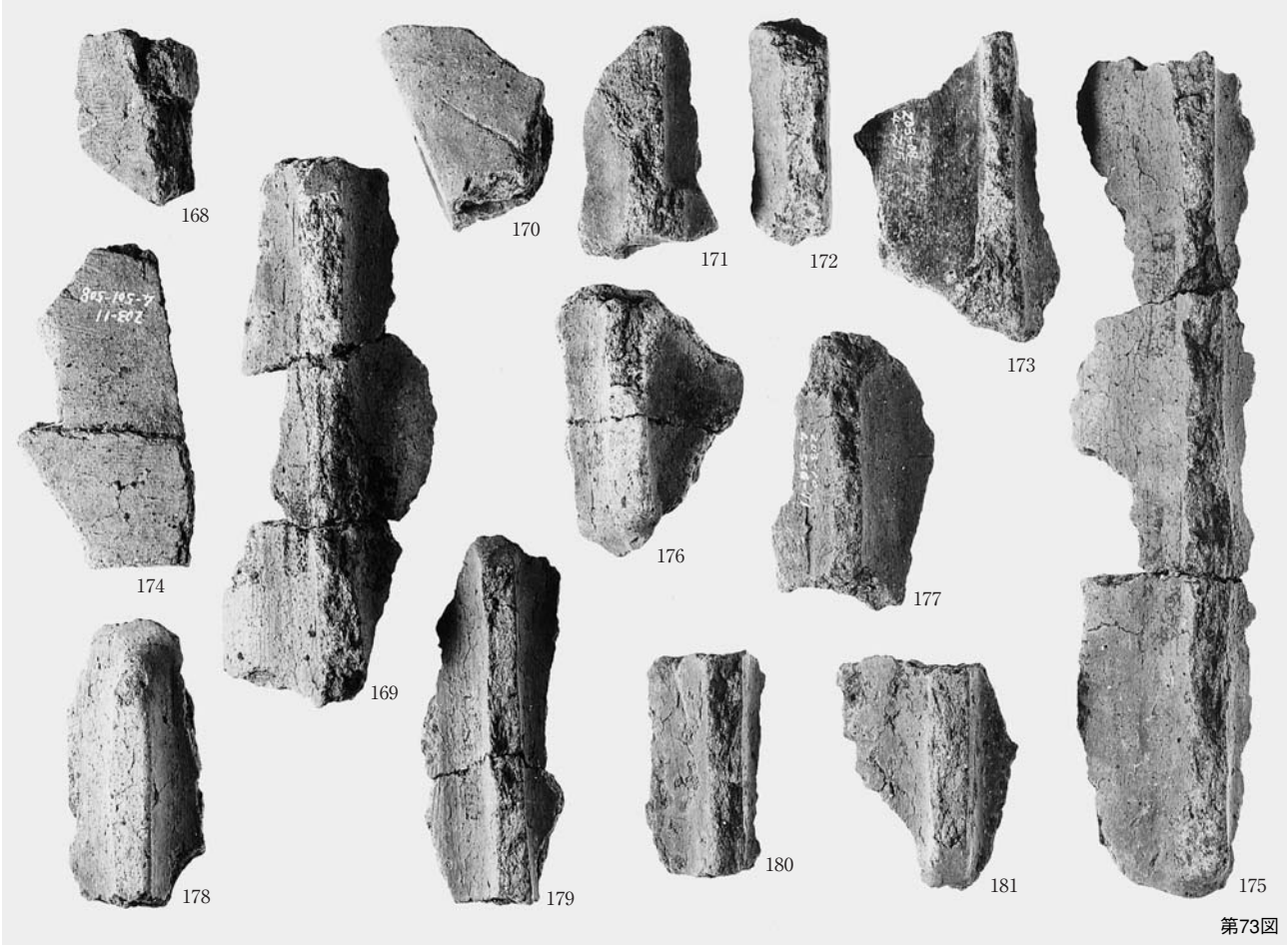
矛形埴輪片



第73図

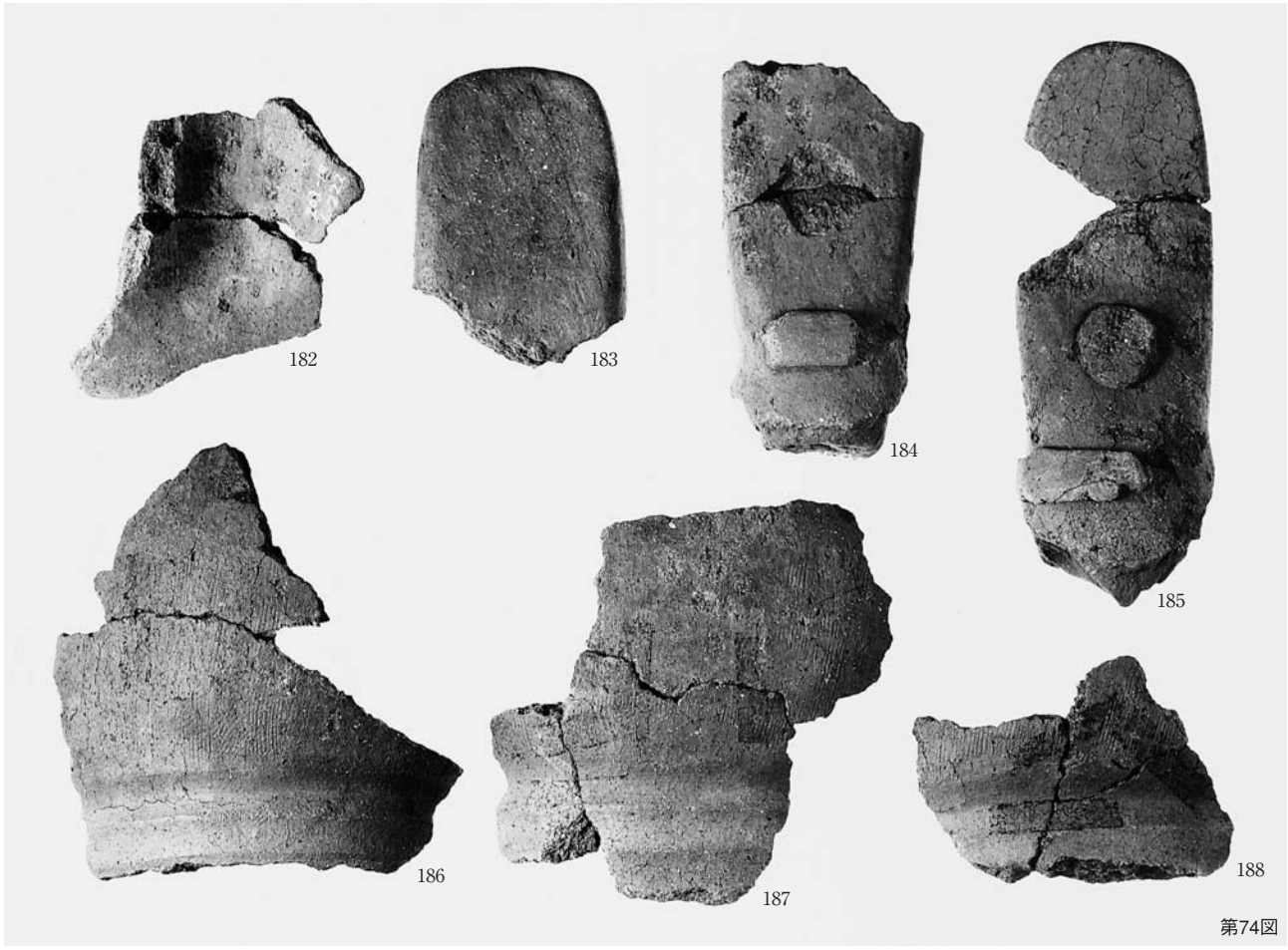


第73図



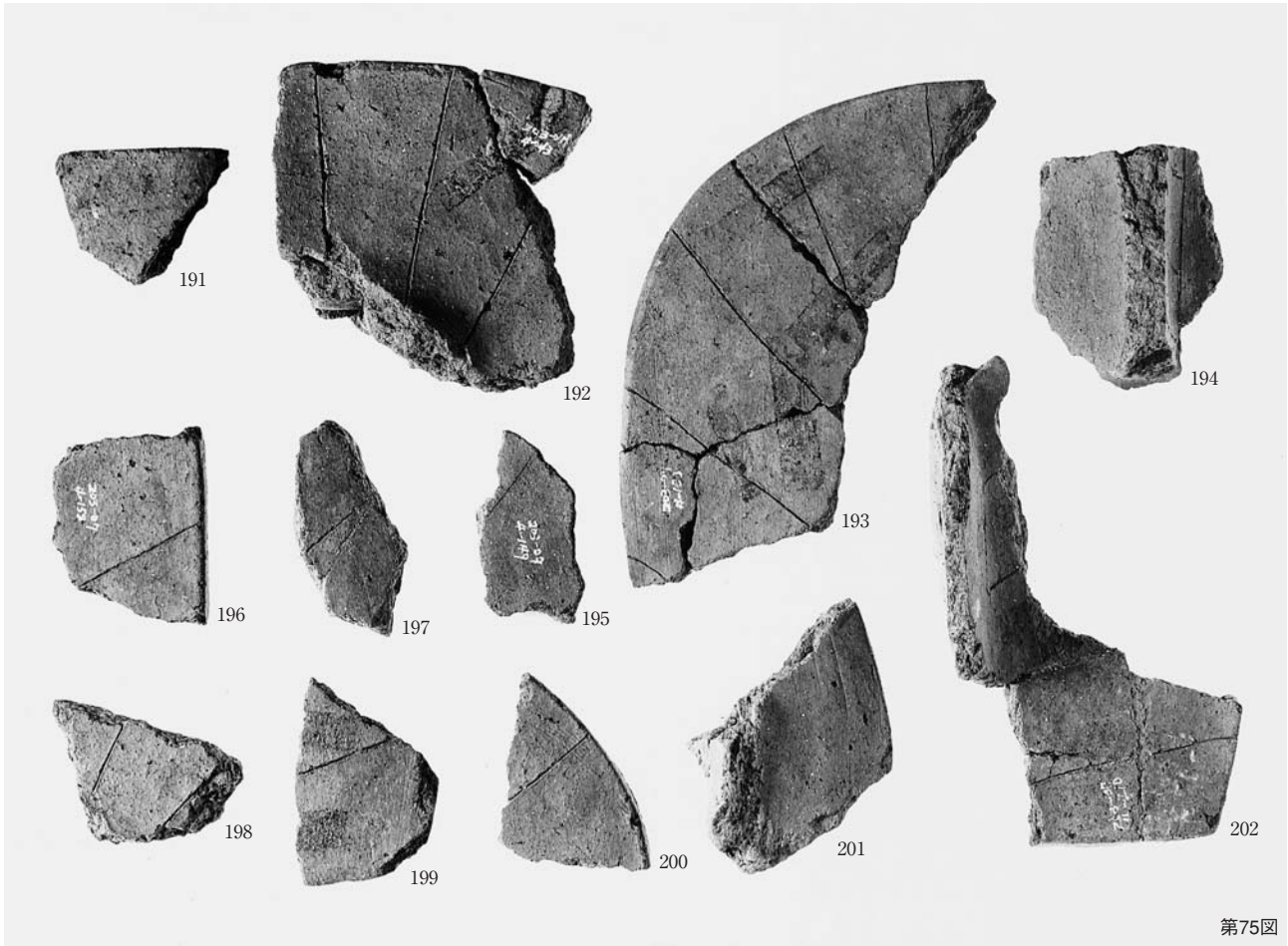
第73図

鞍形埴輪片



第74図

鞆形埴輪片



第75図

翳形埴輪片


189表


189


189裏


153


190


190裏

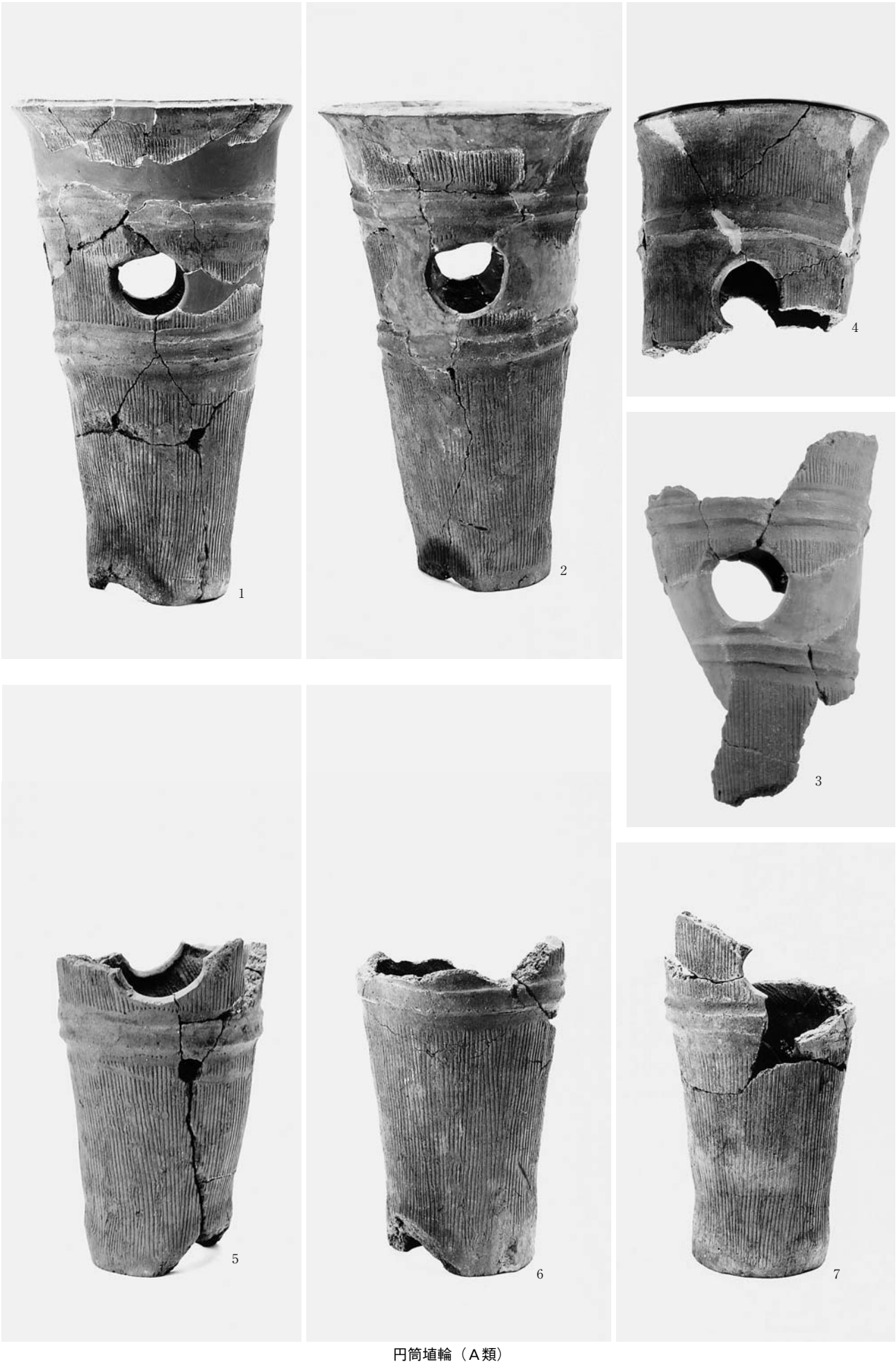

203


190表

第71・75・76図

大刀形埴輪

翳形埴輪



円筒埴輪（A類）



円筒埴輪（B類）



円筒埴輪（B・B'類）


20


21


22


25


23


24


26

円筒埴輪（D・E類）


27


28


29


30


34


33


31


32

円筒埴輪（E類）











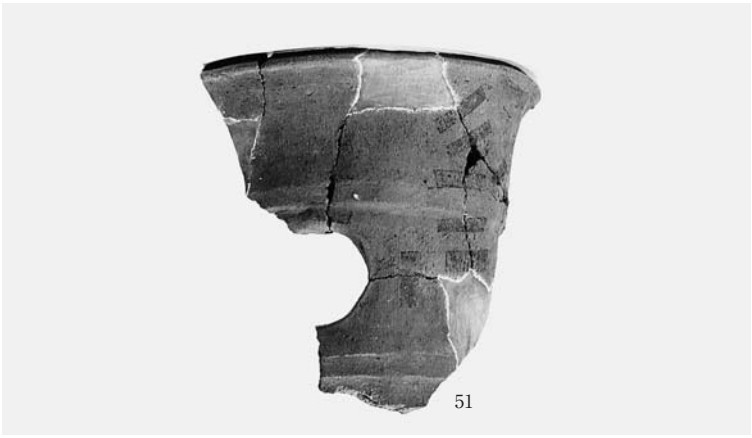


円筒埴輪（E・F類）





円筒埴輪（Ｆ類）


51


52

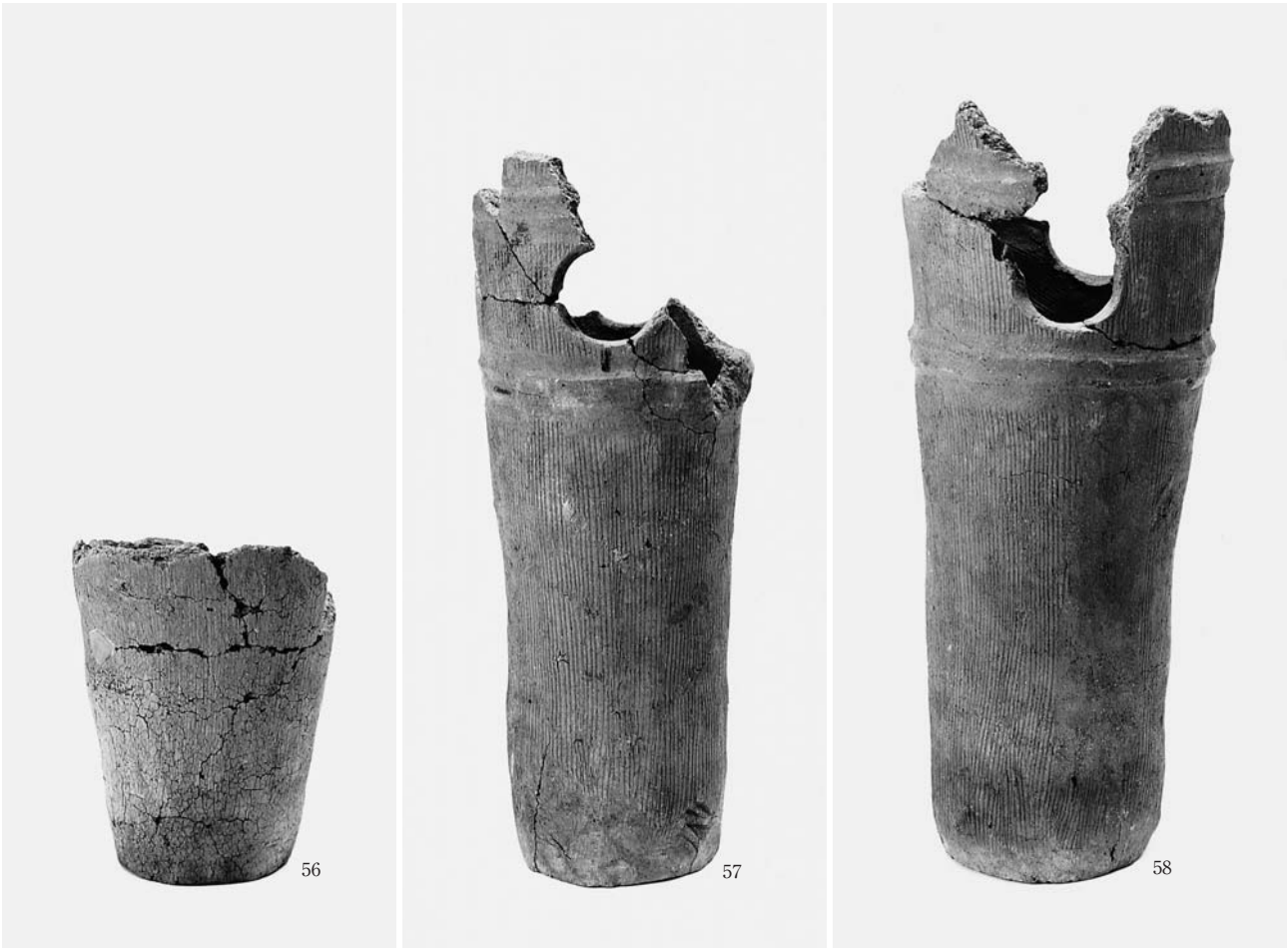

47


48


49

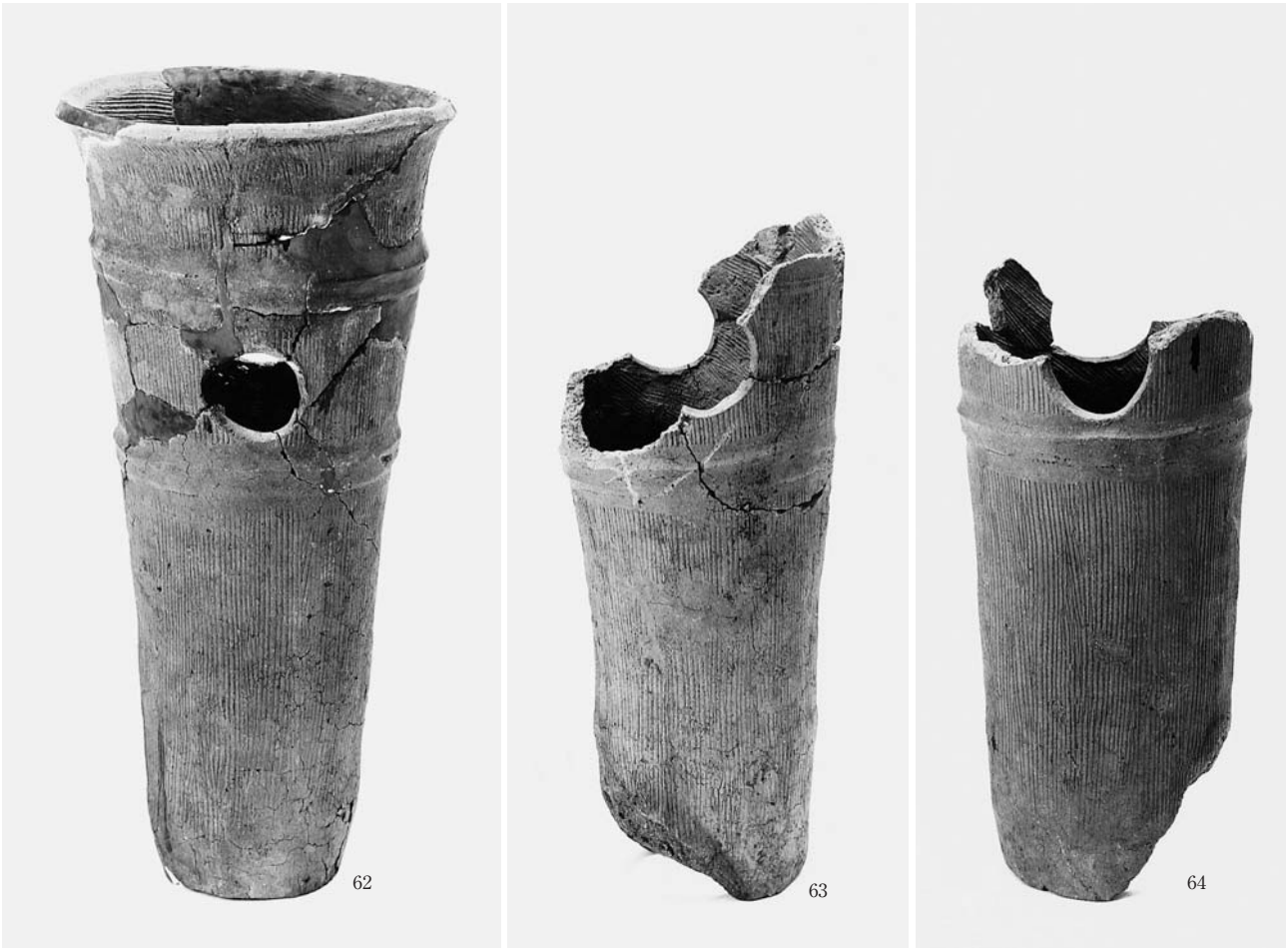

50

円筒埴輪（Ｆ類）





円筒埴輪（G・H類）



円筒埴輪（H類）





円筒埴輪（Ⅰ類）





円筒埴輪（J・K・L類）





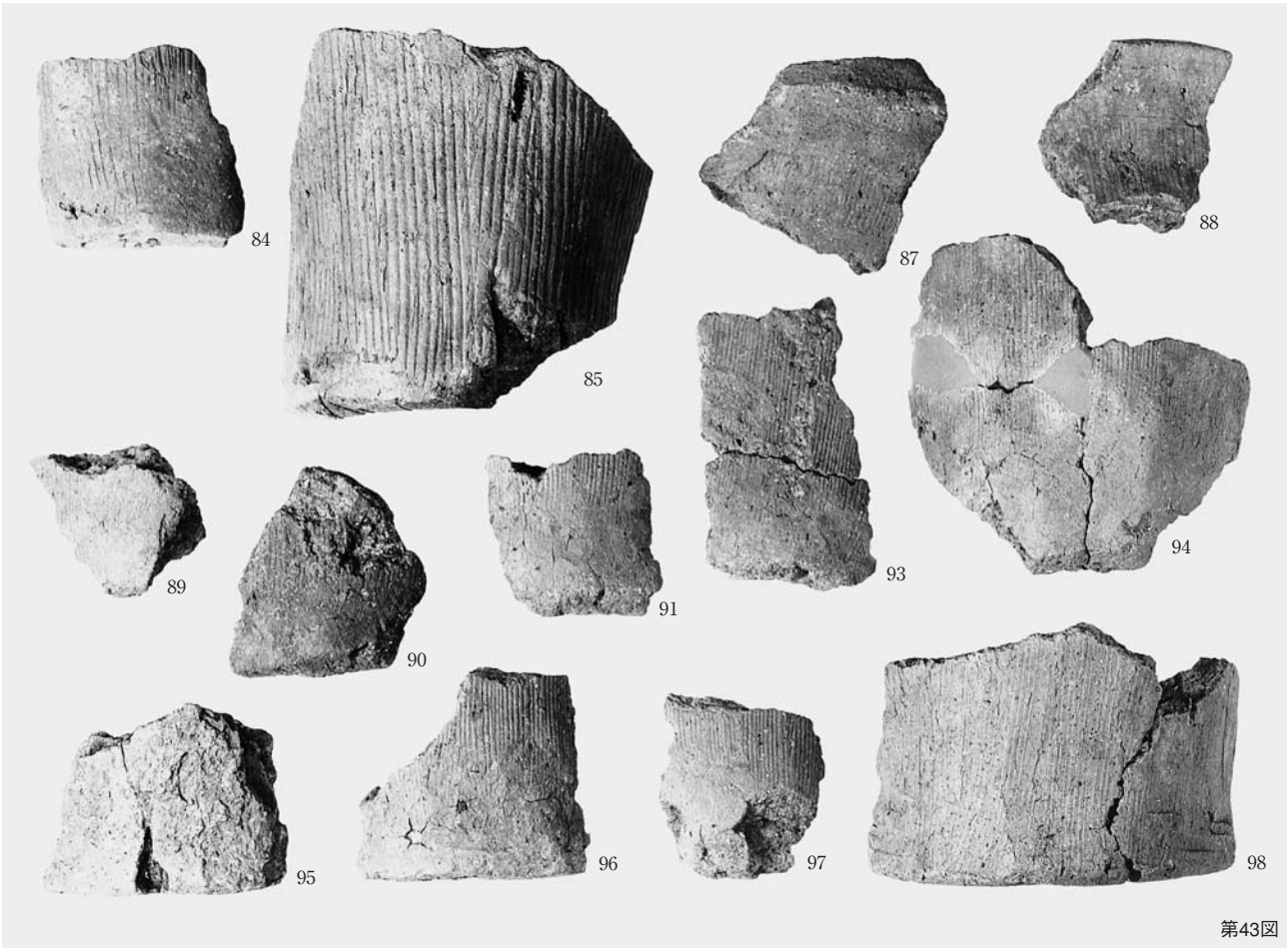




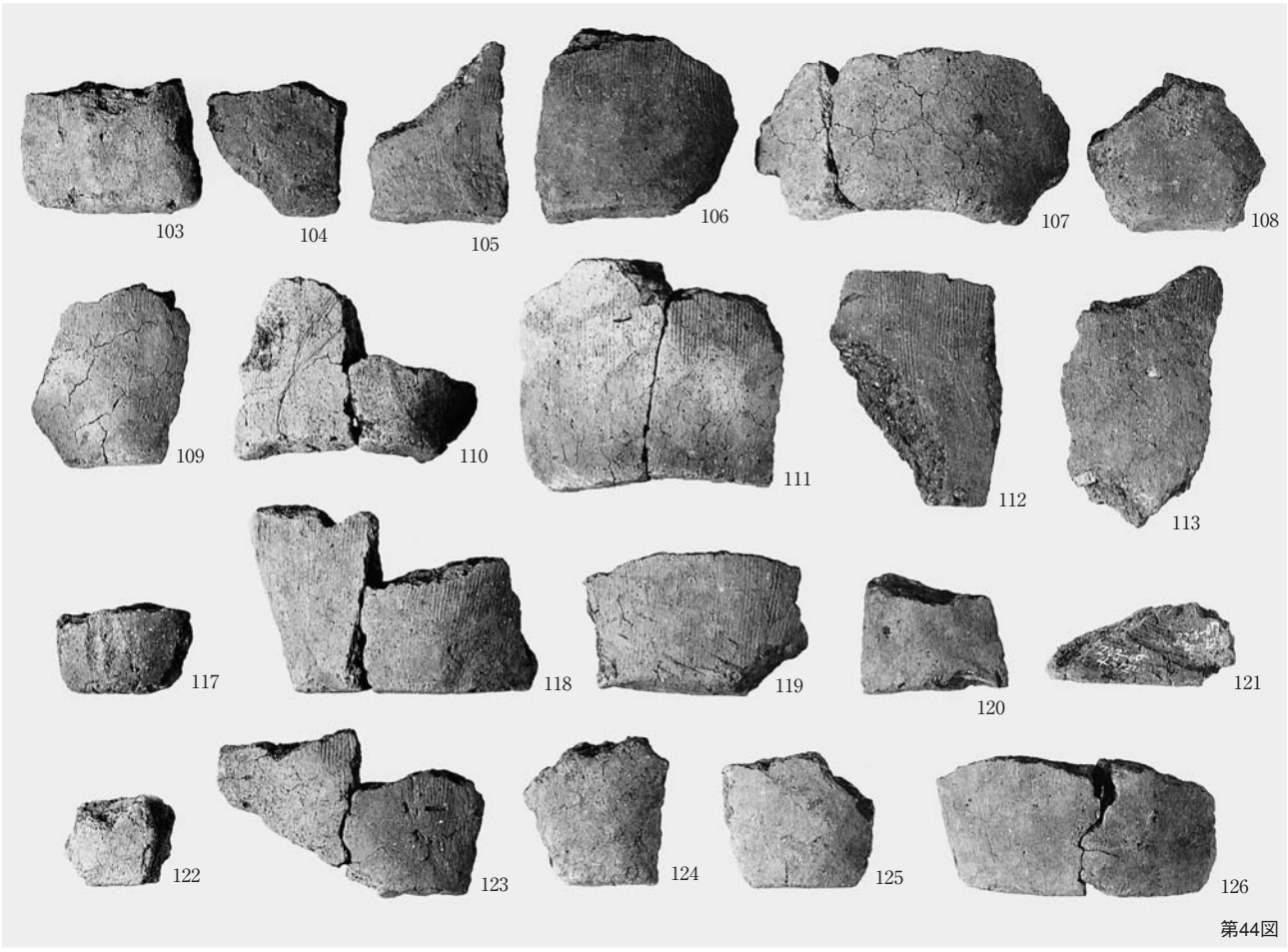




朝顔形埴輪（F・I・K類）

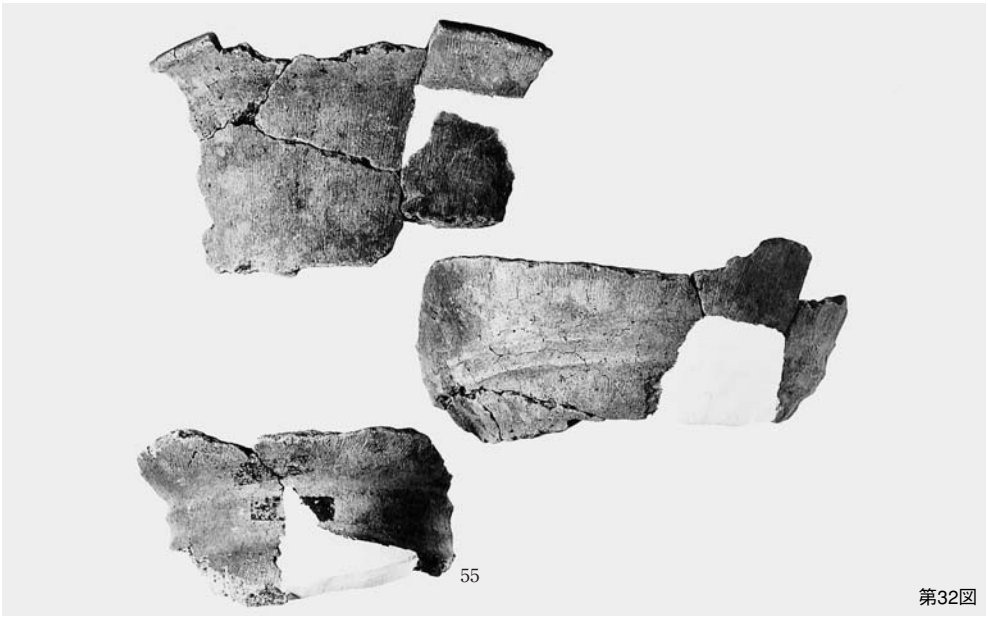


第43図

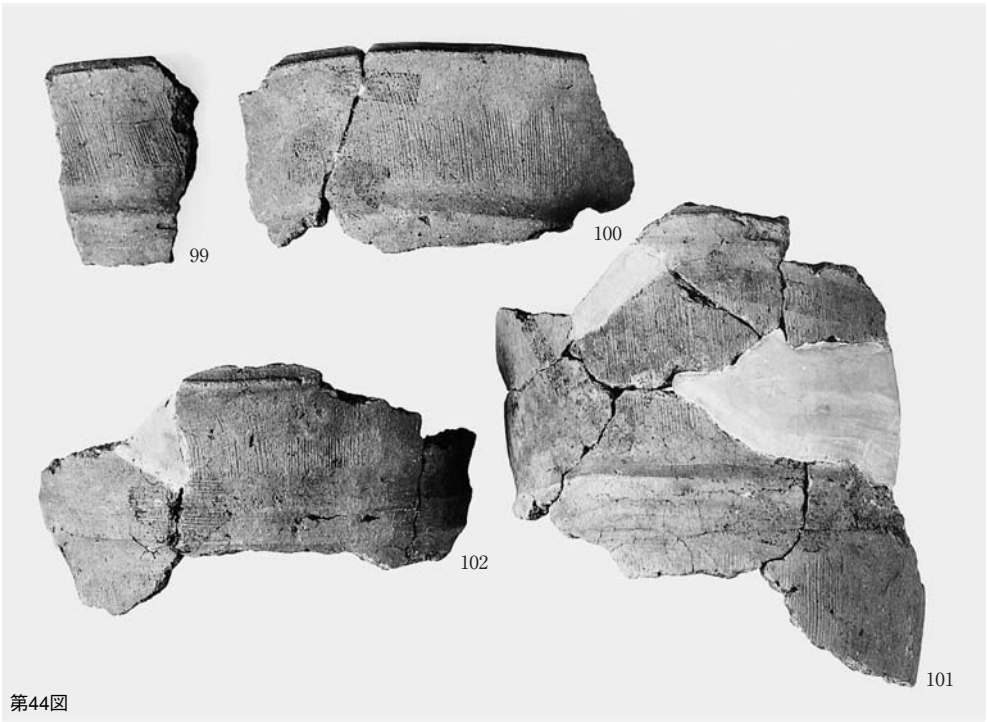


第44図

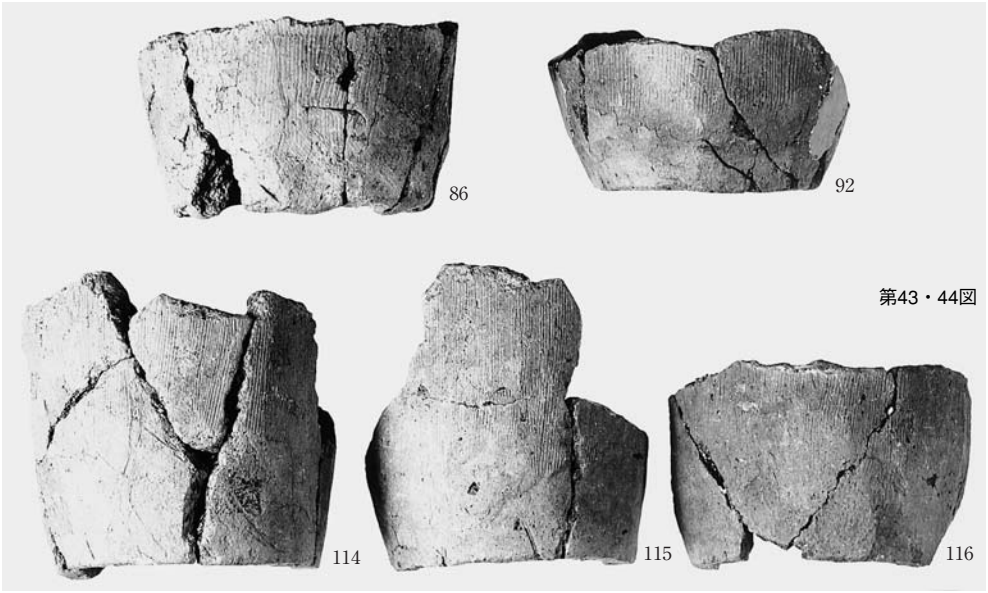
円筒埴輪片



第32図

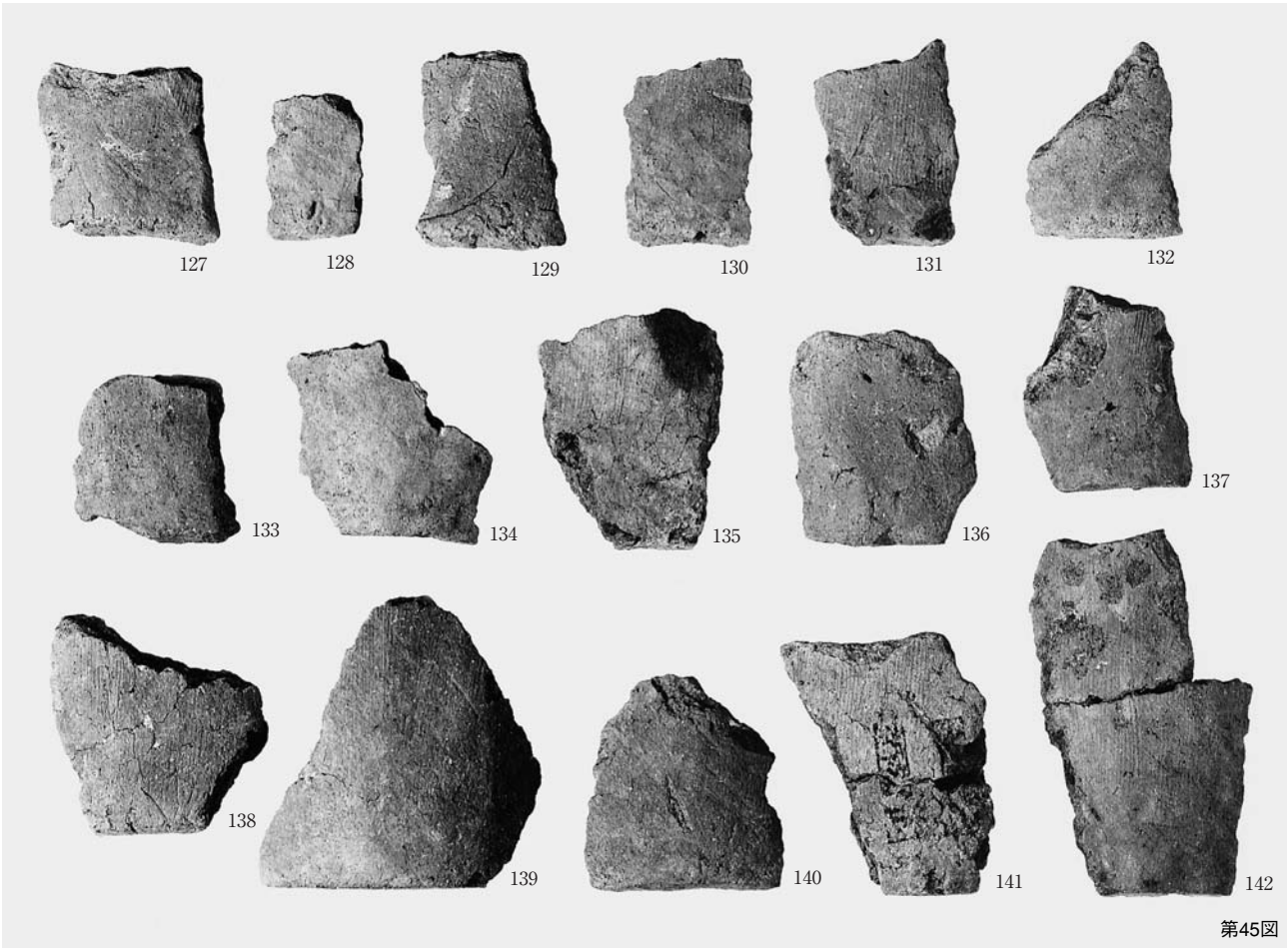


第44図

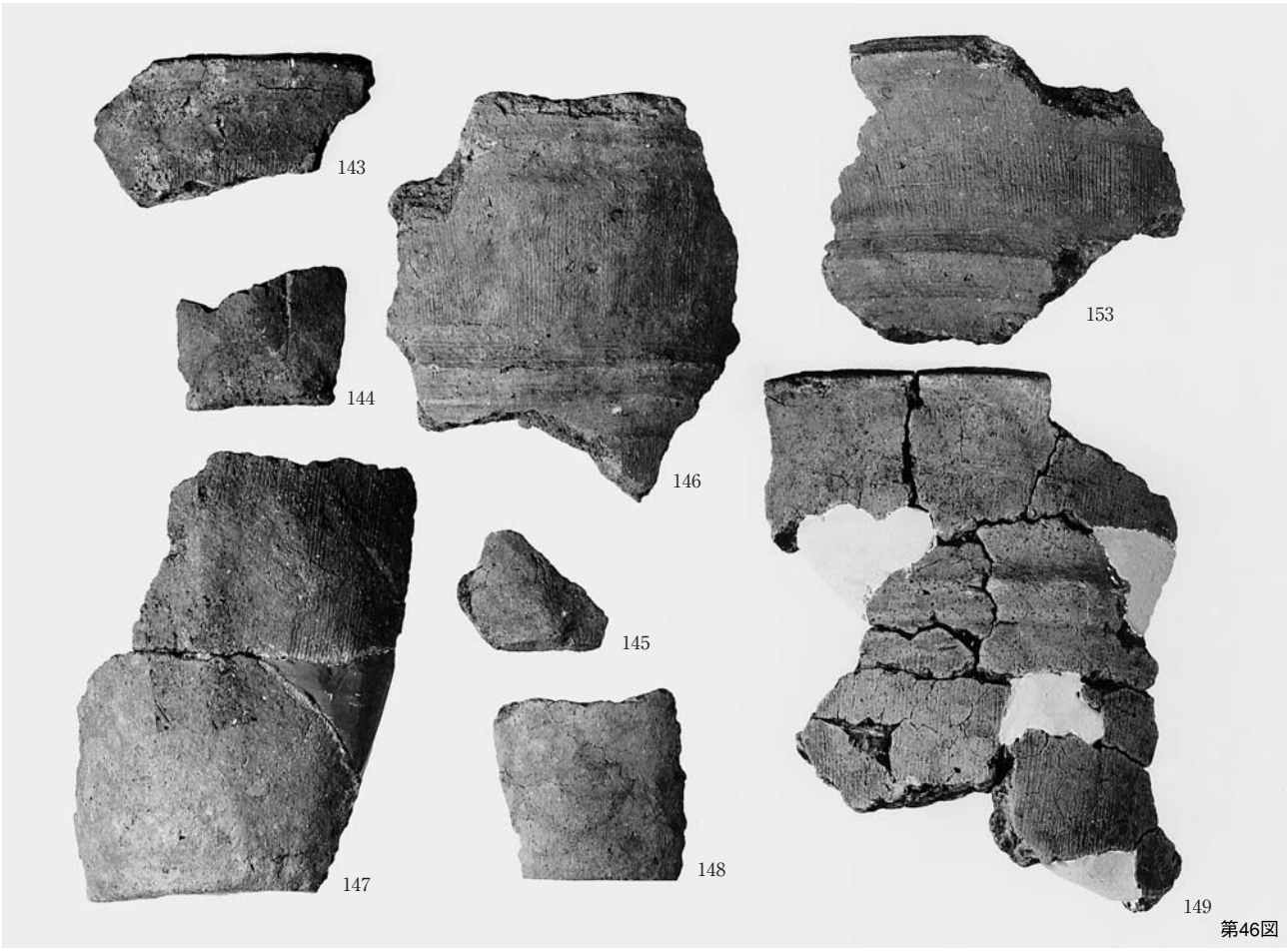


第43・44図

円筒埴輪片

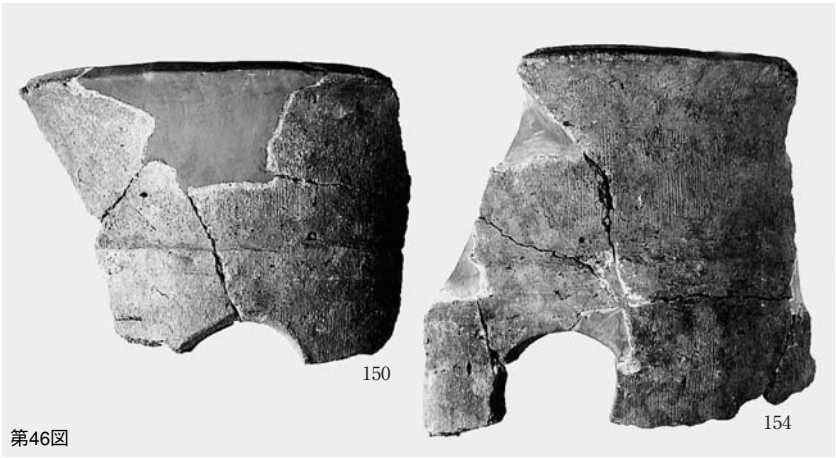


第45図

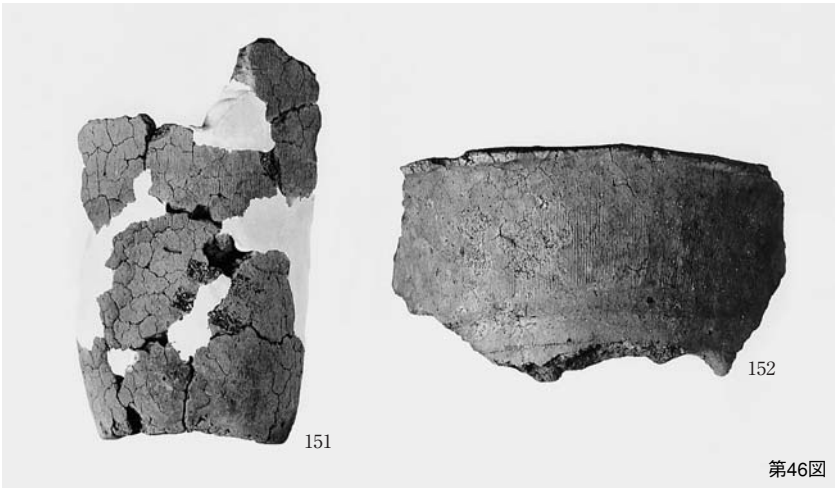


第46図

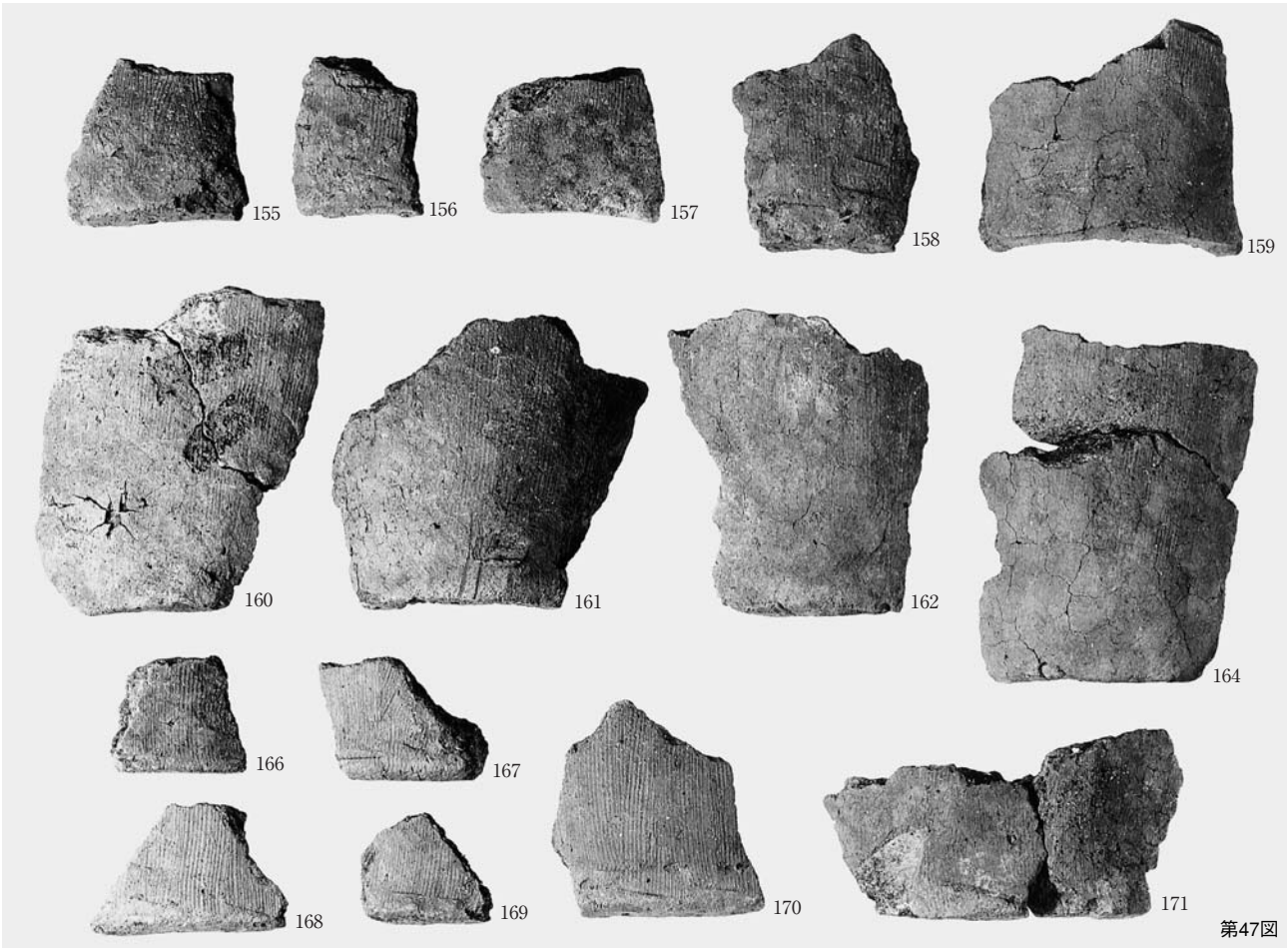
円筒埴輪片



第46図

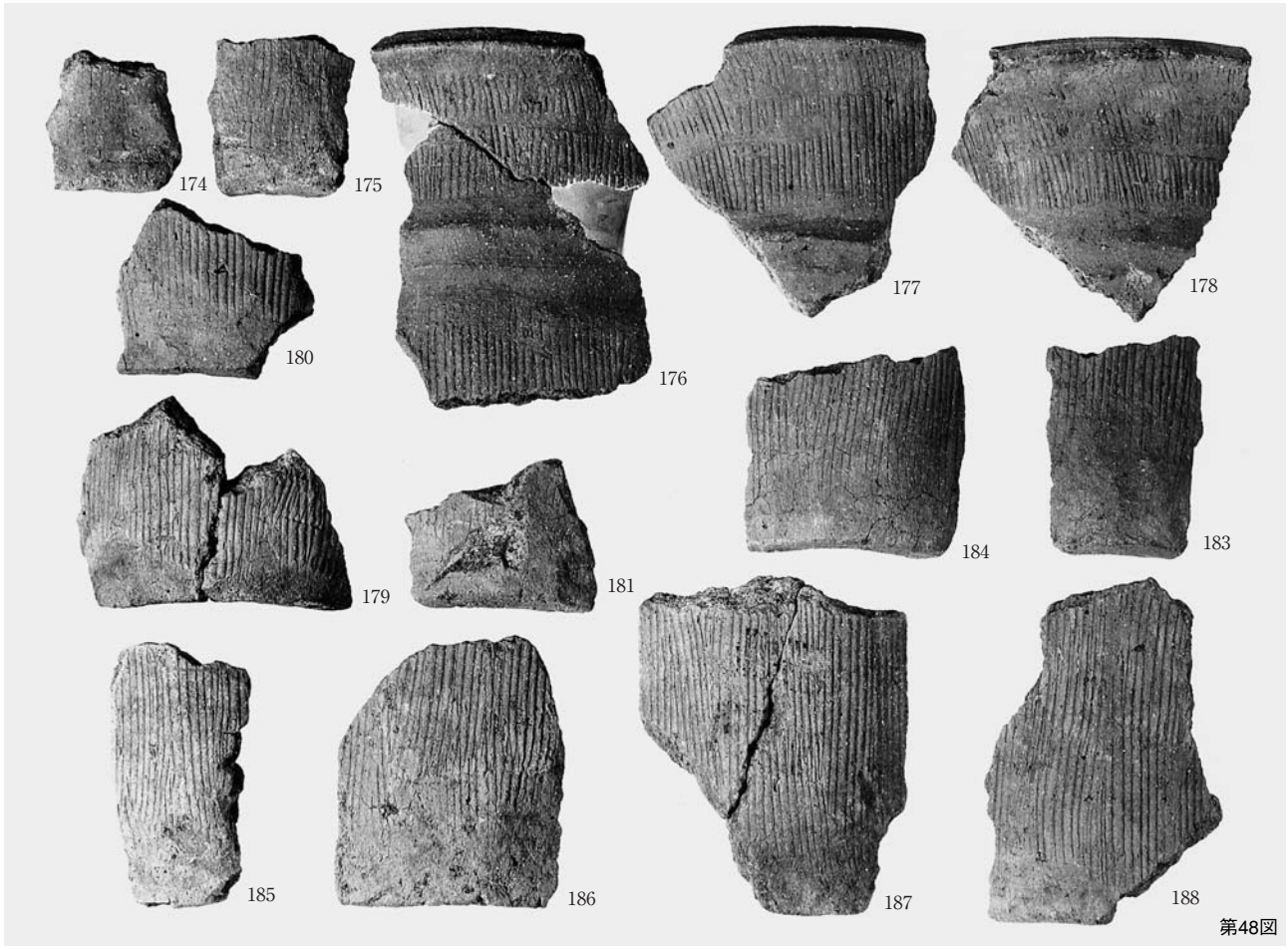


第46図

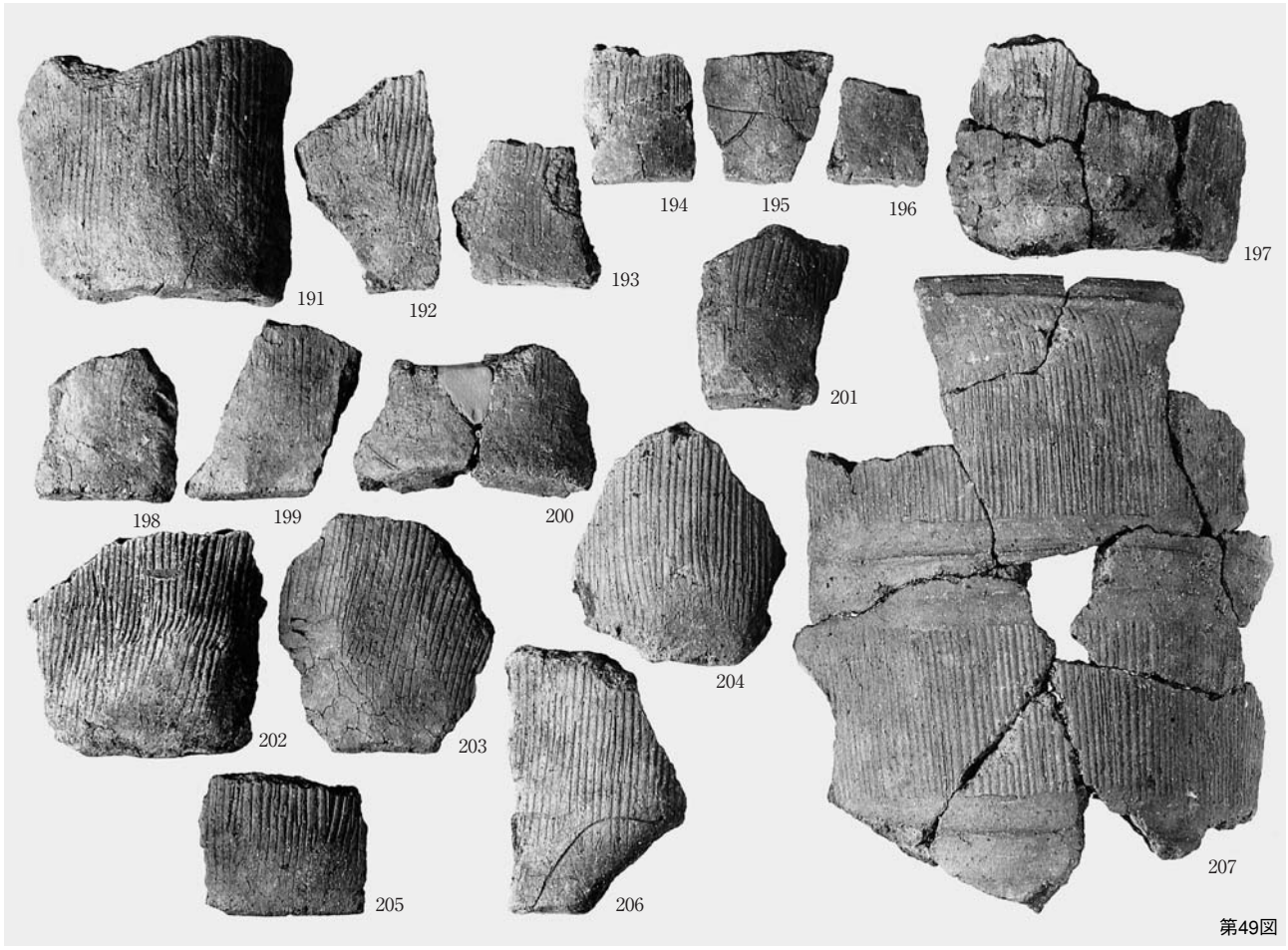


第47図

円筒埴輪片

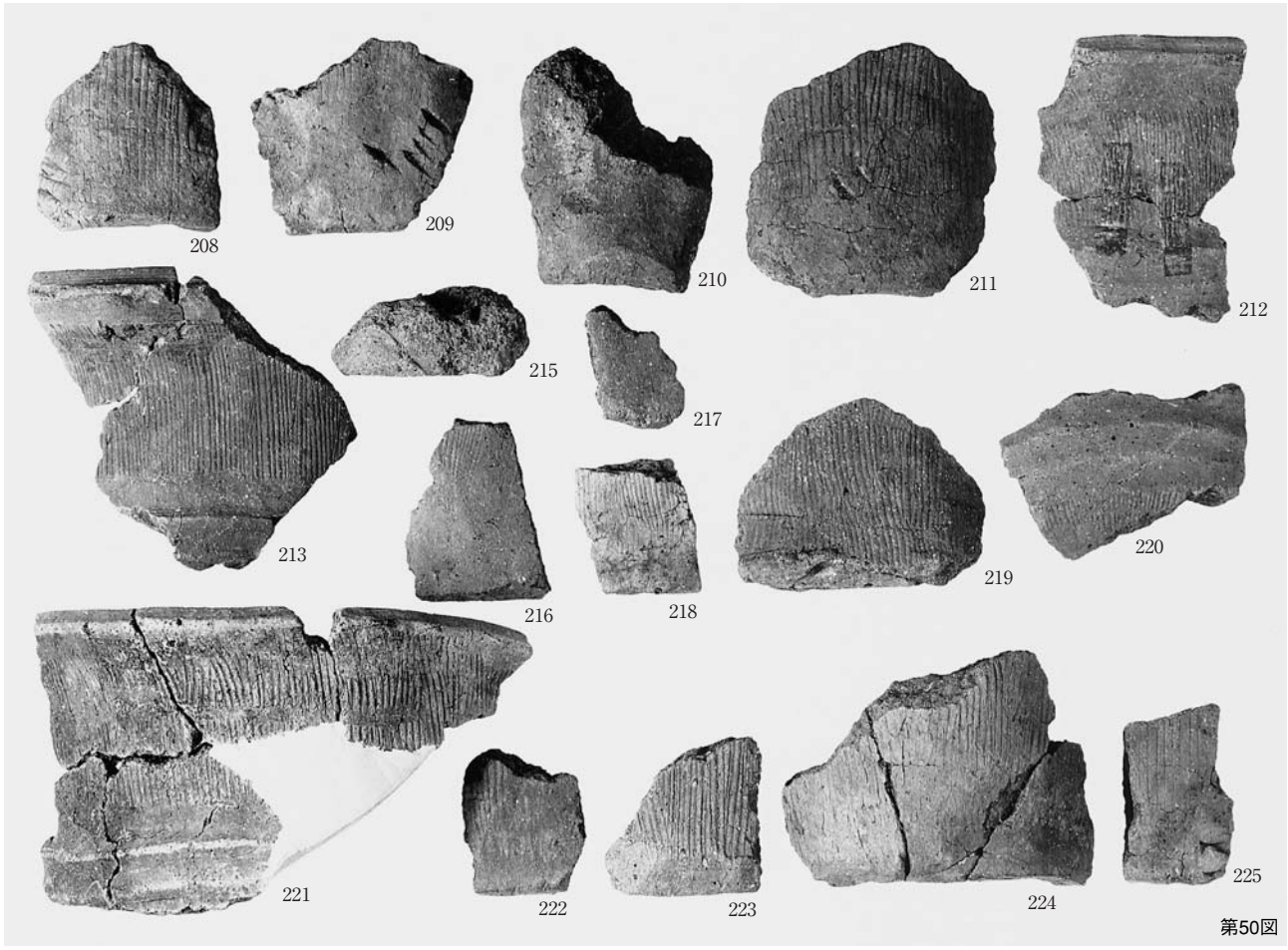


第48図

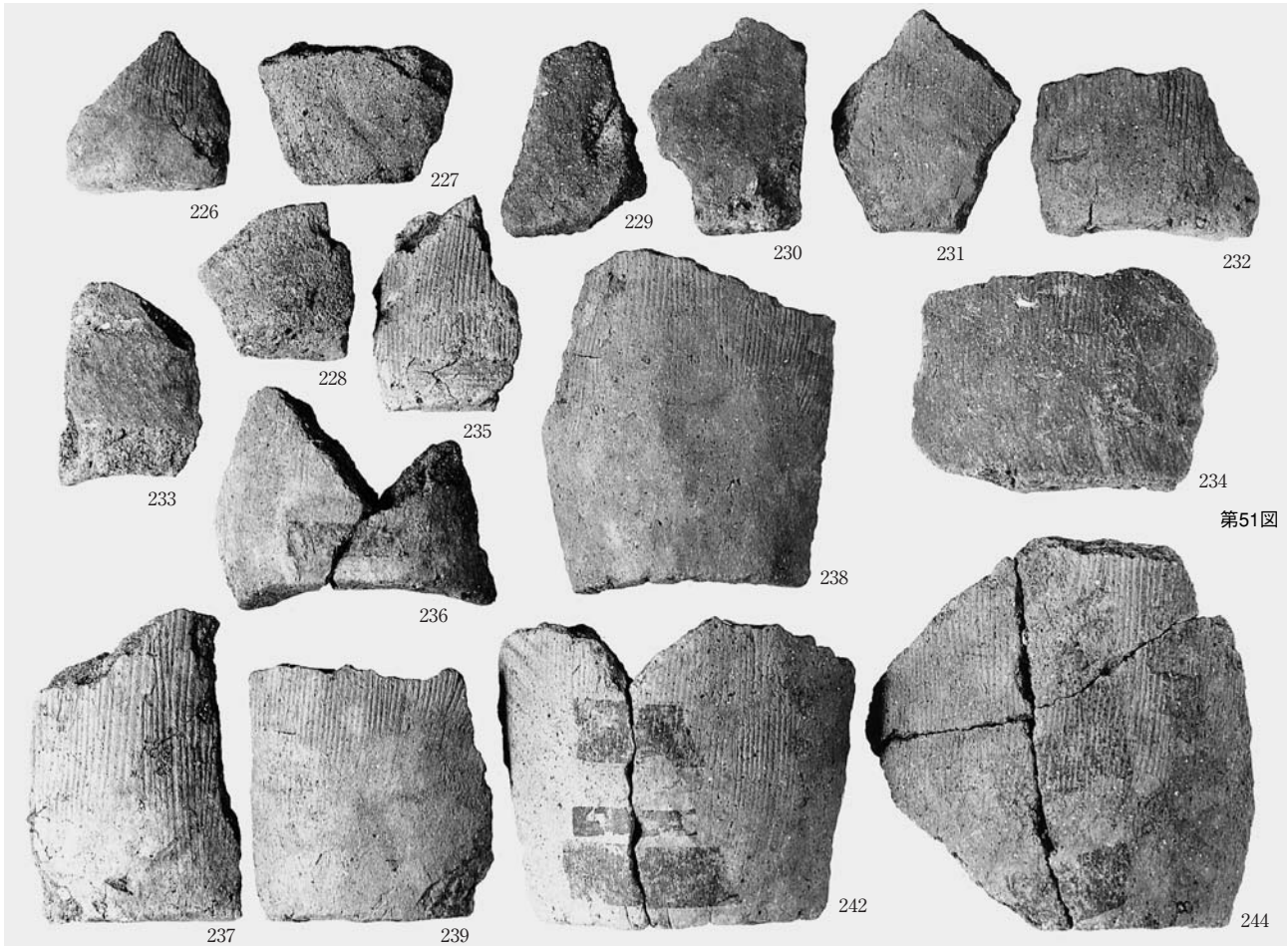


第49図

円筒埴輪片

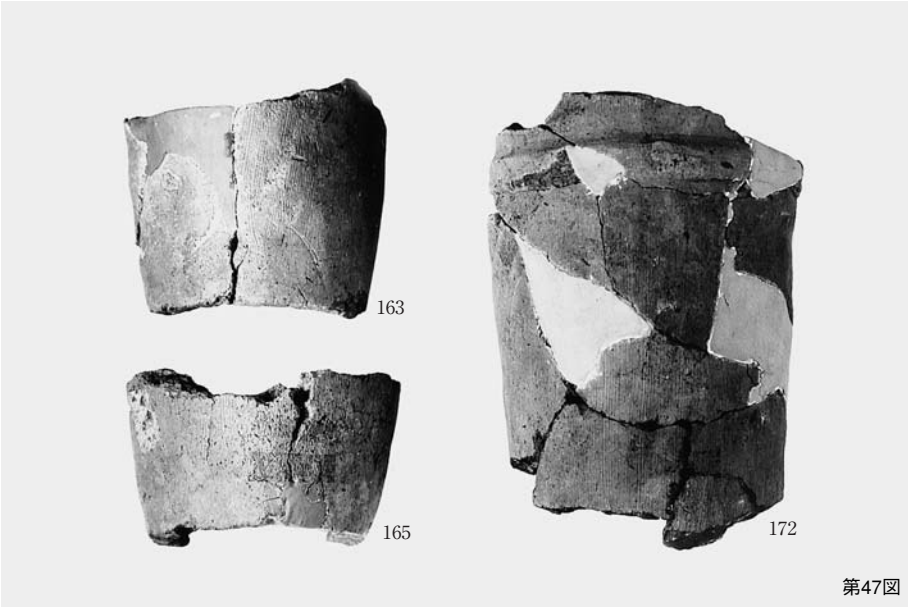


第50図

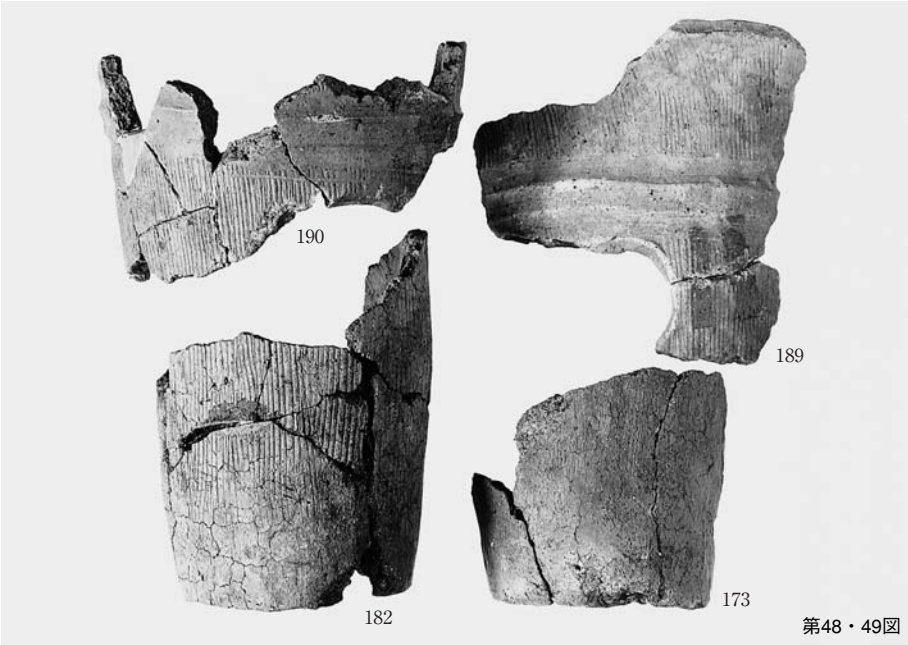


第51図

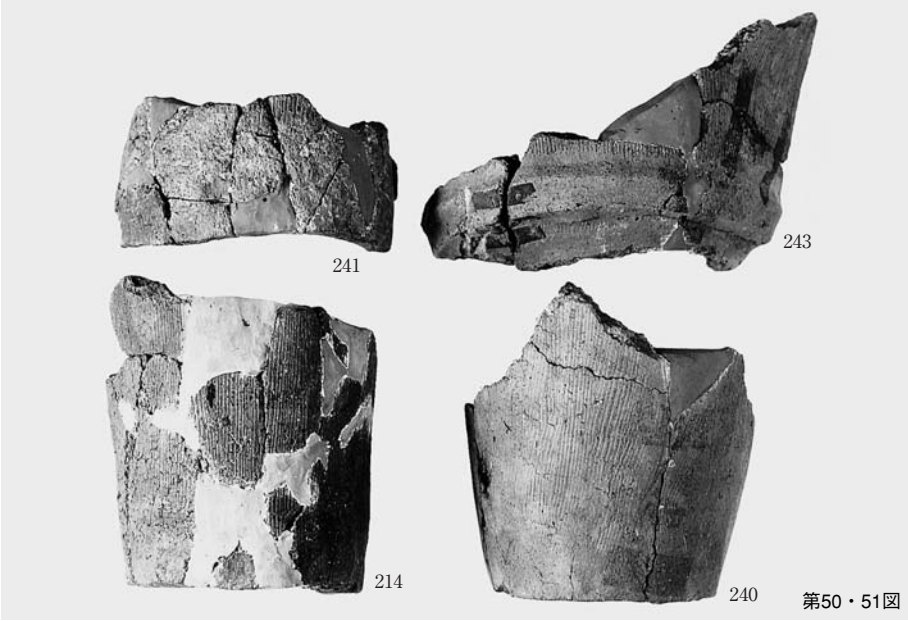
円筒埴輪片



第47図

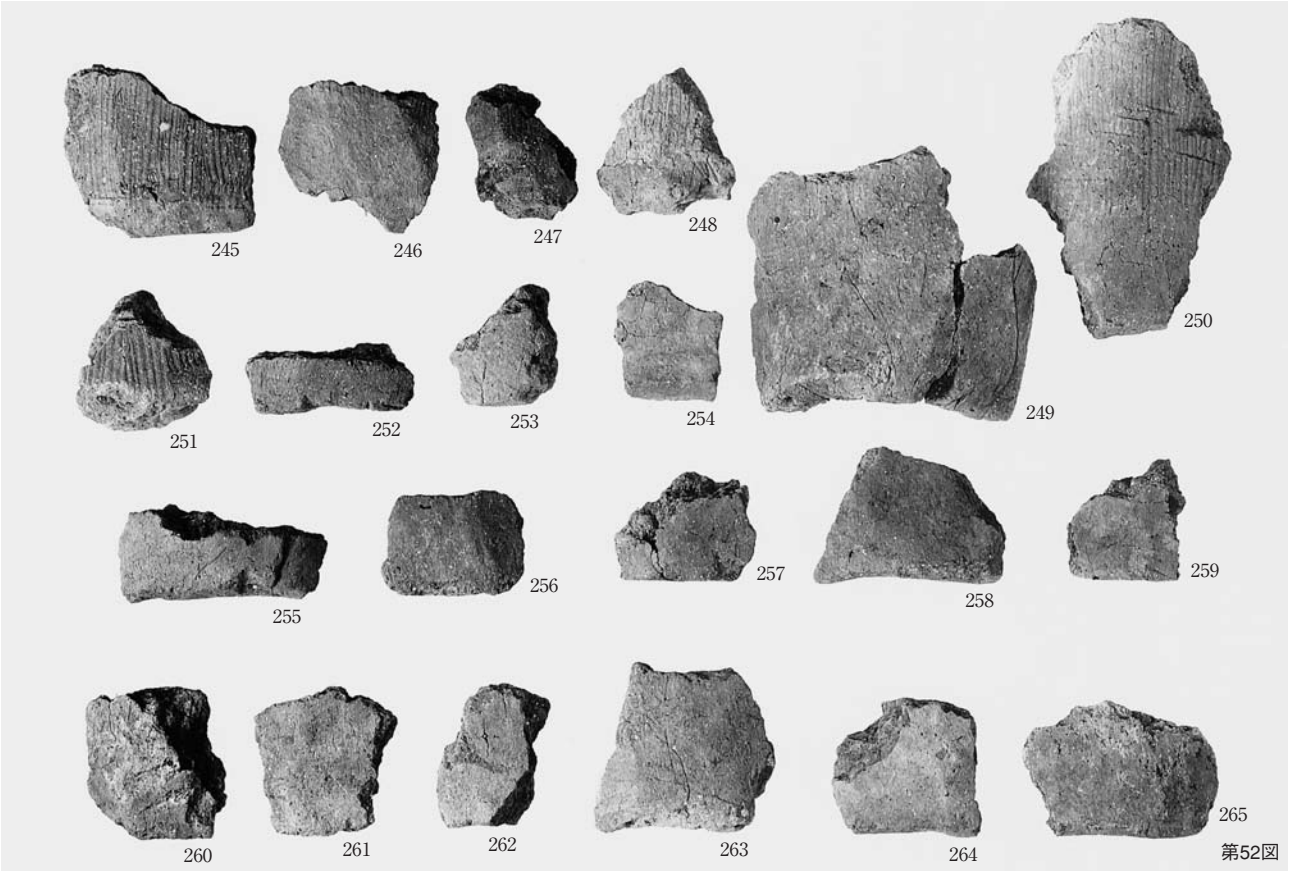


第48・49図



第50・51図

円筒埴輪片



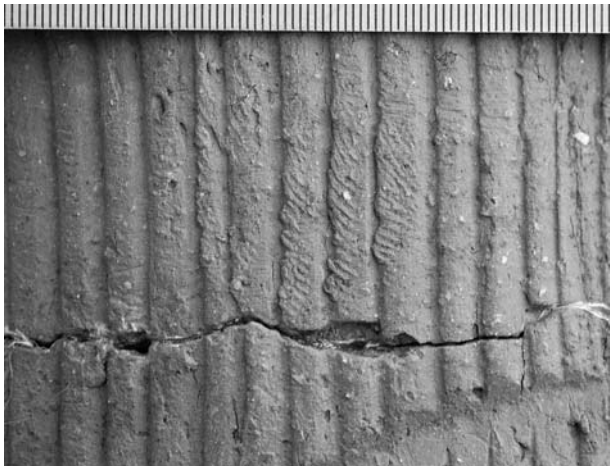
第52図 円筒埴輪片



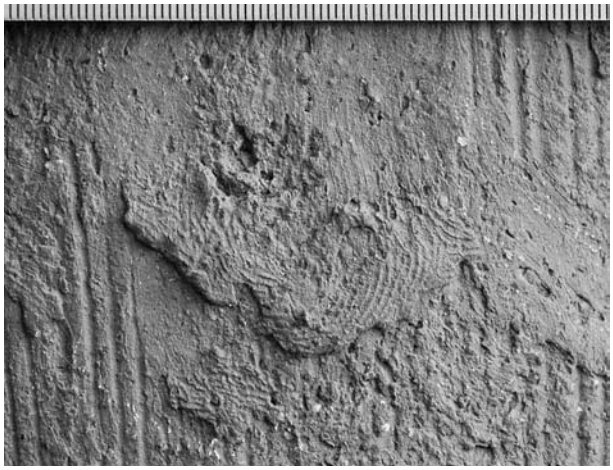
A1指紋



B11指紋



A5指紋



D20指紋



A1ごまかしナデ



A6ごまかしナデ



D20ごまかしナデ



D21ごまかしナデ



H53ごまかしナデ



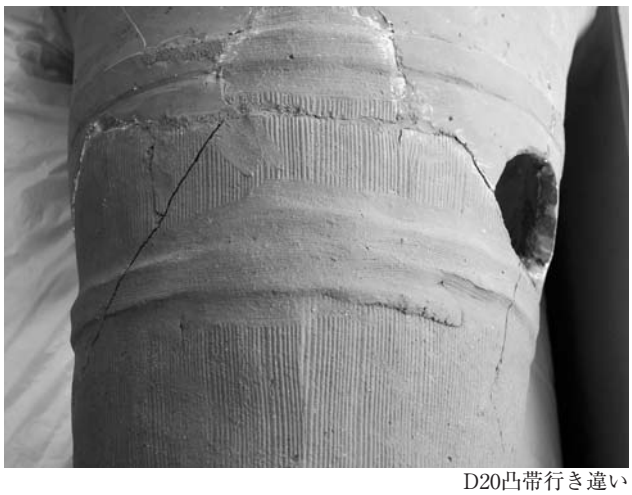
H61ごまかしナデ



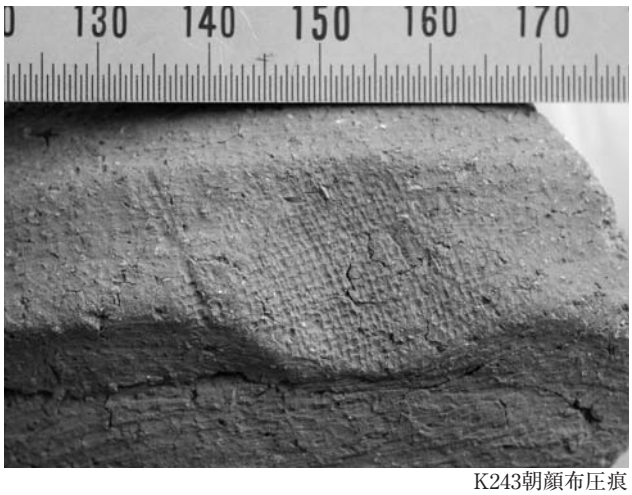
A1修復痕



A5修復痕



D20凸帯行き違い



K243朝顔布圧痕



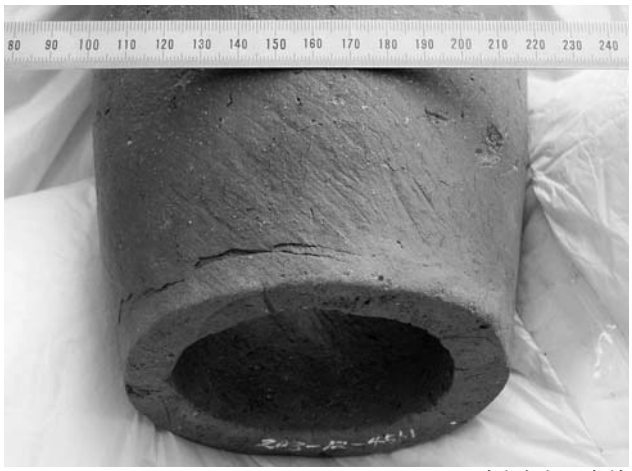
F49S接合



B11Z接合



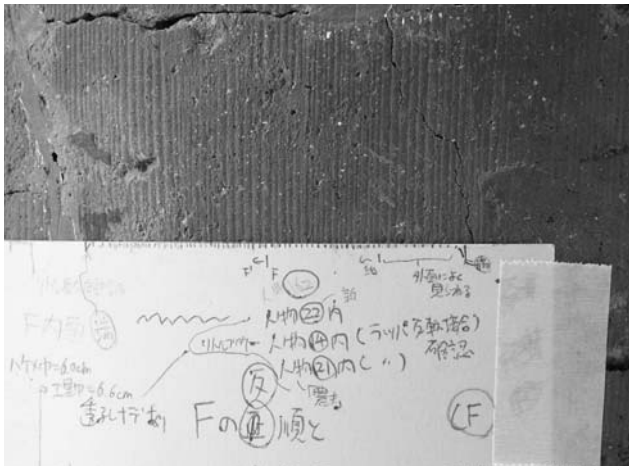
F41底部板押圧条線



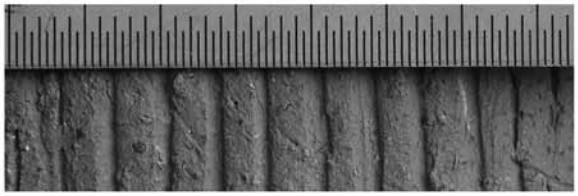
E30底部板押圧条線



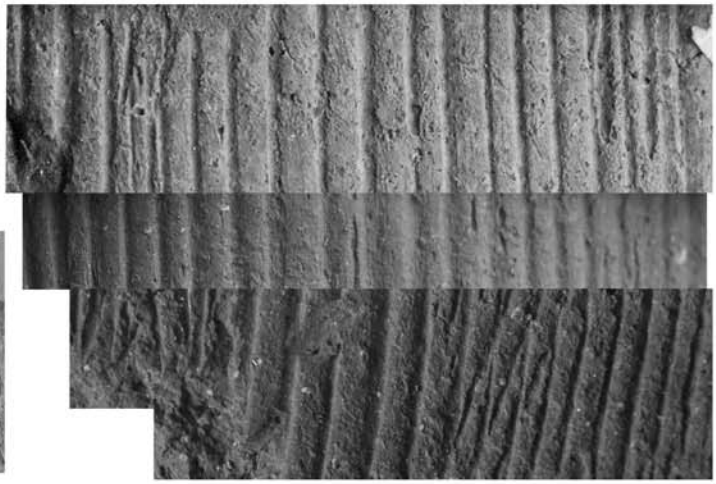
B86底部圧痕



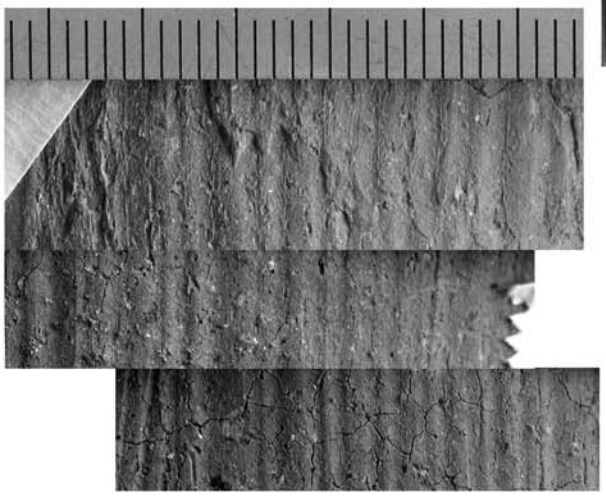
転写コード（F）



A（A2外面）



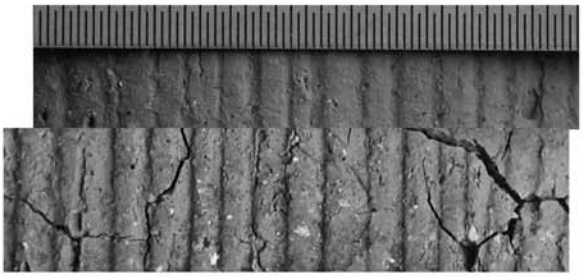
H（上：生出塚、中：H63、下：A6内面逆位）



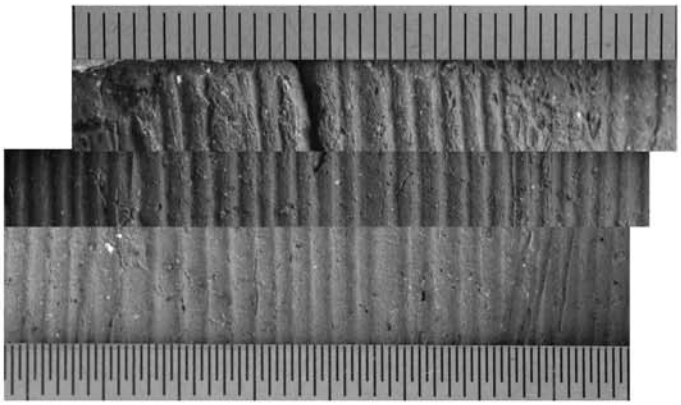
B（上：生出塚、中：B11外面、下：B17）



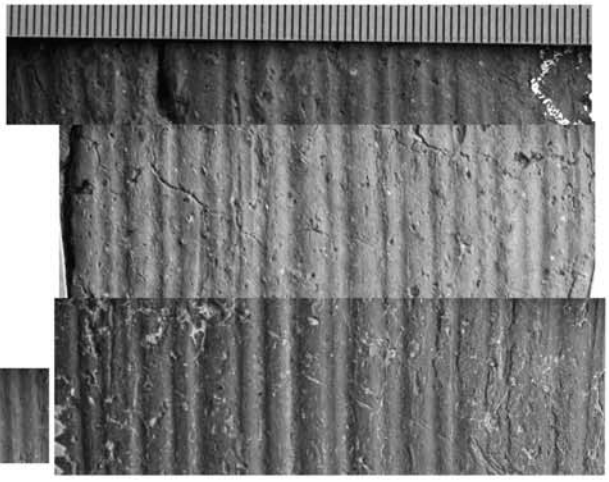
I（I69外面）



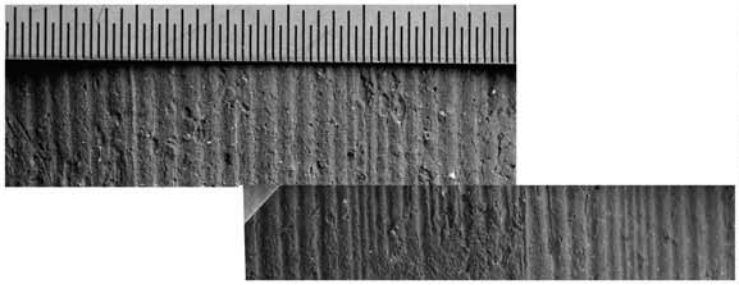
J（上：生出塚、下：J77外面）



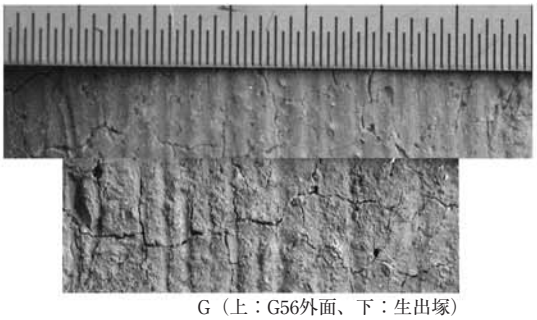
D（上：生出塚、中：D21外面、下：I69逆位）



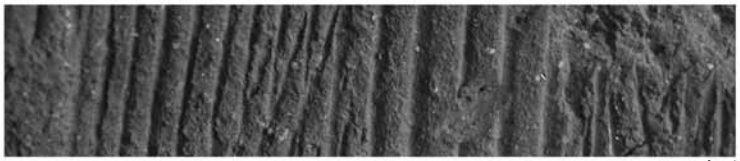
L（上：L80外面、中：生出塚半身像、下：生出塚）



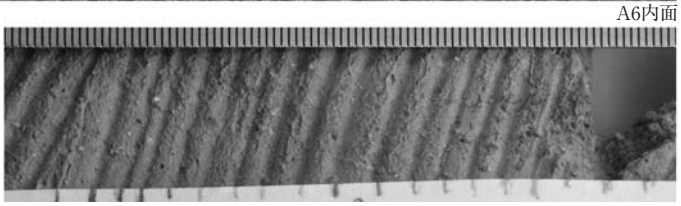
E（上：E28外面、下：生出塚）



G（上：G56外面、下：生出塚）

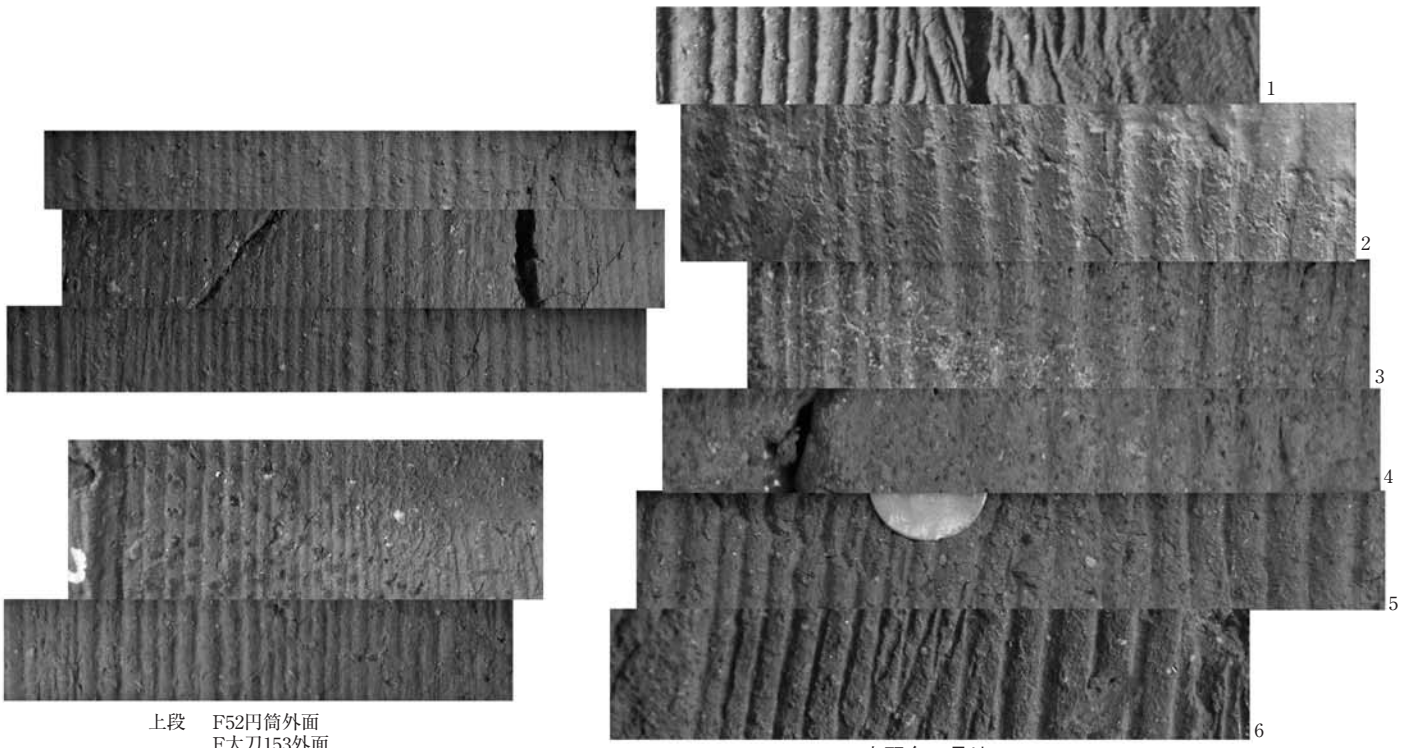


A6内面



H63内面

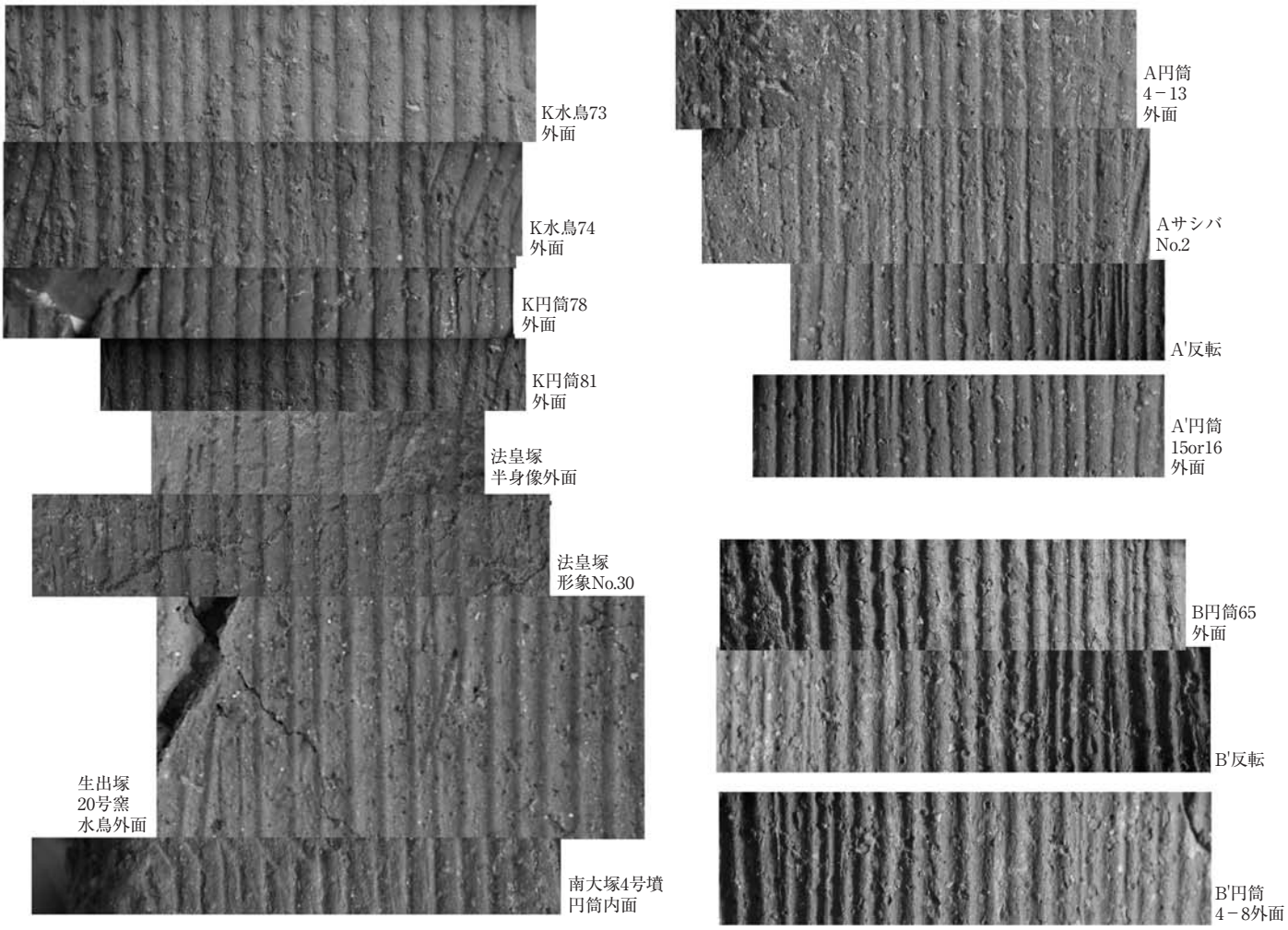
出土埴輪ハケメ一覧（A・B・D・E・G・H・I・J・L類、A・H類内面）および各一致例（2倍）



赤羽台４号墳

1　A人物埴輪頭部内面
2　A人物埴輪外面
3　A円筒埴輪（復元個体）外面
4　A鞆形埴輪形象部外面
5　A円筒埴輪「れ」内面
6　M山倉A6内面

上段　F52円筒外面
　　F大刀153外面
　　F巫女8外面
下段　F左半部人物162内面
　　南大塚5号墳円筒外面逆位



酒巻14号墳（参考）

出土埴輪ハケメ一覧（Ｆ・Ｋ類）および各一致例（２倍）



A1口縁端部



A2口縁端部



A1透孔



A2透孔



A1凸帯



A2凸帯



A1底部



A2底部



B11口縁端部



B17凸帯



B11透孔



B17透孔



B11底部



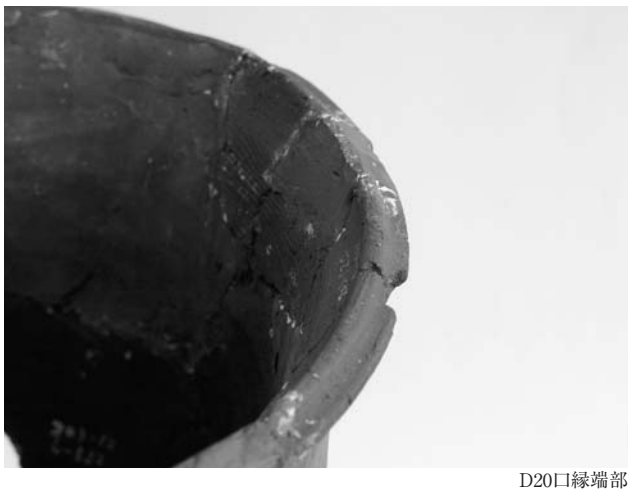
B17底部



B12底面



B17底面



D20口縁端部



E23口縁端部



D20透孔



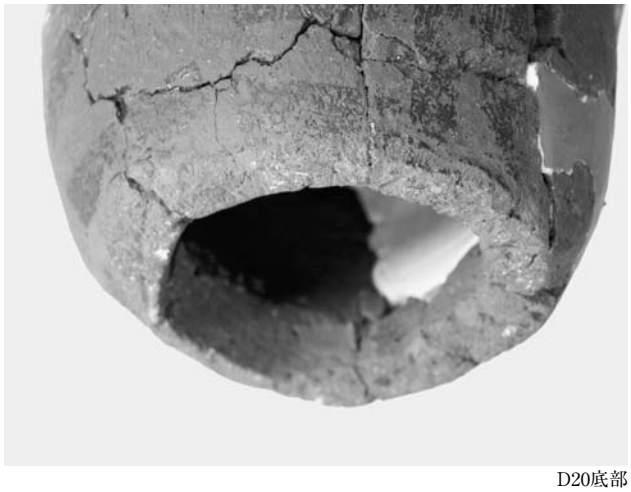
E23透孔



D20凸帯



E23凸帯



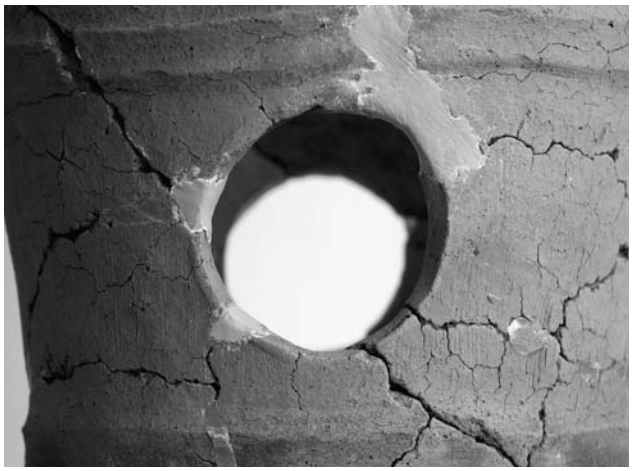
D20底部



E23底部


F44口縁部


F53朝顔口縁部


F44透孔


F54朝顔口縁部

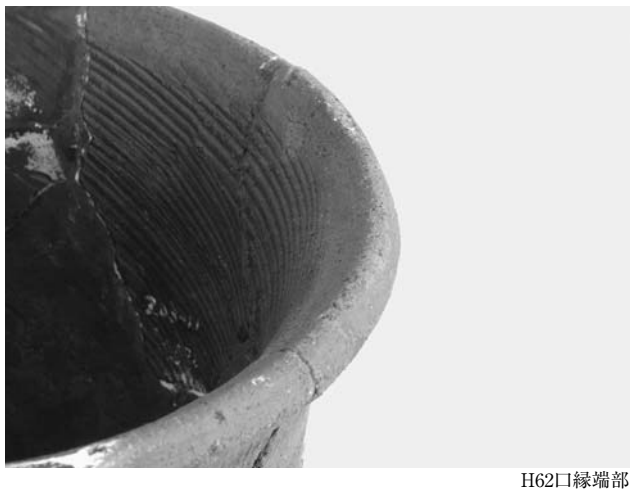

F44凸帯

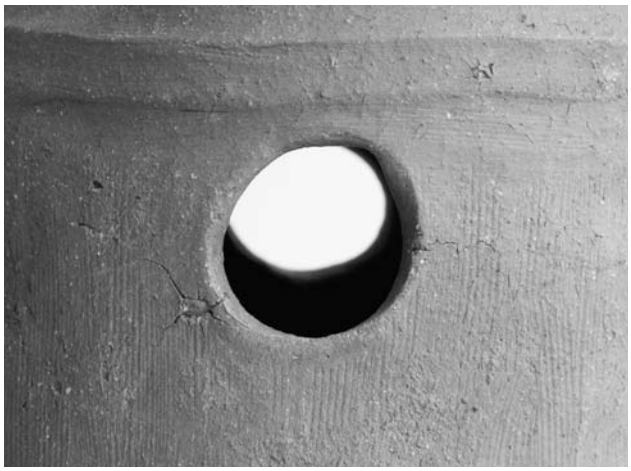

F54朝顔首肩部


F38底部


F54朝顔透孔・凸帯

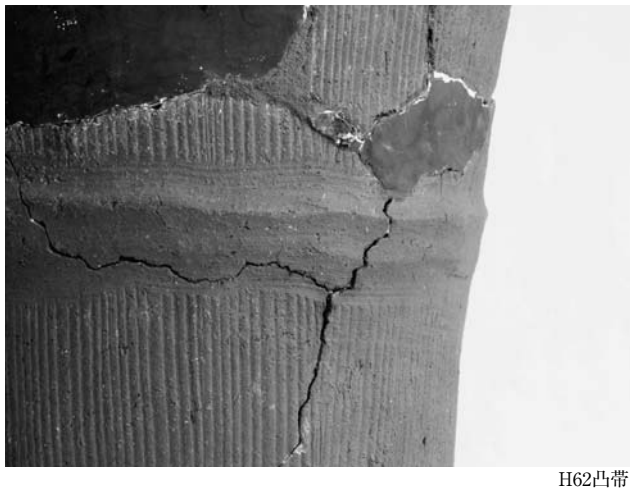

F振分髪半身像14凸帯・接合部


H62口縁端部


F振分髪半身像14透孔


H62透孔


G56内面


H62凸帯


G56底面


H62底部



Ⅰ69口縁端部



Ⅰ73口縁端部



Ⅰ69透孔



Ⅰ73透孔



Ⅰ69凸帯



Ⅰ73凸帯



Ⅰ69底部



Ⅰ73底部



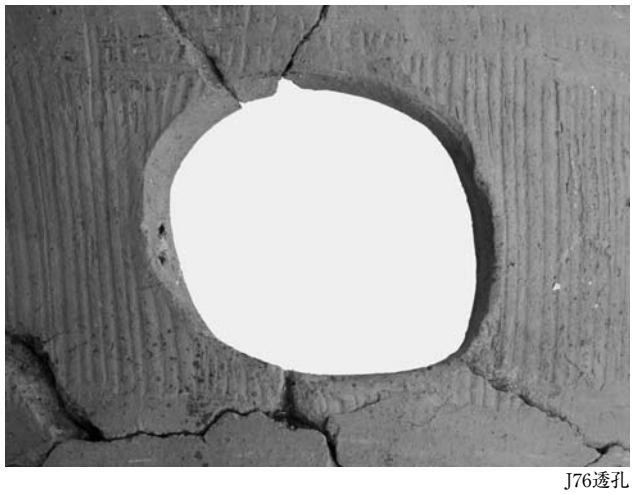
Ⅰ74朝顔口縁



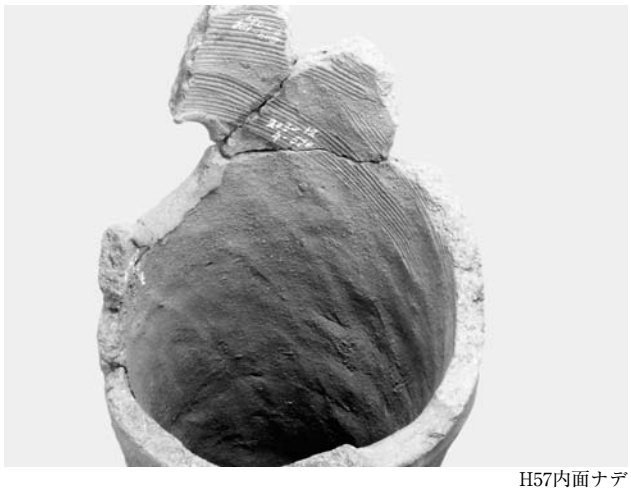
J76口縁端部



Ⅰ74朝顔凸帯



J76透孔



H57内面ナデ



J75凸帯



L80底部

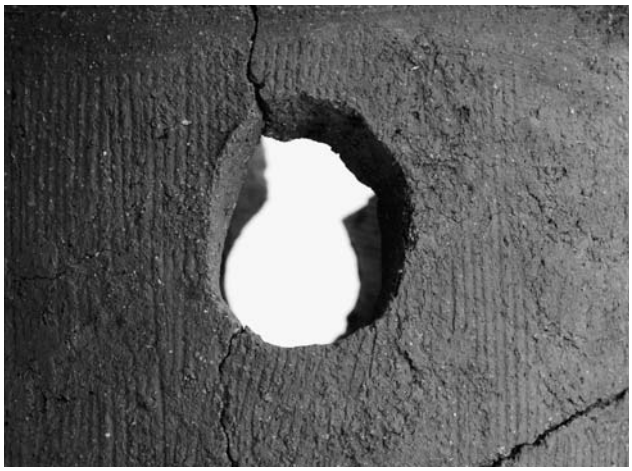


J75底部


K78口縁端部


K81朝顔透孔


K78透孔


K水鳥74透孔


K78凸帯


K水鳥74凸帯


K78底部


K82朝顔底部調整


1号墳4


1号墳7


1号墳10


2号墳1


2号墳2


1号墳14


1号墳15


3号墳6


4号墳9　4号墳10


5号墳13


5号墳15


6号墳16

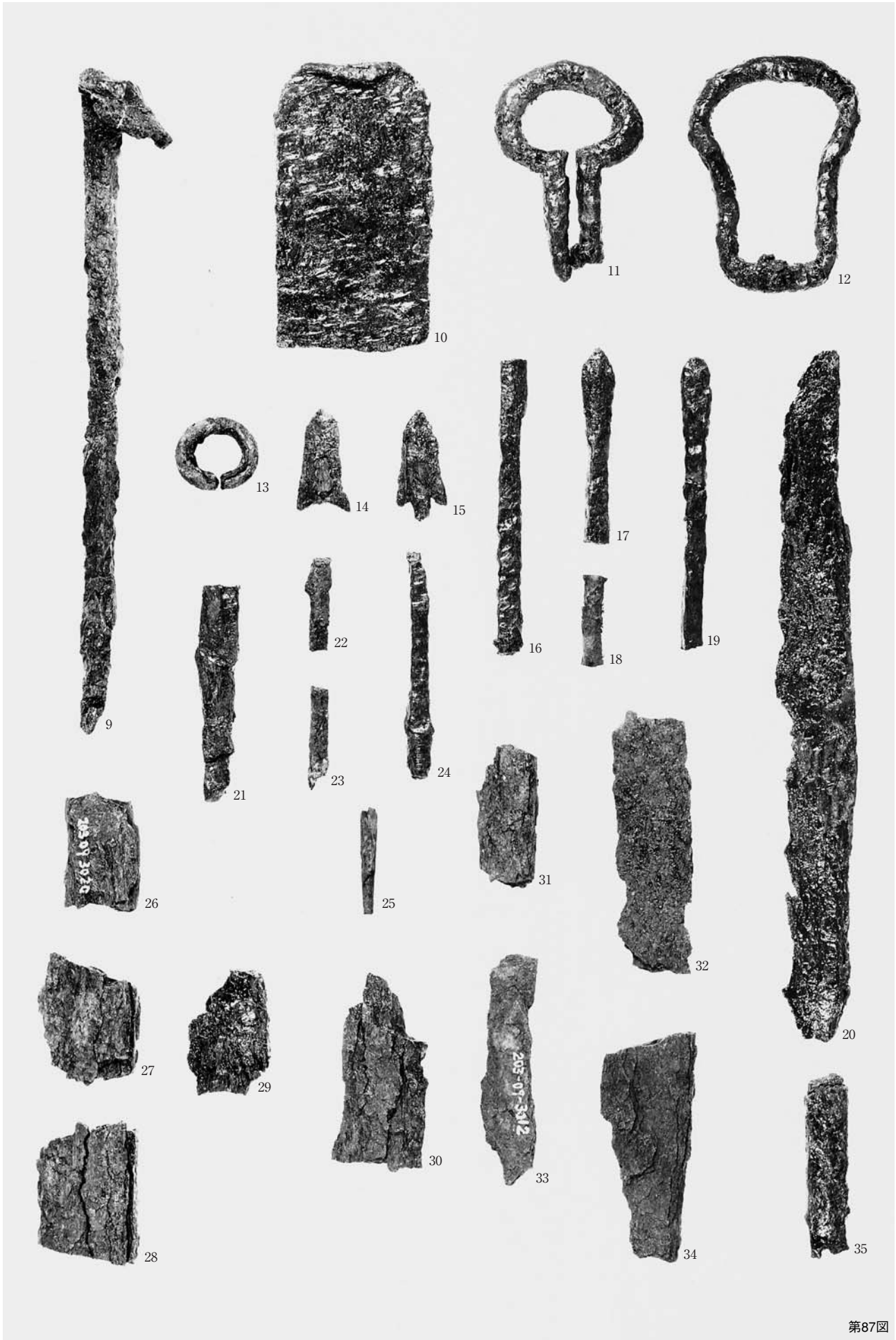

6号墳17

1 ～ 6 号墳出土土器



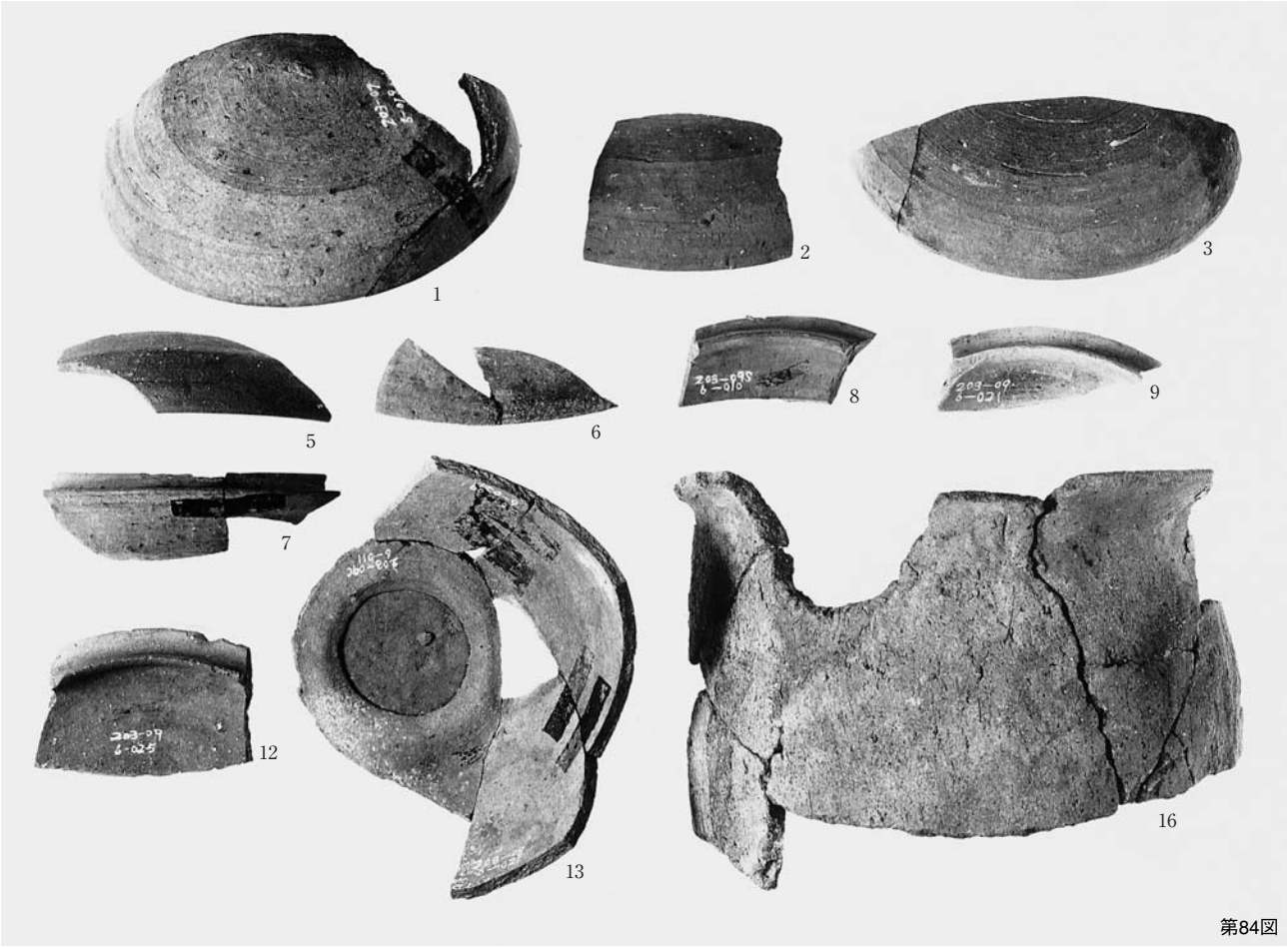
第86図

石室出土鉄製品



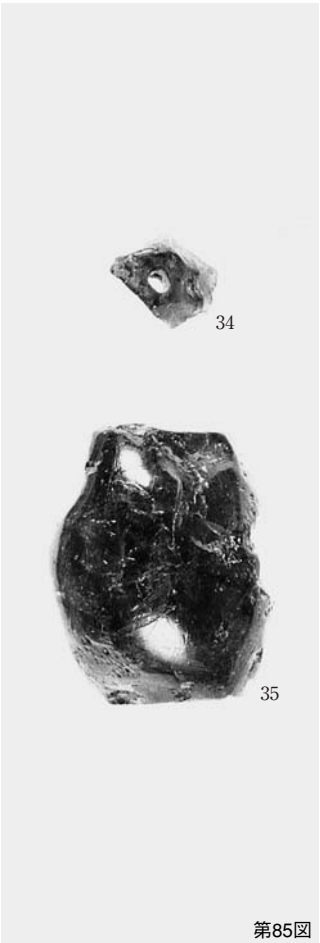
第87図

石室出土金属製品



第84図

1 号墳出土土器



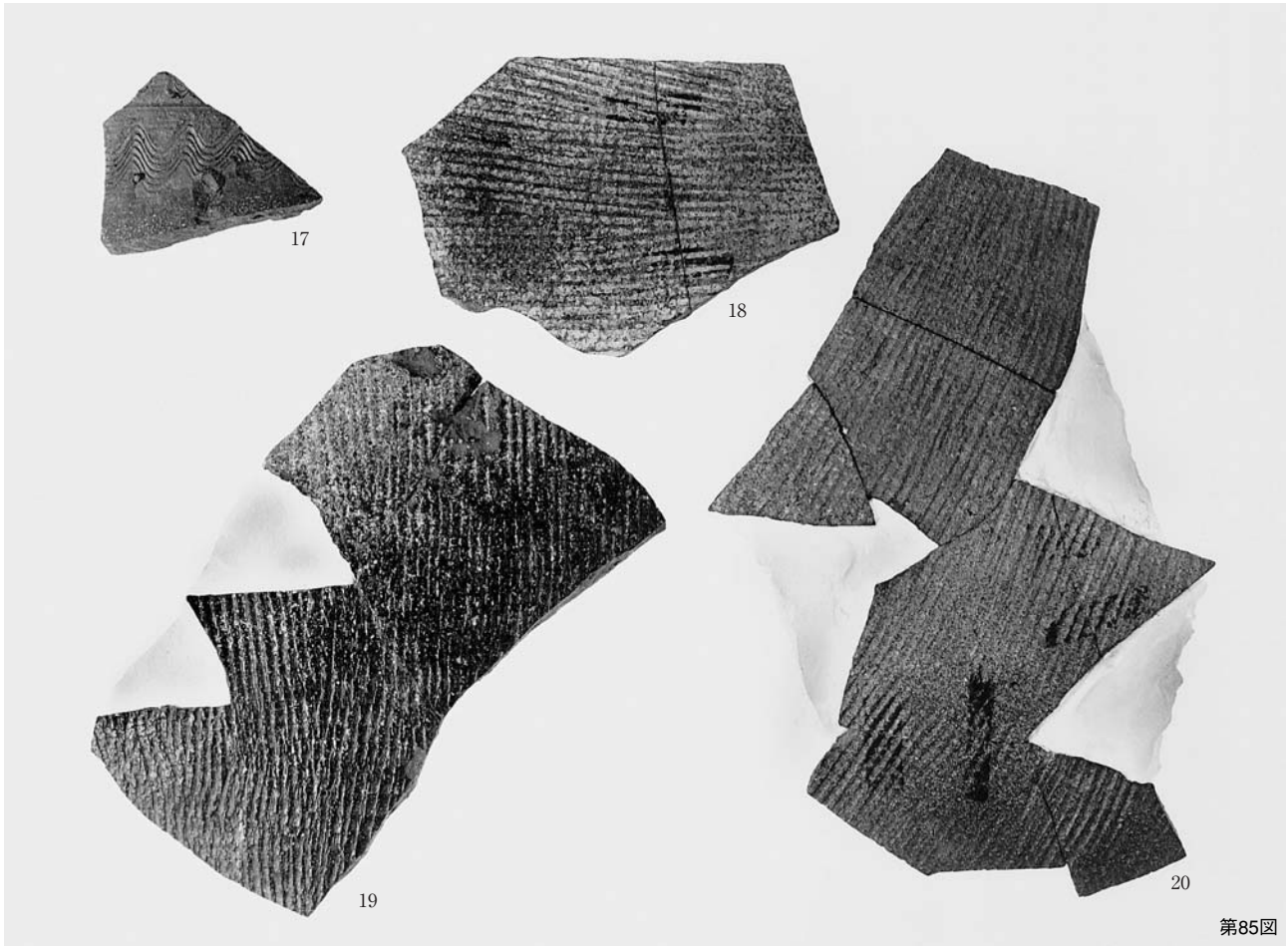
第85図

琥珀棗玉



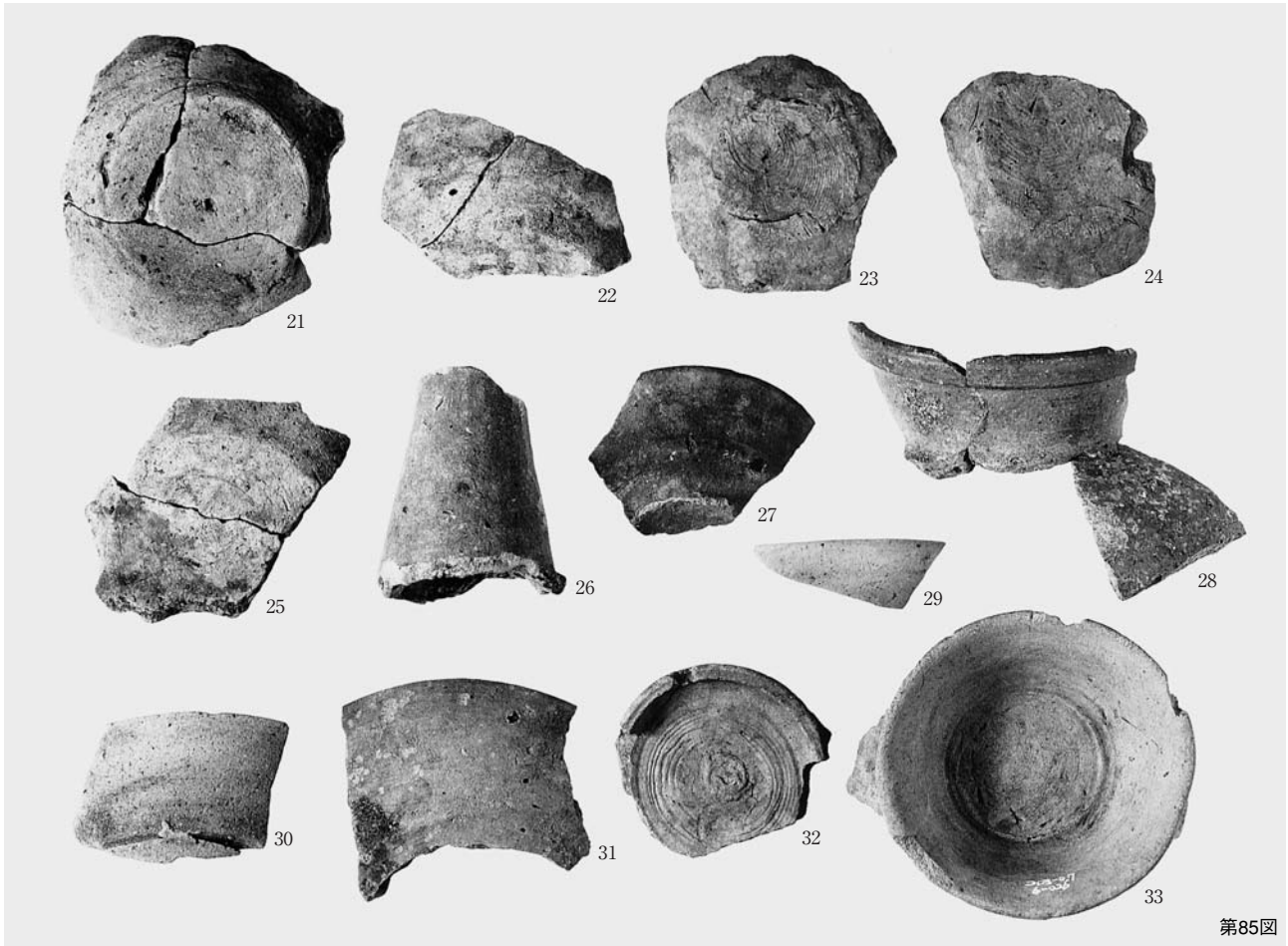
第88図

1 号土壙墓蔵骨器



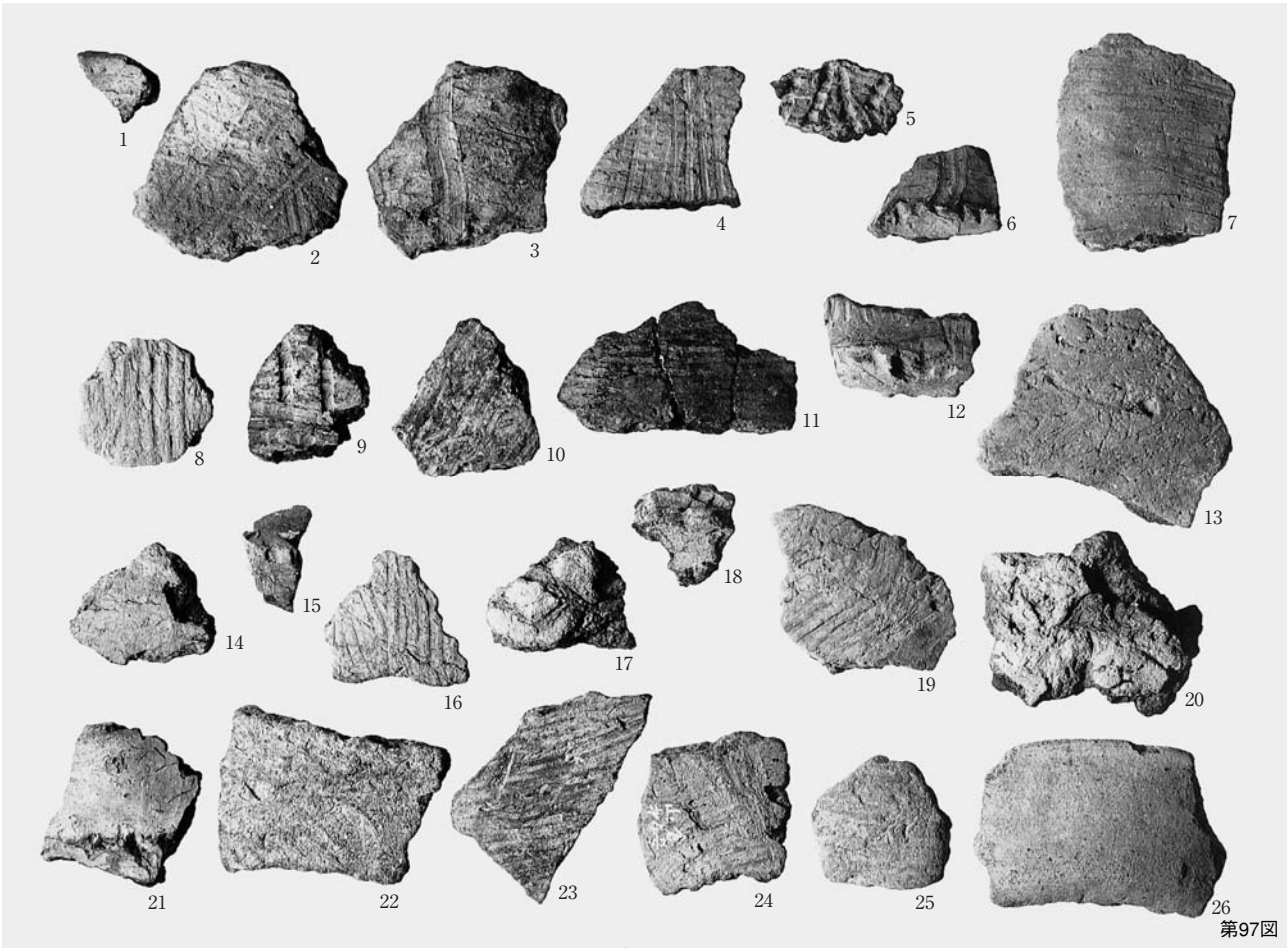
第85図

1 号墳出土須恵器片



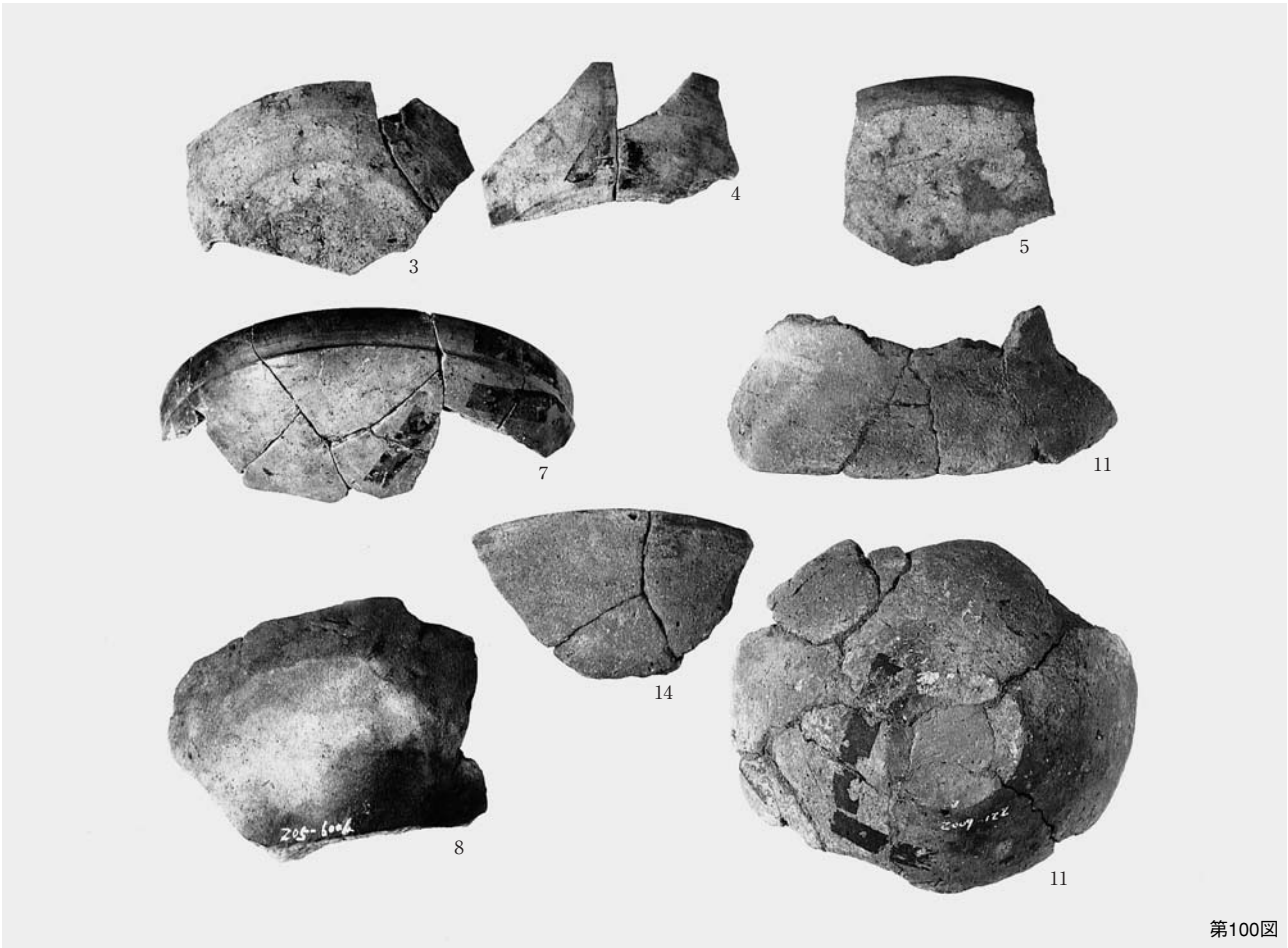
第85図

1 号墳出土土器



第97図

1 号土坑出土土器



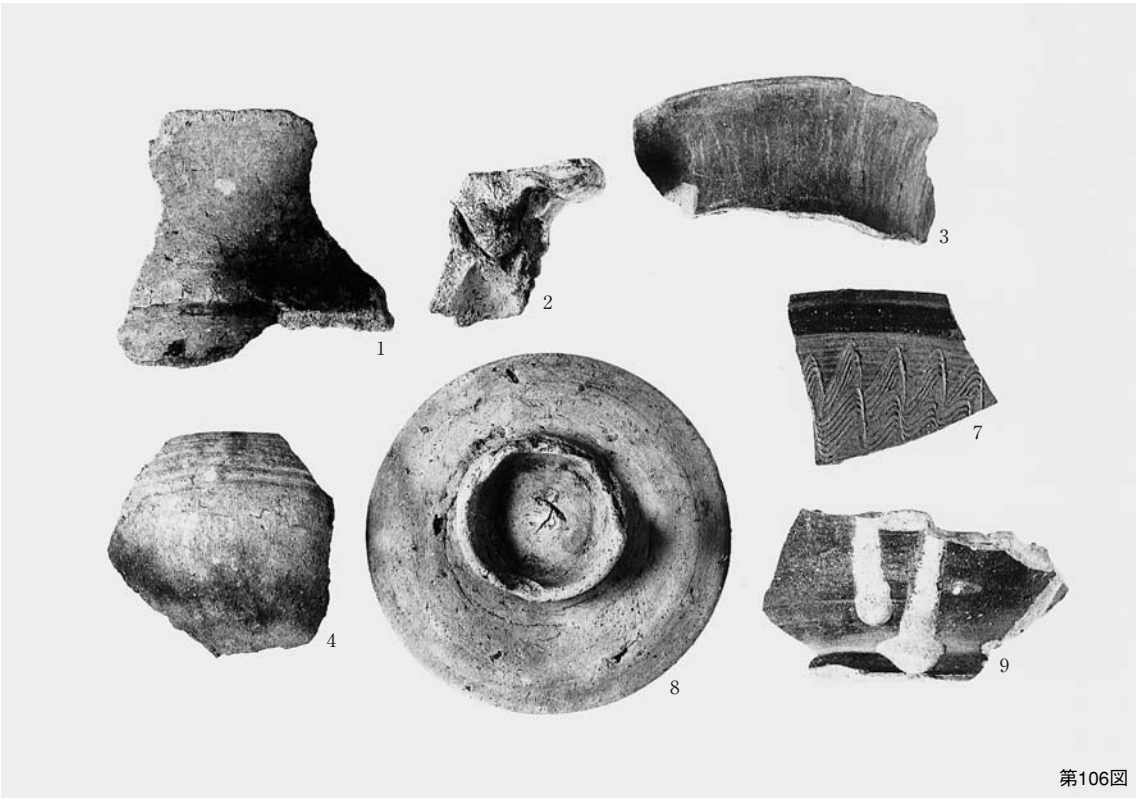
第100図

2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 号墳出土土器



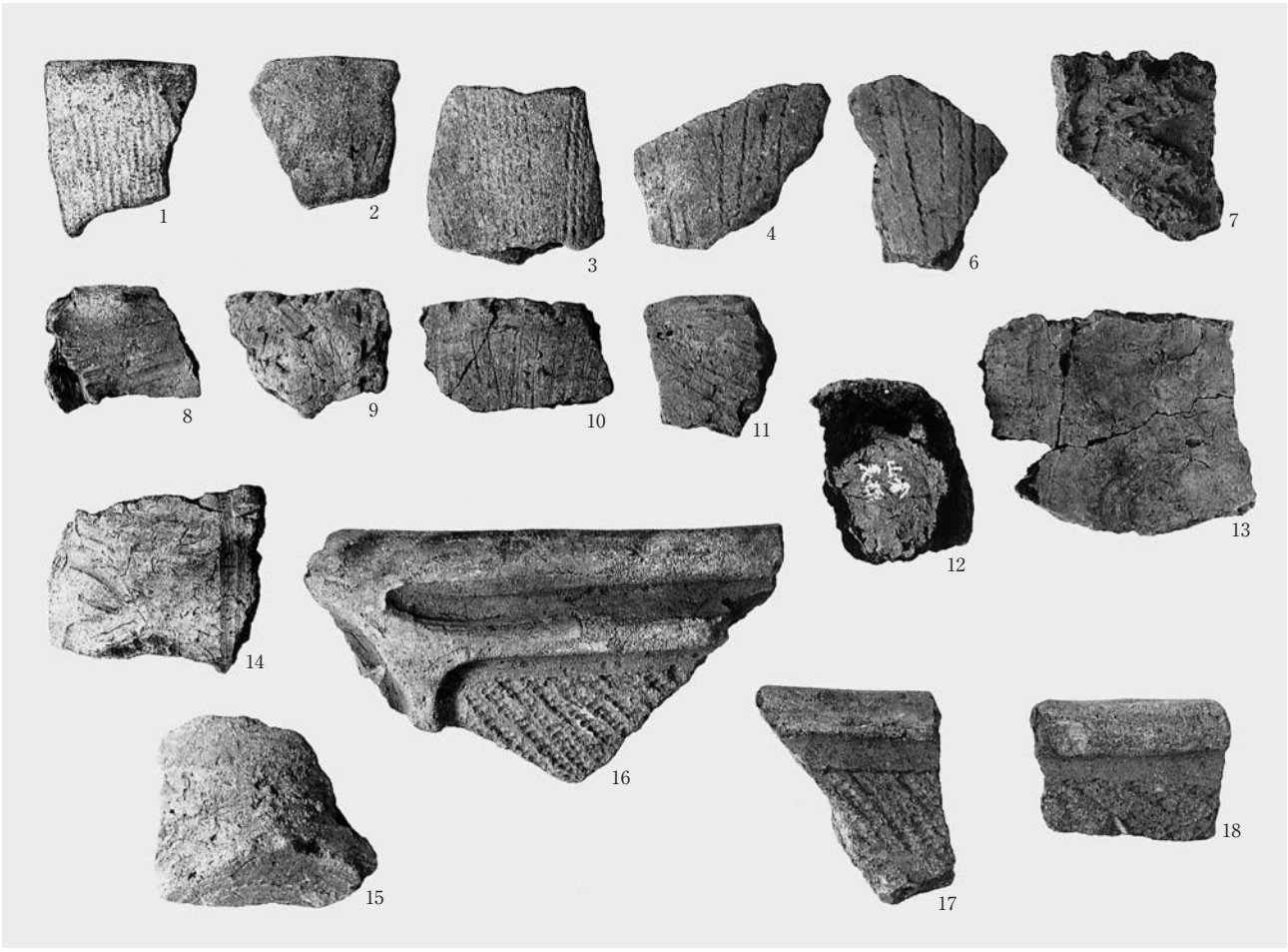
第104図

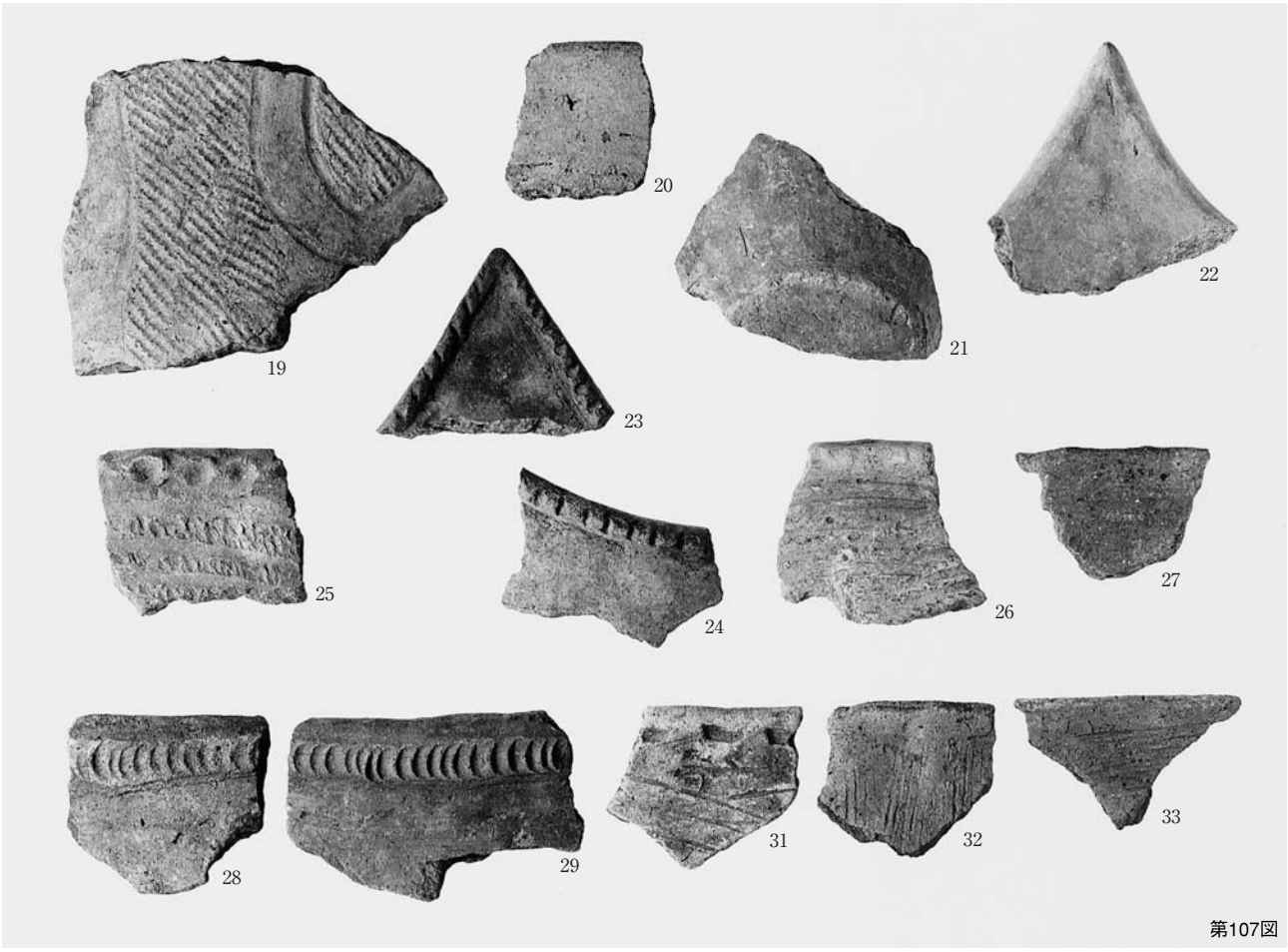
6 号墳出土土器



第106図

1 号住居跡出土土器及び表採遺物





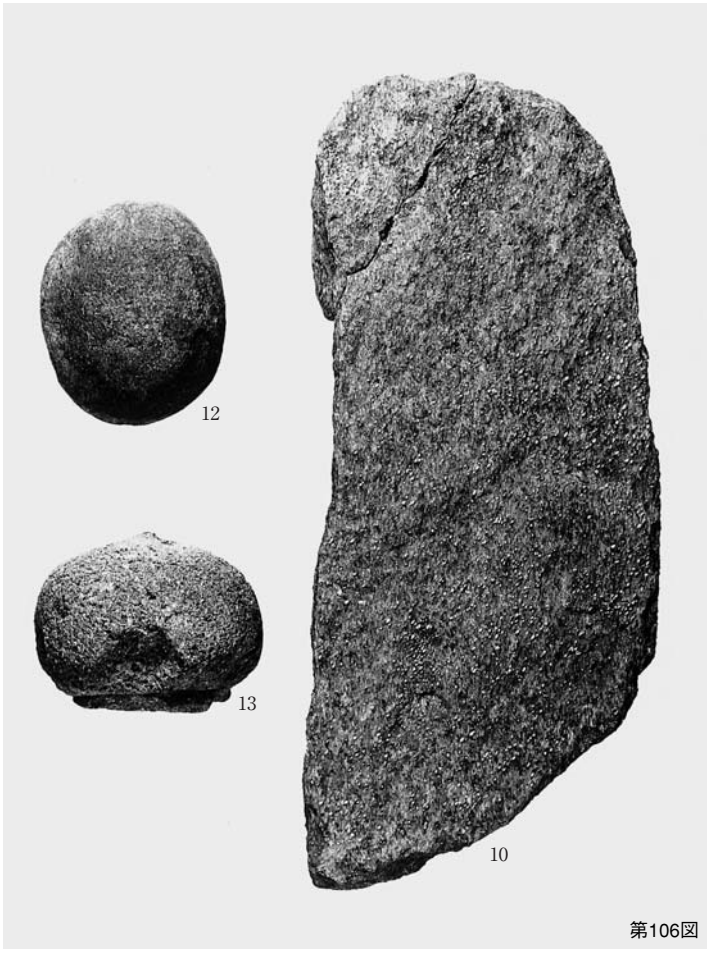
第107図

遺構外出土縄紋土器



第106図

1 号住居跡出土砥石



第106図

遺構外出土石製品



第108図

遺構外出土石製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしやまくらこふんぐん	
書 名	市原市山倉古墳群	
副 書 名		
巻 次		
シ リ ー ズ 名	上総国分寺台遺跡調査報告	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	11	85
編 著 者 名	車崎正彦・山崎武・平田和明・鷹野光行・櫻井敦史・小橋健司	
編 集 機 関	財団法人市原市文化財センター	
所 在 地	〒290－0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL0436（41）7300	
発 行 年 月 日	2004年３月22日	

遺跡名（ふりがな）	遺跡所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山倉古墳群（やまくらこふんぐん）	千葉県市原市西広６丁目（ちばけんいちはらしさいひろ６ちょうめ）	12219	203･204･205･206･221･222	352902	1400742	19740800～19750300	4500㎡	宅地開発

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳群	縄文 弥生終末 古墳前期 古墳中期 古墳後期 中世前期 中近世	土坑 竪穴住居跡２棟 方墳１基・円墳１基 円墳１基 帆立貝形古墳１基 円墳１基 前方後円墳１基 土壙墓１基 道路跡３条	縄文土器・石器 土器・砥石 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器・須恵器 耳環・直刀・刀子・絞具・鉄鏃・琥珀棗玉 円筒埴輪・人物埴輪 動物埴輪（馬・水鳥・鶏） 器財埴輪（翳・靱・鞆・大刀・矛） 蔵骨器（常滑甕）	古墳前期から後期末の古墳群。後期末の１号墳からは生出塚遺跡で焼成された埴輪群が良好な状態で検出された。これらの埴輪を検討した結果、製作者の人数が推定できた。

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第85集
上総国分寺台遺跡調査報告Ⅺ
市 原 市 山 倉 古 墳 群

平成16年３月22日　印刷
平成16年３月22日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター
発　行　　市原市教育委員会
〒290－8501　市原市国分寺台中央１－１－１
TEL：0436－22－1111
http：//www.ichihara-chb.ed.jp/board/

印　刷　　凸版印刷株式会社